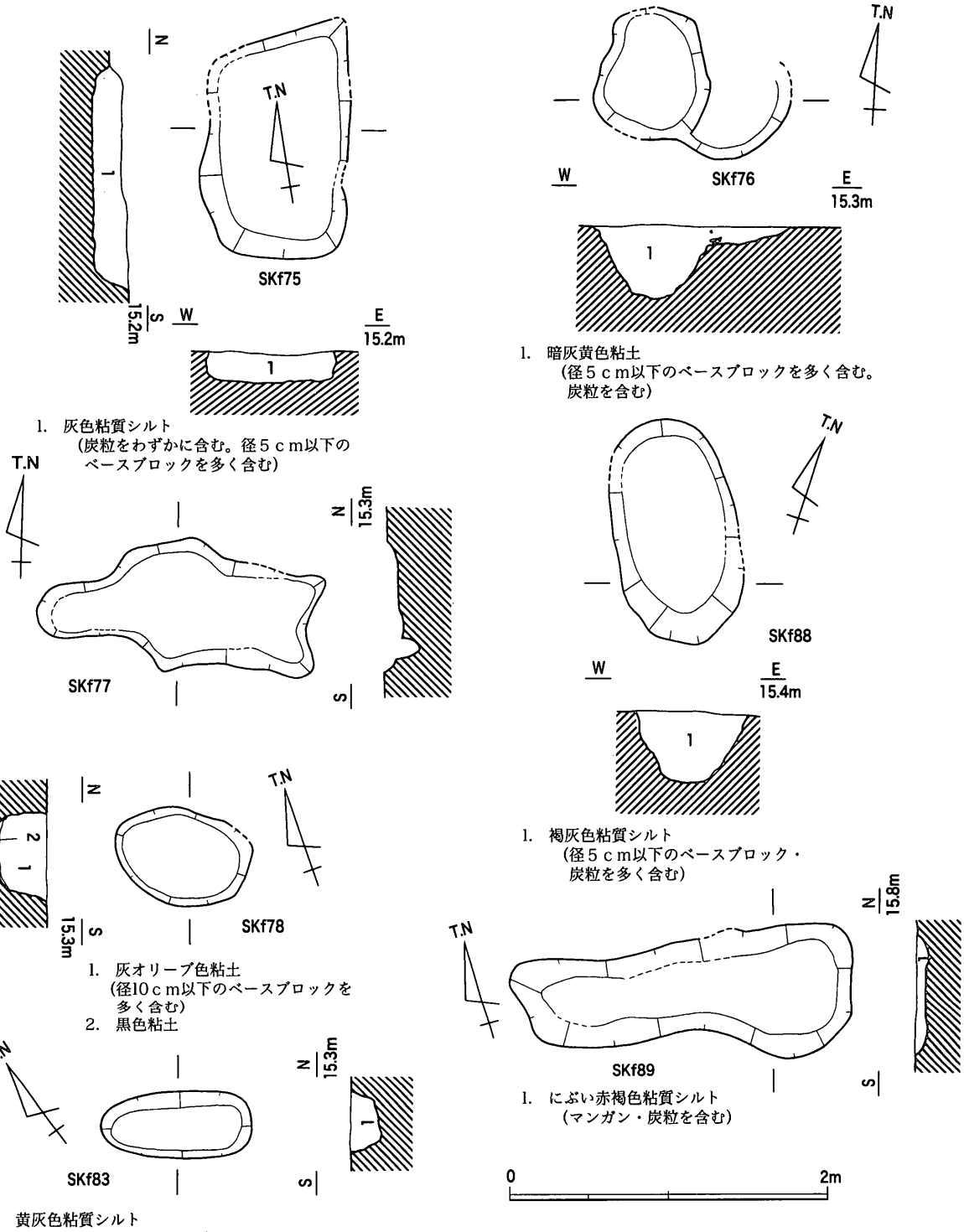
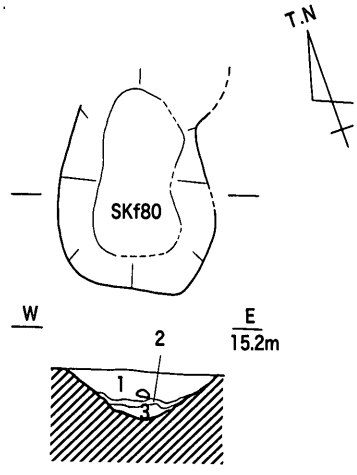
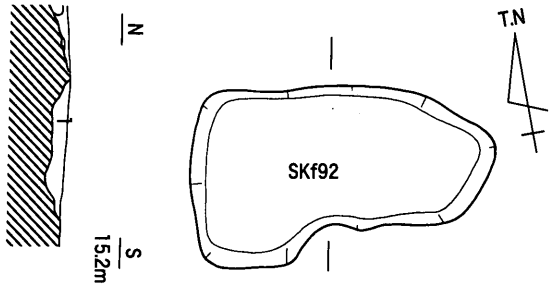


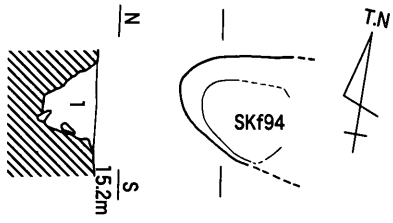
第264図　SKf75～78・83・88・89平・断面図（1/40）



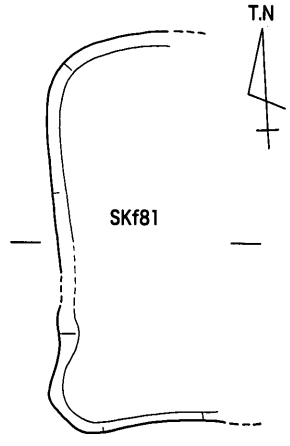
1. 褐灰色粘質シルト
   (鉄分を含む)
2. 浅黄橙色細砂
3. 褐灰色粘質シルト
   (径2～3cmのベースブロックを含む)

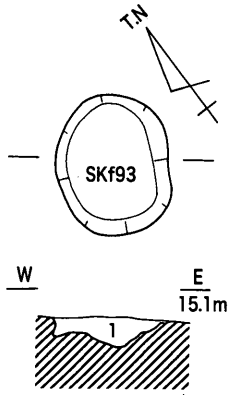


1. 褐灰色粘質シルト
   (鉄分・マンガンを含む)

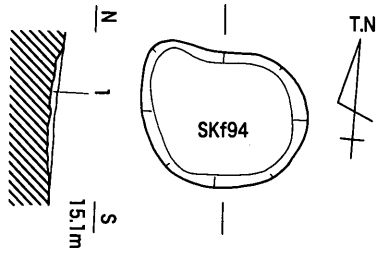


1. 褐灰色粘質シルト
   (径2～3cmのベースブロックを少量含む)

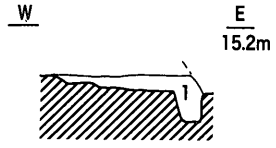




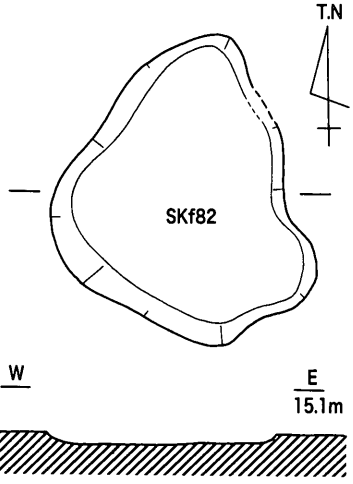
1. 灰褐色粘土
   (マンガン・炭粒を含む)

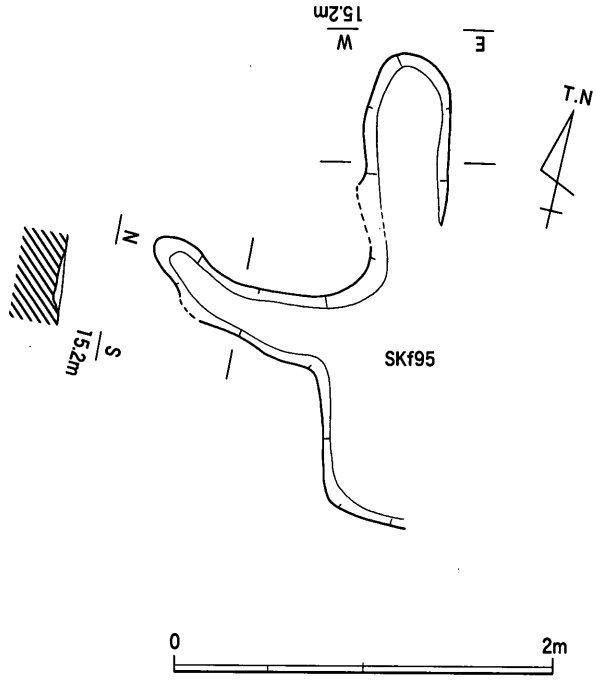


1. 灰褐色粘土
   (マンガン店炭粒を含む)

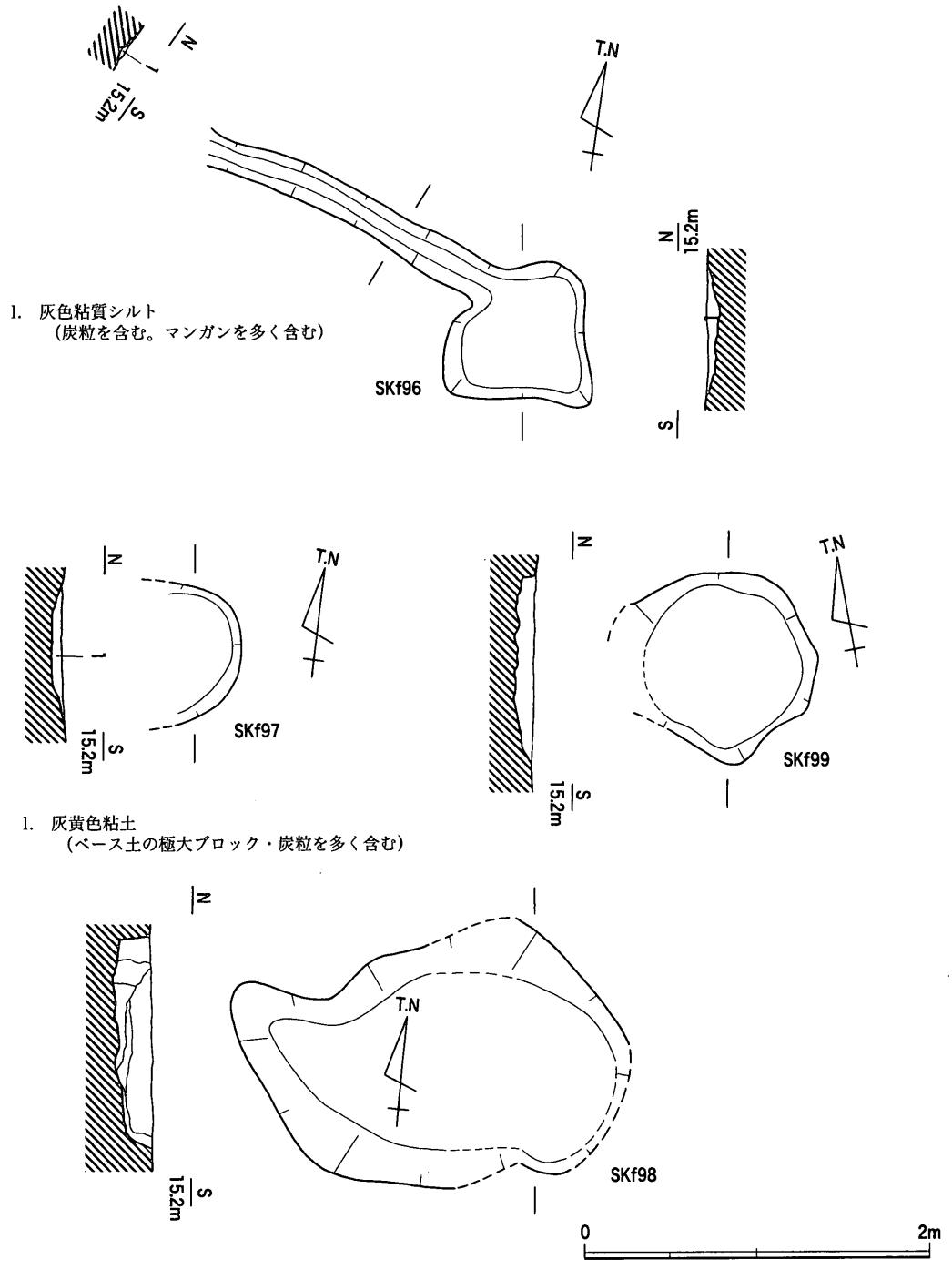


1. 褐灰色粘質シルト
   (炭・焼土粒を多く含む)





第265図　SKf79～82・92～95平・断面図（1/40）

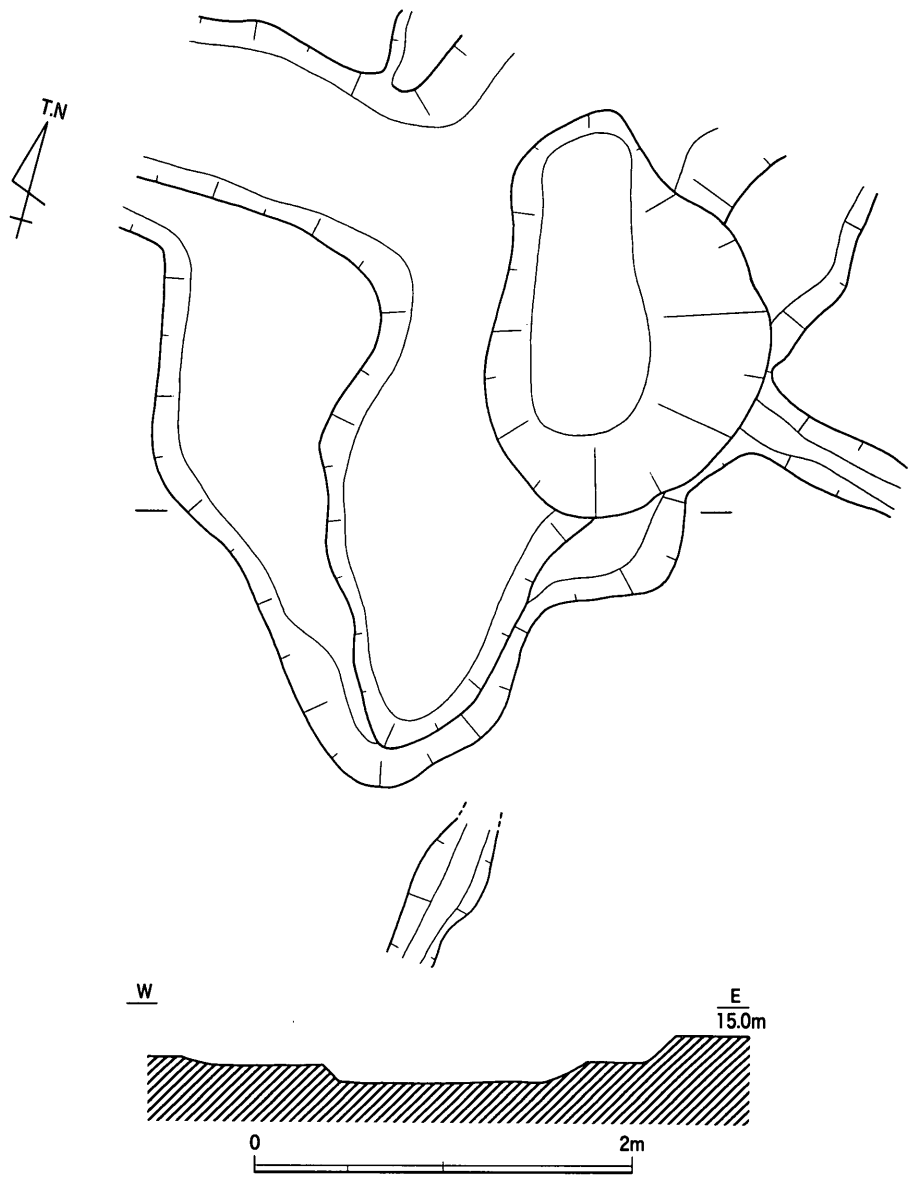


第266図　SKf96～99平・断面図（1/40）

計り，浅い器体と外傾度の強い口縁部からなる。**1701**・**1703**は「口縁部→体部」ナデにより，口縁部外面に段が形成される。また**1701**は，口縁部に油煙が付着しており，灯明皿として使用されたことが明瞭な事例である。青磁皿（**1705**）は同安窯系であり，横田・森田分類のＩｌｂ類皿である。染付碗（**1706**）は，胎土が均質で白色に発色しており，釉も非常に透明であり白濁していないことから，中国産ではなく肥前系磁器とみられる。楠井産擂鉢は，楠井ＡⅢ類（**1707**）とＢＩ類（**1708**）の２者がある。土師質土器擂鉢（**1709**）は，口縁部を内側に屈折させるタイプのもので，口縁部外面には内傾する平坦面が形成され，端部は太く丸く収まる。内面の横ハケ調整の上端は，口縁部の横ナデ調整によって消去されており，内面調整の後に口縁部の屈折が行われたことが窺える。土師質土器足釜

（1710）は，極端に短い口縁部と縁帯状の鍔をもち，把手付鍋の口縁部形態との識別が難しいが，体部下半には脚部を接合した痕跡が明瞭に認められる。土師質土器香炉（1712）は体部下半の破片とみられ，沈線による文様帯の内側に印花文が押印されている。胎土中には角閃石が含まれていることから，搬入品ではなく高松平野の在地製品とみられる。土師質土器鍋には，口縁部が内弯するタイプ（1717）と直線的な口縁部の外反度が極めて弱くなったもの（1718）の２者がみられ，前者は楠井窯に通有な形態である。

鉄滓（1724・1725）は，いずれも丸い曲面部分に砂もしくは焼土が付着しており，炉壁に付着した鉄滓とみることができる。特に1725は，砂粒を多く含んだ炉壁が還元している。また両者ともに鉄滓中に木炭粒を若干量含んでいる。



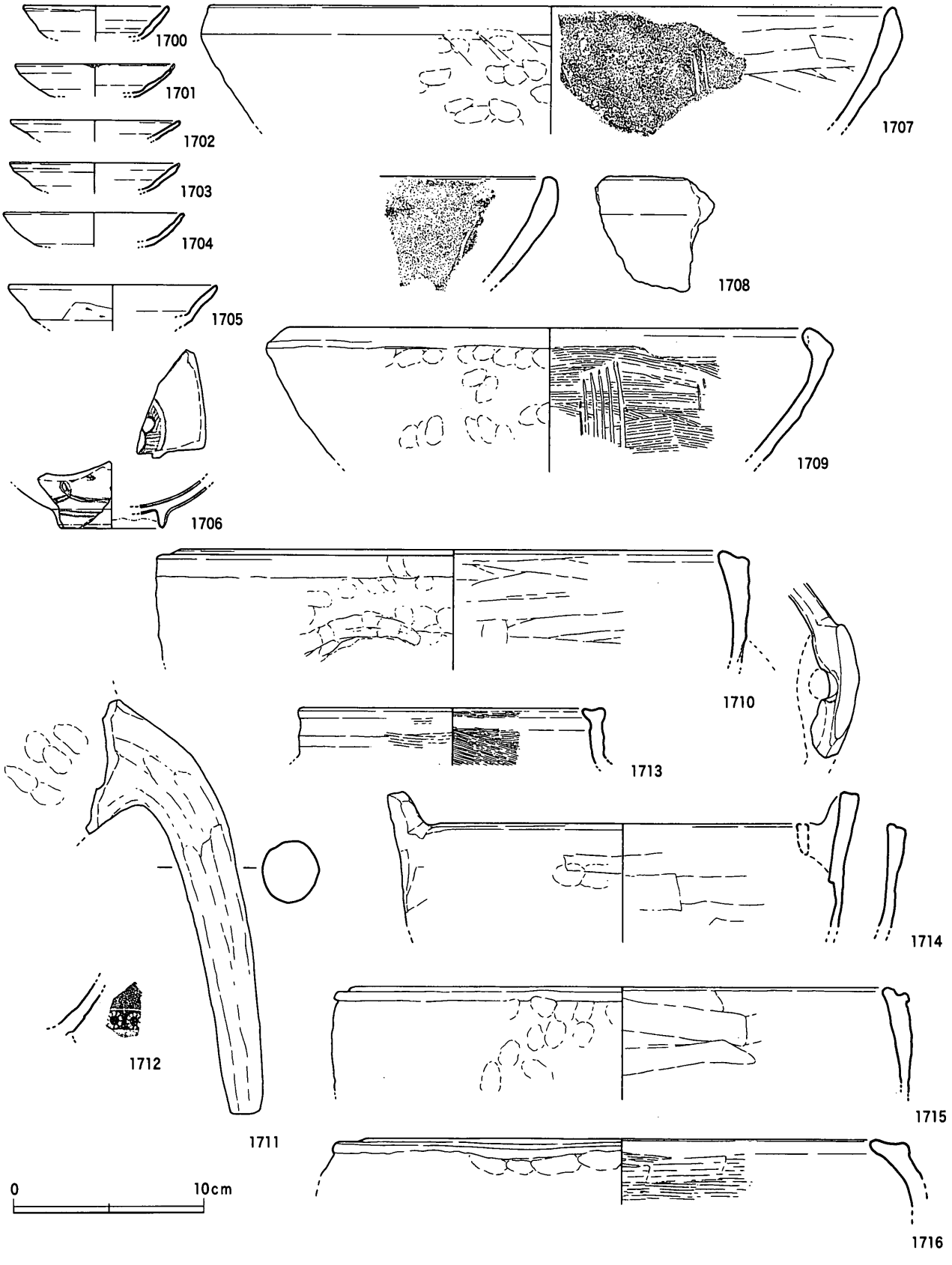
第267図　SKf101・102平・断面図（1/40）

以上から，ＳＫf101は16世紀頃の所産とみられ，連続するＳＤf57の年代観と矛盾しない。

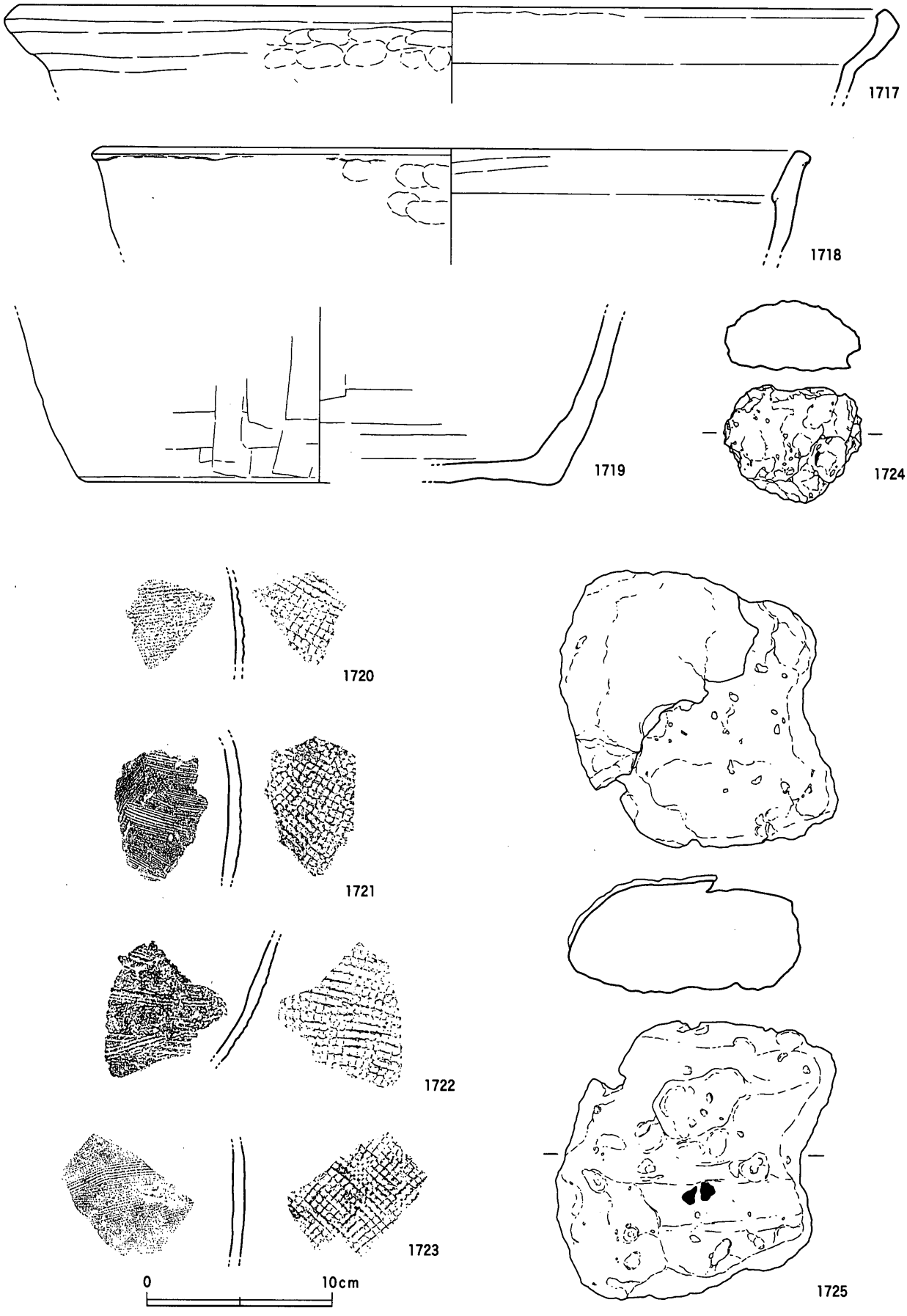
ＳＫf102（第267・270図）

小区画ｃ北東部でＳＫf101とほぼ重複する位置で検出された。他の遺構との切り合い関係は，ＳＫf101とＳＤf57の埋土を切り込んでいる。平面形態は片側が大きく膨らんだ楕円形（無花果形）を呈しており，長径1.5ｍ，短径2.12ｍを測る。

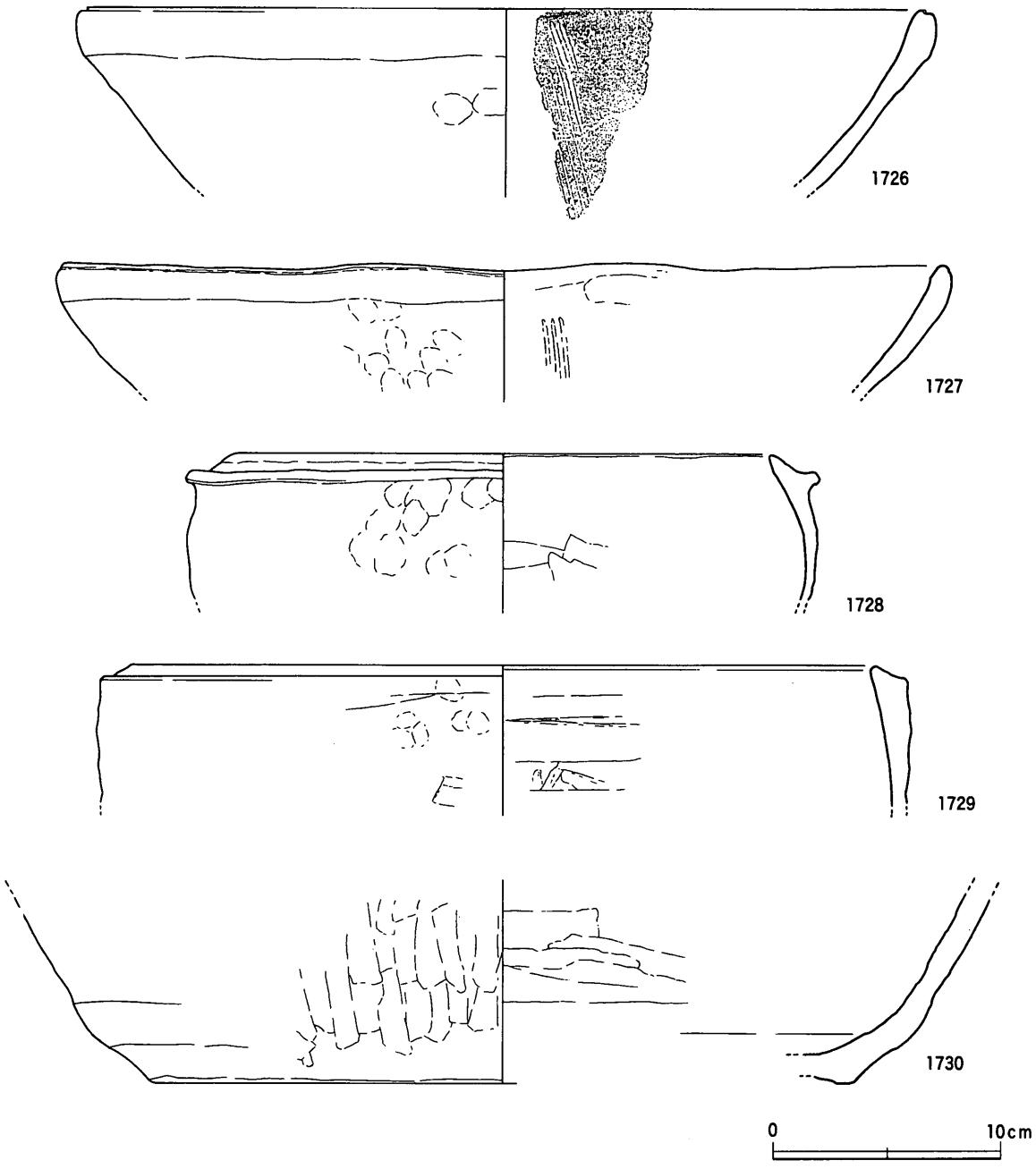
主な遺物には，土師質土器足釜（1728）・把手付鍋（1729），楠井産擂鉢（1726・1727），備前焼甕（1730）がある。楠井産擂鉢は口縁部外面の回転ナデが比較的強いＢⅠ類（1726）とナデが微弱で端面の形成に至らないＢⅡ類（1727）の２者がみられ，後者の存在から16世紀代まで年代が下降するとみて大過ないであろう。



第268図　SKf101出土遺物（1）（1/3）



第269図　SKf101出土遺物（2）（1/3，1724・1725は2/3）



第270図　SKf102出土遺物（1/3）

d．大型土坑

SKf103（第271～274図）

小区画cの中央部やや南寄りの地点で検出された。本遺構の北側ではピットの分布が濃密であるが，本遺構周辺では散在的になっており，一応，建物群とは重複せずに機能的に分化した分布状況を示しているようである。土坑の西側にはSDf67が繋がっており，東側にはSDf68が繋がっている。他の遺構との重複関係は直接的にはないが，SDf67がSKf84を切り込んでいる。

土坑の平面形態は，やや歪な長方形を呈しており，掘り込みのラインは西辺と南辺でほぼ直線的であるが，東辺と北辺では不定形な張り出し状ないし円弧状に延びる。主軸方向は西辺と南辺を基準にするとW－17.5°－Nである。断面形態をみると，掘り込みが緩やかな浅いU字形を呈している。規模は

第271図　SKf103全体図（1/80）

長径4.9m，短径3.24m，深さ0.26mを測る。

土坑埋土は5層に細別できるが，上位層（1・2層）の粘質シルト，下位層（3～5層）の粘土（一部砂混じり）に大別できる。下位層は粘性の強い黒色粘土を主体としており，一定期間の滞水状況を示唆する。また土坑内には，砂岩円礫ないし亜円礫が多量に集積した状態で遺存していた。礫は南半部底面に多く認められたが，ＳＫf65のように人為的に並べたような形跡は認められなかった。

主な遺物としては，土師質土器皿（**1731**～**1733**）・捏鉢（**1735**），十瓶山窯産須恵器杯（**1734**），楠井産擂鉢（**1736**），砥石（**1737**），鉄釘（**1738**・**1739**）がある。**1731**は「口縁部→体部」ナデ調整であり，**1732**は口縁部と体部の境が肥厚しており，この付近に接合痕状の皺が認められる。**1734**は口径12.6㎝を計り器壁が極めて薄いものであり，十瓶山窯産杯としては最終末の形態と考えられる。**1735**は口縁端部が上下に拡張する形態であり，楠井産の可能性がある。**1736**は楠井ＡⅢ類である。これらの土器は**1734**が13世紀末葉～14世紀前葉と考えられるが，**1731**・**1732**・**1736**は14世紀後葉～15世紀前葉頃に位置付けられるものと考えられる。

なお，ＳＤf67ならびにＳＤf67を切り込むＳＰf89から，鋳型片（**1461**・**1740**）が出土している。詳細な出土状況は不明であり，本来的にＳＤf67に伴うものか，より後出する時期のものか，明確ではないが，一応本遺構の関連遺物として取り上げておく。**1740**は鉄鍋の鋳型であり，全体の約1/3程度が遺存していた。鋳面にはクロミ状に変色（暗灰色）しており，鋳面から1㎜前後の厚さで灰色に還元している。鋳面には引型の痕跡が明瞭に認められる。真土は，鋳面から5～7㎜の厚さのやや粒子の粗い部分であり，色調の違いはあるものの土質は同一である。その外側は，やや大きな砂粒や藁を含み暗赤褐色を呈する外枠部分となっている。外枠も真土同様に水平方向に塗り込まれて成形されたようであり，含まれた藁や色調を異にする土が横方向に引かれたようになっている。口縁部の鋳面の上側には，ハバキとみられる段が認められる。また底部中央には，径5.5㎝の湯口がある。想定される鉄鍋の形態は，口径35.2㎝，底径26.0㎝，器高11.5㎝であり，他の事例よりも浅い器体を有している。口縁部形態から，五十川伸矢氏の鍋Ａに該当する。頸部はシャープに短く外反しており，口縁部は直線的に「ハ」の字形に開く。器体の深浅を措くと，大阪府豊中遺跡出土例に近似しており，14～15世紀頃の所産とみられる。**1461**は鉄鍋底部の鋳型であり，クロミ部分には引型の痕跡が認められる。接合関係にないものの，**1740**に近似した土質・焼成の真土であり，同一個体の鋳型と考えられる。

上記した鋳型の出土から，ＳＫf103が鋳造関係遺構である可能性も考慮する必要はあろう。小区画

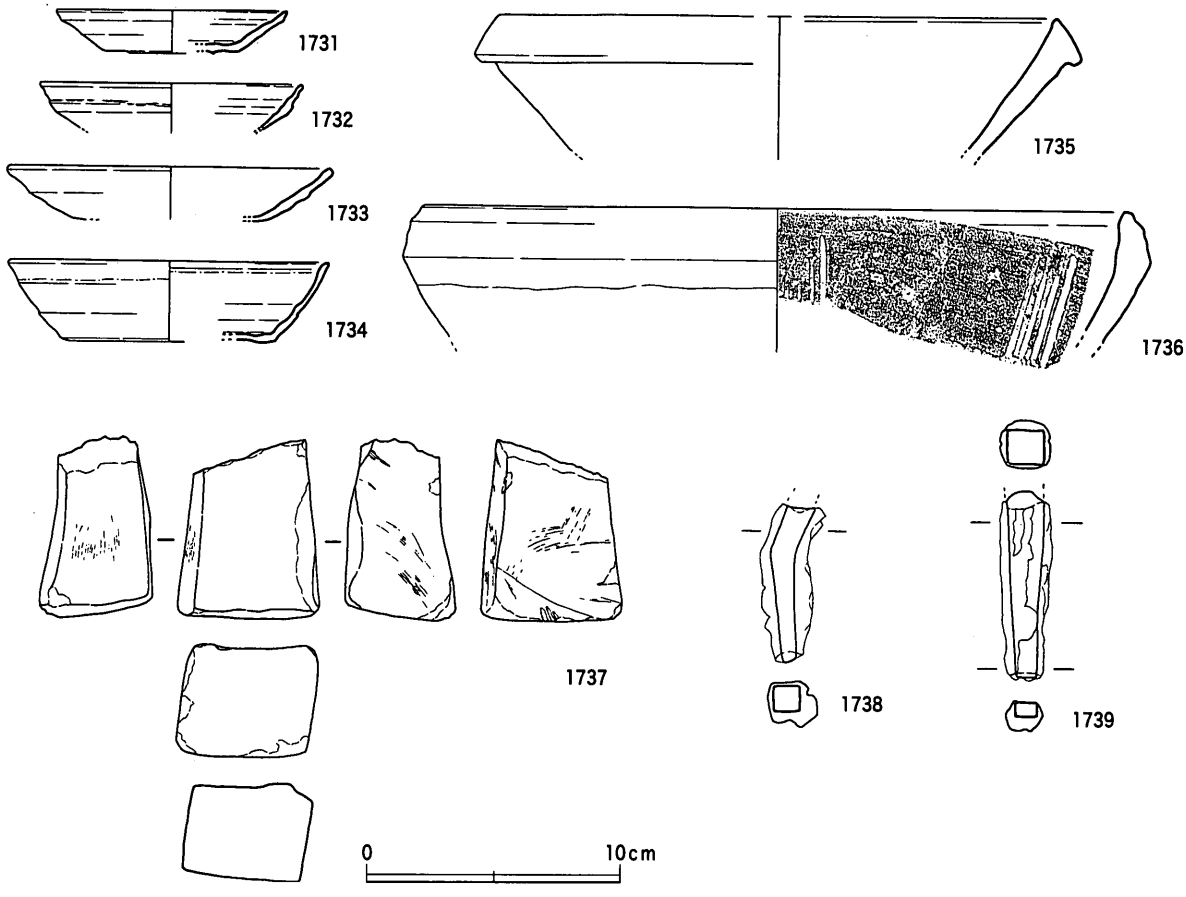
1. 褐灰色粘質シルト（鉄分・マンガン・炭粒を含む）
2. 浅黄橙色粘質シルト（鉄分を多く含む）
3. 暗赤褐色砂混じり粘土（鉄分を多く含む）
4. オリーブ黒色粘土（粘性強い）
5. 黒色粘土（粘性強い）

第272図　SKf103平・断面図（1/40）

内での建物群との位置関係は，ＳＫf65（区画４－ａ）と共通するようにも見受けられる。しかし，土坑内が滞水状況にあったとみられること，また土坑内に直接的に鋳造工程に伴う施設の痕跡がみられないこと，さらには鋳造関係遺物の出土量が余りにも僅少であることは，本遺構と鋳造作業との関わりを否定的に示す要素である。年代的には14世紀後葉～15世紀前葉の幅の中で捉えることができるようである。

ＳＫf104（第275・276図）

小区画ｃの南東部で検出された。西辺・東辺の掘り込みプランは明瞭ではないが，北・南辺の掘り込みは平行して直線的に延びており，全体としてはやや歪な長方形を呈している。規模は長径11.4ｍ，短



第273図　SKf103出土遺物（1/3，1737は1/4，1738・1739は2/3）

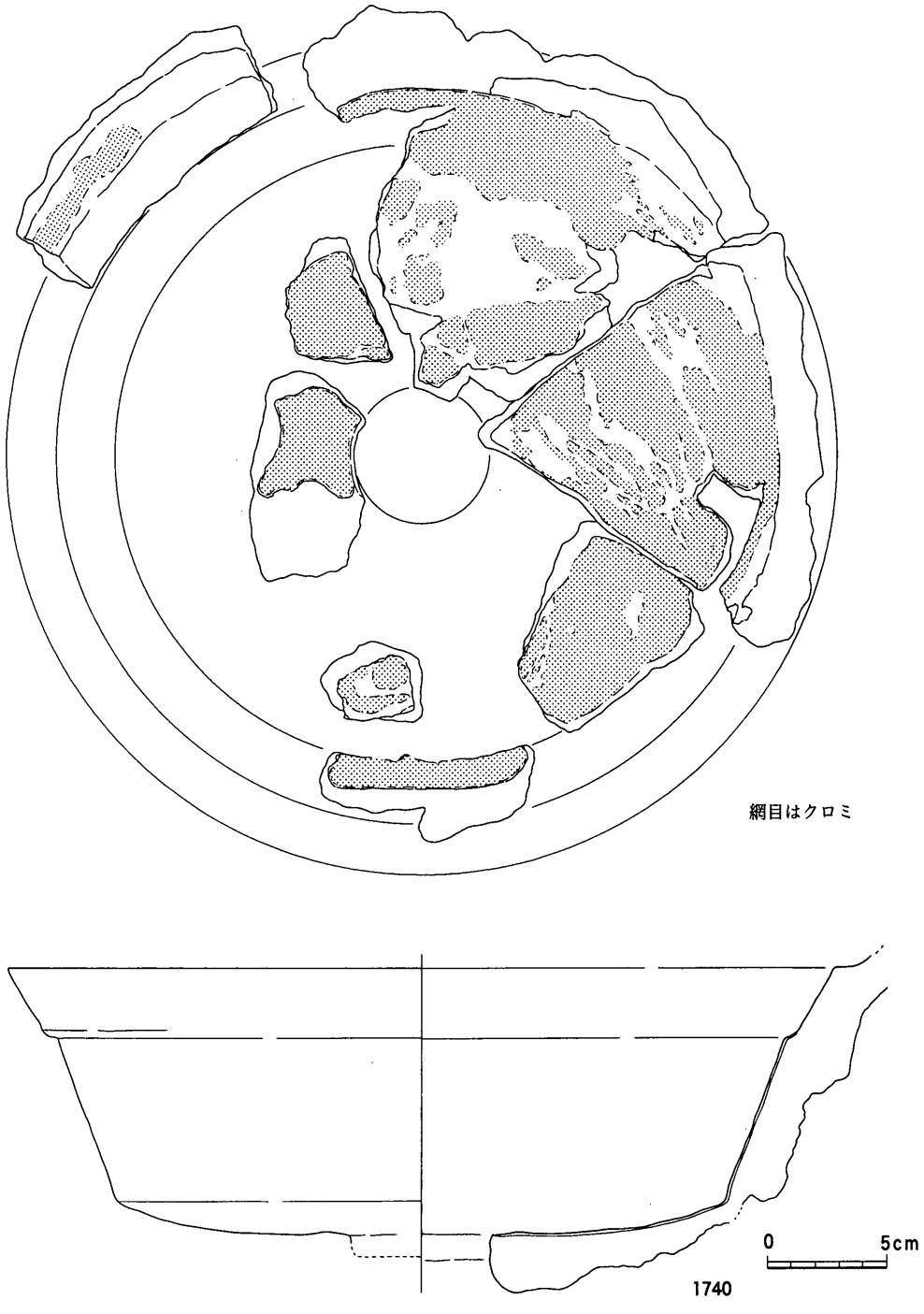
径4.37m，深さ0.13mを測る。断面形態は緩やかに下る掘り込み壁面をもち，埋土は黄色粘土（基盤層ブロックか）や暗灰色粘土が混在した粘質シルト層であり，人為的な埋め戻しが行われた可能性がある。この埋土を切り込んでＳＤf53が開削されている。

主な出土遺物としては，瀬戸天目茶碗（**1741**），備前焼擂鉢（**1742**），土師質土器鍋（**1743**）・甕（**1744**）がある。**1741**は体部下半の破片のため，時期を特定することは困難であるが，大窯第３～４小期とみられる。**1744**は内傾する頸部と緩やかに外反する直線的な口縁部からなり，体部には格子叩き目が施される。楠井窯で少量ながら類例を見出すことができ，楠井産である可能性が指摘できる。以上から遺構の時期を特定することは難しいが，**1741**の存在から16世紀中葉頃と考えられる。

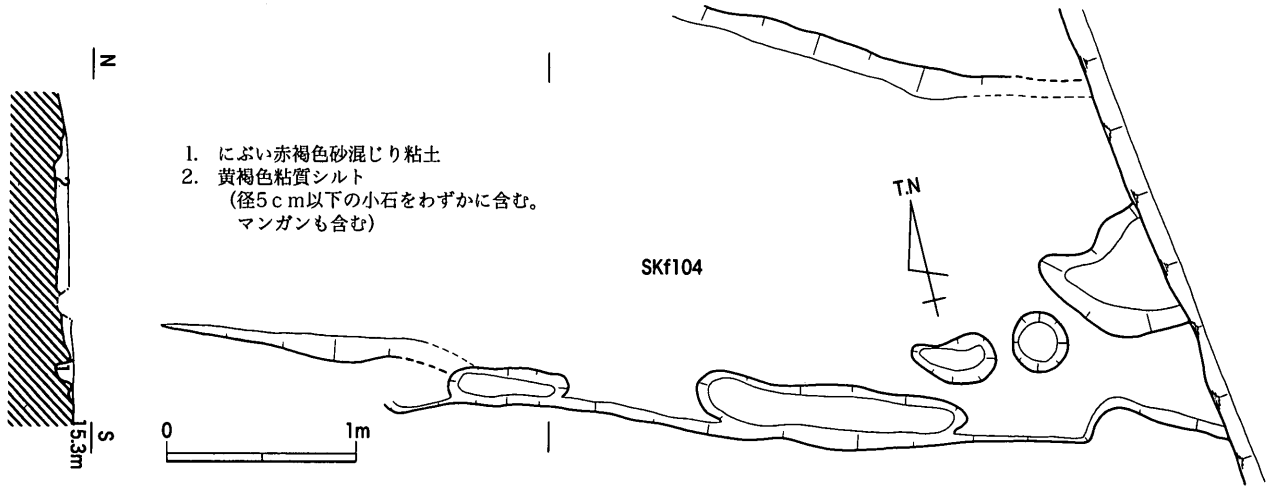
ＳＫf105（第277・278図）

小区画ｃの東辺で検出された。平面形態は歪な楕円形を呈しており，断面形態は浅い皿形を呈する。規模は長径8.3m，短径3.3m，深さ0.04mを測る。東辺部をＳＤf64に切られており，また南端部はＳＢf36により切られている。

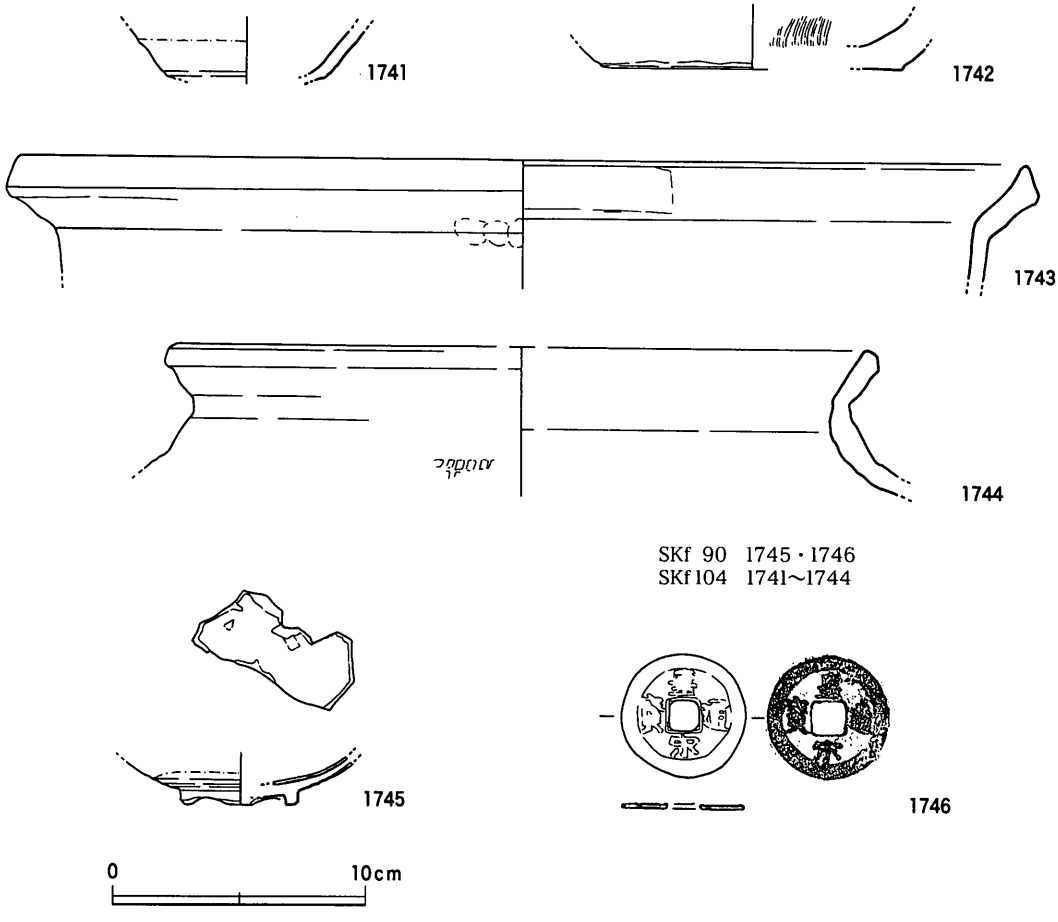
遺物は土師質土器擂鉢（**1747・1748**），備前焼擂鉢（**1749**），把手付鍋（**1750**），鉄製刀子（**1751**）などがある。**1749**は間壁編年Ⅲ期ないしⅣ期前半の所産とみられる。**1750**は把手部側縁をヘラ削りによって面取りしており，やや古い様相をもつといえよう。



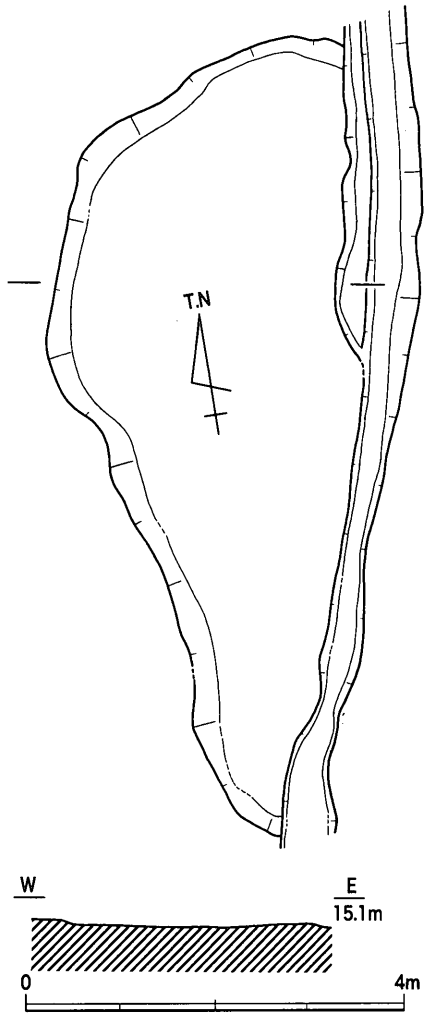
第274図　SPf98出土遺物（1/3）



第275図　SKf104平・断面図（1/40）



第276図　SKf90・104出土遺物（1/3，1746は2/3）



第277図　SKf105平・断面図（1/40）

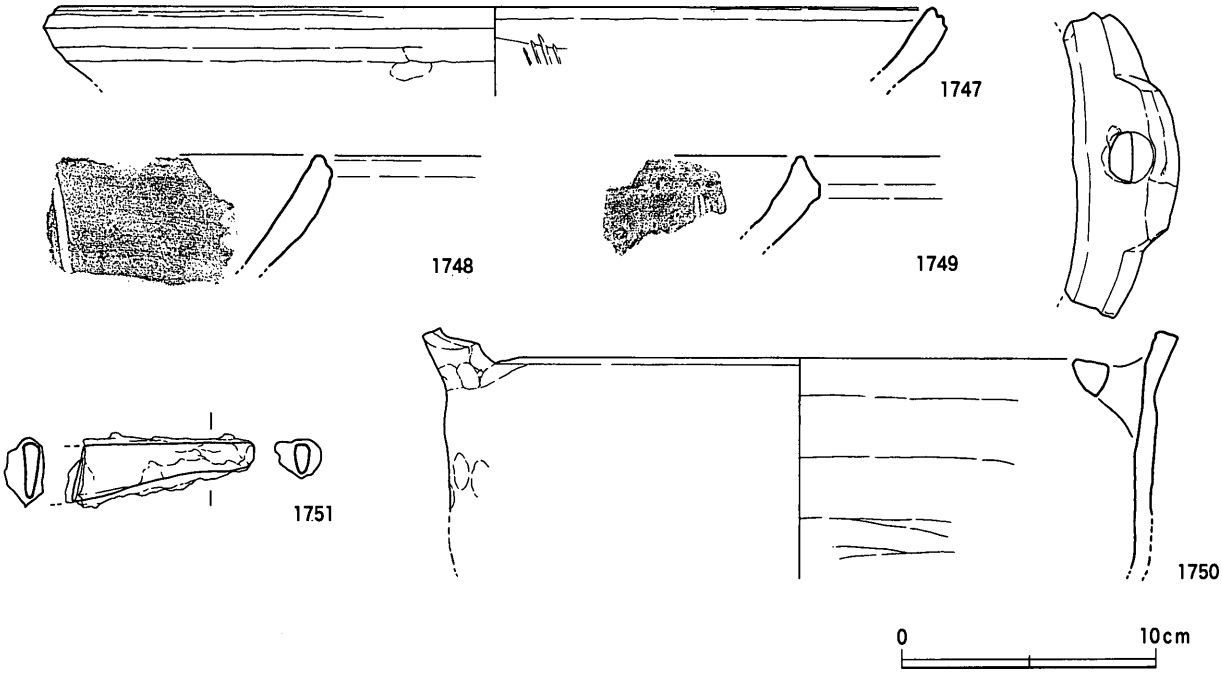
(5) 小区画ｄ（区画４－ｄ）

ａ．区画範囲と区画施設

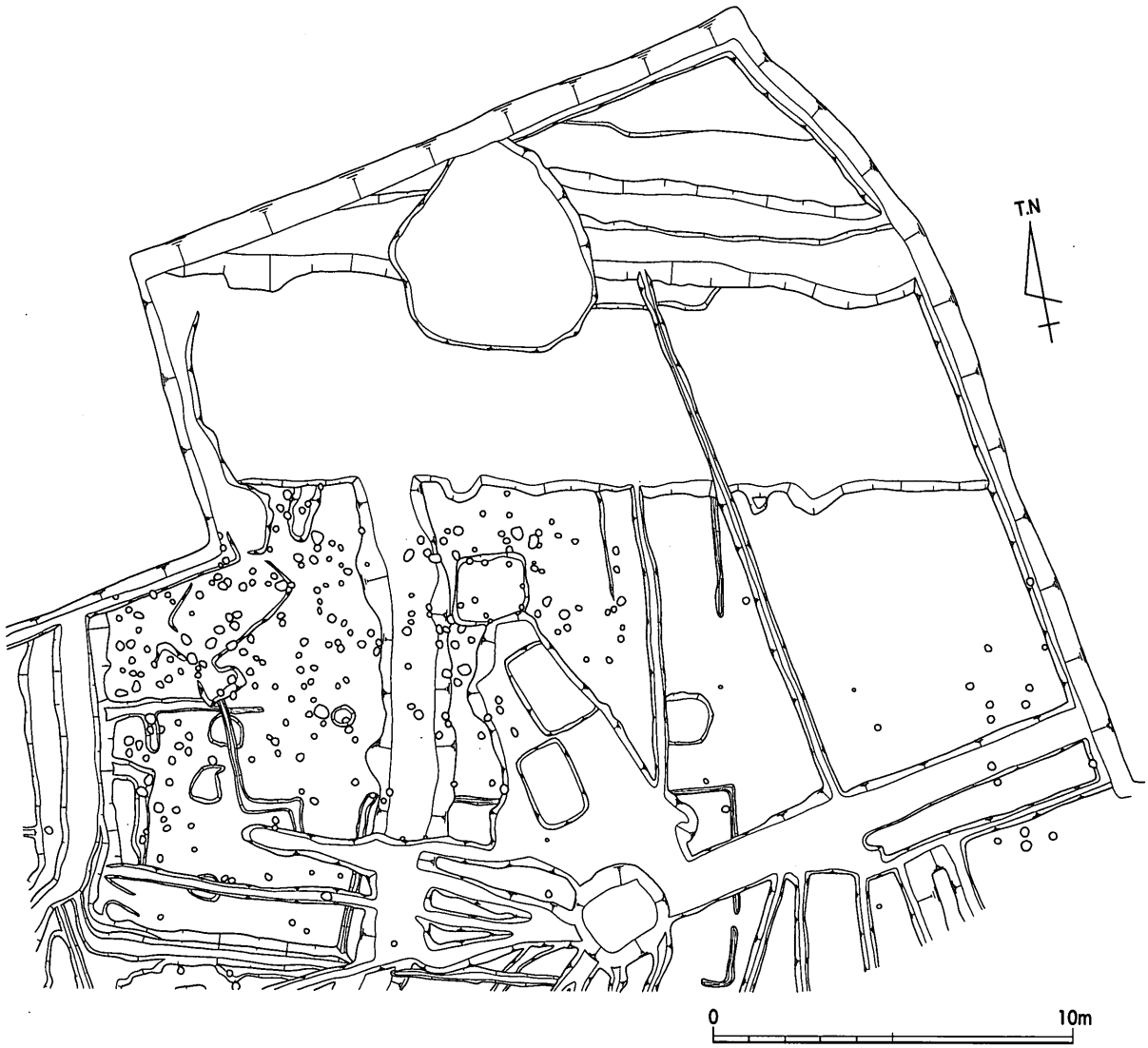
西辺をＳＤf57，南辺をＳＤf69，東辺をＳＤf73・74によって画された小区画である。北辺については，近世～近代のＳＤf96，ならびにＳＤf96南肩部の落ち込みであるＳＸf13によって破壊・削平されているため明確ではないが，ＳＤf96付近が北限であった可能性が考えられる。以上を前提とすると，小区画ｄの規模は東西17ｍ，南北18ｍ前後を測り，小区画ａと同規模となる。

ＳＤf69（第281・282図）

Ｗ－10°－Ｎの方向に延びており，西端部で北側に屈曲してＳＤf75と併走しながらＳＤf57東辺部に合流する。ＳＤf57との切り合い関係は認められない。断面形態は逆台形ないしＵ字形を呈しており，西半部での規模は幅0.76ｍ，深さ0.31ｍを測る。埋土は３層に分けられ，２層は砂をラミナ状に含む粘土であることから，滞水と流水状態を繰り返して形成されたことが窺える。この層位は底面の傾斜方向（東→西）に対応



第278図　SKf105出土遺物（1/3，1751は1/2）



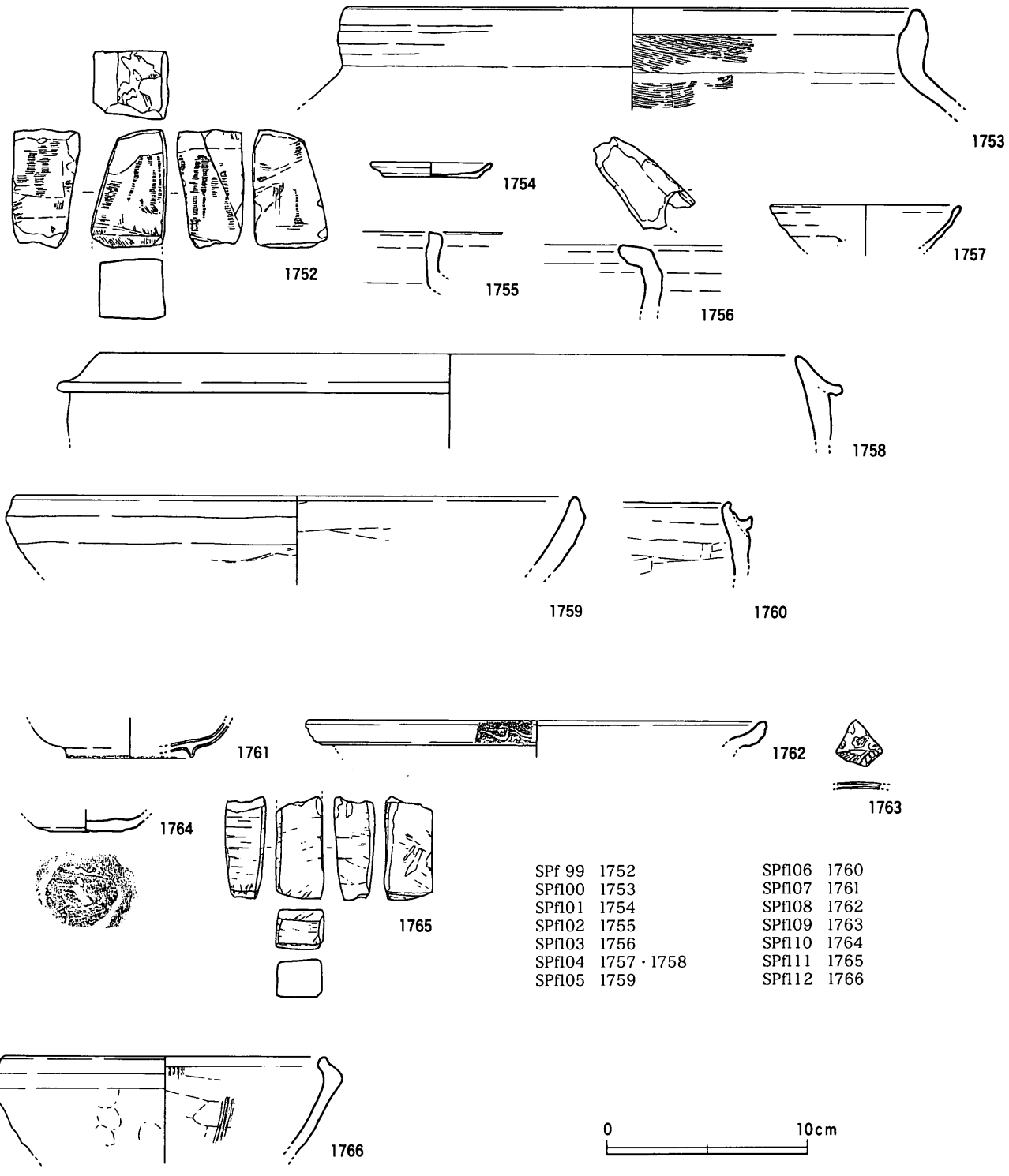
第279図　小区画d（区画４－d）平面図（1/200）

しており，溝内の流水はＳＤf57に落ちていたことがわかる。また１層は基盤層のブロックを含むが，人為的な埋め戻しを想定する程の多量の混入状況ではなく，自然堆積の可能性もある。

主な遺物には，瀬戸丸皿（**1777**），土師質土器茶釜形（**1778**）がある。**1777**は藤澤分類第２型式の丸皿であるが，この器種は大窯第４～７小期（末葉も含んだ16世紀後半）に認められ，年代の限定が難しい状況である。また**1778**は，口縁端部が丸味を帯びて収められており，瀬戸丸皿の示す時間幅の一端にかかる所産とみて矛盾はない。またＳＤf57との同時併存をも踏まえると，ＳＤf69は16世紀中葉頃の埋没とみるのが一応妥当であるが，やや下る年代の埋没である可能性も残される。

ＳＤf74（第281図）

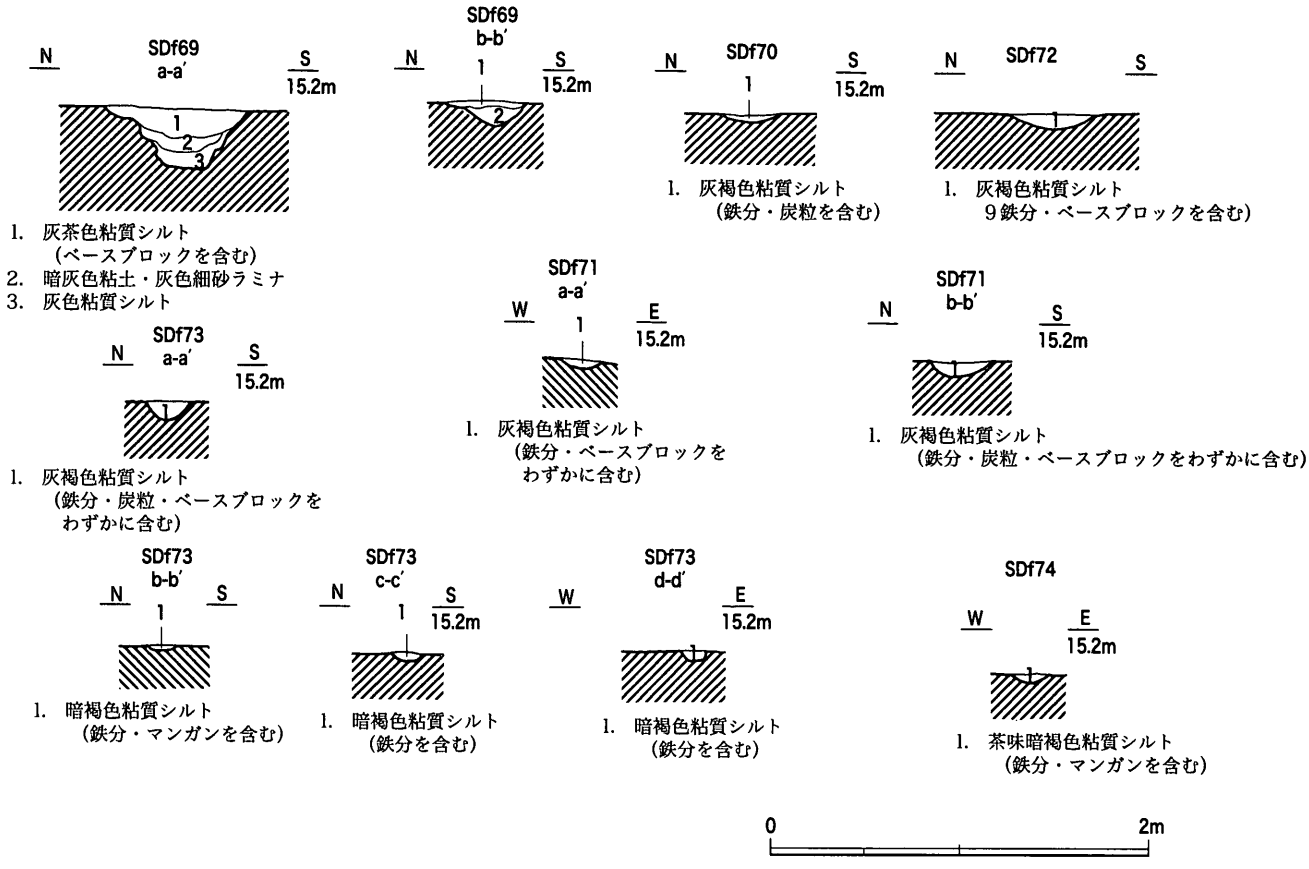
Ｎ－８°－Ｅの主軸方位をもつ小溝であり，小区画ｄの北東辺に位置する。ＳＤf73東辺部とともに小区画ｄの東辺部を構成しており，両者は本来同一遺構であった可能性がある。検出長3.4ｍ，幅0.19ｍ，深さ0.04ｍを測る。断面形態は浅いＵ字形を呈しており，埋土は暗褐色粘質シルト１層である。遺物は少量出土しているが，時期を限定できるようなものはない。



第280図　区画4－b・cピット出土遺物（1/3）

SDf73（第281・282図）

小区画dの南東部を「コ」の字形に巡る小溝である。溝で囲まれた範囲は，東西10.05～10.6m，南北4.6～5.4mである。断面は逆台形ないし浅いU字形を呈しており，幅0.14m，深さ0.02～0.05mを測る。埋土はSDf74同様に暗褐色粘質シルトであり，両者の連続的な在り方を示す。掘立柱建物に伴う雨落ち溝の可能性があるが，溝で囲まれた部分が旧空港に伴う施設の攪乱によって大きく



第281図　SDf69～74断面図（1/40）

破壊されており，建物の存否については不明である。

遺物は少量出土したが，鉄滓（**1776**）が注目される。滓中に炭化物粒を含む。

b．建物

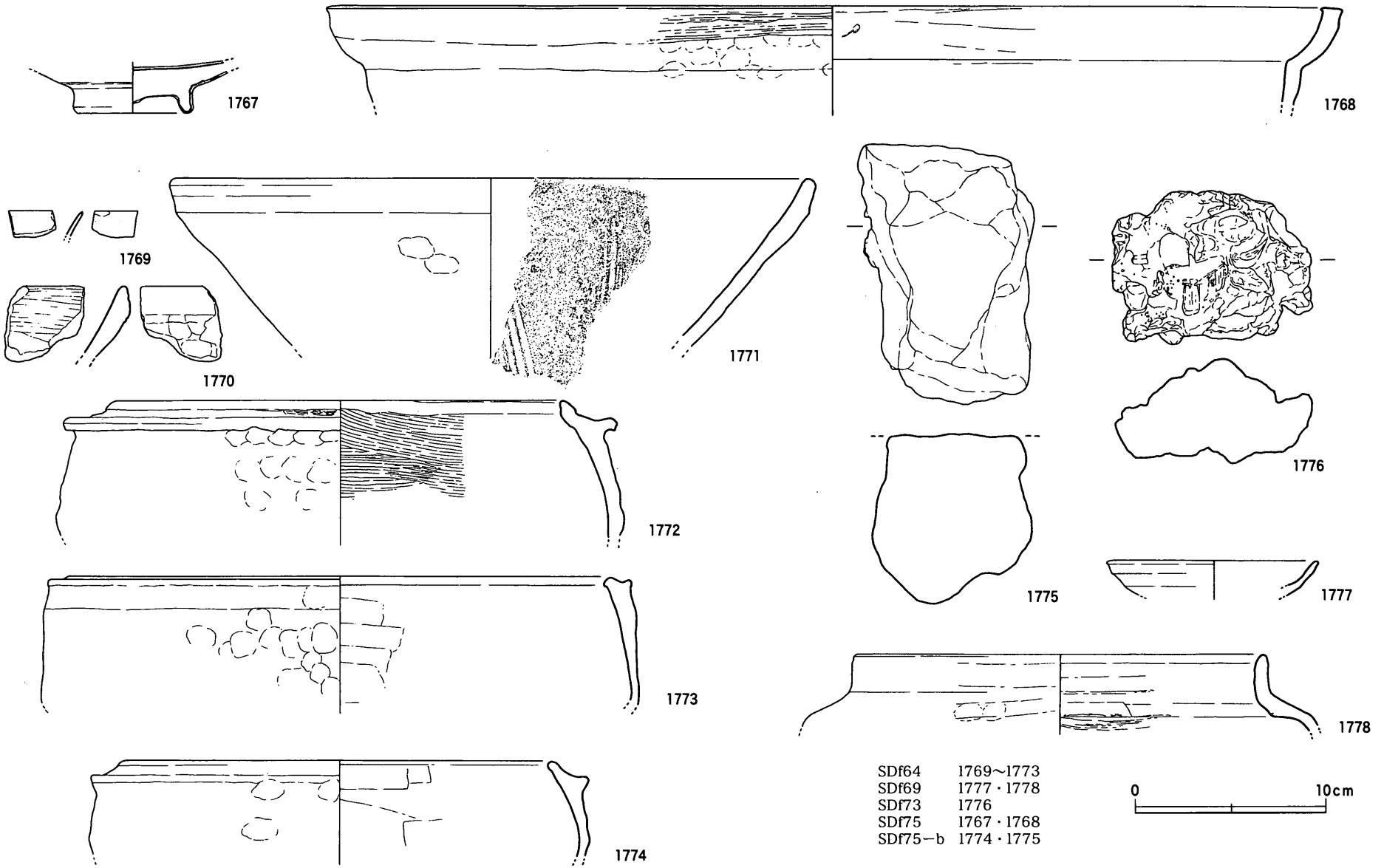
ピットの分布状況

小区画dで検出されたピットは235個であり，掘立柱建物として復元できたのは4棟（柱穴37個）と全体の15.7％である。その分布状況は特定の箇所に集中する傾向が看取できず，全体にやや散漫な分布状況を示している。

主な出土遺物としては，土師質土器小皿（**1764**），白磁皿（**1761**），青白磁合子蓋（**1763**），須恵器壺（**1762**），砥石（**1765**）がある。**1764**はわずかに突出気味の底部をもち，静止糸切りが認められる。類例は郡家田代遺跡や大東川河床遺跡など，近世遺跡でも認めることができ時期的に下る可能性もある。**1761**は森田分類E－2類皿である。**1763**は細片であり，先行する遺構ないし包含層からの混入である可能性が高い。

SBf37（第283図）

小区画d中央部西寄りで検出された，2×3間（梁間3.12～3.36m，桁行7.5m，床面積24.3㎡）の側柱建物である。主軸方位はW－16.5°－Nである。SBf38・39と重複しているが，柱穴の切り

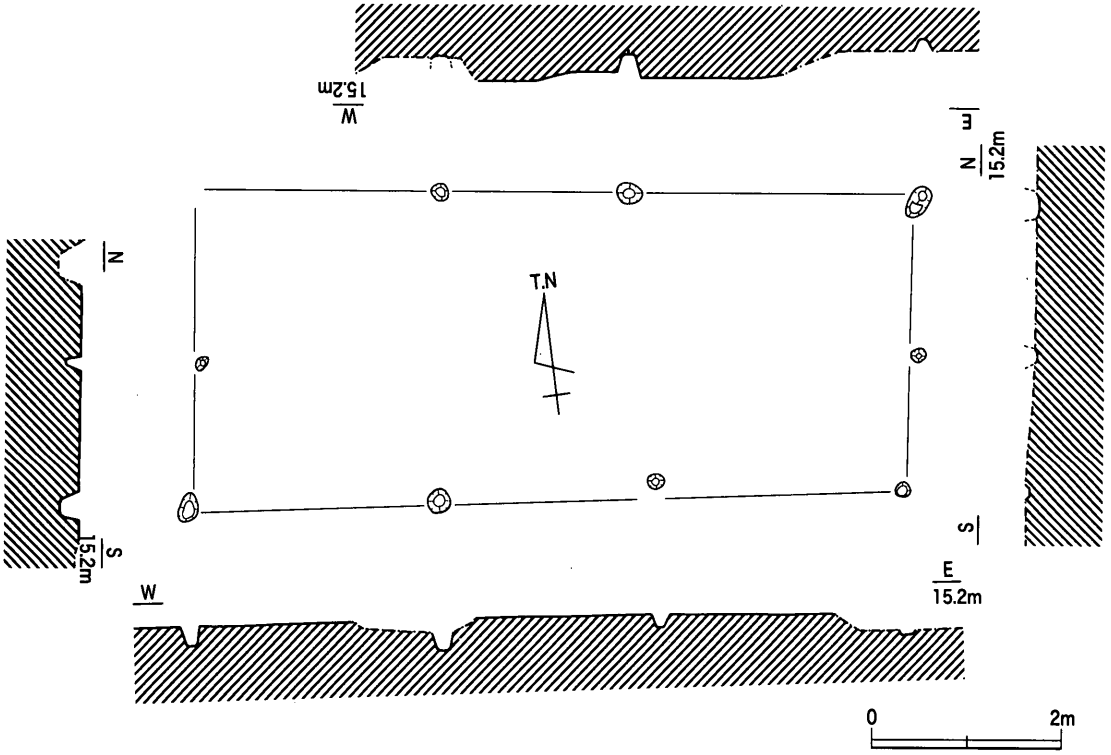


第282図　SDf64・69・73・75・75－b出土遺物（1/3，1775・1776は1/2）

合いがないため相互の先後関係については明確でない。柱穴は直線的には並ばず，各辺は直角ではないため建物のプランとしては細長い台形状を呈する。柱間距離もかなりばらつきがあり，桁行で2.0ｍを最小として3.0ｍを最大とする。柱穴の平面形態は円形であり，梁間の中間柱がやや小振りである。南辺に沿ってＳＤf70があり，雨落ち溝的な性格が想定される。

ＳＢf38（第284図）

小区画ｄ西辺中央部でＳＢf37・39と重複して検出された，３×２間（梁間3.6～3.86ｍ，桁行4.55～4.7ｍ，床面積17.27㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－８°－Ｅである。梁間の柱間が多いという点で変則的なプランであるが，柱穴並びは直線的に揃っている。平均柱間距離は梁間で



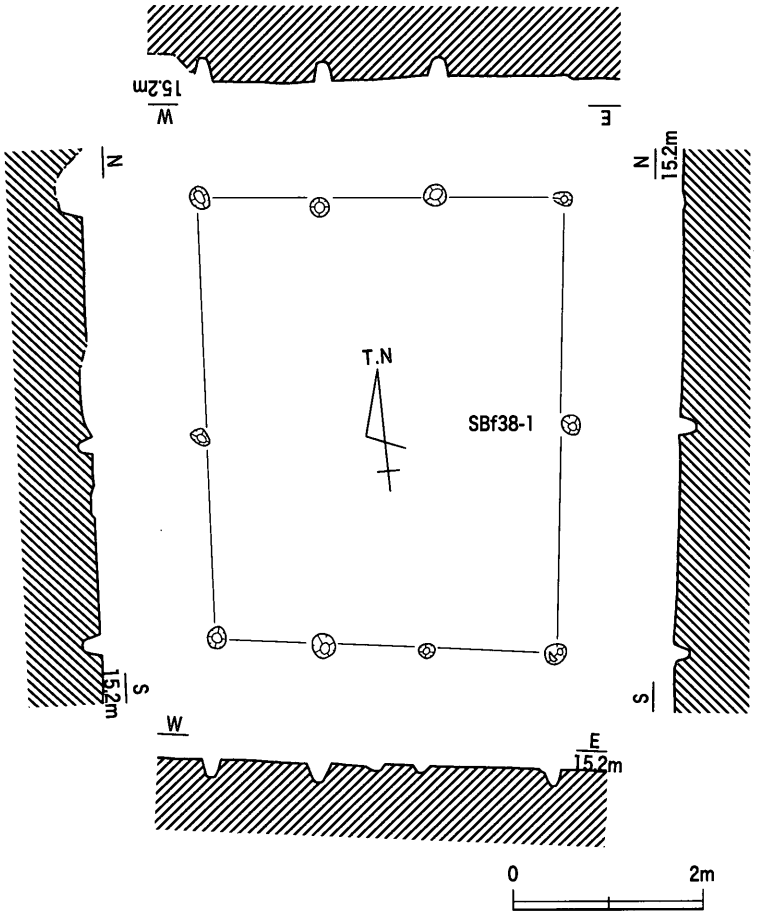
第283図　SBf37平・断面図（1/80）

1.24ｍ，桁行で2.31ｍを測り，梁間の柱間が極めて短いのが特徴的である。柱穴は円形プランであり，北東隅の柱穴以外は底面のレベルはほぼ一定している。

遺物は鉄滓（**1488**）がある。裏面には砂粒と小礫を含んだ粘土が面的に付着しており，炉壁の一部と考えられる。炉壁面のカーブは一定していないため，本来の炉の内径を復元することは困難だが，かなり小型の炉であることは間違いないものと思われる。

ＳＢf39（第286図）

小区画ｄ西辺部でＳＢf37・38と重複して検出された，１×４間（梁間4.1ｍ，桁行8.67ｍ，35.54㎡）の側柱建物であり，南側に庇を伴う。主軸方位はＮ－14°－Ｅである。柱穴は円形プランを呈し，多くが径15～20㎝と他の建物よりも若干小振りな柱穴をもつ。



第284図　SBf38平・断面図（1/80）

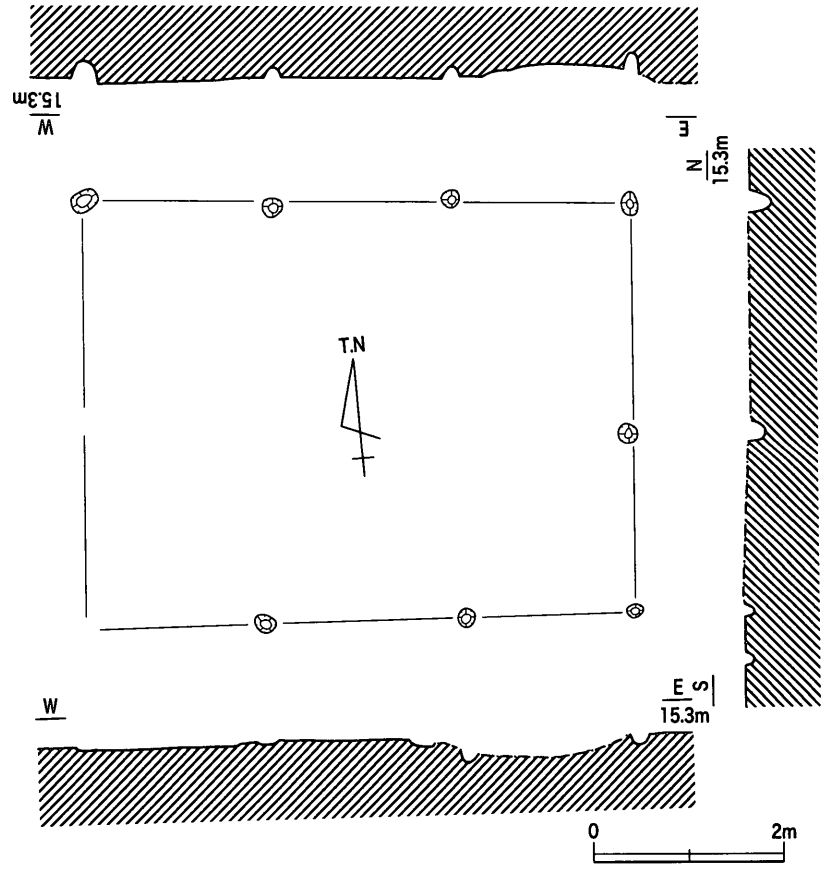
SBf40（第285図）

小区画d中央部で検出された，2×3間（梁間4.32m，桁行5.79m，床面積25.01㎡）の側柱建物である。主軸方位はW－4.5°－Nであり，平均柱間距離は梁間で2.16m，桁行で1.94mを測る。柱穴は円形プランを呈しており，北・東辺は底面のレベルがほぼ一定している。西辺と南辺の一部にSDf71が鍵の手状に延びており，建物の雨落ち溝的な機能が想定される。

c．土坑

分布状況と形態

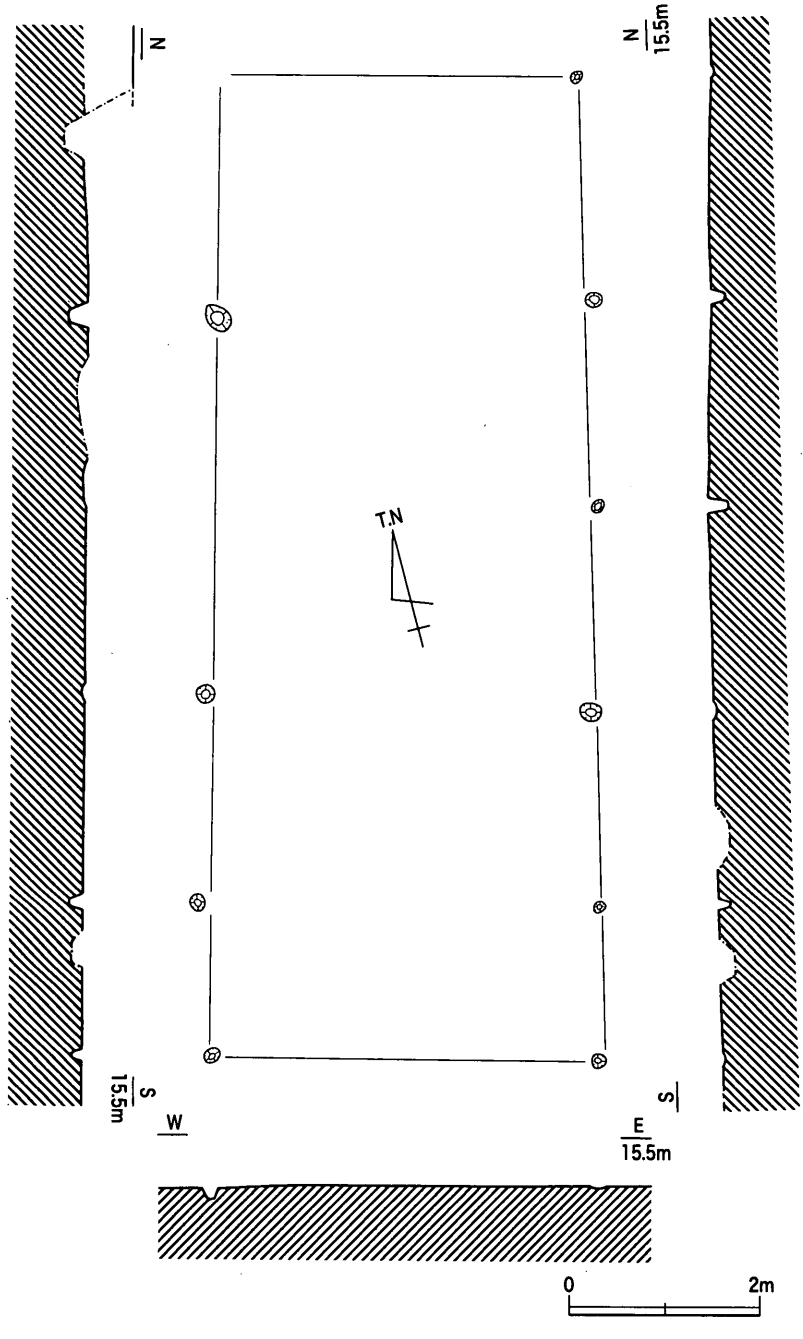
小区画dでは，6基の土坑が検出された。その分布状況は，特定



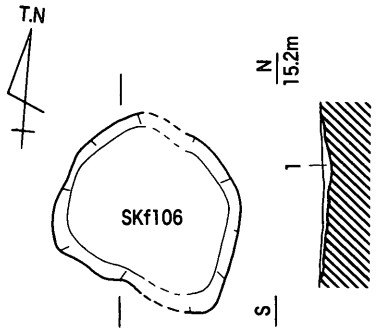
第285図　SBf40平・断面図（1/80）

の箇所に集中する傾向はなく，散在的に認められる。平面形態はやや歪な楕円形（ＳＫf106～109），隅丸方形（ＳＫf110・111）に分けられる。前者は長径１m前後ないしそれ以下で，後者は長径1.5～2.0mであり，規模に明瞭な差異が読み取れる。しかし，埋土には基盤層のブロック土と炭化物粒のいずれかないし両者が含まれており，埋没状況に根本的な差異を見出すことは難しい。

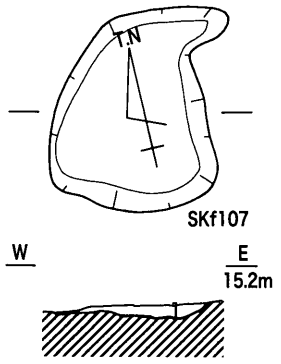
出土遺物は，ＳＫf110より白磁皿（**1786**），銅製紅皿（**1787**）が出土している。**1786**は森田分類Ｅ－２類皿である。**1787**は，体部を菊形に整形しており，底部は内側にビス形の留め具を挿入し，外面は円盤形の金具で鋲を受けている。遺存状態は極めて悪く，腐食が進行しているが，表面に鍍金の痕跡や内容物の付着などを観察することはできなかった。



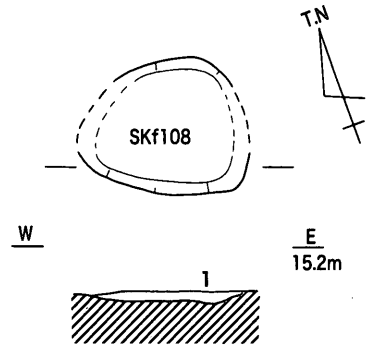
第286図　SBf39平・断面図（1/80）



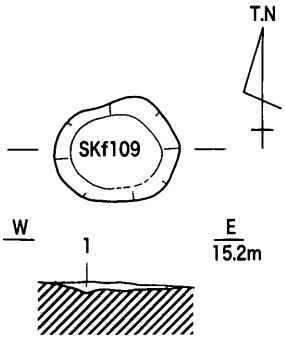
1. 灰褐色粘質シルト
(鉄分・炭粒・灰色細砂がブロック状に混じる)



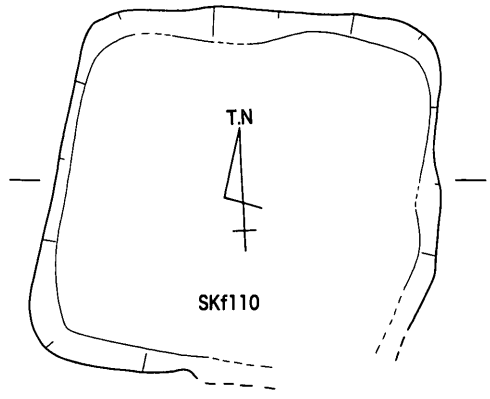
1. 暗灰色粘質シルト
(鉄分・炭粒を多く含む。
ベースブロックにを含む)

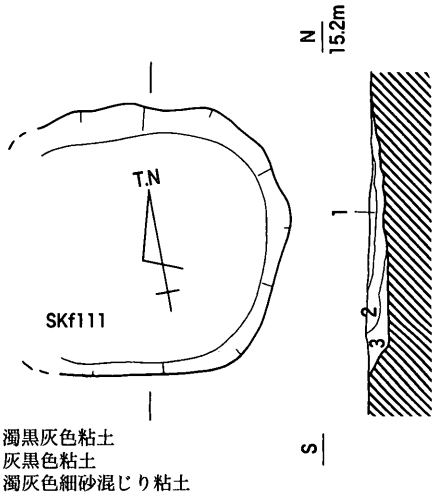


1. 灰褐色粘質シルト
(ベースブロックを含む。最下位に暗灰色粘土細層あり)

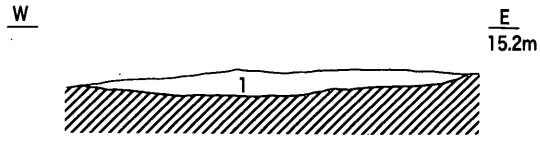


1. 灰褐色粘質シルト
(ベースブロックを含む。
炭粒を含む)

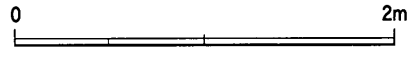




1. 濁黒灰色粘土
2. 灰黒色粘土
3. 濁灰色細砂混じり粘土



1. 灰褐色シルト
(鉄分・マンガン・炭粒・褐色粘質シルト・ベースブロックを含む)



第287図　SKf106～111平・断面図（1/40）

(6) 小区画ｅ（区画４－ｅ）

ａ．区画範囲と区画施設

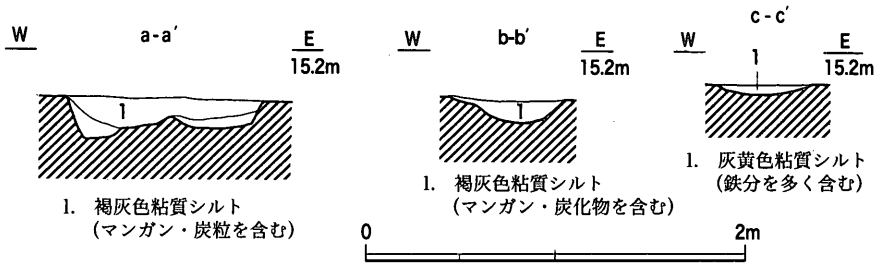
西辺をＳＤf75，北辺をＳＤf69で画された小区画である。東・南縁部は明瞭な区画施設を伴わないが，ピットの分布状況から東縁については区画４－ｄのＳＤf74の南延長部分がほぼ対応すると考えられる。南縁についてはＳＤf75南端付近から近世～近代のＳＤf94に至る範囲のいずれかが考えられるが，確定することは難しい。ただ，中世後半の遺物を出土したＳＫf23・24の存在を重視すると，ＳＤf94付近にまで小区画の南縁が及ぶことになる。以上を前提に小区画ｅの規模を示すと，東西約16ｍ，南北24ｍとなる。

第288図　小区画ｅ（区画４－ｅ）平面図（1/200）

ＳＤf75（第282・289図）

Ｎ－10°－Ｅの主軸をもつ小溝であり，区画４－ｃ東辺を区画するＳＤf64から2.75ｍ（芯々距離）東側にあり，ＳＤf64と併走するかたちで北端がＳＤf57に合流する。検出範囲の中央部分は途切れているが，遺存状況から考慮するとこれは当初からの形態ではなく，本来は連続的に延びていたものと推測される。断面形態は浅いＵ字形を呈しており，幅0.45～1.08ｍ，深さ0.05～0.16ｍを測る。埋土は灰褐色系の粘質シルトの単層である。

図示可能な主な遺物としては，青磁碗（1767），土師質土器鍋（1768）がある。1767は上田氏分類のD－Ⅱ－b類碗である。1768は内弯する口縁部をもち，口縁端部には水平方向の平坦面が形成されている。口縁部外面はハケ目状の強い板ナデ調整によって調整されており，形態・技法ともに楠井窯の鍋BⅡ形式に近似する。ともに14世紀後葉～15世紀前葉に上限が求められるが，SDf57との繋がり（切り合いがない）を前提とするならば，16世紀中葉頃の埋没とした方が妥当であろう。

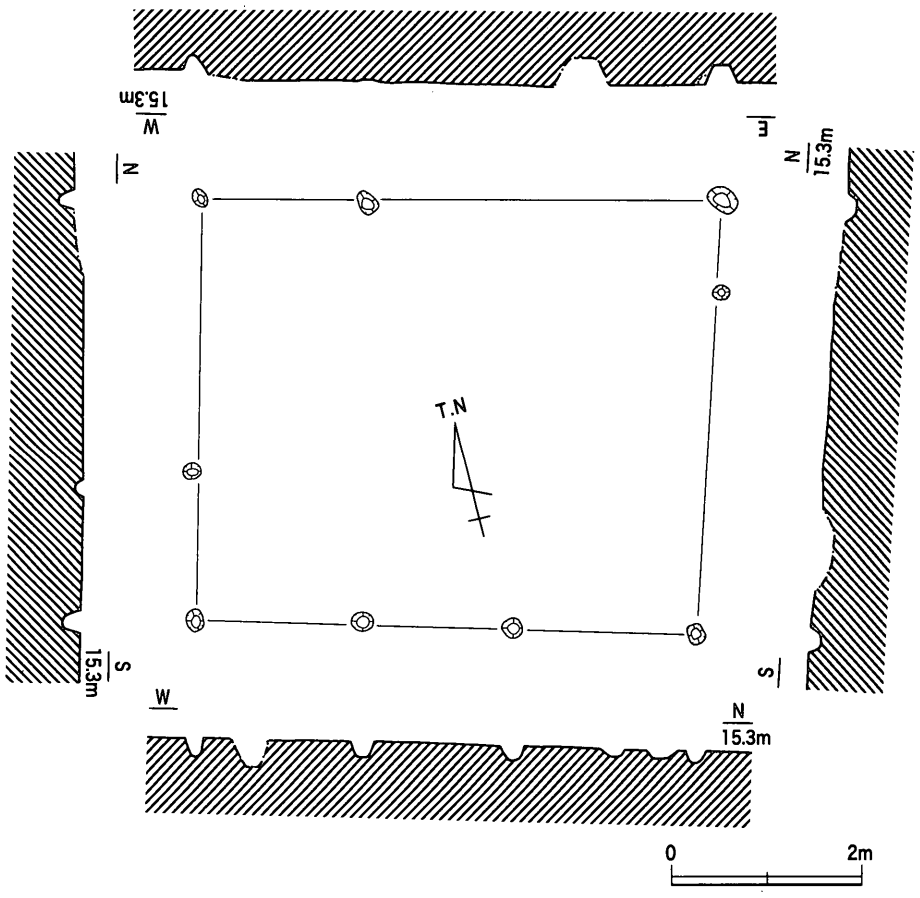


第289図　SDf75断面図（1/40）

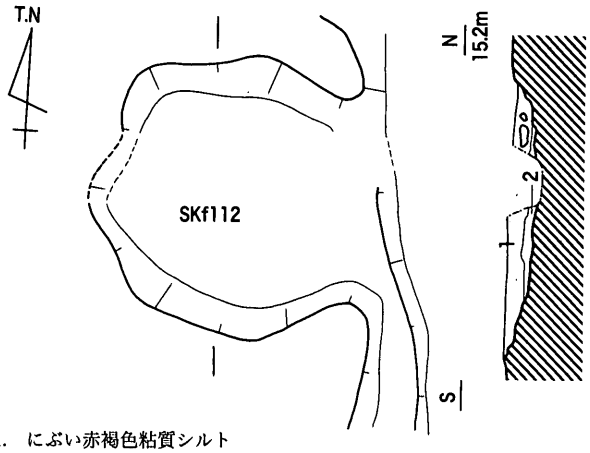
b．建物

ピットの分布状況

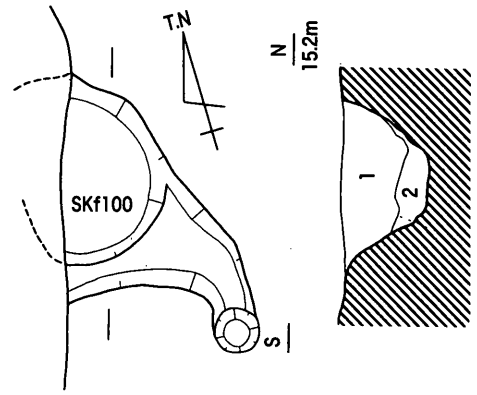
小区画eでは，ピットが250個以上検出された。中世前半の区画2と重複した位置にあるため，中世後半のピットを確定させることは難しいが，このうち掘立柱建物として復元できたのは1棟（柱穴10個）であり，検出数の1％以下の復元率となっている。その分布は小区画e北半部に多いが，さらにその特定箇所に集中する傾向にはなく，全体的には散漫な分布状況といえる。



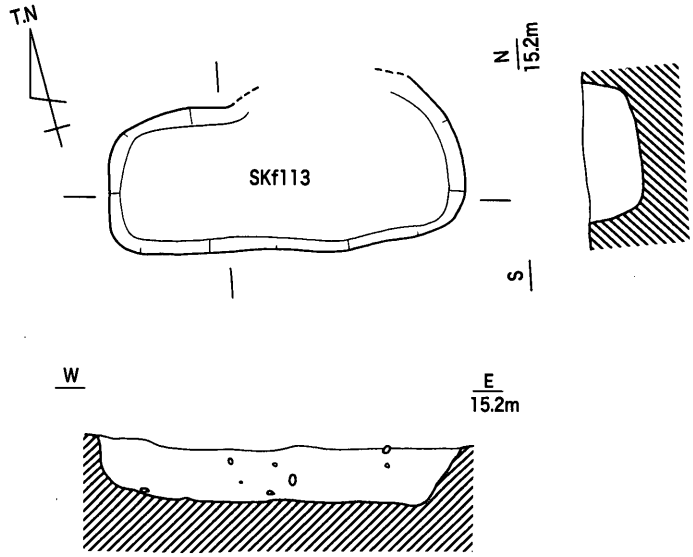
第290図　SBf41平・断面図（1/80）

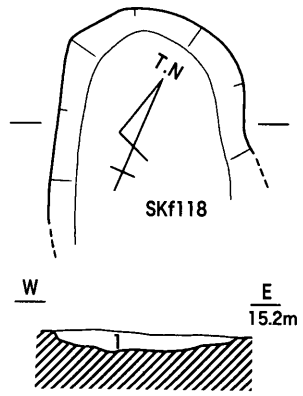


1. にぶい赤褐色粘質シルト
（マンガン・炭粒を含む）
2. 褐灰色粘土

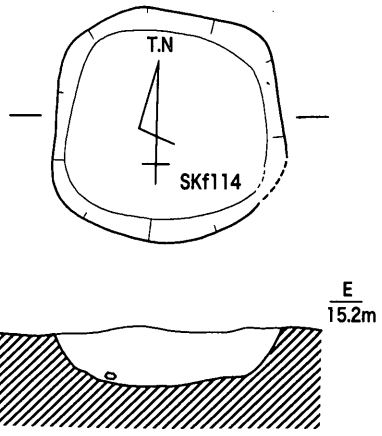


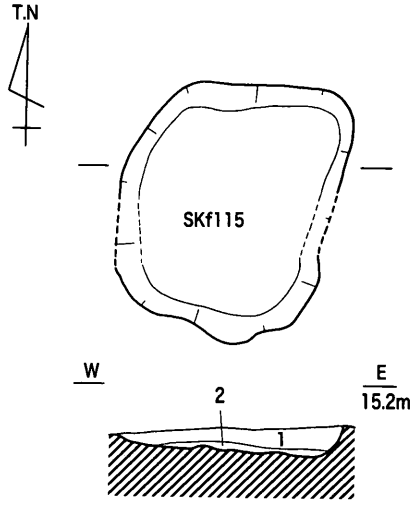
1. 黄灰色粘質シルト（ベース土極大ブロックを多く含む）
2. 灰色粘質シルト（ベース土極大ブロックを多く含む）





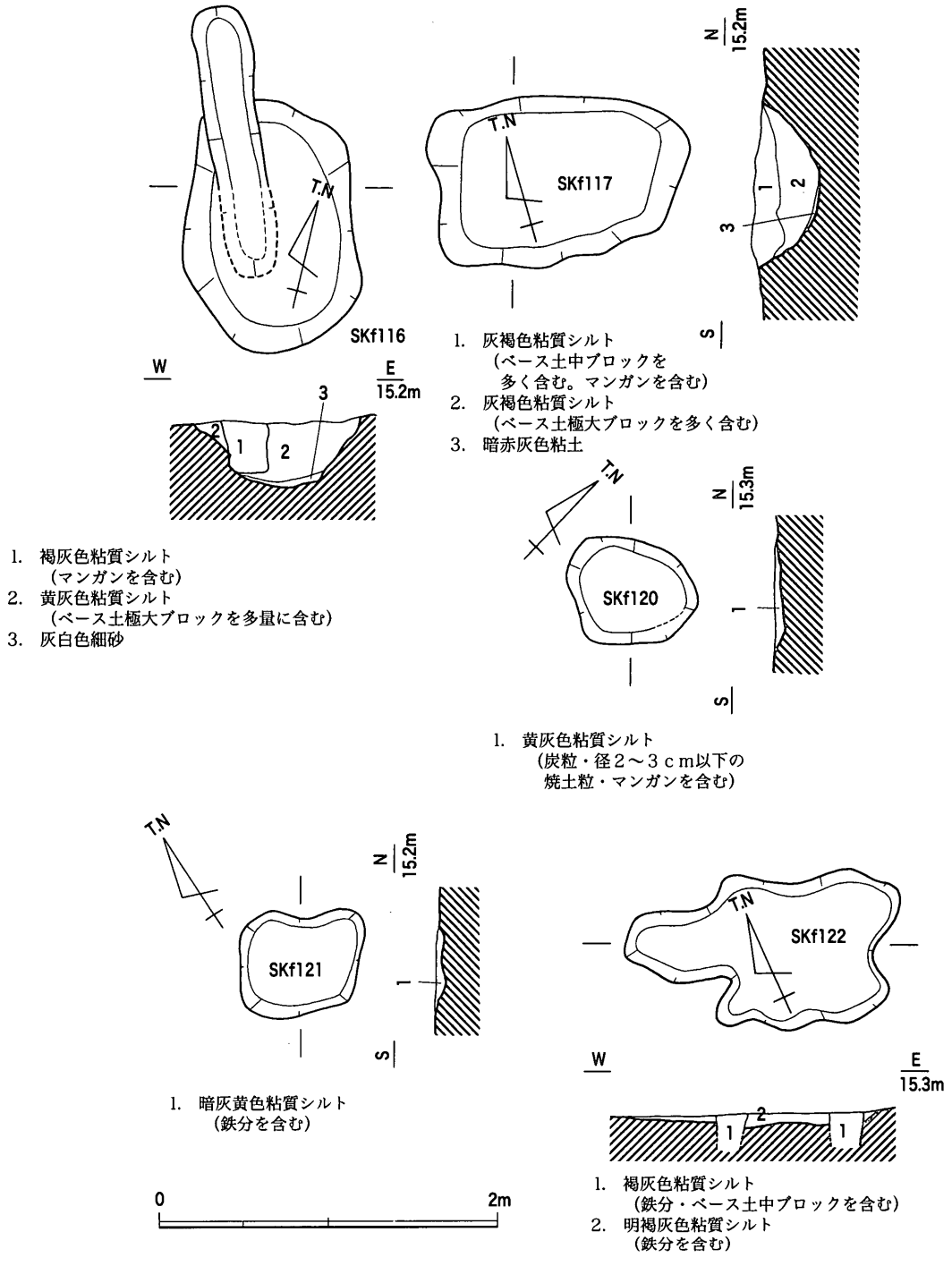
1. 褐灰色粘質シルト
（ベース土中ブロックを少量含む。
マンガンを含む）





1. 黒褐色粘質シルト
2. にぶい黄褐色細砂

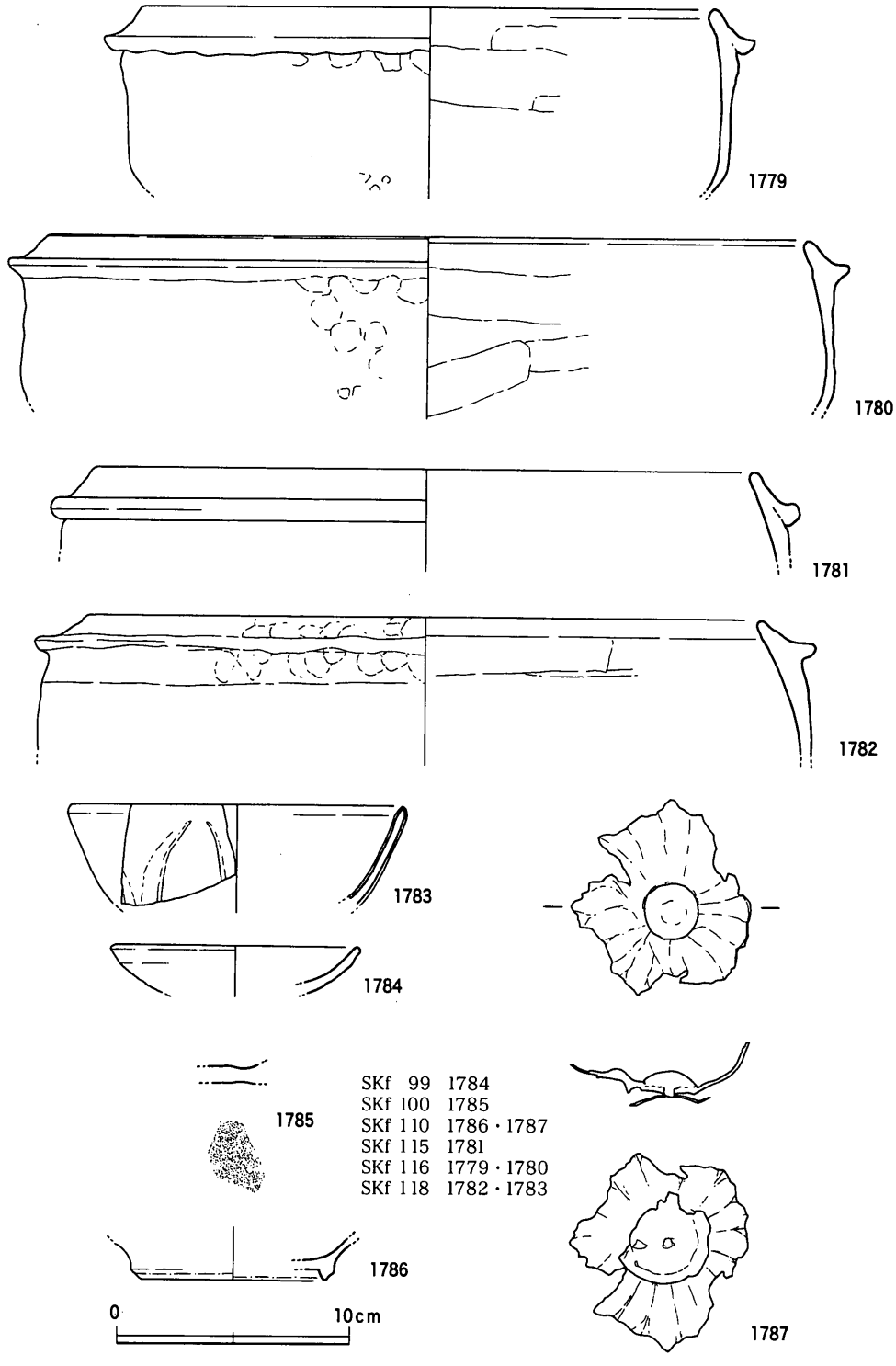
第291図　SKf100・112～115・118平・断面図（1/40）



第292図　SKf116・117・120～122平・断面図（1/40）

主な出土遺物としては，土師質土器擂鉢（**1766**）がある。口縁部が屈曲して内傾するタイプであり，小法量の事例である。

ＳＢf41（第290図）　小区画ｅの北東部で検出された，３×３間（梁間5.3～5.46ｍ，桁行4.45～4.55ｍ，床面積24.22㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－15°－Ｎである。中世前半のＳＢf13と重複しているが，柱穴相互の切り合い関係はない。柱間距離は不揃いであるが，柱穴の大きさや底面レベルは概ね一定している。



第293図　SKf99・100・110・115・116・118出土遺物（1/3，1787は2/3）

c．土坑（第291～293図）

小区画eでは，16基の土坑が検出された。その分布状況は，北東縁辺部（SKf100・112～118）と南西隅～南縁辺部（SKf99・123～125）に集中する傾向が明確に指摘できる。その他はピットの分布する小区画e北半部の中央に散在している。平面形態は隅丸方形・長方形のもの（SKf113～115・

l17・121・123～125）とやや歪な楕円形のもの（ＳＫfl00・l12・l16・l18），さらに不定形なもの（ＳＫfl22）に分けられる。埋土には，ＳＫfl00のように基盤層のブロック土を多量に含むものがある。

主な出土遺物を図示した。**1779・1780**はＳＫf99から出土した土師質土器足釜である。口縁部が短く，鍔部も基部が太くなっており，楠井ＢⅢ形式にあたるものである。**1781**はＳＫfl15から出土した土師質土器足釜であり，端部に明確な面をもつ短い鍔が貼付されている。楠井窯ではみられない形態であり，他の生産地製品であると考えられる。**1782・1783**は，ＳＫfl18出土の土師質土器足釜と青磁碗である。**1782**は楠井ＢⅢ形式，**1783**は横田・森田分類のＩ５ａ類碗である。**1784**はＳＫf99出土の瀬戸丸皿である。大窯第４～７小期の所産か。**1785**はＳＫfl00出土の東播系須恵器捏鉢の底部であり，外面には回転糸切り痕が認められる。

以上の遺物は，楠井ＡⅢ形式の足釜の存在を考慮するならば14世紀後葉を中心とした時期が想定できるが，瀬戸丸皿は明らかに16世紀代に下る遺物である。したがって，14世紀後葉～16世紀の長期間を小区画ｅの継続時期とすることも不可能ではない。しかし，ピットが他の小区画よりも少ないことから，遺構の状況からは建物群の維持が長期にわたって行われたとは考え難い状況である。したがって，14世紀代の遺物は混入品である可能性を考慮するのが妥当であろう。

(7) 区画４周辺の遺構

ＳＫfl26・127（第294図）

Ⅱ－１区で検出された土坑である。ＳＫfl27はやや歪な隅丸方形プランを呈しており，長径2.1m，短径1.86m，深さ0.2mを測る。ＳＫfl26はＳＫfl27を切り込んでおり，長方形プランを呈する。長径2.58m，短径1.42m，深さ0.28mを測る。

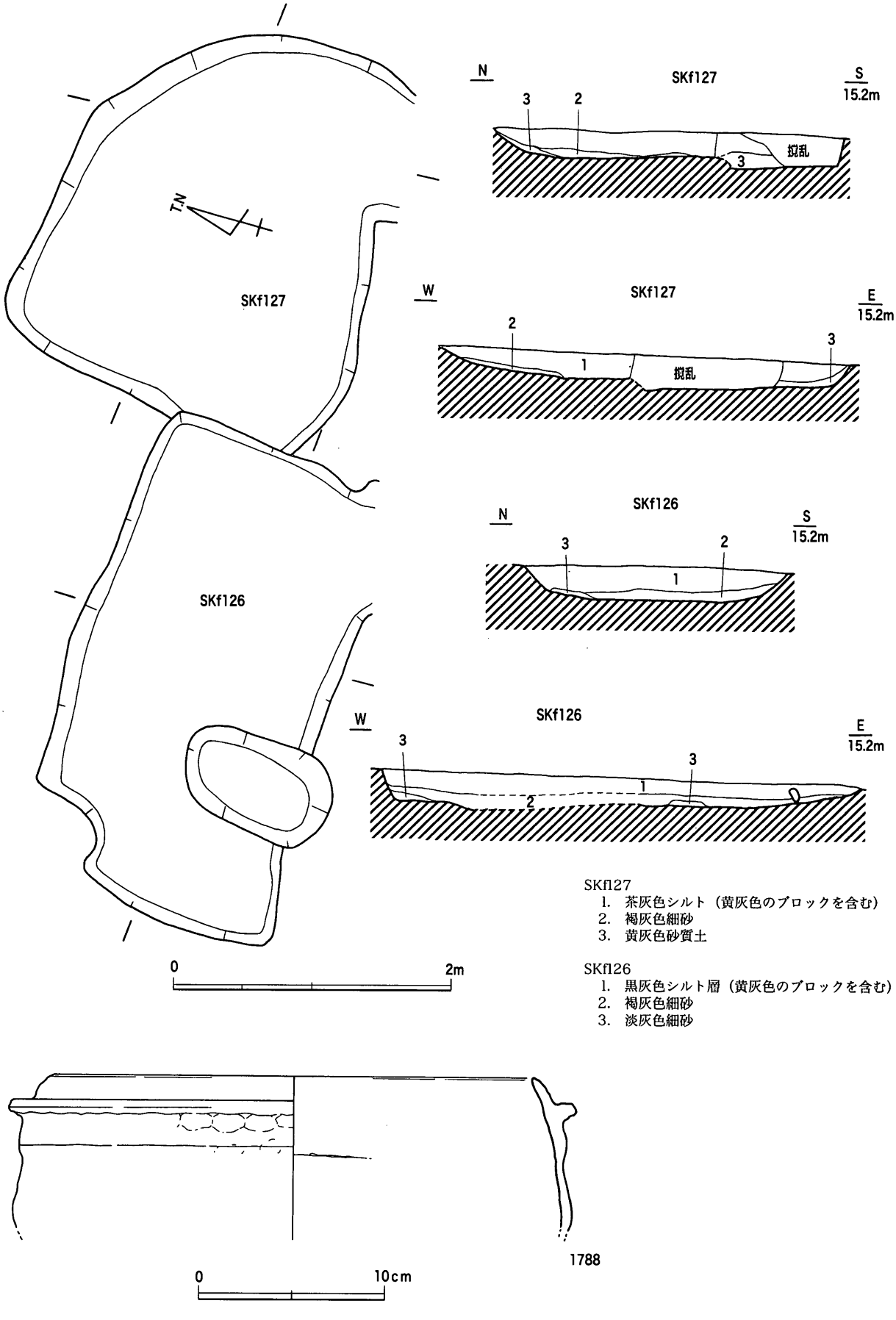
図示できる遺物としては，土師質土器足釜（**1725**）がある。楠井ＢⅢ形式に該当するものであろう。

(8) Ⅱ－24・25区包含層出土遺物

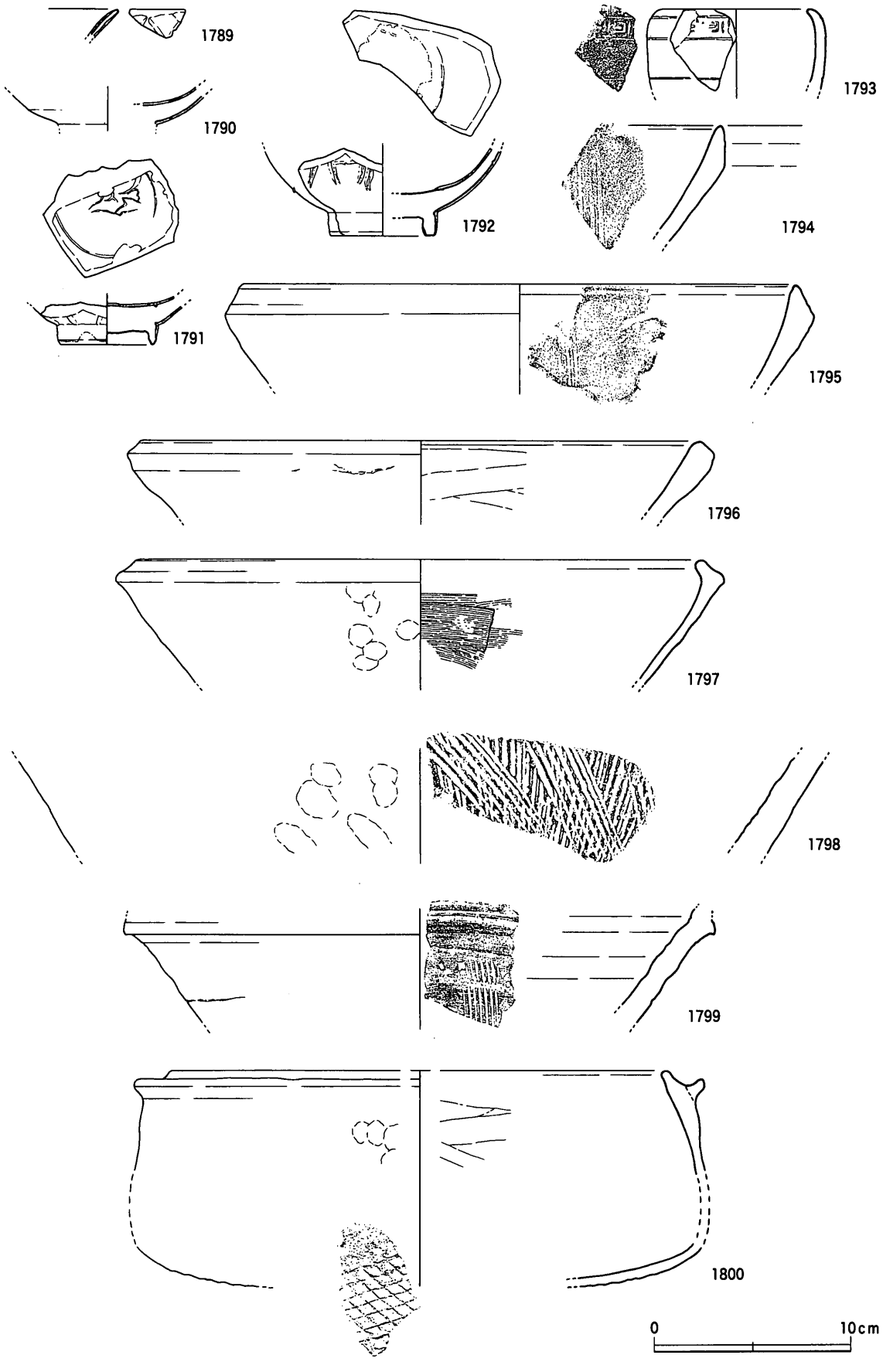
区画４を覆う中世包含層から出土した主要な遺物について，報告しておく。青磁碗（**1789～1792**），土師質土器香炉（**1793**）・擂鉢（**1797・1798**）・足釜（**1800～1803**）・把手付鍋（**1804・1805**），楠井産擂鉢（**1794～1796**），備前焼擂鉢（**1798**），砥石（**1806**），羽口（**1807**）がある。

1789は横田・森田分類のＩ－５ｂ類碗である。極めて細かな破片であり，古い時期の遺物が「ゴミ」として混入した可能性が考えられる。**1790**は上田氏分類のＥ類碗とみられる。**1791**は見込みに草花文が，体部外面に鎬をもたない蓮弁文が施される。上田氏分類のＢ－Ⅱ－ａ類碗であろう。**1792**は外面にヘラによる斜線（蓮弁文か）が施されており，体部上位にはわずかに横方向のヘラ描き線（雷帯文か）が認められる。雷帯文＋蓮弁文の施文とみられ上田氏分類のＣ－Ⅱ－ａ類碗の可能性があるが，雷帯文が蓮弁文の上半で重なるという不自然な文様構成となるため，あるいは雷帯文を伴わないＢ－Ⅲ－ａ類に分類できるかもしれない。

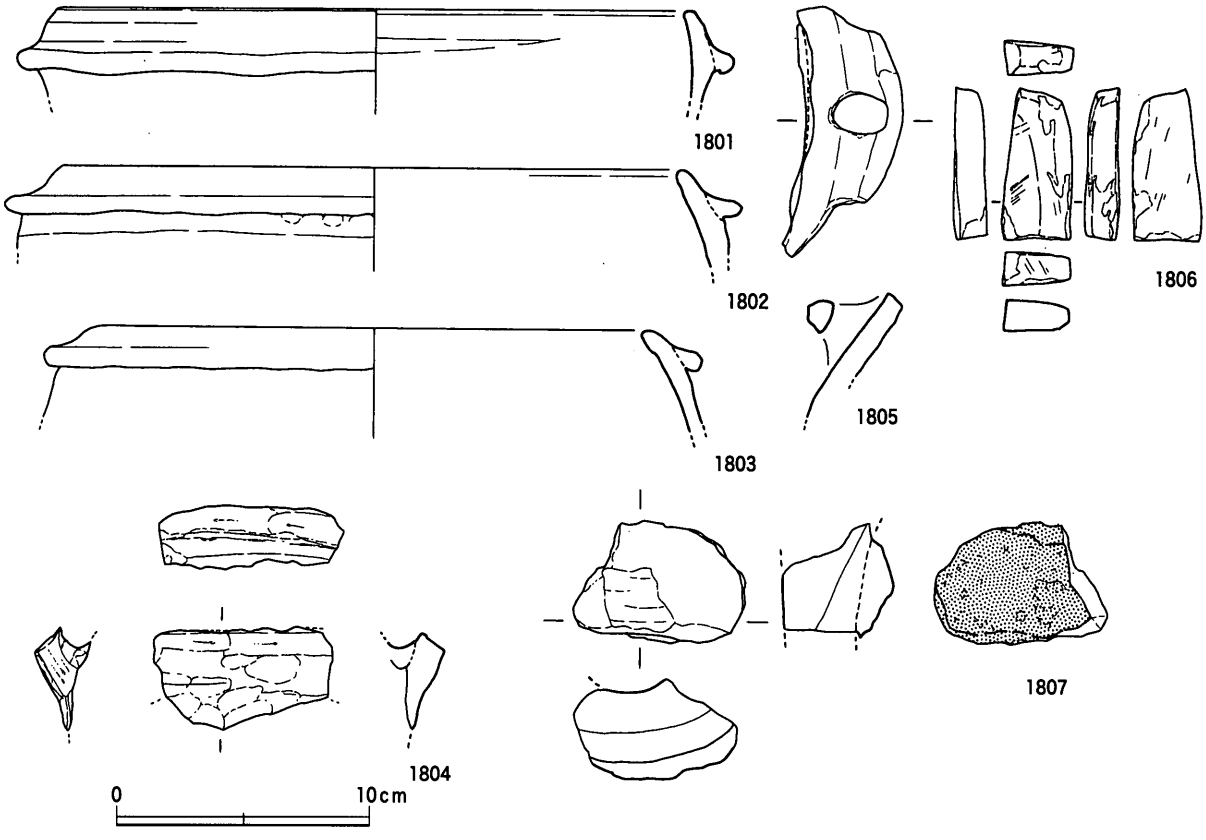
1793は土師質土器香炉である。内弯する口縁部の外面に沈線２条＋「回」形の刻線で雷帯文状の文



第294図　SKf126・127平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第295図　Ⅱ－24・25区中世包含層出土遺物（1）（1/3）



第296図　Ⅱ－24・25区中世包含層出土遺物（2）（1/3，1807は1/2）

様帯としている。**1794・1795**は楠井ＡⅢ形式，**1796**は楠井ＡⅡ形式である。**1796**口縁端部上端は，使用によると考えられる摩滅が顕著に認められる。**1799**は口縁部下半や卸し目の形状から間壁編年Ⅴ期の所産とみられる。**1800**は軸線の細い斜格子叩き目が特徴的である。このタイプの叩き目は，楠井窯ではみられないものである。**1803**は口縁部が極めて短く，鍔部も縁帯状になっており，口縁部と鍔部が一体化したような形態である。ただし，鍔部が短くなったとはいえ断面方形の比較的しっかりした細部形態をもつ点が楠井Ｃ形式とは異なる。**1804**は茶釜形の体部（肩部）に付された把手とみられる。**1807**は鋳造羽口の可能性がある。細片ではあるが内径４㎝前後に復元できる。外面には黒色の鉄滓が付着する。

４．区画５

(1) 小区画の配置

Ⅲ－１区で検出された中世後半の建物群と周辺の溝・柵列を一括して「区画５」とする。建物群全体を囲繞するような区画施設は確認できておらず，中世前半の区画２と同様に「区画」と呼称することには躊躇を覚えるが，他の区画（建物群）とは明瞭に異なるまとまりとして把握できる分布状況をもつため，便宜的な呼称として用いる。全体を囲繞する区画施設は検出されていない。北辺はＳＤf52・84に画されたとみることは可能であり，南辺は近世～近代のＳＤf97・107・108に先行する溝が存在したことが推測されるため，一応ここで画されていたとみてよかろう。東側は南北に延びるＳＤf85が該当することも考えられるが，柵列ＳＡf09を東限とみるのがピットの分布状況からも妥当であろう。西

限は区画２とも接するため不明瞭であるが，ＳＢｆ43の西側付近でピットが希薄になり，さらにその西側の区画２付近では中世後半に位置付けられるピットが存在しないため，ＳＢｆ43付近とすることができる。以上の前提で区画５の規模を示すと，東西45ｍ，南北33～39ｍとなる。

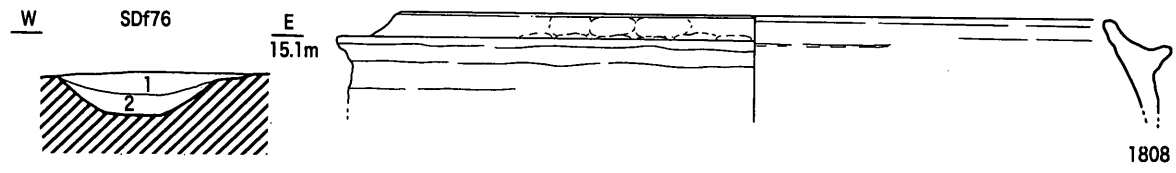
この建物群中には，南北方向の小溝（ＳＤｆ76・77）とその間の南北方向の柵列（ＳＡｆ07・08）が検出されており，この箇所が建物群を細分する区画施設の機能を果たしていたことを想定させる。したがって，この小溝・柵列を境界として，西側を小区画ａ，東側を小区画ｂとする。いずれも建物やピットの分布が区画４に比べて散在的であり，出土遺物からみても16世紀代の比較的限られた時期に存在していた可能性が指摘できる。

第297図　区画５概略図（1/500）

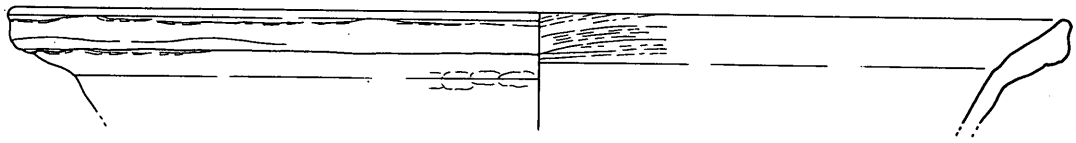
(2) 小区画ａ（区画５－ａ）

ａ．区画範囲と区画施設

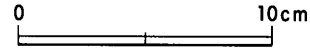
東辺をＳＤｆ76・77，ＳＡｆ07，北辺をＳＤｆ52によって画される。南辺は近世～近代のＳＤｆ97が存在するが，この溝にＳＤｆ76・77の南端が取り付くようなかたちで検出されており，ＳＤｆ97より南側にはＳＤｆ76・77が延長・連続しないことから，本来はＳＤｆ76・77が繋がる中世溝がＳＤｆ97の位置に存在したものと考えられる。西辺については区画施設が存在しないが，上記したようなピット分布からＳＢｆ43西辺付近が該当する可能性があり，規模としては南北39ｍ，東西20ｍ前後となる。



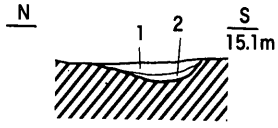
1. 灰黄褐色粘土
2. 濁褐灰色シルト



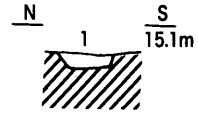
SDf76　1808～1810
SDf77　1811～1815

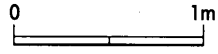


SDf77
a-a′

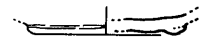


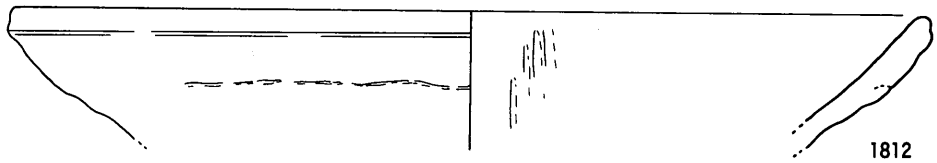
SDf77
b-b′

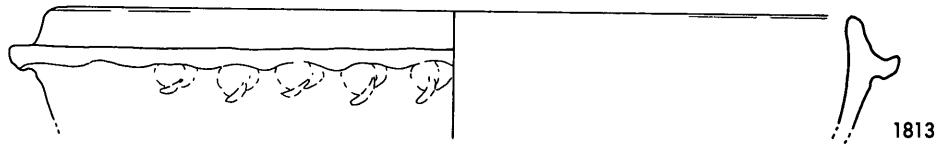


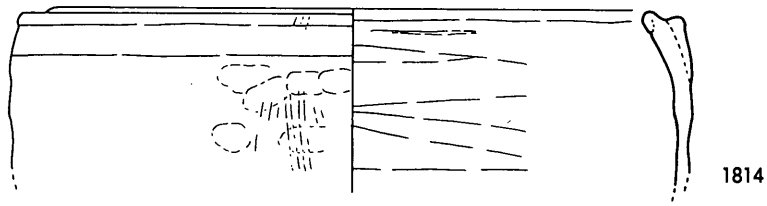


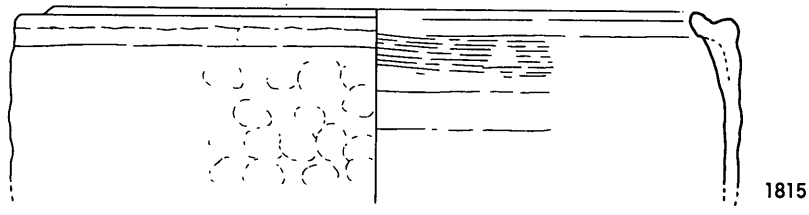
1. 灰褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土

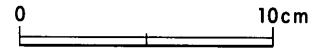




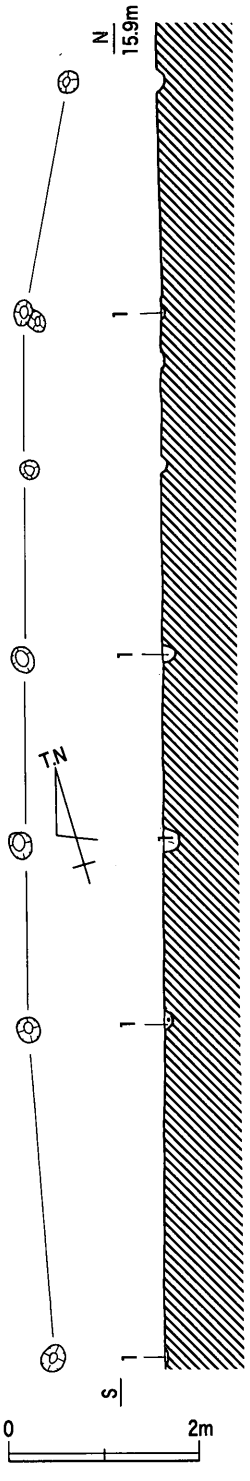








第298図　SDf76・77断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第299図　SAf07平・断面図(1/80)

SDf76・77（第298図）

N－16°－Eと周辺の条里型地割よりもやや東に偏した方向で延びる溝である。2条併走しており，両者の間隔は芯々距離で2.1m前後である。発掘調査時には，中世前半のSDf16に繋がるものと認識していたが，後述するように遺物の年代観に大きな開きがあり，調査時の遺構の理解とは齟齬を来している。検証不可能なため整合的な説明が難しいが，SDf16→76・77という切り合い関係を調査時に検出できなかったとするのが最も妥当な解釈であり，以下それを前提に記述する。

SDf76は幅1.03m，深さ0.22mを測り，断面形態はU字形を呈する。埋土は2層に分けられ，下層が暗灰色のシルト層であるため，一定度の緩やかな水流状態で埋没したことが考えられる。埋土の西肩部は近世～近代のSDf97によって切り込まれている。図示可能な出土遺物としては，土師質土器足釜（**1808**）・鍋（**1809**・**1810**）がある。**1808**は楠井BIII形式であり，**1809**・**1810**は楠井AII－2類に該当するものと思われ，14世紀中葉～後葉に位置付けられる。

SDf77は幅0.3～0.55m，深さ0.09mを測り，断面形態は皿形を呈する。埋土の状況はSDf76に近似する。十瓶山窯産須恵器椀（**1811**），楠井産擂鉢（**1812**），土師質土器足釜（**1813**）・把手付鍋（**1814**・**1815**）などが出土している。**1812**は楠井2号窯跡や讃岐国府跡SD8705出土遺物に類例を見出すことができ，15世紀中葉～16世紀前葉の幅で捉えることが可能である。**1814**・**1815**についても同様な年代観が想定できよう。

遺物による限り，SDf76・77には時期差を見出すことも可能である。ただし両溝の間にSAf07がみられる点は，両者の併存を前提としているようにも見受けられる。ここでは柵列との関係を重視して，SDf76・77を15世紀中葉～16世紀前葉のいずれかの時期に併存していたとみておきたい。

SAf07（第299図）

SDf76・77の間をN－14°－Eの方向に延びる柵列である。北側3間分は柱穴の間隔がほぼ一定で平均柱間距離2.26mを測り，底面レベルも一定しているが，南半部では柱並びがずれており柱間距離・柱穴底面レベルも一定していない。

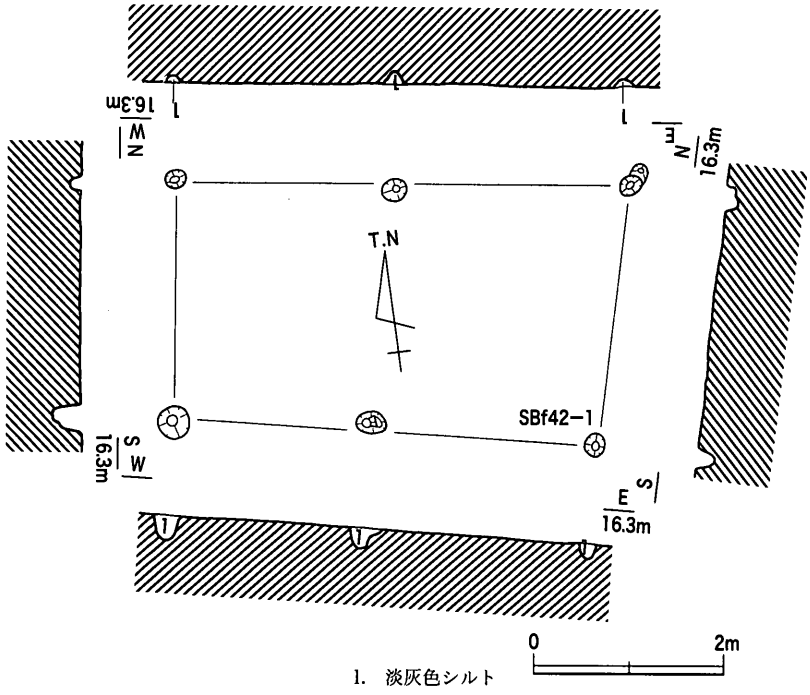
b．建物

SBf42（第300・301図）

小区画aの東側中央部で検出された，1×2間（梁間2.46～2.72m，桁行4.45～4.8m，床面積11.57㎡）の側柱建物である。建物の主軸はW－9°－Nであり，条里型地割の方向と一致する。柱穴

は直線的に並ぶが，各辺が直角ではないため全体としては歪んだ台形プランを呈する。桁行方向の平均柱間距離は2.31ｍを測る。柱穴の平面形態は円形を呈しており，底面のレベルは概ね一定している。

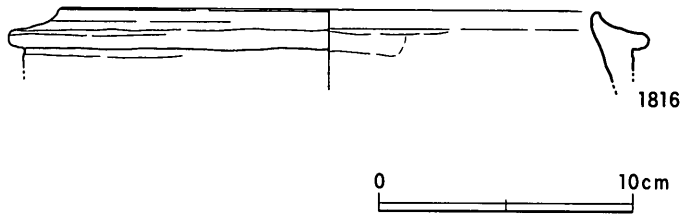
遺物は，南東隅のＳＢｆ42－１より土師質土器足釜（**1816**）が出土している。短く細く立ち上がる口縁部と，やや太く短く水平方向に伸びる鍔部からなる。楠井窯では同一形態の事例はみられないが，口鍔部の退化傾向は明瞭であり，16世紀前葉～中葉頃の所産と考えられる。



第300図　SBf42平・断面図（1/80）

ＳＢｆ43（第302図）

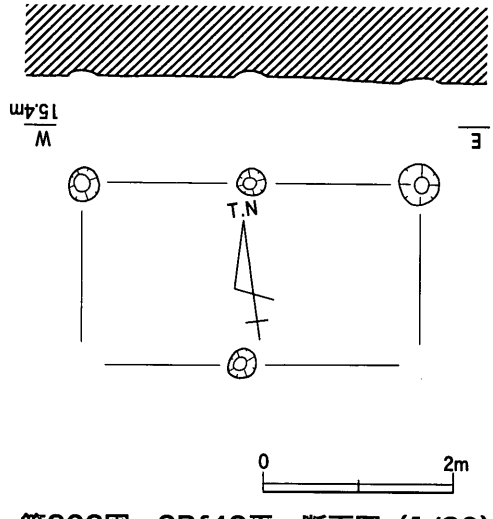
小区画ａの西側中央部で検出された，１×２間（梁間1.9ｍ，桁行3.54ｍ，床面積6.72㎡）の極小規模の側柱建物である。主軸方向はＷ－８°－Ｎである。中世前半のＳＤ01埋没後に埋土を掘り込んで建てられている。柱穴の平面形態は円形を呈する。



第301図　SBf42出土遺物（1/3）

ＳＢｆ44（第303図）

小区画ａの南半部で検出された，１×２間（梁間3.5ｍ，桁行4.6ｍ，床面積16.1㎡）の側柱建物である。主軸方向はＷ－13°－Ｎである。柱穴は円形プランを呈しており，底面レベルもほぼ一定である。

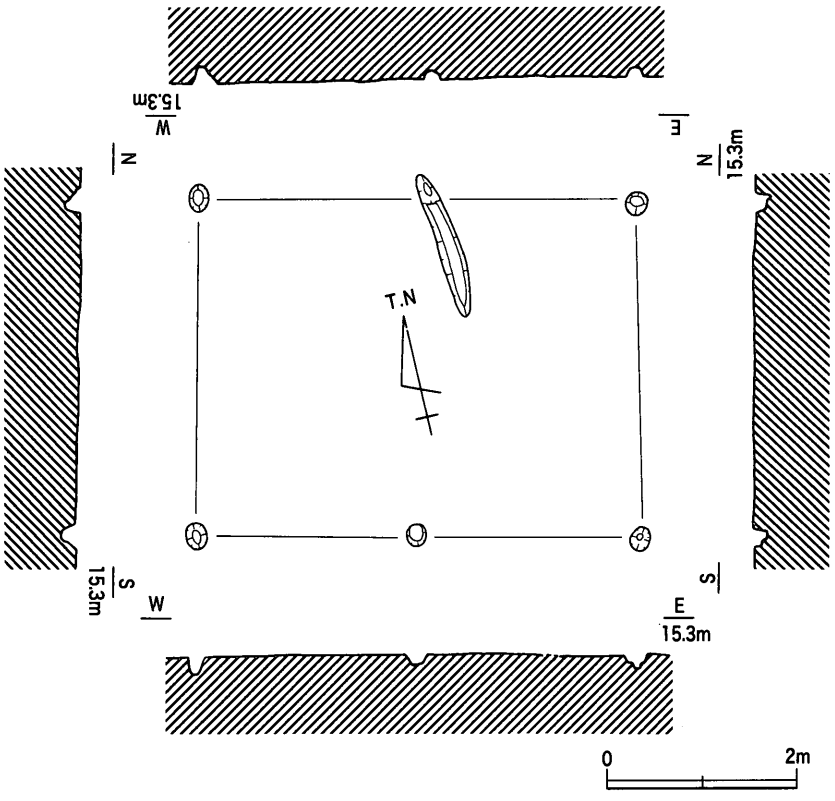


第302図　SBf43平・断面図（1/80）

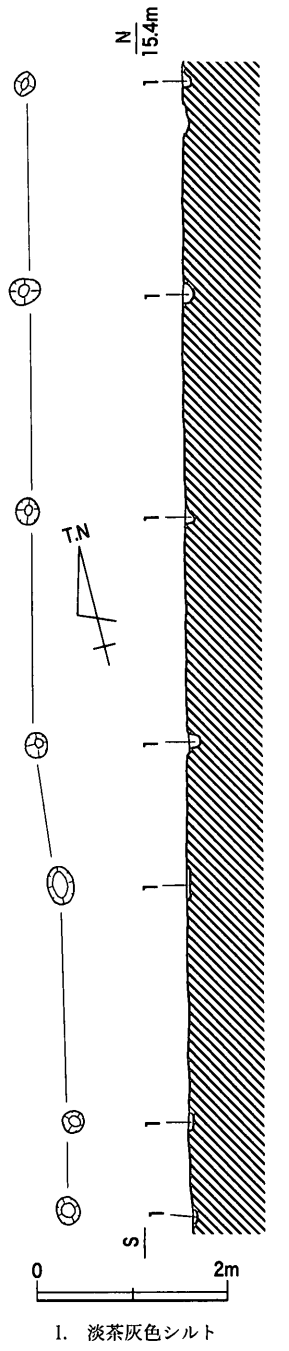
(3) 小区画ｂ（区画５－ｂ）

ａ．区画範囲と区画施設

西辺をＳＤ76・77，ＳＡｆ07・08，北辺をＳＤｆ84，東辺をＳＡｆ09に区画される。南辺については，小区画ａと同様，近世～近代のＳＤｆ107・108に先行する溝が存在した可能性が高い。以上を前提にすると，小区画ｂの規模は東西20ｍ，南北33ｍとなる。



第303図　SBf44平・断面図（1/80）



1. 淡茶灰色シルト

第304図　SAf08平・断面図（1/80）

ＳＡｆ08（第304図）

ＳＤｆ77の東側１ｍをＮ－13.5°－Ｅの方向で延びる柵列である。北側３間分は柱並びが揃っているが，南半部はやや東に偏した並びとなっている。

ＳＡｆ09（付図6）

小区画ｂの東辺を画するとみられる柱穴列で，掘立柱建物の一部である可能性も否定できないが，柵列とした。主軸方位はＮ－５°－Ｅである。遺物は出土していないが，埋土がＳＢｆ57・58と共通するため当該期の遺構とした。

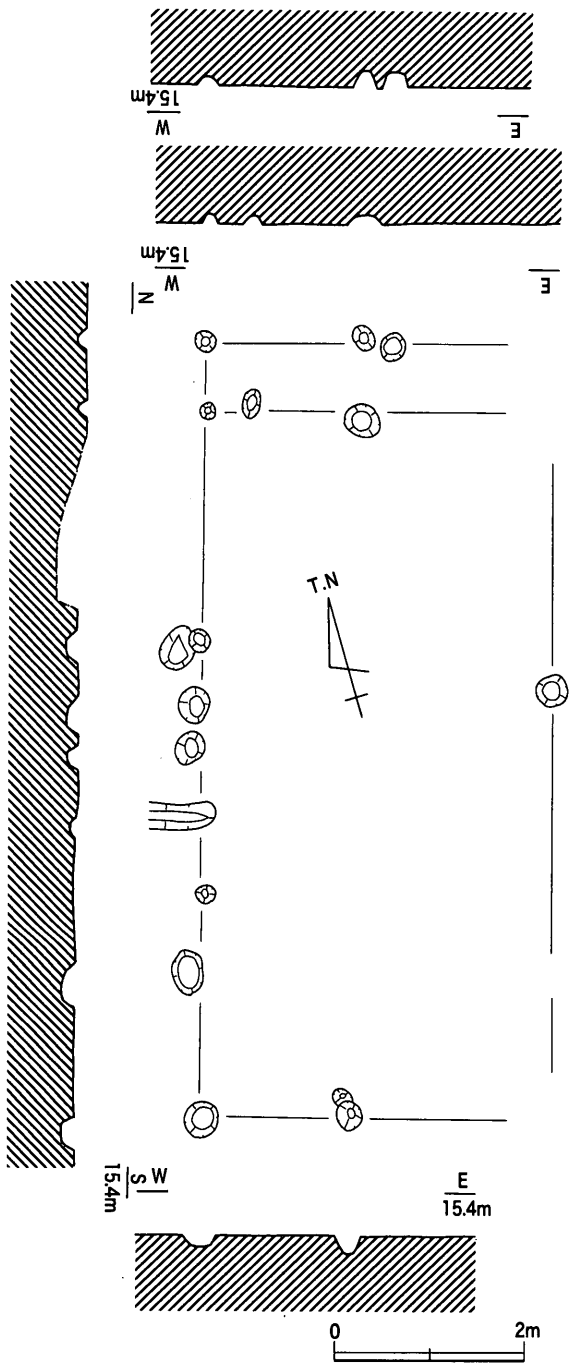
ｂ．建物

ＳＢｆ45（第305図）

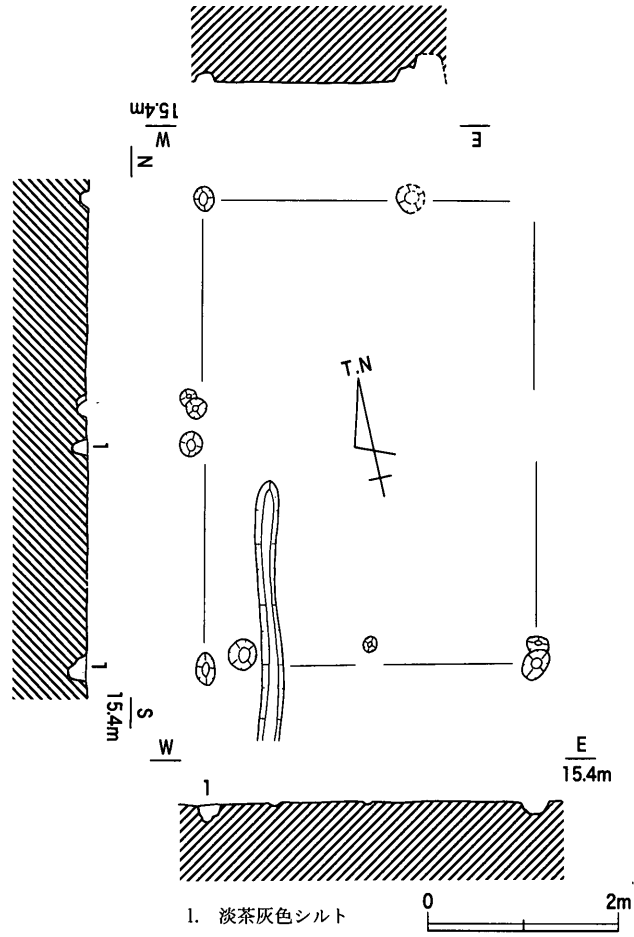
小区画ｂの東半部中央に位置する，２×３間（梁間3.7ｍ，桁行7.35ｍ，床面積27.19㎡）の側柱建物である。北側に庇を伴う。建物の主軸方位はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面形態は円形基調であり，底面のレベルは概ね一定している。なお，西辺部では柱筋上に建物柱穴以外のピットが多く認められるため，建て替えが行われた可能性がある。

ＳＢｆ46（第306図）

小区画ｂの東半部中央に位置する，２×２間（梁間3.5ｍ，桁行4.85ｍ，床面積16.97㎡）の側柱



第305図　SBf45平・断面図（1/80）



第306図　SBf46平・断面図（1/80）

建物である。建物の主軸方位は，N－13°－Eである。柱穴は円形ないし楕円形プランであり，底面のレベルはほぼ一定している。ただし，南辺部の中間柱は規模が小さく浅い。

5．区画6

(1) 小区画の配置

Ⅲ－37・7区で検出した建物群と，その周囲を囲繞する区画溝からなる。北辺をＳＤf99，東辺をＳＤf100，南辺をＳＤf84で画されている。西辺については明確ではないが，近世～近代のＳＤf88よりも西側（Ⅲ－2区）では中世後半のピット群が検出されていないため，この付近が西限であるのはほぼ間違いなく，さらに推測すれば破壊された中世後半の溝が存在した可能性もある。その範囲は東西46m，南北64mを測る。各区画溝とも比較的大規模である。さらに区画内を南北に延びるＳＤf81とＳＤf82によって，この区画は西側の小区画ａと，東側の小区画ｂに細分される。

ＳＤf84（第308～310図）

Ⅲ－6・7・38区で検出された溝である。中世前半のＳＤf18の南肩部を切り込んで開削されてお

第307図　区画6概略図（1/500）

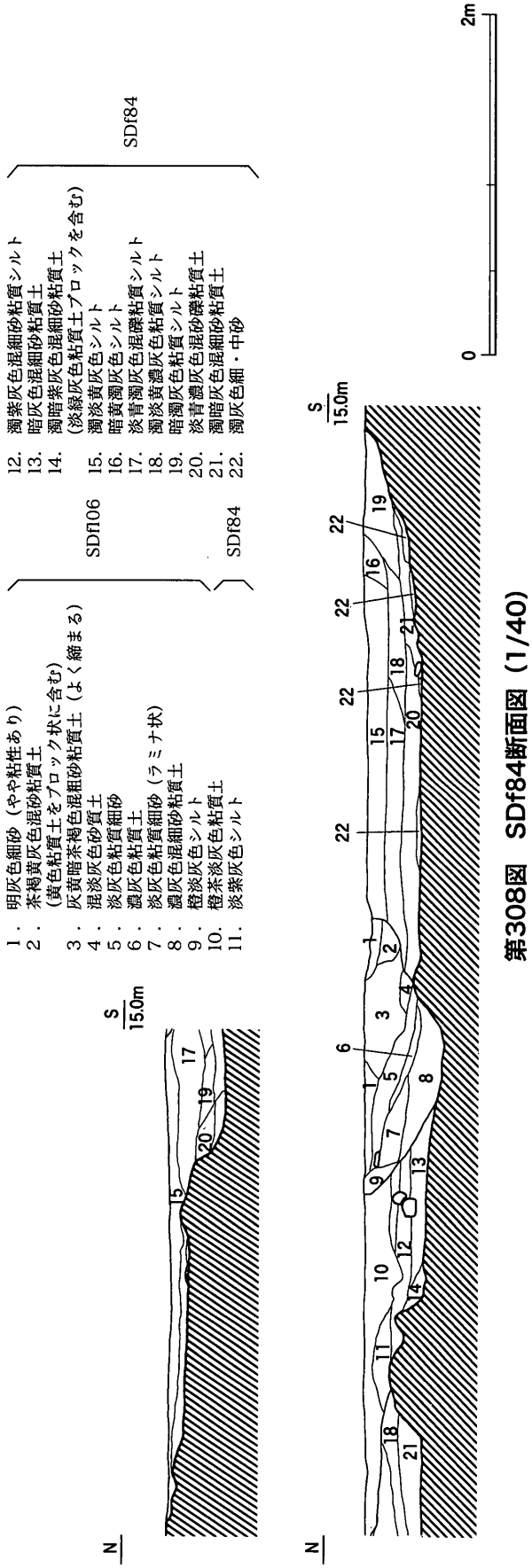
り，ＳＤf81・83・85が繋がる。検出した総延長は未発掘部分も含めて108ｍに及ぶ。主軸方向はＳＤf83との分岐点より東側でW－10°－Nと周囲の条里型地割と同じ方向の流路であるが，分岐点より西側でW－13°－Nであり，やや北に偏した方向となっている。規模は幅3.0～3.7ｍ，深さ0.4ｍを測り，断面形態は浅い逆台形を呈する。埋土は，黄灰色系のシルトを主体とした上層と，灰色系の粘質土を主体とした下層に大別できる。恒常的な流水状態を示す砂層は下層の最も下位の層位（第308図第22層）でわずかに認められる程度である。ＳＤf83との分岐点の土層堆積状況については，後述する。

遺物はコンテナ２箱分出土した。主な遺物としては，土師質土器擂鉢・火鉢・把手付鍋・鍋，楠井産

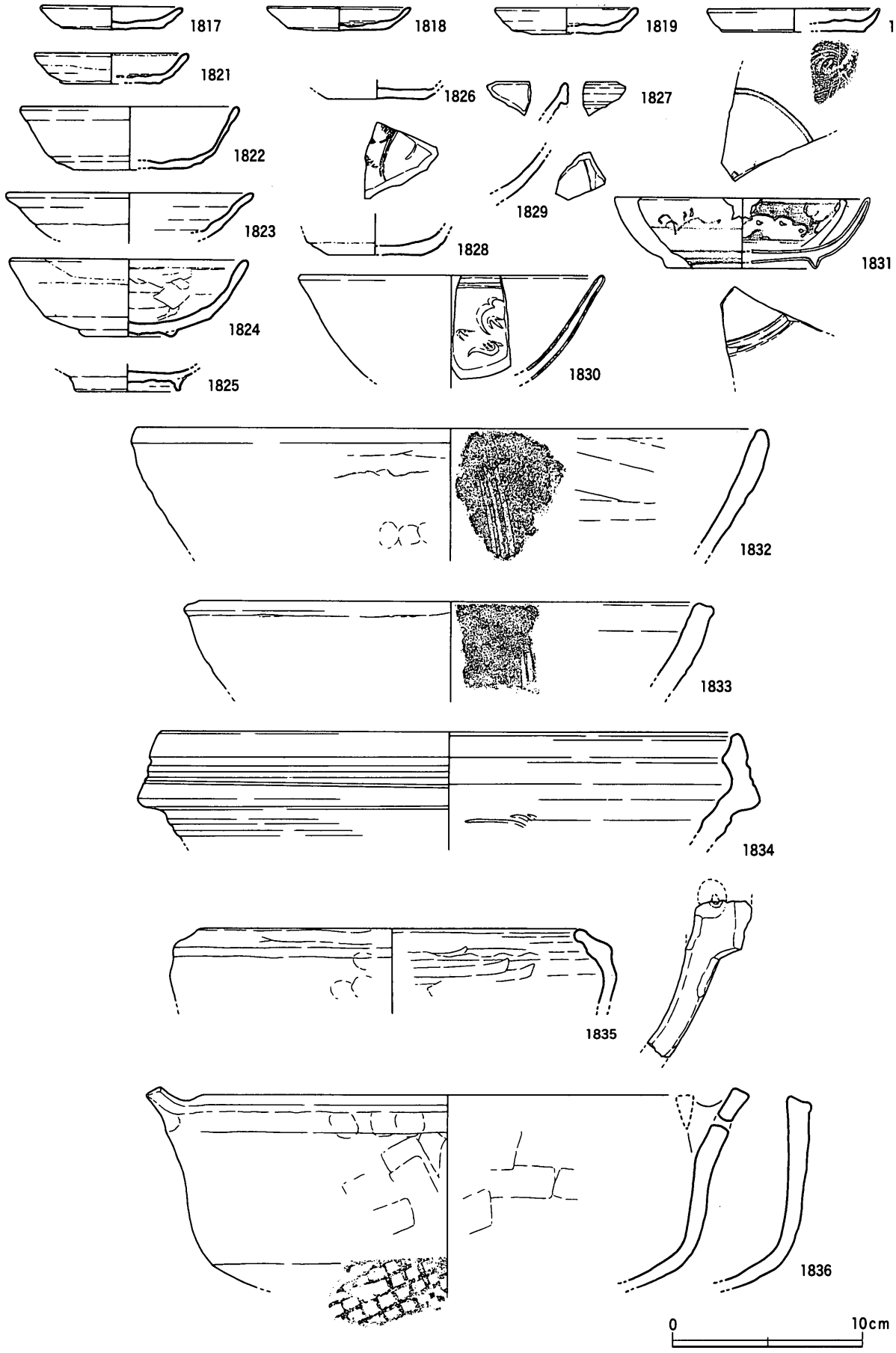
擂鉢，備前焼擂鉢・四耳壺・甕など中世後半の土器群を主体として，中世前半の土師質土器小皿・杯，十瓶山窯産須恵器小皿・椀，吉備系土師質土器椀，白磁碗，青磁皿・碗が少量出土している。これらは直接的な切り合い関係にあるＳＤf18からの混入と考えられる。また，近世の肥前系染付皿も出土しているが，これはＳＤf84を切り込むＳＤf106からの取り上げ時の混入と考えられる。以下，中世後半の土器群について，記述する。他の遺物は観察表を参照されたい。

1832は楠井産擂鉢ＢⅡ形式である。口縁部外面の回転ナデが弱いため，口縁端部は丸く太く収まる。**1833**は非楠井産の土師質土器擂鉢である。口縁端部は外側にツマミ出されたような形態をもつ。**1834**は間壁編年Ⅴ期後半の備前焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張した幅広の縁帯をもち，外面に２条の沈線を施す。口縁部内面には内傾する凹面をもつ。卸し目は一部が遺存するのみであるが，左上がりに施され，上端は大きく左水平方向にカーブする。**1835**は退化した鍔形の縁帯をもち，口縁部は比較的長く内傾する。一方**1836**は，口縁部と鍔状の縁帯が極端に短くなっている。把手に円孔を伴うのは通有であるが，その穿孔部から把手外面に径３㎜前後の小孔が認められるのは特異な形態といえる。**1837**は屈曲して内傾する口縁部をもつ。近世の所産である可能性もある。**1838**・**1839**は口縁部の屈曲が弱く，外面は口縁部から体部まで連続的に伸びる。内面は口縁部の板ナデと体部の板ナデが断絶しているため，頸部の屈曲が比較的明瞭である。**1840**・**1841**・**1843**は間壁編年Ⅳ期後半の所産とみられ，**1842**は間壁編年Ⅳ期前半に該当しよう。

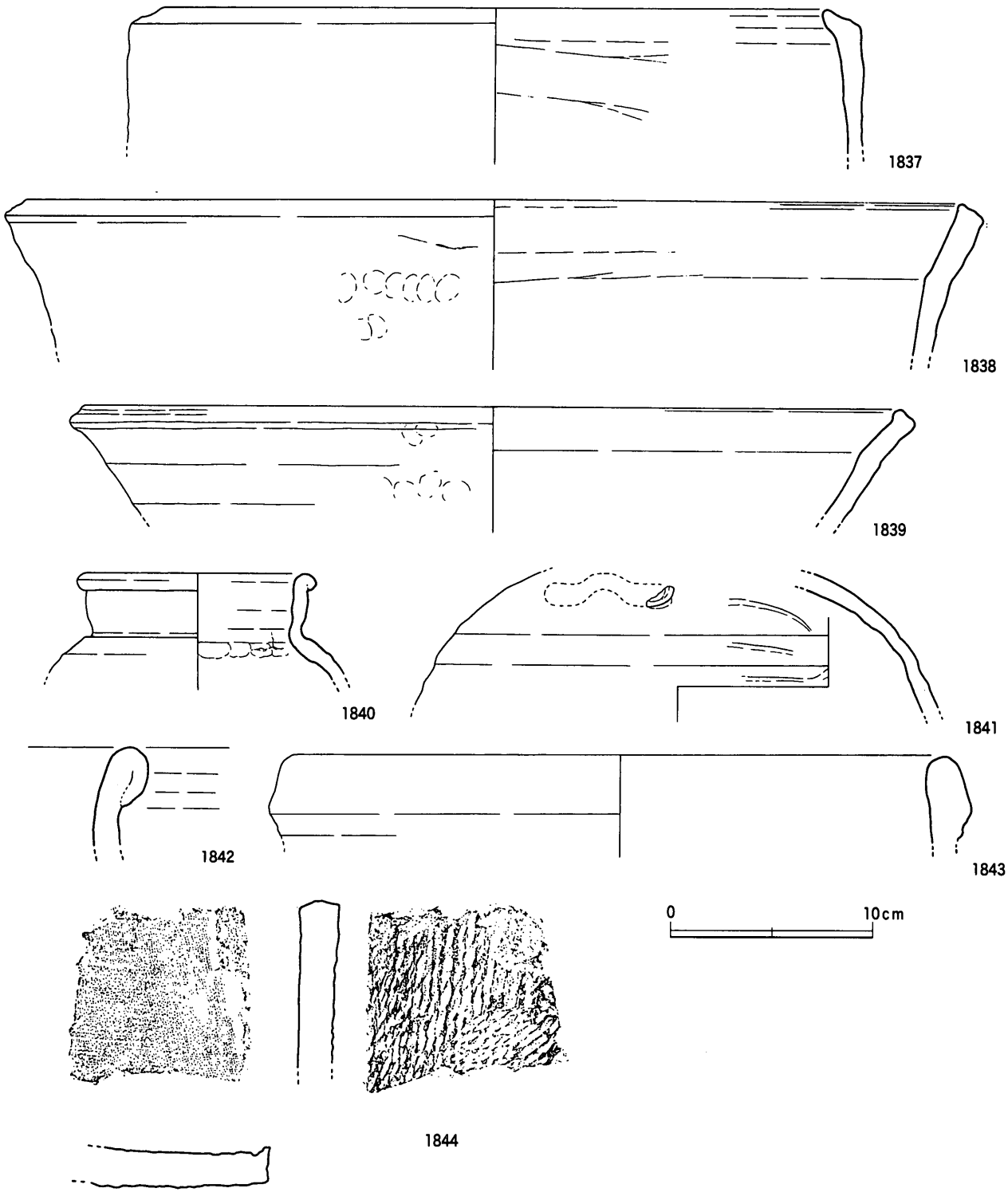
遺物の年代観を総合すると，楠井産擂鉢やⅣ期後半の備前焼から，15世紀中葉～16世紀初頭の遺物が一定量存在することは間違いないが，**1834**が最新の年代観（16世紀中葉～後葉）を示しており，最終埋没をこの年代に求めざるを得ない。ただし，より細かく年代を限定する場合，**1834**のもつ年代幅のどこが妥当な年代なのか，特定は難しい。



第308図　SDf84断面図（1/40）



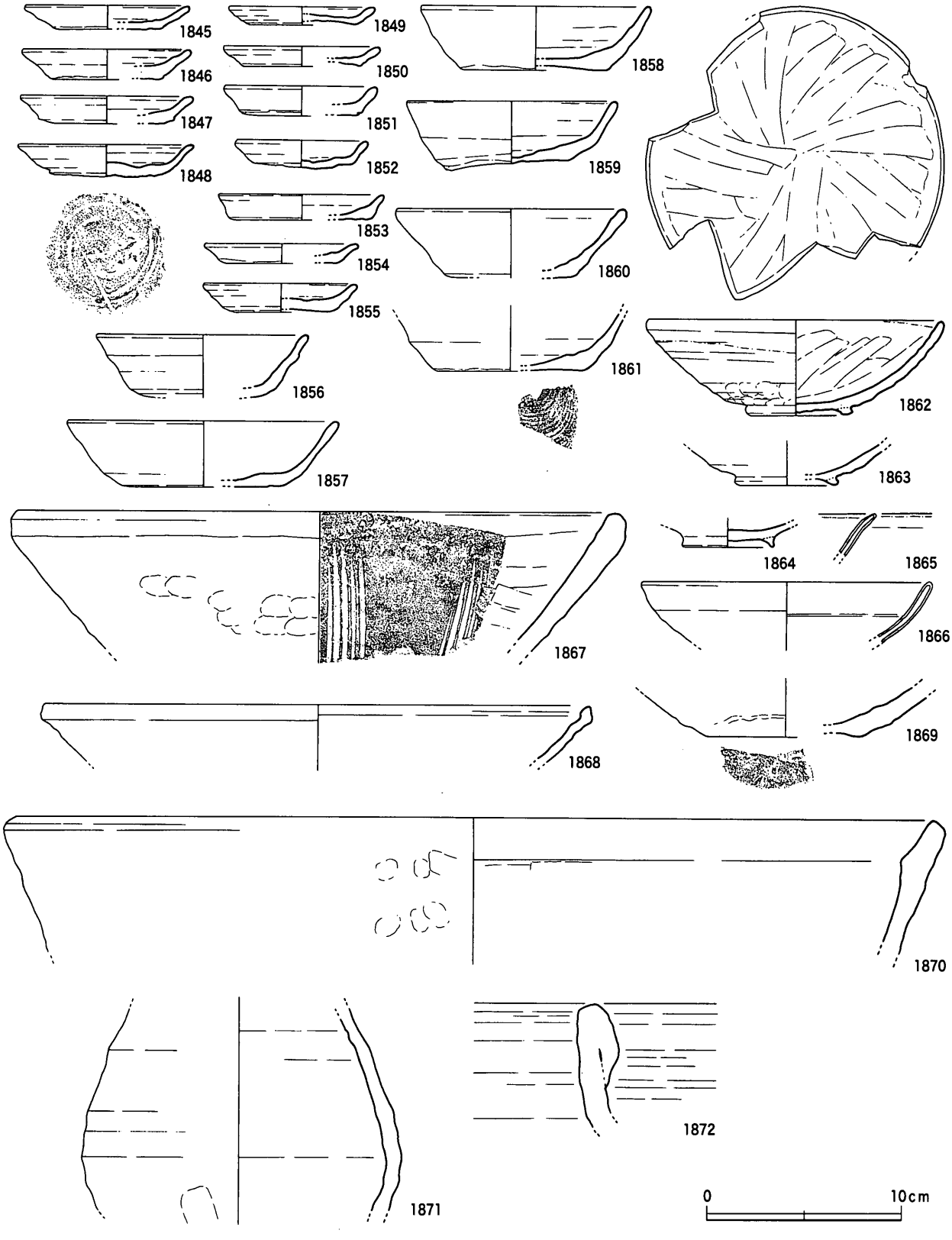
第309図　SDf84出土遺物（1）（1/3）



第310図　SDf84出土遺物（2）（1/3）

ＳＤf83（第311～313図）

Ⅲ－６・７区で検出された溝である。南端でＳＤf84に繋がり，北端でＳＤf88に切られる。したがって，未検出部分も含めて，総延長は67ｍとなる。主軸方向はＮ－10°－Ｅであり，条里型地割とほぼ一致する。規模は幅3.4～4.72ｍ，深さ0.74～0.8ｍを測り，断面形態は逆台形を呈する。底面は平坦であり，概ね13.9ｍ前後で一定している。埋土は２層に大別できる。上層は淡褐色系の細砂ないしシルトであり，特に下位層（第313図第31層）には一部粗砂も含んだラミナ状の堆積が顕著に認め

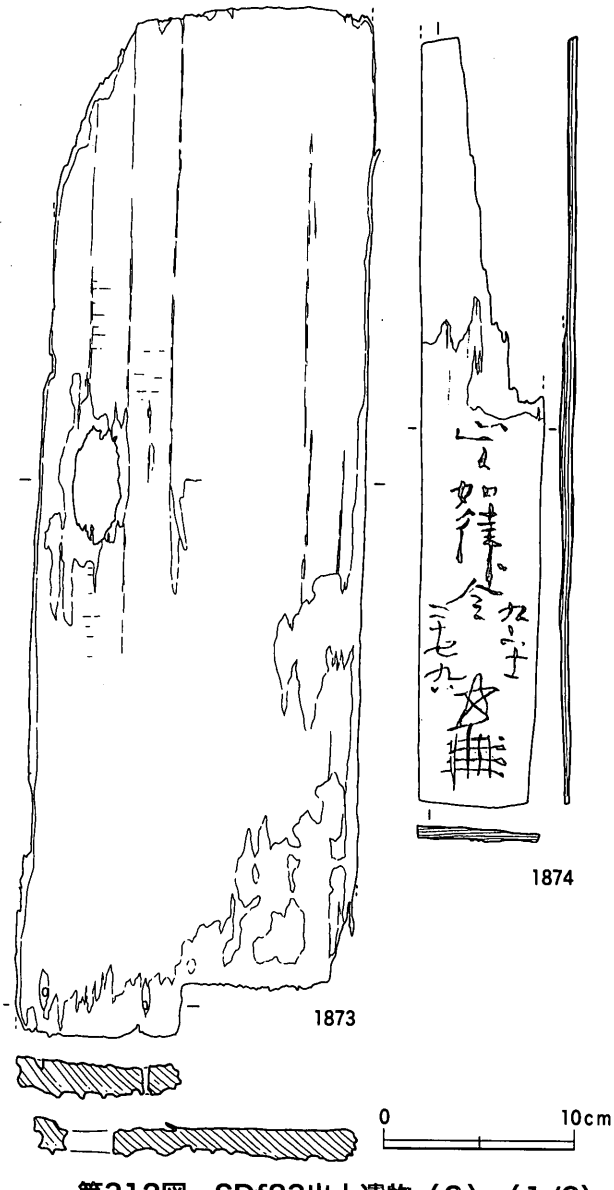


第311図　SDf83出土遺物（1）（1/3）

られた。下層は暗黒色系の粘土を主体としており，上位層（第313図第33～35層）中には細砂が褶曲しながらラミナ状に堆積しているのが認められた。下位層（第313図第20・37・39層）は，やや粘性に乏しいシルト状の土質をもつが細砂の混入はみられなかった。南端のＳＤf84との接続関係をみると上層はＳＤf84と連続的な関係にあり，両溝ともに同じ堆積状況下に置かれていたことがわかる。一方，下層については両溝の境で底面が若干盛り上がり（ＳＤf84北肩），その北側で0.6ｍ程度急激に落ち込むことから，断絶的で若干異質な状況を呈している。

以上から堆積状況を推測すると，当初は滞水状態で堆積が進行した（下層下位）が，埋没が進むにつれて滞水と流水を繰り返すようになり（下層上位），さらに流水状態が恒常的になり（上層下位），最終的には周囲からの流れ込みを主体として緩やかに埋没した（上層上位）と考えられる。ＳＤf84との関係でみると，当初はＳＤf84との分岐点の底面が盛り上がっていたこともあり，ＳＤf83への水の流れ込みが緩やかで，かつＳＤf83底面の勾配がないことから滞水していたが，両溝の埋没が一定度進行して底面のレベルが連続的になると，直接ＳＤf84からの流水が通過するようになったものと考えられる。

遺物は各層から出土しているが，一括投棄を反映するようなまとまった出土状態ではない。ただ，下層から少量ながら木製品が出土していることが特筆される。中世後半の主な遺物としては，楠井産擂鉢（**1867**），土師質土器鍋（**1870**），備前焼壺（**1871**）・甕（**1872**），用途不明の板材（**1873**・**1876～1877**）・呪符木簡（**1874**）・漆器椀（**1875**）がある。**1867**は口縁端部外面を強くナデており，楠井ＢⅠ類にあたるものである。**1870**は頸部の屈曲が外面では極めて不明瞭であり，口縁部の長さも短く端部も鈍重な作巧である形態的特徴から，ＳＤｆ84出土の**1838**・**1839**よりも後出的な特徴を備える。**1871**は体部下半に最大径がある徳利形の細頸壺であり，おそらく16世紀後葉頃の所産と思われる。**1872**は，扁平に長く肥厚する口縁部をもつもので，口縁部外面には強い回転ナデによる段状のロクロ目が認められる。間壁編年Ⅳ期後半であろう。1874は下層より出土した呪符木簡である。「急々如律令　九ゝ八十一　二十七九八（八九七十二）」と墨書され，その下側に星印と結界を表す格子線が墨書される。上半部は折損ないし表面の摩滅によって文字の有無は確認できない。また裏面にも文字ないし墨書は認められない。樹種については，ヒノキの一種と同定されている（第４章第２節参照）。**1875**は外面に黒色漆，内面に赤色漆を塗っており，外面には赤色で草と思われる文様が描かれる。木取



第312図　SDf83出土遺物（2）（1/3）

りは横木取りである。**1878**は板材の中央に円形の穴を抜いた木製品が半折したものである。

以上から年代を想定すると，最新の遺物が**1871**と考えられ，また**1870**もこれに近い時期の所産であるとみられる。ＳＤf84で想定した年代に近い年代観といえるが，ＳＤf84と同様，より確実に年代を絞り込める遺物ではないことから，ある程度の幅の中でとどめておくしかないであろう。

これらの他，中世前半の遺物もかなり出土した。ＳＤf18・32の埋土を切り込んでいるため，これらの先行遺構からの混入とみられる。したがって直接的に遺構に伴う遺物ではないが，ＳＤf32からの混入とみられる土師質土器小皿（**1845～1848**）の存在が注意される。これらは口径8.4～8.9㎝を計り，比較的長く外傾する口縁部をもつ。底部外面のヘラ切りの方向は右方向（右方向）である。これらはＳＤf32出土の**1112・1113**と同じ系統の小皿とみられる。この他，東播系須恵器捏鉢（**1868・1869**）や口禿の白磁Ⅸ類皿（**1865**），同安窯系の青磁Ⅰ－１ｂ類碗（**1866**）などの存在が注目される。

(2) 小区画ａ（区画６－ａ）

ａ．区画範囲と区画施設

東辺をＳＤf81，南辺をＳＤf84で区画されている。西辺は上記したような状況から，概ね近世～近代のＳＤf97付近に比定できる。北辺については，ＳＤf88までとみることもできるが，ピット群がⅢ－37区のみに集中し，北側のⅢ－２区では全く認められないことを考慮すると，Ⅲ－37区北端が概ね北限に比定し得るのではないかと考えられる。以上を前提にすると，その規模は東西15.6ｍ，南北約34ｍを測ることになる。

ＳＤf81（第314図）

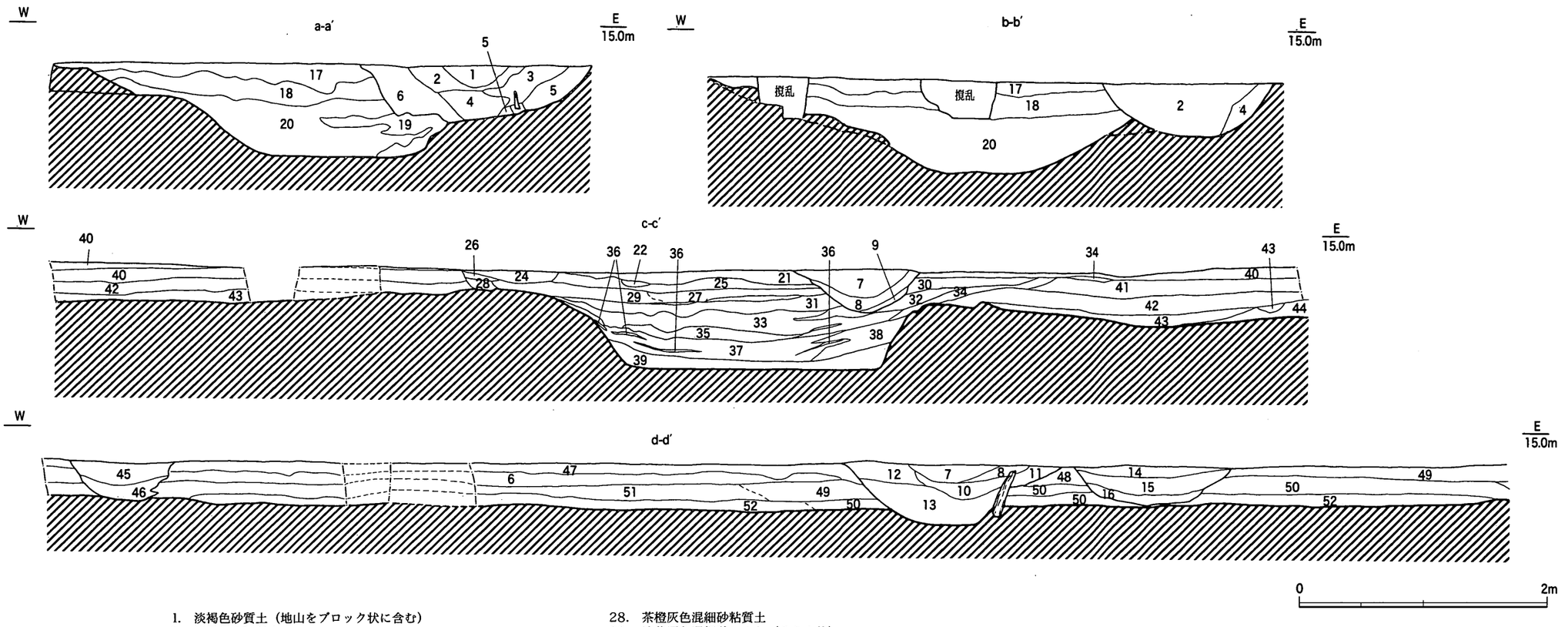
小区画ａの東辺部で検出された小溝である。４条の小溝が切り合っているが，同一流路が踏襲されているため，同一遺構とみなしておく。各流路の断面は浅いＵ字形を呈しており，埋土は各々単層である。出土遺物には，楠井産擂鉢（**1879**），土師質土器把手付鍋（**1880**）・鍋（**1882**），亀山焼甕（**1881**）がある。**1880**は16世紀代の所産とみて大過なく，**1879**もこの年代観と重複するものの上限は15世紀代に求められる。また**1881**は口縁部の上下方向への拡張がさほど顕著ではないため，16世紀代に含めるよりも15世紀代のうちに位置付けることができるものである。**1882**についても頸部の屈曲が外面も明瞭であり，16世紀に位置付けることは難しい。

以上から，ＳＤf81の最終埋没は16世紀代とみられるが，むしろより遡る時期の遺物が多いことや，都合３回の掘り直しが認められることを重視する必要があろう。小規模ながら15世紀代からの継続的な溝の維持が行われていた可能性を示すものである。

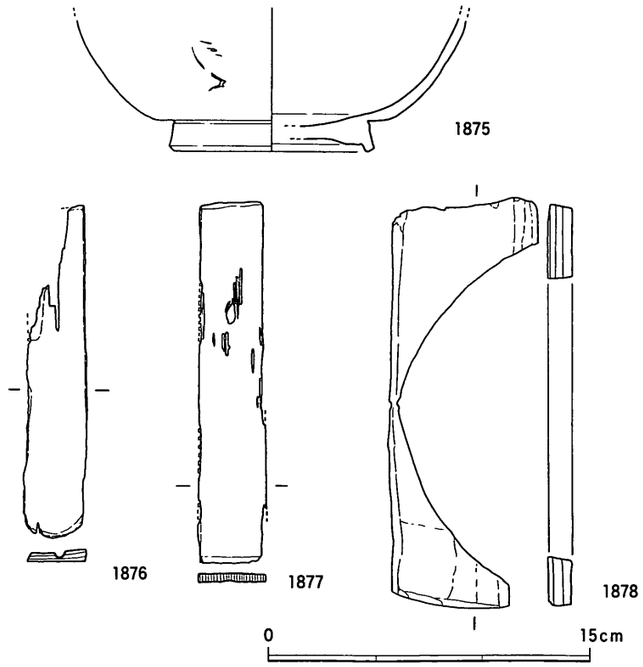
ｂ．建物

ピットの分布状況

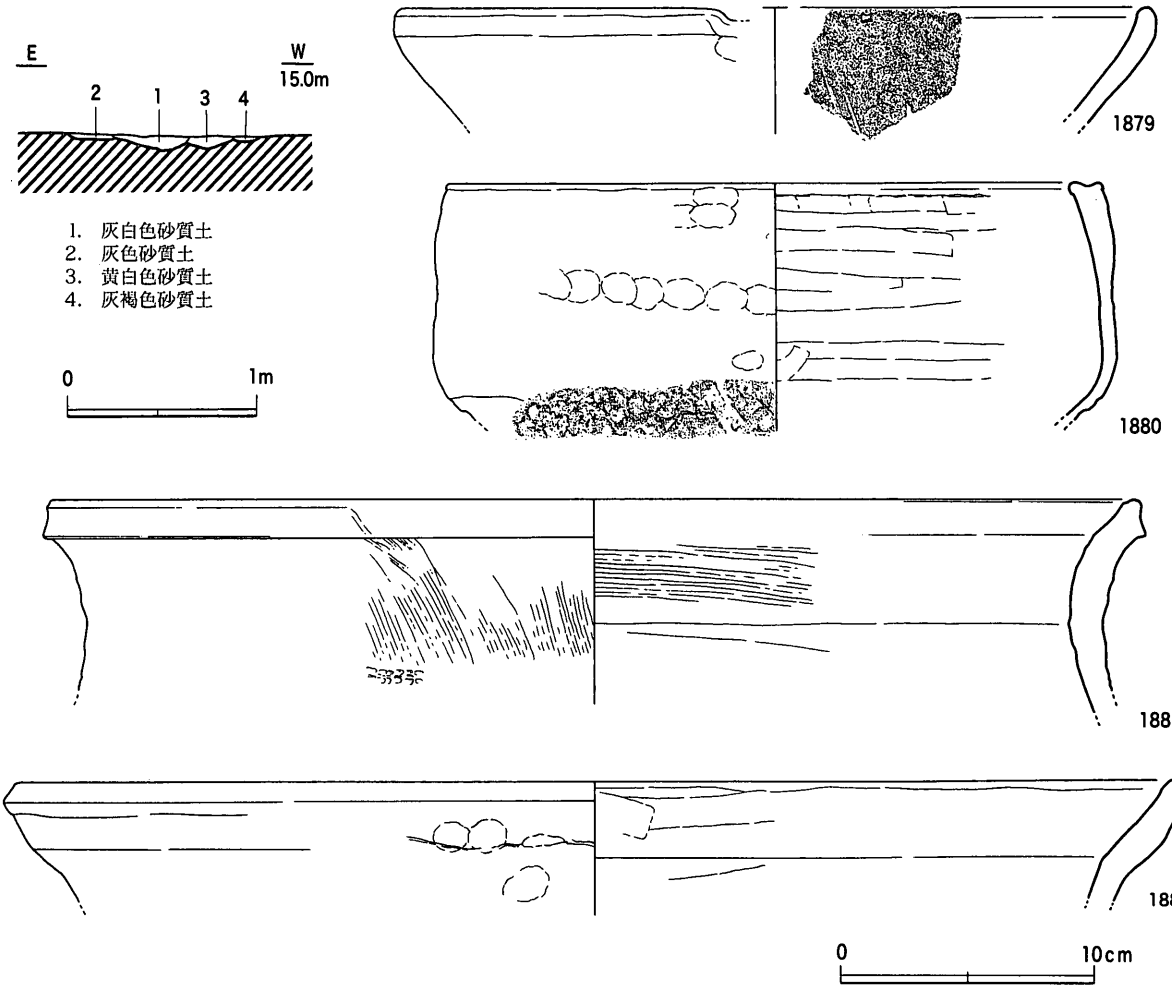
小区画ａで検出されたピットは498個であり，掘立柱建物として復元できたのは９棟（柱穴90個）



1. 淡褐色砂質土（地山をブロック状に含む）
2. 淡黒灰色砂質土
3. 淡灰褐色砂質土（淡褐色粗砂含む）
4. 淡黒色粘質土
5. 淡灰色細砂
6. 淡灰白色砂質土
7. 濁暗灰色混砂粘質土
8. 濁灰色混砂シルト
9. 濁淡黄灰色細～中砂（粘性あり）
10. 濁淡黄灰色混礫砂
11. 濁淡黄灰色砂質土
12. 濁灰色混粗砂ブロック粘質土
13. 淡緑灰色混砂粘質土（橙灰色粘質土ブロック含む）
14. 淡灰色混細砂粘質シルト
15. 灰色混砂粘質土
16. 濁淡黄灰色細砂（肩部の48が流れ込んだもの）
17. 淡褐色粗砂（固くしまる）
18. 暗灰色粘質土
19. 淡褐色細砂（木器出土属位）
20. 暗黒色粘土
21. 橙黄淡灰色粘質土
22. 橙茶灰色砂質土
23. 淡茶灰色砂質シルト（細砂多い）
24. 橙淡茶灰色混砂粘質土
25. 淡紫灰色シルト
26. 淡橙茶灰色混砂粘質土
27. 淡紫灰色粘質シルト
28. 茶橙灰色混細砂粘質土
29. 淡紫灰色混細砂シルト（ラミナ状）
30. 淡茶紫灰色シルト
31. 濁黄灰色～淡茶灰色細～粗砂（ラミナ状）
32. 淡茶黄灰色混細砂シルト（ラミナ状）
33. 濁橙暗灰色混砂粘質土
34. 白茶灰色粘質シルト（細砂がラミナ状に入る）
35. 黄灰色～淡灰色細～粗砂
36. 淡黄灰色細～粗砂
37. 茶暗灰～黒灰色粘質土
38. 暗濃灰色混細砂粘質土
39. 濁濃灰色粘質細砂
40. 濁橙灰色混砂粘質土
41. 茶灰色混砂粘質土（地山ブロック多く含む）
42. 淡茶灰色混砂粘質土（白色細砂ブロック多く含む）
43. 茶濃灰色混砂粘質土
44. 明濃灰色粘質細砂
45. 暗黄灰色粘質土（淡黄灰色砂質土をブロック状に含む）
46. 黄淡灰色細砂
47. 橙茶淡灰色粘質土
（淡灰色細砂に橙茶色粘質土ブロックが多く混じったもの）
48. 淡黄灰色中～細砂
（淡灰色粘質細砂がラミナ状に含まれる）
49. 淡茶黄灰色砂質シルト（細砂多い）
50. 淡黄灰色細砂をラミナ状に多く含む
51. 濁紫灰色混砂粘質シルト
52. 暗灰色混細砂粘質シルト



第313図　SDf83断面図（1/40），出土遺物（3）（1/3）



第314図　SDf81断面図（1/40），出土遺物（1/3）

と全体の18％であった。その分布はⅢ－37区全体に及ぶが，北側の調査区であるⅢ－2区では全く検出されておらず，分布範囲が非常に明瞭に示される。復元された掘立柱建物も複数が重複した位置にあり，ピットの多さと相俟って長期間屋敷地として占有されていた状況を看取することができる。

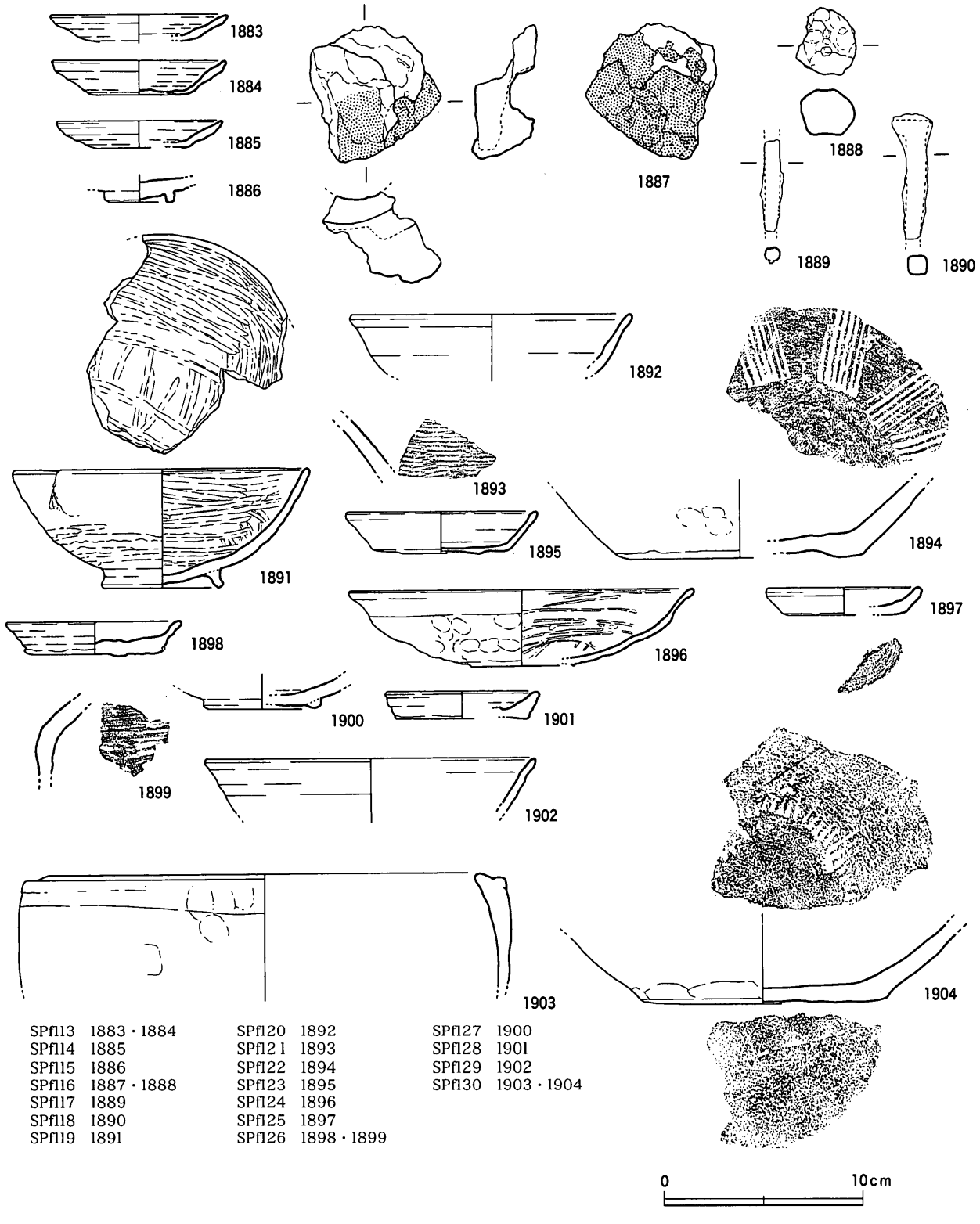
ピット出土の主要な遺物としては，土師質土器皿（**1883～1885**），白磁碗（**1886**），鉄釘（**1889・1890**）がある。**1883～1885**は外傾度の強い口縁部をもち，端部は嘴状に細くなる形態をもつ。こうした端部の作巧は，「口縁部→体部」ナデ技法により形成されたものである。**1886**は森田分類のE群皿か。

SBf47（第316図）

小区画a北端中央で検出された，1×2間（梁間2.55m，桁行5.0m，床面積12.75㎡）の側柱建物である。主軸方位はW－2°－Nであり，条里型地割よりも若干南に偏している。柱穴の平面形態は円形であるが，大きさや底面レベルは一定しておらず，特に東側梁間の柱穴が小規模である。

SBf48（第317・325図）

小区画a北端東部で検出された，2×3間（梁間4.04～4.2m，桁行5.7m，床面積23.48㎡）の側柱建物である。主軸方位はN－7.5°－Eである。柱穴の平面形態は円形基調であり，南東隅の柱穴

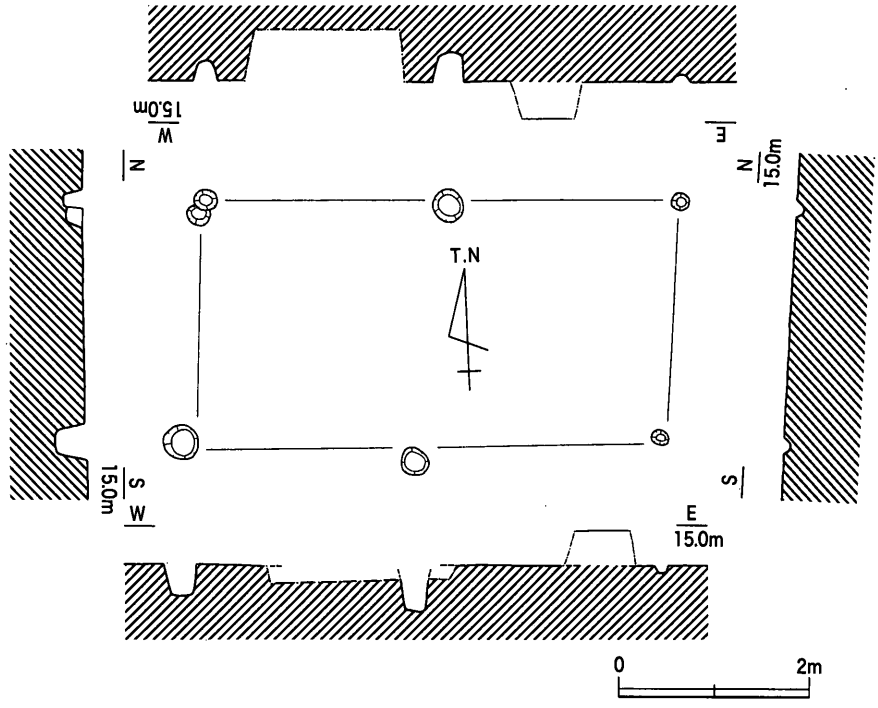


SPfl13 1883・1884
SPfl14 1885
SPfl15 1886
SPfl16 1887・1888
SPfl17 1889
SPfl18 1890
SPfl19 1891
SPfl20 1892
SPfl21 1893
SPfl22 1894
SPfl23 1895
SPfl24 1896
SPfl25 1897
SPfl26 1898・1899
SPfl27 1900
SPfl28 1901
SPfl29 1902
SPfl30 1903・1904

第315図　区画6ピット出土遺物（1/3，1887～1890は1/2）

が特に深いが，他の桁行方向の柱穴はほぼ一定の底面レベルをもつ。梁間の中間柱穴は他者よりも小規模であり，深さも極めて浅くなっている。したがって，上部構造（梁・屋根）を支える補助的な柱材が据えられていたと考えられる。

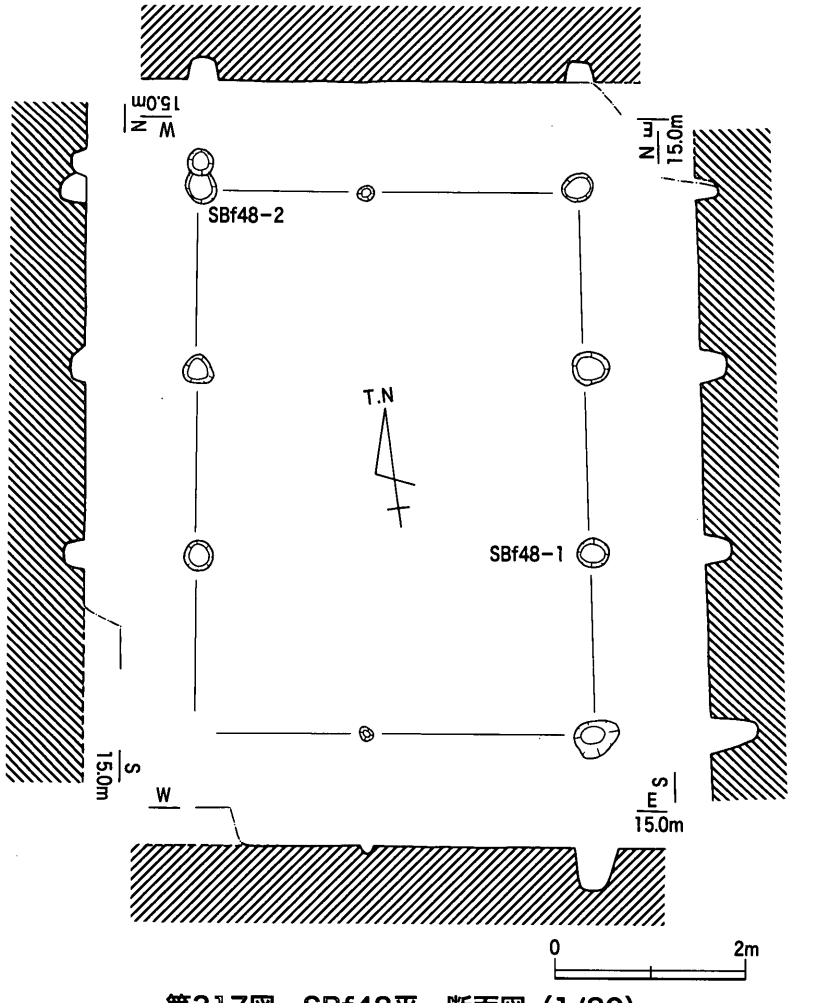
図示可能な出土遺物としては，土師質土器杯（**1908**）・鍋（**1909**）がある。**1908**は「口縁部→体部」ナデが施されており，区画３のＳＤf48下層と同時期か，体部の外傾度が強いことから若干下る時期の所産とみられる。**1909**は楠井ＡⅡ－２類に近い形態をもつ。これらは14世紀中葉～後葉頃の所産とみられ，建物の時期も一応ここに求めたい。



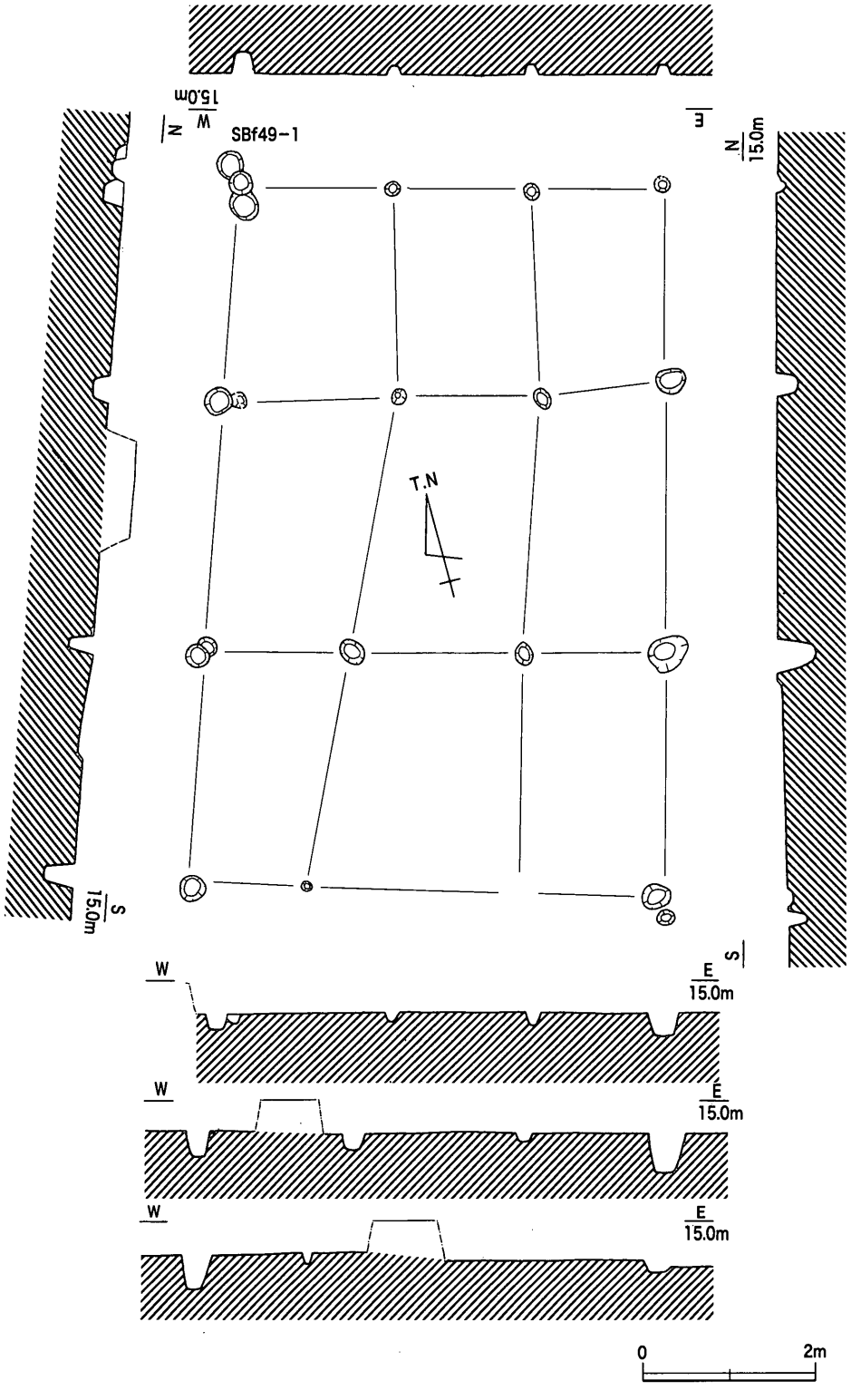
第316図　SBf47平・断面図（1/80）

ＳＢf49（第318・325図）

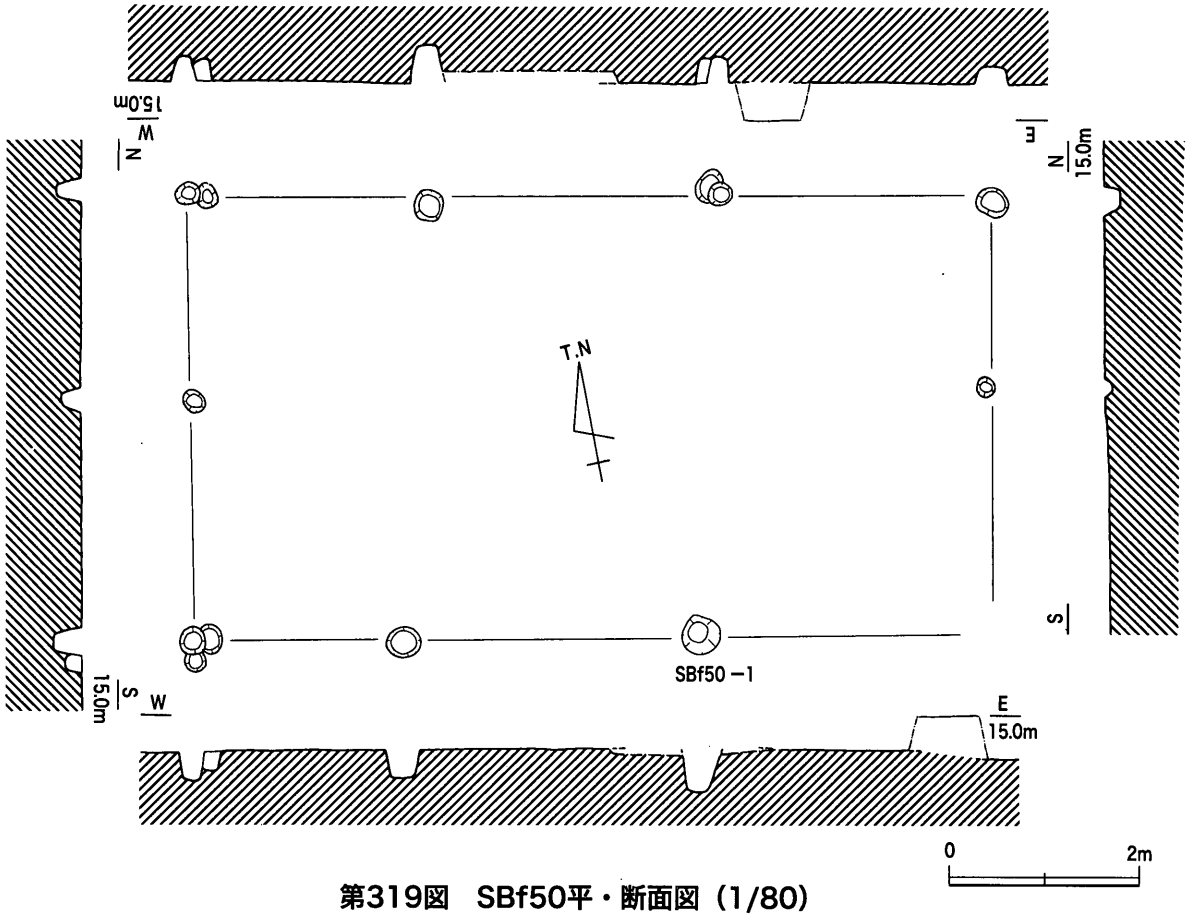
小区画ａ北端東部でＳＢf48・50と重複する，３×３間（梁間5.0～5.53ｍ，桁行8.0～8.15ｍ，床面積43.28㎡）の総柱建物である。北東隅の柱穴がＳＢf48北東柱穴を切り込んでおり，ＳＢf48→ＳＢf49という先後関係が確認できる。主軸方位はＮ－17.5°－Ｅである。柱筋は外側の４辺については直線的に揃うが，内部の柱穴は桁行き方向で極めて不揃いに並んでいる。また柱穴の大きさ・深さは，梁間方向の中間柱はいずれも小規模で浅いものである。このことから，内部の柱穴は束柱と考えられる。小区画ａの建物としては，ＳＢf51に次いで規模が大きく，構造的にも他者との間に格差がみられる。



第317図　SBf48平・断面図（1/80）



第318図　SBf49平・断面図（1/80）



第319図　SBf50平・断面図（1/80）

遺物には，土師質土器小皿（**1907**）がある。中世前半（13世紀）の所産であり，建物の時期を直接的に示すものではない。ＳＢf48との切り合い関係を前提とすると，14世紀中葉～後葉よりも後出することは確実である。

ＳＢf50（第319・325図）

ＳＢf48・49・51・52と重複して検出された，２×３間（梁間4.6ｍ，桁行8.48ｍ，床面積39.0㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－11°－Ｎである。南辺の柱穴がＳＢf51の柱穴を切り込んでおり，ＳＢf51→ＳＢf50という先後関係が確定する。柱穴は平面円形を呈しており，梁間の中間柱穴は浅いが他は概ね一定した深度をもつ。柱間距離は，桁行方向では西端１間分が若干短く，梁間方向では北１間分が短くなっており，ばらつきがある。

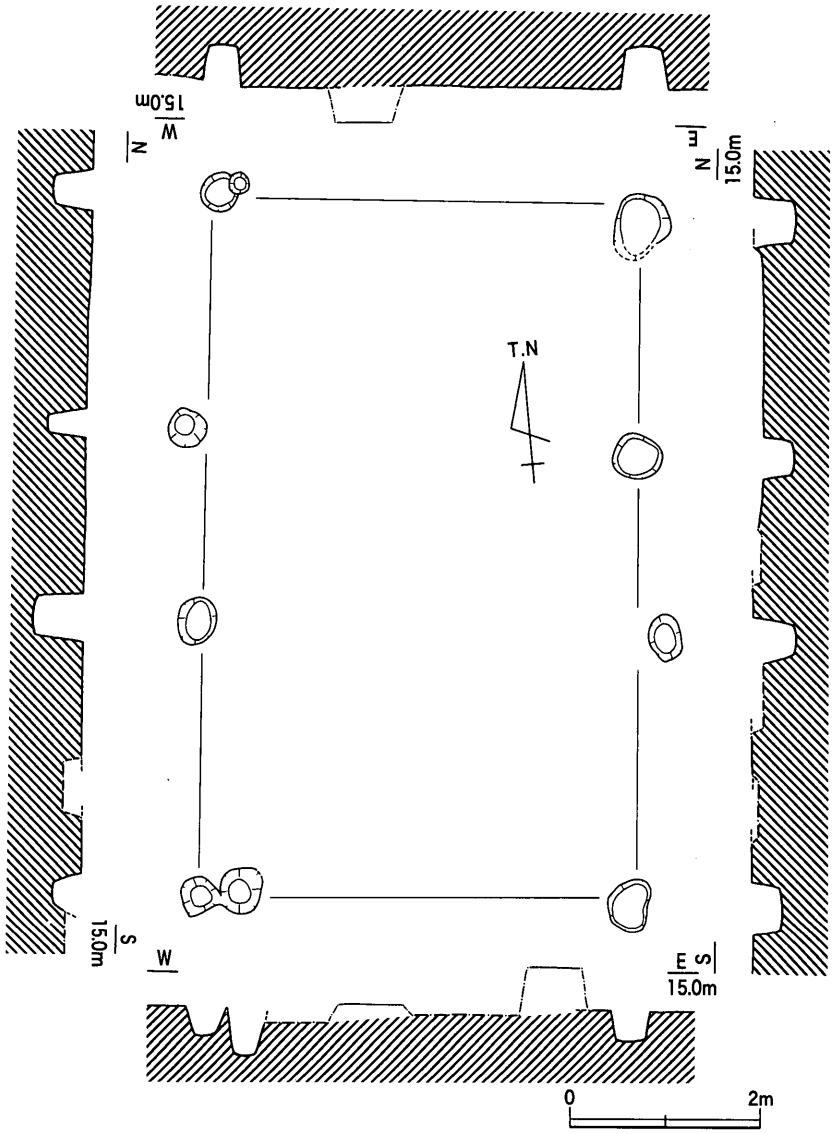
遺物には，備前焼壺（**1906**）がある。肩部よりやや下がった体部中位に振幅の大きな波状文を施しており，通常みられる沈線による文様帯は作られない。時期の限定は困難であるが，器面が強く酸化焔焼成されることから，間壁編年Ⅳ期ないしⅤ期であると考えられる。

ＳＢf51（第320・325図）

ＳＢf50・53と重複して検出された，２×４間（梁間5.4～5.65ｍ，桁行9.3～9.7ｍ，床面積52.51㎡）の建物であり，北半２間分は総柱構造となっている。小区画ａ中，最大の規模をもつ。主軸方位はＮ－２°－Ｅである。南東隅の柱穴は，隣接するＳＢf52の南西隅柱穴と同一である。柱穴の平面形態は，円形を呈する。

第320図　SBf51平・断面図（1/80）

出土遺物としては，中世前半の土師質土器小皿（**1905**）がある。



第321図　SBf52平・断面図（1/80）

ＳＢf52（第321図）

ＳＢf48～50と重複して検出された，１×３間（梁間4.57～4.63ｍ，桁行7.2ｍ，床面積33.12ｍ）の側柱建物である。主軸方位はＮ－６°－Ｅである。柱穴の平面形態は円形を呈しており，底面のレベルは一定していないものの，全体的に深く掘り込まれている。柱間距離は不揃いであり，北１間が2.5ｍ，北２間が2.0ｍ，南１間が2.8ｍを測る。

ＳＢf53（第322図）

小区画ａ西側中央部で検出された，２×２間（梁間3.92ｍ，桁行4.0ｍ，床面積15.68㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－5.5°－Ｎである。柱穴は円形プランを呈しており，大きさ・深さともにかなり一定している。柱筋も直線的であり，柱間距離も梁間1.96ｍ，桁行2.0ｍと揃っている。

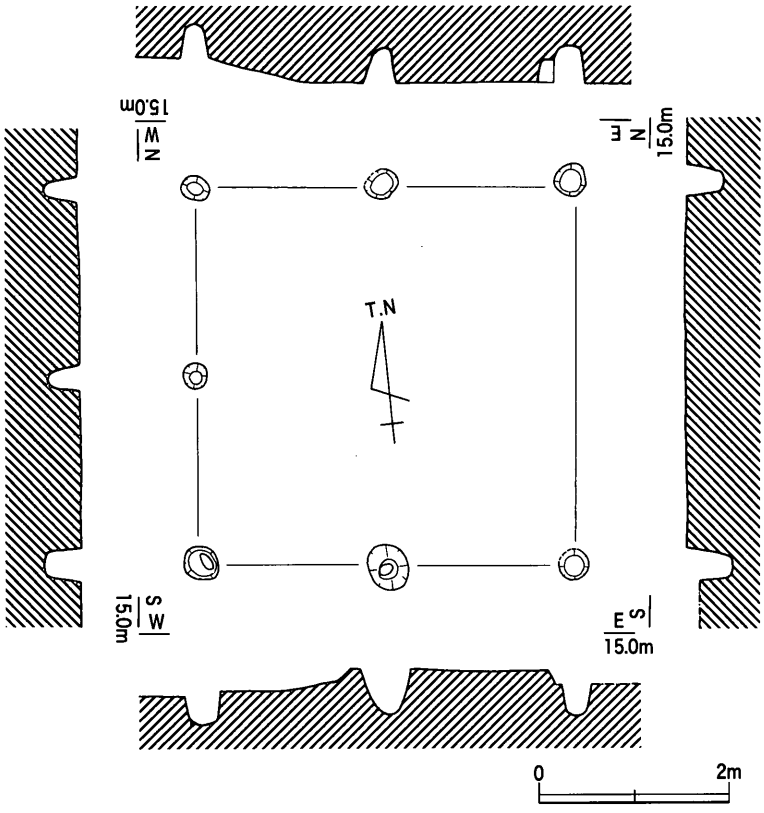
ＳＢf54（第323・325図）

小区画ａの南半部に位置する，２×２間（梁間2.32ｍ，桁行4.38ｍ，床面積10.16㎡）の側柱建物である。主軸方位はＷ－12.5°－Ｎである。柱穴は円形プランであり，梁間の中間柱穴は小規模である。

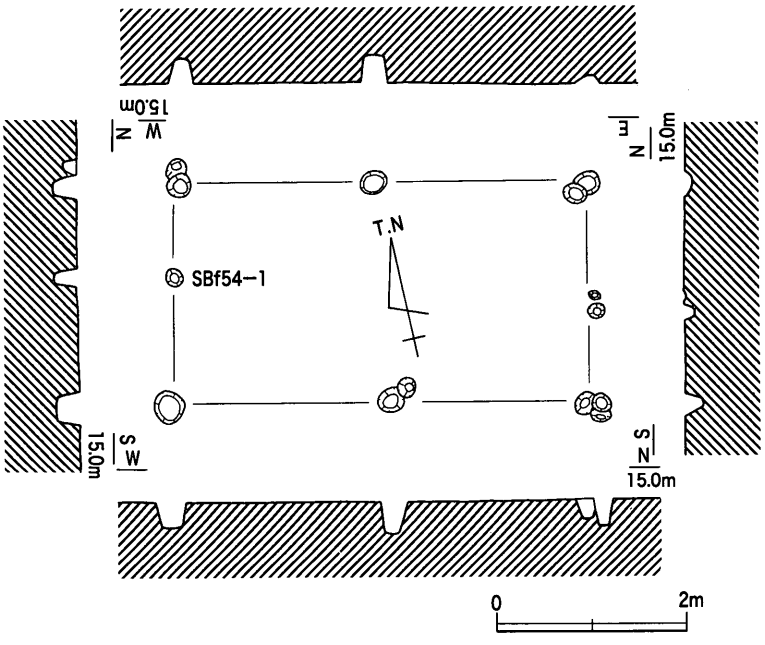
遺物は土師質土器足釜（**1910**）がある。短く上方に屈曲する鍔部をもち，鍔部直下の外面には爪形状の圧痕が顕著に認められる。楠井ＢⅢ類に該当するものであり，14世紀中葉～後葉の所産であると考えられる。

ＳＢf55（第324図）

小区画ａの南半部でＳＢf54の東に隣接して検出された，１×３間（梁間3.0～3.35ｍ，桁行5.65



第322図　SBf53平・断面図（1/80）



第323図　SBf54平・断面図（1/80）

m，床面積17.93㎡）の側柱建物である。主軸方位はN－11°－Eである。柱穴の平面形態は円形ないし楕円形であり，大きさ・深さともに一定していないが，柱穴は直線的に並ぶ。

c．土坑

SKf128（第326図）

小区画aの東端部で検出された。SBf52と重複した位置にあり，SBf52の柱穴を切り込むため，SBf52→SKf128という先後関係が確認できる。平面形態は不定形であり，残存長2.59m，幅2.5m，深さ0.13mを測る。遺物はごく少量出土したが，間壁編年Ⅱ期の備前焼甕（1911）を図示できるのにとどまる。

(3) 小区画b（区画6－b）

a．区画範囲と区画施設

東辺をSDf83，南辺をSDf84，西辺をSDf82・SAf10で区画されている。小区画a同様，ピット群の北限については明確ではないが，北側の調査区であるⅢ－4区においてピットが全く検出されていないことから，概ね小区画aと同様な位置にあると推測される。以上を前提とすると東西24m，南北36mの範囲となろう。

SDf82（付図5）

SDf81の東側2.3m（芯々距離）をN－8°－Eの方向でSDf81と平行して延びる小溝である。SDf81・82に挟まれた部分は，ピットのほとんど存在しない空閑地であることから，区画4で指摘できたような通路的な機能を果たしていた可能性がある。規模は幅0.35～0.75m，深さ0.08mを測る。

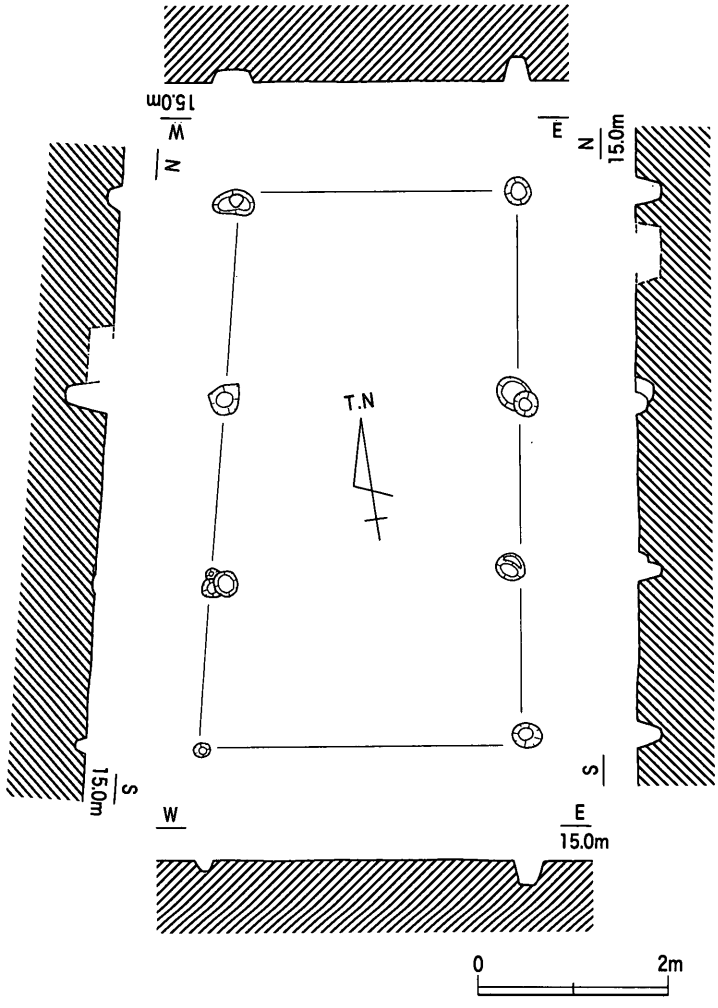
SAf10（付図5）

ＳＤf82の東側3.1ｍを平行してＮ－10°－Ｅの主軸方向で延びる柵列である。柱穴は６個確認でき，一部直線的に揃わない柱穴があるものの，概ね1.95ｍの間隔で並んでいる。埋土の土質・色調がＳＢf57・58に近似するため，中世後半の遺構と考えられる。

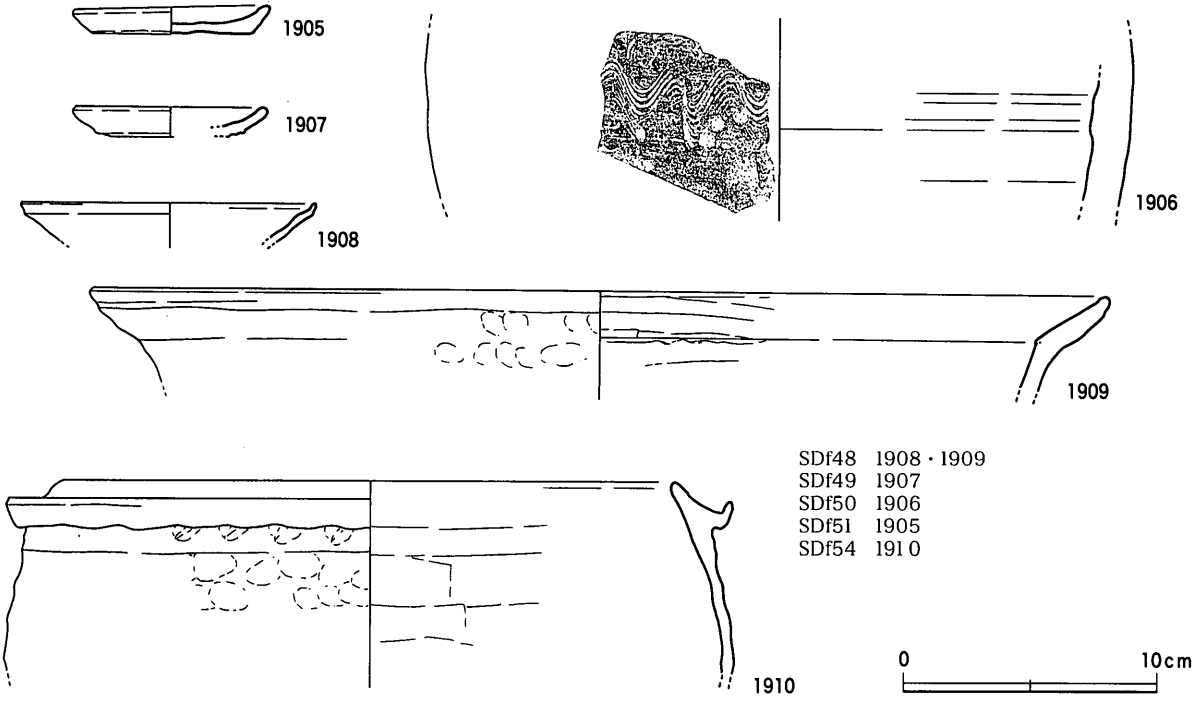
b．建物

ピットの分布状況

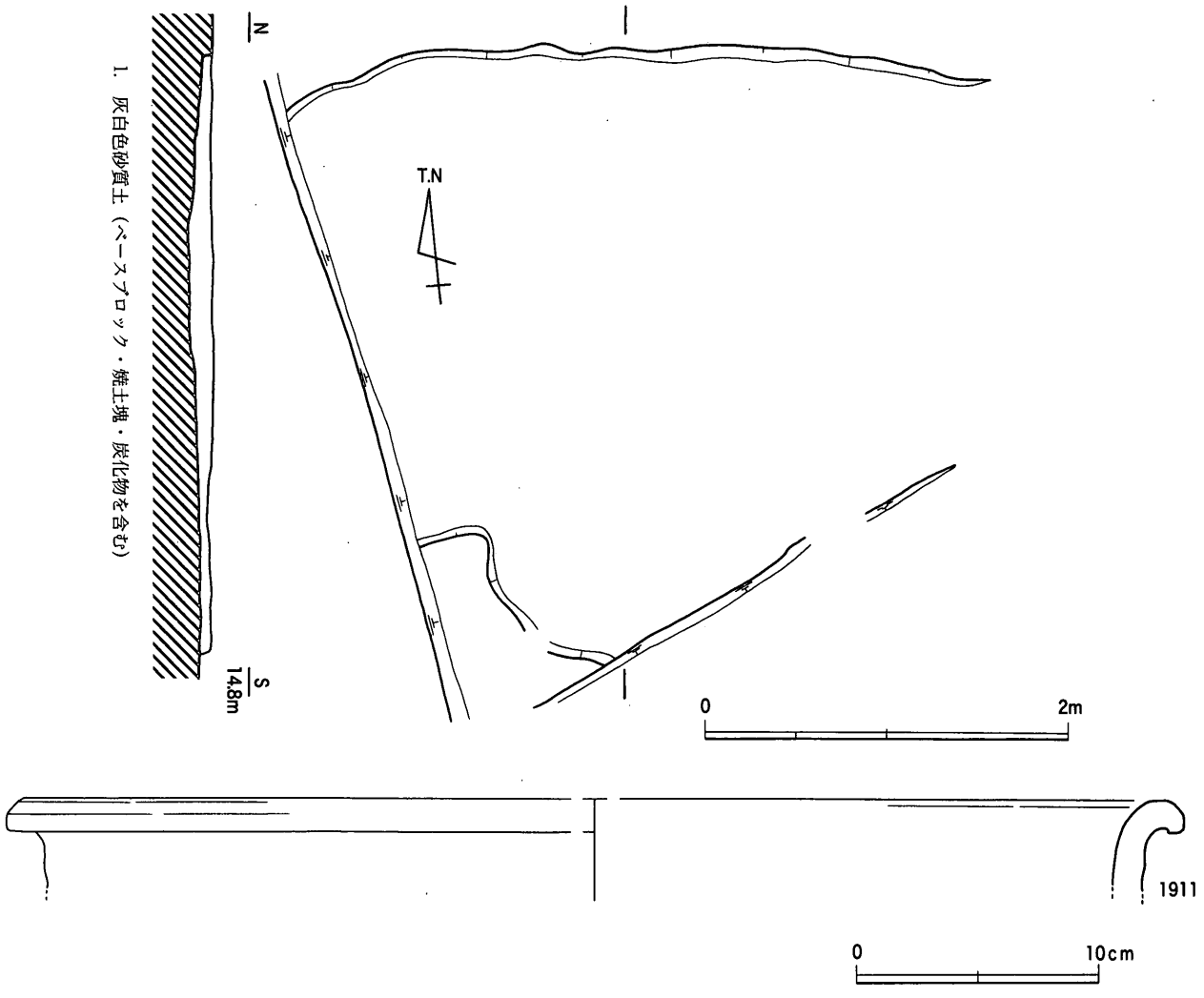
Ⅲ－７・37区では中世前半の建物群とピット（区画１）が多数検出されたため，中世後半のピットを抽出することはかなり困難である。単に出土遺物のみでは「混入」を排除できないため，僅かな埋土の差異も考慮して中世後半のピットを抽出した。ただし，埋土の峻別も調査時に十分に行えたとは



第324図　SBf55平・断面図（1/80）



第325図　区画6掘立柱遺物出土遺物（1/3）



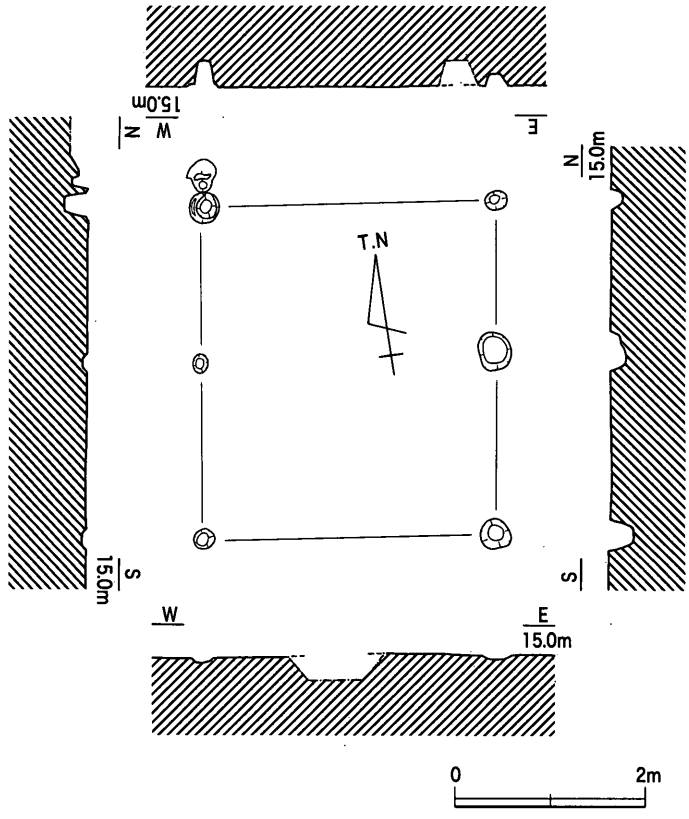
第326図　SKf128平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

いい難いため，一応の目安とせざるを得ない。この中で建物として復元できたのは３棟（柱穴29個）である。その分布状況は区画ａよりも散漫であり，特定の箇所に集中する傾向にはない。

主な出土遺物としては，土師質土器小皿（**1897**・**1898**・**1901**）・皿（**1895**）・擂鉢（**1894**・**1904**）・把手付鍋（**1903**）・鍋（**1899**），和泉型瓦器椀（**1896**），肥前系陶器碗（**1902**）がある。**1895**は口径が小さい浅手の器体をもつが，口縁・体部が直立気味に立ち上がり，杯に近い形態をとる。類例は少ないが，楠井窯の土器溜まり２などで比較的近い事例を指摘することができ，14世紀中葉～後葉頃に位置付けることができる。**1894**・**1904**は楠井窯産の可能性もあるが，口縁部形態が不明なため断定できない。**1904**の卸し目は，底部・体部の境の屈曲部にのみ残存しており，他の部位では使用による摩滅でほぼ完全に消滅している。時期の特定は難しいが，卸し目が密に深く施されることから，楠井Ⅱ期（14世紀前葉～15世紀前葉）の所産とみて大過なかろう。**1903**は短い口縁部と縁帯状の鍔部をもち，16世紀代に位置付けることができる。**1896**～**1901**は中世前半の遺物であり，周辺遺構からの二次的な混入であろう。**1899**は頸部を叩き目成形し，回転ナデ状の横ナデで調整する鍋であり，西村遺跡産の可能性がある。

ＳＢｆ56（第327図）

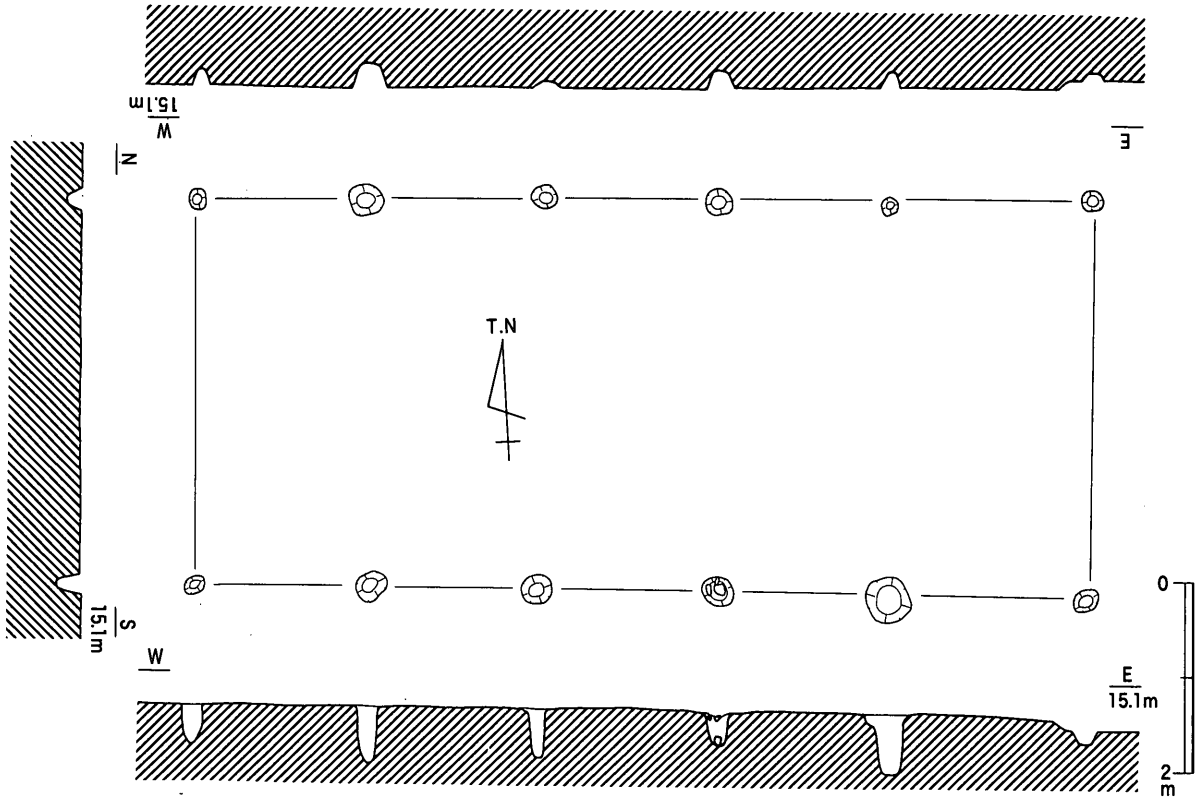
小区画ｂの北西部（Ⅲ－７・37区境）で検出された，１×４間（梁間3.0ｍ，桁行6.65ｍ，床面積19.95㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－９°－Ｅである。西辺北半部の柱穴を欠くため，桁行２間の可能性もあるが，東辺の柱穴が直線的に並ぶことから桁行４間として復元した。柱穴埋土が中世後半の遺物を出土したピットと共通するため，当該期とした。



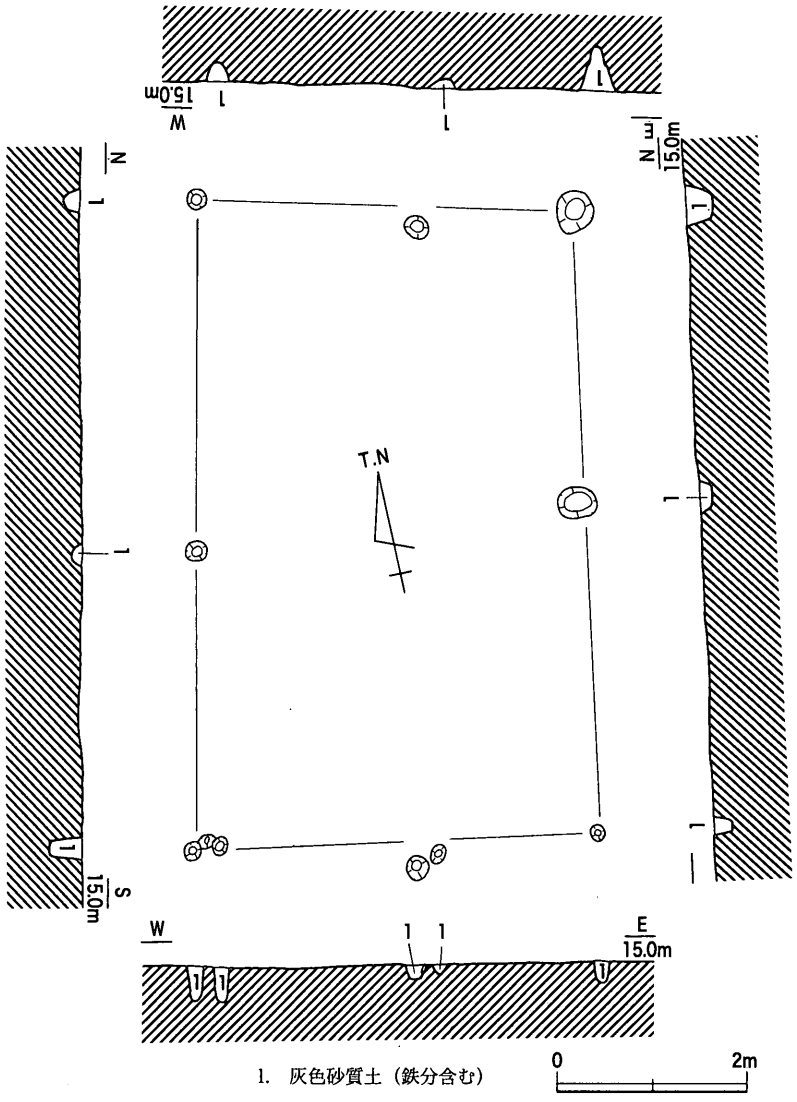
第327図　SBf56平・断面図（1/80）

ＳＢｆ57（第329図）

小区画ｂの中央部で検出された，２×２間（梁間4.0～4.25ｍ，桁行6.5～6.76ｍ，床面積27.33㎡）の側柱建物である。主軸方位はＮ－9.5°－Ｅである。梁間の中間柱穴の位置が柱筋からずれていること，また各辺が直角でないことか



第328図　SBf58平・断面図（1/80）



第329図　SBf57平・断面図（1/80）

ら，やや歪な平面形態となっている。また柱穴の深さも一定していない。柱穴埋土が中世後半のピットと共通するため，当該期に位置付けた。

ＳＢｆ58（第328図）

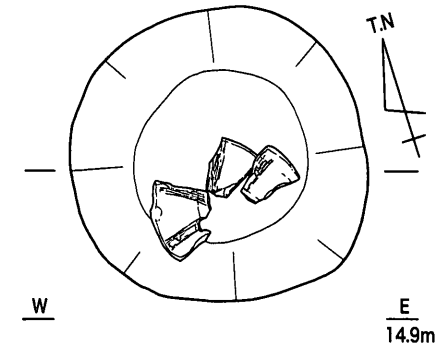
小区画ｂの南半部で検出された，１×５間（梁間4.1ｍ，桁行9.4ｍ，床面積38.54㎡）の側柱建物である。小区画ｂの中では最大規模の建物である。主軸方位はＷ－3.5°－Ｎである。東辺柱穴が中世前半のＳＤｆ19と重複した位置関係にあるが，発掘調査時には両遺構の切り合いを十分に検証することができなかった。しかし，柱穴埋土が中世後半のピットと共通するため，当該期に位置付けるのが妥当であると判断した。柱穴の平面形態は円形であり，柱穴の深さは南辺が北辺よりも深い。

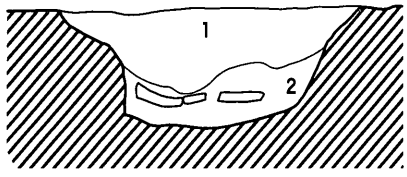
ｃ．土坑

ＳＫｆ129（第330図）

小区画ｂの南半部，ＳＢｆ58の北側で検出された。平面形態は円形，断面形態は肩部の緩やかな逆台形を呈する。規模は径0.77ｍ，深さ0.3ｍを測る。埋土は２層に分けられ，上層には基盤層のブロックが多量に含まれていた。これは，区画４での土坑の埋土と共通する。下層は暗灰色粘質土が堆積しており，上面で同一個体の瓦質擂鉢が３つの破片となって出土した。破片は人為的に据え置かれたような状態ではなく，出土位置と接合関係も対応していない。このため，土坑の機能に関わるものではなく，廃棄された状態を示すと考えられる。

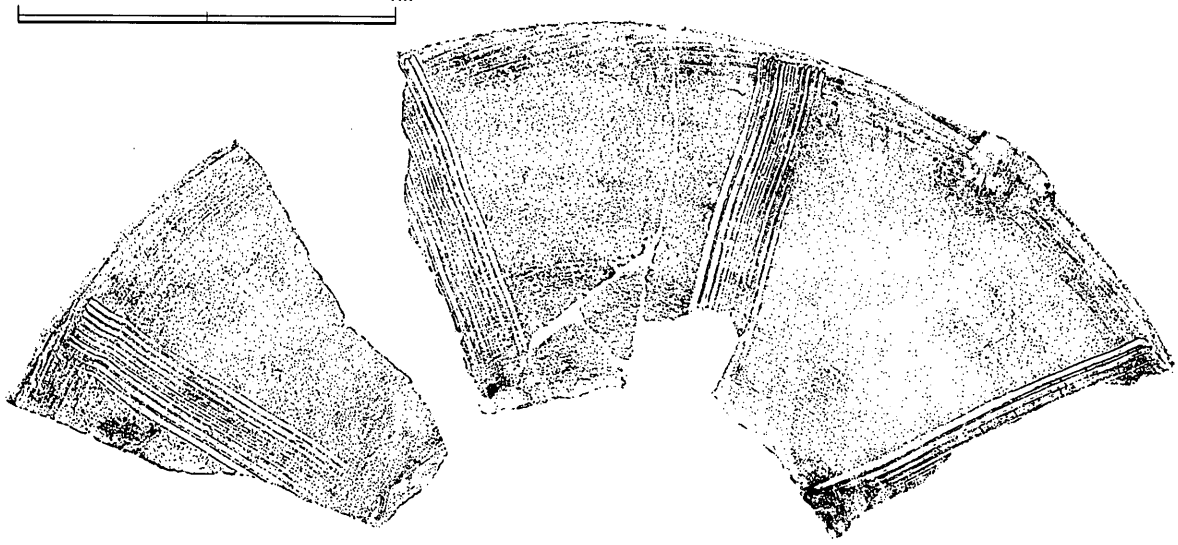
瓦質擂鉢（**1912**）は，突帯状でやや内傾する口縁端部をもつ。口縁部内面に粗いハケ目状の板ナデ調整が施され，これに後出する卸し目（10本/2.6㎝）が６方向に認められる。口縁部形態は楠井窯のＡⅣ類に近似するが，卸し目の本数と原体幅の対応関係が楠井窯では認められないバリエーションであり，楠井産ではないと考えられる。なお体部下半の卸し目は，使用による摩滅が認められる。

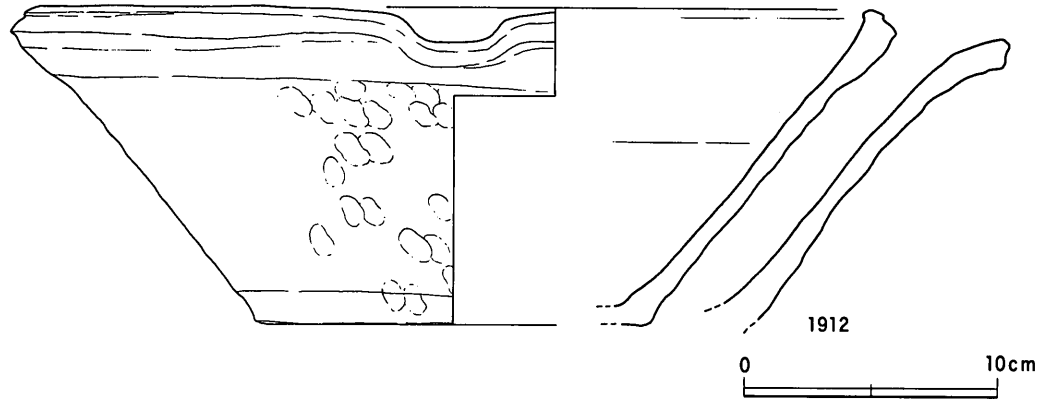




1　淡灰色砂質土
　(地山：黄色粘土をブロック状に含む)
2.　暗灰色粘質土

0　1m





0　10cm

第330図　SKf129平・断面図（1/20），出土遺物（1/3）

6．その他

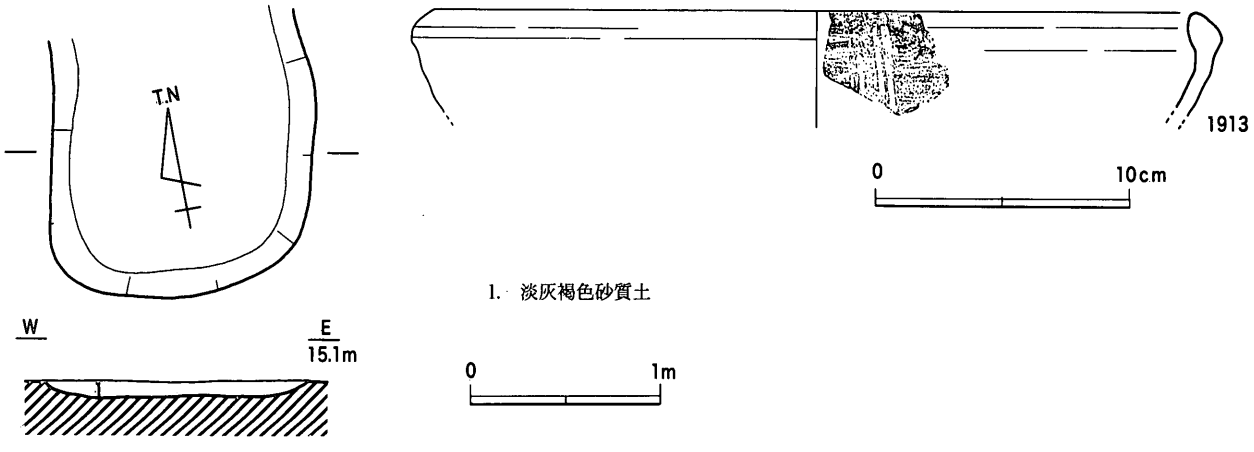
ＳＫf244（第331図）

Ⅲ－８区で検出された土坑である。北端部を近世～近代のＳＤf107に破壊されている。平面形態は隅丸長方形であり，断面形態は浅い皿形を呈する。規模は残存長1.5ｍ，幅0.76ｍ，深さ0.08ｍを測る。埋土は淡灰褐色砂質土の単層であり，埋土中から土師質土器擂鉢（**1913**）が出土している。口縁部が屈曲して内傾するタイプであるが，屈曲が弱く口縁部全体が肥厚気味になっており，新しい様相を示していると考えられる。おそらく16世紀代の所産であろう。

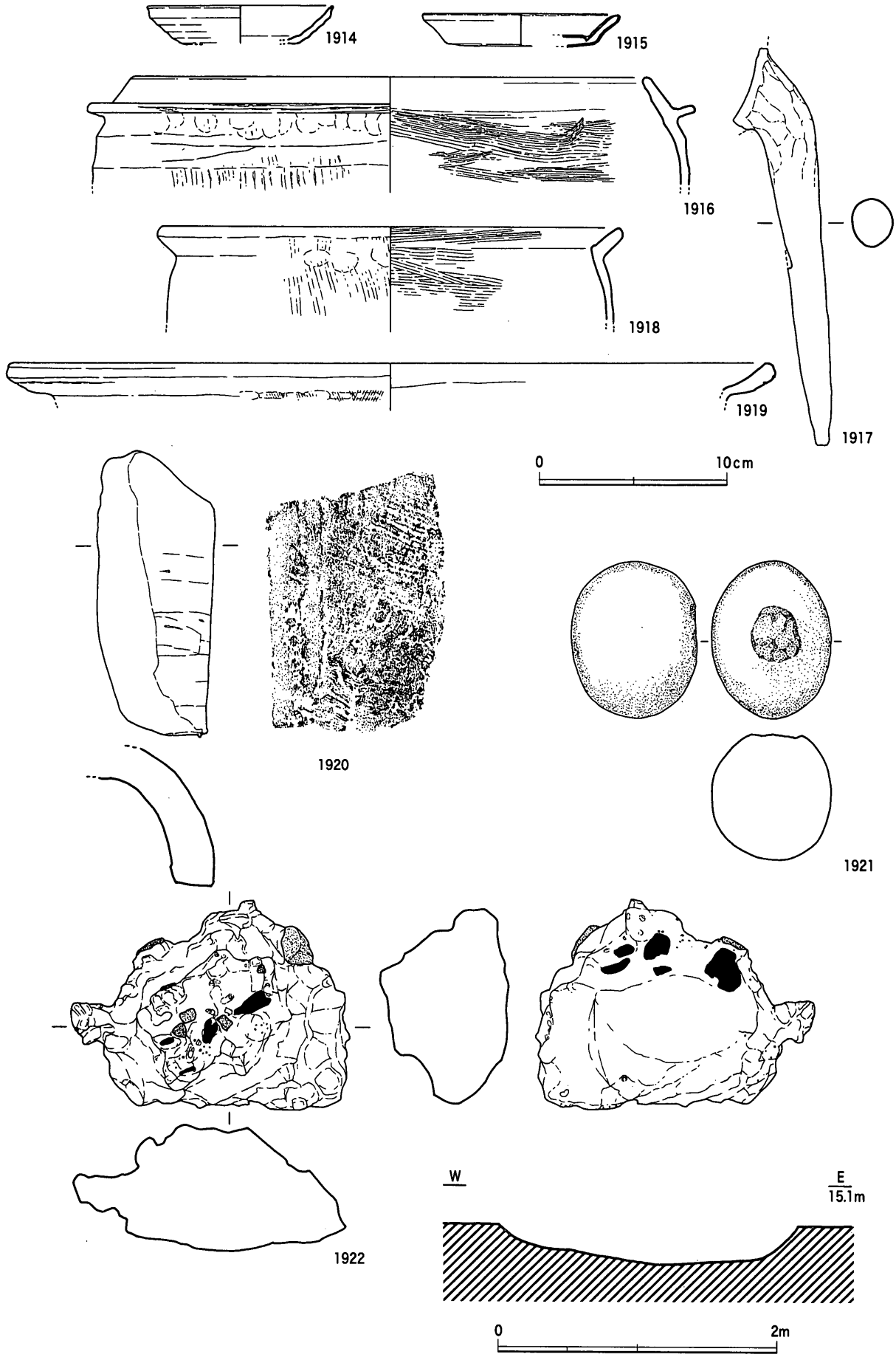
ＳＤf86（第332図）

Ⅲ－８区でＳＫf244に隣接して検出された。土坑状の長方形プランをもち，北端はＳＤf107に切られているが，南端部は明確に立ち上がる掘り込みをもつ。このため，土坑とした方が適切かもしれない。検出長7.1ｍ，幅2.12ｍ，深さ0.29ｍを測り，主軸方位はＮ－10°－Ｅである。

主な遺物には，土師質土器皿（**1914**）・足釜（**1916・1917**）・鍋（**1918・1919**），白磁皿（**1915**），丸瓦（**1920**），摩滅のある石器（**1921**），鉄滓（**1922**）がある。**1914**は「口縁部→体部」ナデ技法が認められる。口縁・体部の外傾度が強く器体も浅くなっており，区画３のＳＤf48下層出土例よりも後出する要素がみられる。14世紀中葉～後葉頃か。**1915**は横田・森田分類のⅨ類皿である。**1916～1919**は中世前半の遺物である。**1922**は小石・炭化物を多量に含む鉄滓である。



第331図　SKf244平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

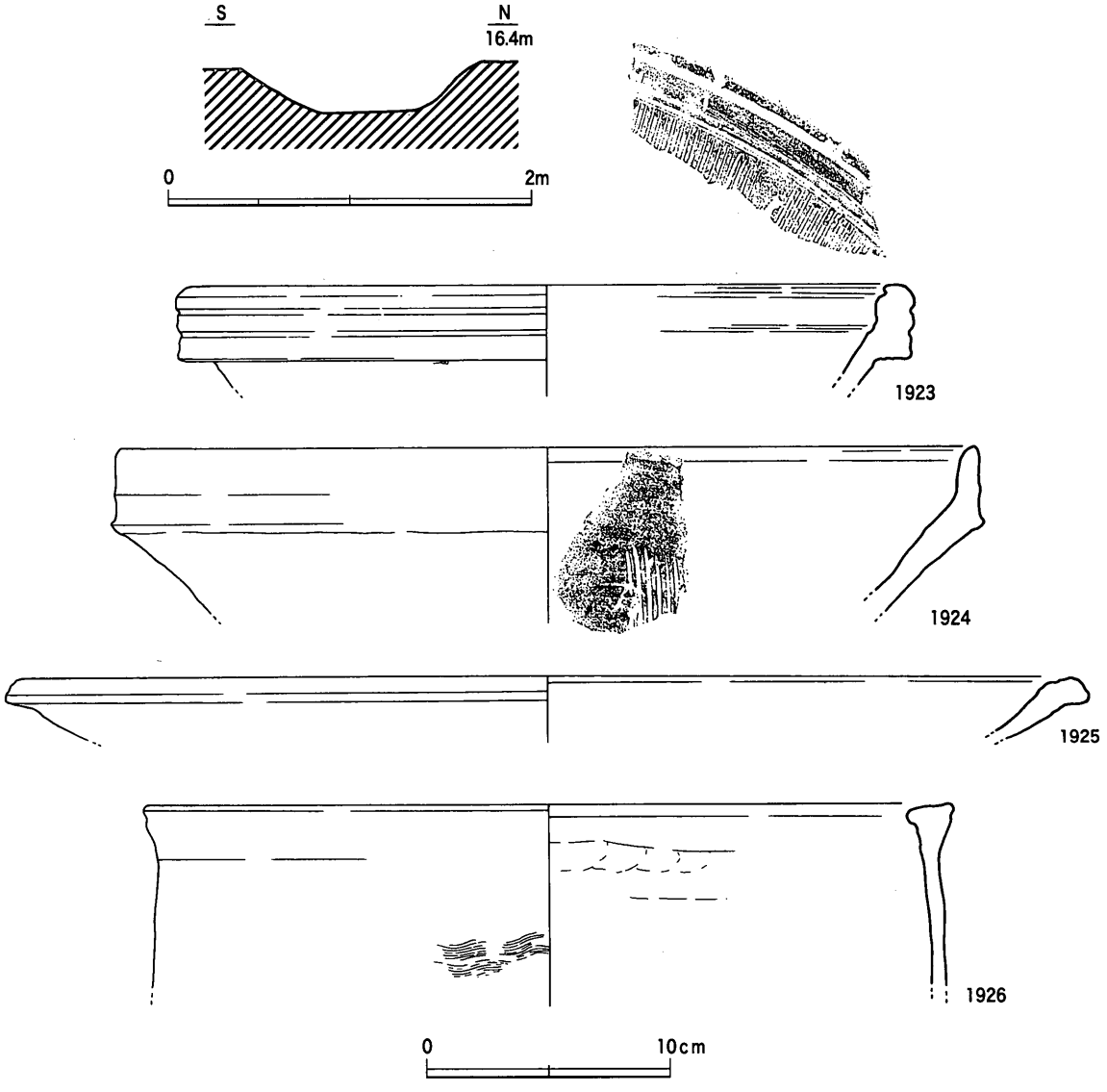


第332図　SDf86断面図（1/40），出土遺物（1/3，1921は1/4，1922は1/2）

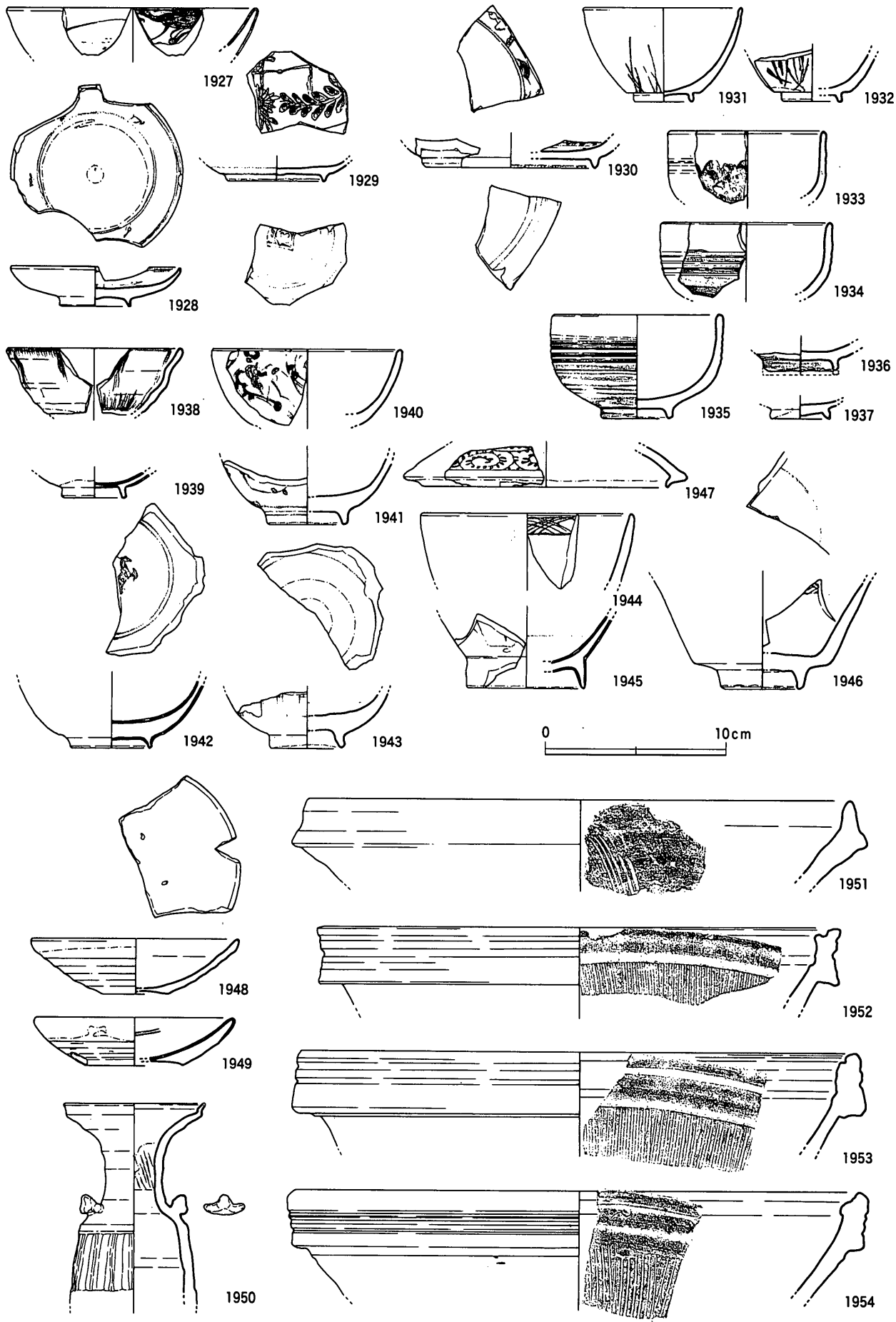
第５節　近世～近代の遺構・遺物

１．概要

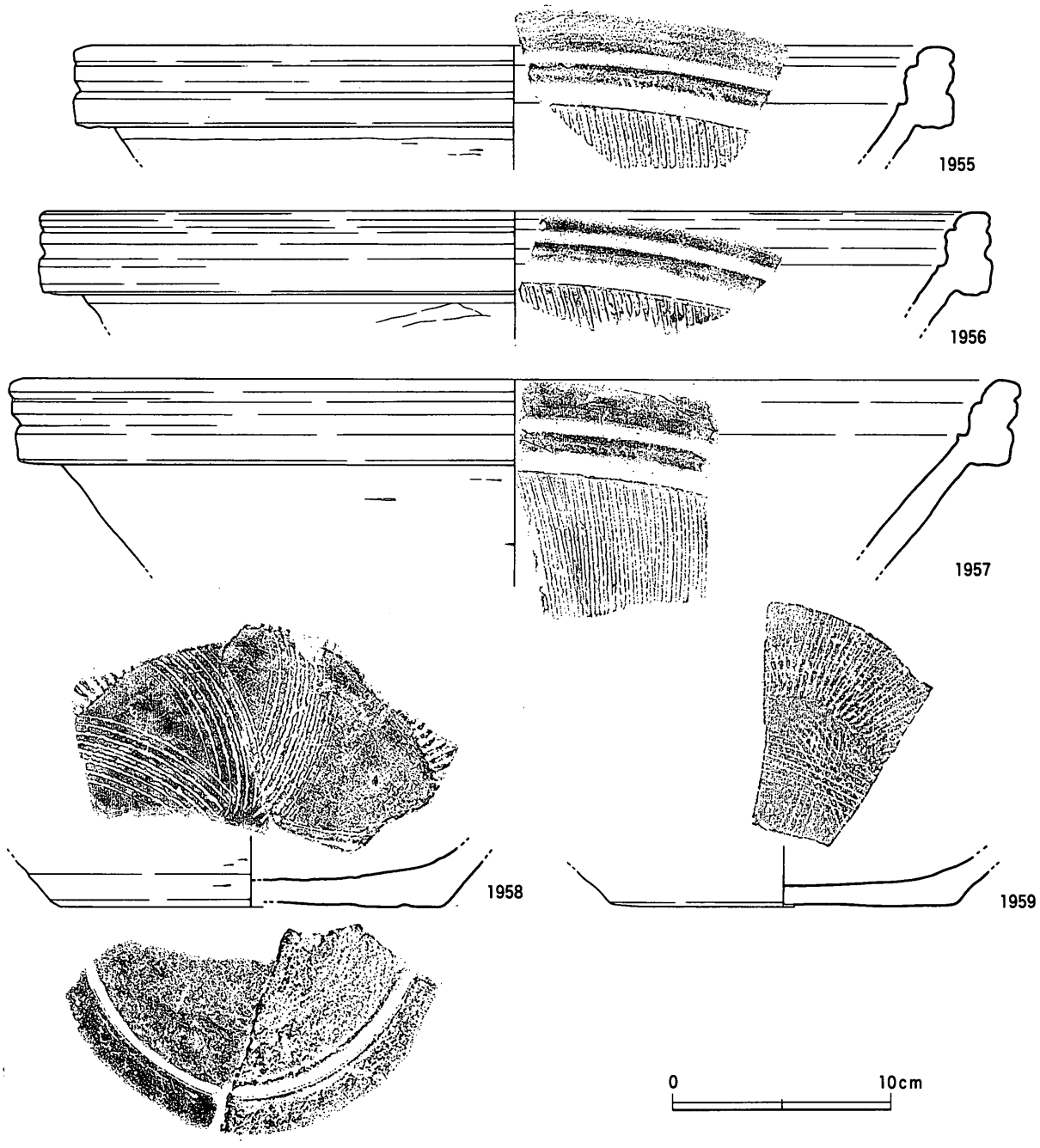
当該期の遺構は，Ｆ地区のほぼ全域で検出された。時期的には17世紀代に廃絶した遺構は皆無であり，いずれも18世紀代から昭和19年（1944）の間のいずれかの時期の廃絶である。このため，中世後半の遺構が概ね廃絶する16世紀後葉から17世紀後葉までの遺構群の状況については，明確にし得ない部分が多い。『空港跡地遺跡Ⅲ』で指摘されているような，18世紀以降に継続する見かけ上の欠落と捉えることができるかどうか，慎重な検討が必要である。遺構の大半は，条里型地割の坪界溝やこれに関連する溝，あるいは土坑であり，建物遺構はⅡ－17・24・25区で検出されたのにとどまる。建物遺構が少ないのは，既に指摘されているように18世紀後半以降に掘立柱建物から礎石建物へと転換したことによると予測される（森下1998）。



第333図　SDf89断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第334図　SDf92出土遺物（1）（1/3）



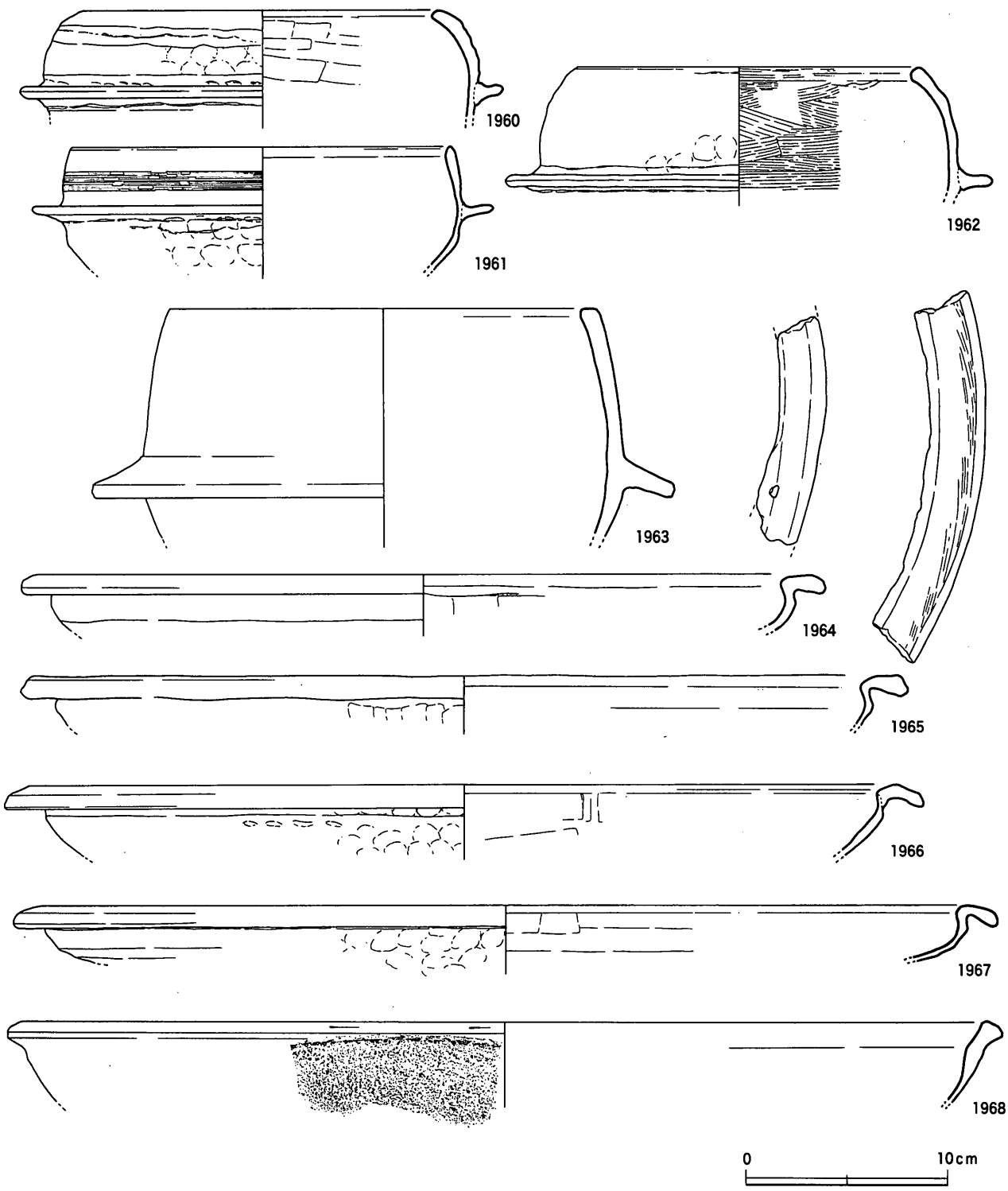
第335図　SDf92出土遺物（2）（1/3）

2．溝

ＳＤf89（第333図）

Ⅱ－18区南端で検出された，条里型地割の東西坪界線上に位置する溝である。明治21年の地籍図には水路として表記されている。『空港跡地遺跡Ⅰ』（以下，空港跡地Ⅰ）のＳＤc105と同一遺構であり，検出長41m，幅1.3m，深さ0.28mを測る。南側には1.25m（芯々距離）の間隔を空けてＳＤf90（ＳＤc104）が併走する。

主要な遺物として，備前系陶器擂鉢（**1923**），備前焼擂鉢（**1924**），瓦質焙烙（**1925**），土師質土



第336図　SDf92出土遺物（3）（1/3）

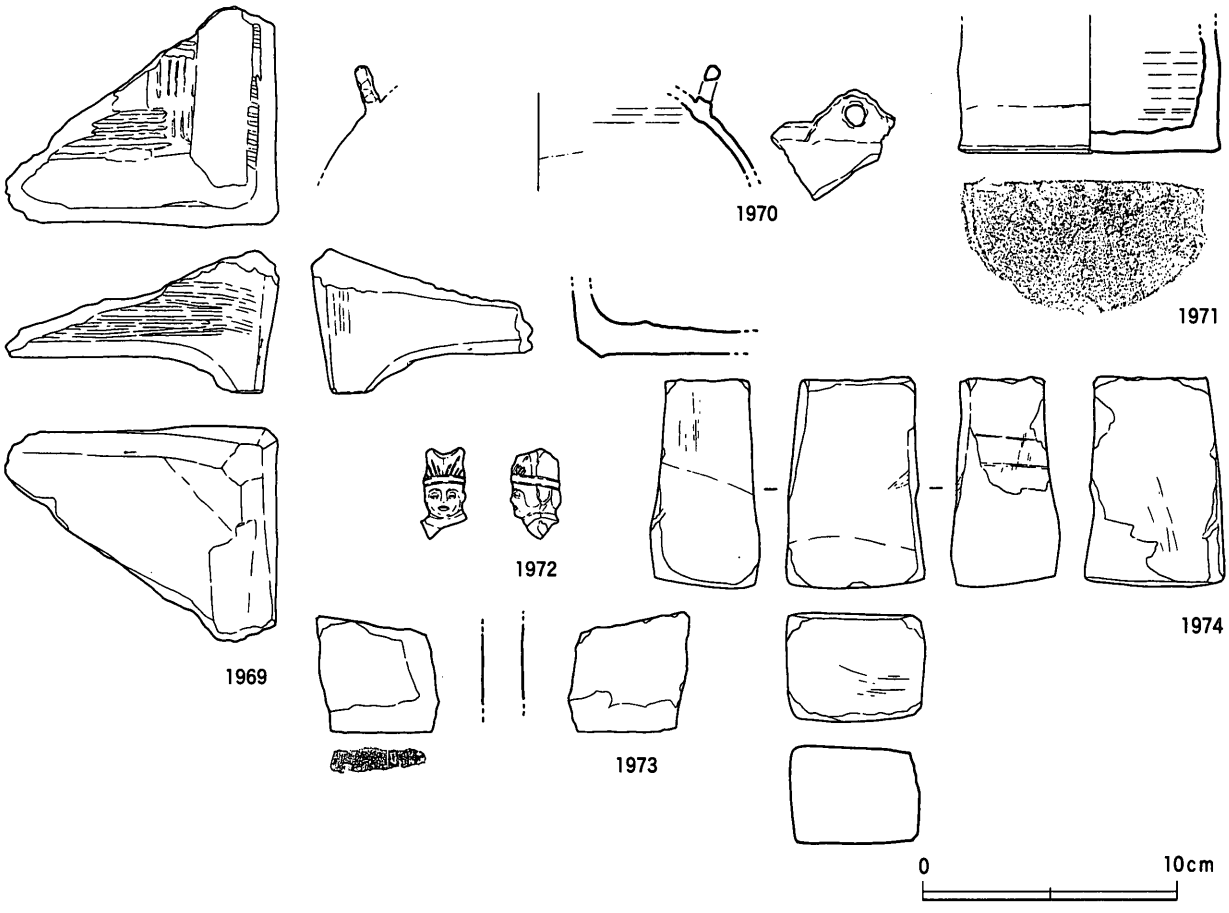
器甕（**1926**）がある。**1923**は堺もしくは明石擂鉢であり，白神分類Ⅱ型式（18世紀後半～19世紀初頭）にあたる。**1924**は間壁編年Ⅳ期後半であり，中世後半まで遡る。**1925**は御厩窯産とみられる焙烙である。外面に外型成形による粗面がみられ，佐藤分類c型式の製品である。口縁部は明瞭に外反するが全体に肥厚気味であり，高松城跡（西の丸町）ＳＸ８Ａ01出土例よりも後出的要素が認められる。したがって，20世紀初頭頃の製作年代が考えられる。**1926**は口縁部が断面逆三角形に肥厚しており，体部外面に波状文が施されている。おそらく19世紀代の所産であろう。

以上のように，**1924**をイレギュラーな遺物として排除すると，ＳＤf89は18世紀後葉から20世紀初頭の年代幅で捉えることが可能である。空港跡地Ｉで報告された遺物も18世紀後葉を上限としており，今回報告分と整合する。

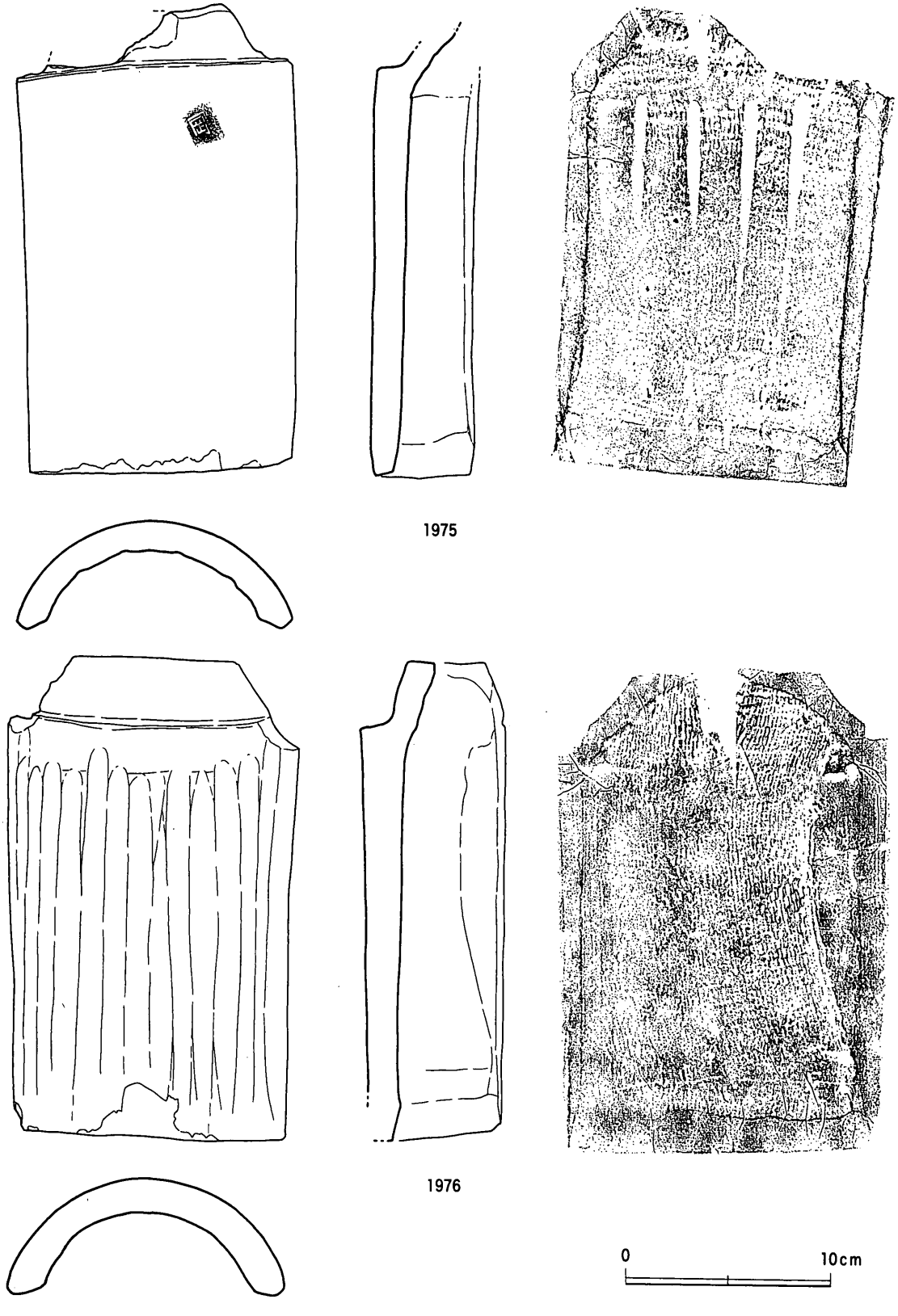
ＳＤf92（第334～340図）

Ⅱ－11・17・25区で検出された，条里型地割の南北坪界上に位置する溝である。明治21年地積図には水路として表現されている。検出長85ｍ，幅1.9ｍ，深さ0.42～0.68ｍを測る。南端（Ⅱ－11区）では西側肩部が緩やかに下っており，２段落ちとなっている。また中央部（Ⅱ－17区）では西肩部に小規模で浅い溝（ＳＤf93）が取り付く。底面のレベルは，検出した北端の方が南端よりも0.3ｍ低くなっており，南から北へと傾斜している。

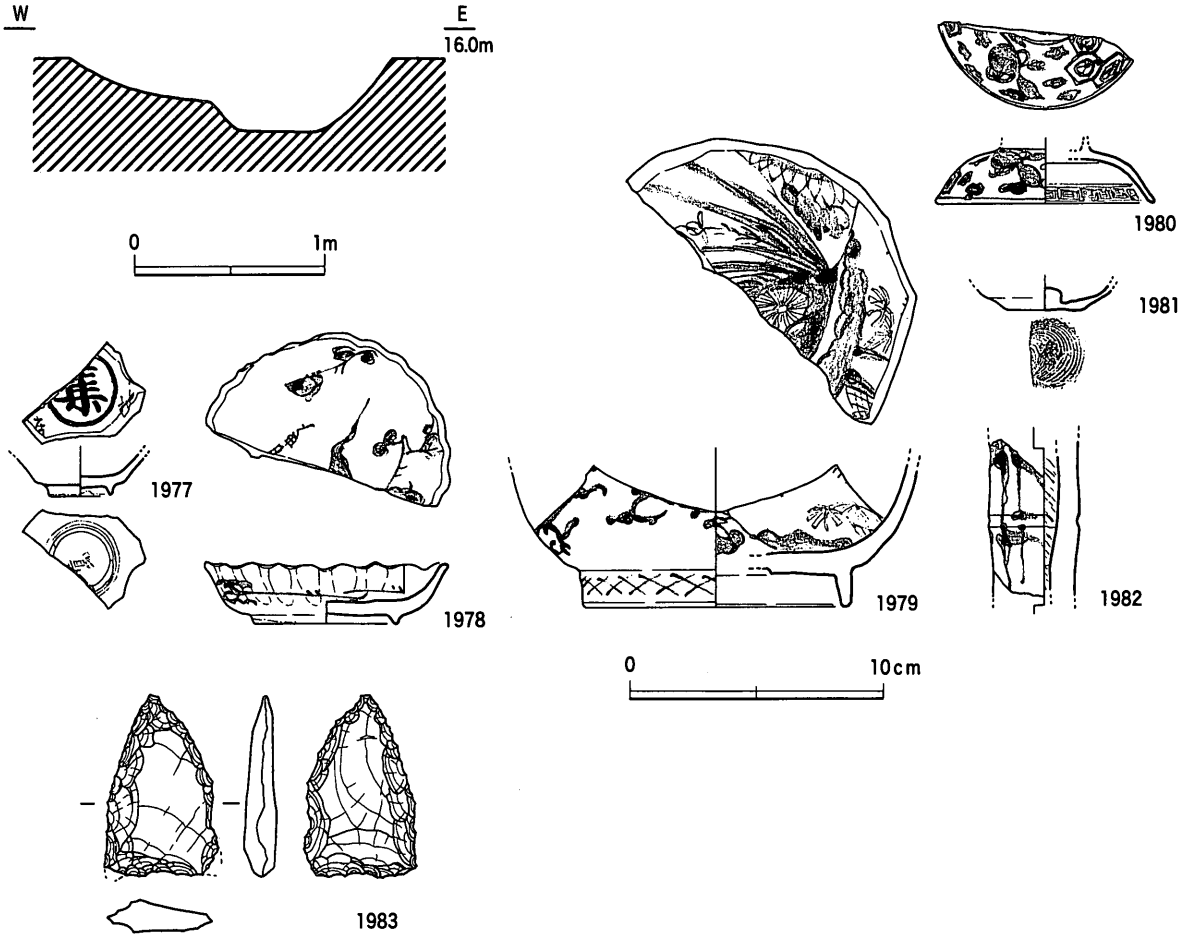
主な出土遺物には，肥前系磁器染付皿（**1927・1929・1930・1978**）・碗（**1940～1946・1985**）・鉢（**1979・1984・1986**）・蓋（**1928・1947・1980**）・段重（**1987**）・徳利（**1983**）・青磁花瓶（**1950**），京・信楽系陶器碗（**1931・1932**），萩焼系陶器碗（**1938**），瀬戸・美濃系陶器碗（**1933～1937・1939**），信楽系陶器灯明皿（**1948**）・卸し皿（**1949**）・土瓶（**1970**）・行平（**1989**），備前系陶器擂鉢（**1952～1959・1988**）・匣鉢（**1971**），瓦質羽釜（**1960～1963**）・焙烙（**1965・1966・1968**），土師質焙烙（**1964・1967・1990**）・火鉢（**1969**），白磁人形（**1972**），平瓦（**1973**），丸瓦（**1975・1976**），砥



第337図　SDf92出土遺物（4）（1/3）



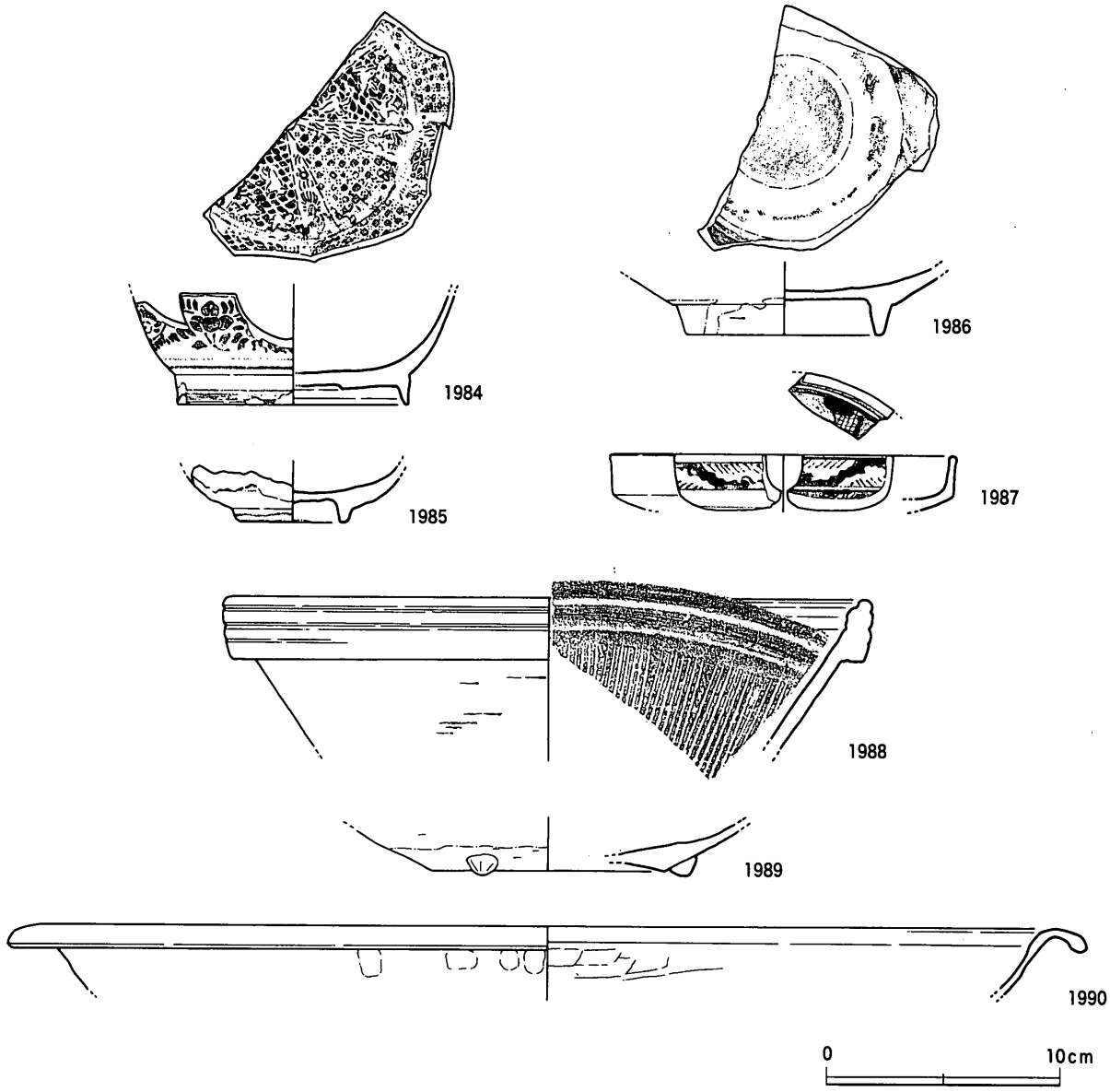
第338図　SDf92出土遺物（5）（1/3）



第339図　SDf92断面図（1/40），出土遺物（6）（1/3，1983は2/3）

石（**1974**）などがある。肥前系磁器や備前系陶器擂鉢は，18世紀前葉～中葉を上限としているが，むしろ主体となるのは19世紀代である。以下，いくつかの遺物について，略述する。

1931・1932は，小杉碗と呼称される陶器碗である。体部外面下半に1組の若松が鉄絵で描かれる。文様はかなり簡略化されており，若芽は全く表現されず根も**1932**で茎の延長として表現される程度である。千駄ヶ谷五丁目遺跡での出土例を参考にすると，1800～1830年代と考えられる。瓦質羽釜は，口縁部が長く立ち上がり内弯する**1960・1962**と，直立する口縁部をもつ**1961**がある。いずれも外面に指頭圧痕が遺存しており，各所に接合痕が認められることから，粘土紐成形によるものと考えられる。焼成は一応瓦質であるが，断面をみると中心部分が暗褐色を呈しており，表面の還元と炭素の吸着が微弱であることから，短時間の焼成でガス圧の弱い状態の還元がかけられたことが推測される。**1963**は外型成形・回転台調整であり，器面は燻し銀色を呈しており，断面も中心部まで灰色に還元している。**1960**～**1962**は19世紀前葉～中葉，**1963**は19世紀後葉～20世紀前葉に生産されたものと考えられるが，製作技法の転換（外型成形）と軌を一にして焼成方法も大きく転換したようである。焙烙は御厩窯産と考えられるもののみで占められる。**1964**は内耳の穿孔部が僅かに貫通する程度であり，実際に鉤がかけられた痕跡は認められない。また直立気味の頸部をもつことから，佐藤分類b型式に該当するものであり，19世紀前半の所産と考えられる**1965**～**1967**は内耳が遺存していないが，垂直気味に立ち上がる頸部形態から，やはりb型式と捉えられる一群である。**1968**は外型成形のc型式であり，口縁部直下から体部にかけての外面には型成形による粗面がみられ，口縁部外面は回



第340図　SDf92出土遺物（7）（1/3）

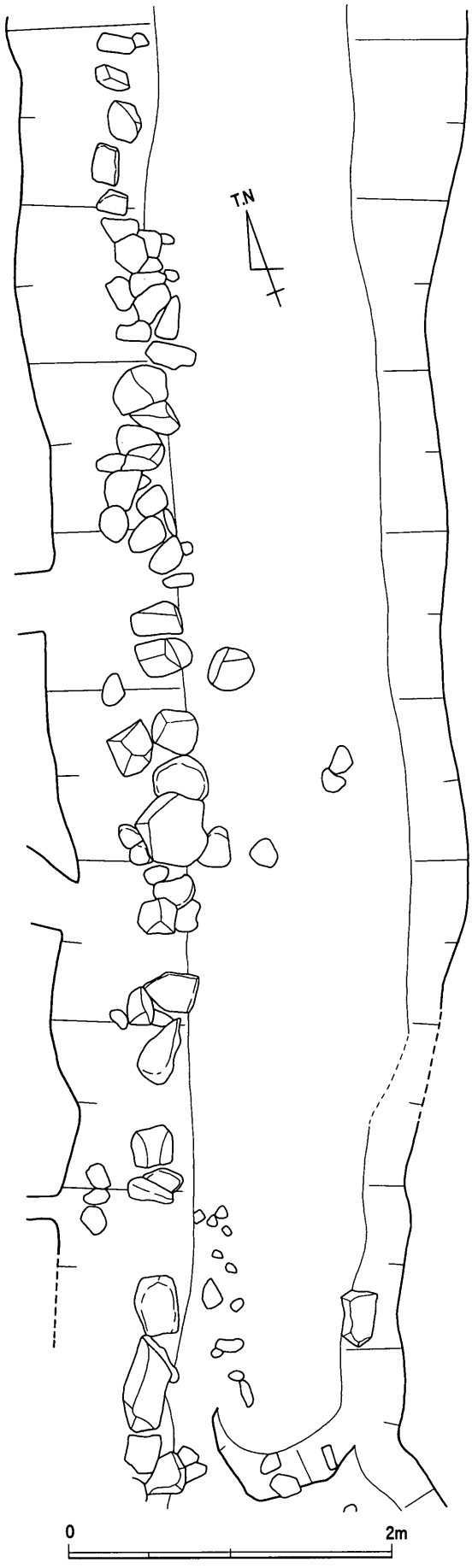
転ヘラ削り調整が施されている。**1990**頸部は体部から連続的に伸びていること，また比較的長い口縁部をもつことから，a型式の焙烙と考えられる。

1973は平瓦であり，端面に「□善」の刻印が認められる。第4章第5節で検討するように，他の事例から推測すると「林善」（林善右衛門）の刻印であろう。また，**1975**は丸瓦の凸面に「岡」という刻印がみられる。

この他，中世後半の備前焼擂鉢（**1951**）も出土している。間壁編年Ⅳ期後半のものであろう。

ＳＤf95（第341～347図）

Ⅱ－25区西端部で検出された，南北方向の坪界線上に位置する溝である。昭和19年（1945）埋没の溝であり，明治21年の地籍図には水路として描写されている。ＳＤf92の北側延長部にあたるが，東西の坪界溝（ＳＤf90）の合流部を介してクランク状に連続している。この連続状況は明治の地積図でも表現されている。検出長12.7ｍ，幅2.1ｍ，深さ0.5ｍを測り，西側掘り込み壁面に沿って石積み

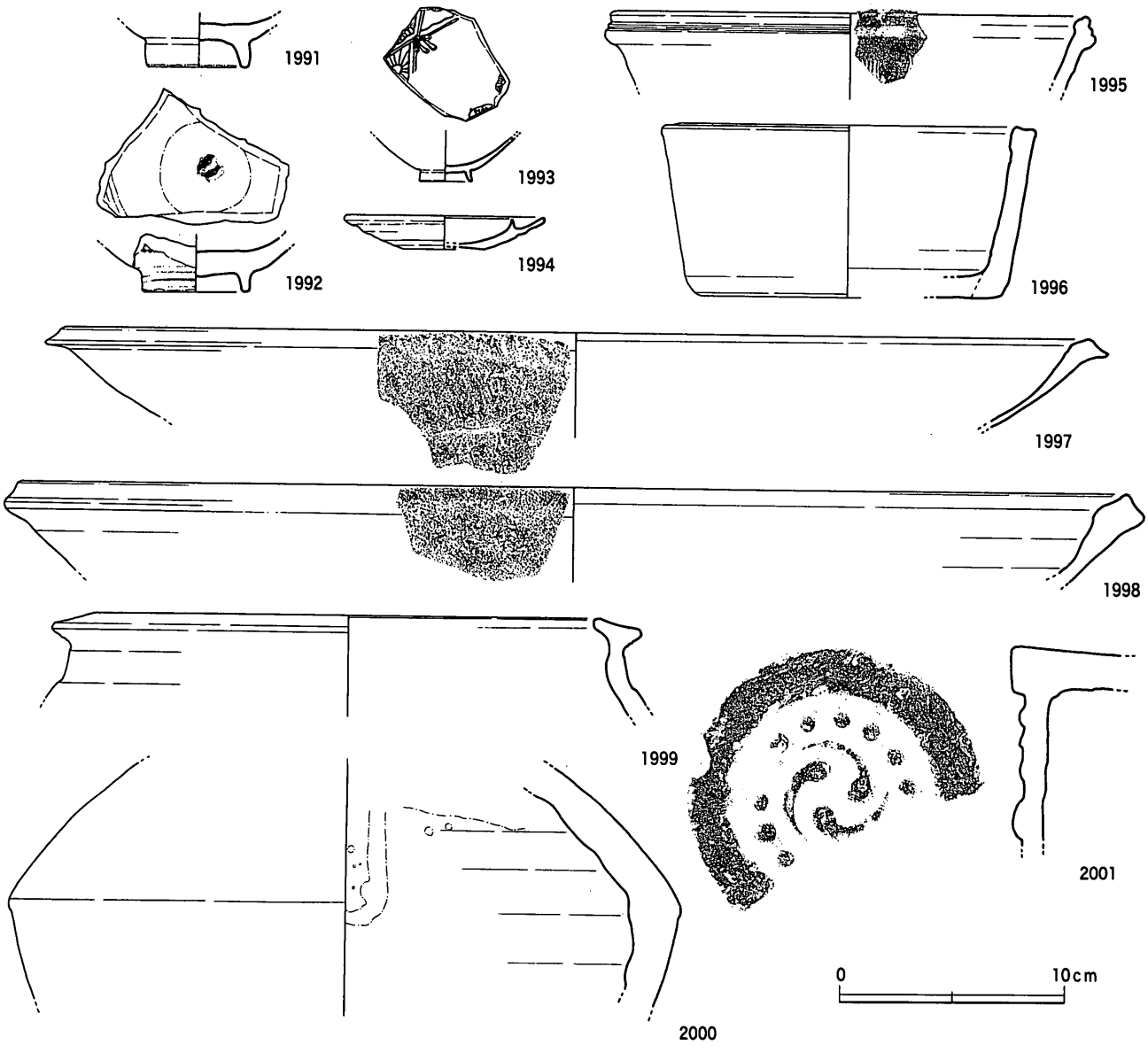


第341図　SDf95平面図（1/40）

護岸が認められる。石積みは長径30～40㎝の安山岩や砂岩の亜円礫の小口を壁面側に用いており，基底部が遺存している程度であった。石積みには凝灰角礫岩製の石臼や石塔，花崗岩製の石臼も転用されており，近世ないしそれ以前の石製品の転用と考えられる。東岸部には石積みは認められなかったが，ＳＤf90との分岐点付近に石材が１個据えられた状態で遺存していたため，本来は西岸同様に石積み構造であったと推測される。

主な出土遺物としては，肥前系陶器碗（**1991**），肥前系磁器染付碗（**1992**），磁器小杯（**1993**），信楽系陶器灯明皿（**1994**），備前系陶器擂鉢（**1995**），瓦質火鉢（**1996**）・焙烙（**1997**・**1998**），陶器甕（**1999**・**2000**），軒丸瓦（**2001**），石臼（**2002**～**2012**），石塔（**2013**～**2015**）がある。**1991**・**1992**は18世紀代の所産である。**1993**見込みには，日章旗と旭日旗を組み合わせた文様がみられ，20世紀前半の製作と考えられる。**1997**は外反する口縁部がさほど顕著に肥厚せず，高松城跡（西の丸町）ＳＸ8C01出土例に近似することから19世紀末葉の所産と考えられる。**1998**は口縁部の肥厚が顕著になり，頸部外面の屈曲は弱くなる。現存窯での製品の形態にかなり近くなっており，遺構の廃絶時（昭和19年）に近い年代が想定される。

石臼には凝灰角礫岩製（**2002**・**2004**～**2012**）と花崗岩製（**2003**）がある。**2002**は上臼で下面は斜めに摩滅している。軸受けの位置が臼の中心からずれていることが，このような変則的な摩滅面の形成された原因であろう。**2003**も上臼で下面に８分割の臼の目が彫られている。上縁は全て欠損しているが，素材が硬質な花崗岩であることや，かなり平滑な状態で欠損部が連続していることから，人為的に打ち欠かれた可能性がある。**2008**は下面に12本の臼の目が放射状に配置されており，使用による擦痕が顕著に認められる。**2010**は下面が使用によって顕著に摩滅しており，同心円状に擦痕がみられ臼の目は消滅している。**2013**・**2014**は五輪塔の



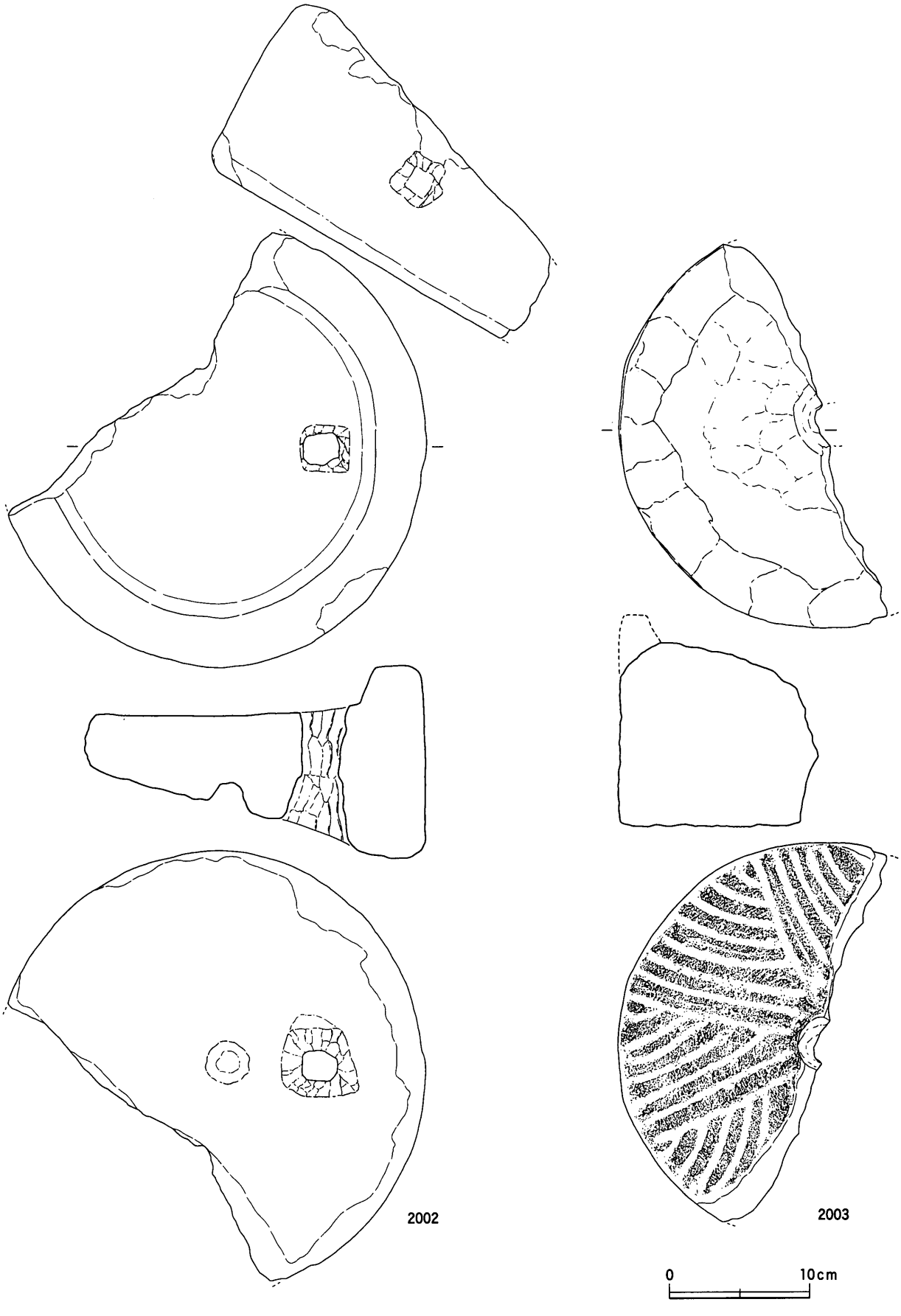
第342図　SDf95出土遺物（1）（1/3）

一部とみられる。**2015**は平面六角形を呈しており，六角五輪塔の傘と考えられる。

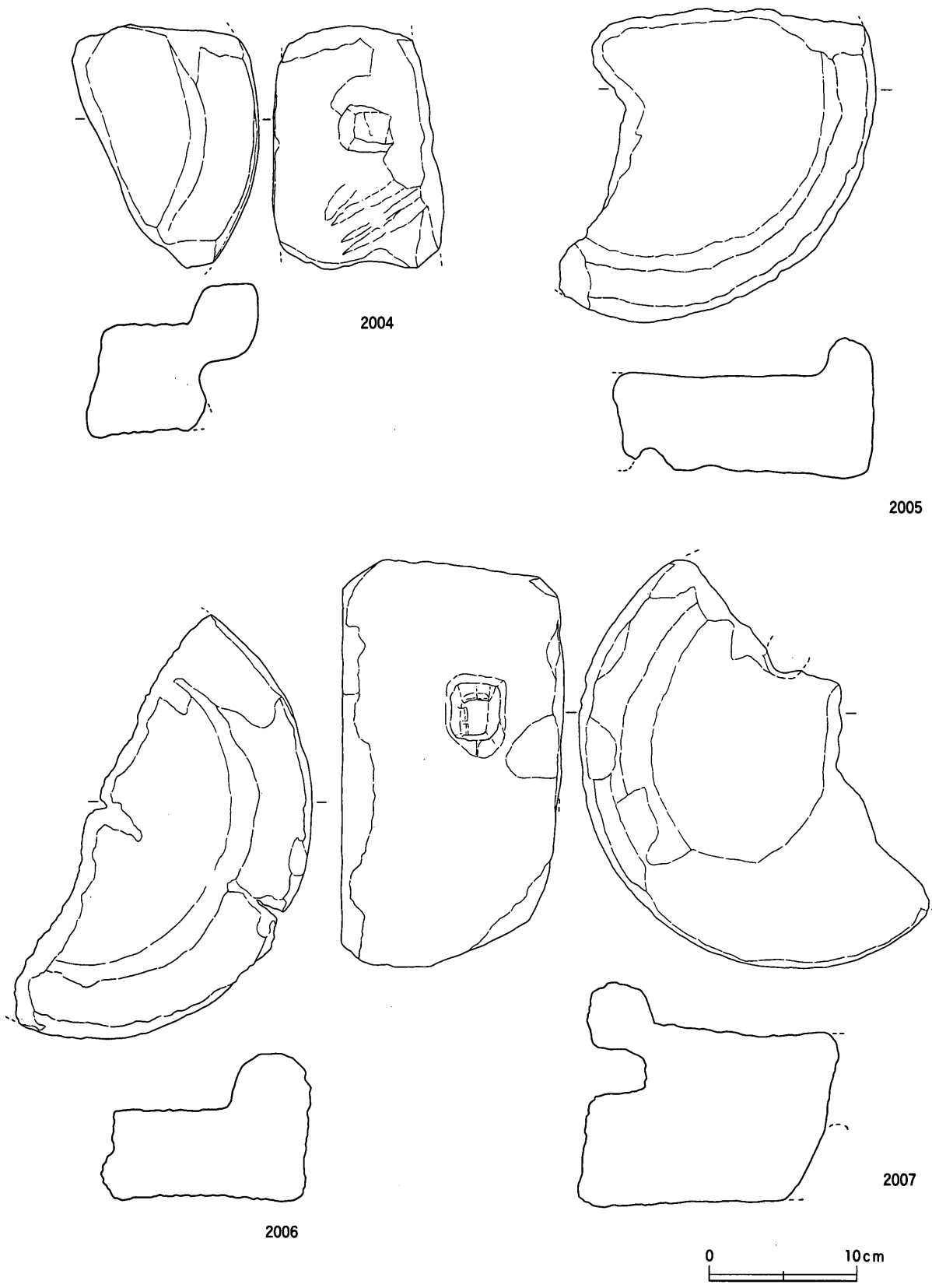
ＳＤf94（第348・349図）

Ⅱ－24・25区，Ⅲ－1区で検出された，東西方向の坪界線上に位置する溝である。昭和19年埋没の溝であり，明治21年地籍図には水路として表記されている。幅1.5～2.05ｍ，深さ0.5ｍを測り，底面のレベルは検出した東端が西端よりも0.25ｍ低く，東に向かって傾斜としてることがわかる。Ⅱ－24区部分では杭列による護岸が確認できたが，Ⅲ－1区では石積みの護岸が検出された。

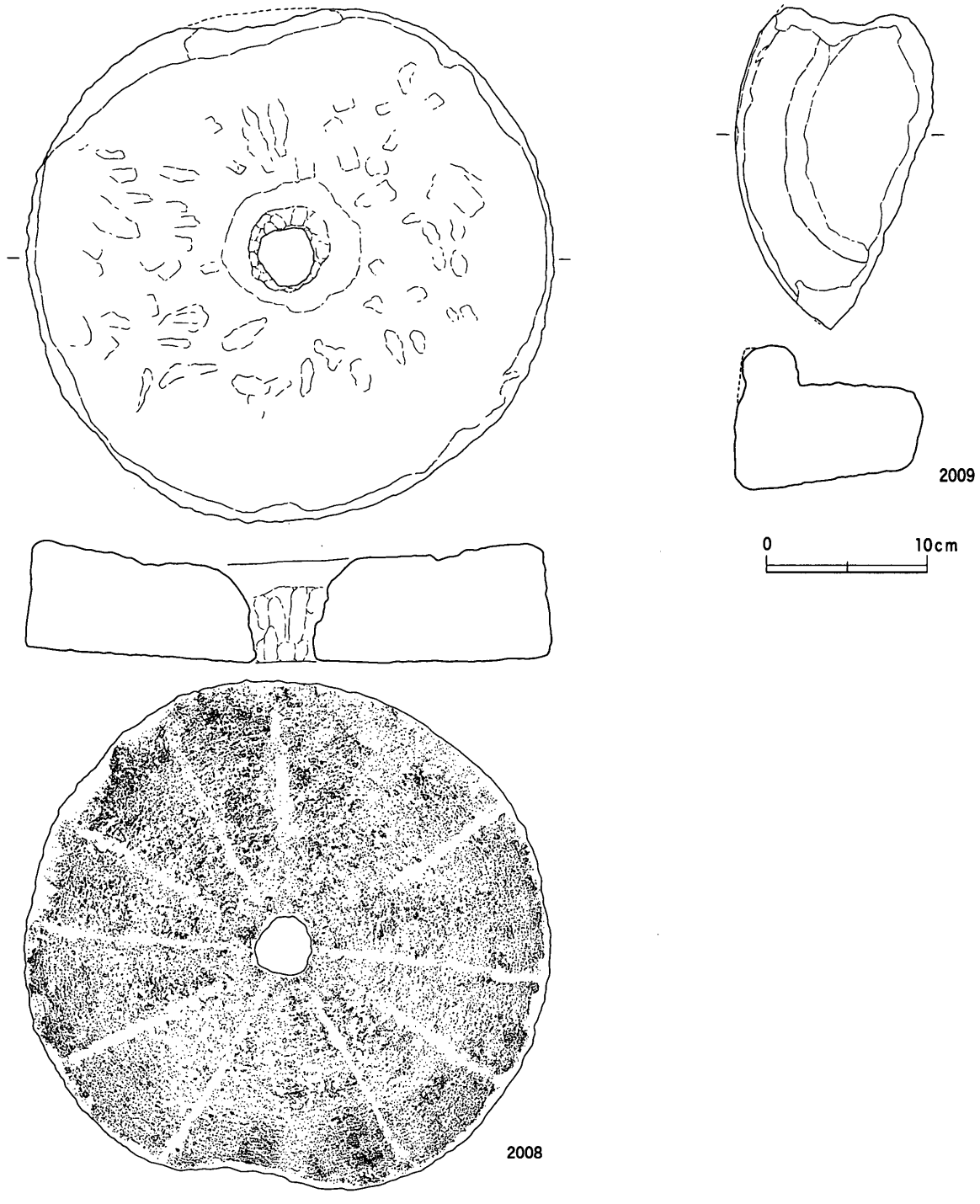
Ⅱ－24・25区部分の主要な出土遺物には，肥前系磁器染付皿（**2017～2019**）・鉢（**2020**）・碗（**2024～2026**）・紅皿（**2027**）・徳利（**2032**），肥前系陶器碗（**2023**），瀬戸・美濃系陶器皿（**2016**）・碗（**2022**），京・信楽系陶器碗（**2021**）・卸し皿（**2031**），軟質陶器蓋（**2028・2029**），陶器蓋（**2030**），備前焼擂鉢（**2033・2034**），瓦質焙烙（**2035～2037**），軒丸瓦



第343図　SDf95出土遺物（2）（1/4）

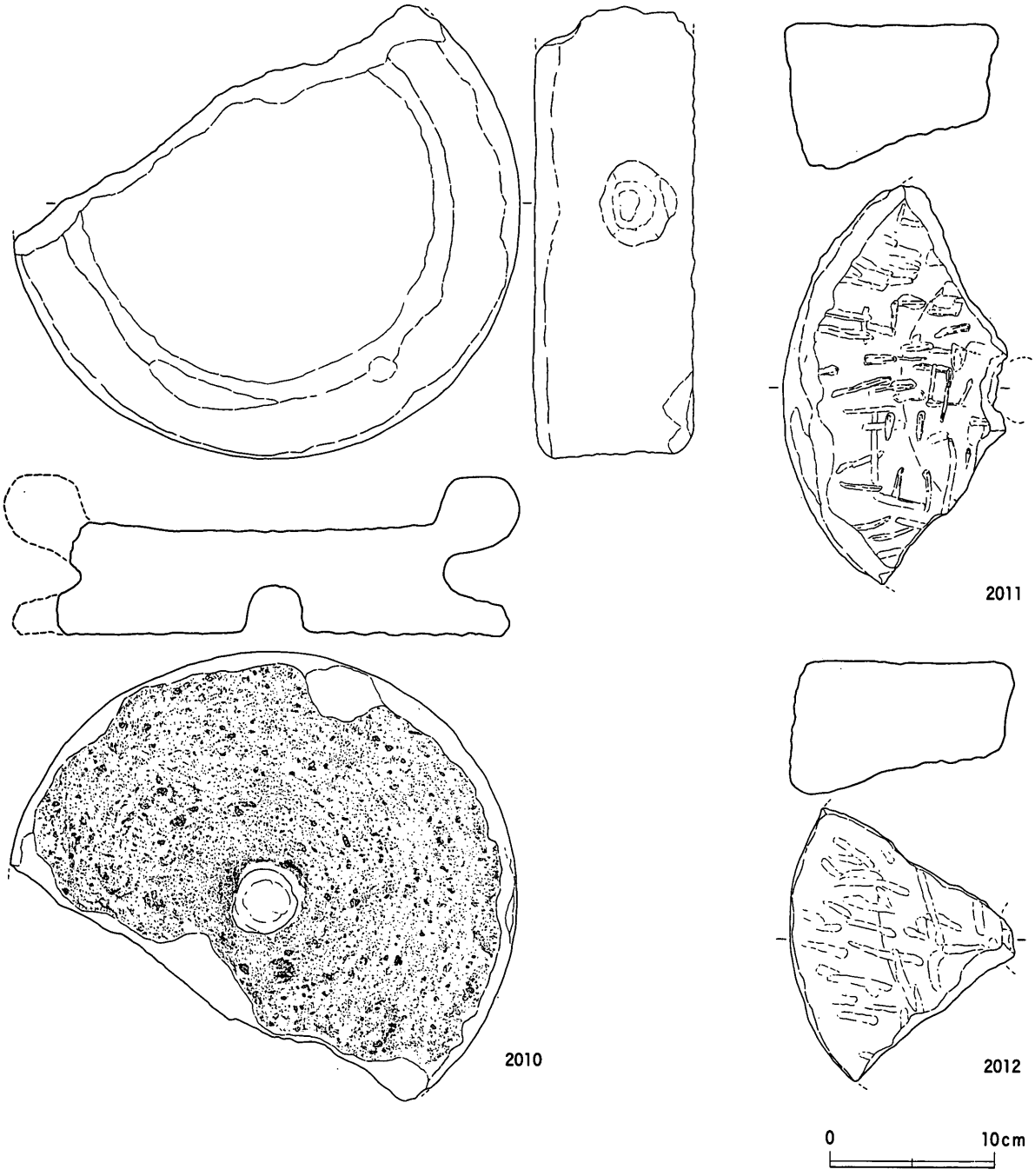


第344図　SDf95出土遺物（3）（1/4）



第345図　SDf95出土遺物（4）（1/4）

(2038)，白磁人形（2039)，寛永通宝（2040)，須恵器杯蓋（2041）がある。2029の内面には「屋島」の刻印がみられることから，いわゆる屋島焼と考えられる。2035～2037は御厩系焙烙であり，2035は佐藤分類b型式，2036・2037はc型式である。2036は口縁部が明瞭に外反し，また全く肥厚しないことから，外型成形に転換した直後の製品と考えられる。おそらく19世紀中葉の所産であろう。2037は19世紀末葉の所産と考えられる。

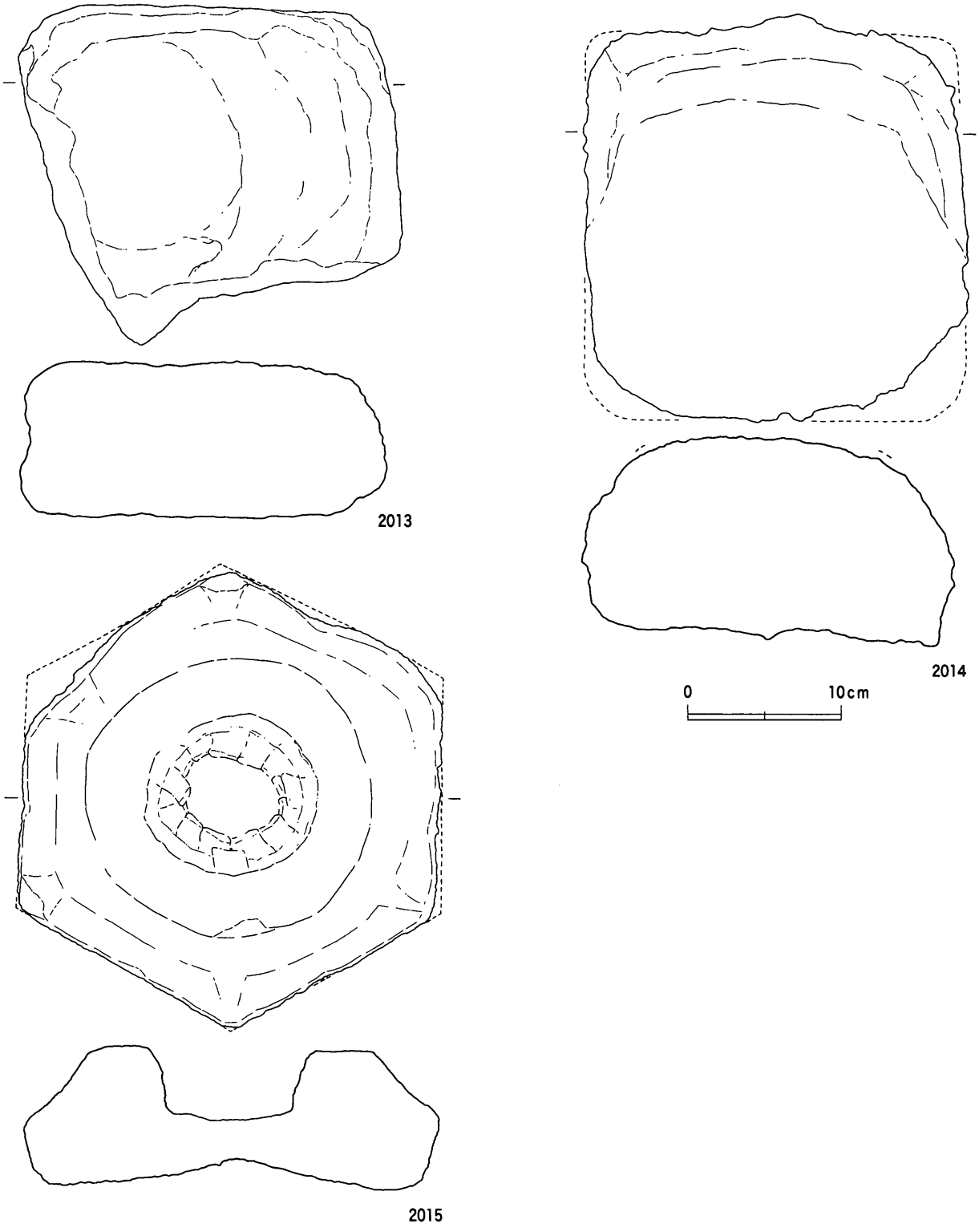


第346図　SDf95出土遺物（5）（1/4）

ＳＤf96・ＳＸf14（第350図）

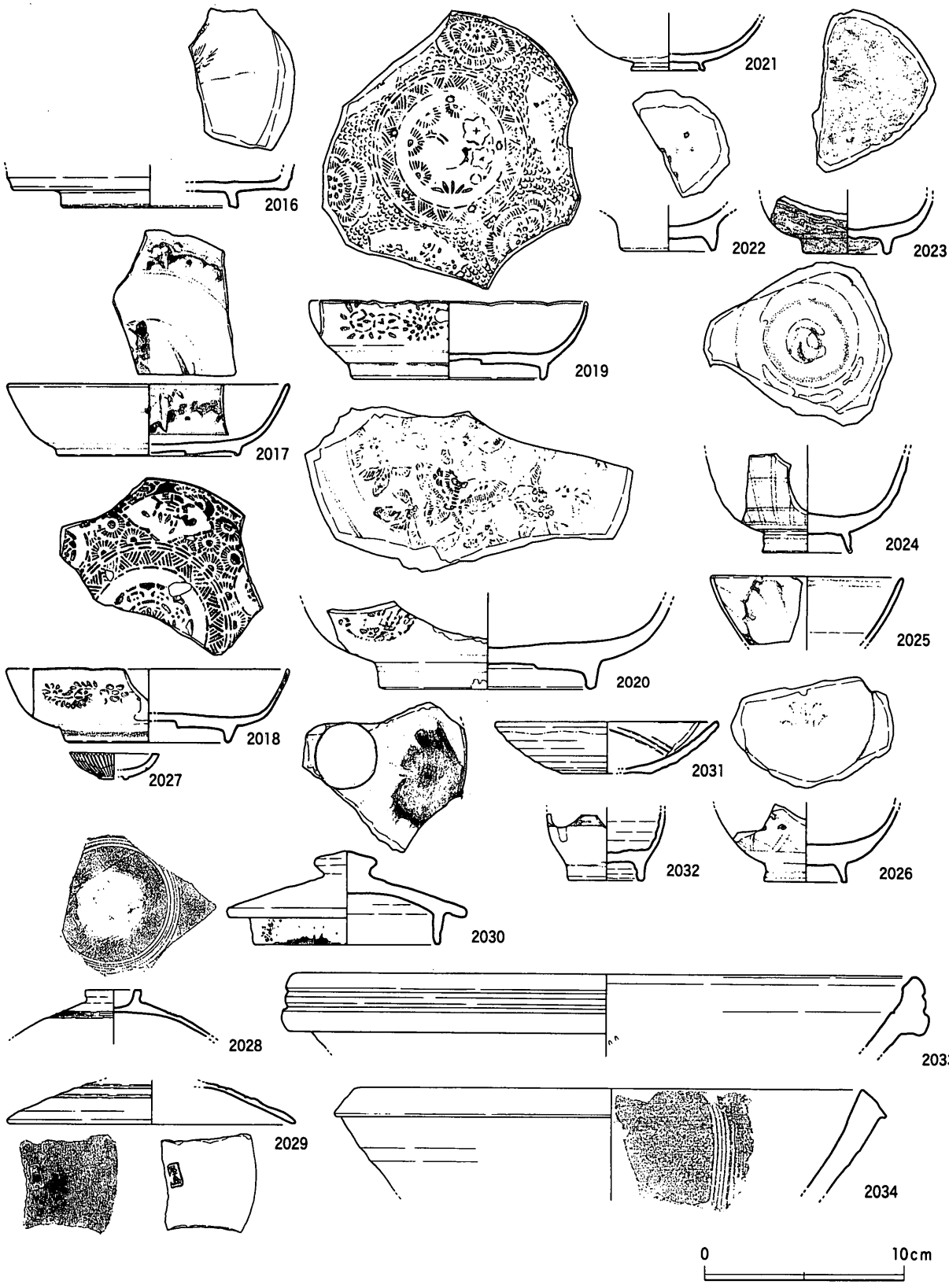
ＳＤf96はⅡ－24区北端部で検出された溝であり，条里型地割の坪界線上には位置しないが，主軸方位は周辺地割と一致する。またＳＤf96の南側肩部には，幅5.7ｍの緩い落ち込みが併行して検出されており，これをＳＸf14とする。明治21年の地籍図には水路として他の溝よりも太く表現されており，また文化15年（1818）の『山田郡下林村順道図絵』には出水から延びる水路として描写されている。埋土中には礫が多量に含まれており，昭和19年の空港造成時に埋め戻されたと考えられる。

主な出土遺物としては，備前系陶器擂鉢（**2042・2043**），陶器用途不明品（**2044**），肥前系磁器瓶（**2045**），平瓦（**2046**）がある。**2046**凸面には「林善」の刻印が捺されている。ＳＤf92出土

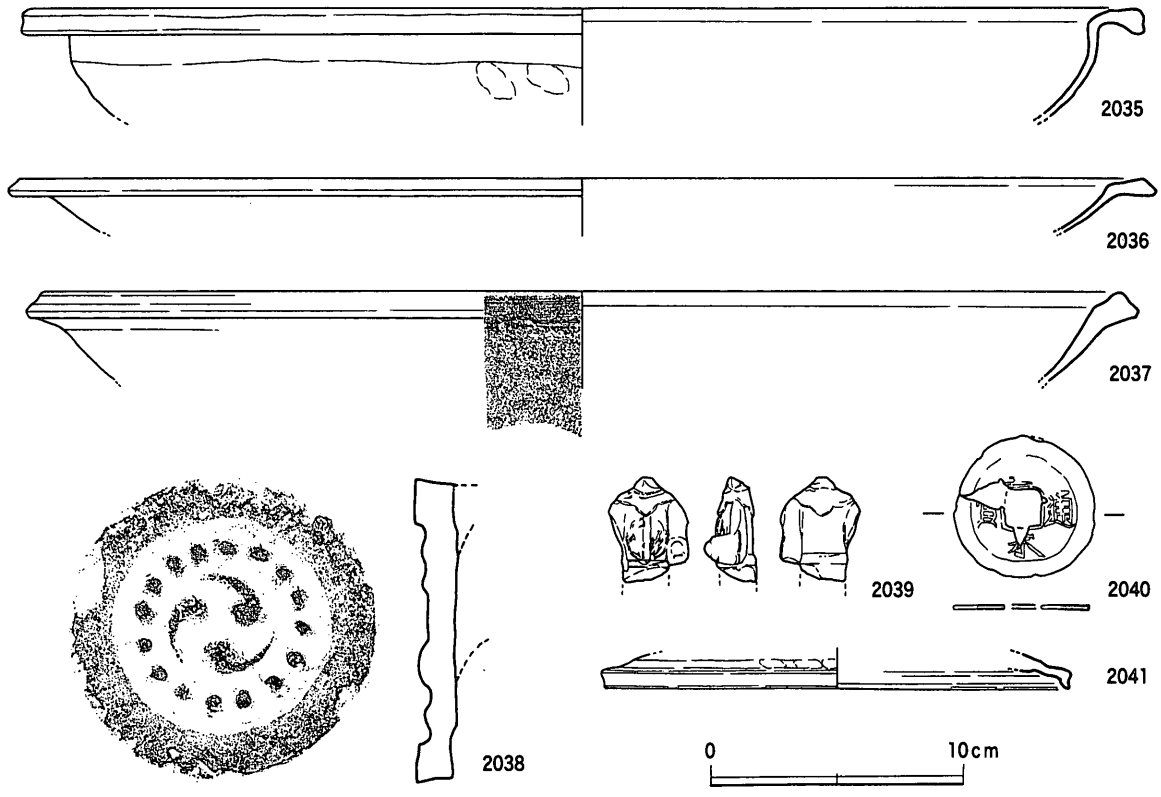


第347図　SDf95出土遺物（6）（1/4）

の**1973**と同一内容であるが，刻印の書体と大きさが異なっており，別の原体（印）による施印とわかる。



第348図　SDf94出土遺物（1）（1/3）



第349図　SDf94出土遺物（2）（1/3，2040は2/3）

ＳＤf98（第351図）

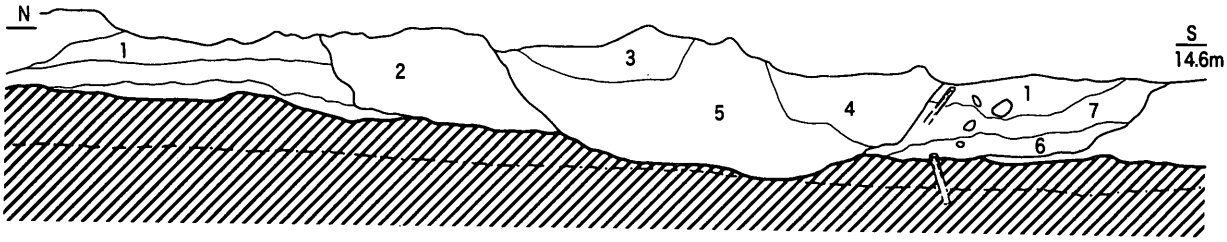
Ⅲ－２・44区で検出された溝であり，坪界線上には位置しないが周囲の地割と一致する方向をもつ。明治21年地籍図には記載されていない。本遺構の南延長部には，高松空港が機能していた段階の用水路（ヒューム管）があり，このヒューム管は空港内の東西方向の石組み溝（Ⅲ－２区とⅢ－４区を分割する溝）に合流して北流する。こうした状況から，ＳＤf98は昭和19年の陸軍飛行場造成以後に用地内を通水させる用水路として構築され，戦後高松空港のエプロンの整備に伴い付け替え・廃絶したものと推測される。

溝の規模は，幅2.24ｍ，深さ1.0ｍ以上を測り，内部に花崗岩の加工石材を主体とした石組みが構築されていた。石組は大きさの揃った加工石材を上開きに３段積まれており，廃絶時に破壊されることもなく非常に良好な状態で遺存していた。石組み内部の埋土は２層に分けられ，下層は底面から0.24ｍ前後の厚さで灰色粘土が堆積していた。上層は周囲の基盤層のブロックを多量に含む褐色土である。下層は溝が機能していた段階の堆積とみられ，上層は人為的な埋め戻しを示す。

遺物の出土状況は明確でないが，主なものとして肥前系磁器染付碗（**2047**），軒平瓦（**2048**）がある。**2047**は内外面に二重網目文を施しており，18世紀前葉～中葉の所産と考えられる。**2048**は「□(山カ)田郡林村/瓦製造人/岡崎佐太郎」という刻印が捺されている。いずれも破片の大きさは小さく，空港南側の隣接地から二次的に移動してきた遺物であろう。

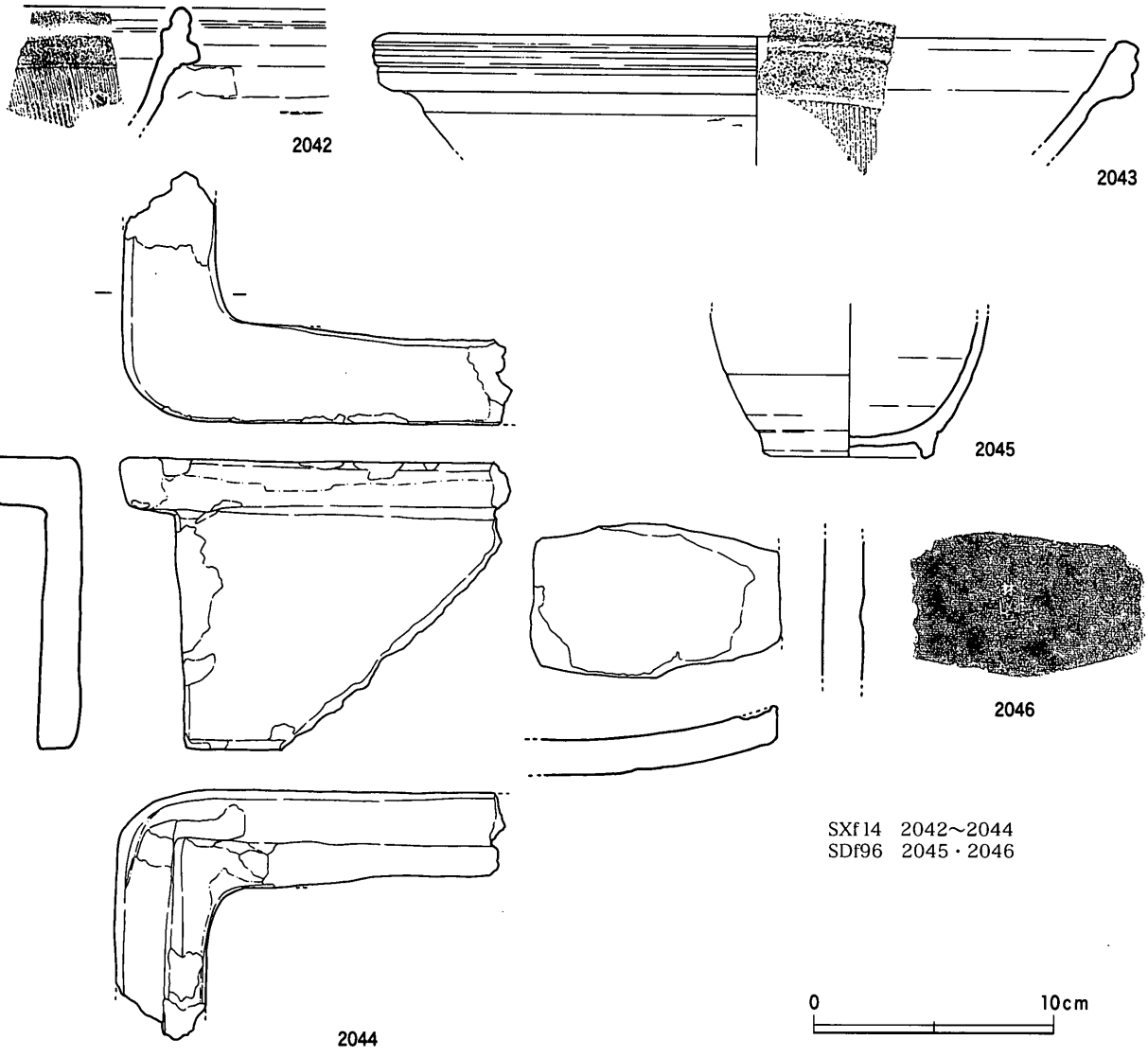
ＳＤf97（第352～354図）

Ⅲ－１・２・37区で検出された，南北方向の坪界線上に位置する溝である。明治21年地籍図には水路として表現されている。幅2.1～2.5ｍ，深さ0.57～0.8ｍを測り，内部には花崗岩の加工石材を用

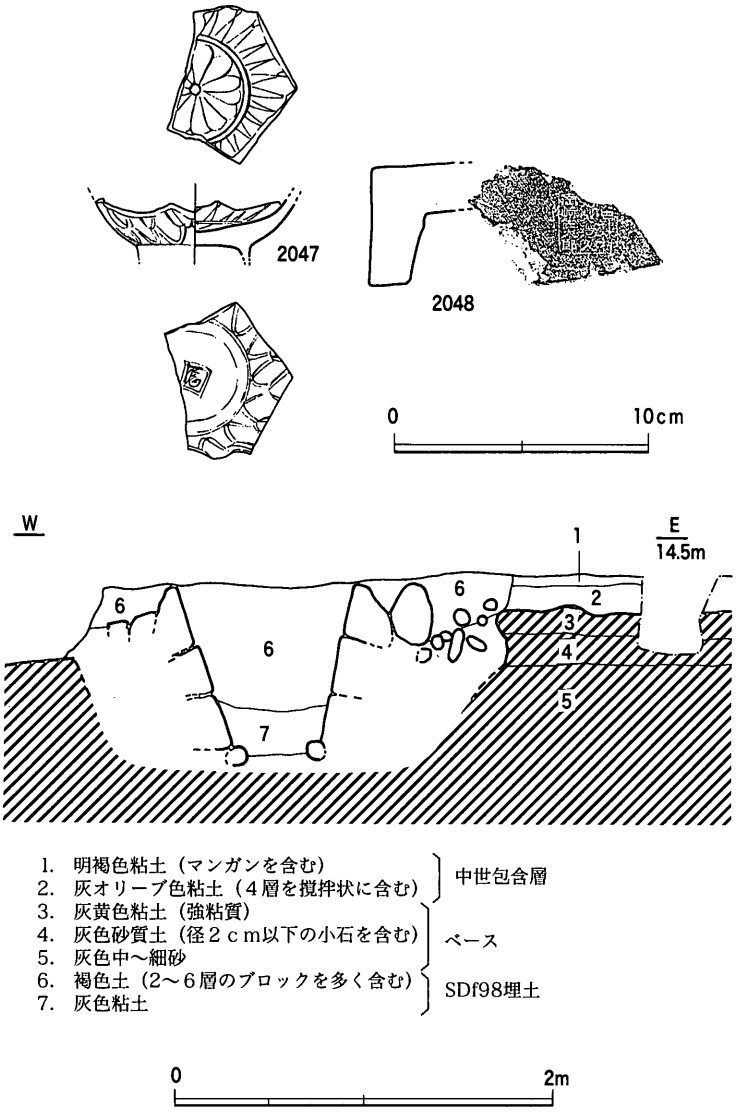


1. 灰色粘土（鉄分を含む）
2. 青灰色砂混じり粘土（径1.0ｃｍ以下の礫を多く含む）
3. 青灰色粘質シルト（径5ｃｍ以下の小石を含む）
4. 明緑灰色シルト（ベースブロックを含む）
5. 暗赤褐礫（径３～３０ｃｍの礫を含む）
6. 灰色シルトと灰白色細砂ラミナ（植物遺体を多く含む）
7. 明緑灰色シルトと暗青灰色粘土ラミナ（径５～10ｃｍの小礫を含む）

0 2m



第350図　SDf96・SXf14断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第351図　SDf98断面図（1/40），出土遺物（1/3）

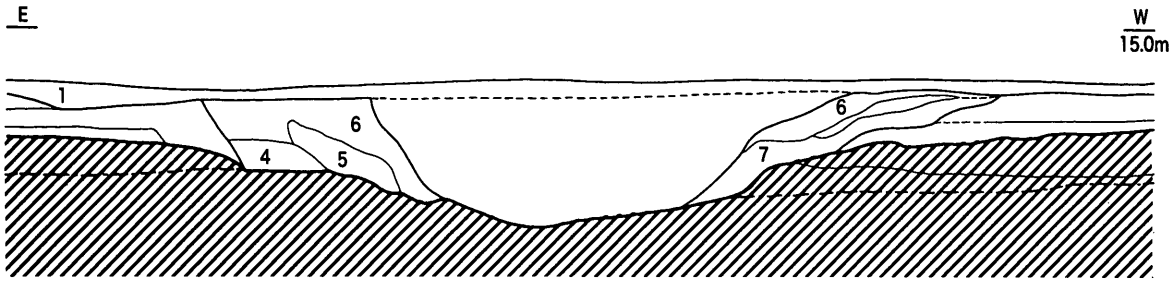
いた石組みがみられる。石組みの内法は幅0.5～0.6mである。石組みの直上には，空港造成に伴うバラス層が堆積していたため，昭和19年に廃絶したものと考えられる。

主な出土遺物には，肥前系磁器皿（2049～2051・2054）・染付皿（2055）・碗（2059～2069）・仏飯器（2072），京・信楽系陶器碗（2056），瀬戸・美濃系陶器碗（2057・2058），軟質陶器杯（2070・2071），陶器蓋（2073），肥前系陶器鉢（2074），備前系陶器擂鉢（2075），瓦質羽釜（2076），大谷焼徳利（2077），土師質焜炉（2078），白磁人形（2079・2080），軒平瓦（2081），軒丸瓦（2082），中国産染付皿（2083）がある。肥前系磁器は18世紀前葉～中葉を上限としており，19世紀前半までの資料が比較的多く認められる。2070・2071は直立する口縁・体部と内弯する体部下半が特徴的である。黄燈色の釉を施しており，底部に回転糸切り痕がみられる。焼成は甘く，胎土は土師質焼成を呈する。2076は口縁部に焙烙と同じ形態の横方向の把手を貼付する。2078は型成形であり，外面に陽刻の草文がみられる。2083は小野分類の皿C群Ⅰ類にあたる。15世紀後葉～16世紀中葉の所産であり，隣接するSDf76・77からの二次的な移動の可能性がある。

SDf99（第355図）

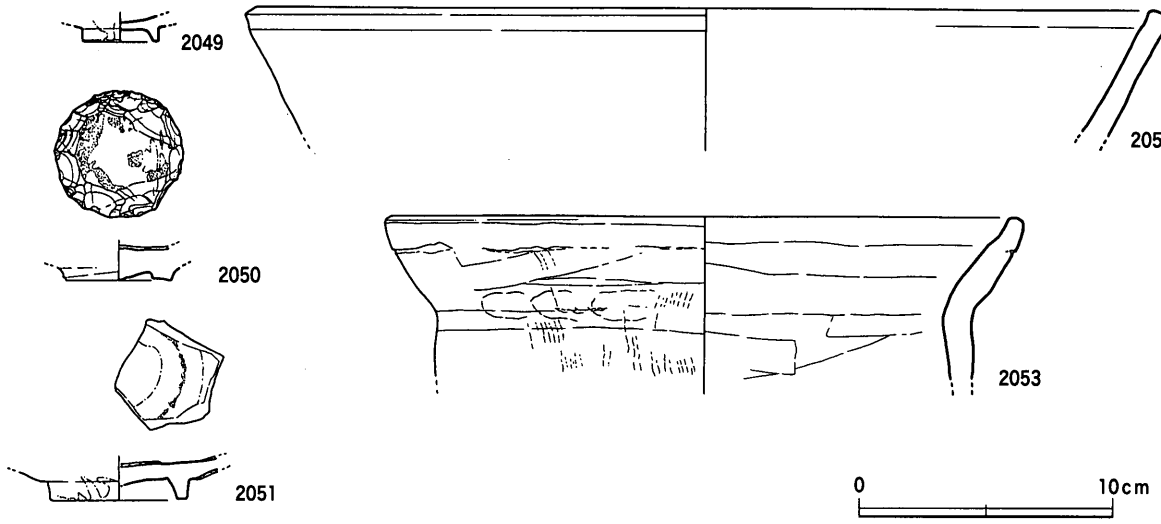
Ⅲ－2・4区で検出された平面L字形の溝であり，東西方向の流路は坪界線上に位置する。南北方向の流路は坪界線とは一致しないが，やはり周辺地割と同じ主軸方位をもつ。南からSDf97が合流しており，埋土の連続性から両者は同時埋没（昭和19年）したことが想定される。なお，これらは明治21年地籍図では水路として表記されている。

規模は幅2.24m，深さ0.5mを測り，断面逆台形を呈する。主な遺物としては備前系陶器擂鉢（2084），ガラス小瓶（2085）がある。2085は外面に「組合目薬」と型押しされている。



1. 明灰色礫混じりシルト加工（バラス、径１～５ｃｍの礫を多く含む）
2. 茶色シルト質工（マンガンと鉄分を多く含む）
3. 灰色礫（径５ｃｍ程度の亜円礫（砂岩主体）で構成される。マトリックスは灰色中砂）
4. 明灰色シルト質工ラミナ状。鉄分を多く含む）
5. 暗紫褐色粘質土と灰色シルト質土のブロック（鉄分を含む）
6. 灰色極細砂（鉄分を少量含む。淘汰されていない）
7. 灰色極細砂（礫をまばらに含む。淘汰されていない）

0 2m



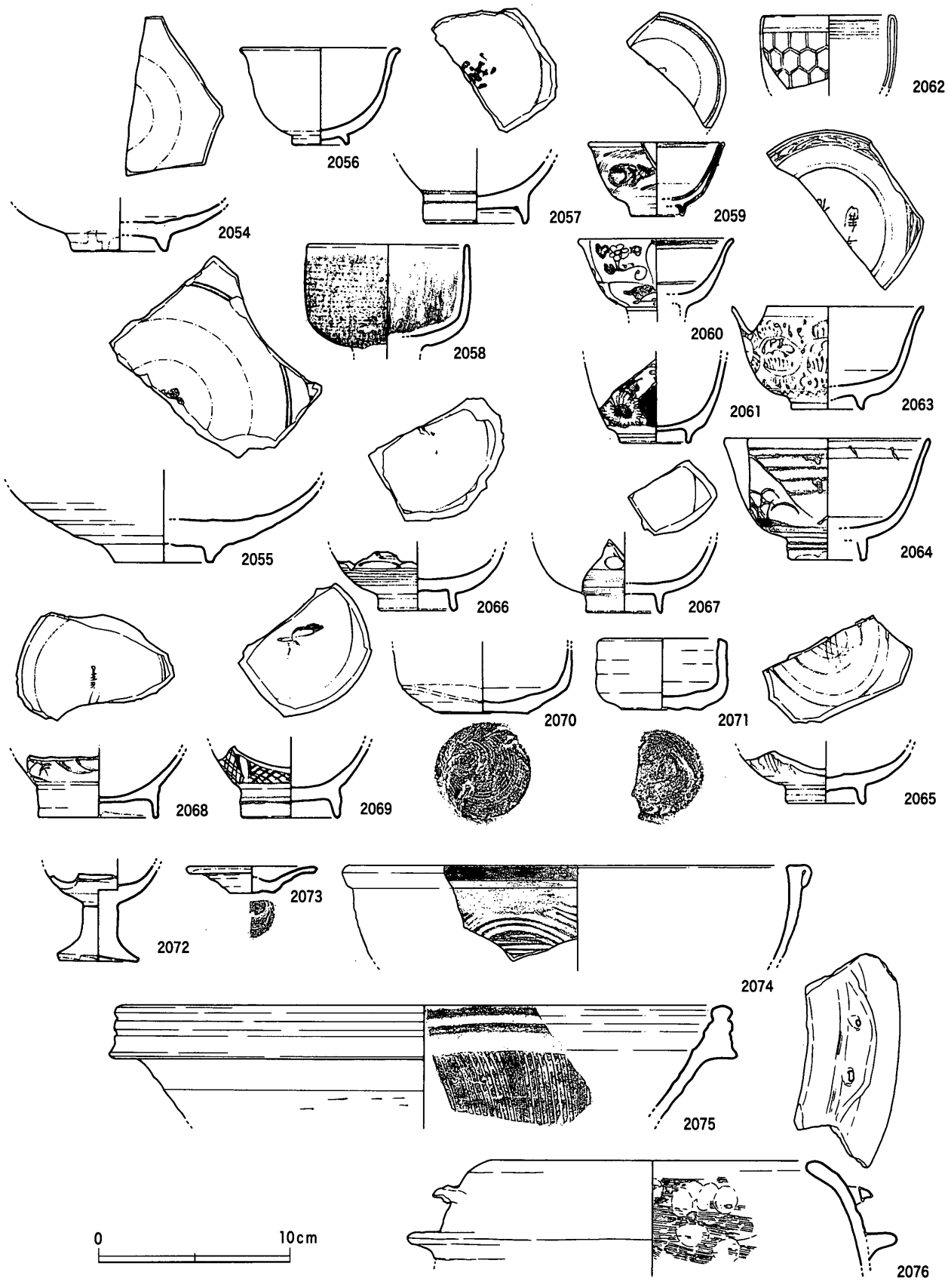
第352図　SDf97断面図（1/40），出土遺物（1）（1/3）

ＳＤf106（第308・356～359図）

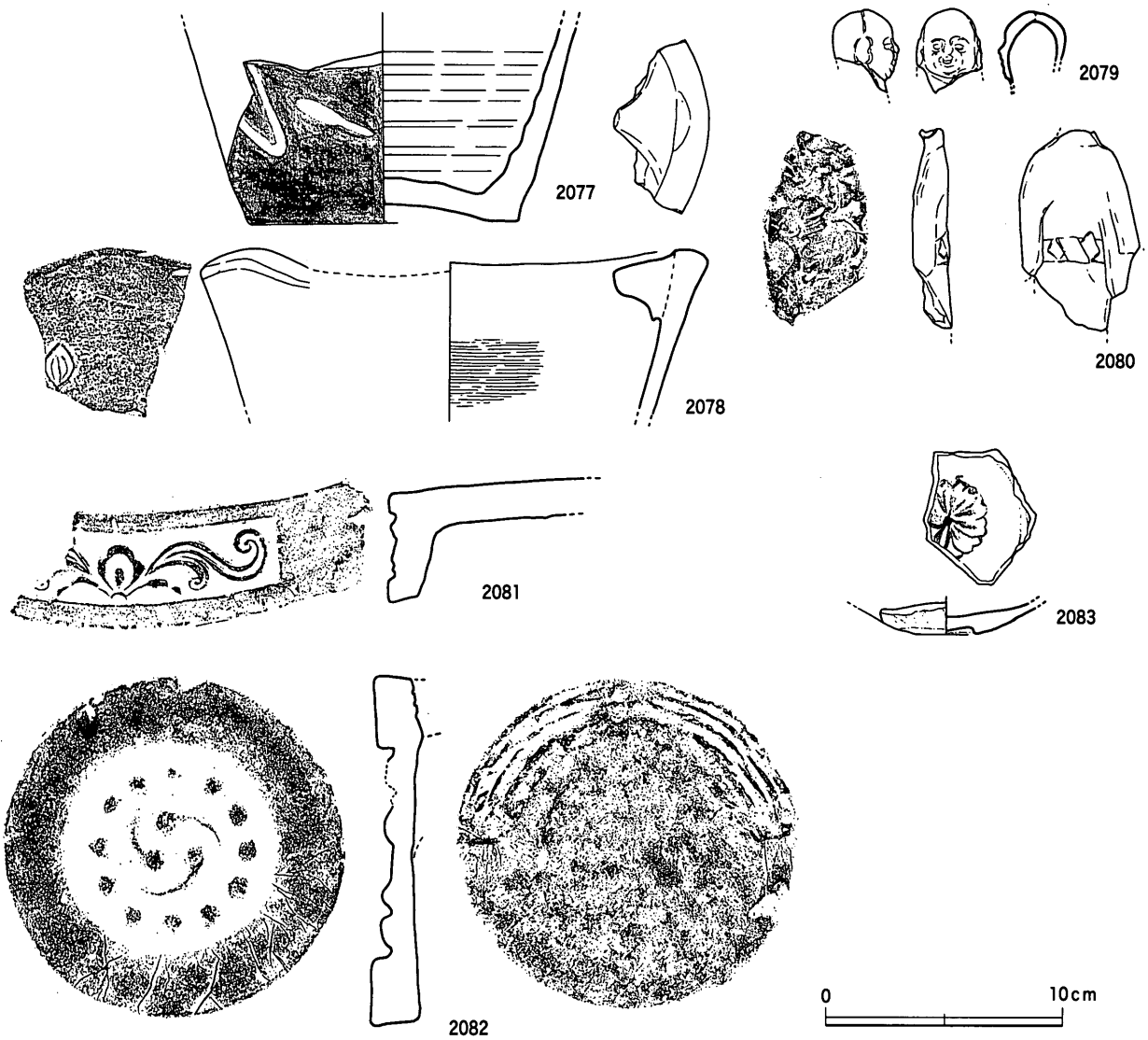
Ⅲ－６・７区で検出された溝であり，ＳＤf96の東延長上にあたる。また中世後半のＳＤf84とほぼ重複した位置にあり，ＳＤf84の埋土を切り込んで開削されている。明治21年の地籍図には表記されていない。規模は幅1.64ｍ，深さ0.46ｍを測り，断面Ｕ字形を呈する。埋土は粘質土層と砂層が交互に堆積しており，また第６層より上位の層と第７・８層とはやや不整合な在り方を示すため，埋没過程で１回掘り直し（浚渫）が行われた可能性を指摘できる。杭列や石組みなどの護岸施設は確認できなかった。

主な出土遺物には，肥前系陶器皿（**2090**）・碗（**2094・2095**）・鉢（**2105・2106**），肥前系磁器皿（**2091～2093**）などがある。近代以降の新しい遺物が全く含まれておらず，これらの遺物が示す18世紀前葉～中葉には埋没したものと考えられる。これは，地籍図に記載されていないことと一致する。

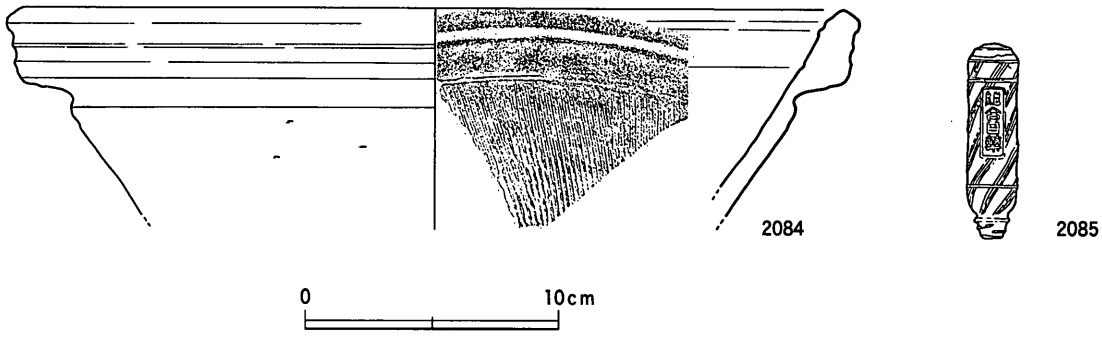
この他，ＳＤf84ならびにより先行するＳＤf18から二次的に移動したと考えられる中世遺物が，かなり出土した。土師質土器小皿（**2086・2087**）・杯（**2088**）・香炉（**2097**）・擂鉢（**2102**）把手付鍋（**2107**）・鍋（**2108**），十瓶山窯産須恵器椀（**2096**），楠井産擂鉢（**2098**）・甕

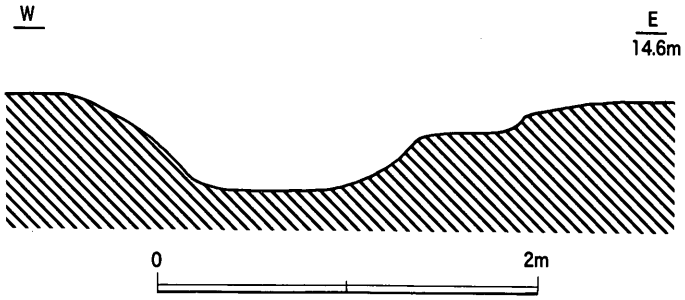


第353図　SDf97出土遺物（2）（1/3）

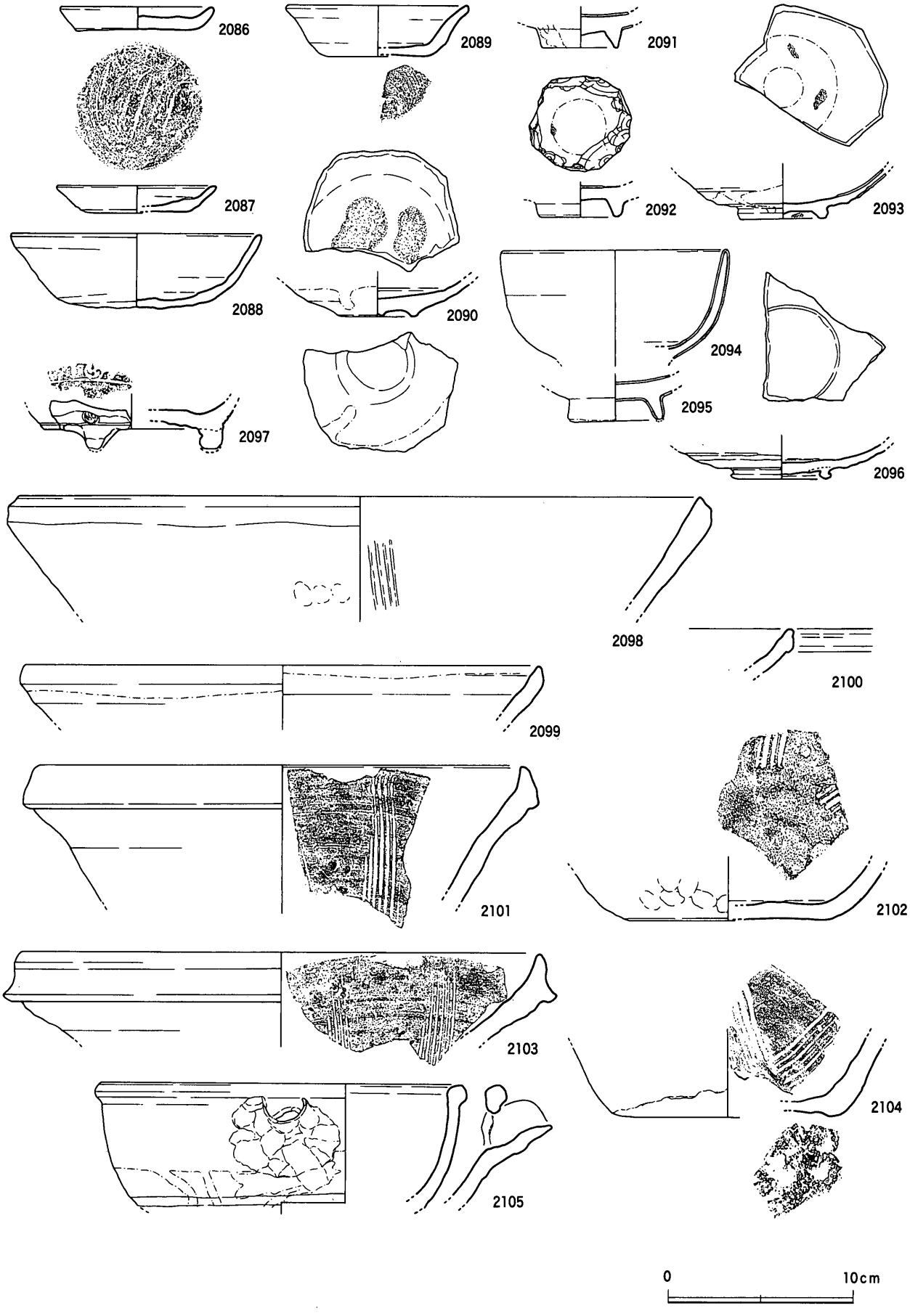


第354図　SDf97出土遺物（3）（1/3）

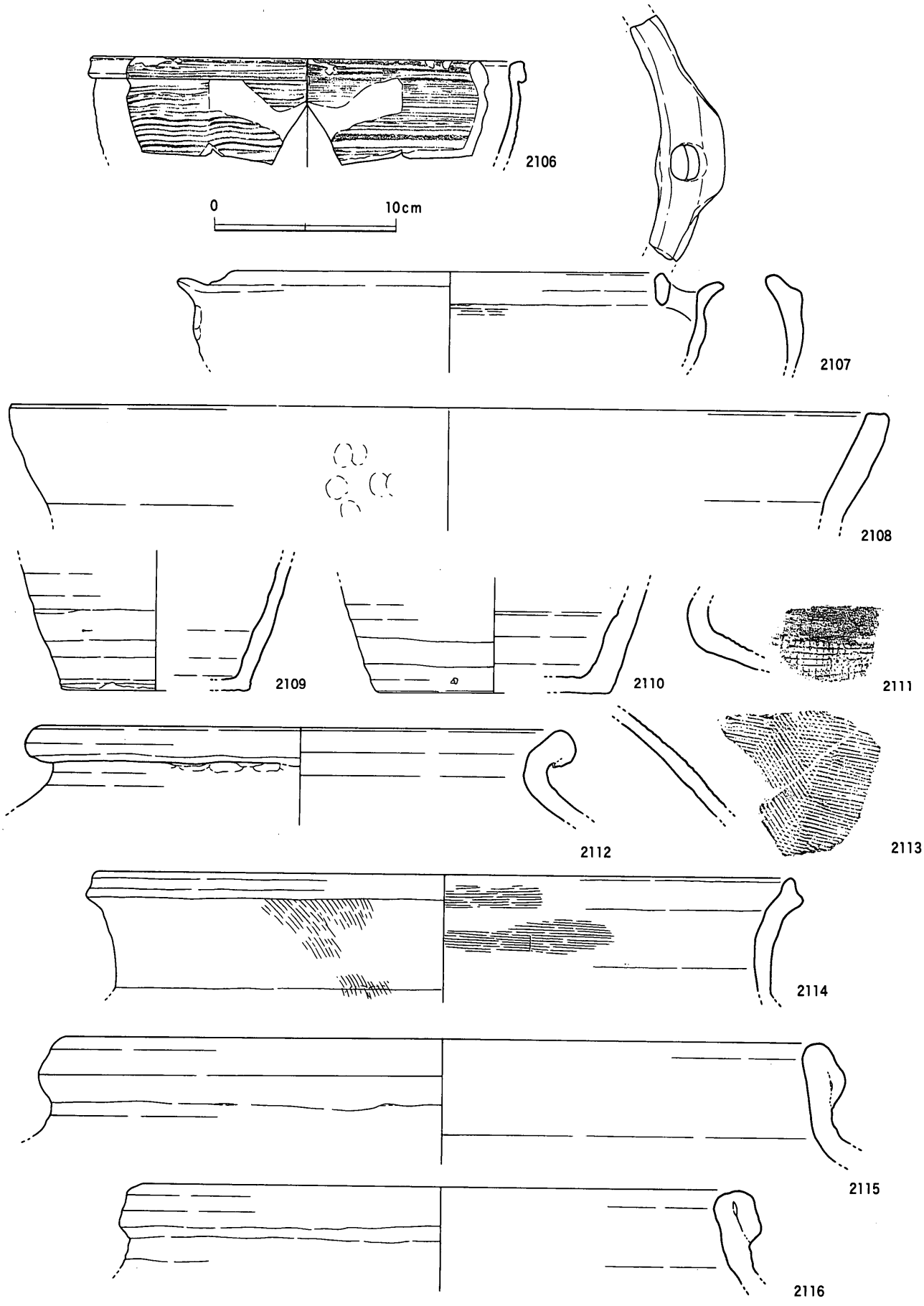




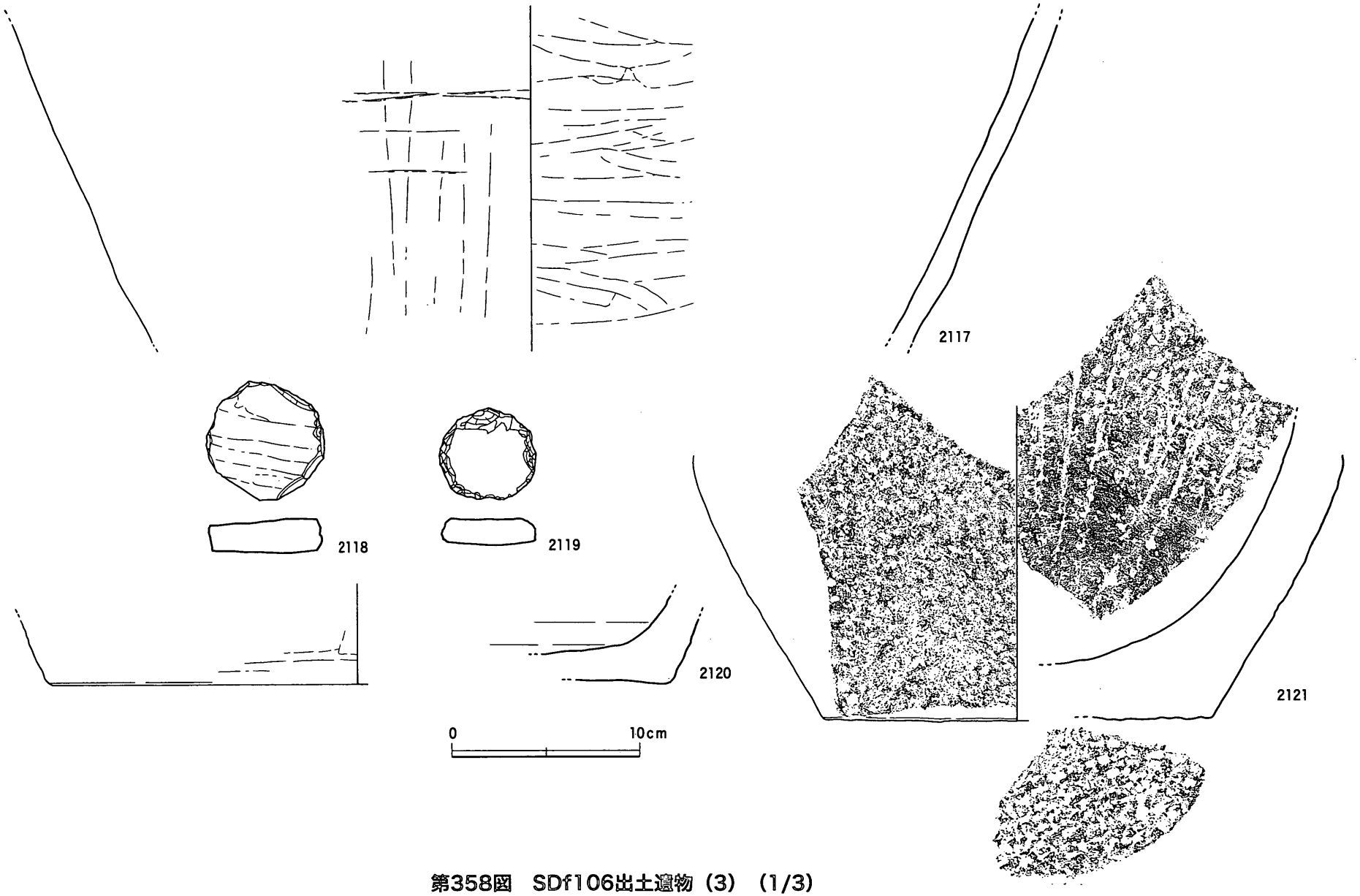
第355図　SDf99断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第356図　SDf106出土遺物（1）（1/3）

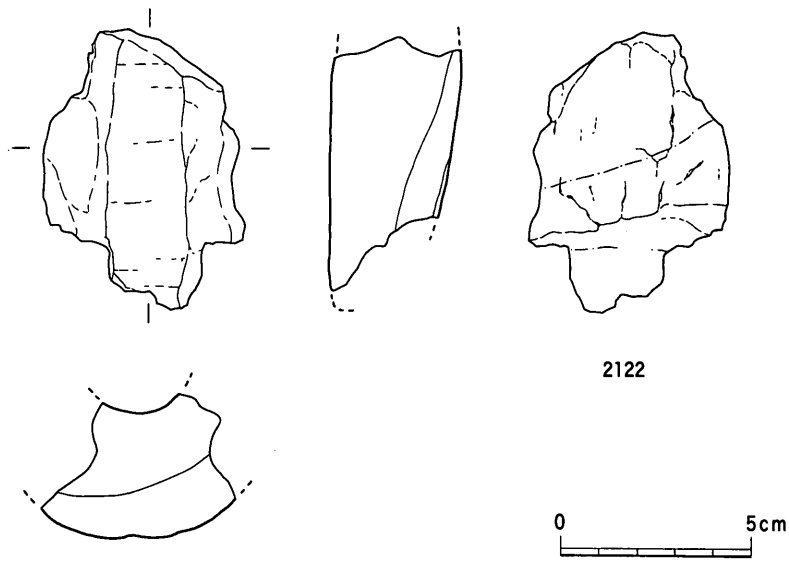


第357図　SDf106出土遺物（2）（1/3）

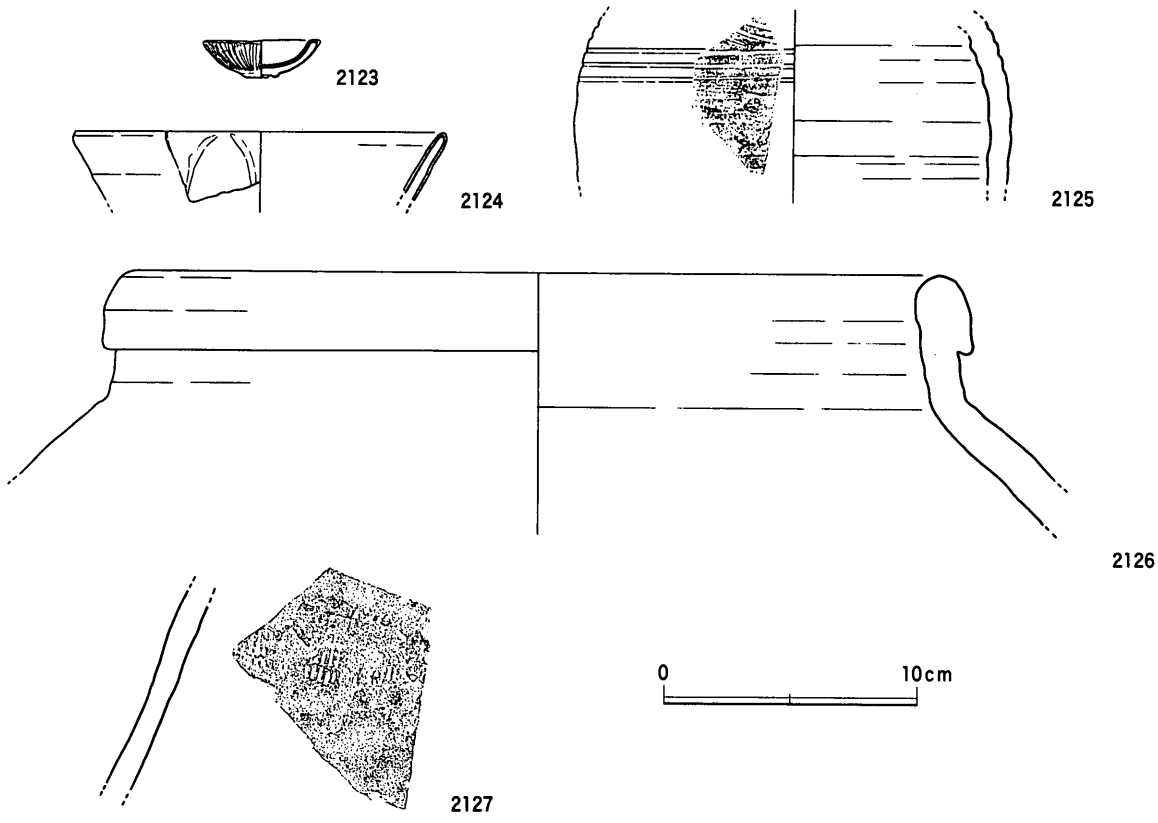


第358図　SDf106出土遺物（3）（1/3）

(2112)，東播系須恵器捏鉢(2099・2100)・甕(2113)，備前焼皿（2089）・擂鉢(2101～2104)・壺(2109・2210)・甕(2115～2120)，亀山焼甕(2111・2114)，石鉢(2121)，羽口(2122)などがある。2086～2088・2096・2099・2100・2111・2113は中世前半（13世紀）の土器である。2097は，沈線で画された体部外面下端の文様帯に，巴文（陽刻）の押印を施す。2101・2103・2104は間壁編年Ⅳ期後半の擂鉢である。2108は頸部の屈曲が弱いものの，外面と内面の屈曲状況に差異はみられない。また口縁端部に水平方向の平坦面が明確に作出されており，口縁部が僅かに内弯傾向を示すことから，鉄鍋模倣形態（楠井Ｂ類）を祖形とする系統とみられる。2115・2116は間壁編年Ⅳ期後半の甕であり，擂鉢と同じ年代観を示す。2118・2119は備前焼甕の体部を転用・加工した円盤状土製品である。2121は安山岩製の石鉢である。外面には体部・底部ともに５㎜程度の敲打痕がみられ，内面には敲打



第359図　SDf106出土遺物（4）（1/2）



第360図　SDf100・106交差部出土遺物（1/3）

の後に卸し目状の条線が施される。体部内面下端付近を中心に使用痕（横方向の擦痕）が顕著である。**2122**は内径3.5㎝前後に復元できる羽口であり，先端付近の外面は被熱還元している。還元部分の境界は羽口に対して斜めになっており，羽口の装着状態を反映している可能性がある。

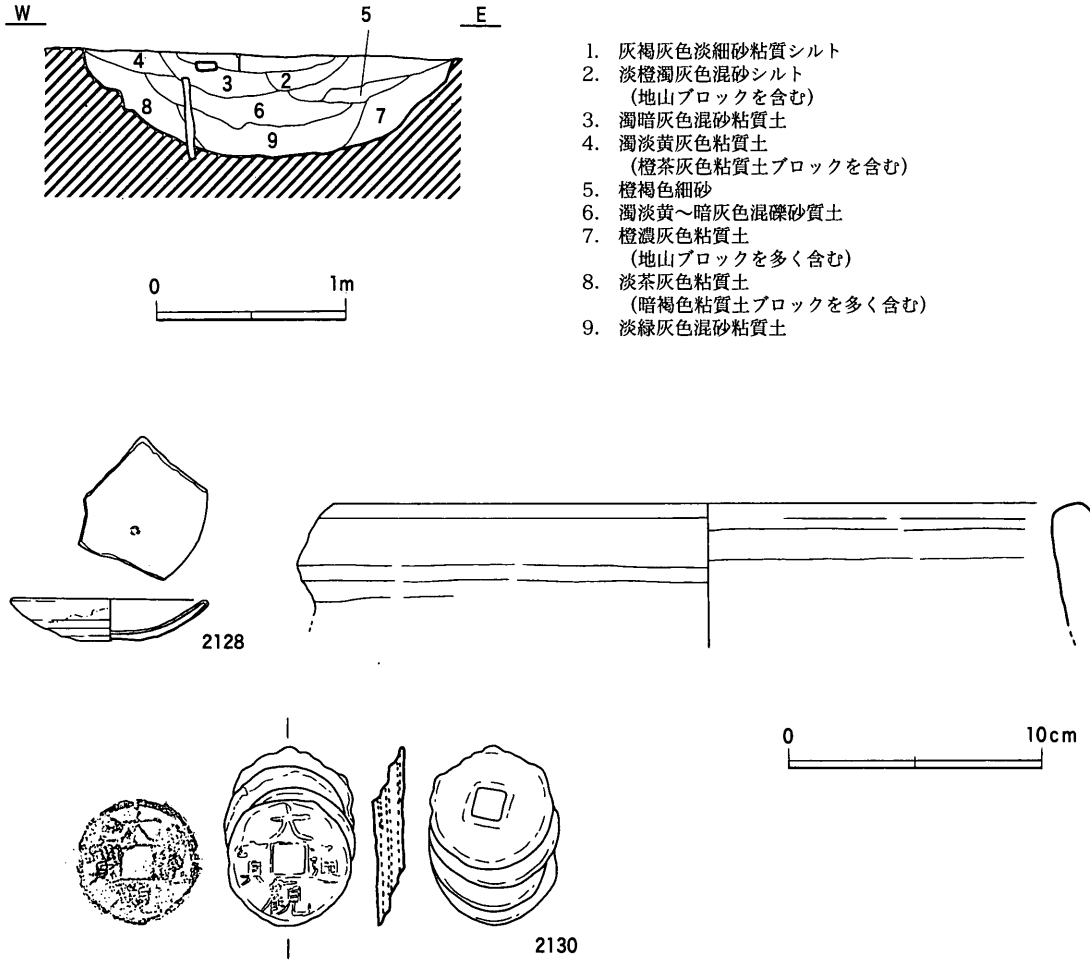
ＳＤf100（第360・361図）

Ⅲ－６・７・８区で検出された溝であり，坪界線上にはないが主軸方位は周辺地割と同じである。明治21年の地籍図には水路として記載されている。Ⅲ－７区でＳＤf106と直角に交差しており，ＳＤf106を切り込んでいる。Ⅲ－８区ではＳＤf107と繋がっており，同時併存の可能性が高い。またＳＤf106交差部よりも北側では，中世後半のＳＤf83と重複した位置にある。中世前半以降の溝との切り合いから，先後関係を示すと以下のようになる。

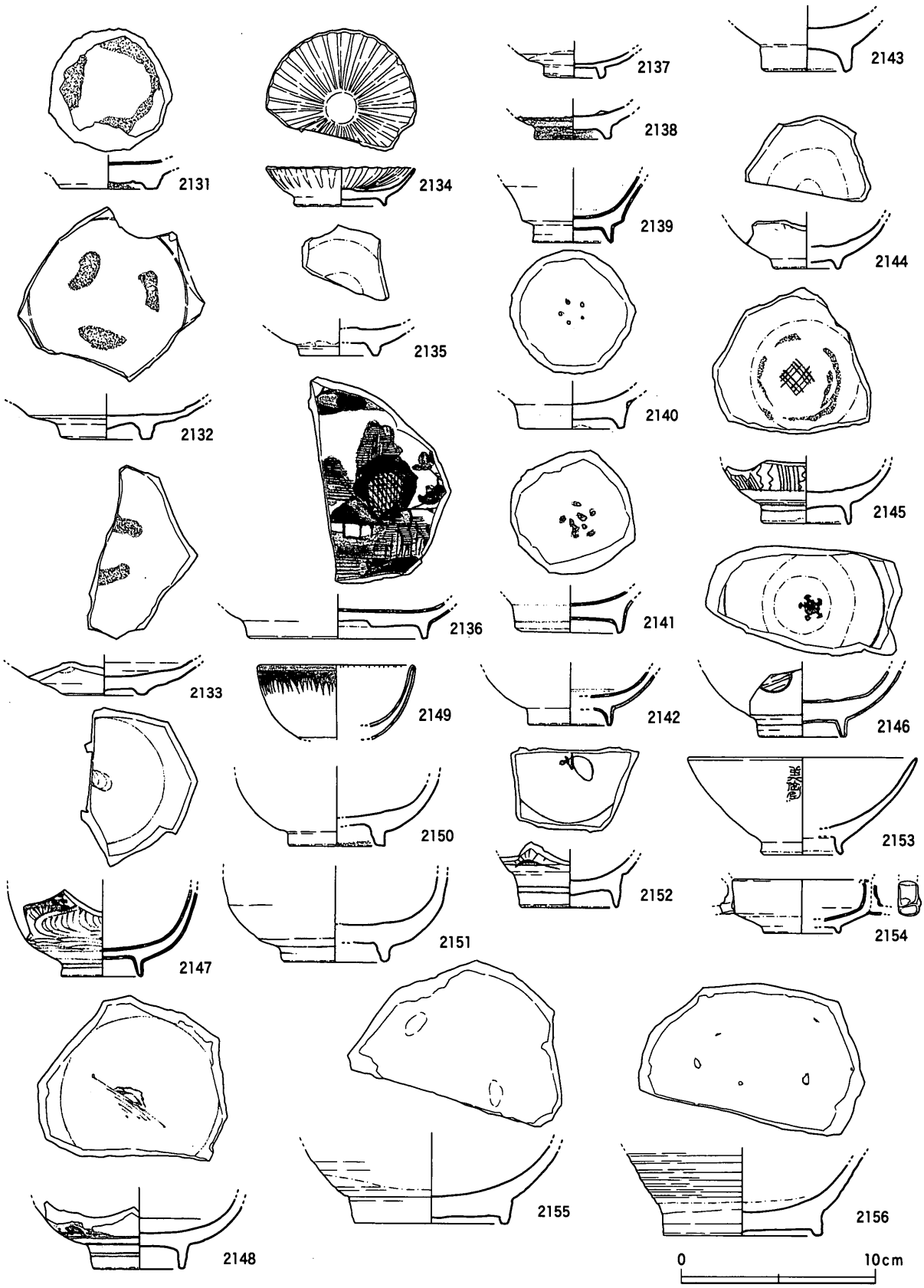
ＳＤf18（13世紀前葉～後葉）→ＳＤf83・84（15世紀中葉～16世紀中葉）→ＳＤf106（18世紀前葉～中葉）→ＳＤf100（18世紀前葉～昭和19年か）

規模は検出長78.5ｍ，幅1.0～1.82ｍ，深さ0.35～0.48ｍを測る。断面形態は逆台形ないしＵ字形を呈しており，底面で杭列が検出された。底面のレベルは14.2ｍ前後でほぼ一定しているが，周辺の溝との関係や地形からみて，南から北へという水流方向を想定してもよかろう。

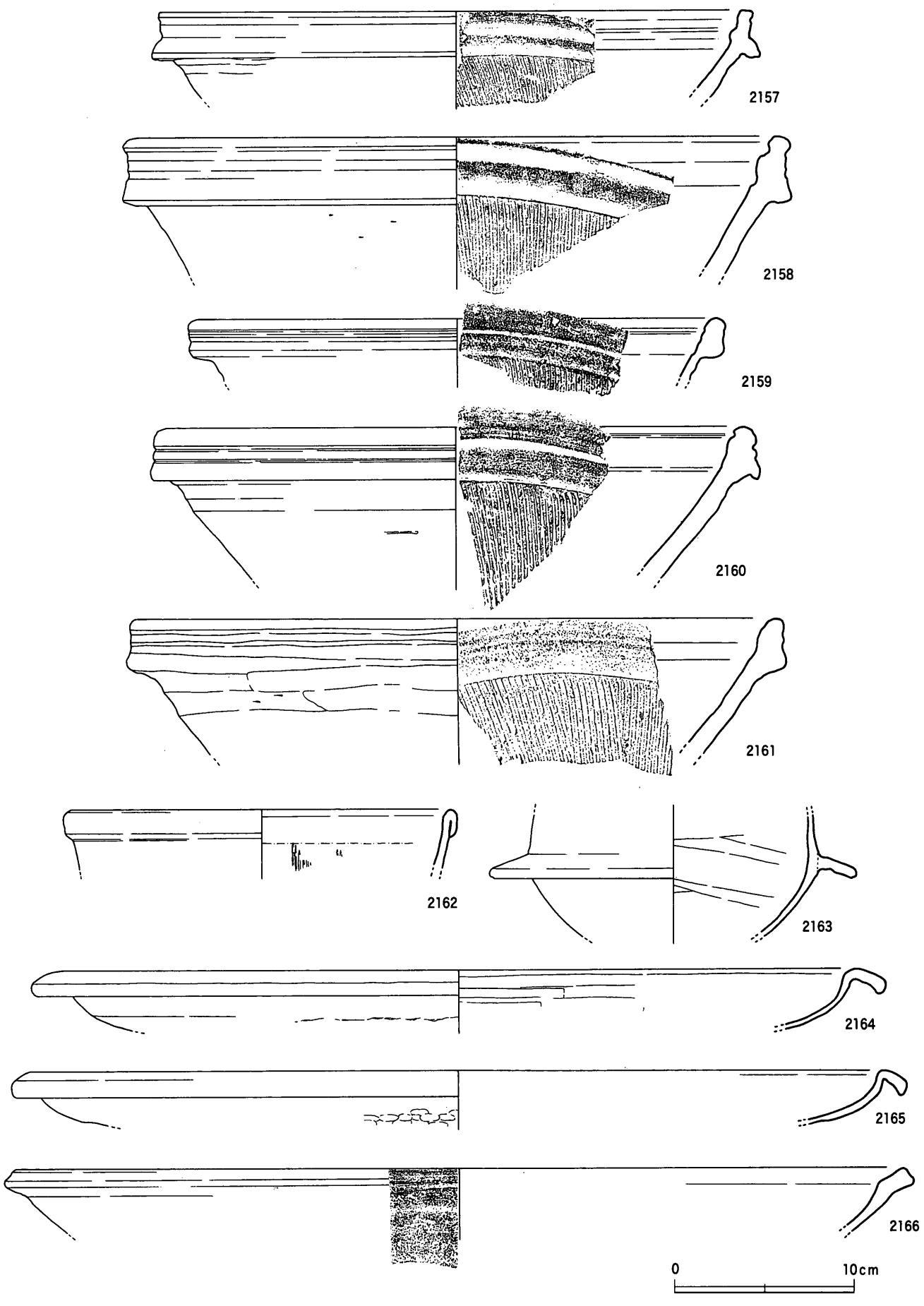
ＳＤf106との交差部分付近で，肥前系磁器紅皿（**2123**）が出土した。この他に，青磁碗（**2124**），



第361図　SDf100断面図（1/40），出土遺物（1/3，2130は2/3）



第362図　SDf107・108出土遺物（1）（1/3）



第363図　SDf107・108出土遺物（2）（1/3）

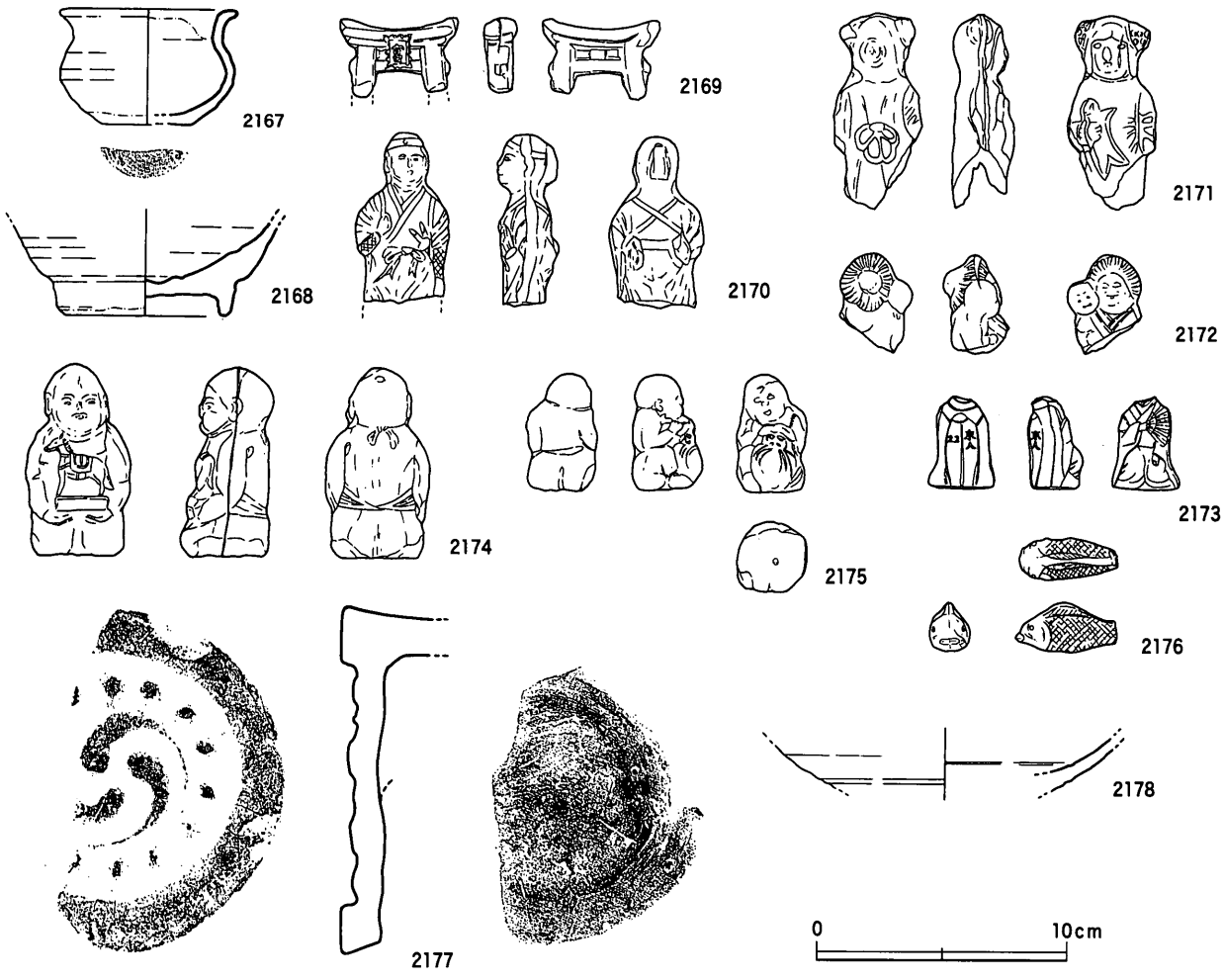
備前焼壺（**2125**）・甕（**2126**），常滑焼甕（**2127**）などの中世土器・陶磁器が出土した。これらはＳＤf18・83・84から二次的に混入したものであろう。またＳＤf106交差部よりも南側で，信楽系陶器灯明皿（**2128**），備前焼甕（**2129**），大観通宝（**2130**）が出土した。大観通宝は1107年初鋳の北宋銭であり，４枚重なって出土したことから，中世段階で何らかのかたちで埋納されていたものが二次的に移動した可能性も考えられよう。

ＳＤf107・108（第77・362～365図）

Ⅲ－１・８・９区で検出した，東西方向の坪界線上に位置する溝である。２条平行して延びており，切り合い関係はＳＤf107がＳＤf108の埋土を切り込んでいるため，ＳＤf108→ＳＤf107という先後関係が指摘できる。Ⅲ－８区西半部でＳＤf107からＳＤf100が北に分岐する。明治21年地籍図には水路として記載されているが，おそらくＳＤf107がこれに該当するのであろう。

ＳＤf107は，幅1.76～2.2ｍ，深さ0.42～0.73ｍを測り，断面形態は不整形な逆台形を呈する。南側底面の一部に花崗岩の加工石材が据えられた状態で遺存しており，本来は石組み溝であったと推測される。溝内の埋土はバラスを多量に含んであり，これが底面にまで及んでいることから，人為的に一気に埋め戻された（おそらく飛行場造成に伴い）ことを示す。

ＳＤf108は，幅1.72～1.85ｍ，深さ0.18～0.74ｍを測り，断面は逆台形ないしＶ字形を呈する。



第364図　SDf107・108出土遺物（３）（1/4）

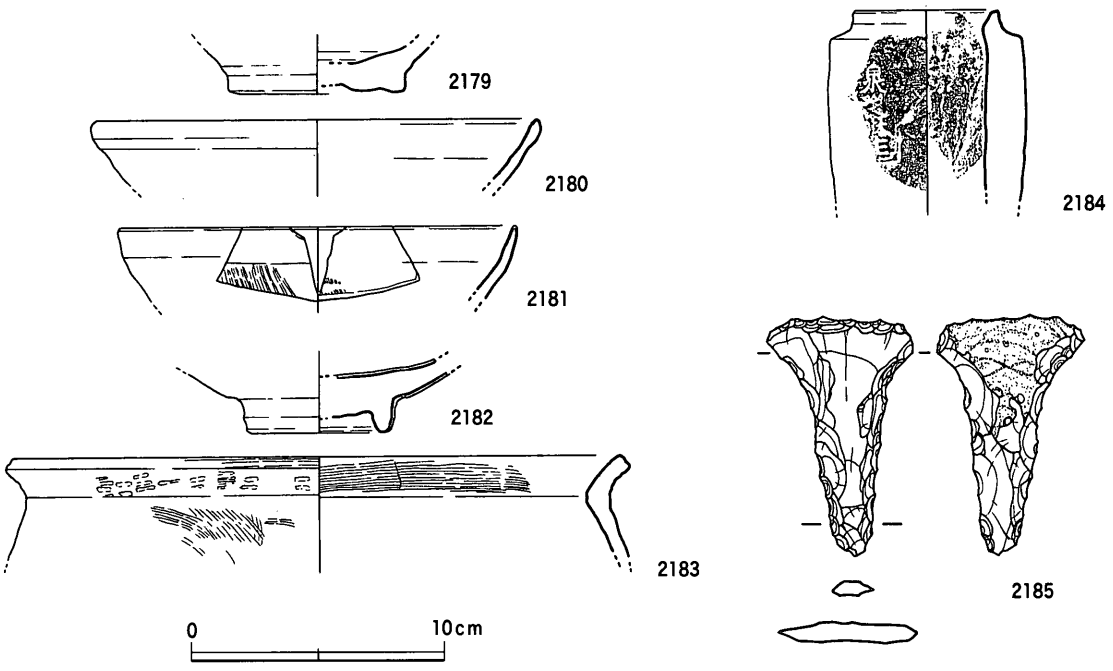
埋土は数層に細別できるが，中でも基盤層のブロック土を多量に含む土層が底面に近い部分まで厚く堆積している点が注目でき，人為的な埋め戻しが行われたことを示唆する。

主な出土遺物としては，肥前系陶器皿（2133），肥前系磁器皿（2131・2132・2134・2135）・磁器染付皿（2136），京・信楽系陶器碗（2137），瀬戸・美濃系陶器碗（2138～2141），肥前系陶器碗（2142・2143），肥前系磁器染付碗（2144～2152），磁器碗（2153）・杯（2154），瀬戸・美濃系陶器捏鉢（2155・2156），備前系陶器擂鉢（2157～2161），陶器擂鉢（2162），土師質羽釜（2163）・焙烙（2164・2165），瓦質焙烙（2166），陶器小壺（2167），肥前系磁器瓶（2168），土師質鳥居形（2169），白磁人形（2170～2175）・魚形（2176），軒丸瓦（2177），焼塩壺（2184）がある。肥前系陶磁器や瀬戸・美濃系陶器は18世紀前葉～19世紀代の所産であり，備前系擂鉢も概ねこれに対応する年代幅をもつ。

ミニチュア製品（2169～2176）は，いずれも合わせ型で成形されており，側縁部にバリ粘土が認められる。2169は「宮」と記された額が正面に掲げられた鳥居形である。2170は襷掛けで腰に大小を挿した武士像である。2171は中国人風の容姿で子供を抱いた女性像である。2172は子供を背負った女性像である。2173は扇を手に正座する女性像であり，背面に型押しで「京人22」とみえる。おそらく戦時統制下での製陶業者の登録番号とみられ，ＳＤf107の廃絶年代を示す資料との位置付けができる。2174は駒人形を抱いて正座する子供である。５月の節句の状況を表現しているものと思われ，これが妥当であれば男子像である。2175は達磨を抱えて座る子供像である。下面に焼成時の空気穴とみられる穿孔がある。2176は鯉と思われる魚形である。

焼塩壺（2184）は直立する分厚い体部と，玉縁状に段差をもって短く直立する口縁部からなる。内面には布の圧痕がみられ，体部外面には「泉州麻生」の刻印がある。形態や刻印の書体などが，高松城跡（西の丸町）第１遺構検出面下位層出土例に近似している。

この他，青磁碗（2178・2181・2182），白磁碗（2179・2180），土師質土器鍋（2183）な



第365図　SDf107出土遺物（1/3）

どの中世土器・陶磁器も出土している。隣接するＳＤf16からの混入であろう。

ＳＤf109（付図7・8）

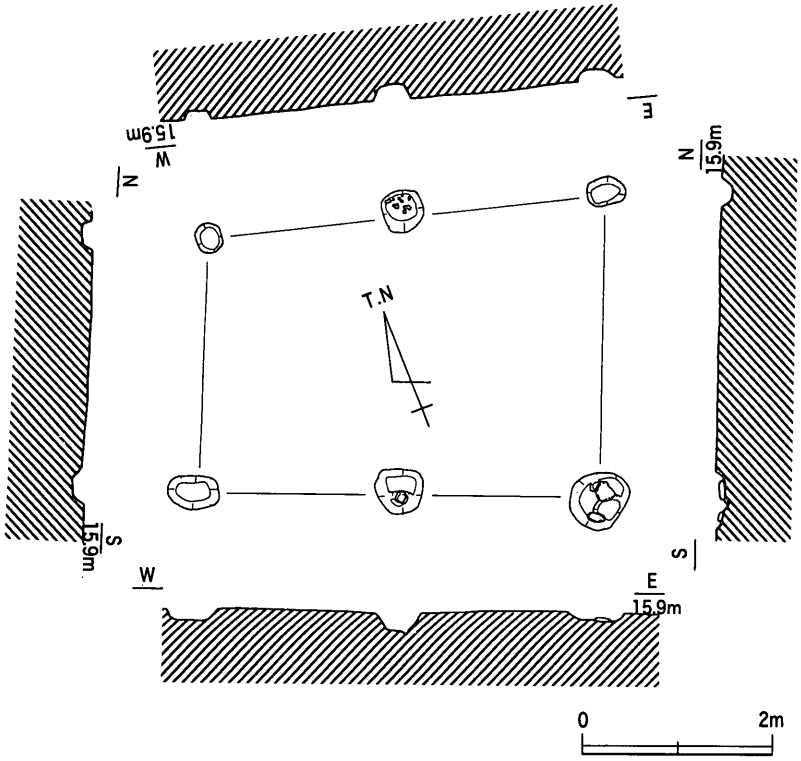
Ⅲ－6・8・9区において検出された，南北方向の坪界線上に位置する溝である。ＳＤf107・108と交差しており，溝内の埋土や石組の連続関係から，ＳＤf107と同時に廃絶した遺構と判断できる。また溝のプランは，交差部分を境に流路の位置がクランク状に喰い違っている。この喰い違いは，明治21年地籍図でも明瞭に表現されている。溝の規模は，幅3.6～5.0m，深さ0.8～1.08mを測り，溝内部には花崗岩の加工石材などを用いた石組みが認められる。石組みの内法は幅0.8～1.25m，高さは遺存状態の良好な箇所で0.9mを測る。溝内には多量のバラスが厚く堆積しており，飛行場造成時に埋め戻されたと考えられる。

3．建物

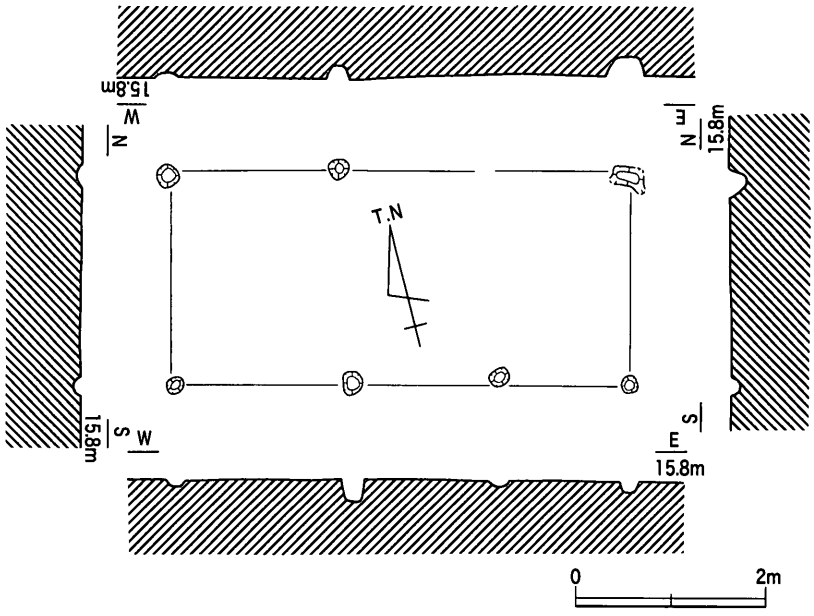
ＳＢf59（第366図）

Ⅱ－17区中央部，ＳＤf92の東側に隣接して検出された掘立柱建物である。規模は，1×2間（梁間2.64～3.15m，桁行4.2m，床面積12.15㎡）を測り，主軸方位はW－11.5°－Nである。柱穴の平面形態はやや不定形な隅丸方形であり，深さは概ね一定である。一部の柱穴底面には根石状に小礫が詰められていた。

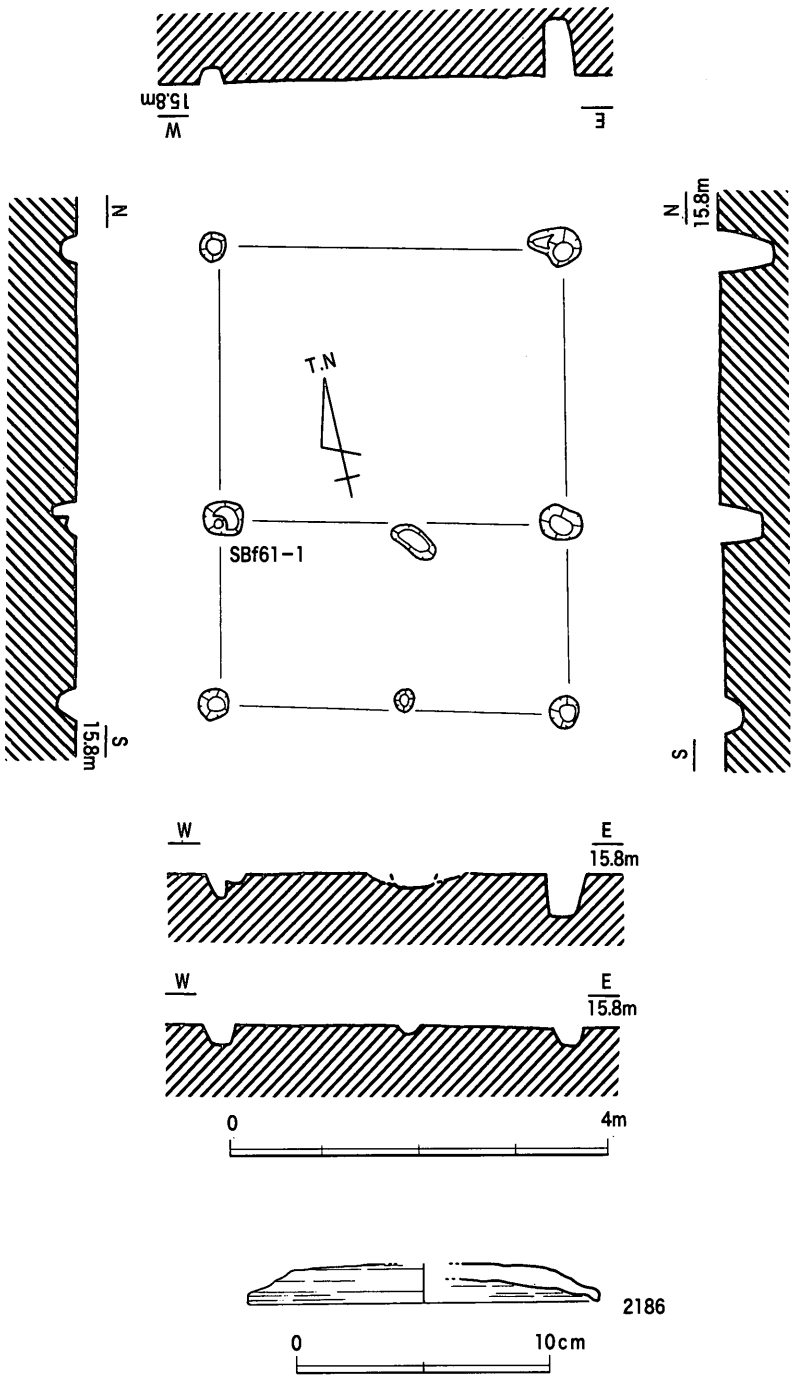
建物周辺は，明治21年地籍図では宅地に登録されており，周辺に土坑が集中することと併せて考古学的にも宅地の存在を示唆する遺構が多いとい



第366図　SBf59平・断面図（1/80）



第367図　SBf60平・断面図（1/80）



第368図　SBf61平・断面図（1/80），出土遺物（1/3）

える。ただし文化15年順道図会では，付近は田と表記されており，史料的には宅地の上限は19世紀前葉以降ということになる。

ＳＢf60（第367図）

Ⅱ－25区南端部東半，ＳＤf90の南側で検出された掘立柱建物である。規模は，1×3間（梁間2.25m，桁行4.82m，床面積10.84㎡）を測り，主軸方位はW－14°－Nである。柱穴の平面形態は歪な円形ないし楕円形であり，深さは一定しておらず，柱間距離もかなりばらつきがある。

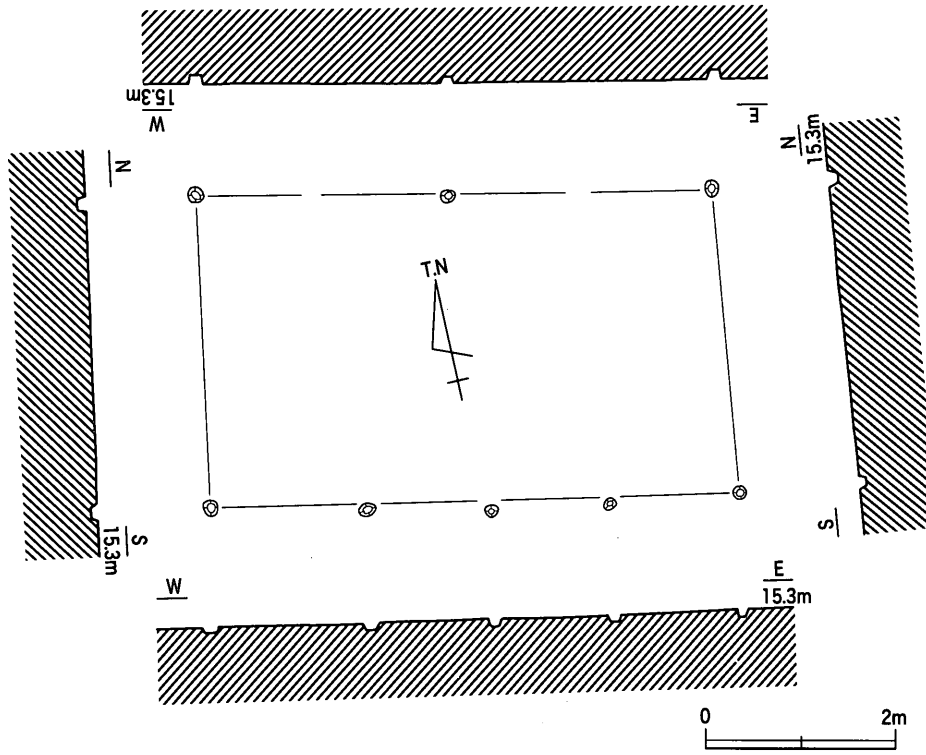
ＳＢf61（第368図）

Ⅱ－25区南端部東半，ＳＤf90の南側で検出された掘立柱建物である。ＳＢf60の東側に隣接している。規模は，1×2間（梁間2.1m，桁行2.72m，床面積5.71㎡）を測り，南辺に庇を伴う。主軸方位はW－15°－Nである。柱穴の平面形態は円形ないし楕円形を呈しており，柱筋は揃っているが深さは一定していない。遺物は須恵器杯蓋（2186）が出土した。平坦な天井部から屈曲して口縁部に至っており，8世紀後葉～9世紀前葉の所産と考えられる。

ＳＢf60・61の周辺は，明治21年地籍図では田となっており，西側のＳＤf92東辺部が宅地として登録されている。文化15年順道図会でも田として表現されており，19世紀段階のいずれの史料とも合致しない。

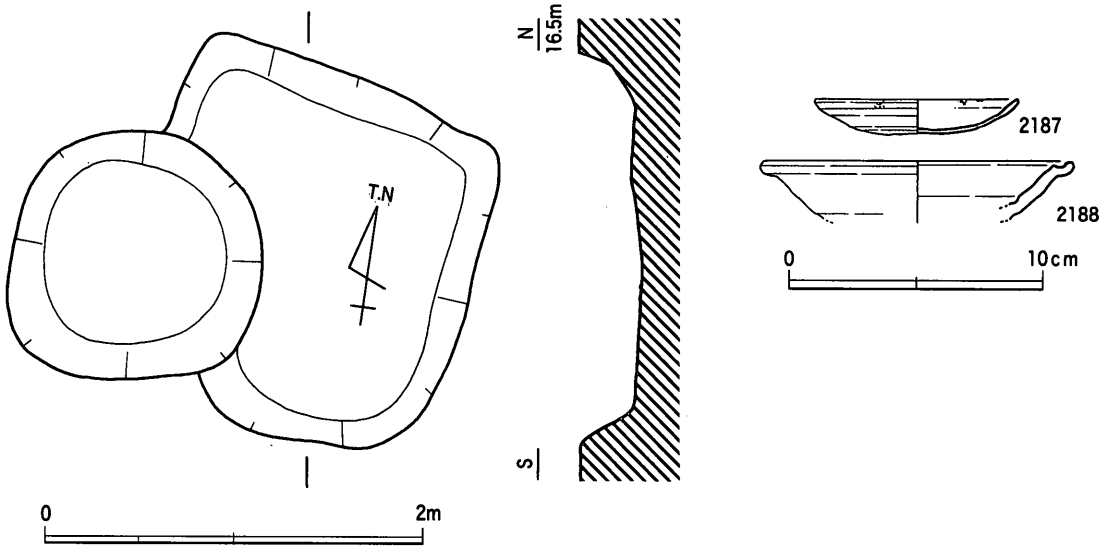
ＳＢf62（第369図）

Ⅱ－24区南東部で検出された，1×4間（梁間3.2m，桁行5.45～5.6m，床面積17.68㎡）の掘立柱建物である。ＳＤf90の北側に位置しており，ＳＢf60・61とは所在する坪付が異なる。主軸方



第369図　SBf62平・断面図（1/80）

位はW－11°－Nである。柱穴の平面形態は円形を呈しており，深さはほぼ一定している。遺物が出土していないため，時期的な位置付けは不明だが，隣接する中世前半の建物群（区画２）や中世後半の建物群（区画４－ｅ）とは若干の空閑地を隔てて存在することから，これらと積極的に結び付けることも躊躇を覚える。一応，近世遺構として報告しておくが，他の時期である可能性も否定できない。なお，明治21年地籍図では付近は宅地にはなっていない。



第370図　SKf133平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

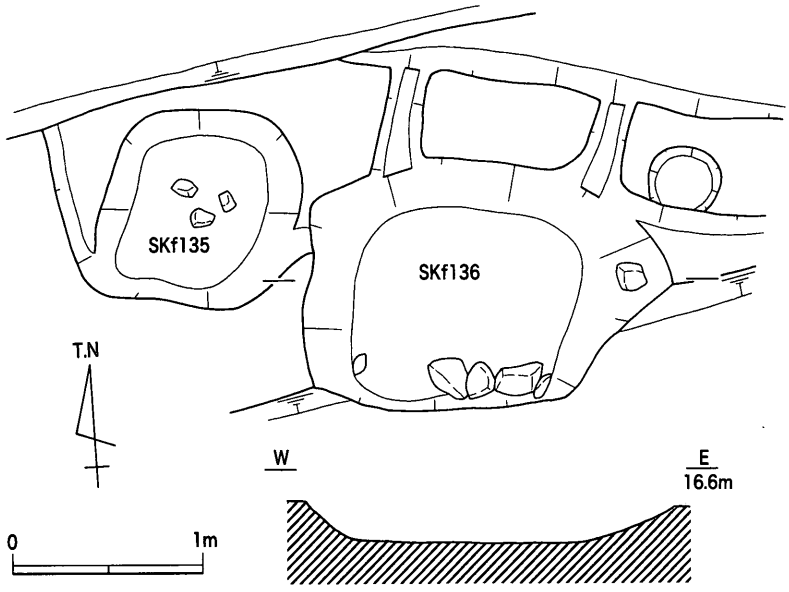
4．土坑

(l) II－18区土坑群（ＳＫfl31～139，ＳＸcl4）

ＳＤf89・90の両側肩部に近接して帯状に10基の土坑が分布する。ＳＤf89・90は坪界溝であるため，土坑は各坪の縁辺に分布していることになる。なお文化15年順道図会や明治21年地籍図では，付近の地目は田として表記されている。土坑の平面形態には長方形・方形・隅丸方形に近い円形があり，前２者はＳＤf89・90に平行する主軸をもつ。各土坑の概要については，一覧表を参照されたい。

ＳＫf133（第370図）

ＳＤf89・90北側で検出された，やや歪な方形プランを呈する土坑である。西側をＳＫfl32によって破壊されている。規模は南北1.9ｍ，東西1.8ｍ，深さ0.33ｍを測る。主な出土遺物には，備前焼灯明皿（**2187**），肥前系陶器皿（**2188**）がある。**2187**は，油煙が口縁部に付着している。



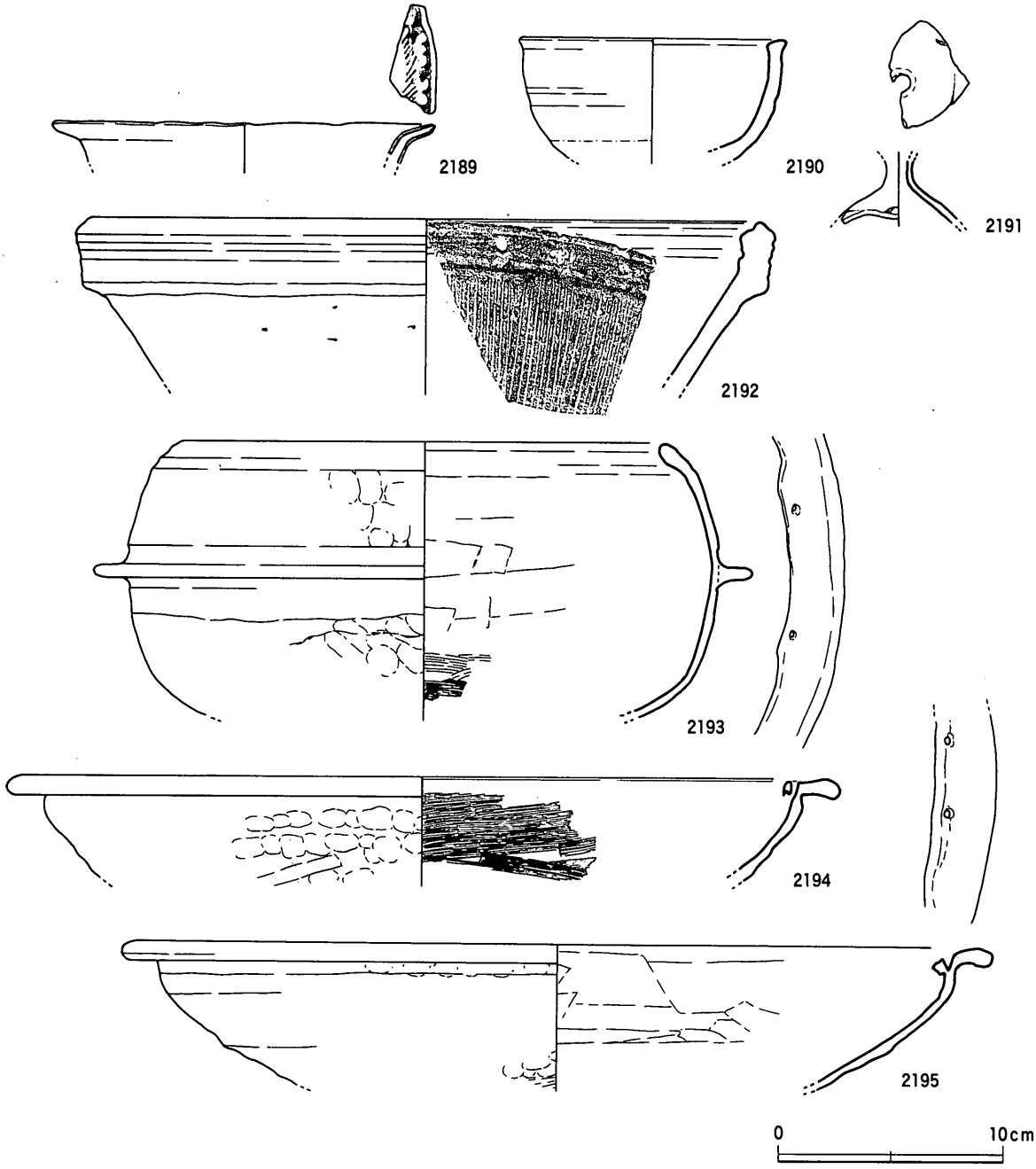
第371図　SKf136平・断面図（1/40）

ＳＫf136（第371～373図）

ＳＤf89・90南側で検出された，長方形プランの土坑である。規模は長径1.95ｍ，短径1.3ｍ以上，深さ0.43ｍを測る。北辺部から小溝が分岐しており，ＳＤf90に繋がる。主な出土遺物には，肥前系磁器染付鉢（**2189**）・瓶（**2191**），瀬戸・美濃系陶器鉢（**2190**），備前系陶器擂鉢（**2192**），土師質羽釜（**2193**）・焙烙（**2194・2195**），丸瓦（**2196・2197**），平瓦（**2198**），軒丸瓦（**2199**）がある。**2190**は19世紀前葉に位置付けられ，**2195**にみる内耳円孔の退化傾向（ｂ型式）と整合する。これらから，ＳＫfl36の年代は19世紀前葉と考えられる。

(2) II－17区土坑群

ＳＤf92西側で７基，ＳＤf92東側で21基の土坑が検出された。ＳＤf92の西側は溝の肩部（すなわち坪内の縁辺）に沿って帯状に分布するのに対して，東側は溝肩部周辺にとどまらず，数カ所に集中傾向を示しつつより広い範囲に分布するのが特徴である。文化15年順道図会では付近は田であるが，明治21年地籍図ではＳＤf92西側が田，東側が宅地となっており，東側の土坑群に隣接してＳＢf59が検出されていることも考慮すると，両者の違いは土地利用形態の差異を示す蓋然性が高い。土坑の平面形態は，西側が方形ないし長方形を基調として楕円形も少数みられるのに対し，東側は円形ないし楕

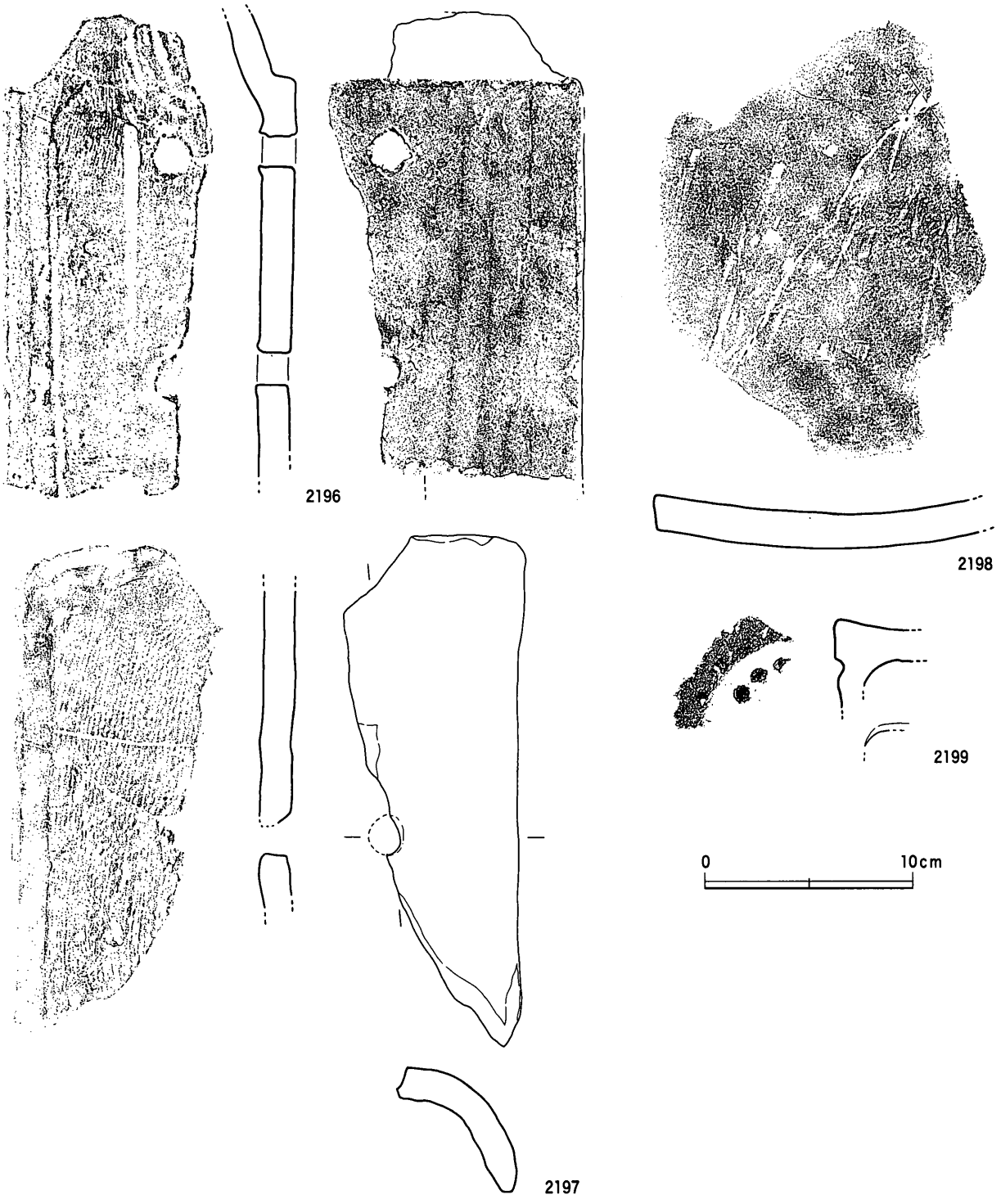


第372図　SKf136出土遺物（1）（1/3）

円形を基調として少数の方形・長方形がみられ，やはり対照的な在り方を示す。なお，これらの土坑群の形成年代は，出土遺物から18世紀後葉を上限として19世紀代に及ぶことがわかるが，18世紀後葉～19世紀初頭の遺物の多くは備前系陶器擂鉢であり，他の陶磁器よりも長期間の使用の後に廃棄された可能性がある。これは，宅地の上限にもかかわる問題であり，遺物の種類によっては遺構の年代を直接示すものではないことを考慮しておく必要があろう。

SKf141（第374図）

ＳＤf92西側でＳＫf142～144と近接した状態で検出された土坑である。切り合い関係を踏まえて先後関係を示すと，ＳＫf143→ＳＫf142→ＳＫf141となる。平面形態は円形，断面形態は逆台形であり，径1.8ｍ，深さ1.1ｍを測る。出土遺物には，軒平瓦（**2200**），備前系陶器擂鉢（**2201**）がある。



第373図　SKf136出土遺物（2）（1/3）

2201 は明石産擂鉢であり，白神分類のⅡ型式（18世紀後葉～19世紀初頭）にあたる。

ＳＫf150（第375図）

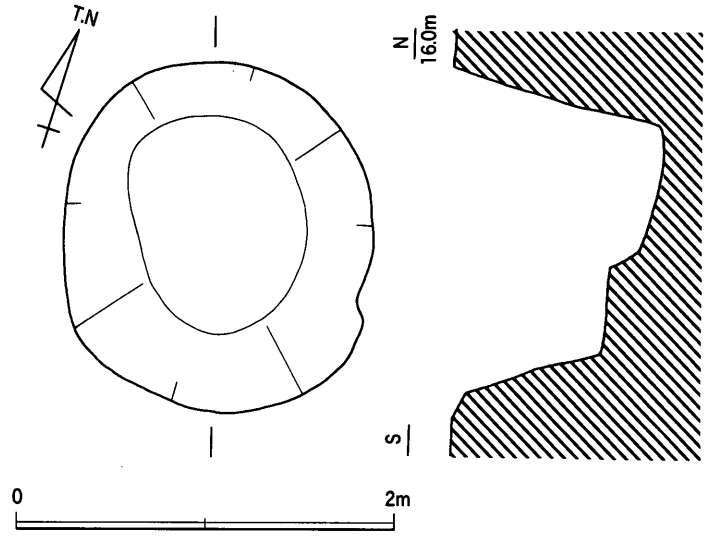
ＳＤf92の東肩部に近接して検出された土坑である。位置的には，明治21年地籍図の宅地の北西隅に該当するものと推測される。平面形態は不整円形，断面形態は逆台形であり，規模は径1.06ｍ，深さ0.54ｍを測る。底面の南側は２段落ちとなっている。出土遺物には，白神分類Ⅱ型式の備前系（明石もしくは堺）陶器擂鉢（**2202**）がある。

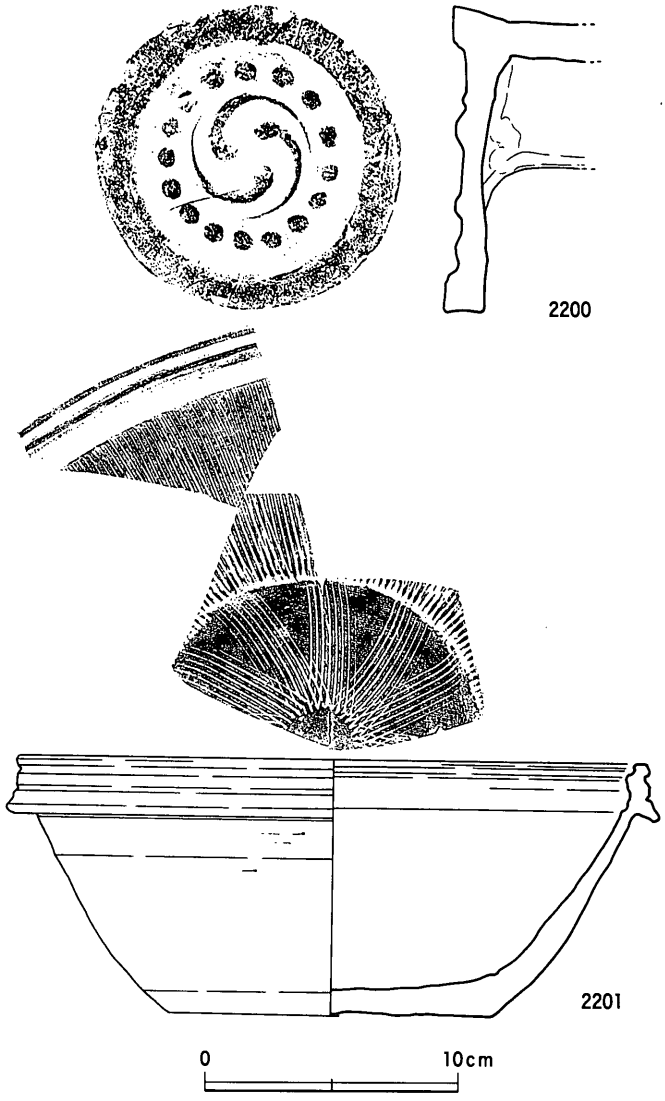
SKf165・166（第376図）

ＳＤf92の東側で検出された土坑である。明治21年地籍図の宅地の北辺中央にあたるものと推測される。２基連続しており，南側のＳＫf166が北側のＳＫf167を切り込んでおり，ＳＫf165→ＳＫf166の先後関係が確認できる。ＳＫf165は平面円形，断面逆台形を呈しており，径1.0ｍ，深さ0.3ｍを測る。埋土には基盤層のブロック土と礫が含まれており，人為的に埋め戻されたと考えられる。ＳＫf166は平面円形，断面深い逆台形を呈しており，径1.42ｍ，深さ1.2ｍを測る。埋土は淡灰色砂質土の単層である。遺物は，ＳＫf165から瀬戸・美濃系陶器碗（**2203**）が出土している。高台の高い広東形であり，19世紀前半の所産と考えられる。

SKf156・158（第377図）

ＳＤf92の東肩部に近接して検出された土坑である。２基切り合っており，ＳＫf158→ＳＫf156の先後関係が確認できた。ＳＫf156は平面瓢箪形（隅丸方形の南東隅に円形の張り出し），断面逆台形を呈しており，規模は長径1.8ｍ，短径1.24ｍ，深さ0.39ｍを測る。埋土には基盤層のブロック土が含まれている。人為的な埋め戻しによるものであろう。ＳＫf158も平面瓢箪形，断面浅いＵ字形を呈しており，長径1.28ｍ，短径0.77ｍ以上，深さ0.16ｍを測る。埋土は淡灰白色砂質土である。遺物は，ＳＫf156から備前系陶器擂鉢（**2204**）が出土している。白神分類Ⅱ型式に該当する堺擂鉢であり，18世紀後半～19世紀初頭の所産である。

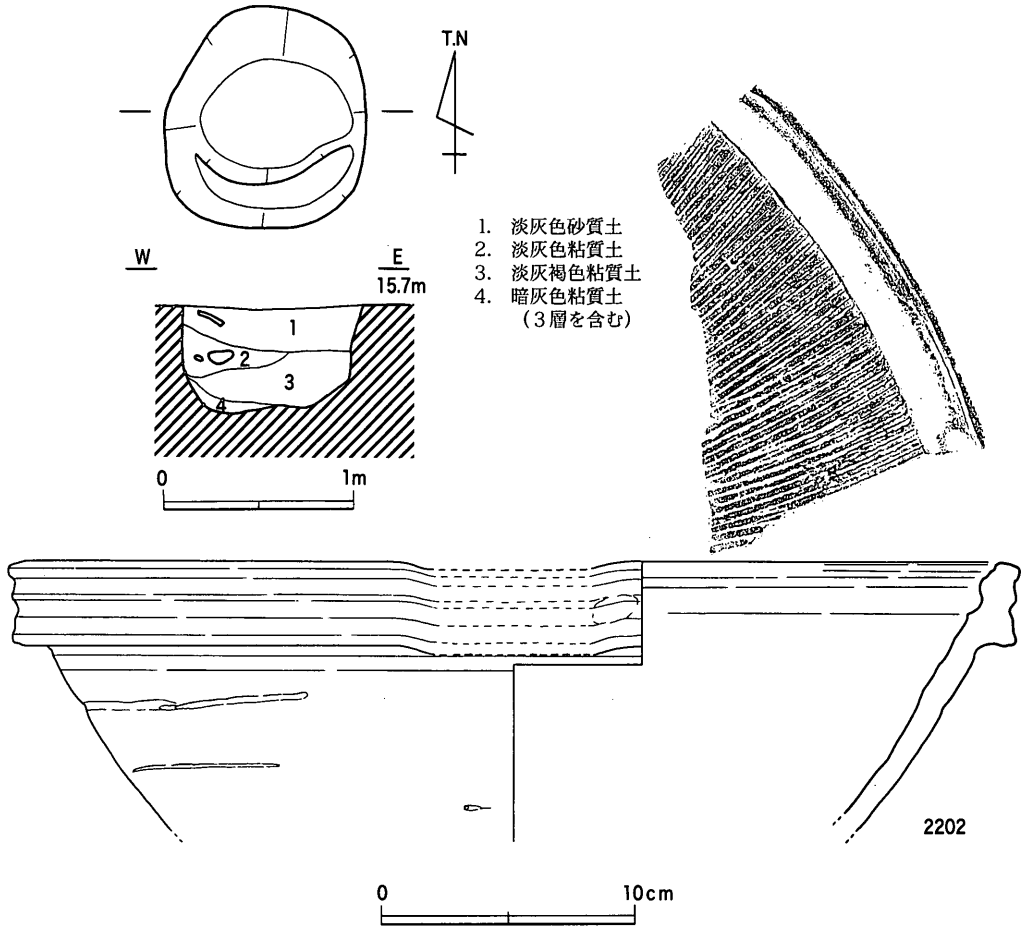




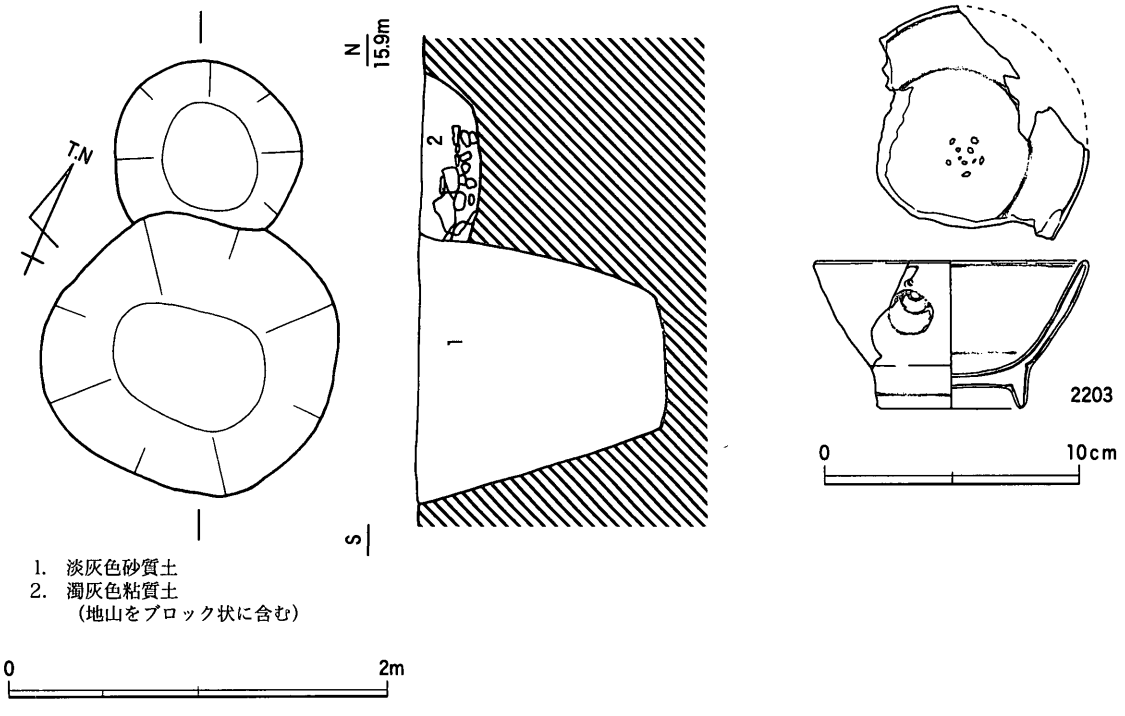
第374図　SKf141平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SKf160（第378図）

ＳＤf92の東側で検出された土坑であ

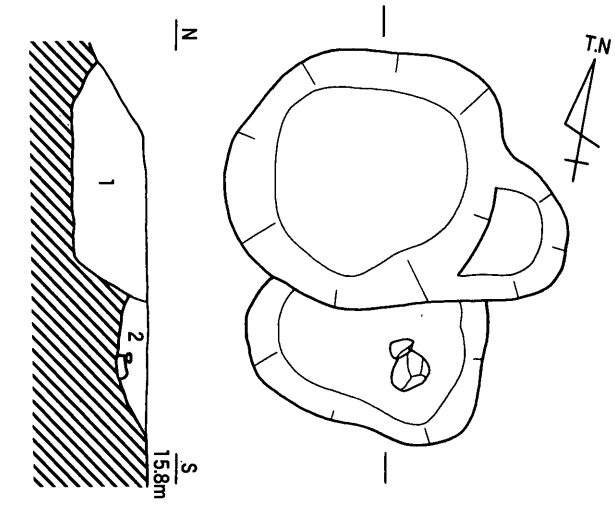


第375図　SKf150平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

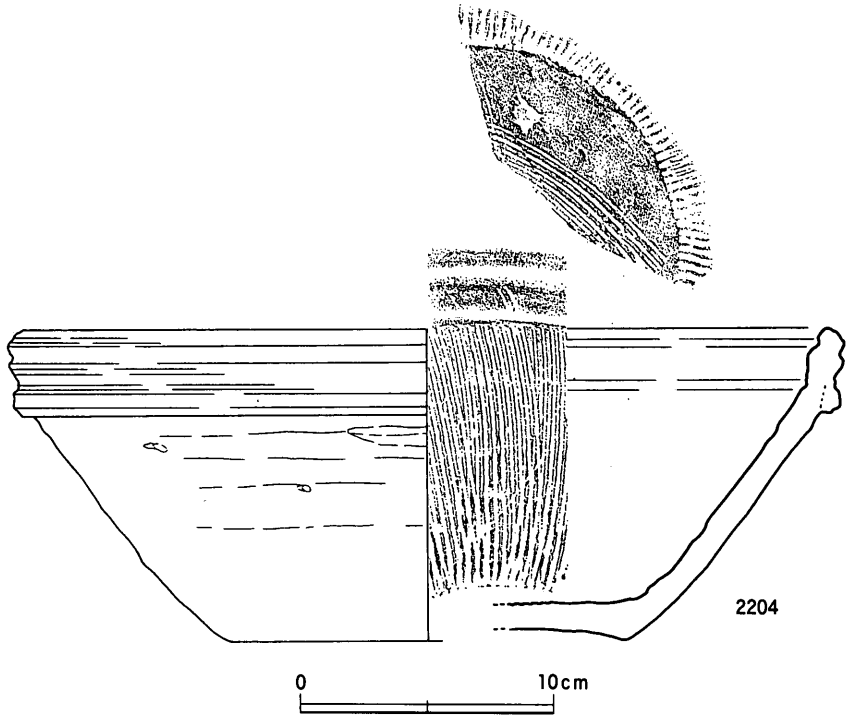


第376図　SKf165・166平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

る。平面楕円形，断面浅い逆台形を呈しており，長径1.12m，短径0.6m，深さ0.07mを測る。埋土は基盤層ブロックを多量に含んだ淡灰色砂質土である。遺物は土師質焙烙(**2205**)が出土している。内耳は遺存していないが，直立気味の頸部をもつことから佐藤分類b型式であり，19世紀前半の所産と考えられる。



1. 淡灰白色砂質土（ベースブロックを多く含む）
2. 淡灰白色砂質土



第377図　SKf156・158平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

SKf167（第379図）

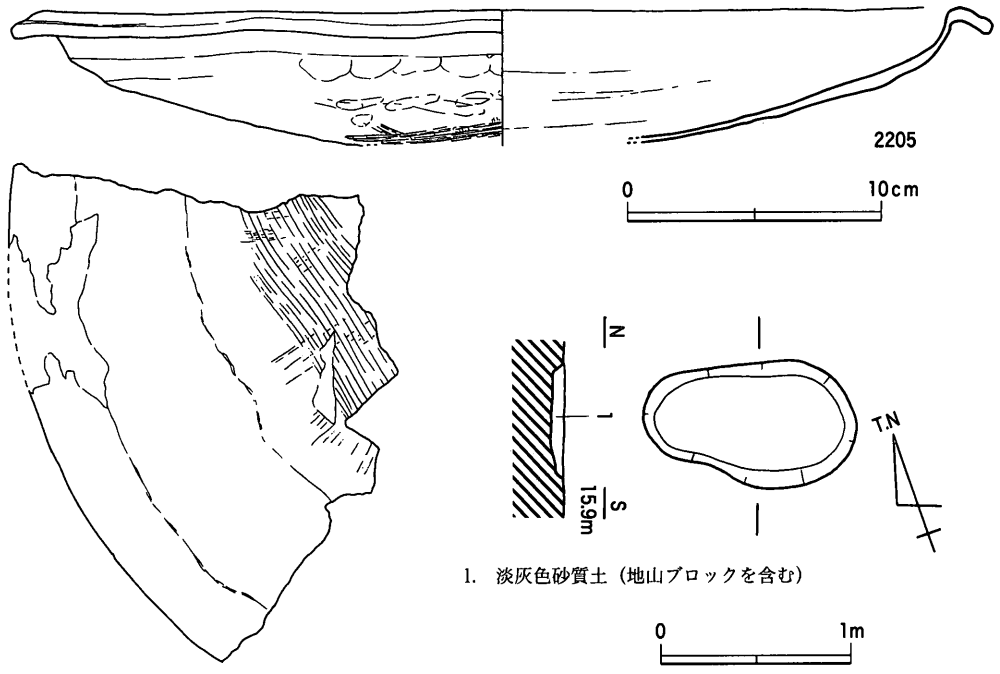
ＳＤf92の東側で検出された土坑である。平面長方形，断面浅い逆台形を呈しており，長径1.73m，短径1.07m，深さ0.14mを測る。埋土は基盤層ブロック土を多量に含んでおり，人為的に埋められたと考えられる。備前系陶器擂鉢(**2206**)が出土した。白神分類Ⅱ類の明石擂鉢である。

(3) Ⅱ－24・25区土坑群

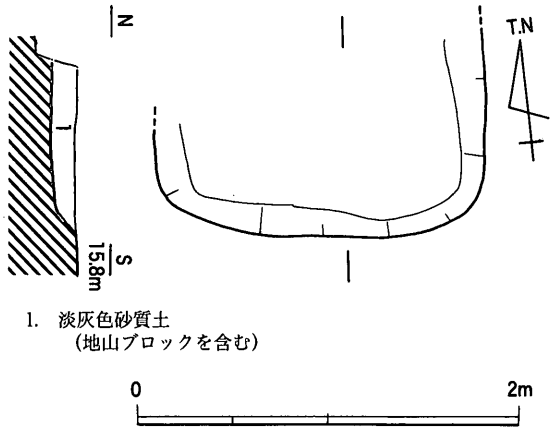
ＳＤf92の東側，ＳＤf90の南側で25基の土坑が検出された。分布域の東半部ではＳＤf90の南肩部に隣接して帯状に分布するが，西半部では面的に分布している。付近は文化15年順道図会では田と表記されているが，明治21年地籍図では宅地として登録されており，Ⅱ－18区と同様，面的な分布状況が宅地に対応するものと考えられる。

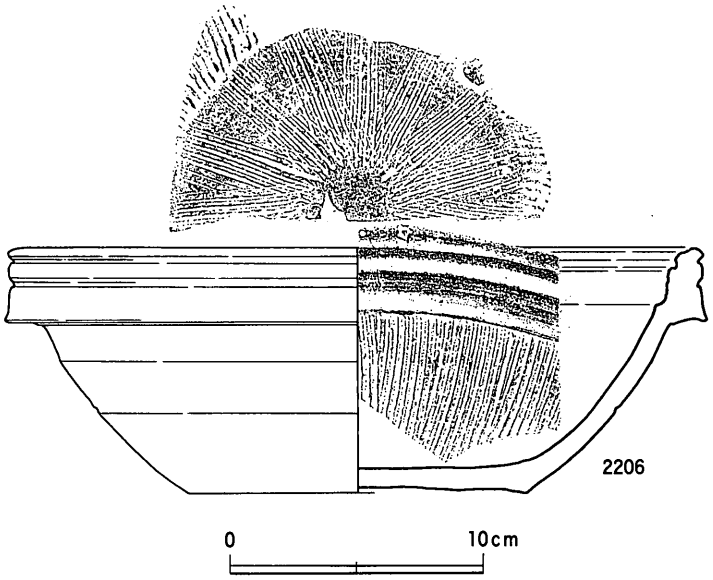
SKf172・173（第380・385図）

Ⅱ－25区，ＳＤf92の東岸部に取り付く状態で検出された土坑である。ともに不定形な平面形態であり，円形プランの土坑が複数重複しているようにもみえるが，明瞭な切り合い関係は確認できなかっ



第378図　SKf160平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）





第379図　SKf167平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

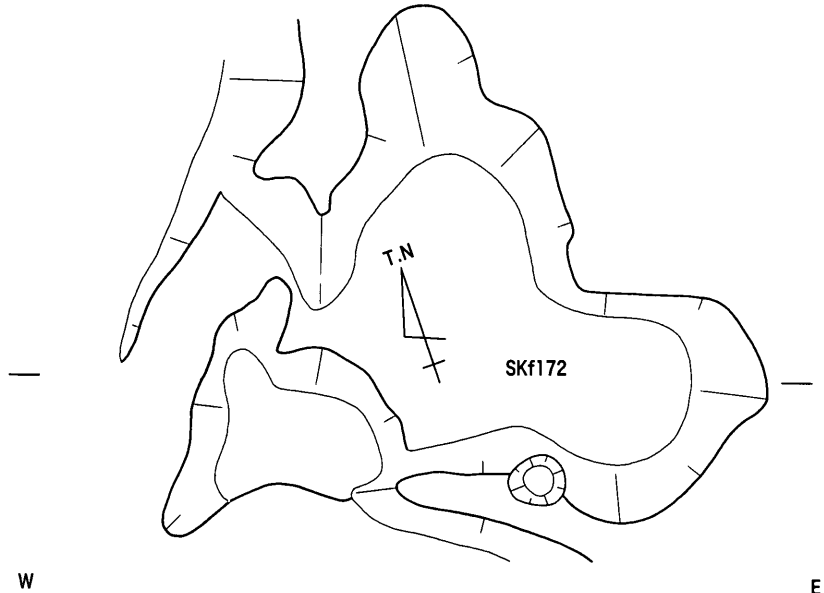
た。したがって，円形プランの土坑が拡張を繰り返して形成されたものと思われる。土層はＳＤf92から連続しており，下位に砂層がＳＤf92側から傾斜堆積している。このような連続的な遺構の状況から，ＳＫf172・173は19世紀代ないしそれ以降の年代が想定される。

2212はサヌカイト製スクレイパーである。全体にローリングを受けており，二次的に移動してきたことが想定される。南約18ｍに弥生時代後期のＳＤf12が交差しており，ここからの混入か。

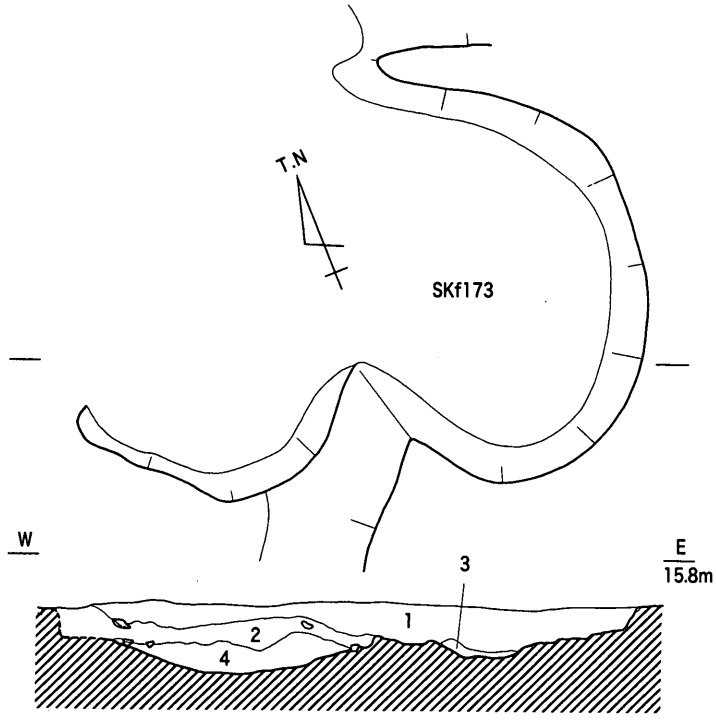
ＳＫf176（第383図）

Ⅱ－25区，ＳＤf90の南側縁辺で検出された土坑である。平面形態は隅丸長方形，断面形態は逆台形を呈する。規模は長径1.5ｍ，短径1.23ｍ，深さ0.44ｍを測る。埋土は２層に分けられるが，いずれも基盤層のブロック土を多量に含んでおり，人為的な埋め戻しが行われた可能性が指摘できる。

ＳＫf177（第382・385図）



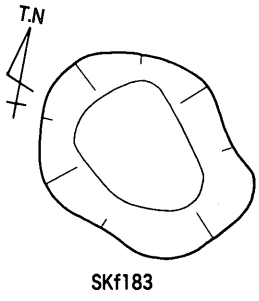
1. にぶい黄橙色シルト（ベースブロック径５ｃｍ以下の鉄分を多く含む）
2. 淡黄色シルト（ベースブロック径３ｃｍ以下の鉄分を少量含む）
3. 黄灰色粘土と灰白色細～中砂ラミナ（径５ｃｍ以下の小石を含む）　SDf92埋土



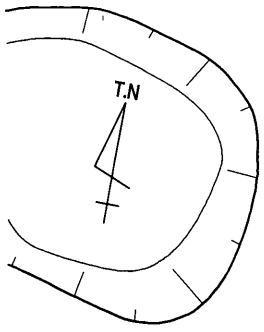
1. にぶい黄橙色シルト（ベースブロック，径5ｃｍ以下の鉄分を多く含む）
2. 黄灰色粘土と灰白色細～中砂ラミナ（径5ｃｍ以下の小石を含む）
3. 黒褐色粘土（径3ｃｍ以下のベースブロック含む）
4. 灰白色粘土（径10ｃｍ以下のベースブロックを多く含む。
   灰色細砂をラミナ状に少量含む）　SDf92埋土

0　2m

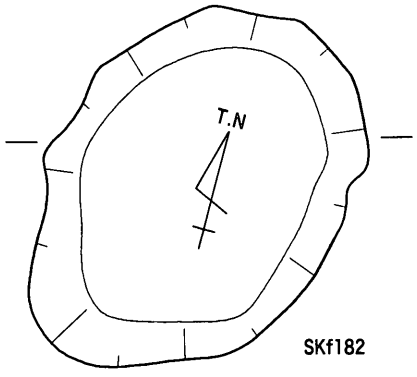
第380図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図（１）（1/40）



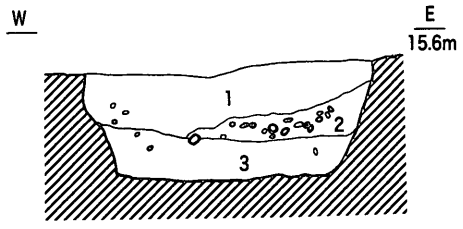
SKf183



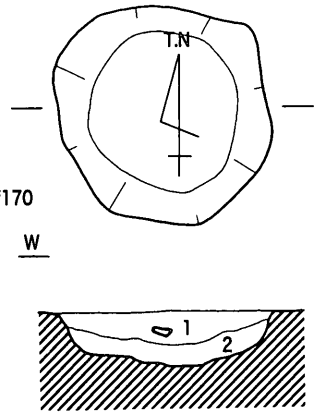
SKf185



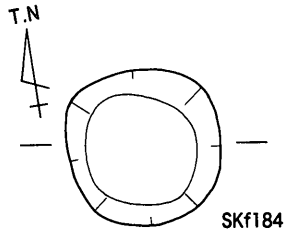
SKf182



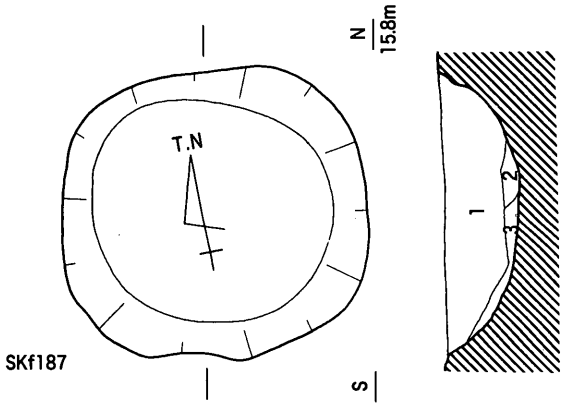
1. 灰白色（径5～10ｃｍ以下のベースブロックを多く含む）
   人為的埋め戻し層
2. 灰色礫混じり粘土（径３～１０ｃｍ以下の小礫を多量に含む）
   人為的埋め戻し層
3. 青灰色砂混じり粘土（鉄分を含む。グライ化骨）



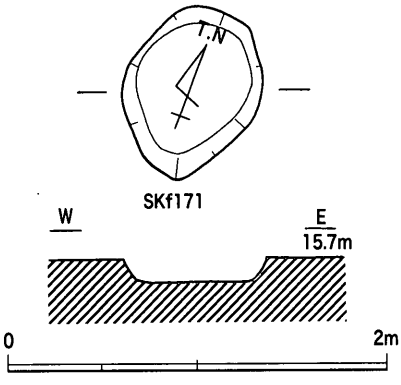
1. 灰黄色粘質シルト
   （径５ｃｍ以下のベース粘土ブロック・鉄分を含む）
2. 灰色粘土（鉄を含む）



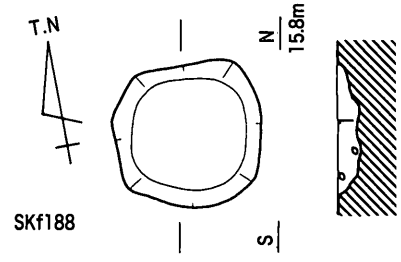
1. 灰褐色粘質シルト
   （径２～３ｃｍ以下のベースブロックをわずかに含む）
2. にぶい黄橙色粘質シルト
3. 暗褐色粘土



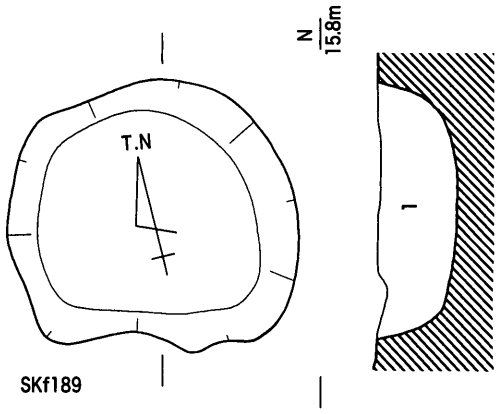
1. 褐灰色粘質シルト（径３ｃｍ以下のブロック、
   径３ｃｍ以下の小石を含む）　人為的埋め戻し層
2. 明褐灰色粘質シルト
3. 黒色粘土
   （下面に沈着部的に細砂を含む）



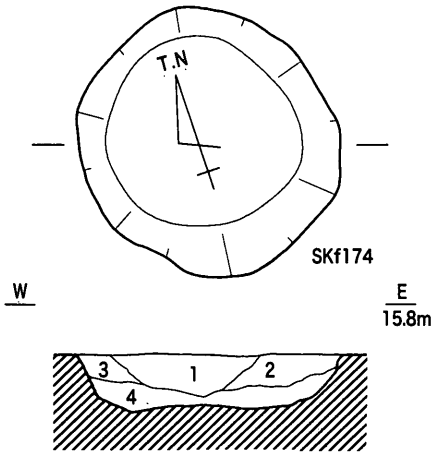
第381図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図（２）（1/40）



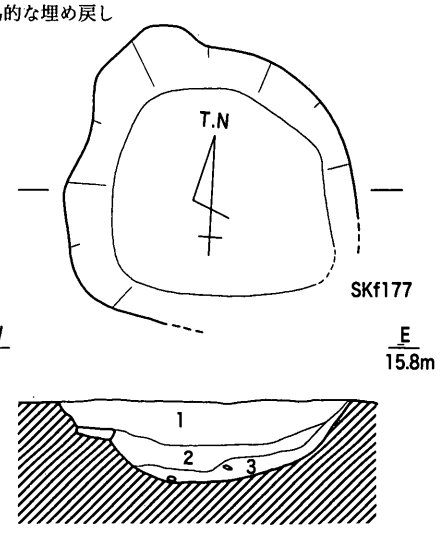
1. にぶい黄色砂礫土
   (径５ｃｍ以下のベースブロックを含む。
   径５ｃｍ以下の小礫を含む)
   人為的な埋め戻し



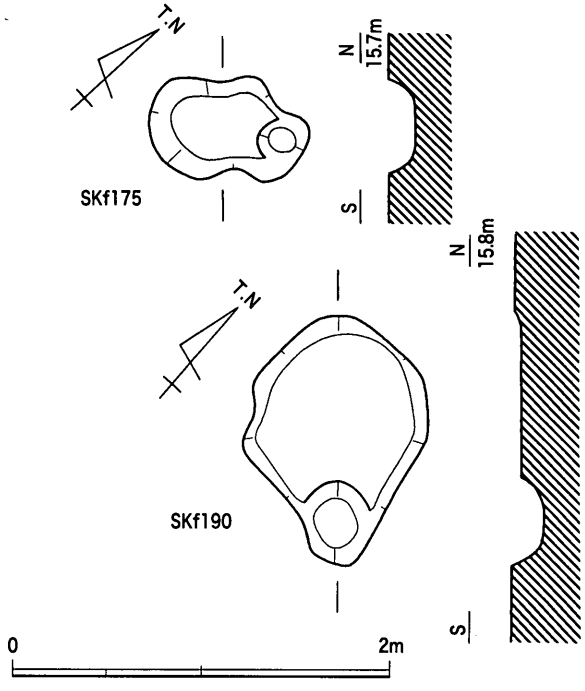
1. 褐灰色粘質シルト
   (径2～10ｃｍ以下のベースブロックを多く含む)
   人為的な埋め戻し

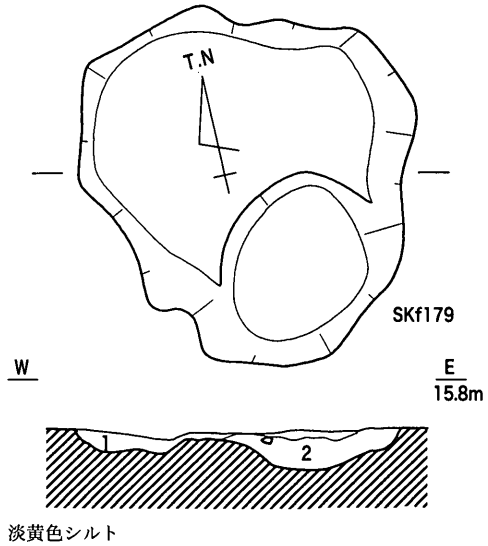


1. 暗青灰粘質シルト
   (径10ｃｍ以下の４層とベース粘土ブロックを含む)
2. 橙色粘質シルト層
   (径10ｃｍ以下の４層とベース粘土ブロックを含む)
3. 灰白色粘質シルト
4. 灰白色粘土
   (径３ｃｍ以下のベース粘土ブロックを含む)



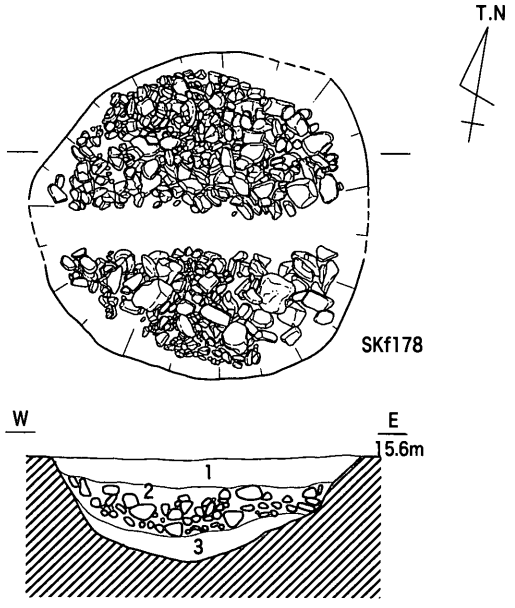
1. 灰白色シルト
   (鉄分・炭・径２ｃｍ以下のベース粘土ブロックを含む)
2. 灰白色シルト
   (径10ｃｍ以下のベース粘土ブロックを多く含む)
3. 褐灰色粘質シルト
   (径３ｃｍ以下のベース粘土ブロックをわずかに含む)



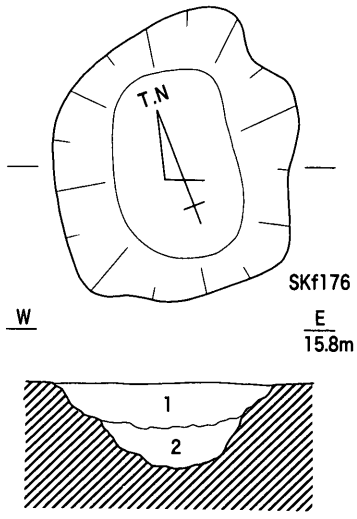


1. 淡黄色シルト
   (径１０ｃｍ以下のベース粘土ブロックを多く含む)
2. 灰色粘土ブロックとにぶい黄褐色粘土ブロックの混合

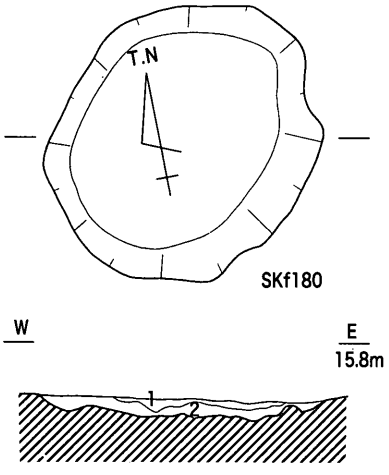
第382図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図（3）（1/40）



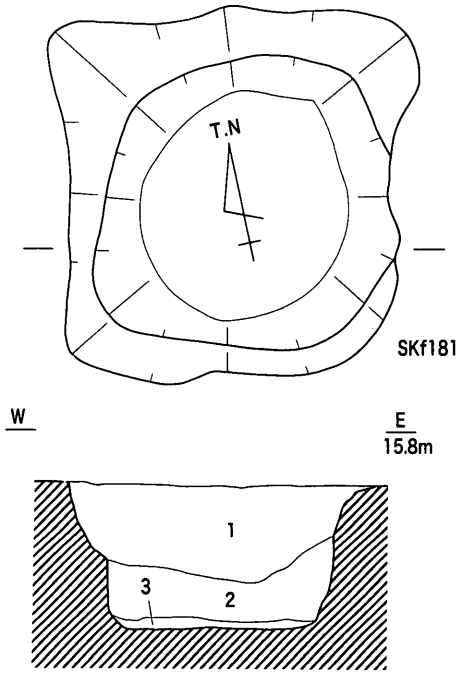
1. 灰色シルト
2. 黒褐色粘土（礫を多量に含む）
3. 黒褐色粘土（礫を少量含む）



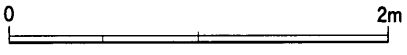
1. 明褐灰色シルト
（径５ｃｍ以下のベース粘土ブロックを含む）
2. 褐灰色粘質シルト
（径５ｃｍ以下のベース粘土ブロックを多く含む。鉄分を含む）



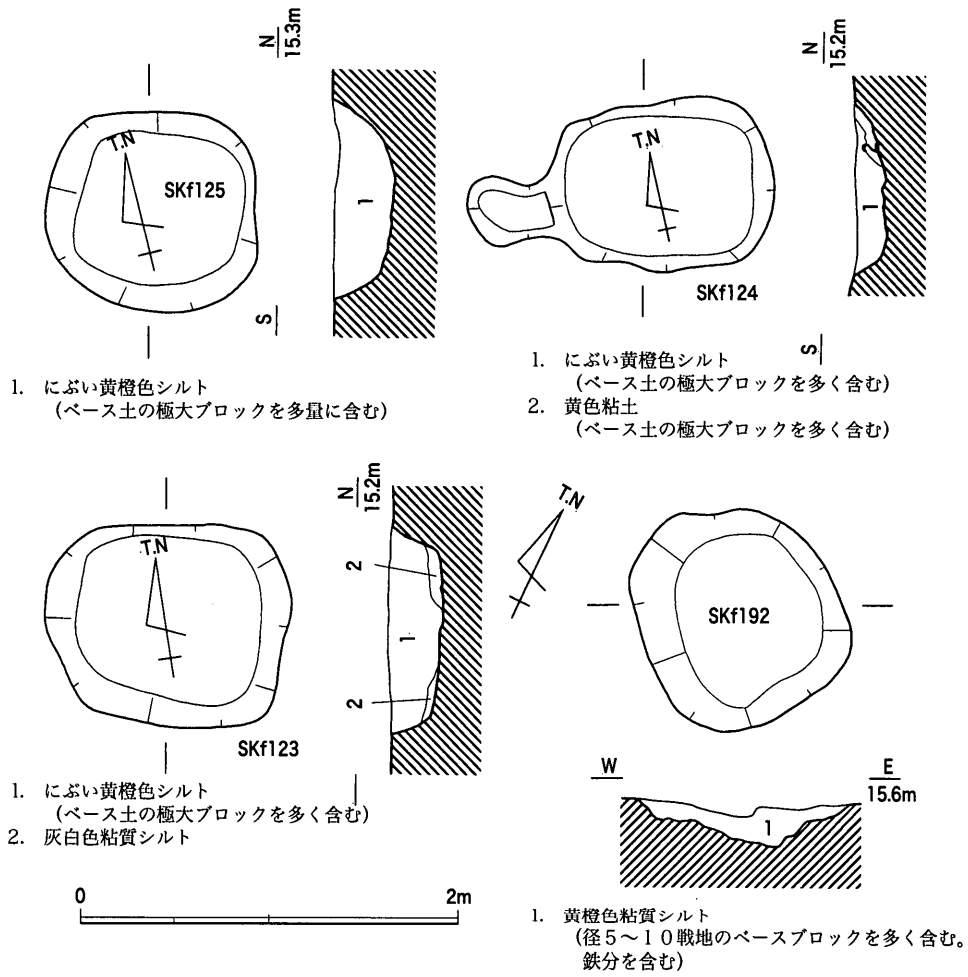
1. 明オリーブ灰色シルト
（径５ｃｍ以下のベース粘土ブロックを多く含む）
2. 灰色粘土ブロックとにぶい黄褐色粘土ブロックの混合



1. 灰黄色粘質シルト
（径５ｃｍ以下のベースブロックを多く含む。
径３ｃｍ以下の小石を含む）　人為的埋め戻し
2. 灰白色シルト
（径２０～３０ｃｍのベースブロックを多く含む）
人為的埋め戻し
3. 黒褐色粘土



第383図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図（4）（1/40）



第384図　Ⅱ－24・25区土坑群平・断面図（5）（1/40）

Ⅱ－25区で検出された。ＳＫf178に切られており，平面形態は歪な隅丸方形，断面形態は逆台形を呈する。規模は東西1.57ｍ，南北1.50ｍ，深さ0.44ｍを測る。埋土は３層に分けられるが，いずれにも基盤層のブロック土が含まれている。

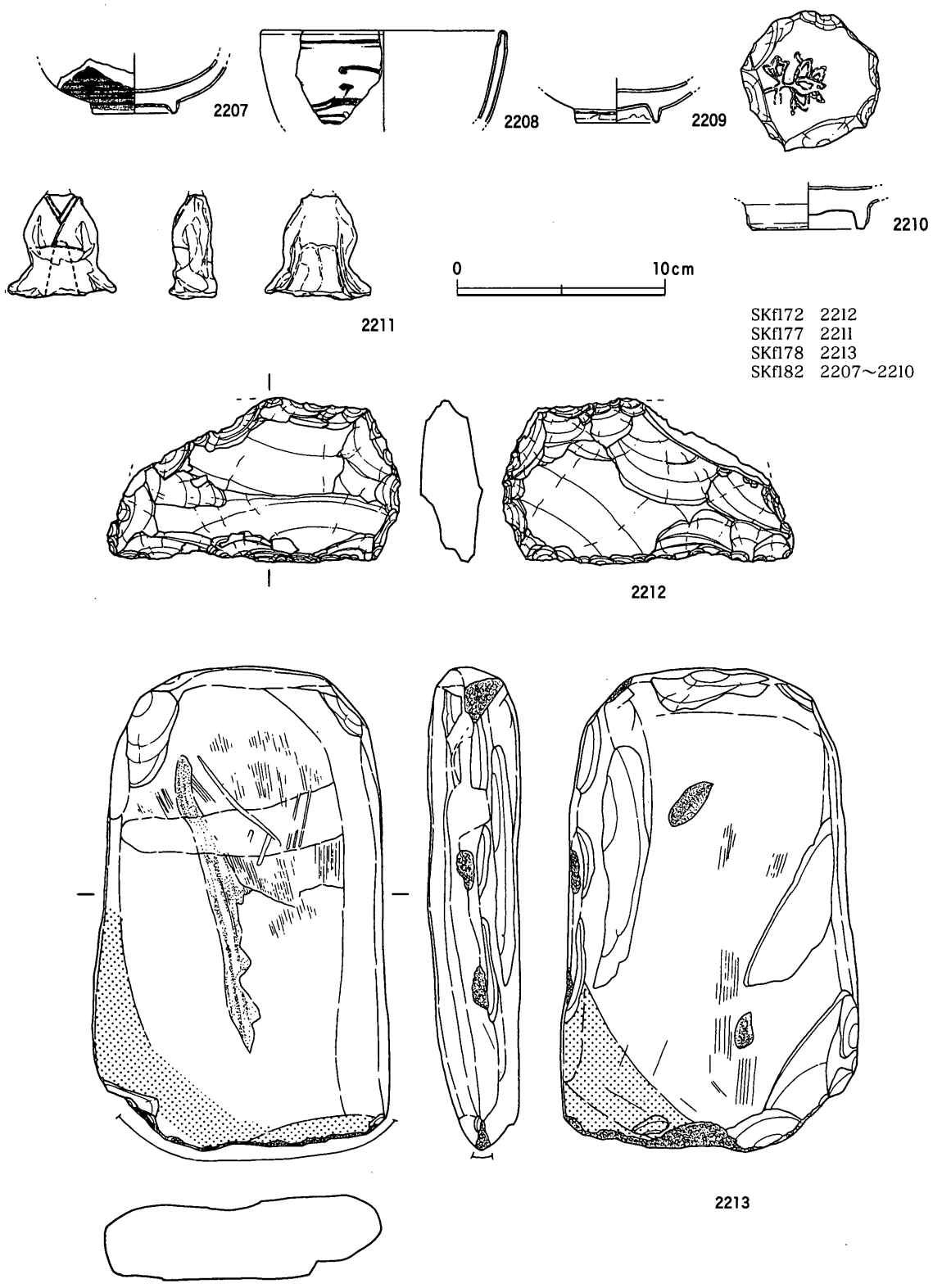
遺物は土師質人形（**2211**）が出土した。座像であり，下面には先端の丸い円孔がある。

ＳＫf178（第383・385図）

ＳＫf177の東隣で検出された。平面形態は円形，断面形態はＵ字形を呈しており，径1.79ｍ，深さ0.52ｍを測る。埋土は３層に分かれており，第２層には多量の砂岩礫が含まれていた。主な出土遺物としては，磨製石斧（**2213**）がある。

ＳＫf181（第383図）

Ⅱ－25区，ＳＫf178の東側で検出された。掘り方上面のプランは方形であるが，底面は円形を呈している。また断面形態は，掘り込み壁面の中位で傾斜が変換しており，２段落ち状の形態をもつ。規模は長径1.9ｍ，短径1.74ｍ，深さ0.77ｍを測る。埋土は３層に分けられ，底面の第３層は黒褐色粘土であり，一定期間土坑がオープンな状態であったことを示唆する。また第１・２層は基盤層のブロック土を多量に含んでおり，人為的に埋められた可能性が高い。



第385図　SKf172・177・178・182出土遺物（1/3，2212・2213は2/3）

ＳＫｆ182（第381・385図）

ＳＤf92東岸縁辺部に位置する土坑である。平面形態はやや隅丸方形に近い楕円形を呈しており，断面形態は逆台形を呈する。規模は長径2.1ｍ，短径1.5ｍ，深さ0.6ｍを測る。埋土は３層に分けられ，

第２層には小礫が含まれ，第１層には基盤層ブロック土が含まれることから，これらは人為的な埋没に伴う層位と考えられる。

主な出土遺物としては，瀬戸・美濃系陶器碗（**2207**），肥前系陶器碗（**2208・2209**），中国産青磁碗（**2210**）がある。**2207**は藤澤分類第５型式の腰錆湯呑であり，19世紀第１四半期の所産である。**2210**は上田氏分類Ｂ－Ⅱ－ａ類とみられる青磁碗であり，見込みに花文が捺されている。

ＳＫf184（第381図）

ＳＤf92東岸縁辺部でＳＫf182の南側に近接して検出された土坑である。平面形態は隅丸方形，断面形態は逆台形を呈する。規模は南北0.83ｍ，東西0.8ｍ，深さ0.39ｍを測る。埋土は３層に分けられ，第１層には基盤層のブロック土が僅かに含まれていた。

ＳＫf187（第381図）

ＳＤf92東岸縁辺部でＳＫf184の南側に近接して検出された土坑である。平面形態は隅丸方形，断面形態はやや浅いＵ字形を呈する。規模は南北1.48ｍ，東西1.6ｍ，深さ0.39ｍを測る。埋土は３層に分けられ，第２・３層は土坑が一定期間オープンな状態にあったことを示す。第１層は基盤層のブロック土や小礫を含む。

(4) Ⅲ－１区土坑群

Ⅲ－１区南半部のＳＤf97東側で15基以上の土坑群が検出された。また，これよりさらに南側のⅢ－１区南端部のＳＤf97西側でも９基の土坑が検出された。ＳＤf97東側の土坑群付近は，文化15年順道図会ならびに明治21年地籍図において，地目が家もしくは宅地とされている。明確な建物遺構こそ検出されていないものの，後述する包含層から近世～近代遺物が多量に出土していることと併せ，考古資料からも宅地が存在した可能性が提示できる。分布状況が帯状ではなく面的に広がる特徴は，Ⅱ－17区の宅地に該当する土坑群と一致する。

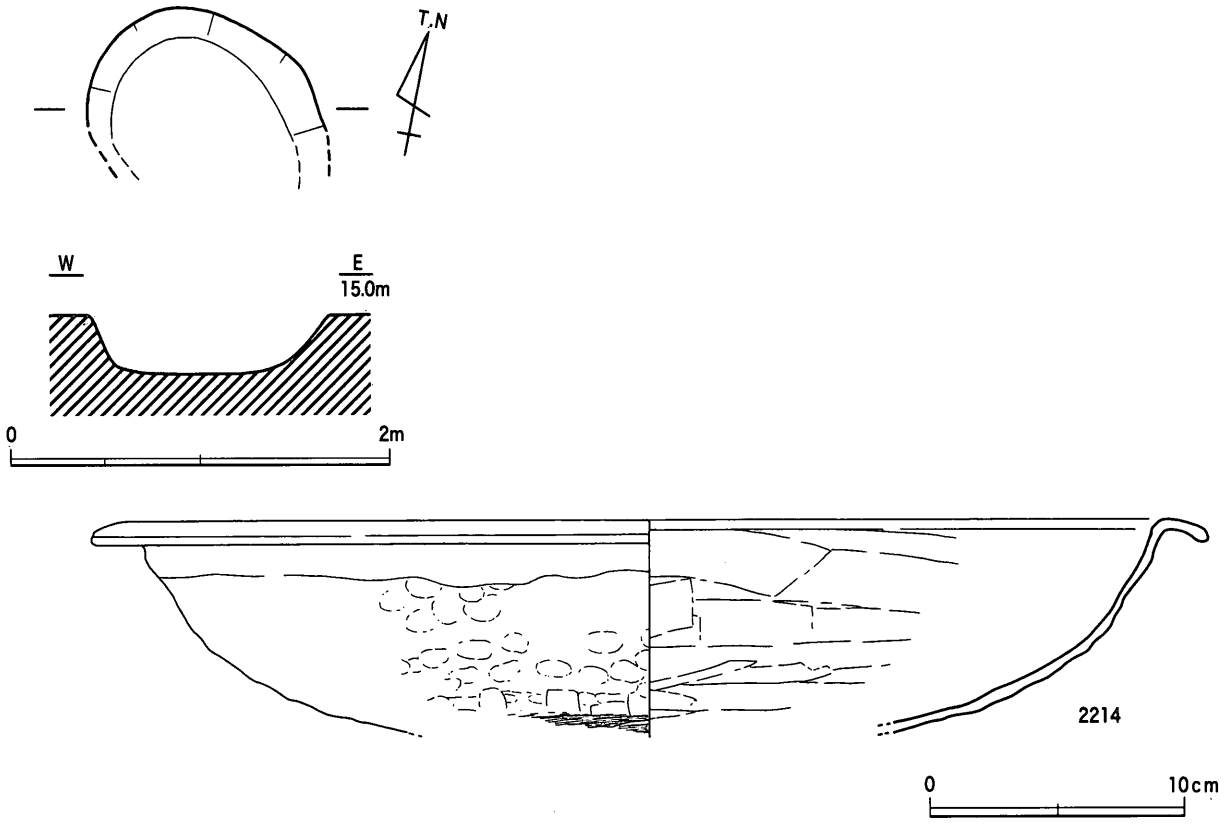
各土坑の概要については，一覧表を参照されたい。

(5) Ⅲ－４区土坑群

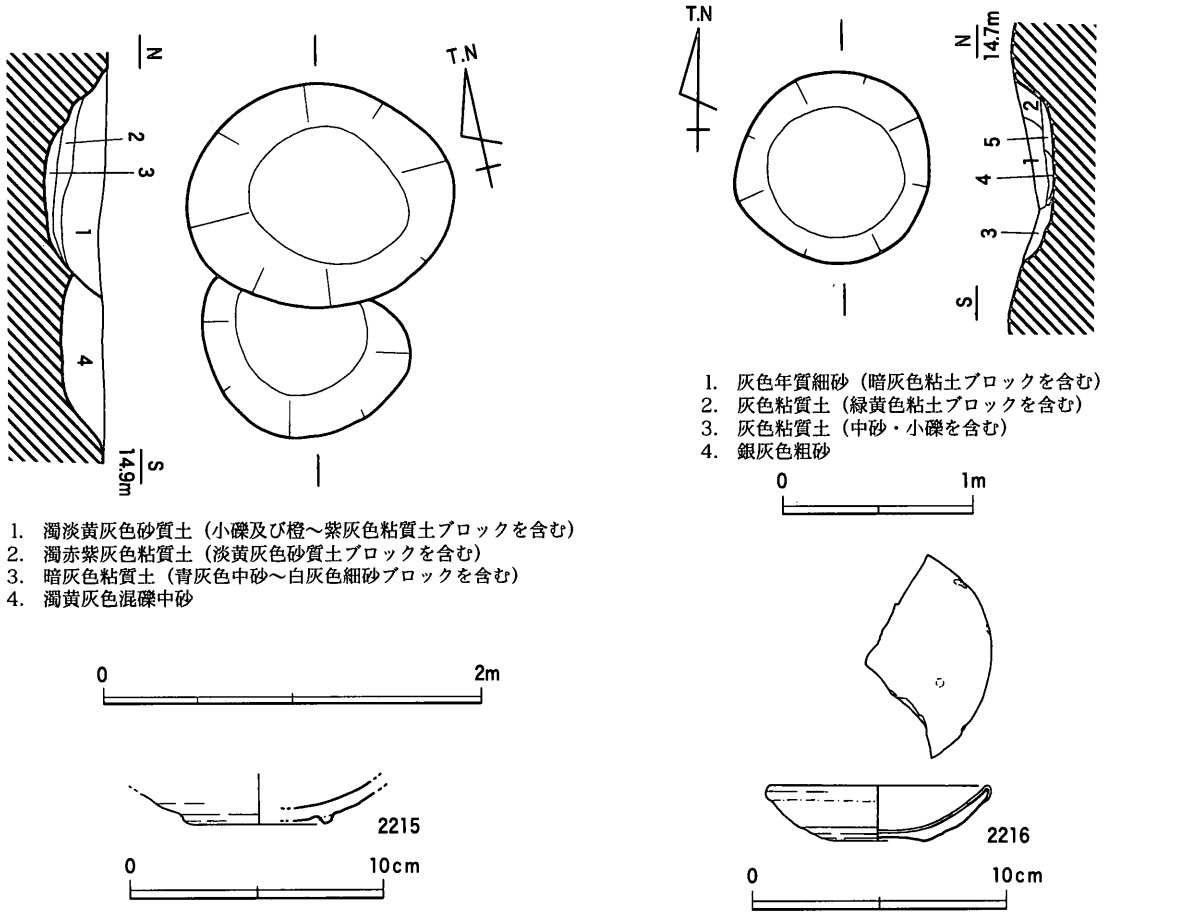
Ⅲ－４区東半部で７基以上の土坑が検出された。その分布状況は若干狭い範囲ではあるが，帯状ではなく面的な分布傾向にあり，宅地的な在り方を示す。また，ＳＫf218からガラス瓶が出土していることから，年代的には確実に明治以降に位置付けられるものを含んでいる。付近は明治21年地籍図の記載では宅地となっているが，以上の所見と併せるならば，土坑群が近代の宅地に伴うものである可能性を提示できよう。各土坑の概要については，一覧表を参照されたい。

(6) Ⅲ－７区土坑群

Ⅲ－７区中央部のＳＤf106の両側で８基の土坑が検出された。これらはＳＤf106の肩部近くを帯状



第386図　SKf226平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



第387図　SKf228・229平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

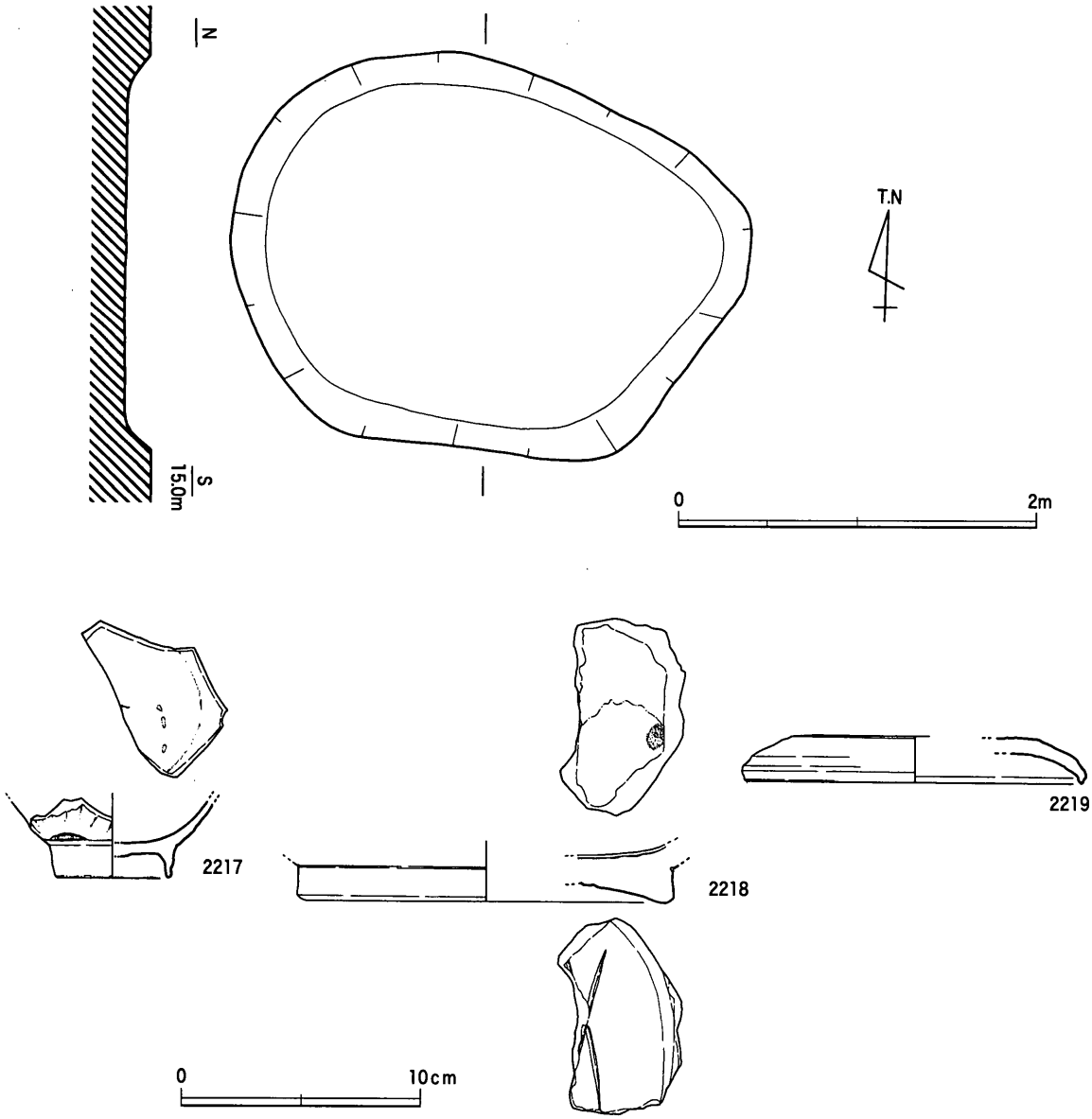
第388図　SKf232平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）

に分布している。ただし，ＳＫf225・229がＳＤf106の埋土を切り込むため，多くはＳＤf106廃絶後に掘削されたと考えられる。文化15年順道図会や明治21年地籍図では，付近は田と表記されており，史料的には宅地が存在した形跡は確認できない。Ⅱ－18区土坑群と同様に，耕地境に近い縁辺に掘削された土坑と考えられる。

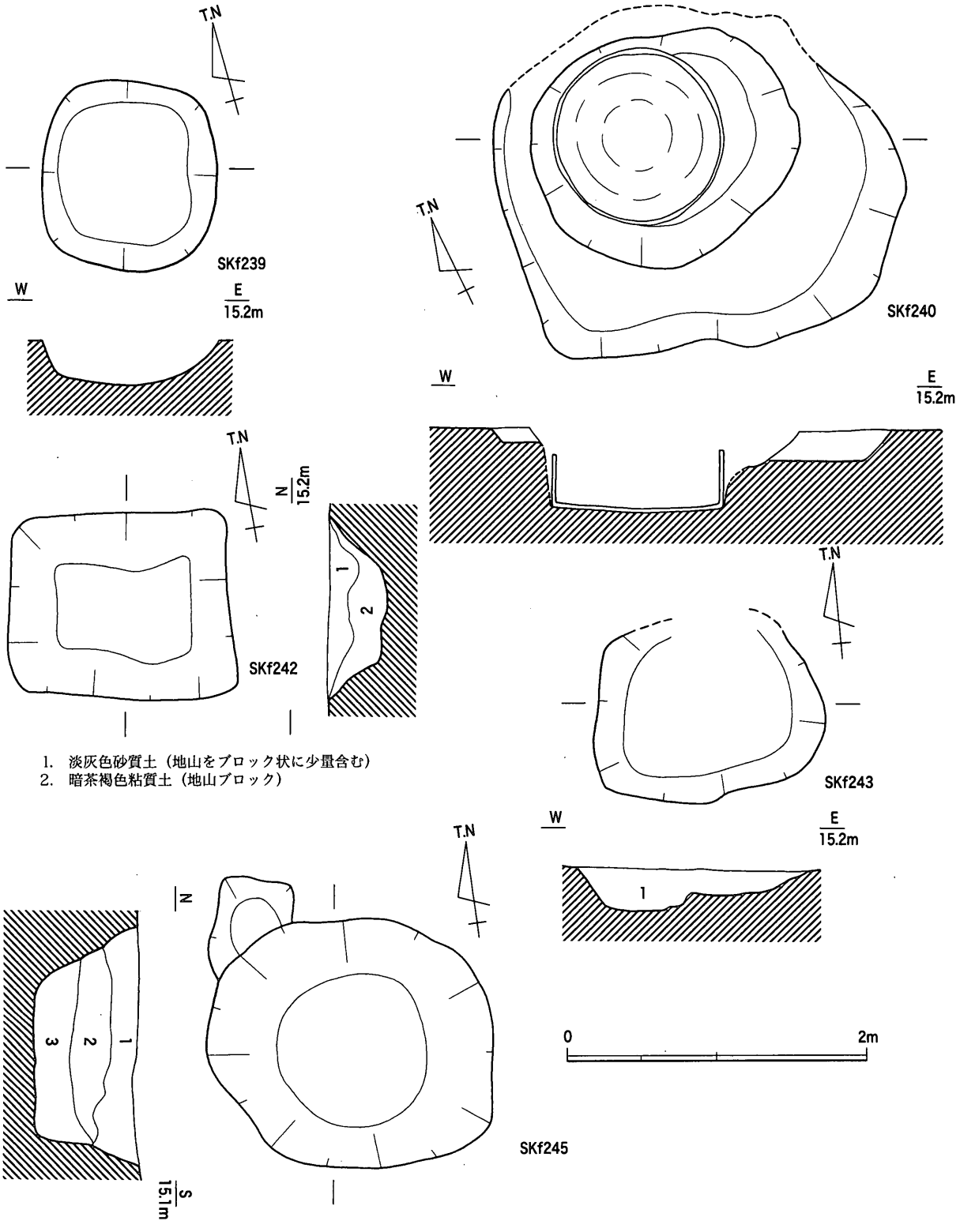
ＳＫf228・229（第387図）

ＳＤf106の北側肩部に位置する土坑である。ＳＫf229はＳＤf106の肩部埋土を切り込んでおり，さらにＳＫf229の北端部埋土をＳＫf228が切り込んでいる。このため，遺構の先後関係としては，ＳＤf106→ＳＫf229→ＳＫf228となる。既に報告したように，ＳＤf106は18世紀前葉～中葉の埋没と考えられるため，これらの土坑はそれ以降の所産とみることが可能である。

平面形態は楕円形，断面は浅いＵ字形を呈する。規模はＳＫf228が長径1.4ｍ，短径1.16ｍ，深さ0.3ｍを測り，ＳＫf229が長径1.1ｍ，短径0.9ｍ以上，深さ0.22ｍを測る。ＳＫf228より中世前半



第389図　SKf246平・断面図（1/40），出土遺物（1/3）



1. 淡灰色砂質土（地山をブロック状に少量含む）
2. 暗茶褐色粘質土（地山ブロック）

1. 淡灰褐色砂質土（鉄分を含む）
2. 淡灰褐色砂質土（鉄分をより多く含む）
3. 淡灰色シルト（地山をブロック状に含む）

第390図　Ⅲ－8区土坑群平・断面図（1/40）

の十瓶山窯産須恵器椀（**2215**）が出土した。

ＳＫf232（第388図）

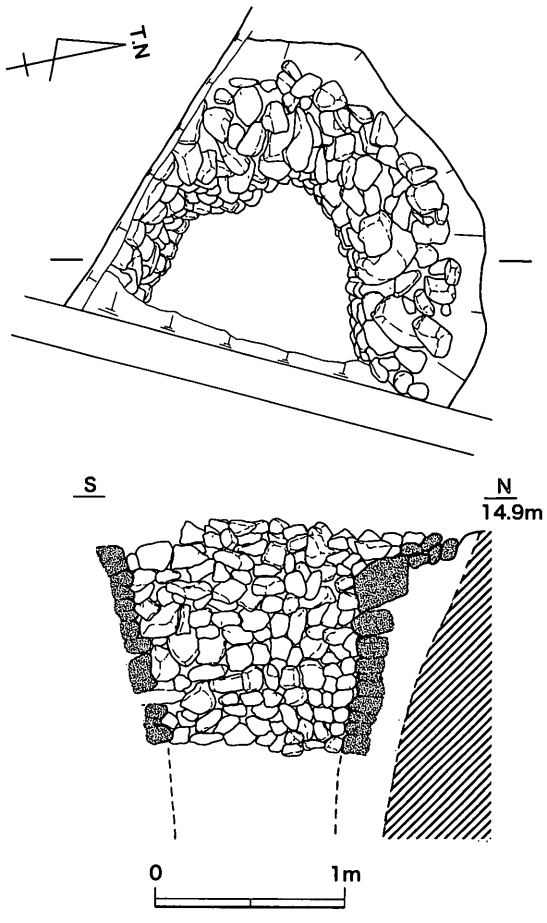
ＳＤf106の南側で検出された土坑である。平面形態は円形，断面形態は逆台形を呈する。規模は径0.94ｍ，深さ0.2ｍを測る。信楽系陶器灯明皿（**2216**）が出土した。

(7) Ⅲ－８・９区土坑群

ＳＤf109より西側のＳＤf107・108の両側で13基以上の土坑が検出された。その分布状況は溝肩部に沿って帯状に散在しており，Ⅱ－18区土坑群やⅢ－７区土坑群と共通した特徴をもつ。文化15年順道図会や明治21年地籍図では付近の地目は田であり，耕地の縁辺に掘削された土坑であるとみられる。また，ＳＤf109東側とＳＤf107南側の地点においても土坑が４基検出されている。この地点は明治21年地籍図では宅地と表記されているが，ごく一部の範囲の調査にとどまったため，遺構の状況からこのことを検討することは困難である。

ＳＫf246（第389図）

Ⅲ－８区ＳＤf108の南側で検出された土坑である。平面形態は不整形な楕円形であり，長径3.0ｍ，短径2.19ｍ，深さ0.15ｍを測る。肥前系磁器碗（**2217**），瀬戸・美濃系陶器鉢（**2218**），須恵器杯蓋（**2219**）などが出土した。これらより土坑の年代は，19世紀前半と考えられる。



第391図　SEf03平・断面図（1/40）

５．井戸

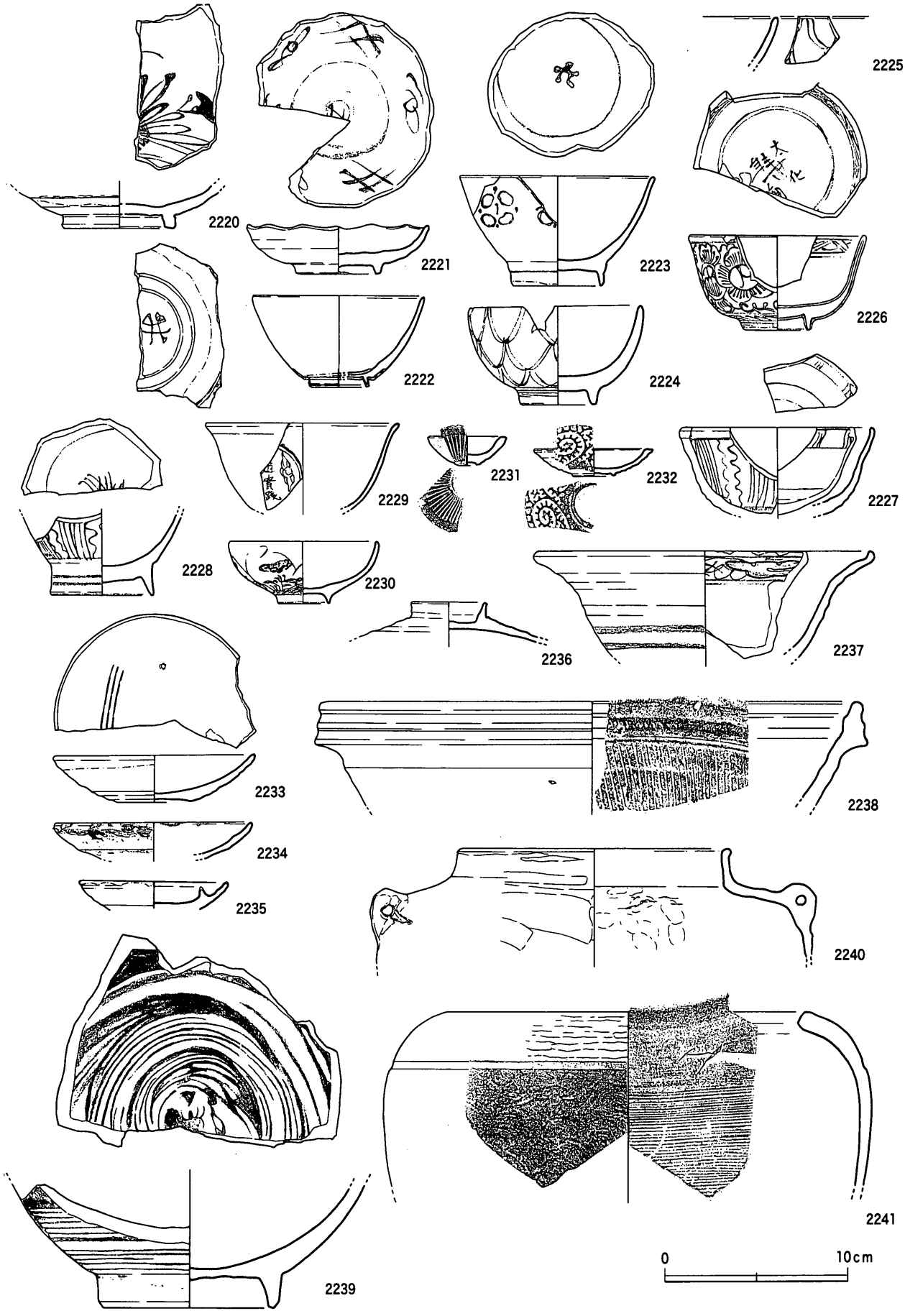
ＳＥf03（第391図）

Ⅲ－37区南端で検出された石組み井戸である。直径2.4ｍ前後と推測される円形プランの掘り方内に，10～30㎝大の小振りな自然礫を小口積みにして構築されている。石組みの径は上面で1.2ｍを測る。底面まで完掘できていないが，検出面から1.25ｍまでは石組が続くことを確認した。

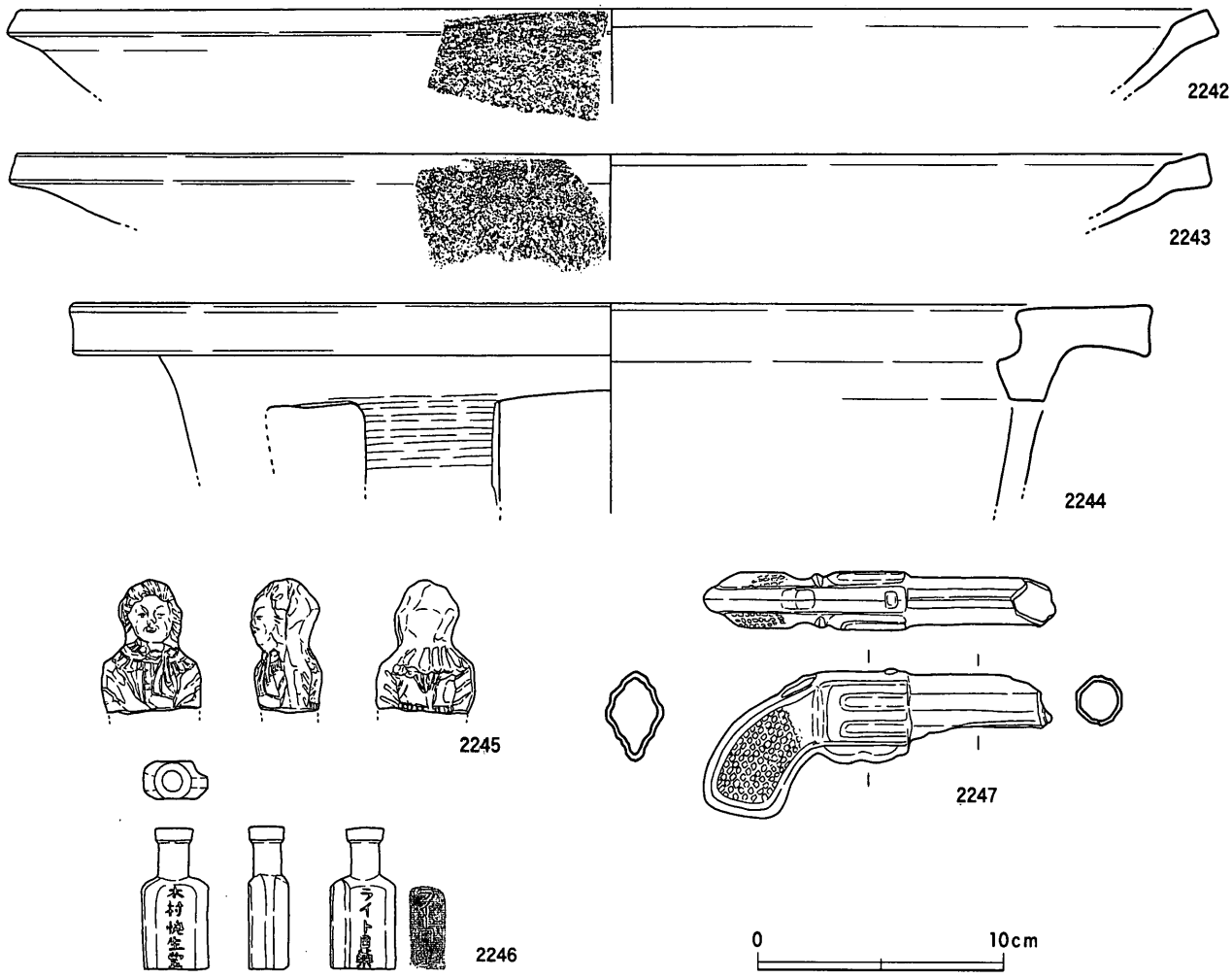
６．包含層

Ⅲ－１区包含層（第392・393図）

Ⅲ－１区南半部を中心に比較的多量の近世遺物が出土した。この付近は土坑群が分布しており，また明治21年地籍図では宅地と表記されていることか



第392図　Ⅲ－１区包含層出土遺物（１）（1/3）

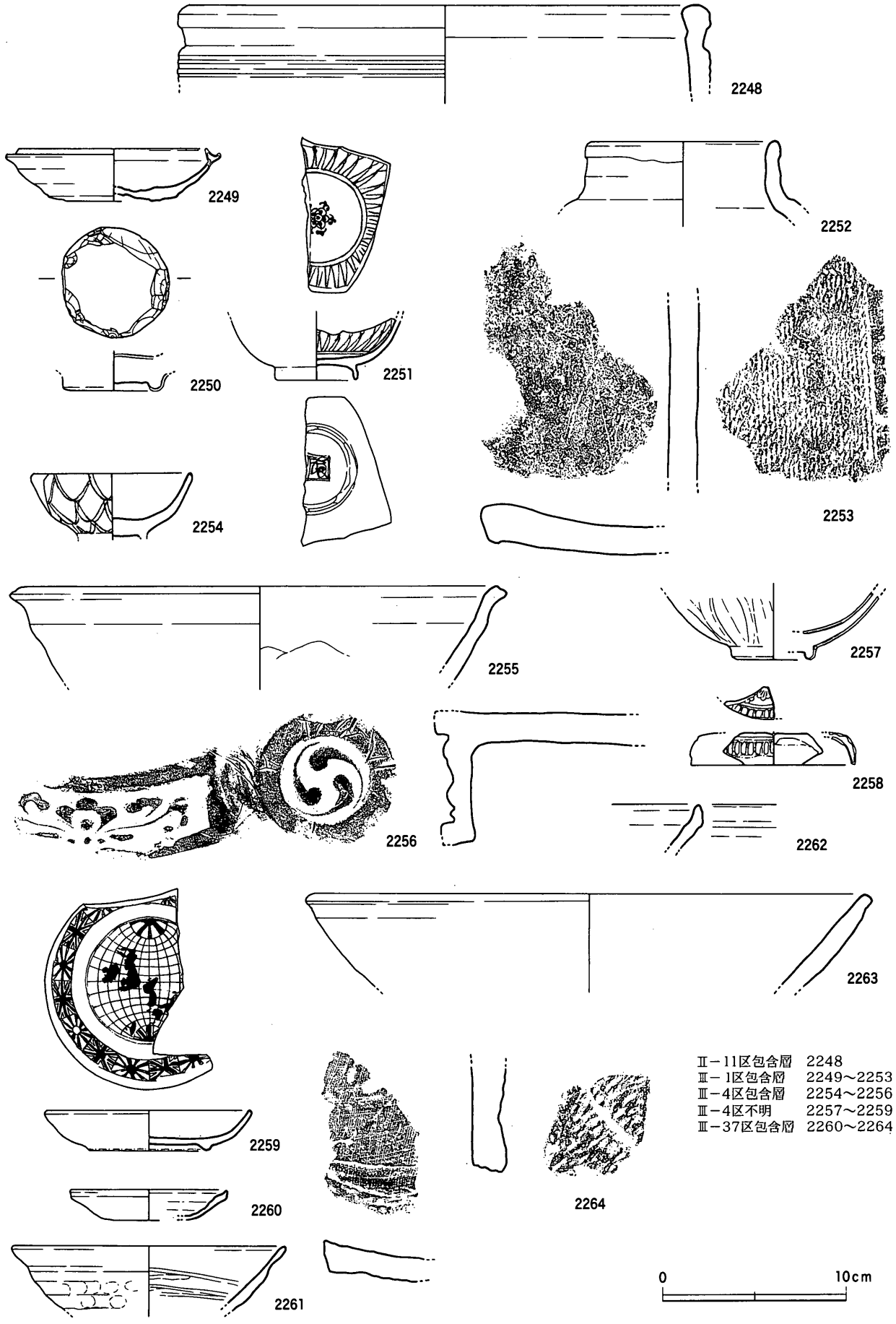


第393図　Ⅲ－１区包含層出土遺物（2）（1/3）

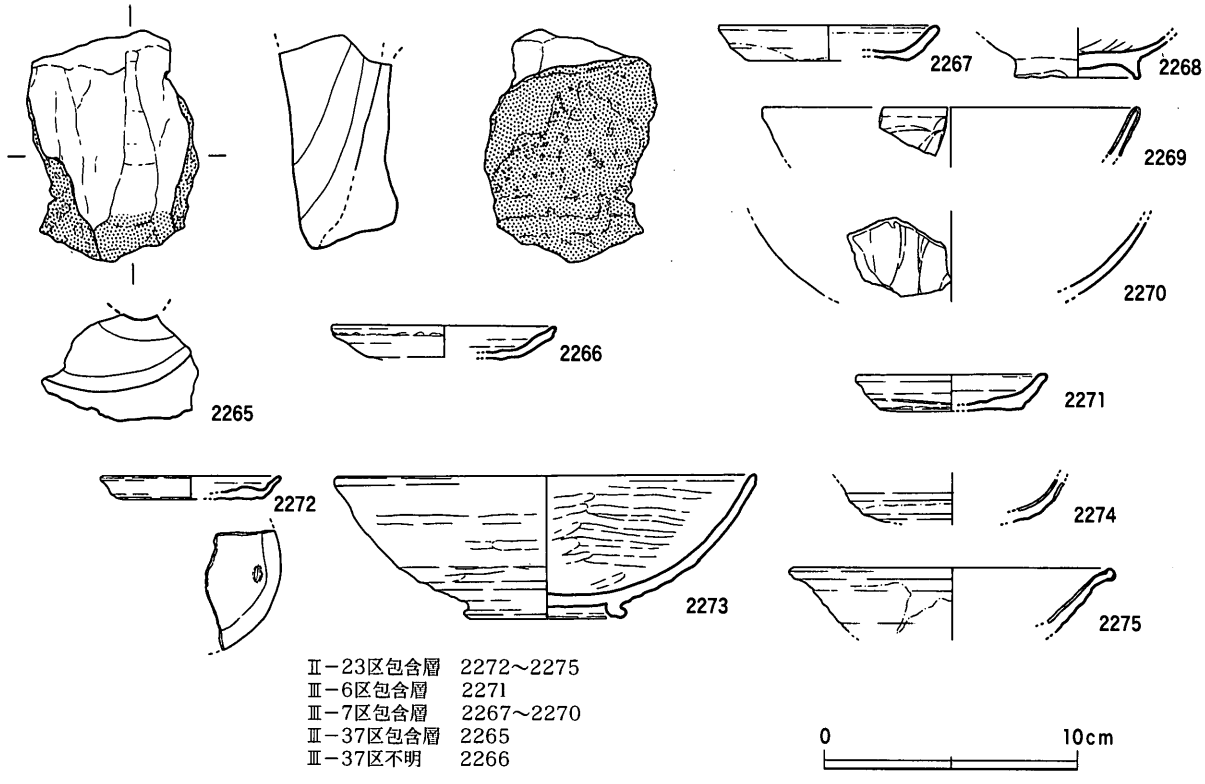
ら，これらに関連する遺物と考えられる。京・信楽系陶器碗（**2220**・**2222**）・磁器卸し皿（**2233**）・灯明皿（**2235**），瀬戸・美濃系陶器碗（**2223**），肥前系磁器皿（**2221**）・碗（**2224**～**2229**）・紅猪口（**2230**）・紅皿（**2231**・**2232**）・鉢（**2237**），軟質陶器蓋（**2236**），備前系陶器灯明皿（**2234**）・擂鉢（**2238**），肥前系陶器鉢（**2239**），瓦質茶釜形（**2240**）・火鉢（**2241**）・焙烙（**2242**・**2243**），土師質竈（**2244**），白磁人形（**2245**），ガラス小瓶（**2246**），ガラス鉄砲（**2247**）などが出土した。肥前系磁器碗などから年代の上限は18世紀前葉～中葉，下限はガラス製品からおそらく昭和19年前後と考えられる。

その他の包含層（第394・395図）

Ⅲ－１区以外の包含層出土遺物を図示した。**2255**はやや軟質な焼成の須恵器捏鉢であり，十瓶山窯には類例が認められない。むしろ万堡池窯跡など東播系須恵器初現期の捏鉢に近似した形態をもち，東播系須恵器とみてよければ最初期の搬入例となる。**2258**は青白磁の合子である。**2259**は内面にプリント文様を施す磁器皿である。器体は鋳込み成形とみられ，見込みに日英の地図と国旗，体部内面には英国旗と旭日旗が印刷される。同様の皿は同じ調査区内のＳＤf99内のバラス層（昭和19年廃絶時の埋土）より出土しており（図版104），廃棄年代が昭和19年であること，複数個体が所有・廃棄された



第394図　その他の包含層出土遺物，出土地点不明遺物（1）（1/3）



第395図　その他の包含層出土遺物，出土地点不明遺物（2）（1/3，2265は1/2）

ことがわかる。**2265**はⅢ－37区出土の羽口であり，中世後半の区画6に伴う遺物と考えられる。側面には気泡を多く含み飴状に溶融・固結した鉄滓が付着しており，先端部には黒色の鉄滓が付着する。細片で復元が難しいが，内径3.5～4.0㎝前後と思われる。**2272**は回転糸切りによる底部外面に籾圧痕が認められる。出土位置がⅡ－23区であることから，中世前半の区画2に伴う遺物と推測される。

第４章　自然科学調査の成果

第１節　空港跡地遺跡から出土した呪符木簡の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

空港跡地遺跡（高松市林町所在）は、高松平野南部に位置する。高松平野は，東西約９km,南北約８kmにわたって広がる扇状地性海岸平野で，上部の層厚10～20mが完新統（沖積層）である（須鎗，1991)。空港跡地遺跡では，発掘調査により弥生時代前期から近世までの自然河川，住居址,溝，ピット等の遺構が検出された。遺物では須恵器，土師器等が出土し，木製品では漆器椀や呪符木簡が出土している（香川県埋蔵文化財研究会、1992)。

今回の報告では，本遺跡のSDf48下層およびSDf83から出土した呪符木簡について材同定を行う。呪符木簡の樹種については，前回，東山崎・水田遺跡でモミ属とスギ類似種を同定した。今回は，材同定により当時の用材選択の一端を知ることとともに，既存資料との比較・検討を行うことを目的とする。

１.試料

試料は、SDf48下層およびSDf83から出土した呪符木簡２点（SDf48下層出土呪符木簡試料，SDf83出土呪符木簡試料）である。いずれも中世(14世紀～15世紀)の木簡と考えられている。

２.方法

剃刀の刃を用いて，試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製，ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し，生物顕微鏡で観察・同定する。

３.結果

観察の結果，試料はSDf48下層出土呪符木簡試料がヒノキ属の一種,SDf83出土呪符木簡試料がツガ属の一種に同定された。各試料の観察された主な解剖科学的特徴や現生種の一般的性質等を以下に記す。なお和名・学名等は，主として「原色日本植物図鑑　木本編Ⅱ」（北村・村田，1979）に従い，現生種の一般的性質等については「木の事典　第５巻，第６巻」（平井，1980）も参考にした。

・ツガ属の一種（Tsuga sp.)　マツ科

試料名：SDf83出土呪符木簡試料

早材部から晩材部への移行は急で，年輪界は明瞭。樹脂細胞があり，樹脂道はないが，傷害樹脂道が認められることがある。放射組織は仮道管と柔細胞よりなり，柔細胞壁は滑らかで，じゅず状末端壁をもつ。分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列，１～20細胞高。以上の特徴からツガ属の一種に同定した。

ツガ属には，ツガ(Tsuga sieboldii)とコメツガ（T.diversifolia）の２種がある。ツガは，本州

(福島県以南）・四国・九州に分布するが，日本海側には少なく，モミ（Abies firma）と混生し，尾根筋や傾斜地に生育することが多い。コメツガは本州・四国・九州に分布するが，西日本には少なく，亜高山帯の代表的樹種の１つである。ツガの材はやや重硬で，強度・割裂性は大きく，加工は容易ではなく，保存性は中程度である。建築・土木・装飾・建具・器具・家具材など各種の用途がある。また樹皮はタンニン原料となる。

・ヒノキの一種（Chamaecyparis sp.）　ヒノキ科

試料名：SDf48下層出土呪符木簡試料

早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で，晩材部の幅は狭く，年輪界は明瞭。樹脂細胞は晩材部に限って認められ，樹脂道はない。放射仮道管はなく，放射柔細胞の壁は滑らか，分野壁孔はヒノキ型で１～４個。放射組織は単列，１～15細胞高。以上の特徴からヒノキ属の一種に同定した。

ヒノキ属には，ヒノキ（Chamaecyparis obtusa（Sieb. et Zucc.）Endlcher）とサワラ(C.pisifera（Sieb. et Zucc.) Endlcher）の２種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し，また各地で植栽される常緑高木で，国内ではスギに次ぐ植林面積を持つ重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易，割裂性は大きいが，強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し，また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく，加工も容易，強度性にはヒノキに劣るが耐水性が高いため，樽や桶にするほか各種の用途がある。

４．考察

呪符木簡の樹種は，ツガ属とヒノキ属であった。同定された樹種は異なるが，東山崎・水田遺跡で出土した呪符木簡にも針葉樹（モミ属，スギ類似種）を同定しており，今回の結果は針葉樹材が用いられている点で共通性がある。用途は若干異なるが，これまでに行われた木簡の樹種を見ると（島地・伊東，1988;伊東，1990），スギ，ヒノキ属を中心とした針葉樹材が多く，広葉樹材は長岡京跡や平城京跡でブナ科の材が４点出土しているのみである。

針葉樹は仮道管が組織の多くを占めるため，材が比較的通直で放射方向・接線方向どちらの加工も比較的容易である。そのため，板状の木製品は比較的容易に作製することができる。このような針葉樹の持つ加工性の高さを使用したと考えられる木製品は木簡以外にも見られ，遺跡から出土した板状の加工を要する木製品（板材・曲物等）には針葉樹が多く使用されている。今回の結果もこのような針葉樹の加工性の高さを利用した用材選択と考えられる。

＜文献＞

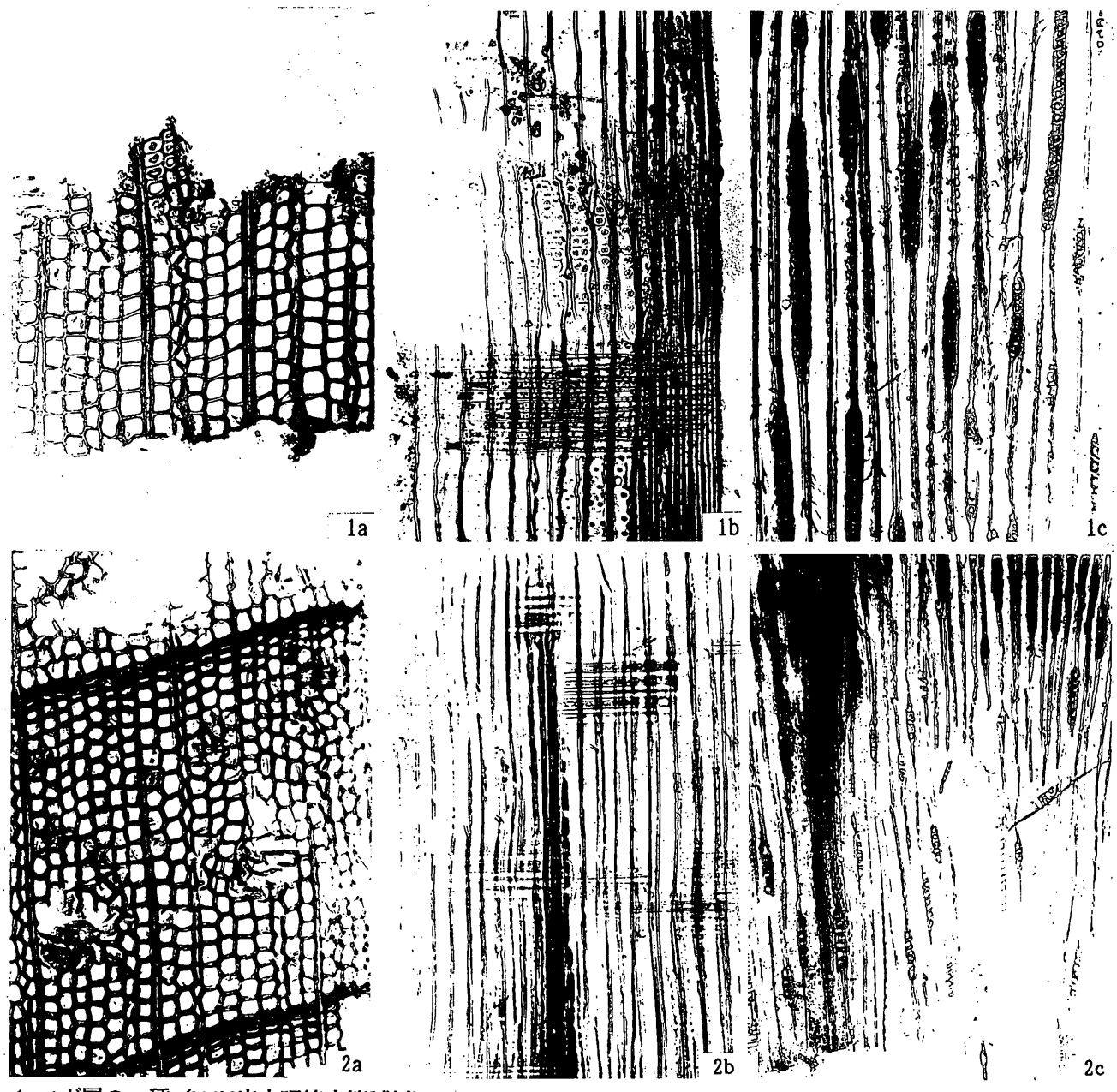
平井信二（1980）木の事典　第５巻，第６巻. かなえ書房.

伊東隆夫（1990）日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ.木材研究・資料,No26, p.91-189.

香川県埋蔵文化財研究会 (1992) 空港跡地遺跡発掘調査概報　平成３年度.

島地　謙・伊東隆夫編（1988）日本の遺跡出土木製品総監. 296p., 雄山閣.

須鎗和巳(1991)高松平野.須鎗和巳・岩崎正夫・鈴木堯士編「日本の地質８　四国地方」, p.144,共立出版株式会社.



1. ツガ属の一種（SDf83出土呪符木簡試料）
2. ヒノキ属の一種（SDf48下層出土呪符木簡試料）
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

写真1　呪符木簡試料の顕微鏡写真

第２節　空港地遺跡出土中世土器の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所　白石　純

１．分析の目的

この胎土分析では，蛍光Ｘ線分析法を用いて空港跡地遺跡から出土した中世土器の胎土を分析し，以下に述べることについて検討した。

(1)空港跡地遺跡出土中世前半の土師質土器小皿・杯には，底部の成形技法にヘラ切りと糸切りの２種類があり，両者は形態および胎土の色調が明確に異なっていることから別々の生産地で制作されたことが考えられる。そこで，理化学的な胎土分析から差異があるかどうか検討する。また，両者が異なるとすれば，ヘラ切り技法の小皿・杯類が生産地の一つである西村遺跡のものと分析値が同じかどうか比較する。

(2)空港跡地遺跡出土中世前半の土師質土器鍋が，生産地である楠井遺跡(鍋ＡⅠ類)[1]，西村遺跡の両生産地のどちらと分析値が類似するか。

(3)空港跡地遺跡出土中世後半の擂鉢・甕が生産地一つである楠井遺跡のものと分析値が類似するかどうか。

２．分析結果

理化学的な分析方法は，前述したように蛍光Ｘ線分析法を用いて実施し，分析試料の作成，測定方法などは従来の方法により行った。分析試料は第６表に示した土器で，空港跡地遺跡および西村遺跡出土の土師質土器の小皿，杯，鍋と擂鉢，甕の合計122点である。

分析結果はK_2O，CaO，Sr，Rbの４元素を用いてＸＹ散布図を作成し，その分布状況の差異で検討した。

中世前半の土師質土器小皿・杯の底部成形技法がヘラ切りか糸切りかで胎土に差異がみられるかどうかでは，第396図K_2O－CaO散布図と第397図Sr－Rb散布図で検討した。この結果，技法的に差がみられても胎土的には差がなかった。しかし，両散布図からこの小皿・杯類が成形技法に関係なく大きく二ないし三つに分かれるようである。一つのグループは，試料番号2,3,4,5,6,9,11,15,16,17,18,19,20,21,45,47,48,49,52(Aグループ)でもう一つは1,7,10,12,13,14,22,23,24,25,26,27,28,30,31,32,33,34,35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,50,51,53,54,55,56,57,58,59,60,61,62,63,64,65,66(Bグループ)のグループである。また，これ以外に8,29の２点の土器が単独で分布している。

西村遺跡出土の小皿・杯との比較では，Bグループのものが西村遺跡の分布範囲とほぼ一致するようである。そして，糸切りの小皿がほぼ一つにまとまる傾向がみられた。

第398図K_2O－CaO散布図と第399図Sr－Rb散布図では，空港跡地から出土した土師質土器鍋が生産地である楠井遺跡および西村遺跡のどちらに近いか検討した。この結果，第398図では楠井遺跡の分布領域に68,69,70,74,76がまた第399図では68,69,70,72,73,74がそれぞれ分布した。ま

た，西村遺跡の分布領域には第398図では75,78が，第399図では72が分布している。そして，両散布図から楠井遺跡の領域には68,69,70,74が入っている。

第400図K_2O－CaO散布図と第401図Sr－Rb散布図では，空港跡地遺跡から出土した中世後半の擂鉢・甕が生産地である楠井遺跡のものと一致するかどうか検討した。この結果，空港跡地遺跡の擂鉢は第400図で80,86,89,91,94,96が，第401図で80,84,86,89,90,92,93,94,95,96,97がそれぞれ楠井の分布領域に入らなかった。また，甕はほぼ楠井の分布領域に分布した。

3．まとめ

空港跡地遺跡より出土した中世の小皿・杯・鍋・擂鉢・甕の胎土分析を実施し，分析結果の要点をまとめ今後の課題についてふれたい。

(1)土師質土器の小皿・杯の底部成形技法がヘラ切りか糸切りかで胎土に違いがあるかどうかでは，胎土分析に差がみられなかった。ただ，技法に関係なくこれら小皿・杯が以下のように複数の胎土に分類された。

Aグループ‥‥2,3,4,5,6,9,11,15,16,17,18,19,20,21,45,47,48,49,52

Bグループ‥‥1,7,10,12,13,14,22,23,24,25,26,27,28,30,31,32,33,34
35,36,37,38,39,40,41,42,43,44,50,51,53,54,55,56,57
58,59,60,61,62,63,64,65,66

そして，このBグループの分布域に西村遺跡のヘラ切り小皿・杯が分布し，また空港跡地遺跡出土の糸切り小皿がほぼ一つにまとまり，前者のヘラ切り小皿・杯とほぼ重なり識別できなかった。しかし，この糸切り小皿は出土状況や形態的にきわめて限定された土器であることが想定されており，胎土分析でもまとまって分布することから胎土的にも限定された小皿であることが推定された。

以上のように，形態・技法的，肉眼観察による胎土分析の分類と理化学的な胎土分析が異なる結果となり，理化学的な胎土分析では，分類できないことが推測される。

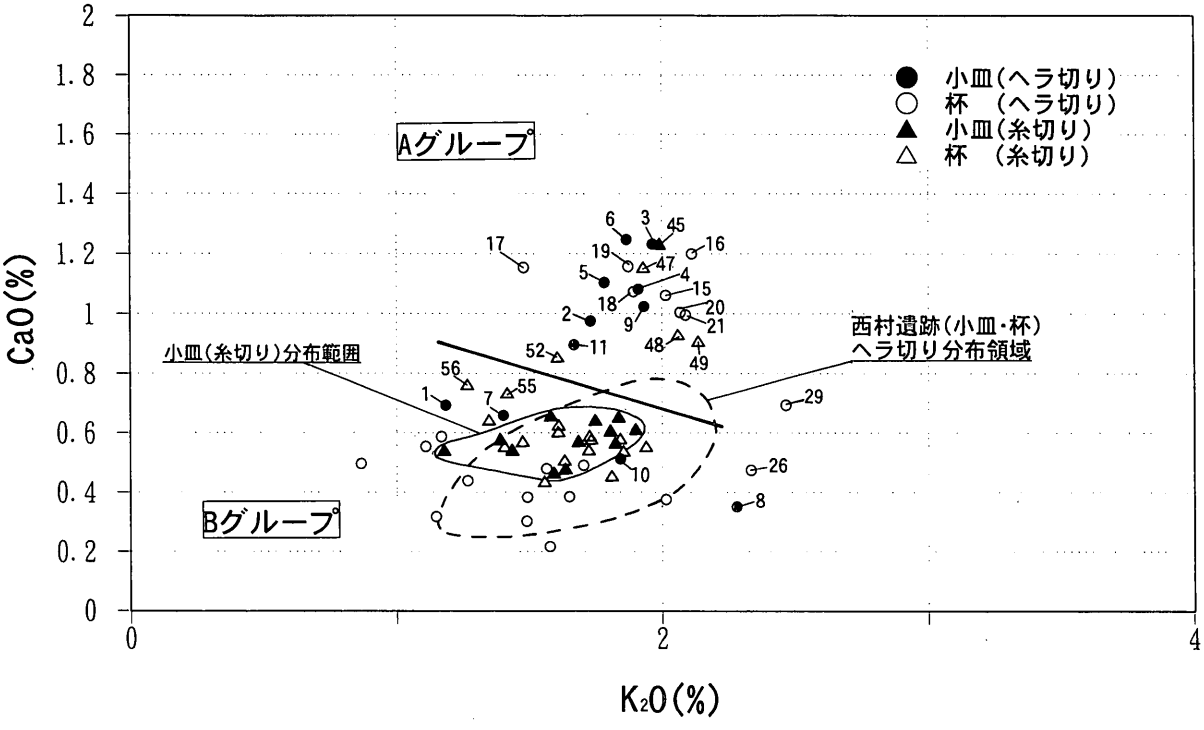
(2)空港跡地遺跡の土師質土器鍋が，楠井遺跡および西村遺跡の両生産地のどちらに推定されるかでは，68,69,70,74の鍋が楠井産と推定されたが，その他は明確にならなかった。また，中世後半の擂鉢・甕の生産地推定では，空港跡地遺跡出土の甕は楠井産の甕の分布領域に入り，楠井産と推定された。しかし，擂鉢は楠井産と推定されるものがある一方，楠井の分布領域に入らないものもみられた。

このように，土師質土器鍋，擂鉢，甕の産地推定を試みたが生産地に入らないものがあり，生産地の分布領域が広がる可能性が考えられ試料を増やして再検討する必要がある。

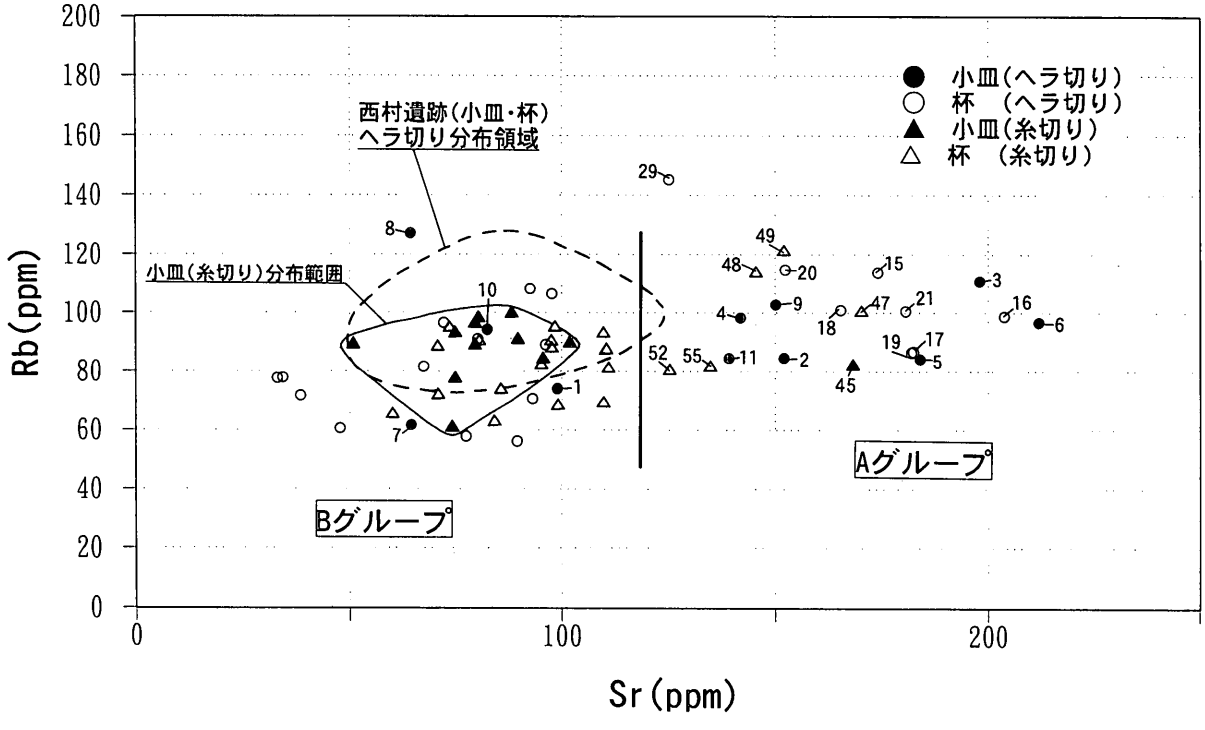
この胎土分析の機会を与えていただいた香川県埋蔵文化財調査センターの職員方々には末筆ではありますが，記して感謝いたします。

(註)

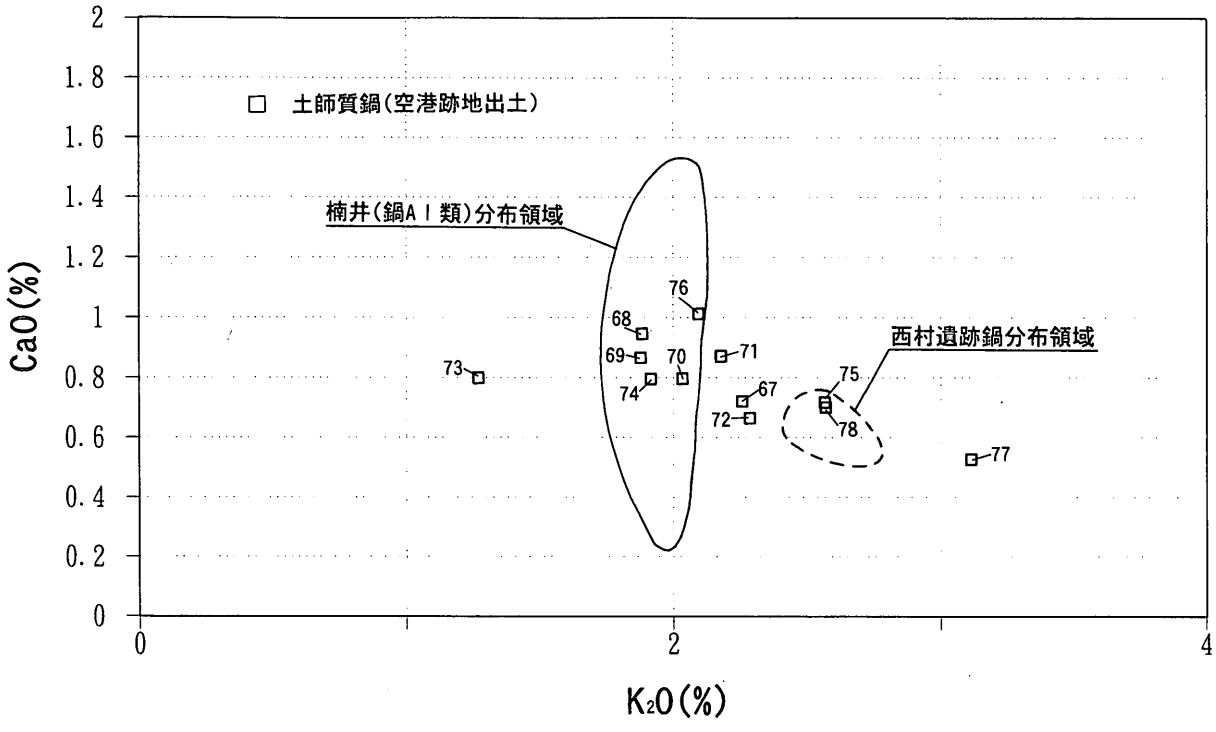
(1)白石　純「国分寺楠井遺跡出土土器の胎土分析」『国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会1995



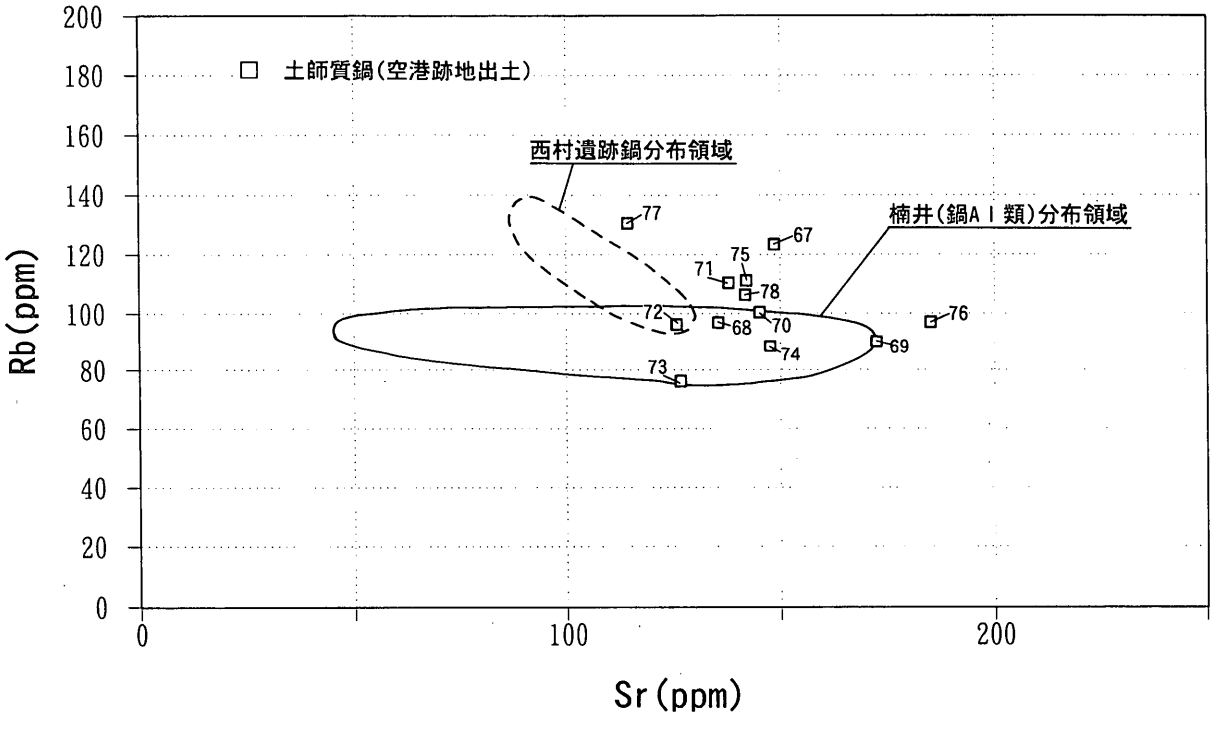
第396図　K₂O－CaO散布図 空港跡地遺跡出土小皿、杯の技法別による比較



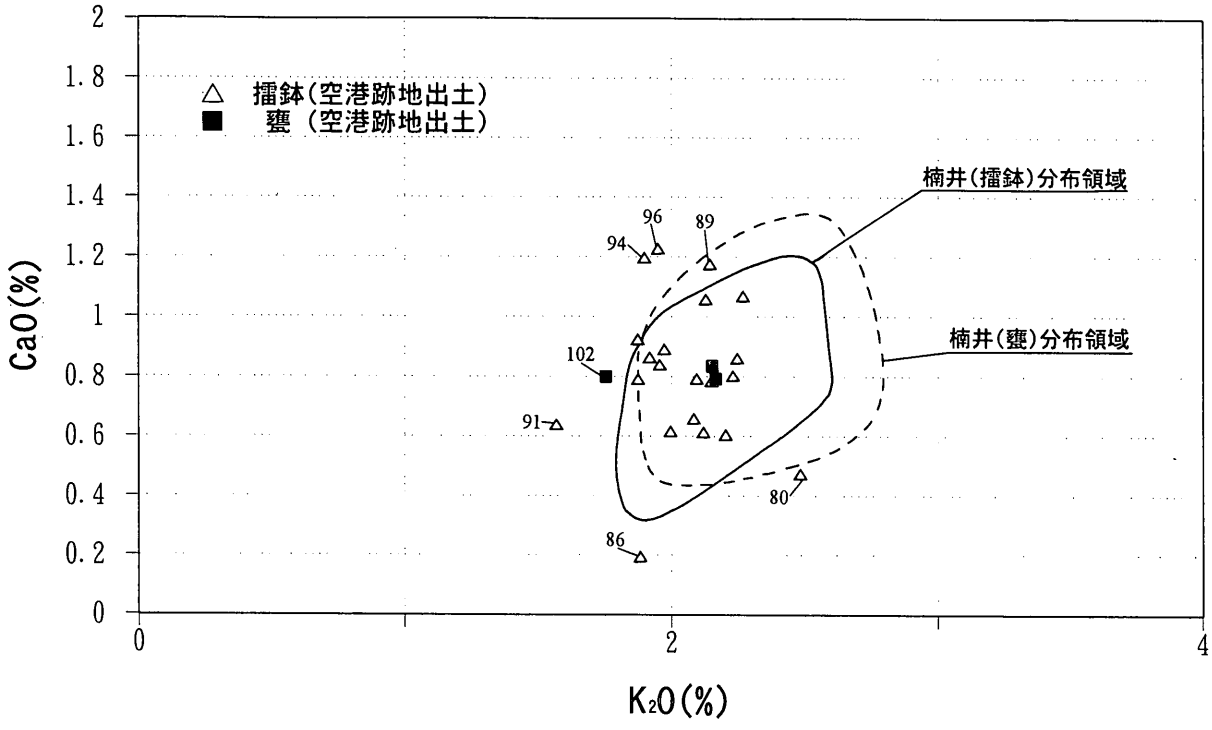
第397図　Sr－Rb散布図 空港跡地遺跡出土小皿、杯の技法別による比較



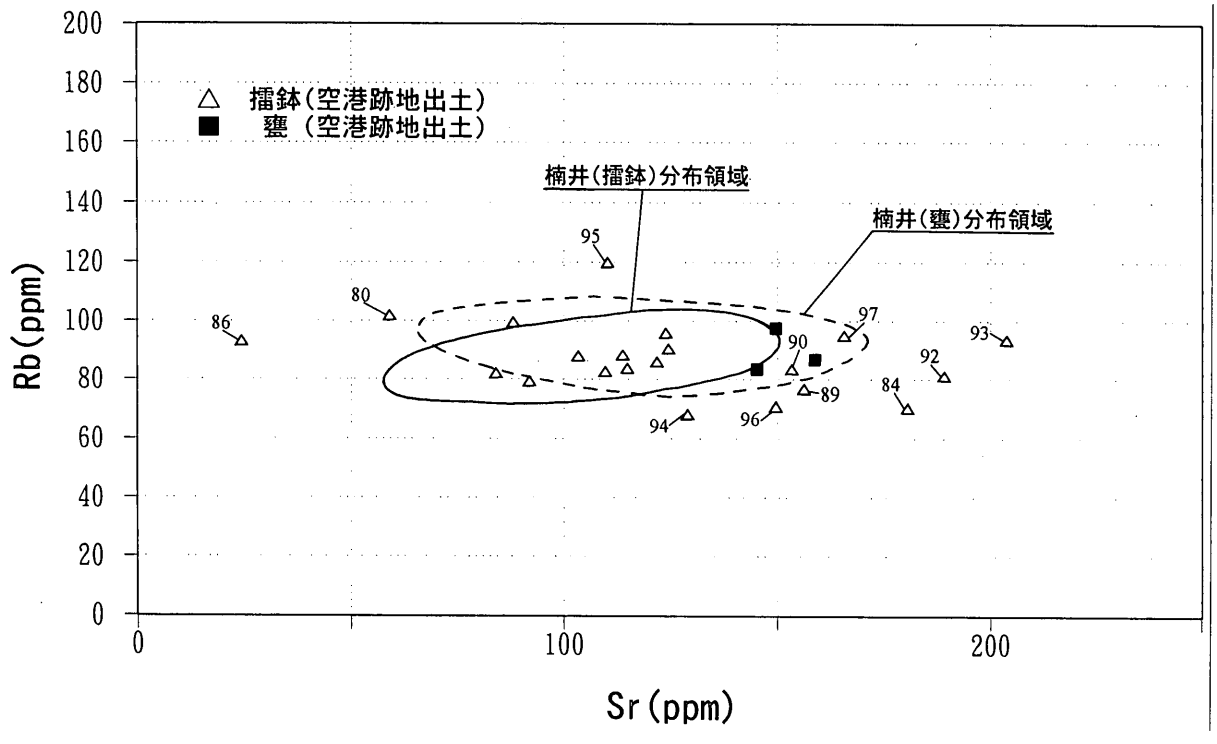
第398図　K_2O－CaO散布図 空港跡地遺跡出土鍋の生産地推定



第399図　Sr－Rb散布図 空港跡地遺跡出土鍋の生産地推定



第400図　K_2O－CaO散布図 空港跡地遺跡出土擂鉢、甕の生産地推定



第401図　Sr－Rb散布図 空港跡地出土擂鉢、甕の生産地推定

分析番号	報文番号	器種	K2O	CaO	Sr	Rb	技法	分析番号	報文番号	器種	K2O	CaO	Sr	Rb	技法
1	718	土師質小皿	1.19	0.69	99	75	ヘラ切り	62	367	土師質杯	1.62	0.63	98	92	糸切り
2	719	土師質小皿	1.73	0.98	152	85	ヘラ切り	63	369	土師質杯	1.81	0.46	86	75	糸切り
3	720	土師質小皿	1.96	1.24	199	111	ヘラ切り	64	370	土師質杯	1.48	0.58	111	82	糸切り
4	721	土師質小皿	1.91	1.08	142	99	ヘラ切り	65	372	土師質杯	1.35	0.65	111	89	糸切り
5	722	土師質小皿	1.79	1.11	185	84	ヘラ切り	66	375	土師質杯	1.84	0.59	110	94	糸切り
6	723	土師質小皿	1.87	1.25	212	97	ヘラ切り	67	781	土師質鍋	2.26	0.72	149	124	
7	724	土師質小皿	1.40	0.66	65	62	ヘラ切り	68	458	土師質鍋	1.88	0.87	136	97	
8	325	土師質小皿	2.28	0.36	65	128	ヘラ切り	69	460	土師質鍋	1.89	0.95	173	91	
9	326	土師質小皿	1.94	1.03	151	103	ヘラ切り	70	461	土師質鍋	2.04	0.80	145	101	
10	328	土師質小皿	1.85	0.52	83	94	ヘラ切り	71	462	土師質鍋	2.18	0.87	138	111	
11	329	土師質小皿	1.67	0.90	139	85	ヘラ切り	72	465	土師質鍋	2.29	0.66	126	97	
12	738	土師質杯	1.49	0.31	35	78	ヘラ切り	73	467	土師質鍋	1.27	0.80	127	77	
13	739	土師質杯	1.11	0.55	90	57	ヘラ切り	74	468	土師質鍋	1.92	0.80	148	89	
14	740	土師質杯	1.15	0.32	39	72	ヘラ切り	75	469	土師質鍋	2.57	0.72	142	111	
15	741	土師質杯	2.01	1.07	175	114	ヘラ切り	76	470	土師質鍋	2.10	1.02	186	98	
16	742	土師質杯	2.11	1.20	204	99	ヘラ切り	77	471	土師質鍋	3.12	0.53	114	131	
17	743	土師質杯	1.48	1.15	183	87	ヘラ切り	78	472	土師質鍋	2.58	0.70	142	107	
18	744	土師質杯	1.89	1.07	166	101	ヘラ切り	79	1504	擂鉢	2.08	0.67	88	100	
19	745	土師質杯	1.88	1.16	183	87	ヘラ切り	80	1647	擂鉢	2.48	0.48	59	102	
20	746	土師質杯	2.09	1.00	153	115	ヘラ切り	81	1675	擂鉢	1.92	0.87	110	82	
21	747	土師質杯	2.07	1.01	181	101	ヘラ切り	82	1644	擂鉢	1.99	0.62	92	79	
22	748	土師質杯	1.58	0.22	34	78	ヘラ切り	83	1646	擂鉢	1.87	0.93	115	84	
23	749	土師質杯	1.17	0.59	96	90	ヘラ切り	84	1677	擂鉢	1.97	0.90	181	71	
24	341	土師質杯	0.87	0.50	78	58	ヘラ切り	85	1645	擂鉢	2.23	0.81	124	91	
25	342	土師質杯	1.71	0.50	93	109	ヘラ切り	86	1533	擂鉢	1.88	0.20	24	93	
26	344	土師質杯	2.33	0.48	98	107	ヘラ切り	87	1546	擂鉢	2.20	0.61	103	88	
27	345	土師質杯	2.02	0.38	73	97	ヘラ切り	88	1707	擂鉢	1.87	0.80	124	96	
28	346	土師質杯	1.65	0.39	68	82	ヘラ切り	89	1575	擂鉢	2.14	1.18	156	77	
29	337	土師質杯	2.47	0.70	126	145	ヘラ切り	90	1574	擂鉢	1.95	0.85	154	84	
30	338	土師質杯	1.27	0.44	48	61	ヘラ切り	91	1576	擂鉢	1.57	0.64	84	82	
31	339	土師質杯	1.57	0.48	93	71	ヘラ切り	92	1522	擂鉢	2.12	1.06	189	82	
32	340	土師質杯	1.49	0.39	80	91	ヘラ切り	93	1524	擂鉢	2.24	0.87	204	94	
33	727	土師質小皿	1.83	0.57	75	94	糸切り	94	1795	擂鉢	1.89	1.20	129	68	
34	728	土師質小皿	1.69	0.57	75	78	糸切り	95	1493	擂鉢	2.12	0.62	110	120	
35	729	土師質小皿	1.84	0.66	80	97	糸切り	96	1771	擂鉢	1.95	1.23	150	71	
36	730	土師質小皿	1.58	0.66	96	85	糸切り	97	1297	擂鉢	2.27	1.07	166	96	
37	731	土師質小皿	1.64	0.48	102	90	糸切り	98	1268	擂鉢	2.09	0.80	114	89	
38	732	土師質小皿	1.90	0.61	90	92	糸切り	99	1736	擂鉢	2.15	0.79	122	86	
39	734	土師質小皿	1.81	0.61	81	98	糸切り	100	1589	甕	2.16	0.84	159	87	
40	735	土師質小皿	1.59	0.47	51	90	糸切り	101	1699	甕	2.17	0.80	145	84	
41	736	土師質小皿	1.75	0.64	88	100	糸切り	102	1744	甕	1.75	0.81	150	98	
42	737	土師質小皿	1.44	0.54	80	90	糸切り	103	192	土師質杯	2.10	0.47	89	128	
43	330	土師質小皿	1.18	0.54	75	62	糸切り	104	185	土師質小皿	1.38	0.53	64	79	
44	331	土師質小皿	1.39	0.58	81	99	糸切り	105	183	土師質小皿	2.13	0.65	96	108	
45	333	土師質小皿	1.98	1.24	169	83	糸切り	106	191	土師質杯	1.80	0.66	88	91	
46	750	土師質杯	1.64	0.52	71	73	糸切り	107	190	土師質杯	2.06	0.75	103	102	
47	751	土師質杯	1.93	1.16	171	102	糸切り	108	189	土師質杯	2.04	0.78	123	100	
48	752	土師質杯	2.06	0.94	146	115	糸切り	109	194	土師質杯	1.78	0.65	103	114	
49	753	土師質杯	2.14	0.92	153	122	糸切り	110	206	土師質鍋	2.62	0.60	92	126	
50	754	土師質杯	1.56	0.45	61	67	糸切り	111	207	土師質鍋	2.75	0.55	91	135	
51	755	土師質杯	1.73	0.55	71	90	糸切り	112	225	土師質小皿	1.44	0.50	61	78	
52	756	土師質杯	1.61	0.86	126	82	糸切り	113	224	土師質小皿	1.53	0.53	88	77	
53	757	土師質杯	1.86	0.55	98	89	糸切り	114	242	土師質杯	1.21	0.31	53	86	
54	758	土師質杯	1.73	0.60	100	70	糸切り	115	241	土師質杯	1.44	0.32	61	89	
55	759	土師質杯	1.42	0.74	135	83	糸切り	116	243	土師質杯	1.53	0.40	76	83	
56	760	土師質杯	1.27	0.77	110	71	糸切り	117	236	土師質杯	1.71	0.47	83	99	
57	764	土師質杯	1.41	0.57	84	64	糸切り	118	238	土師質杯	1.55	0.36	58	88	
58	767	土師質杯	1.73	0.55	74	96	糸切り	119	232	土師質杯	1.65	0.44	54	101	
59	355	土師質杯	1.74	0.59	95	83	糸切り	120	234	土師質杯	1.77	0.48	85	119	
60	363	土師質杯	1.61	0.61	81	92	糸切り	121	236	土師質鍋	2.46	0.62	105	112	
61	366	土師質杯	1.94	0.56	99	97	糸切り	122	235	土師質鍋	2.56	0.74	128	99	

第6表　胎土分析値一覧表（%）ただしSr，Rbはppm

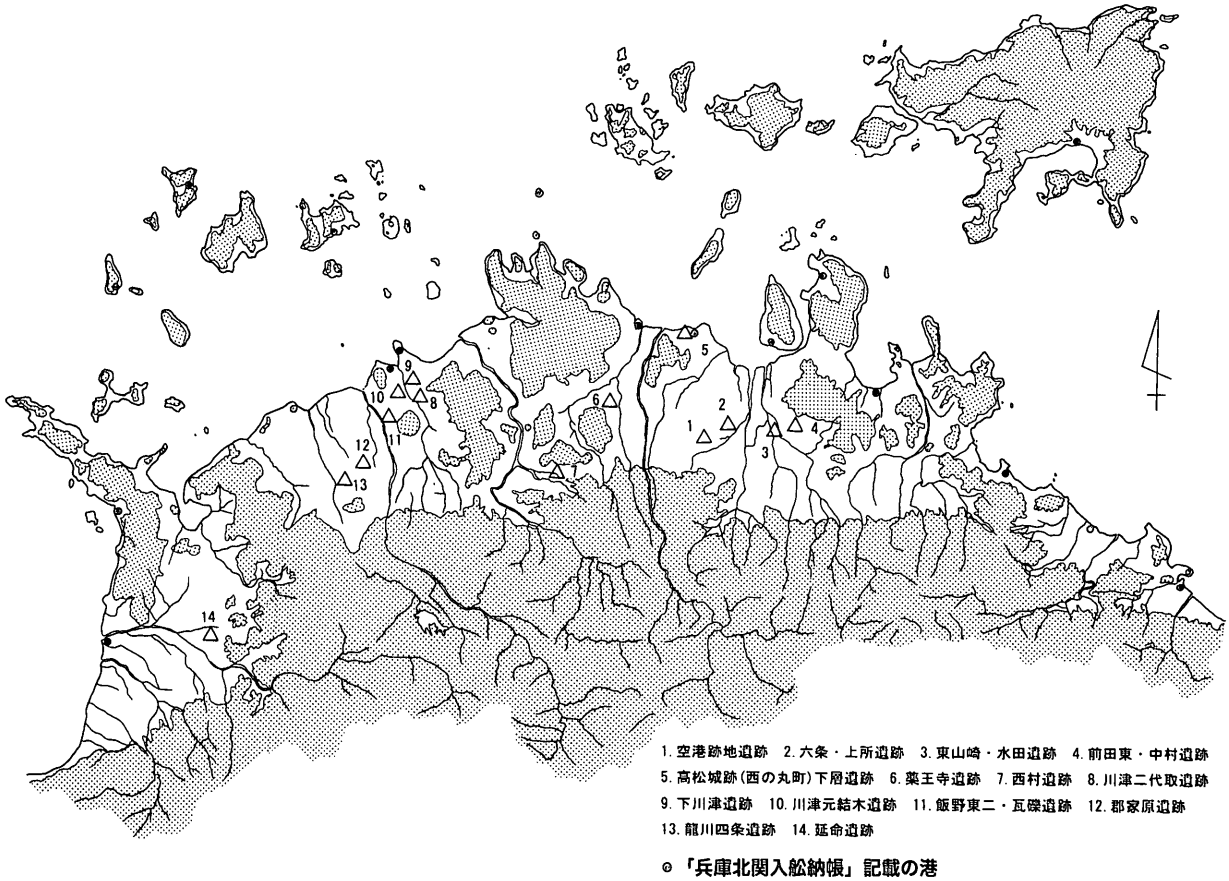
第5章　まとめ

第1節　高松平野と周辺地域における中世土器の編年

1．目的と課題

ここでは，空港跡地遺跡と周辺地域の出土土器による編年案を提示し，第2節以下で行う議論の年代的な枠組みを明確にする。対象地域は高松・丸亀平野とその中間に位置する生産地の西村遺跡である。

従来は，生産地における個別的な編年案の構築（廣瀬1982，片桐1992ａ，佐藤1993・1995）と，複数生産地の製品集積の場である消費遺跡での編年案の提示（野中1987，片桐1990・1992ｂ）が行われてきた。いまここで個々の作業の内容について記述する余裕はないが，９世紀から16世紀までの網羅的な編年案が提示された片桐1992ｂを踏まえて，本稿での課題を示しておく。



第402図　対象遺跡位置図（1/25万）

片桐1992ｂでは，丸亀平野での事例を中心として基準資料を抽出した上で各器種の変遷が分析されている。ただ基準資料抽出の基準や，基準資料の前後関係を想定した根拠が明確でなく，小期（Ⅰ～Ⅲ期を細分する単位）の「空白」や「接合」がどのような認識から導き出されたのかが，記述されていない。例えば，片桐編年Ⅱ－③～⑥期の基準資料とされた川津元結木遺跡ＳＤ10の各層土器群については，片桐氏は最下層・第２溝・上層を堆積の時間差にとどまらない時期（様式）差とみるが，器種組成の主体をなす土師質土器杯・小皿や黒色土器椀の形態・技法の変化については整合的な説明が行われておらず，堆積の差＝時期差とした根拠が曖昧である。片桐氏は系譜を念頭に置いた形式設定を行っているが，それらの属性を整理した細別型式の設定にまで至っていないことが，このような不分明さを残すこととなったと考える。このため，片桐氏の想定する12世紀代の在地産土器の変化は，生産地である西村遺跡での編年（廣瀬1982）との対比が困難な内容となっている。また，中世後半にあたる片桐編年Ⅲ－①から⑨期については，基準資料の提示が行われず，資料的な欠落も多いのにもかかわらず，いわば「均等割り」で時期が想定されている。したがって，Ⅲ期の細分小期には資料の提示が皆無な「時期」が存在することになっている。

もちろん，急速に増加しつつあった資料状況に埋没せず，器種の系譜・地域色を考慮した全県的な枠組みを立ち上げた片桐氏の業績は高く評価されるべきである。ここでは，空港跡地遺跡出土土器を中心とした高松平野南部での様相を検討し，生産地である西村遺跡や丸亀平野での様相と比較し，各地域の様相の対応関係を明確化した上で編年案の提示を行いたい。なお，両平野間あるいは遺跡間の様相の対応関係を検討する際には，極めて少数派に過ぎない他地域からの搬入品による「実年代観」は用いない。まずは量的に安定して出土する土師質土器杯・小皿のもつ様相の類似度から類推し，在地産の中域流通品である十瓶山窯跡群（西村遺跡）産土器椀で検証したい。搬入品は年代の上限を考慮する際の補助資料として位置付けておく。また，中世後半については，後述するように空港跡地遺跡や周辺遺跡でも良好な一括資料が得られていない状況であり，現段階でも編年案の提示は極めて困難である。このため，断片的な一括資料にもとづく若干の見通しと，以前に筆者が国分寺楠井遺跡で行った土器編年と出土資料との整合性について，言及するのにとどめた。

２．各器種の分類

(1) 土師質土器杯・小皿の分類

ⅢＡ　須恵器と同じ形態をもつ皿

ⅢＢ　底部ヘラ切りの小皿（口径11㎝前後より小さいもの）

ＢⅠ形式　外傾度が強く長い口縁部をもつもの。ヘラ切りはＬ・Ｒの両者あり

ＢⅠ－１型式　口径10～11㎝前後

ＢⅠ－２型式　口径8.5～9.5㎝前後

ＢⅡ形式　直立気味の口縁部をもつもの。ヘラ切りはＲのみ

ＢⅡ－１型式　口径9.5～11.5前後

ＢⅡ－２型式　口径9.0㎝前後

ＢⅡ－３型式　口径8.0㎝前後

ＢⅢ形式　外傾する短い口縁部をもつもの。ヘラ切りはＬ・Ｒの両者あり

ＢⅢ－１型式　口径10～10.5㎝前後

ＢⅢ－２型式　口径8.0～8.5㎝前後

ＢⅢ－３型式　口径7.5～8.0㎝前後

ＢⅢ－４型式　口径6.0～7.5㎝前後

ＢⅢ－５型式　直立する極めて短い口縁部をもつ，コースター状の形態のもの。口径5.0㎝台

ⅢＣ　底部糸切りの小Ⅲ

ＣⅠ形式　外傾する口縁部をもつもの。口径7.5～9.0㎝

ＣⅡ形式　直立する太く短い口縁部をもつ，コースター状の形態のもの。口径6.5～8.5㎝前後。

杯Ａ　須恵器と同じ形態をもつ平底杯

杯Ｂ　須恵器と同じ形態をもつ高台付杯

杯Ｃ　器体が浅い小型杯

杯Ｄ　直線的に外傾する体部をもつ底部ヘラ切りの杯。ヘラ切りはＬ・Ｒの両者あり

ＤⅠ形式　体部の外傾度が強く，口径と底径の差が大きなもの。口径13.0㎝前後

ＤⅡ形式　体部の外傾度が弱く，口径と底径の差がやや小さなもの

ＤⅡ－１型式　口径13.0～14.0㎝

ＤⅡ－２型式　口径14.0～15.0㎝前後。ＤⅡ－１類よりも体部直立気味で深手。底部と体部の境は丸味を帯びる

ＤⅡ－３型式　口径13.5～14.0㎝前後。ＤⅡ－２類よりも深手

ＤⅡ－４型式　口径12.5～13.5㎝前後。ＤⅡ－２類とほぼ同じ形態

ＤⅡ－５型式　口径11.5～12.5㎝前後。底部と体部の境は明瞭に屈曲

ＤⅡ－６型式　口径10.5～11.0㎝前後。ＤⅡ－５類とほぼ同じ形態

ＤⅡ－７型式　口径9.5～10.5㎝前後。器壁薄くロクロ目が顕著

ＤⅡ－７′型式　口径12.0前後。器壁薄い

ＤⅡ－８型式　口径9.0～10.5㎝。器高低く，器壁薄い

ＤⅡ－８′型式　口径11.5㎝前後。器高低く，器壁薄い

ＤⅡ－９型式　口径9.5㎝前後。体部の外傾度が強く浅い器体

ＤⅢ形式　体部が直立気味であり，口径と底径の差が小さなもの

ＤⅢ－１型式　口径14.0前後。体部と底部の境が丸味をもち，体部はやや外傾度が強い。

ＤⅢ－２型式　口径11.0～12.5㎝前後。底体部の境が明瞭に屈曲する。

杯Ｅ　底部糸切りの杯

ＥⅠ形式　やや直立気味の体部をもつ浅手のもの。回転糸切り（Ｗ）と静止糸切り（Ｓ）あり

ＥⅠ－１型式　口径14.0～16.0㎝前後

ＥⅠ－２型式　口径13.0～14.0㎝

ＥⅠ－３型式　口径11.0～12.0㎝

ＥⅡ形式　直線的に外傾する深手のもの。

ＥⅢ形式　体部中位に強いロクロ目によるアクセントがつくもの

ＥⅢ－１型式　体部が明瞭に屈曲

ＥⅢ－２型式　体部が弱く屈曲

ＥⅢ－３型式　体部が内弯するもの

ＥⅢ－４型式　体部が直線的に立ち上がる

杯Ｆ　体部～底部外面に指頭圧痕が顕著な手捏ねの杯（あるいは「底部押し出し」か）

(2) 土師器甕・羽釜の分類

甕Ａ　内弯する口縁部と肥厚もしくは平坦面の端部をもつ布留系の甕

甕Ｂ　丸く太い口頸部と器壁の厚い体部をもつ粗雑な調整の甕

甕Ｃ　シャープな端部調整とハケ目調整を多用する器壁の薄い甕

甕Ｄ　口縁端部をツマミ上げ，ハケ目調整を多用する甕

Ｄ－１型式　シャープで短い端部のツマミ上げが施されるもの

Ｄ－２型式　上方に拡張気味の端部を長くツマミ上げるもの

Ｄ－３型式　Ｄ－２型式よりも長く端部をツマミ上げるもの

甕Ｅ　器壁の厚い甕。ハケ目調整は外面の一部のみ

ＥⅠ形式　口縁部器壁に斜交する直立気味の端面をもつもの

ＥⅡ型式　口縁部器壁に直交する端面をもつもの

ＥⅡ－１型式　端面がやや窪んだ平坦面をなすもの

ＥⅡ－２型式　端面が丸味をもつもの

甕Ｆ　器壁が薄く頸部が緩やかに外反するもの。ハケ目調整を多用する

羽釜Ａ　頸部が緩く外反する甕形の器体に長く伸びる鍔部を伴うもの

羽釜Ｂ　甕Ｄ・Ｅの体部上半から頸部にかけて鍔を貼付するもの

Ｂ－１型式　甕Ｄ－１型式に鍔を付すもの。頸部と鍔基部が明確に分離する。

Ｂ－２型式　甕Ｄ－２型式に鍔を付すもの。頸部と鍔基部が明確に分離する。

Ｂ－３型式　甕Ｄ－３型式に鍔を付すもの。頸部と鍔基部が明確に分離する。

Ｂ－４型式　甕ＥⅠ形式に鍔を付すもの。頸部と鍔基部が近接もしくは一体化する。

羽釜Ｃ　短く直立する頸部と水平に太く伸びる鍔部からなるもの

ＣⅠ形式　口縁部と鍔部の外面が緩やかにカーブして連続するもの。菅原正明氏の摂津Ｃ２型

ＣⅠ－１型式　口縁部と鍔部長がほぼ同じで，両端部に明確な平坦面を作るもの

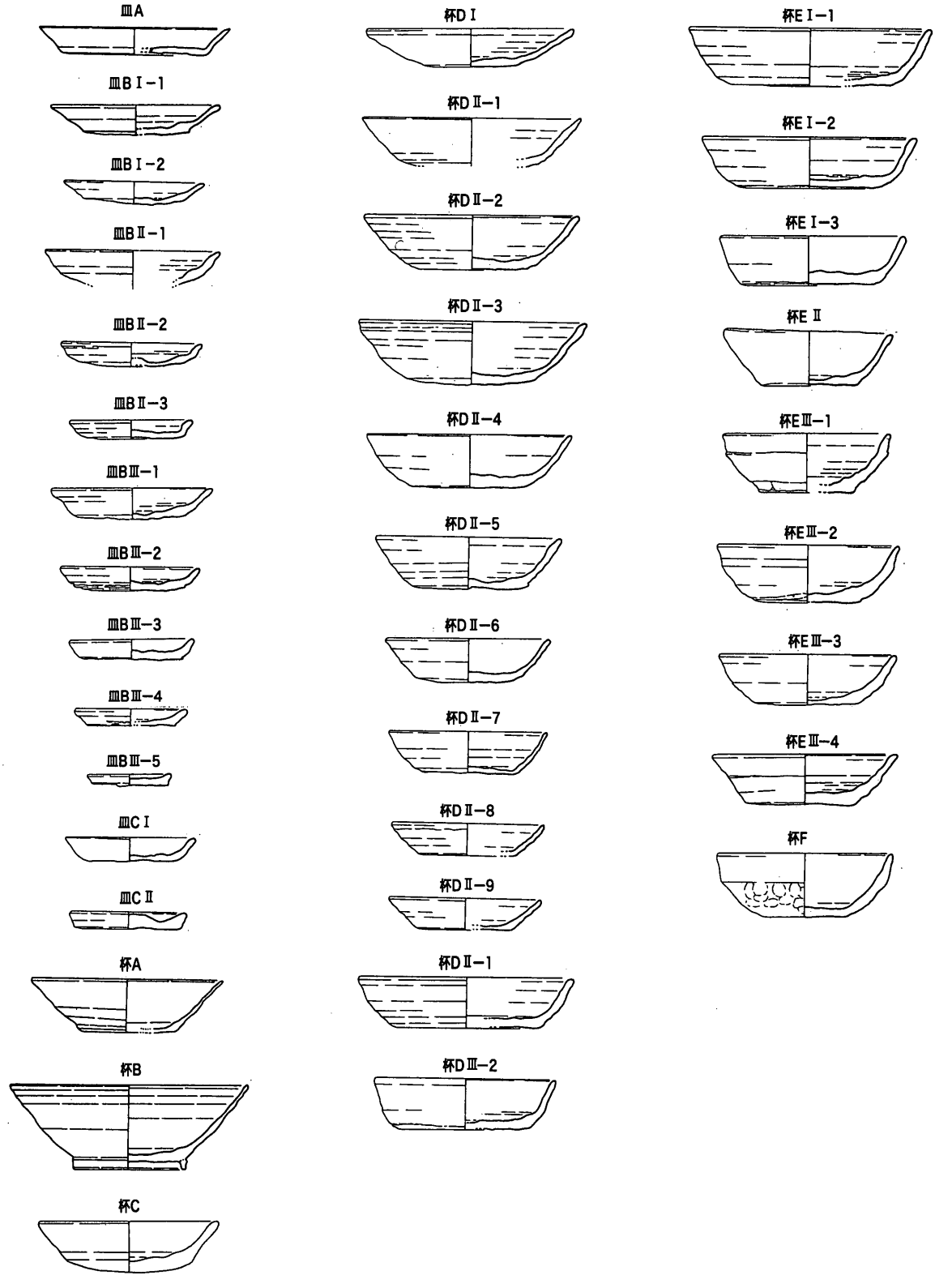
ＣⅠ－２型式　鍔部の方が長く，口縁・鍔の端部に平坦面をもつもの

ＣⅠ－３型式　鍔部の方が長く，内傾して丸く収まる口縁端部をもつもの

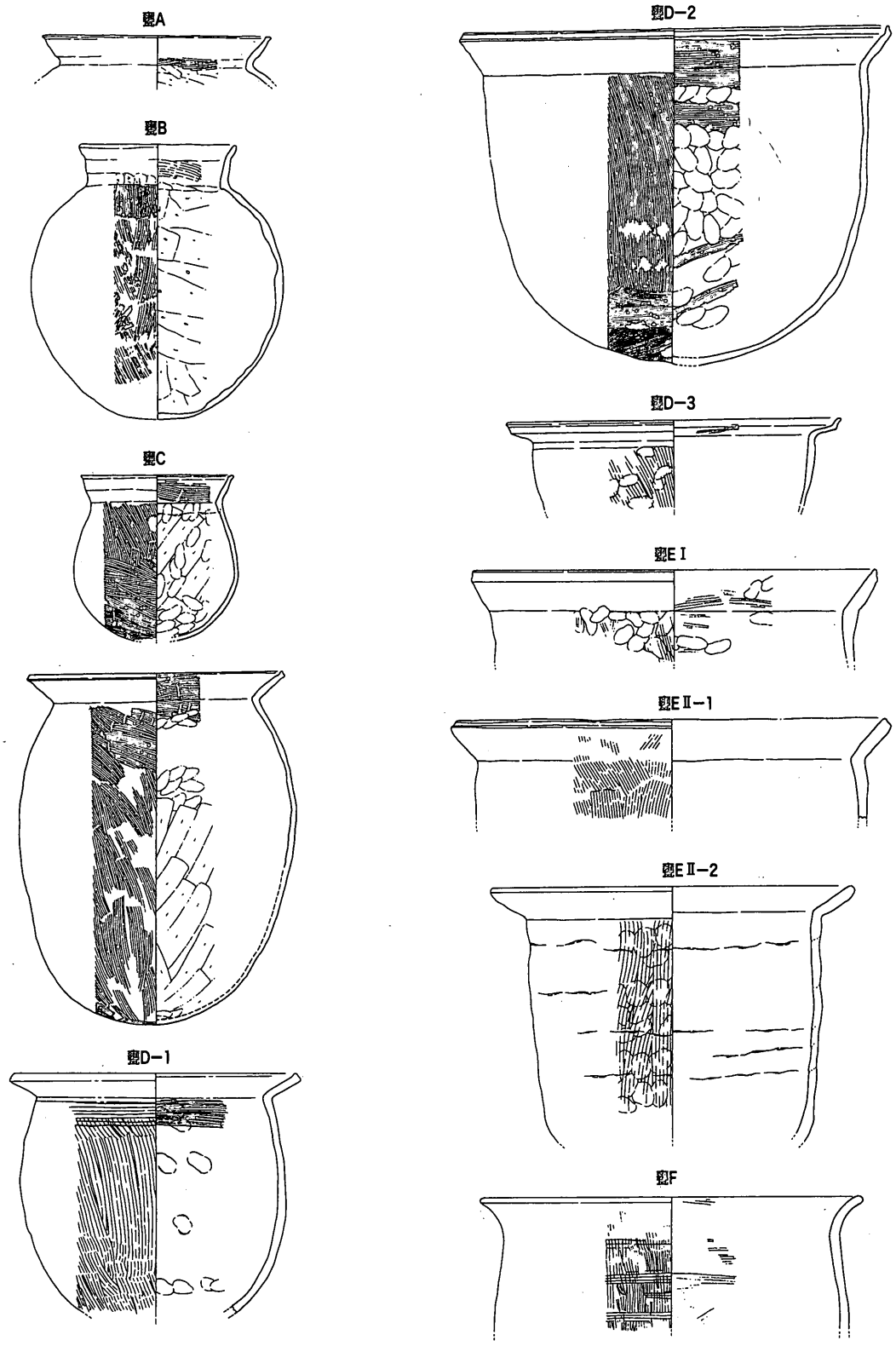
ＣⅡ形式　口縁部と鍔部の外面が比較的明瞭に屈曲するもの

ＣⅡ－１型式　内傾して丸くツマミ出される口縁端部をもつもの

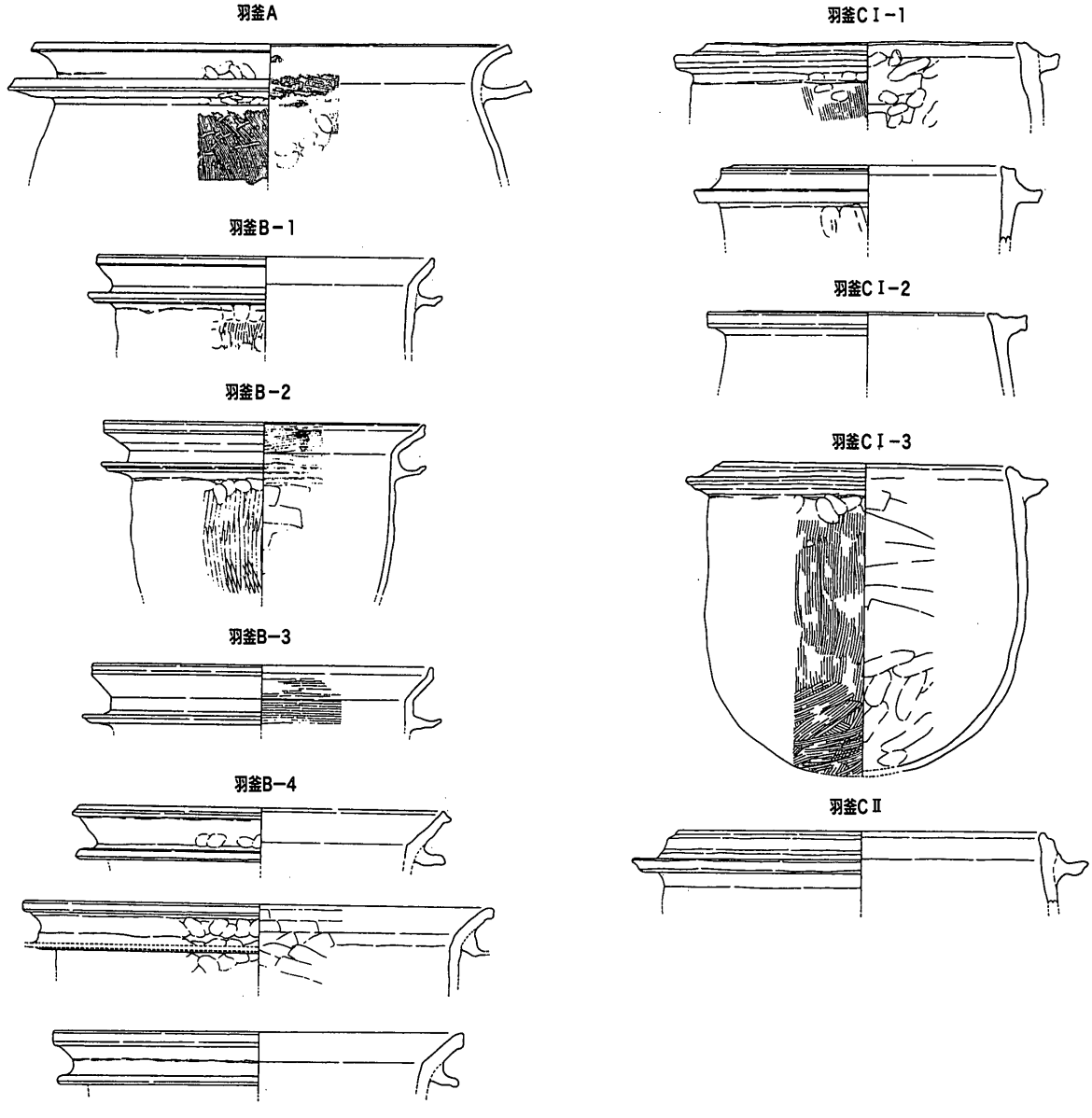
ＣⅡ－２型式　平坦な口縁端部と鍔端部をもつもの



第403図　器種分類図（1）土師質土器皿・杯（1/4）



第404図　器種分類図（2）土師器甕（1/6）



第405図　器種分類図（3）土師器羽金（1/6）

(3) 土師質土器鍋・足釜の分類

佐藤1995に依拠し，該当しないものについては個別に記述する。

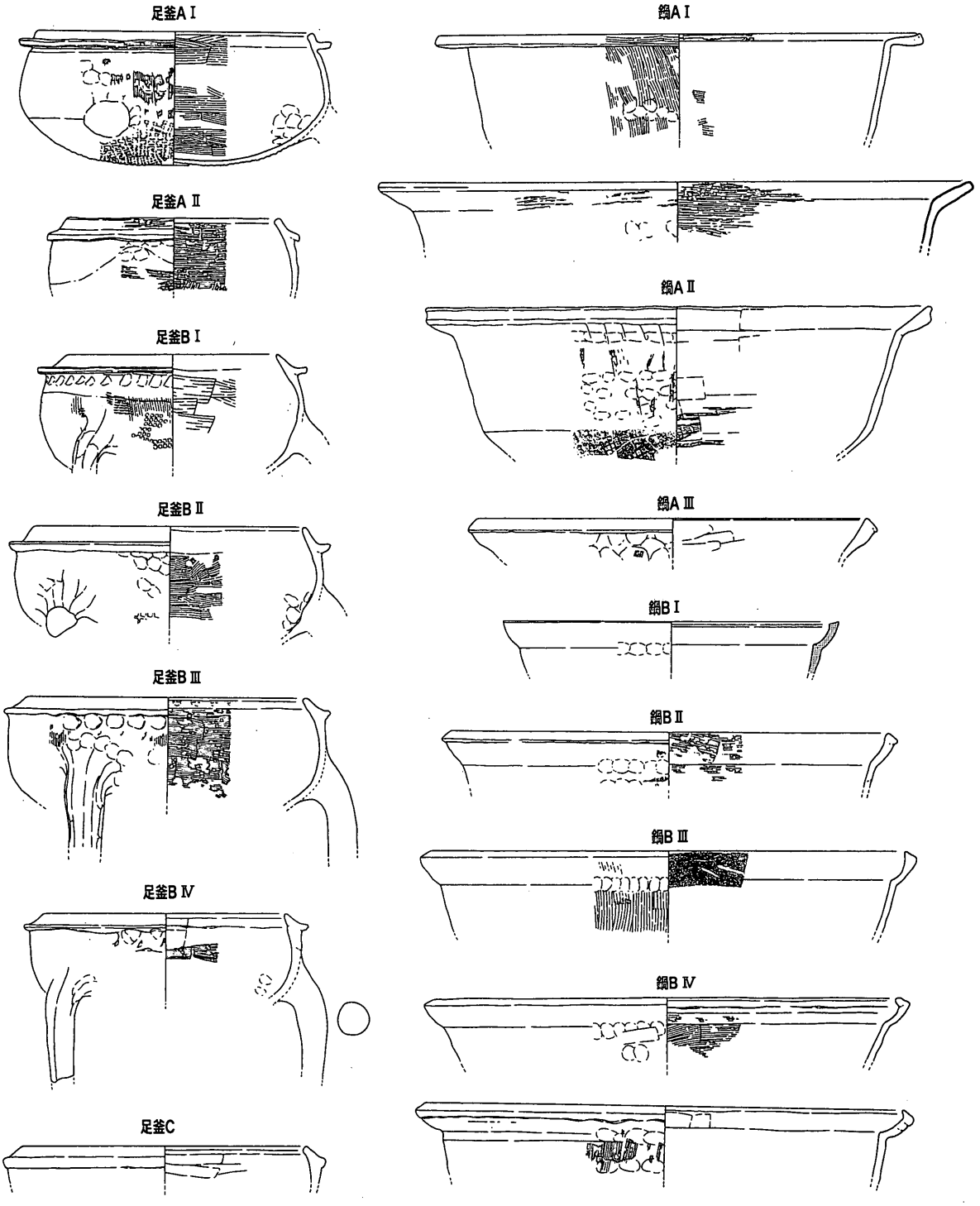
(4) 須恵器の分類

佐藤1993に依拠するが，今回，十瓶山窯産須恵器椀ＡⅡならびに共通した形態・技法を伴う黒色土器椀，平高台をもつ椀Ｂ，鉢Ｄ・Ｅ，壺Ｃ，甕Ｃについて細分を行った。また，西村２号窯跡出土須恵器の再整理で存在が明確になったヘラ磨き調整を施す杯については，新規の形式を設定した。

椀Ａ　輪高台を貼付する椀。

ＡⅡ形式　内面に板ナデ調整と，特徴的な回転ヘラ磨きを施すもの

ＡⅡ－１型式　直立気味の口縁部・体部上半と，大きく内弯する体部下半をもつ「深椀」形態。径高指数44前後。高台高1.0㎝前後，同径7.8㎝前後。内面板ナデ（コテあて）後，見込み複数方向の平行磨き，体部内面６分割磨き。外面の磨きなし。



第406図　器種分類図（4）土師質土器足釜・鍋（1/6）

AII－2型式　口縁部から体部下半まで同じカーブで内弯（口縁部はやや直線的)。径高指数41～45。高台高0.6㎝前後，同径7.0㎝前後でAII1よりも小振り。内面板ナデ後，見込み複数方向の平行磨き，体部内面6分割磨き。外面回転磨きと体部下半に回転ヘラ削り。

AII－3型式　口縁部から体部下半まで同じカーブで内弯（口縁部やや直線的)。径高指数39～43。高台高0.6㎝前後，同径6.0～6.5㎝でAII2よりも小振り。内面板ナデ後，見込み一定方向の平行磨き，体部内面4分割磨き。外面回転磨きと体部下半に回転ヘラ削り。

AII－4型式　口縁部から体部下半まで同じカーブで内弯（口縁部が直立気味)。径高指数34～38。高台高0.6～1.0㎝，同径6.0～7.0㎝でAII3と同じかやや大振り。内面板ナデ後，見込み平行磨き，体部内面4分割磨き。外面回転磨きと体部下半に回転ヘラ削り。

AII－5型式　口縁部～体部上半は直線的に外傾，体部下半は内弯。径高指数33～36前後。高台高0.6㎝前後，同径5.5～6.0㎝前後でAII4よりもやや小振り。内面板ナデ後，見込み平行磨き，体部内面に斜放射状もしくは円弧状の磨き。外面回転磨きで，体部下半の削りなし。

AII－6型式　口縁部～体部下半は外傾気味に緩く内弯。径高指数31～33。高台高0.6㎝，同径5.0㎝台でAII5よりも小振り。内面板ナデ後，体部から底部にかけて斜放射状もしくは円弧状の磨き（見込みと体部内面の磨きが一体化)。外面回転磨きで，体部下半の削りなし。

AII－7型式　口縁部～体部下半は外傾気味に緩く内弯。径高指数31～32。高台高0.6㎝，同径5.8㎝前後でAII6と同じ。内面板ナデ後，無調整（磨きなし)。外面回転磨きで，体部下半の削りなし。

AII－8型式　口縁部～体部上半は外傾気味に緩く内弯する。径高指数31～33。高台は粘土紐を押し潰したような形態で粗雑に貼付され，径4.0～5.5㎝前後。内面板ナデで，内外面ともにヘラ磨きなし。

AII－9型式　口縁部～体部上半は外傾気味に緩く内弯。径高指数29～34。体部下半に弱い屈曲部をもつ。高台は突帯状に矮小化し，径4.5～5.0㎝。内面粗いハケ目状の板ナデ。

AII－10型式　杯形の器体に高台を貼付。径高指数26～30。体部下半に明瞭な屈曲部をもち，この部分までヘラ切りされている。高台は粗雑で不定形。内面粗いハケ目状の板ナデ。

椀B　平高台をもつもの

B－1型式　ヘラ削り調整による明瞭な平高台をもつもの。底部から直立気味に屈曲して体部下半に立ち上がるため，見込みが窪んでみえる。

B－2型式　B－1同様の平高台をもつが，底部から体部下半の立ち上がりが連続的であるため，見込みが窪んでみえない。

B－3型式　調整が粗雑でやや低い平高台をもつもの。底部と体部は連続的

Ｂ－４型式　不明瞭で痕跡的な平高台状の底部をもつもの。

杯Ｃ　ヘラ磨き調整を施す杯

鉢Ｄ　外反する口頸部をもつ鉢

Ｄ－１型式　頸部の屈曲が明瞭で，口縁端部を上方に長くツマミ出すもの

Ｄ－２型式　頸部の屈曲が明瞭で，口縁端部を上方に短くツマミ出すもの

Ｄ－３型式　頸部の屈曲がやや緩やかで，口縁端部を上方に短くツマミ出すもの

Ｄ－４型式　頸部の屈曲が緩やかで，口縁端部はツマミ上げず，やや肥厚するもの

鉢Ｅ　口縁部が屈曲せず，体部から連続して伸びる鉢

Ｅ－１型式　口縁部にやや丸味を帯びた外傾する平坦面をもつもの

Ｅ－２型式　口縁部の外傾する平坦面の外側がわずかに横方向に挽き出されるもの

Ｅ－３型式　口縁部端面の外側が明瞭に横方向に挽き出されるもの

Ｅ－４型式　口縁部端面の両側が明瞭に挽き出されるもの

Ｅ－５型式　口縁部外面直下が強くナデ調整され，端面外側が相対的に肥厚するもの

Ｅ－６型式　口縁部端面に凹面が作られるもの

壺Ｃ　大きく外側に開く口頸部をもつ長胴の瓶

Ｃ－１型式　口縁端部が長く上方にツマミ出され，体部最大径が体部上半1/5付近の部位にある，肩の張った形態をもつもの

Ｃ－２型式　口縁端部が短く上方にツマミ出され，体部最大径が体部上半1/3付近の部位にある，ややなで肩の形態をもつもの

Ｃ－３型式　口縁端部が上方にツマミ出されず，外傾する平坦面をもつもの。体部形態はＣ－２型式と同じ

Ｃ－４型式　口縁端部が丸味を帯び，頸基部の屈曲が不明瞭なもの

甕Ｃ　短く外反する口頸部をもつ長胴平底の甕（森浩一氏のいう十瓶山式甕）

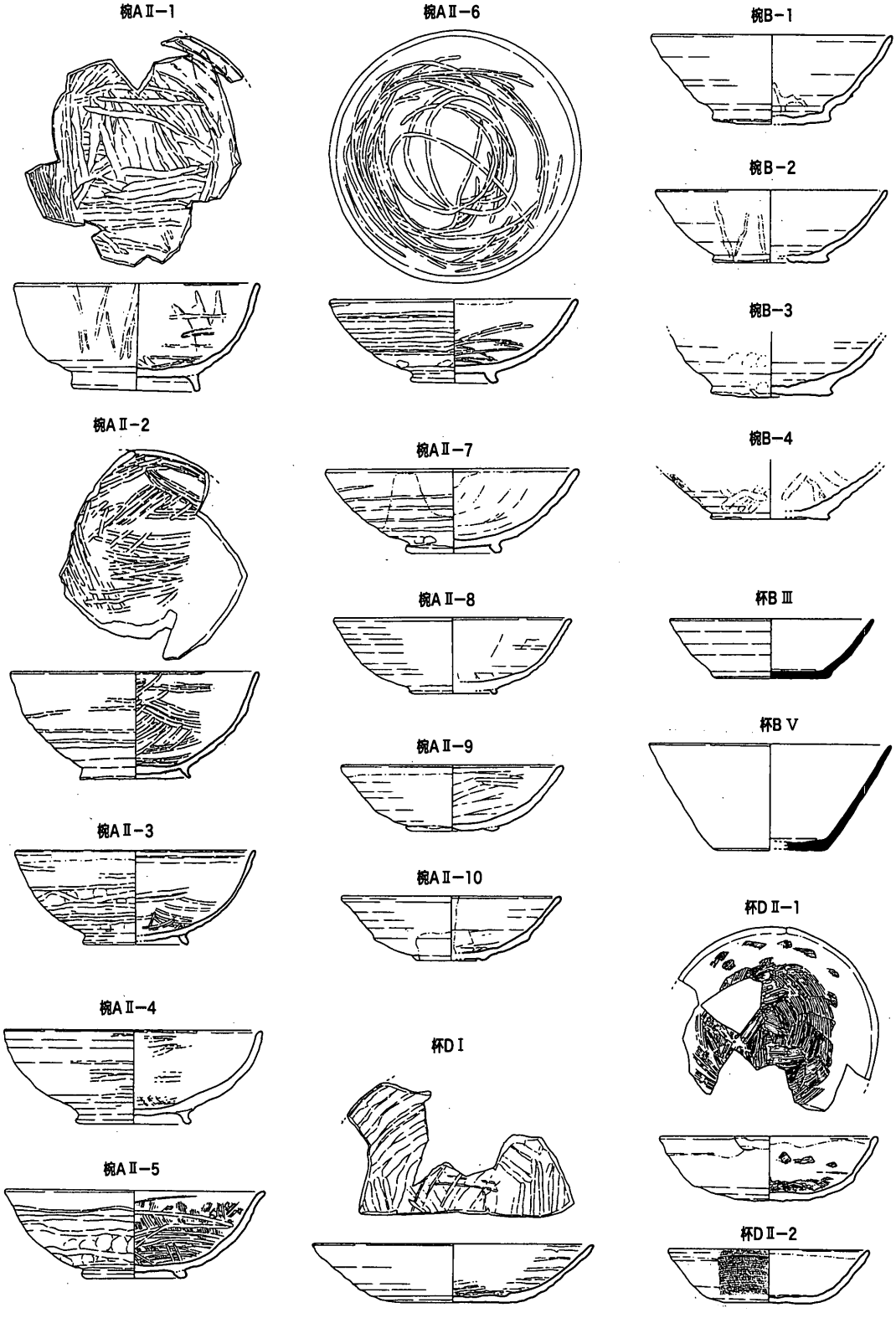
Ｃ－１型式　比較的長い口頸部をもち，口縁端部を横方向にシャープに挽き出すもの。頸基部は体部から明瞭に屈曲

Ｃ－２型式　Ｃ－１型式よりもやや短い口頸部をもち，口縁端部を横方向にわずかに挽き出すもの。端面には弱い凹面がある。頸基部は体部から緩やかに屈曲

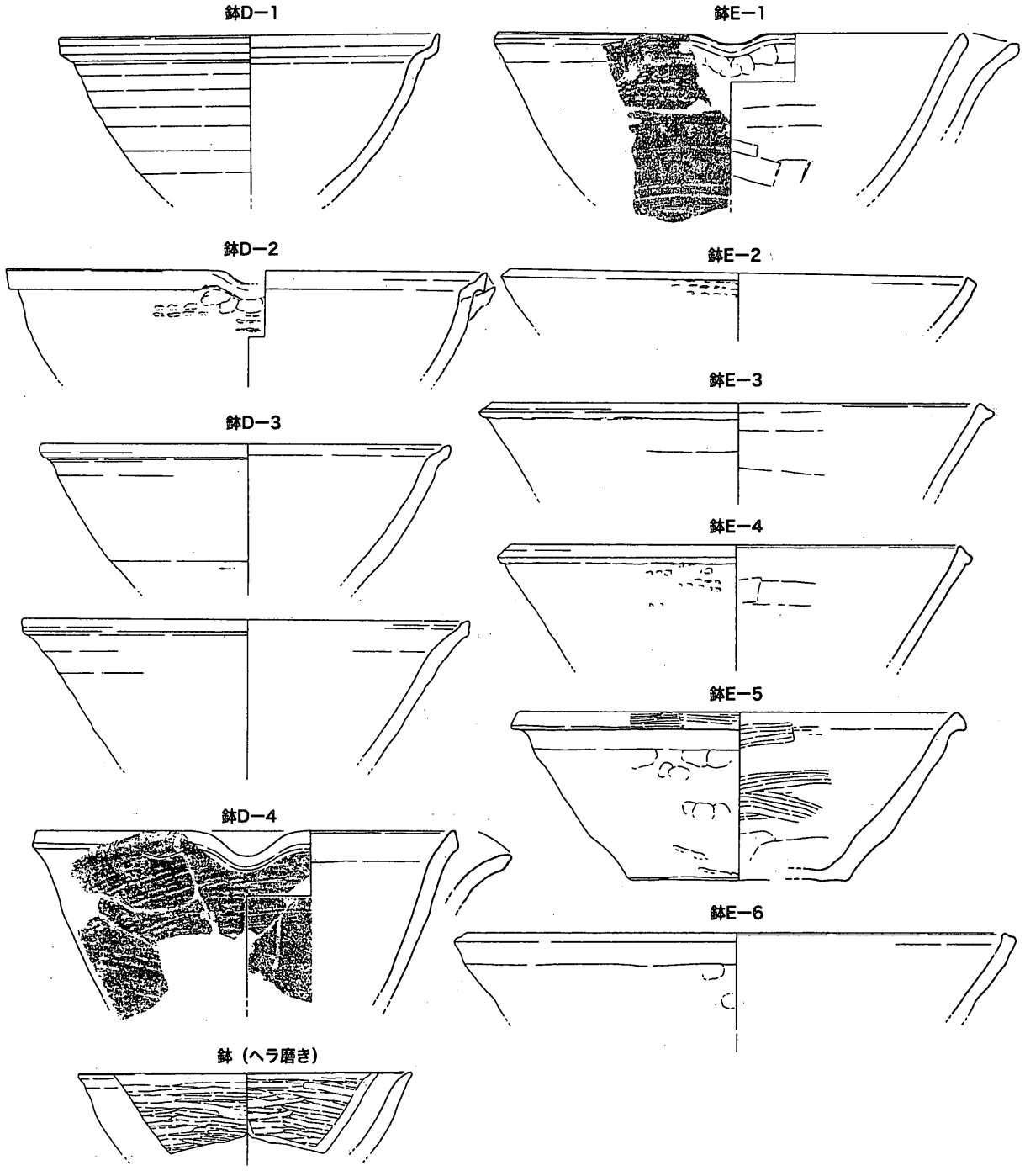
Ｃ－３型式　口縁端部を挽き出さず，外傾する平坦面とするもの。頸基部の形態はＣ－２型式と同じ

Ｃ－４型式　口縁端部が口頸部に斜交して直立気味の面をなすもの

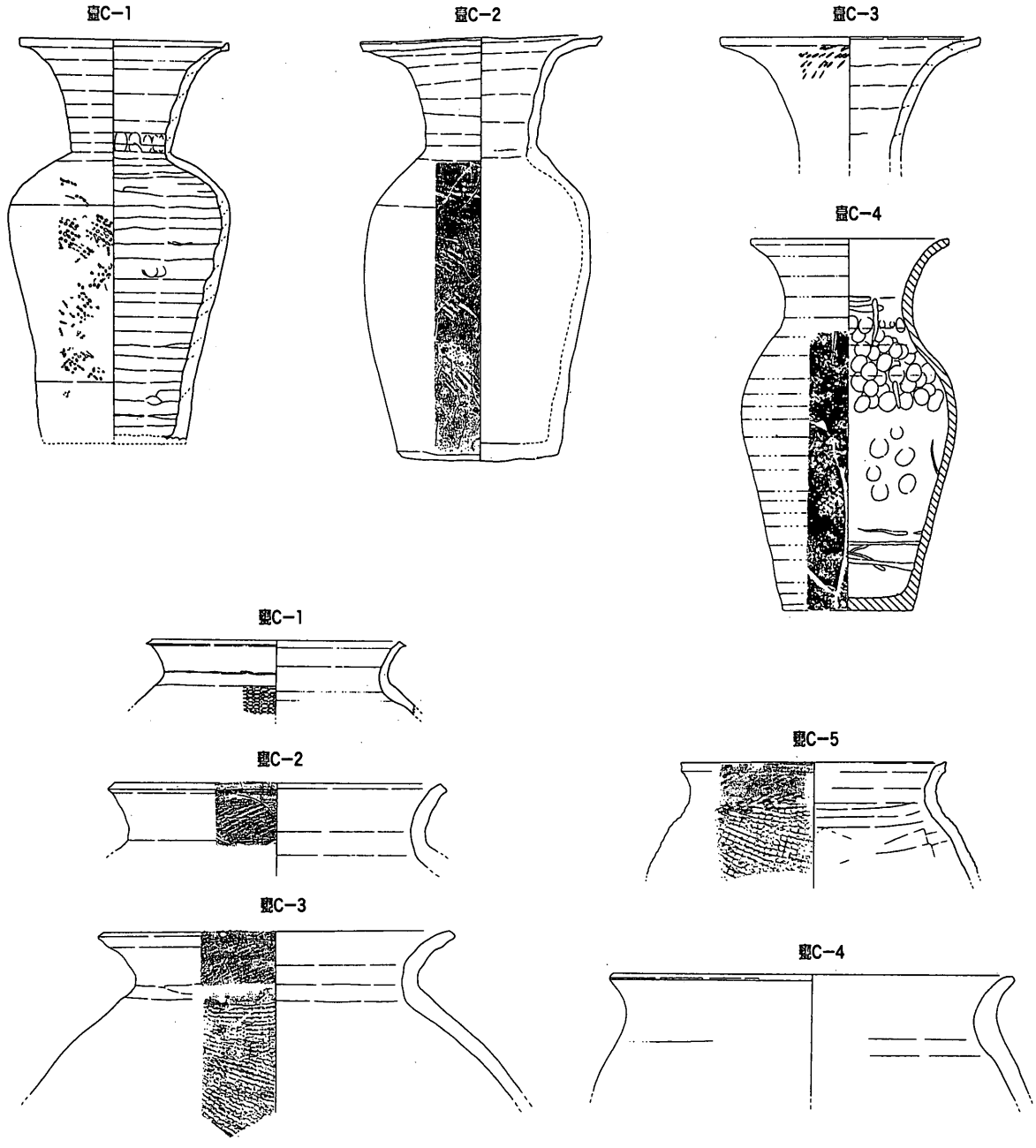
Ｃ－５型式　口縁端部が丸味を帯びて頸基部の屈曲が不明瞭になるもの



第407図　器種分類図（5）須恵器杯・椀，黒色土器椀（1/4）



第408図　器種分類図（6）須恵器鉢（1/4）



第409図　器種分類図（7）須恵器壺・甕（1/6）

3．高松平野南部における中世前半の土器群

(l) 空港跡地遺跡での対象土器群と出土状況

今回報告した中世前半の区画を伴う屋敷地から出土した土器群には，出土状況と安定した出土量から編年作業の基準資料としての扱いが十分可能な資料が多くみられた。それらは以下の通りである。

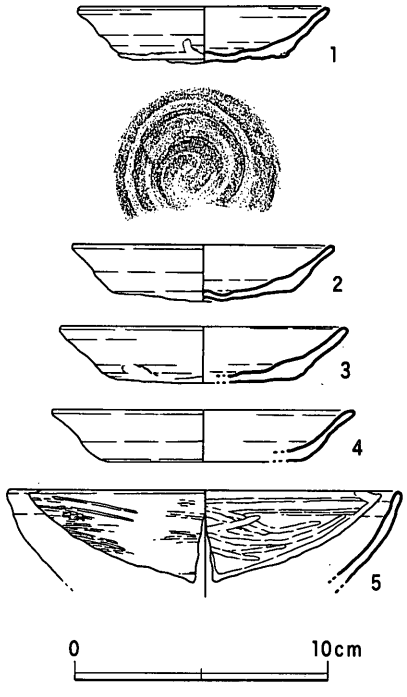
a) ＳＤf32出土土器
b) ＳＴf01出土土器
c) ＳＤf16上層・中層・下層出土土器
d) ＳＤf19出土土器
e) ＳTf01出土土器
f) ＳＤf48下層出土土器

詳細は第３章第３節の報告に譲るが，ここで再度出土状況を確認しておく。

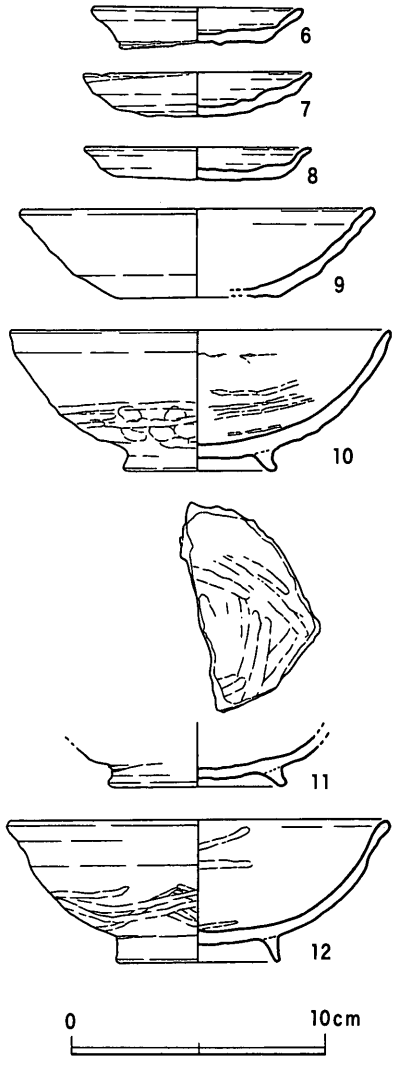
a)は小区画溝との切り合いや埋土の状況から，屋敷地の造成に伴って人為的な埋め戻しが行われたと考えられる溝から出土した。１箇所に集中して出土したという状況ではないが，和泉型瓦器椀も含めて遺存状況が比較的良好であり，埋め戻しの際に投棄された可能性がある。資料点数は少ないが，出土状況からまとまった資料といえるものである。

b)は屋敷地東部の屋敷墓から出土した土器である。礫敷きの火葬施設をそのまま墳墓としており，礫敷き上面から土師質土器杯・瓦器椀・白磁碗などが出土した。土師質土器杯・瓦器碗は二次的な被熱痕跡が明瞭に認められることから，火葬の際に副葬されていたものと推測でき，一括資料としての要件を備えているといえる。

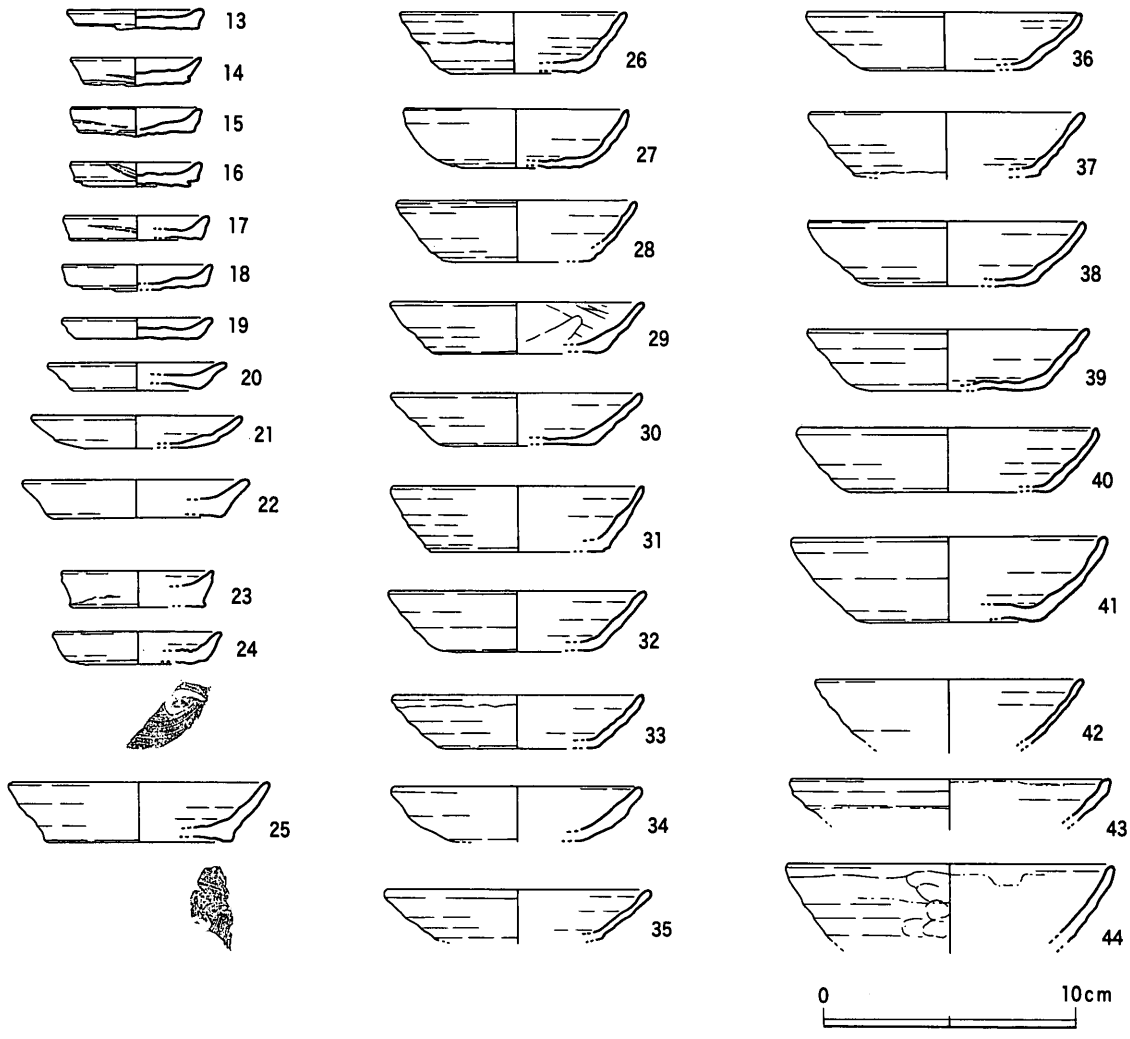
c)は屋敷地西側の区画溝で，明確に３つに区分できる土層に伴



第410図　SPi122出土遺物（1/3）



第411図　SPi121出土遺物（1/3）



第412図　Skc77出土遺物（1/3）

って出土した土器群である。下層は滞水状態を示す黒色系の粘土であり，その直上の中層は一定の水流があったことを示す砂層もしくは混砂層である。さらにその上の上層は，周囲からの流れ込みを主体とするシルト層である。堆積の状況が各層位で異なるため，層を超えた遺物の混在が起こる可能性は否定できず，この遺構のみの所見を普遍化するのは困難である。しかし，特に上層と中層についてはある程度まとまった廃棄の状態で出土していることから，検討の対象とする。

d)は屋敷地中心部の西側の小区画溝であり，幅・深さともに小規模であるが，遺物は完形品もしくは残存率の高いものが多く出土している。一定度の時間幅を見込む必要はあるかもしれないが，基準資料に準じて扱う。

e)は区画内の屋敷墓から出土した土器群である。墓壙底面から出土した完形品と，埋土中に多量に含まれた破片とに分けられるが，埋没に時間差があるとは考えられず，短期間のまとまった一括資料として位置付け，検討資料とする。

f)はc)の北側延長部（SDf16（Ⅲ－２区））を切り込む区画溝から出土した土器群である。

この他，既報告もしくは概報で実測図の提示が行われたもので，今回の検討資料として加えたものがある。詳細は各報告書・概報を参照されたい。

g）ＳＰil22（空港跡地・Ⅲ）　ピットへの一括埋納

h）ＳＫｃ77（空港跡地・Ⅰ）　素掘り井戸内からの出土

(2) 形式・型式の組み合わせと組列

形式・型式の組み合わせ　各遺構出土土器の型式の組み合わせをまとめたのが，第７表である。量的に安定して出土する土師質土器ⅢＢ，杯Ｄに着目すると，６つのパターンに区分することが可能である。仮にパターン１～６と呼称しておく。各パターンで明確に型式の組み合わせが異なるのは，ⅢＢⅢ・杯ＤⅡのみであるが，ⅢＢⅡ，十瓶山産椀ＡⅡの組み合わせ，また杯ＥⅢ，十瓶山産須恵器杯と捏鉢Ｄ・Ｅの存否については，複数のパターン毎に異なる。

型式組列　ＳＤf16での層位関係から，パターン３→４→５が確定できる。またⅢ－１区部分の北側延長部にあたるⅢ－２区部分がＳＤf48によって切り込まれているので，パターン５→６も認めることができる。以上から，パターン３→４→５→６という序列が認定できる。パターン１・２については明確でないが，ＳＤf32はＳＤf19に切り込まれているので，パターン２→４は確実である。パターン２・３の時間的関係を示す遺構・層位は得られていないが，見通しとしてパターン１→２→３という順序を想定しておきたい。

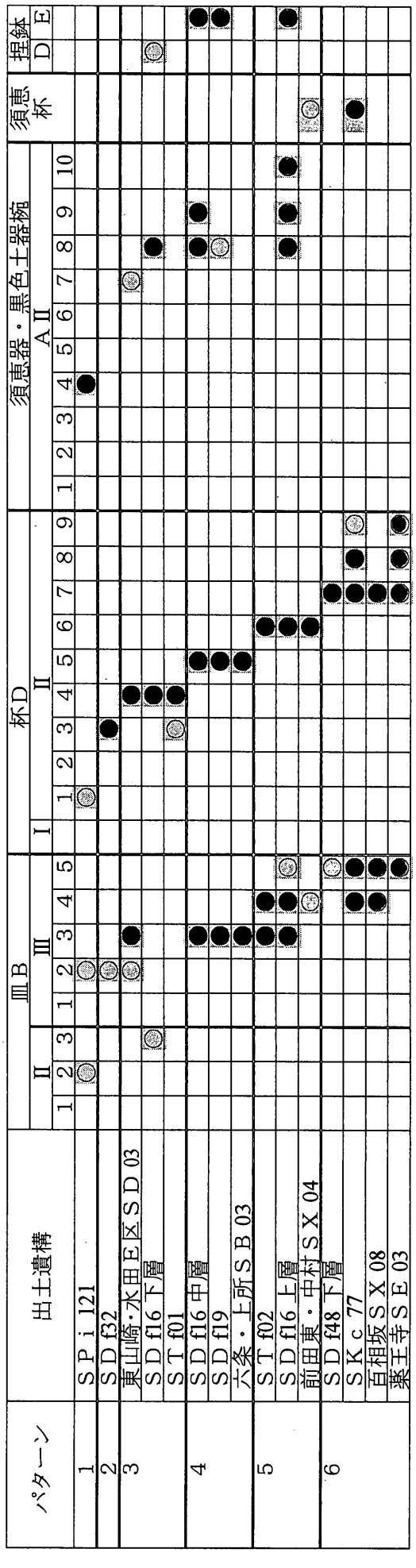
以上の前提に立ち主要器種の型式組列を整理すると，以下のようになる。

土師質土器ⅢＢⅡ－２→３

ⅢＢⅢ－２→３→５

杯ＤⅡ－１→３→４→５→６→７→８

十瓶山産黒色土器・須恵器椀ＡⅡ－４→７・８→９



第７表　高松平野各遺跡における形式・型式の組み合わせ

(3) 周辺遺跡との比較

空港跡地遺跡で想定した形式・型式の組み合わせが，周辺遺跡でも確認できるか検討する。

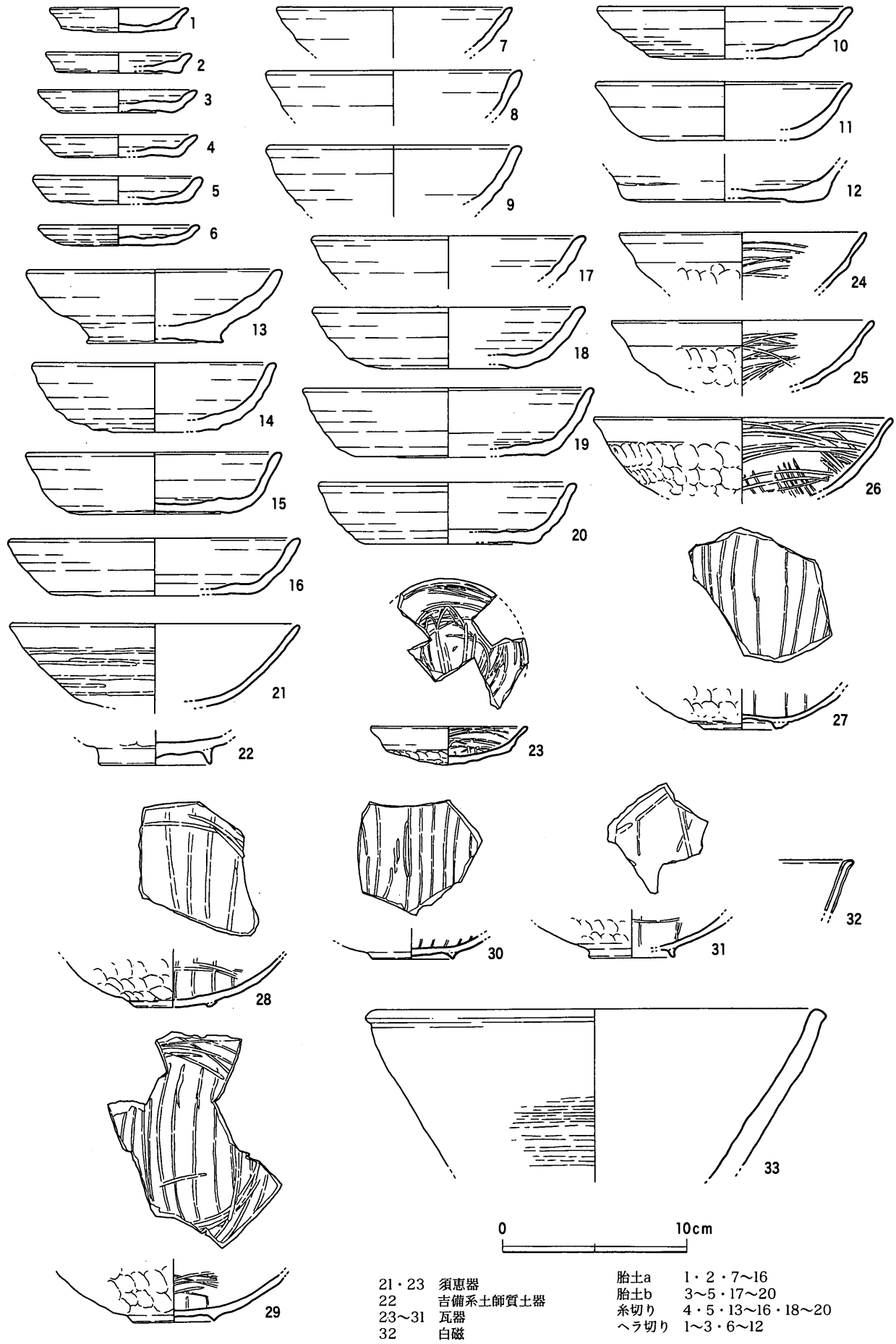
同一小地域の遺跡　空港跡地遺跡と同じ山田郡に属し，郷名は異なるが同じ古川（春日川支流）水系の微高地上に位置する六条・上所遺跡ＳＢ03柱穴出土土器を取り上げる。土師質土器皿ＢⅠ－３・ＢⅢ－３，杯ＤⅡ－５が出土しており，法量的にはまとまった土器群である。皿Ｂ形式には，系統の異なる２群の小皿が存在するが，形態的な差異を超えて口径が同じ点であることが注目される。杯ＤⅡ－５は，胎土・技法・焼成を同じくする一群で構成されており，空港跡地遺跡の杯ＤⅡ－５と同じ系統と思われる。これらは，パターン４と同じ内容をもつといえる。

近接する小地域の遺跡　山田郡に属するが，春日川を隔てた別の小地域に位置する遺跡の資料を取り上げる。まずは春日川に接した低地部に所在する，東山崎・水田遺跡Ｅ区第１面ＳＤ03出土の土師質土器をみてみる。皿・杯の胎土は，砂粒を多く含むもの（胎土ａ）と，砂粒をさほど含まない精良なもの（胎土ｂ）に分かれる。胎土ｂは明黄褐色系と暗褐色系に分かれ，明黄褐色系のものは空港跡地遺跡でみられるものに近い。一方，底部切り離し技法はヘラ切りと糸切りがあるが，胎土ａの色調の違いとは一致せず，明黄褐色系も暗褐色系も両技法が混在する。また形態も色調の違いと対応しない。このため，胎土ｂ以外は一括して取り扱う。皿・杯の型式には，皿ＢⅢ－２・３，杯ＤⅡ－４，ＥⅠ－１・２がある。糸切り底の杯ＥⅠ形式の法量にややばらつきがみられるが，皿ＢⅣ形式・杯ＤⅡ形式の口径にはまとまりが読み取れる。これらから，空港跡地遺跡のパターン３と共通した型式組成といえる。伴出した十瓶山窯産須恵器椀（ＡⅡ－８）や和泉型瓦器椀（Ⅲ－２～３期）とも矛盾しない。

次いで丘陵部に立地する前田東・中村遺跡ＳＸ04出土土器を取り上げる。土師質土器皿ＢⅢ－４，杯ＤⅡ－６形式・ＤⅢ－２形式の他，十瓶山窯産須恵器杯，青磁碗Ⅰ－５ｂ類，土師質土器足釜がある。土師質土器皿Ｂ形式と杯ＤⅡ形式は，空港跡地遺跡出土資料に似た胎土・焼成であり，比較が可能である。杯ＤⅢ形式が多いことが空港跡地遺跡とは異なるが，パターン５に共通しているといえよう。

やや離れた高松平野の遺跡　香東郡の百相坂遺跡ＳＸ08と香西郡の薬王寺遺跡ＳＥ03を取り上げる。空港跡地遺跡からの直線距離は，前者が４㎞，後者が６㎞である。百相坂遺跡ＳＸ08出土土器には，土師質土器皿ＢⅢ－４・５，杯ＤⅡ－７の他，青磁碗Ⅰ－４ａ類，十瓶山窯産捏鉢Ｅ，土師質土器足釜ＢⅡ・Ⅲ，鍋ＡⅡがある。小皿・杯がパターン６と共通しており，伴出した捏鉢・足釜・鍋の型式も矛盾しない。薬王寺遺跡ＳＥ03出土土器には，土師質土器皿ＢⅢ－５，杯ＤⅡ－７・８・８′・９の他，土師質土器足釜ＢⅡ・Ⅲ，土師質土器甕ＡⅡ，東播系捏鉢などがある。これもパターン６と共通しているといえよう。

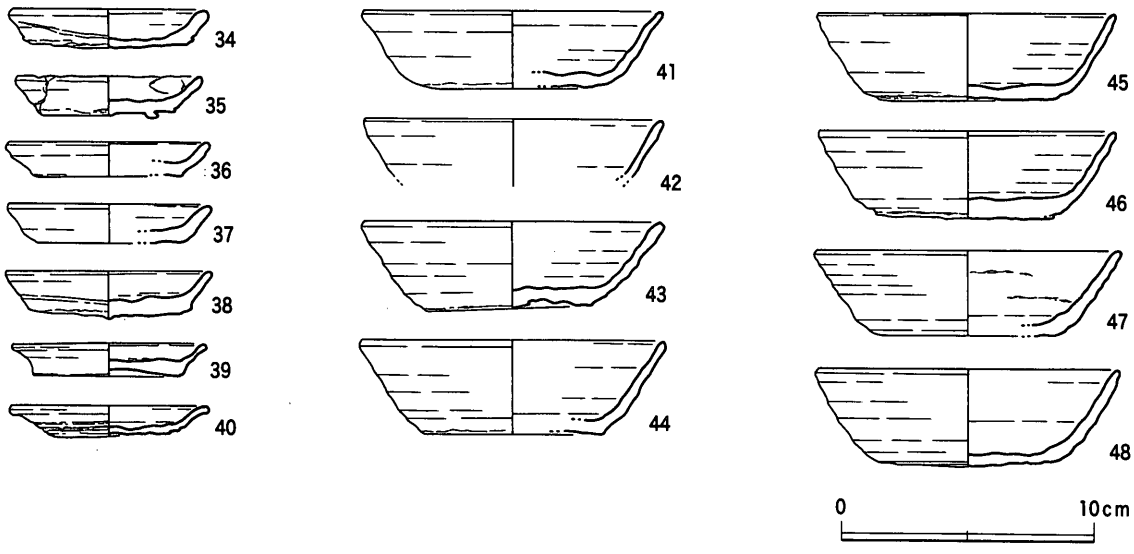
共通点と相違点　土師質土器皿ＢⅢ形式と杯ＤⅡ形式の細別型式内容と組み合わせについては，空港跡地遺跡周辺でも同様な型式の組み合わせ（パターン３～６）をもつことが確認できた。伴出する土師質土器足釜Ｂ形式や十瓶山窯産須恵器椀ＡⅡ形式との組み合わせも大枠では矛盾していない。肉眼観察による限り皿ＢⅣ形式・杯ＤⅡ形式の胎土や焼成状況は，空港跡地遺跡，六条・上所遺跡，前田東・中村遺跡と東山崎・水田遺跡の一部では共通するものの，百相坂遺跡，薬王寺遺跡ならびに東山崎・水田遺跡の一部では異なっている。しかし，このような相違点を超えて形態・法量が共通していることが重要である。このことから，上記土師質土器小皿・杯を指標としたパターン３～６は，少なくとも高松平野南部では共通した範疇で捉えることが可能である。中世土器をめぐる「小地域生産」・「自給自足的



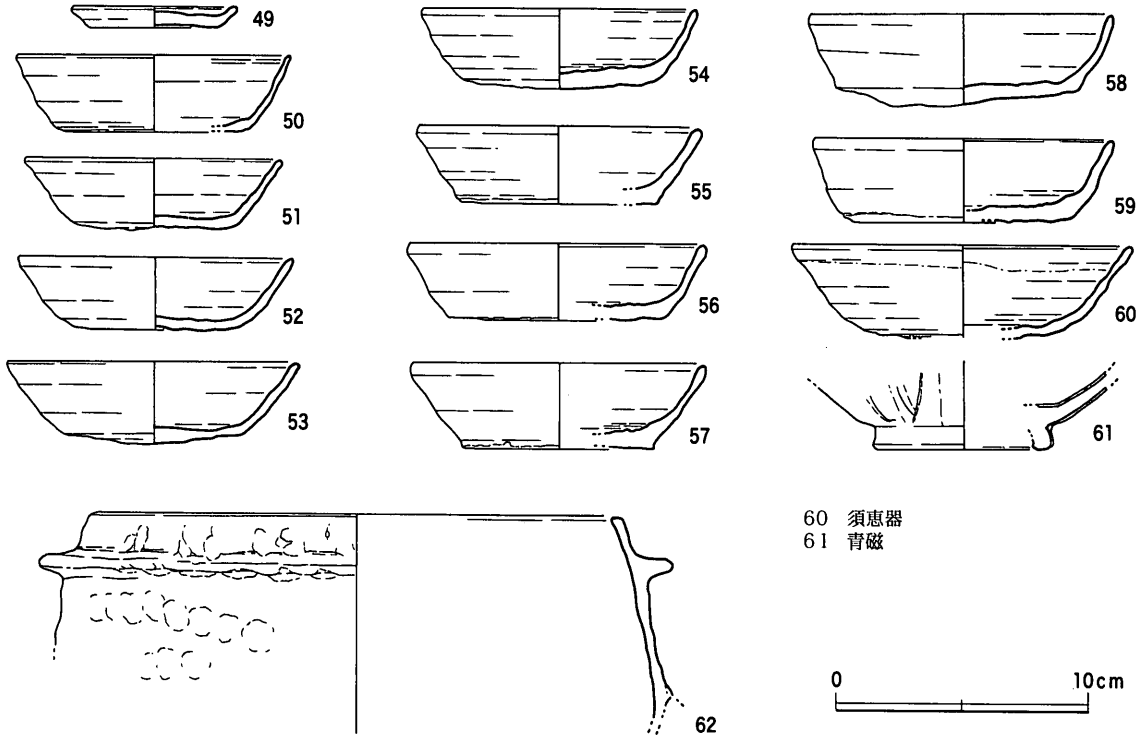
21・23　須恵器
22　吉備系土師質土器
23～31　瓦器
32　白磁

胎土a　1・2・7～16
胎土b　3～5・17～20
糸切り　4・5・13～16・18～20
ヘラ切り　1～3・6～12

第413図　東山崎・水田遺跡E区　SD03出土遺物（1/3）



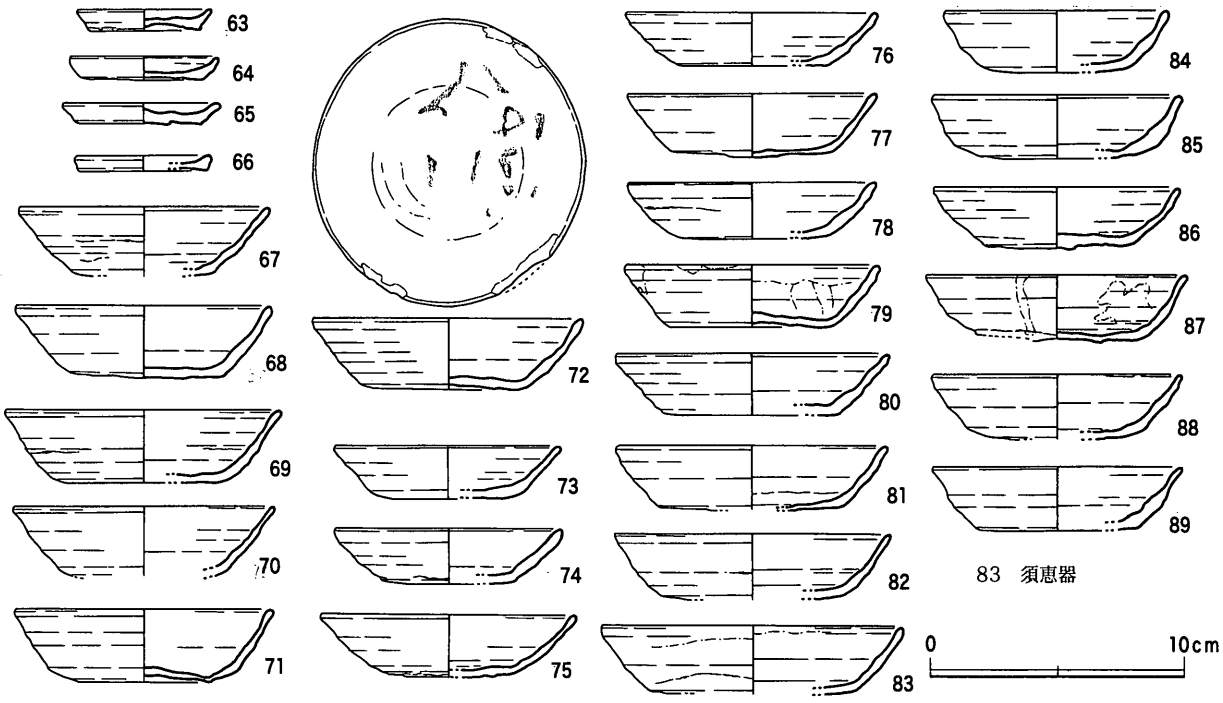
第414図　六条・上所遺跡SB03出土遺物（1/3）



第415図　前田東・中村遺跡SX04出土遺物（1/3）

生産」というイメージは，少なくとも系統（生産地）・型式を適切に把握する限り，編年作業を制約する要因とはならないと考える。

反面，型式の存否については，遺跡もしくは小地域での違いを認めることができる。何より空港跡地遺跡での土師質土器杯Ｅ形式（糸切り底）の大量出土は，先行する様相の東山崎・水田遺跡以外では確認することが困難であり，当遺跡での際立った特徴といえる。また前田東・中村遺跡の杯ＤⅢ－２は，



第416図　薬王寺遺跡SE03出土遺物（1/3）

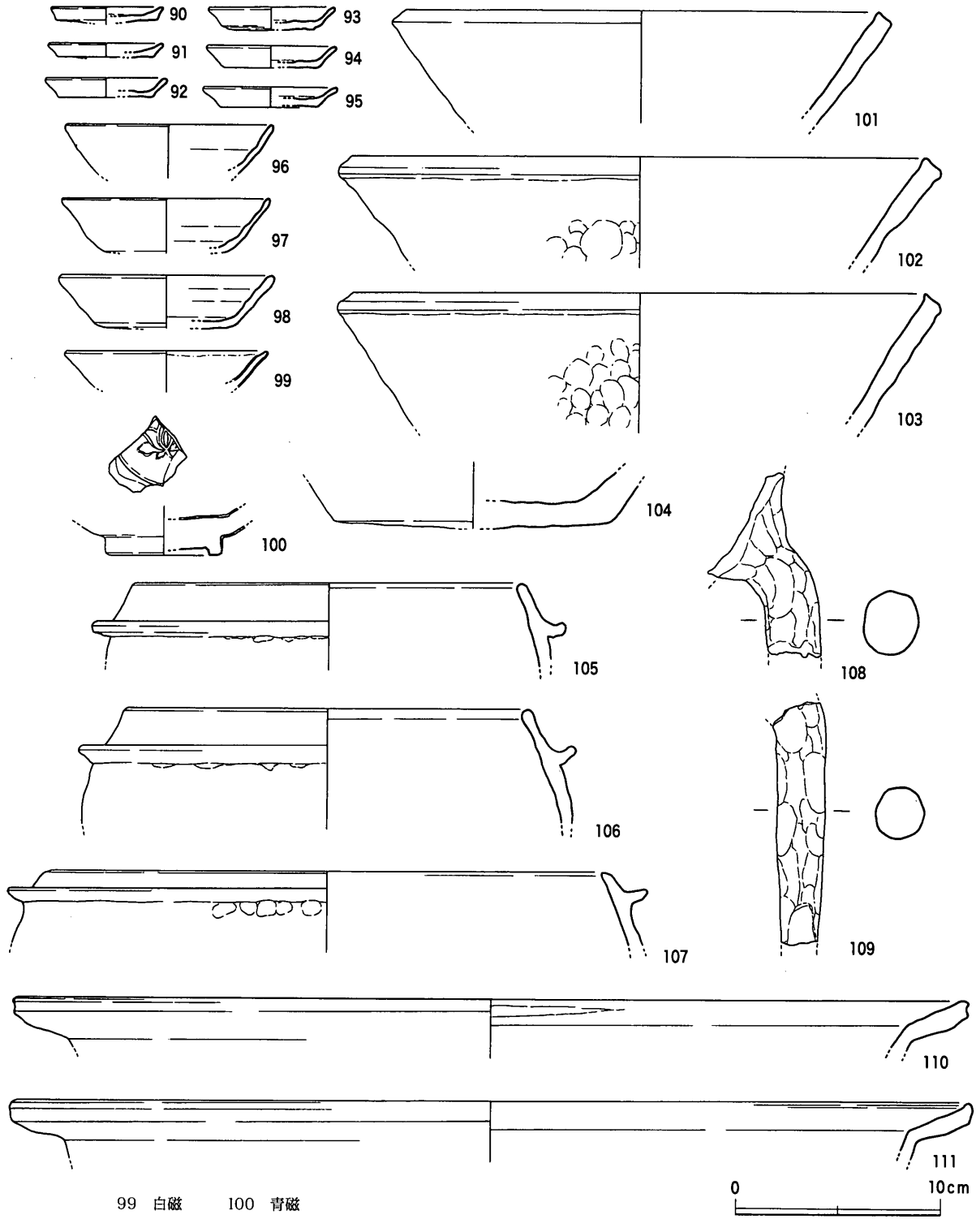
東讃地方（寒川・大内平野）の土師質土器杯に系譜をたどることができ，高松平野ではやや異質な存在である。しかしこうした違いを過大評価することは現段階では有益な議論とは考えられず，共通の時間軸の中での遺跡・地域単位の偏差（すなわち生産・流通の問題）として捉えることが望ましい。

4．生産遺跡での様相の検討～西村遺跡～

(1) 既往の研究

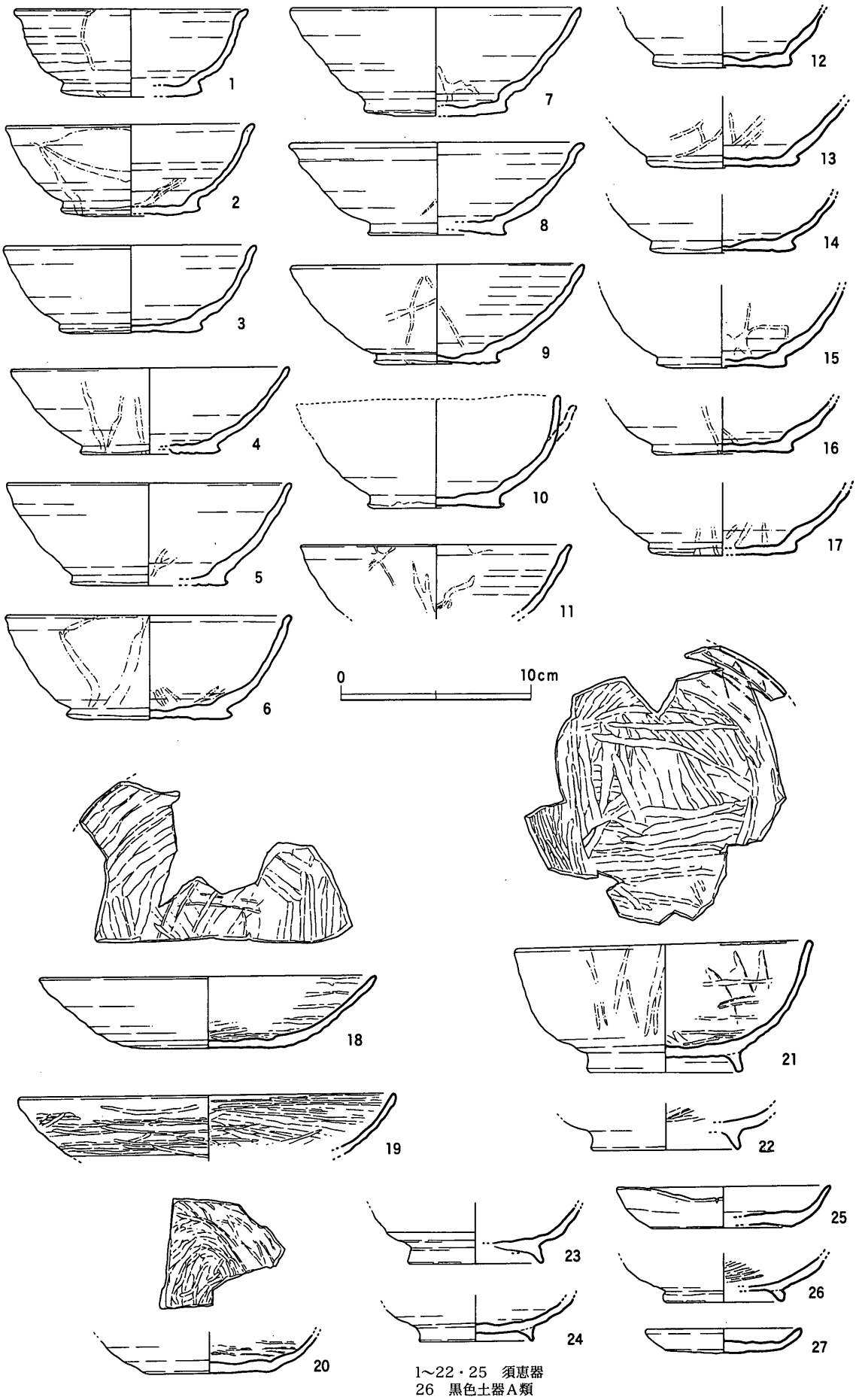
片桐氏は，西村遺跡における土師質土器杯の法量について，同時期の他地域のものよりも大振りのものが多いと指摘している（片桐1992)。その理由として，片桐氏は「西村遺跡周辺部において土師器椀・黒色土器椀・須恵器椀（瓦質土器椀）などの椀形態を作る際にこの土師器坏D（片桐氏の分類。本稿での土師質土器杯DⅡ形式にあたる）の形態が必要になるからである」と説明している。片桐氏の議論は，土師質土器杯の法量が地域や生産地によって異なることにとどまらず，十瓶山窯産黒色土器椀・須恵器椀（以下，西村型土器椀とする）の「底部押し出し技法」にも関わる内容を含んでいるといえる。しかし筆者は，高松・丸亀平野で形態・技法を共有している土師質土器ⅢBⅢ形式・杯DⅡ形式の法量差については懐疑的である。片桐氏の指摘する現象は，西村遺跡と周辺遺跡との併行関係の認定方法に問題があるために生じた見かけ上の差異であり，実態としては法量的な違いはないと考えている。このことを以下，検討していく。

なお，前提となる西村遺跡の土器編年については，既に廣瀬常雄氏による試案が提示されている（廣瀬1982)。この編年案は，土坑出土のまとまった土器を基準資料として設定されており，大枠での変更の要はないと考える。ただ，属性分析に問題があり型式設定が不十分なこと，また型式組列の判定方



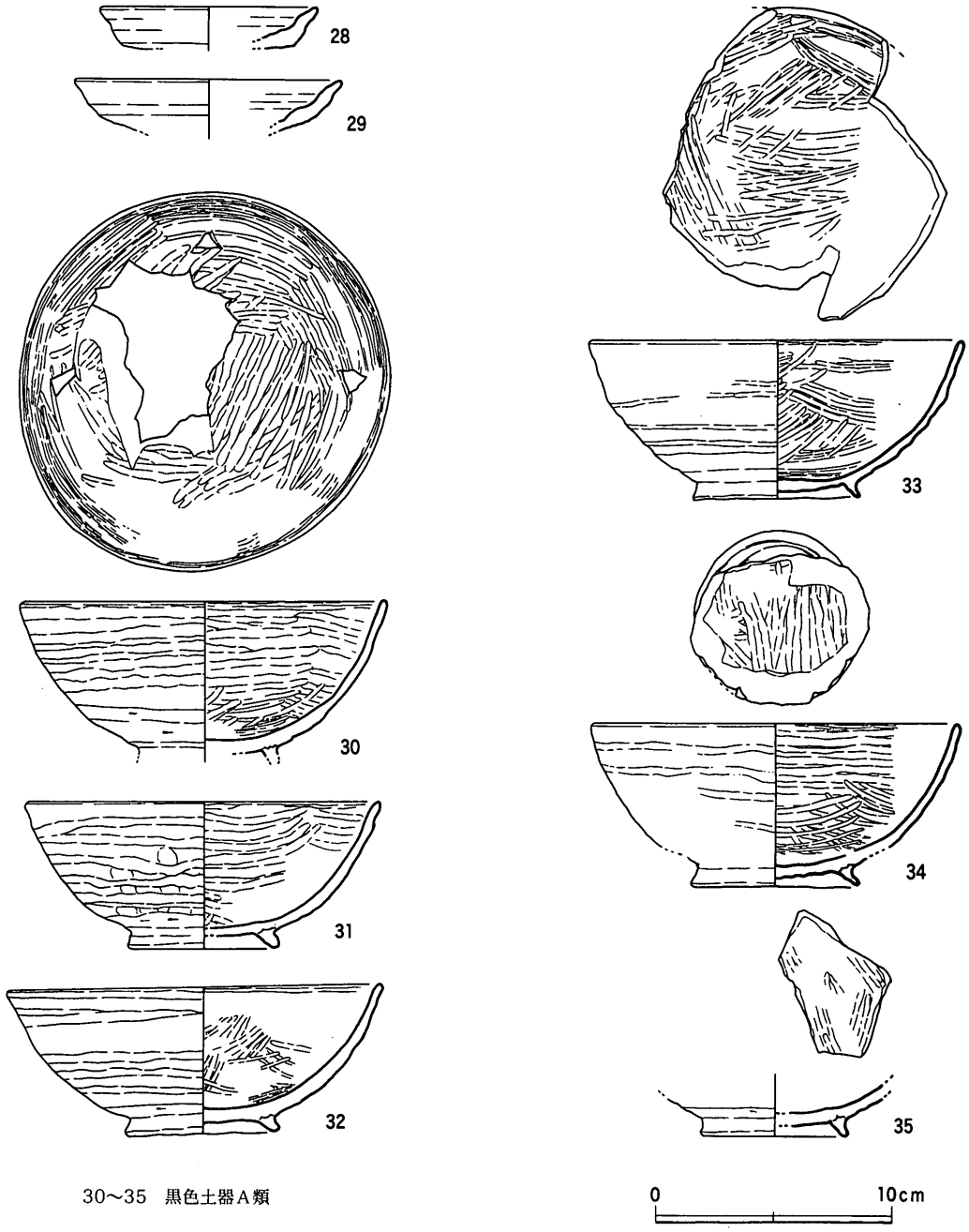
第417図　百相坂遺跡　SX08出土遺物（1/3）

法が遺構の切り合いや層位によるのではなく，椀の属性の変化（高台の高低や磨き調整の精粗など）に依拠した，いわば経験的な直観によることが問題点として挙げられる。後者の問題点は，結果としては変化の方向を逆転するものではないと考えているが，同一時期での形態・技法の幅について，硬直的な理解を示すことにつながる危惧がある。以上の問題点と，基準資料の公表が一部にとどまっていたことから，今回いくつかの遺構出土土器について再検討を行い，その成果を提示する。本来は全ての器種に



1～22・25　須恵器
26　黒色土器A類

第418図　西村遺跡西村2号窯跡灰原出土遺物（1/3）



第419図　西村遺跡西村北地区N3－SK01出土遺物（1）（1/3）

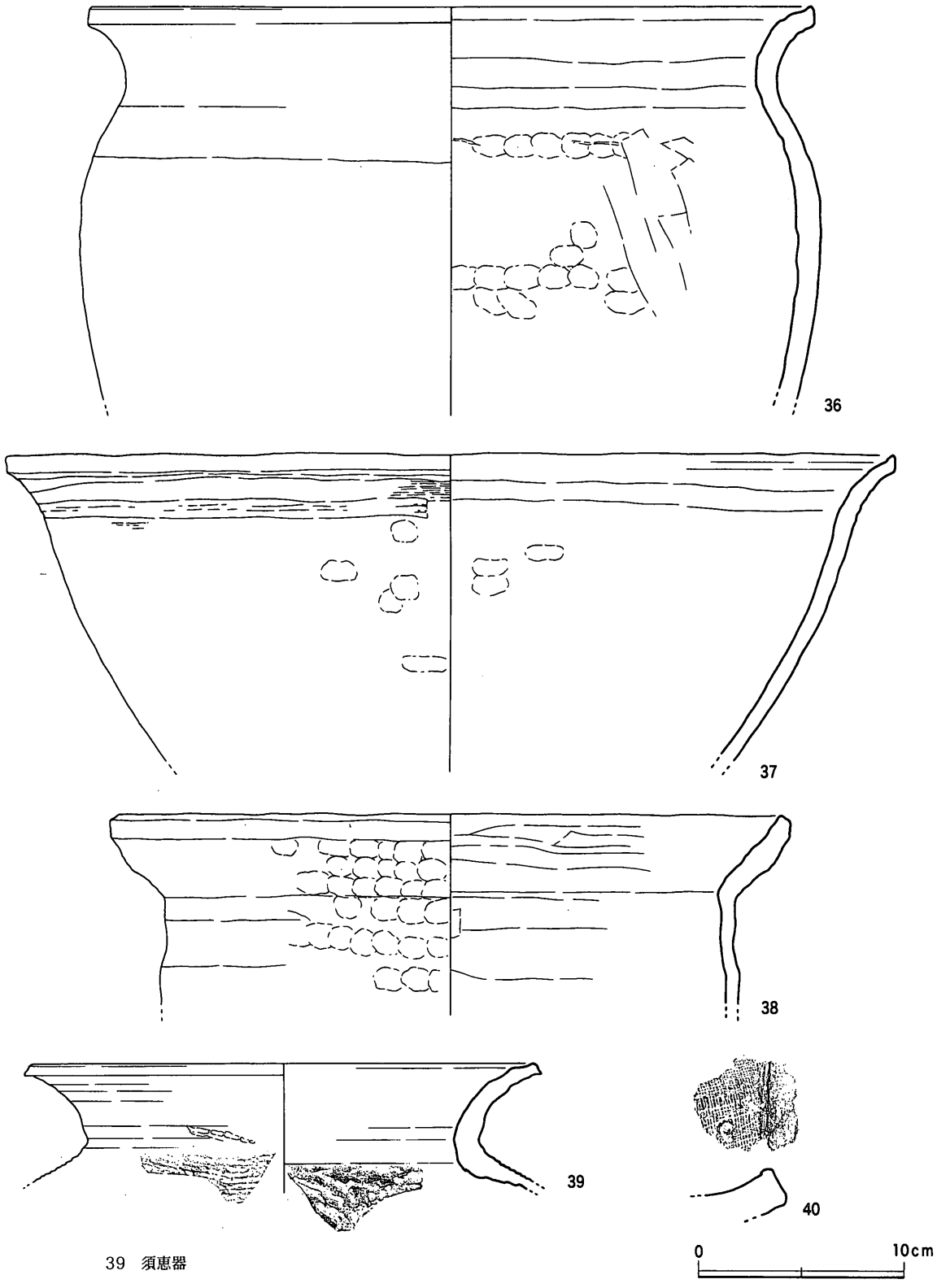
ついてこの作業を行うべきだが，ここでは土師質土器小皿・杯，西村型土器椀などの供膳器種を検討対象とし，須恵器捏鉢・広口壺・甕については補助的な取り扱いにとどめた。

(2) 対象土器群と出土状況

ここで対象とする資料は，以下の12遺構出土土器である。

a）西村２号窯跡灰原出土土器

b）西村北Ｎ３－ＳＫ01出土土器



39　須恵器

第420図　西村遺跡西村北地区N3－SK01出土遺物（2）（1/3）

c）庄屋池３号窯跡採集土器

d）川北N31・32－SD01出土土器

e）西村１号窯跡焚口・灰原出土土器

f）西村北N２－SK02出土土器

g）川北N35－SK25出土土器

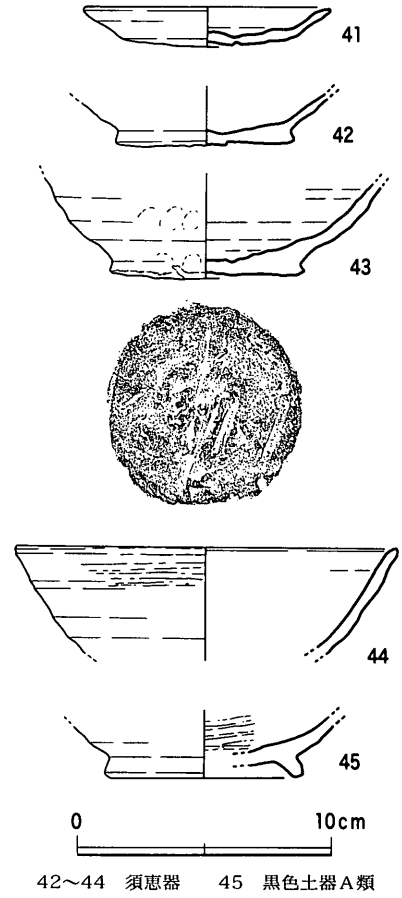
h）山原S20－SD01出土土器

i）山原S16－SK16

j）川北S33－SK01

k）西村北S５－SK01

a)・e)は灰原が層位的に重複しており，a)→e)という順序が明確である。ただし窯体の遺存状況が悪く，操業期間の長短については明らかではない。e)の焚口部から灰原の土層堆積状況をみると，窯体内埋土の上位層が灰原に連続しており，そこから多量に遺物が出土しているが，この上位層が操業時の嵩上げ（補修床面）なのか，廃窯後の埋積土なのかは調査時の記録からも明確にできない。一応，以上のような状況を踏まえつつ，上位層出土遺物も一括して取り扱う。



42～44　須恵器　　45　黒色土器A類

第421図　庄屋池3号窯跡灰原採集遺物（1/3）

b)は長さ0.58m，残存幅0.4mのほぼ正方形を呈していたと考えられる焼土坑からの出土資料である。土坑は壁面が被熱しており，出土状況は明確でないが内部から黒色土器椀AII，土師質土器BII・甕・鍋が出土している。黒色土器椀は残存率の高い個体が多く，薄い器面の剥離がみられる部分は炭素の吸着が不十分になり，焼けムラが認められる。このことから，黒色土器椀の焼成施設内に廃棄された土器群とみることができ，かなり一括性の高い資料と位置付けられる。

c)は焼成部中央付近から煙道部付近が比較的良好に遺存している窯であり，池水の浸食によって崩壊した焼成部前半付近に窯壁とともに須恵器・黒色土器が散乱していた。発掘調査によらない採集資料であるが，こうした状況から窯体内遺存の最終操業時の土器を主体としていると判断できる。

d)は建物群の小区画溝（雨落ち溝？）から出土した土器で，「一括出土」と報告されているが，限られた範囲・層位から集中して出土したという状況ではない。ただ出土遺物は比較的残存状況が良好であり，ある程度まとまった資料ということはできよう。

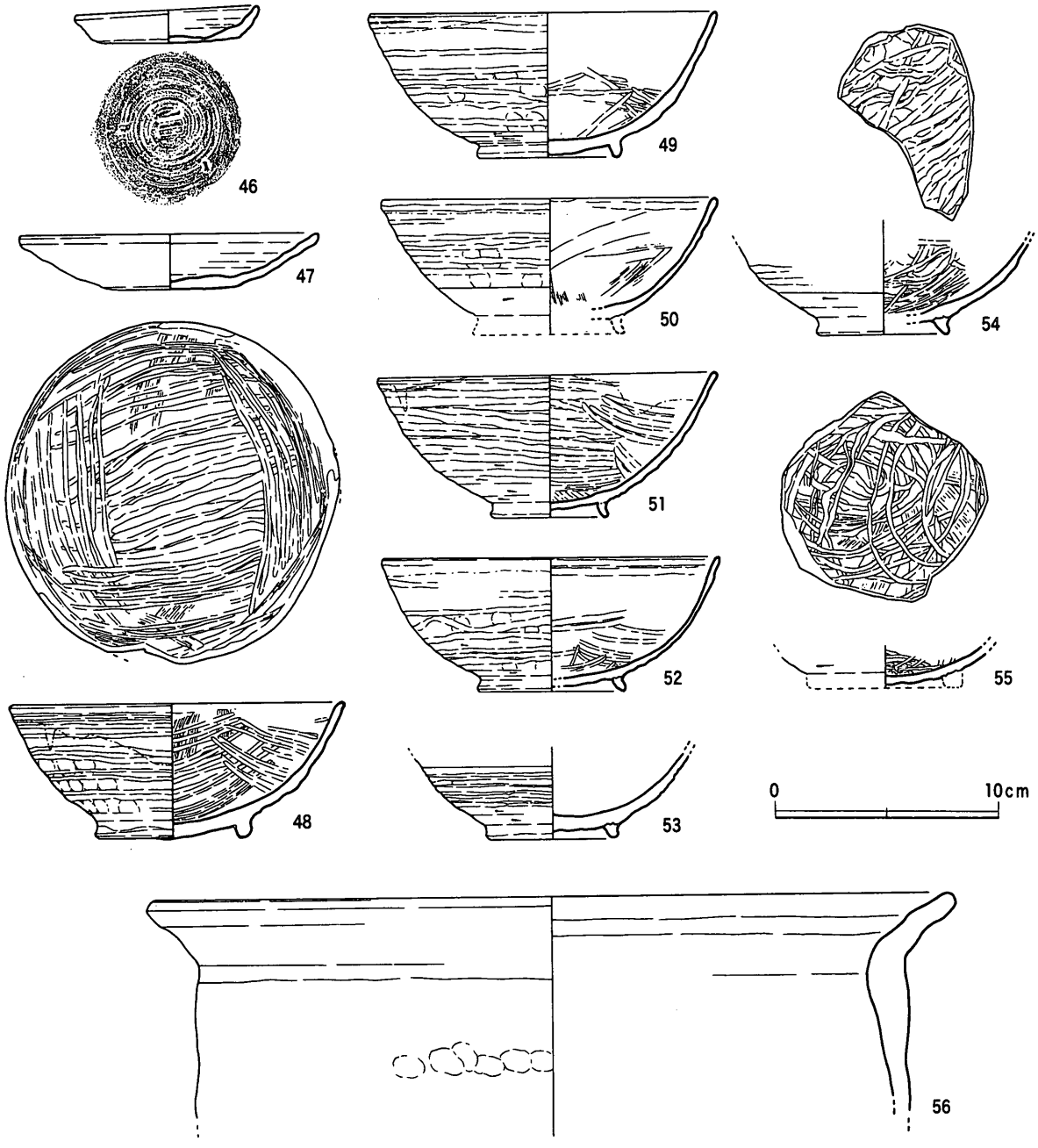
f)は直径1.5m，深さ0.5mの土坑下層を主体とした出土資料である。出土遺物の中には須恵器甕片も多く，その一部は二次的に被熱している。直近にある西村１号窯跡との関わりを想定できれば，生産に伴う廃棄土坑という性格が与えられ，ある程度のまとまった資料という位置付けができる。

g)は粘土採掘坑とみられる土坑群中の１基に一括廃棄された資料である。

h)は建物の雨落ち溝からの出土資料である。

i)はg)とは異なる地点で検出された，土坑群中の１基に廃棄されていた資料である。

j)は2.05m×1.55m，深さ0.205mの不定形な土坑内から多量に出土した。土器とともに窯の構



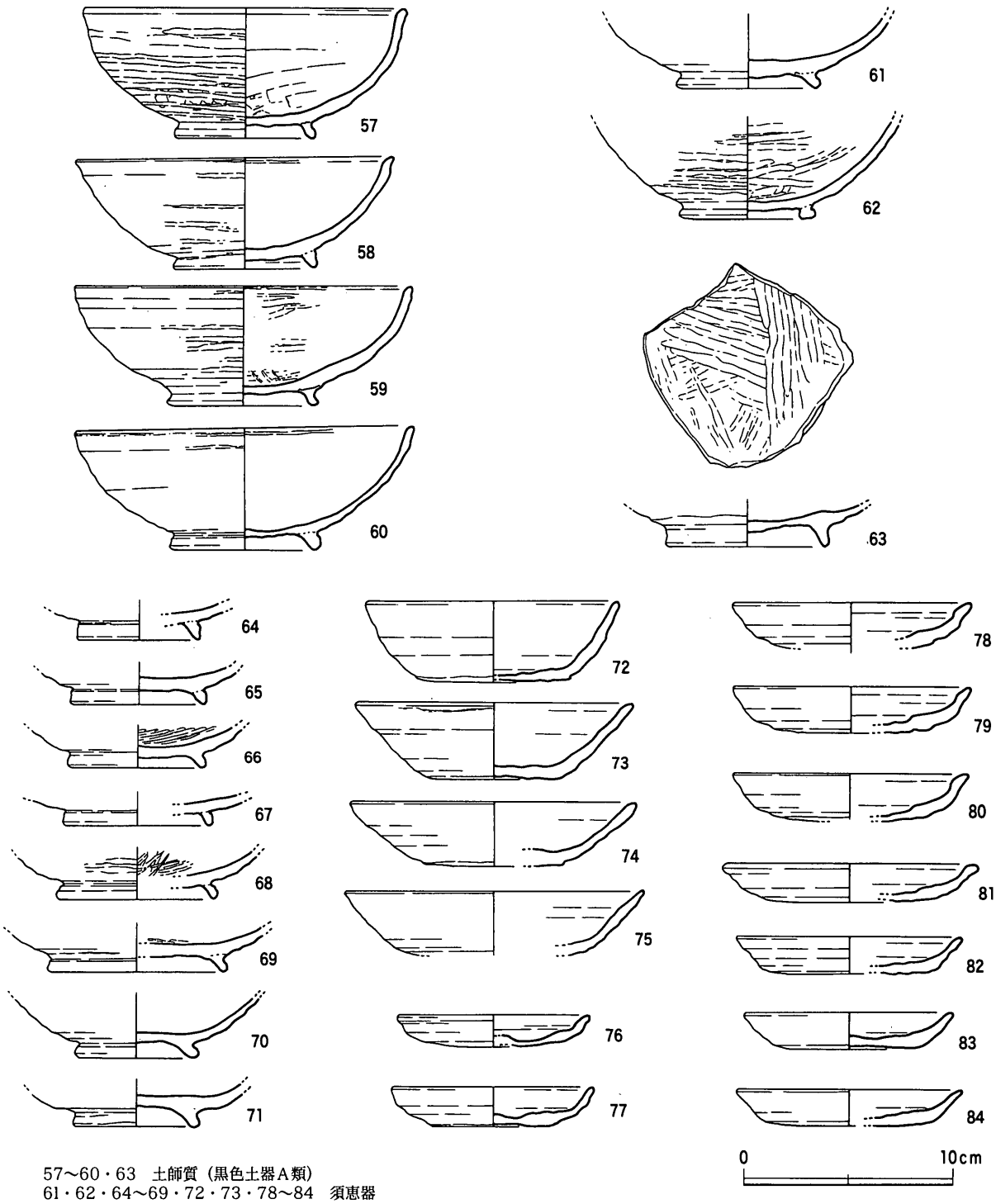
48～55　黒色土器A類

第422図　西村遺跡川北地区N31・32－SD01出土遺物（1/3）

築材とみられる焼土塊（表面に自然釉付着）が出土していること，また須恵器の焼成不良品がみられることから，生産に伴う廃棄土坑とみられる。

k)は径2.7m，深さ0.6mの平面円形を呈する土坑であり，多量の土器が礫とともに出土した。埋土は4層に分層できるが，遺物の出土状況は層位毎の差異はなかったようであるが，第1層からは土師質土器杯DII－8が5個体重なって出土している。廃棄の最終段階で意図的な土器の埋納（地鎮？）が行われたとみられ，一括遺物としてよかろう。

以上のほか，遺物量は僅少だが補助的な資料として西村北N6－SB03出土土器（1）も使用する。

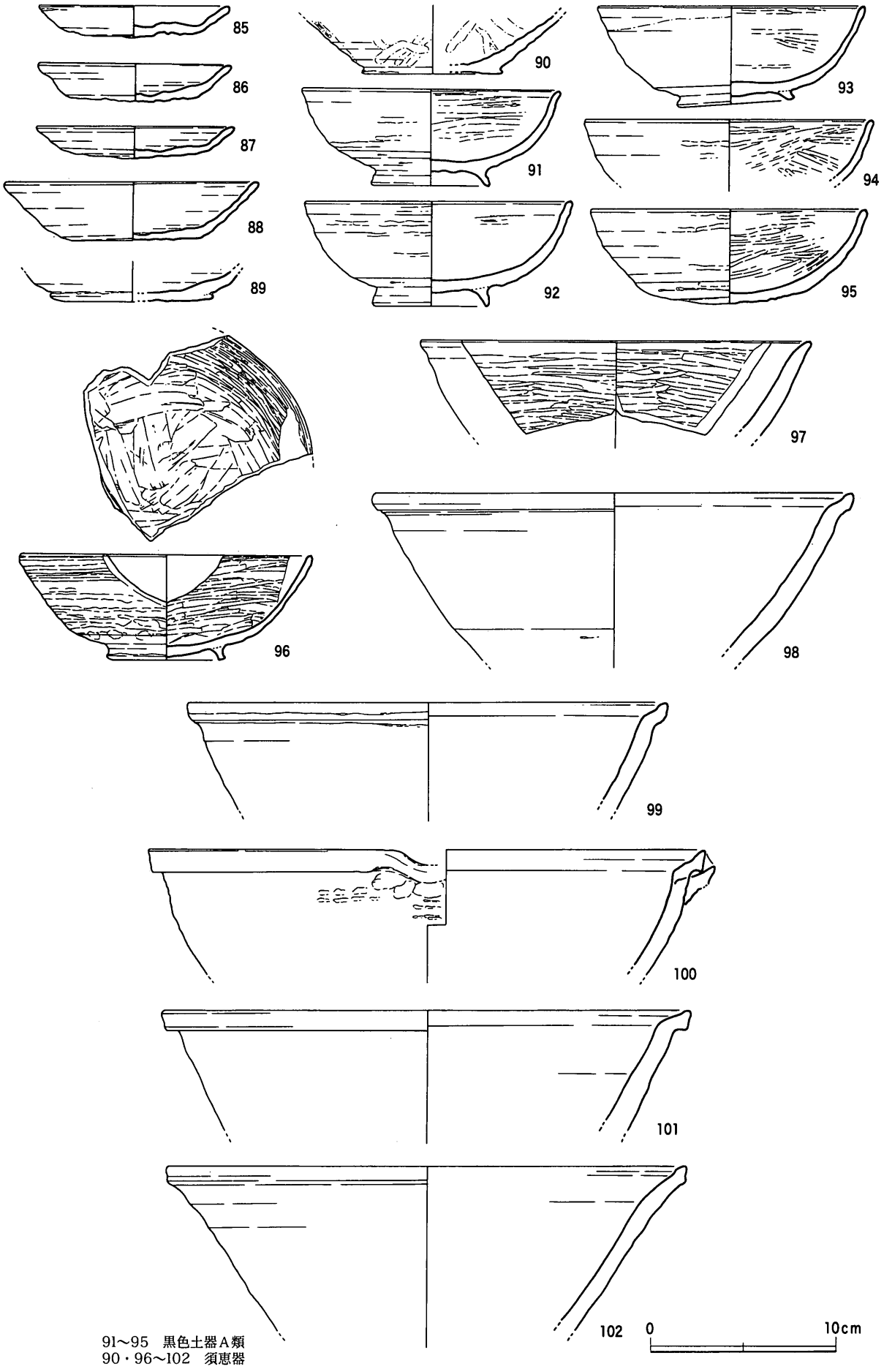


57～60・63　土師質（黒色土器A類）
61・62・64～69・72・73・78～84　須恵器

第423図　西村遺跡西村1号窯跡焚口・灰原出土遺物（1/3）

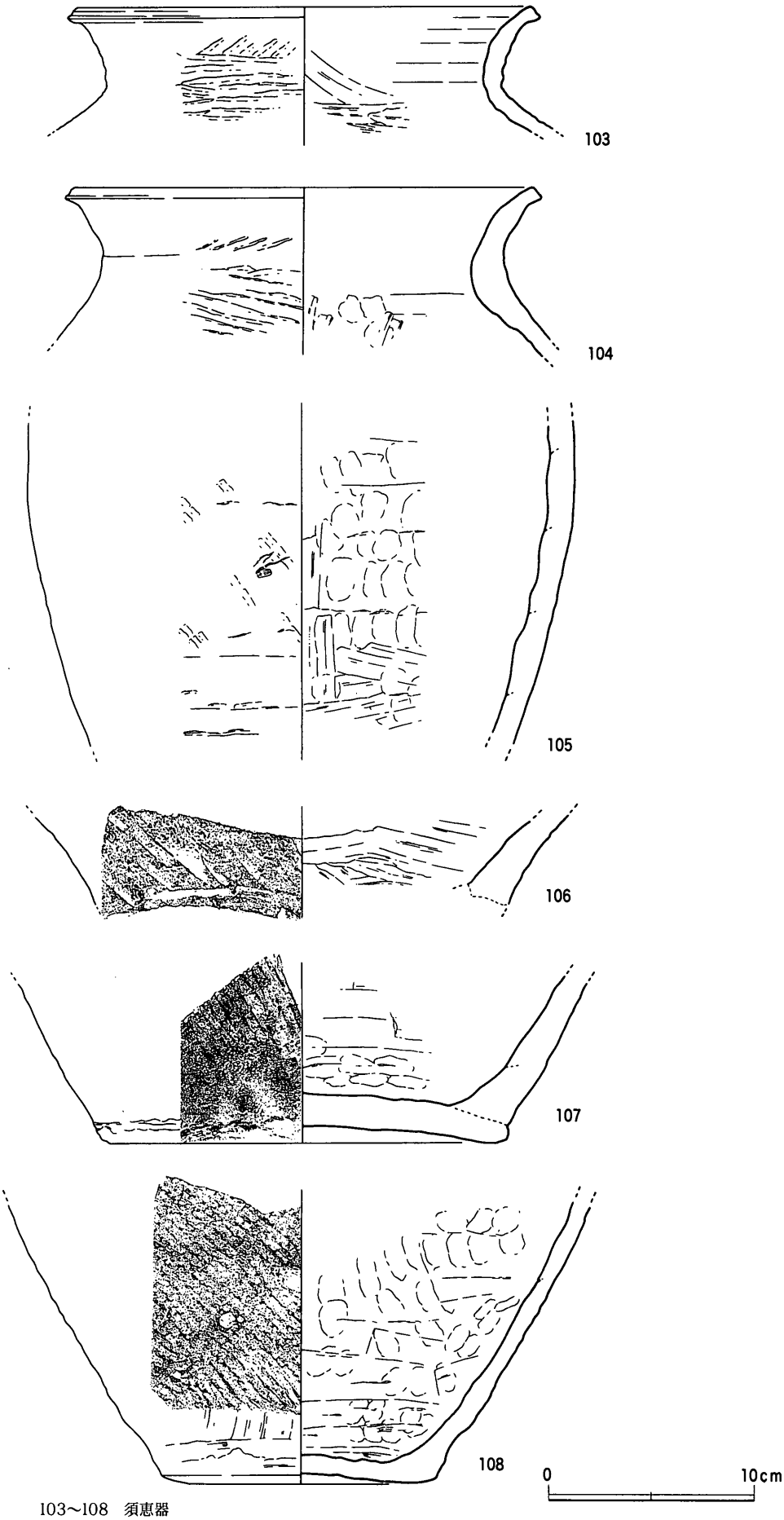
(3) 形式・型式の組み合わせと組列

形式・型式の組み合わせ　第8表に各遺構出土の形式・型式のセット関係をまとめた。高松平野南部よりも器種組成がやや単純な傾向にあるが，共通する器種である土師質土器皿BⅡ・Ⅳ・杯DⅡ，十瓶山窯産黒色土器・須恵器椀AⅡなどから，7つのパターン区分が可能である（パターン1～7）。各パ



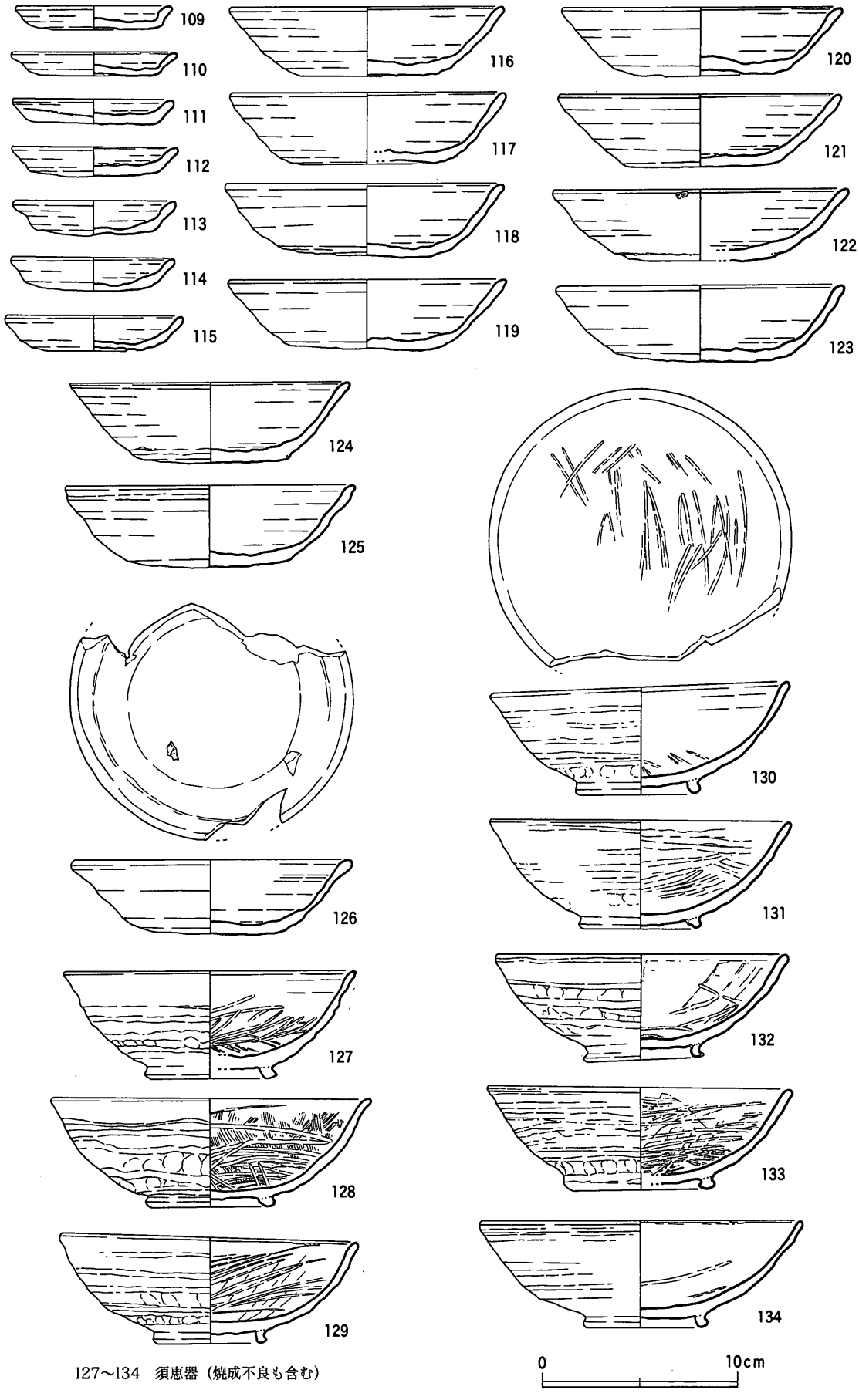
91～95　黒色土器A類
90・96～102　須恵器

第424図　西村遺跡西村北地区N2－SK02出土遺物（1）（1/3）



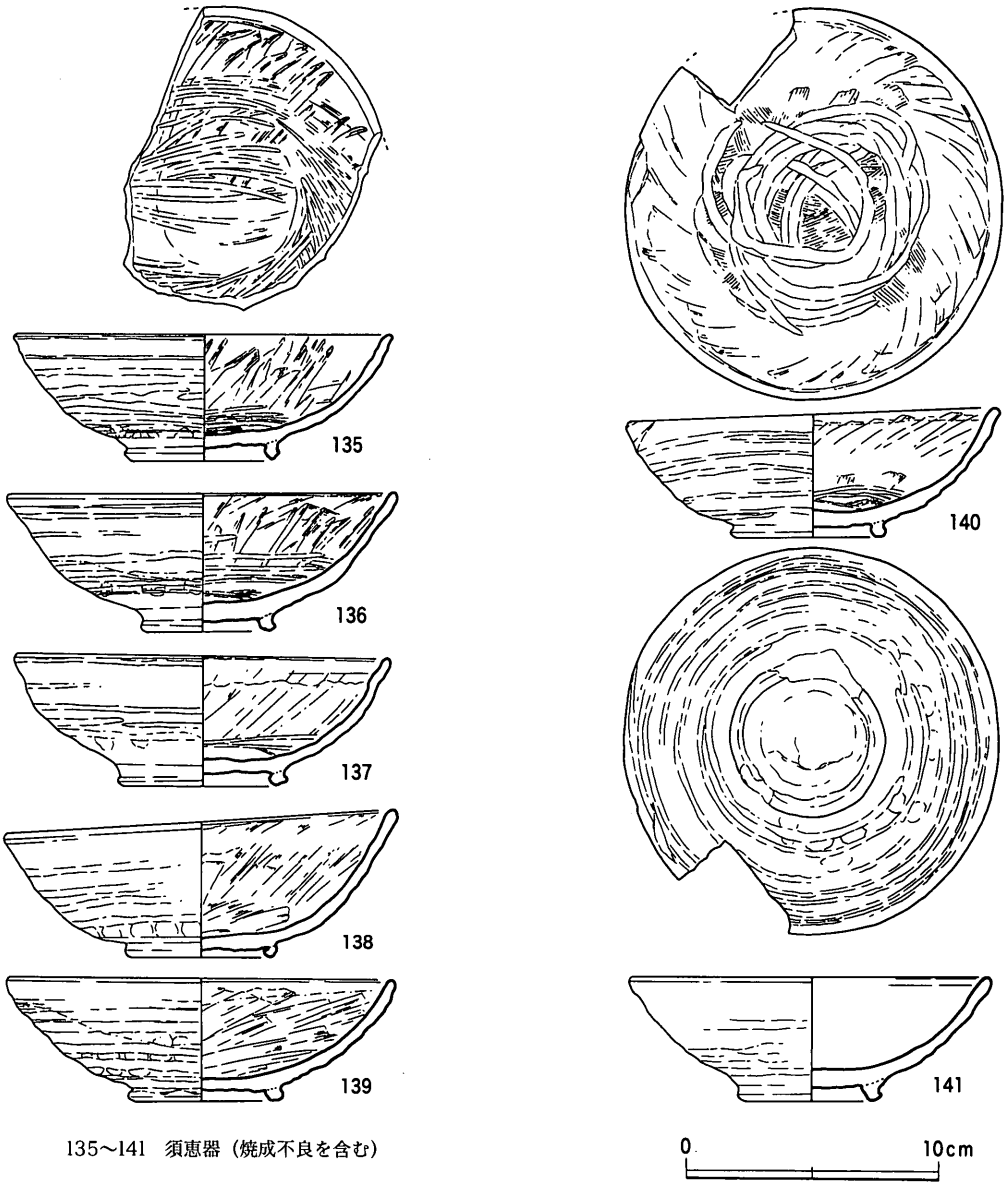
103～108　須恵器

第425図　西村遺跡西村北地区N2－SK02出土遺物（2）（1/3）



127～134　須恵器（焼成不良も含む）

第426図　西村遺跡川北地区N35－SK25出土遺物（1）（1/3）

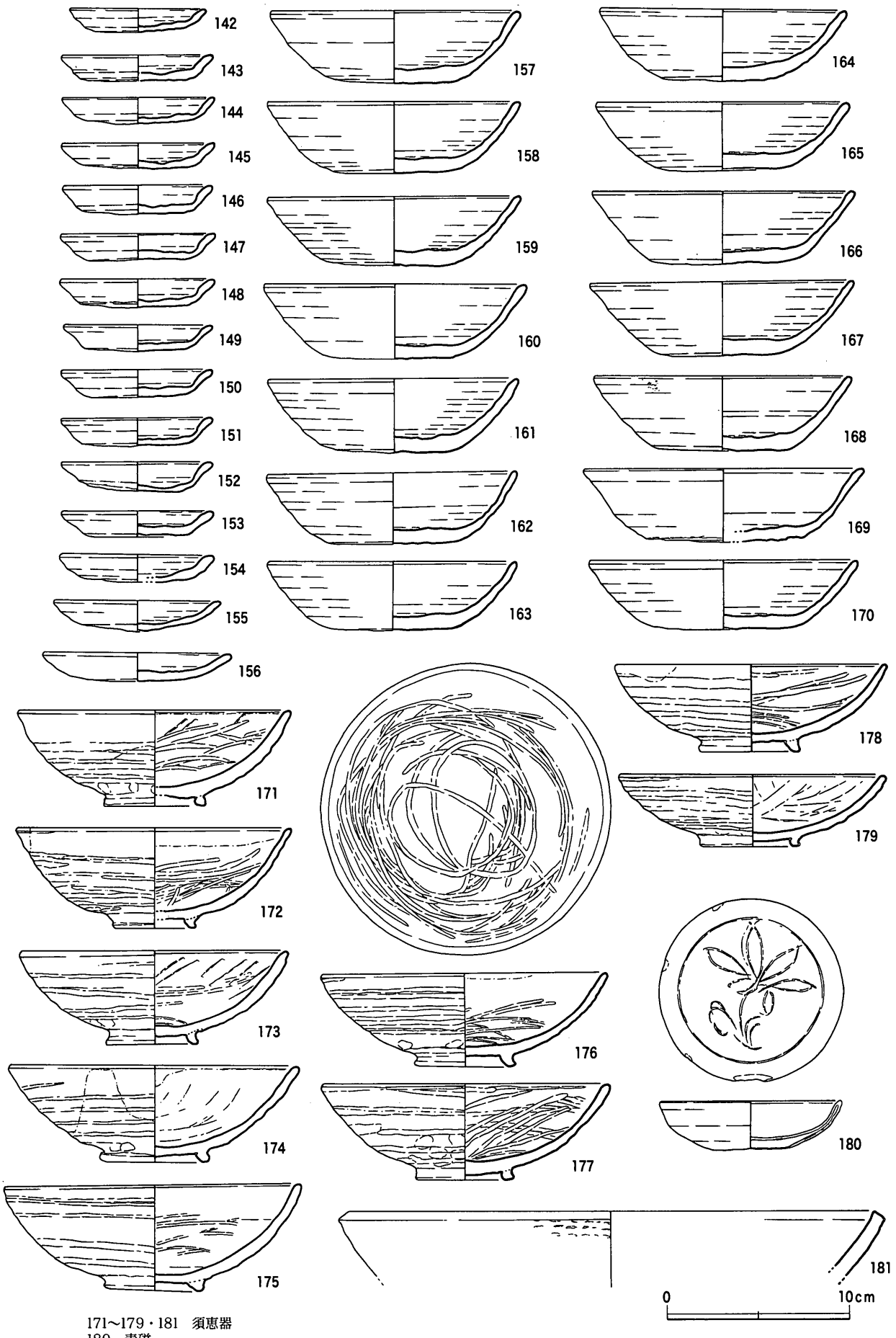


135～141　須恵器（焼成不良を含む）

第427図　西村遺跡川北地区N35－SK25出土遺物（2）（1/3）

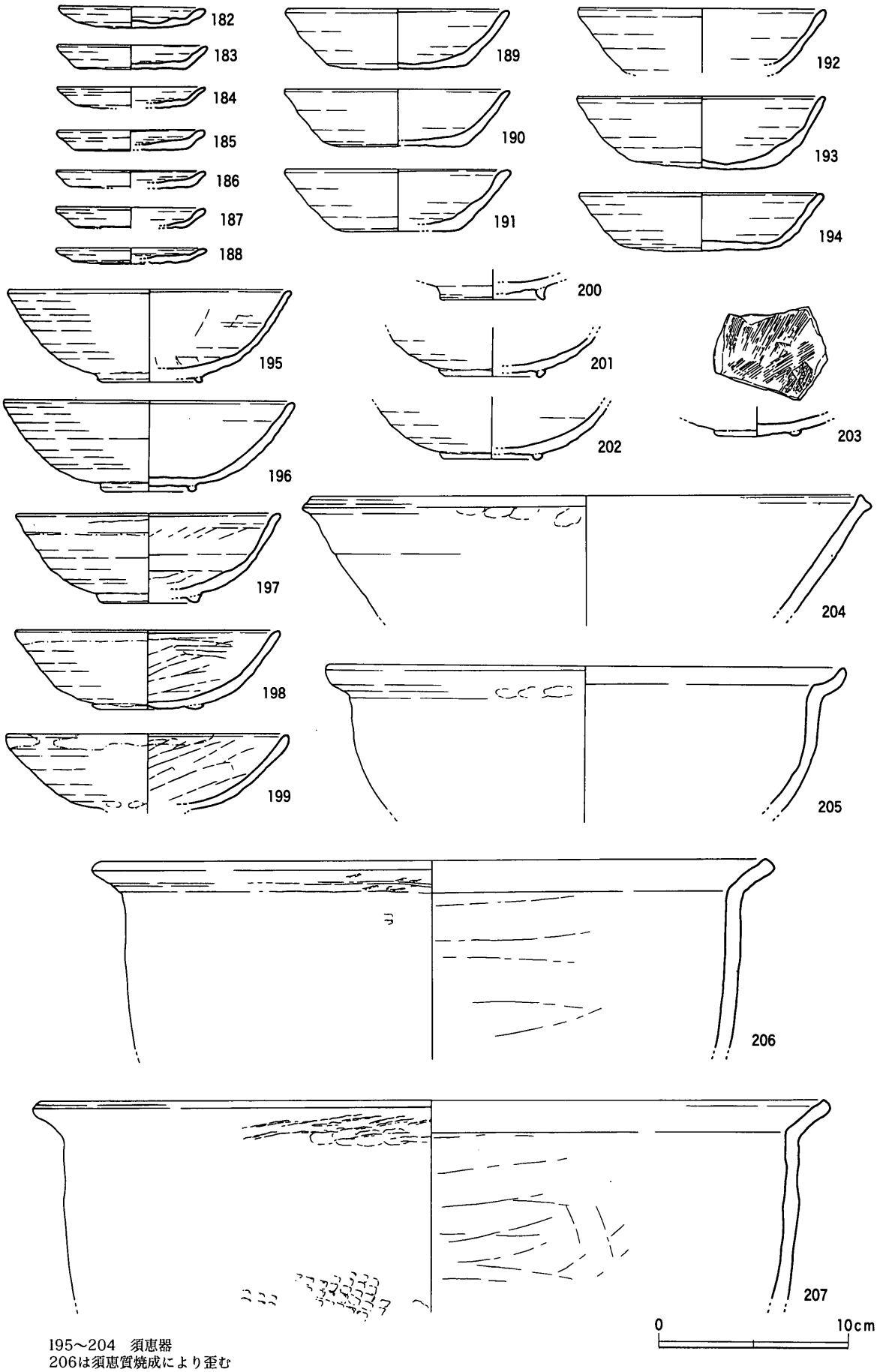
ターンで異なる組成となるのはⅢＢⅡ・杯ＤⅡと椀ＡⅡであり，ⅢＢⅢはやや雑然とした状況にあるが，複数のパターン単位で異なる組み合わせ関係にある。また，須恵器椀Ｂの型式もしくは存否もパターン１～４の区分に対応している。十瓶山窯産須恵器杯と捏鉢Ｄ・Ｅの存否についても複数のパターン単位で差異が指摘できる。

型式組列　各遺構出土土器は，上記のように一括資料としてよいものが多いが，切り合いによる遺構同士の前後関係が明確でないものがほとんどである。唯一，ａ)→ｅ)が確認できるのみである。しかし黒色土器・須恵器椀ＡⅡにみられる，径高指数（器体の深浅），ヘラ削り・ヘラ磨き調整，高台の高低などの属性は一定の整合的な関係にある。つまり①傾向指数（高）・削り（有）・磨き（緻密な分割）・高台（高）と②傾向指数（低）・削り（無）・磨き（無）・高台（低）を両極として，①→②（椀ＡⅡ－２→10）もしくは②→①（椀ＡⅡ－10→２）という型式組列が想定できる。他地域の事例から，この型式組列は椀ＡⅡ－２→３→４→５→６→７→８→９→10の可能性が高いという見通しが得られるが，これは高松平野南部での椀ＡⅡ－４→７・８→９という知見と整合する。問題は椀ＡⅡ－



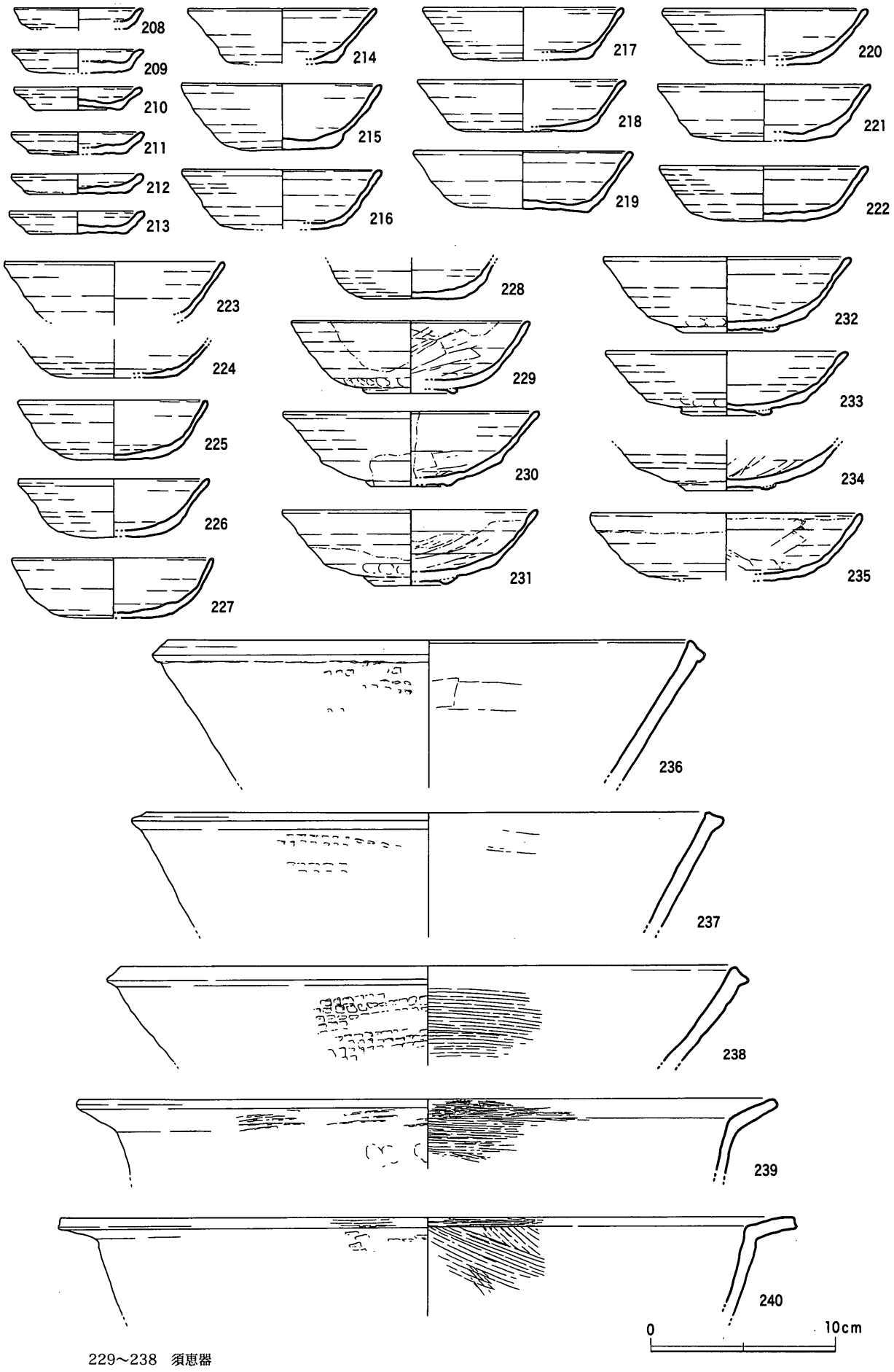
171～179・181　須恵器
180　青磁

第428図　西村遺跡山原地区S20－SD01出土遺物（1/3）



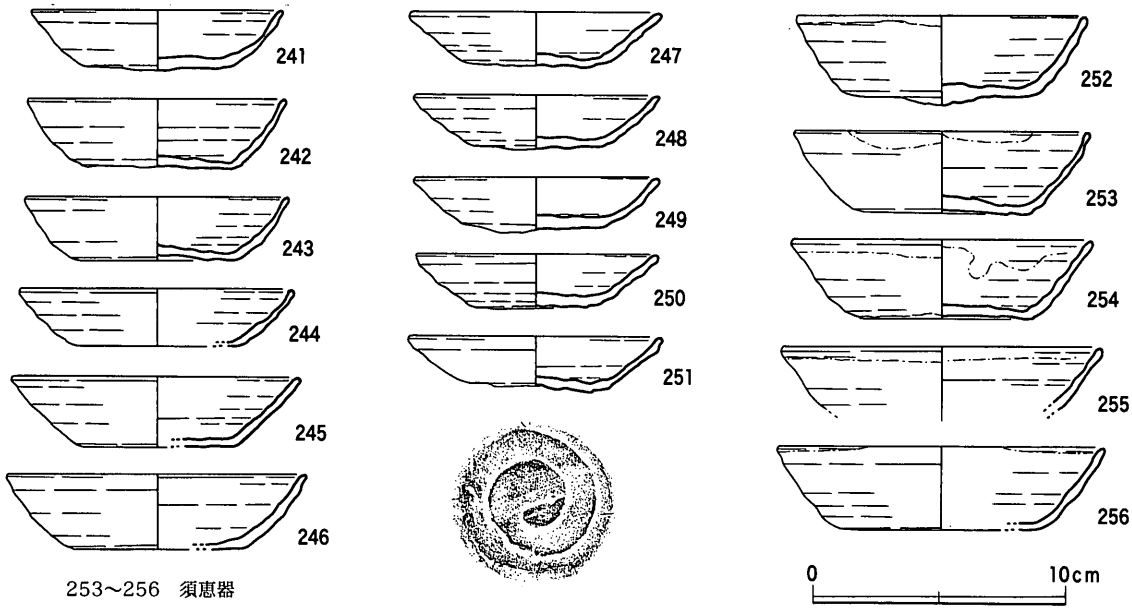
195～204　須恵器
206は須恵質焼成により歪む

第429図　西村遺跡山原地区S16－SK16出土遺物（1/3）



229～238　須恵器

第430図　西村遺跡川北地区S33－SK01出土遺物（1/3）



第431図　西村遺跡西村北地区S5－SK01出土遺物（1/3）

1とAII－の関係である。椀AII－2～8に普遍的な外面の回転ヘラ磨き調整は，AII－1にはみられないからであり，製作技法上の断絶とも解し得る。ただし，形態的には「深椀」形を呈してAII－2と共通することから，AII－2出現時に併行して製作された，より古相を呈する型式と見なしておきたい。

土師質土器杯DIIは，外傾度の強い浅手の型式から，外傾度の緩いやや深手の型式，さらに外傾気味で浅手の型式へという変遷をたどる。法量的にはDII－1→2が若干大型化という方向をたどるが，それ以後の型式は一貫して縮小化傾向を明確にする。椀AIIのような直線的な連続関係ではないが，空港跡地遺跡での知見からDII－1→2→3→4→5→6→7→8という型式組列が想定できる。IIIBIIIについても空港跡地遺跡の知見から，BIII－2→3→4という組列の方向が想定できる。

須恵器椀Bは，型式組列としてはB－1→2→3→4もしくはその逆が想定できるが，上記してきた椀AIIや杯DIIとの共伴関係から，前者の組列でよいと判断できる。

以上，各形式での型式組列ならびに組み合わせは，高松平野南部と整合的に理解できる。土師質土器IIIBIII－5，十瓶山窯産須恵器杯・捏鉢D・Eの存否についても同様である。したがってパターン1～7は，パターン1→2→3→4→5→6→7という序列として理解できる。

(4) 杯DIIと椀AIIの法量について

以上の基準資料からは，片桐氏が指摘する「杯D＋高台＝椀AII」という想定を首肯することは難しい。何故なら，共伴関係が認められる土器群中において，杯DI・IIと椀AIIの法量が一致しないからである。口径でみると，杯DI・IIは椀AIIよりも一回り小さいことが多く，唯一，杯DIIの口径が最大になるパターン4において椀AIIとほぼ同一口径となるのみである。またパターン2の杯DIと椀AIIでは，底部ヘラ切りの範囲が異なる上に，体部の外傾度も全く異なる。仮に杯DIを素形として「底部押し出し」を行ったとすると，口径や体部形態の変形が著しいこととなるが，杯DIの方が椀AIIよりも器壁が薄く，想定される素形とは矛盾することとなる。このことは，パターン3においても同様で

あり，杯Ｄを椀ＡⅡの素形とする見解は支持できない。さらに西村遺跡の杯Ｄが他地域の杯Ｄよりも大振りであるという点についても，後述するような併行関係からは首肯できず，むしろ他地域と軌を一にした法量変化を示すと認識している。

５．丸亀平野での様相と対応関係

(l) 対象土器群と出土状況

対象資料は，以下の13遺構出土土器である。

ａ）下川津遺跡ＳＤⅢ03出土土器
ｂ）下川津遺跡ＳＤⅢ05出土土器
ｃ）下川津遺跡ＳＤⅢ75中央部上位
ｄ）北内遺跡ＳＤ26
ｅ）龍川四条遺跡Ａ地区ＳＲ01出土土器
ｆ）川津元結木遺跡ＳＤ10第１溝
ｇ）佐古川・窪田遺跡井戸２
ｈ）下川津遺跡ＳＤⅢ71東部
ｉ）川津二代取遺跡ＳＤ28
ｊ）川津二代取遺跡ＳＫ05
ｋ）飯野東二・瓦礫遺跡ＳＰ459
ｌ）龍川四条遺跡Ａ地区ＳＰ01
ｍ）郡家原遺跡ＳＰ45

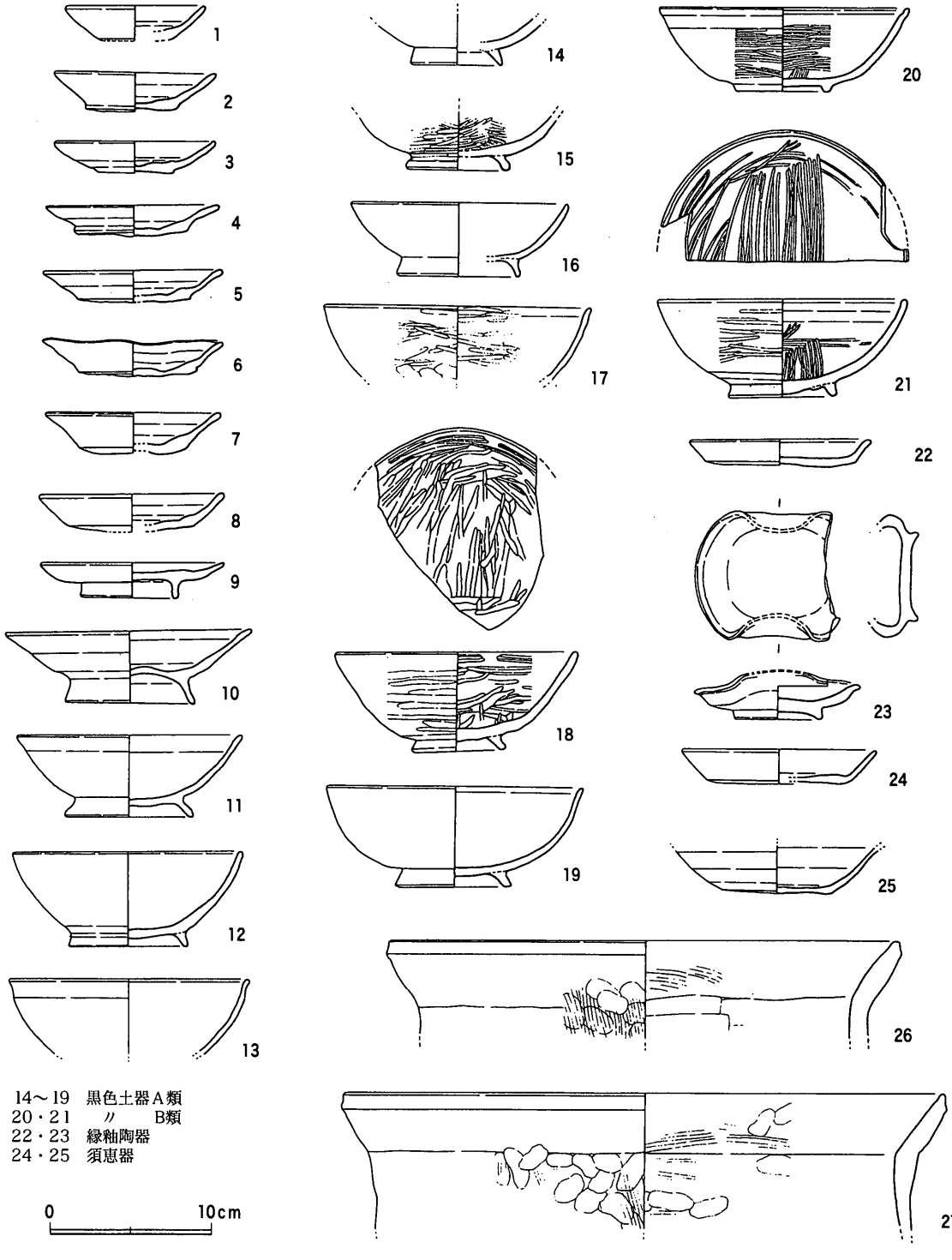
これらの中で一括資料としてよい事例は，井戸廃絶時の一括投棄であるｇ)，ピットへの一括埋納であるｋ)・ｌ)，地鎮土坑への一括埋納であるm)に限られる。その他は溝や旧河道，大型の土坑などであり，一括資料とはいい難いが，型式の組成がある程度まとまっていることから検討対象とする。

(2) 形式・型式の組み合わせ

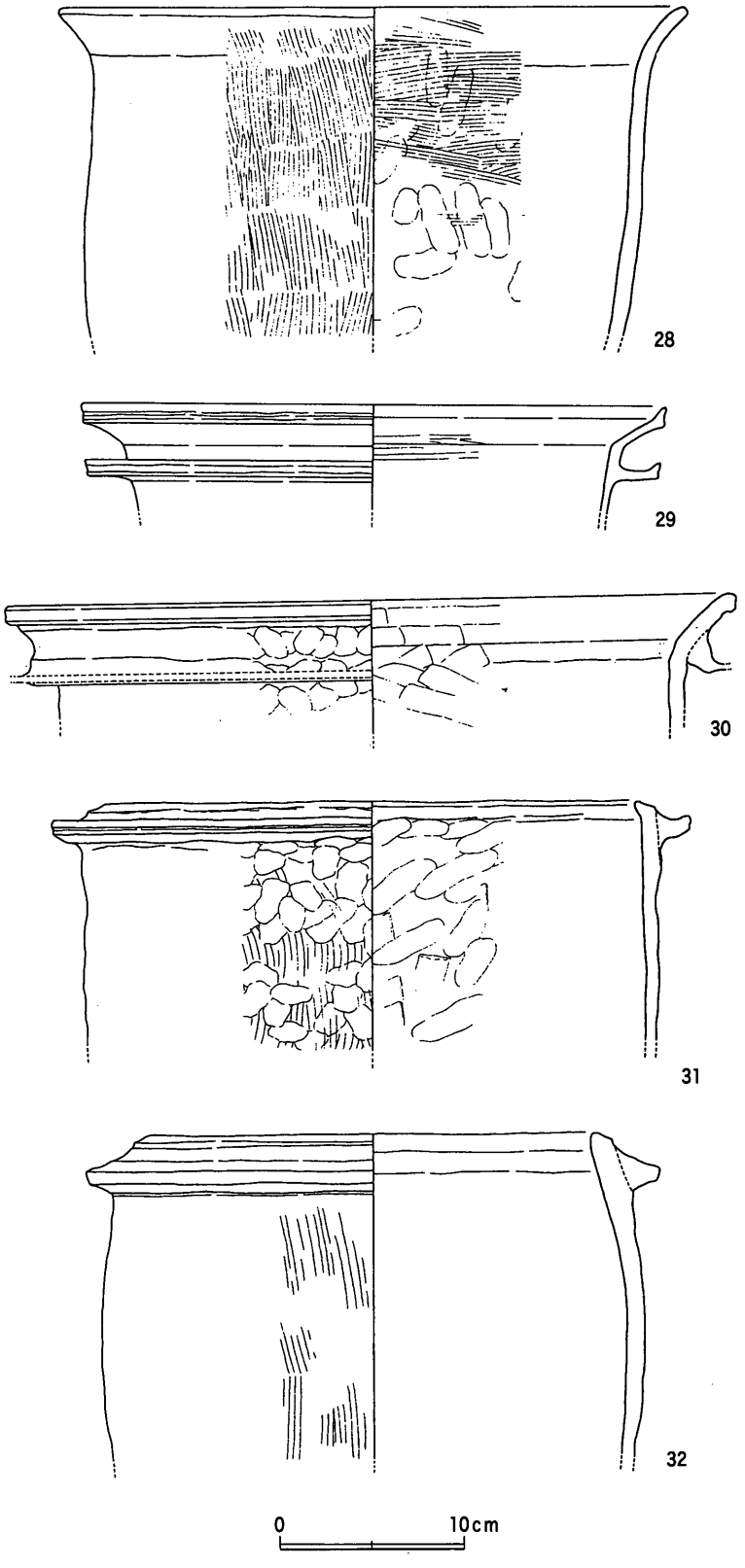
第９表に示したとおりであり，組み合わせからパターン１～６に区分できる。高松平野と比較して，皿ＢＩが目立つことや，皿・杯のヘラ切りがパターン１～３ではＬ主体でパターン４でも一定量Ｌが認められること（高松平野では一貫してＲ主体）が特徴的である。特に皿ＢＩとヘラ切りＬとの結び付きが強い。杯ＤⅡは，形態的には高松平野の同形式との識別が難しい。

第8表　西村遺跡における形式・型式の組み合わせ

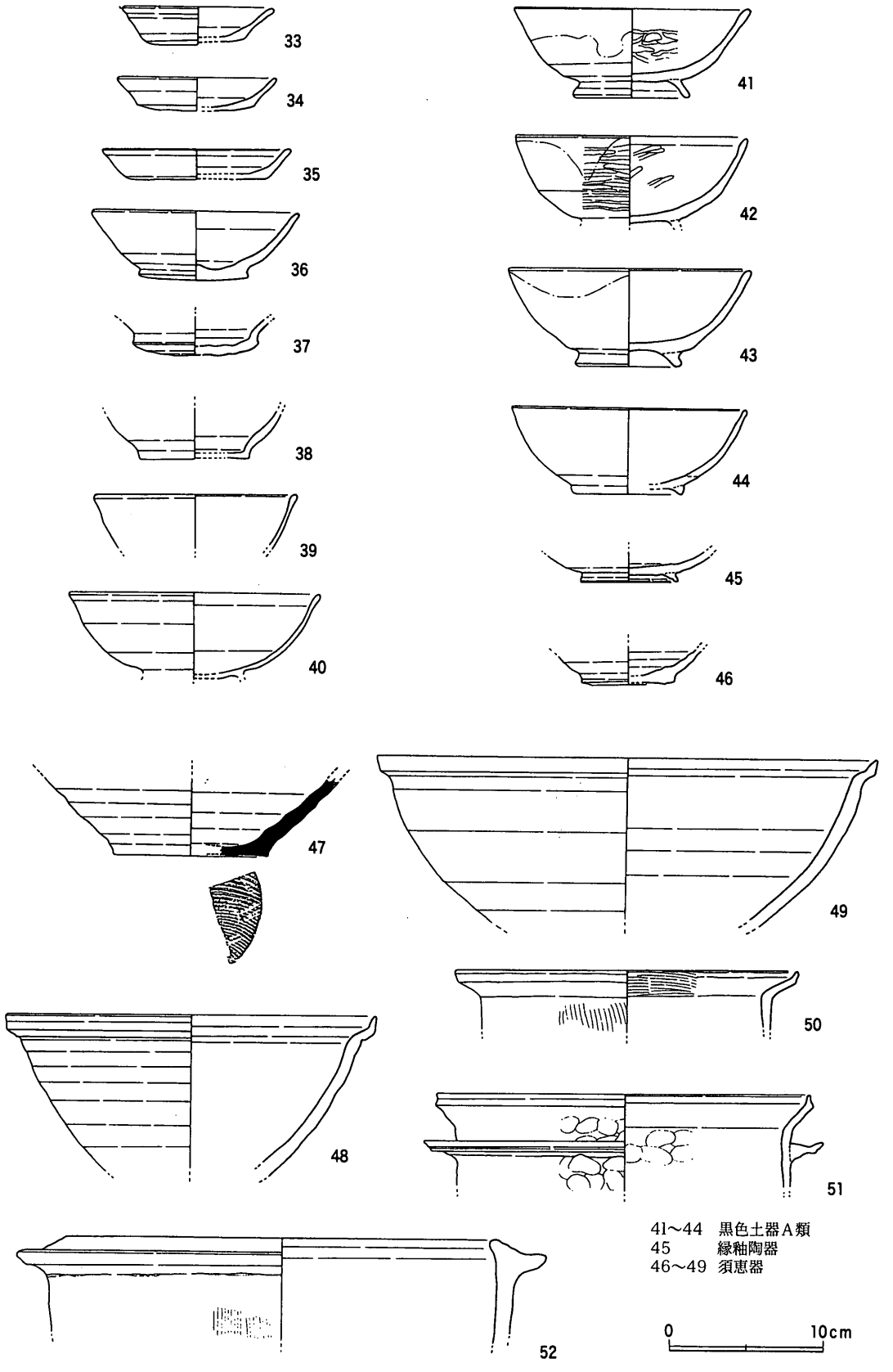
パターン	佐藤	廣瀬	出土遺構	皿Ｂ Ⅱ 1	皿Ｂ Ⅱ 2	皿Ｂ Ⅱ 3	皿Ｂ Ⅲ 1	皿Ｂ Ⅲ 2	皿Ｂ Ⅲ 3	皿Ｂ Ⅲ 4	皿Ｂ Ⅲ 5	杯Ｄ Ⅰ	杯Ｄ Ⅱ 1	杯Ｄ Ⅱ 2	杯Ｄ Ⅱ 3	杯Ｄ Ⅱ 4	杯Ｄ Ⅱ 5	杯Ｄ Ⅱ 6	杯Ｄ Ⅱ 7	杯Ｄ Ⅱ 8	杯Ｄ Ⅱ 9	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 1	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 2	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 3	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 4	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 5	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 6	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 7	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 8	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 9	須恵器・黒色土器椀 ＡⅡ 10	須恵杯	捏鉢 D	捏鉢 E
1	1		西村２号窯跡										●									●										●	
			西村北Ｎ３－ＳＫ01	●																			○											
2	2		川北Ｎ31・32－ＳＤ01		○			○				○																						
3	3		西村１号窯跡		○		●		○				●	●									●	●	○							●	●	
			西村北Ｎ２－ＳＫ02				●						●	●									●	●										
4	5		川北Ｎ35－ＳＫ26			●		●							●	●											●	●						
			山原Ｓ20－ＳＤ01			●		●	○						●	●											●	●						
5			山原Ｓ16－ＳＫ16				●		●								●																	
			山原Ｓ17－ＳＫ201					●									○																	
6			川北Ｓ33－ＳＫ01							●								●	○											●	●			
7			西村北Ｓ５－ＳＫ01															●	●	●	●	●								●	●			
			（西村北Ｎ６－ＳＢ03）														○		○															



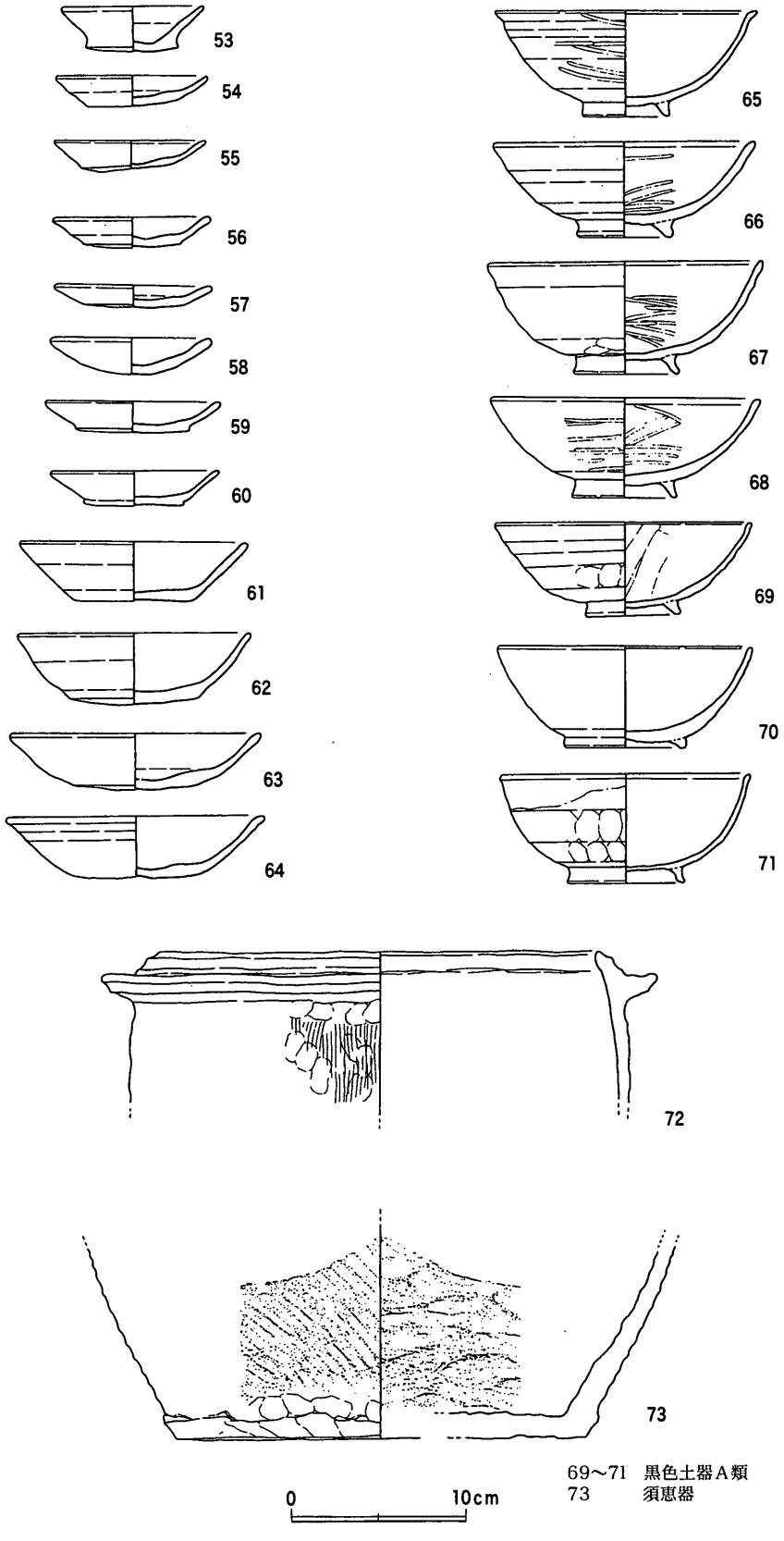
第432図　下川津遺跡SD皿03出土遺物（1）（1/4）



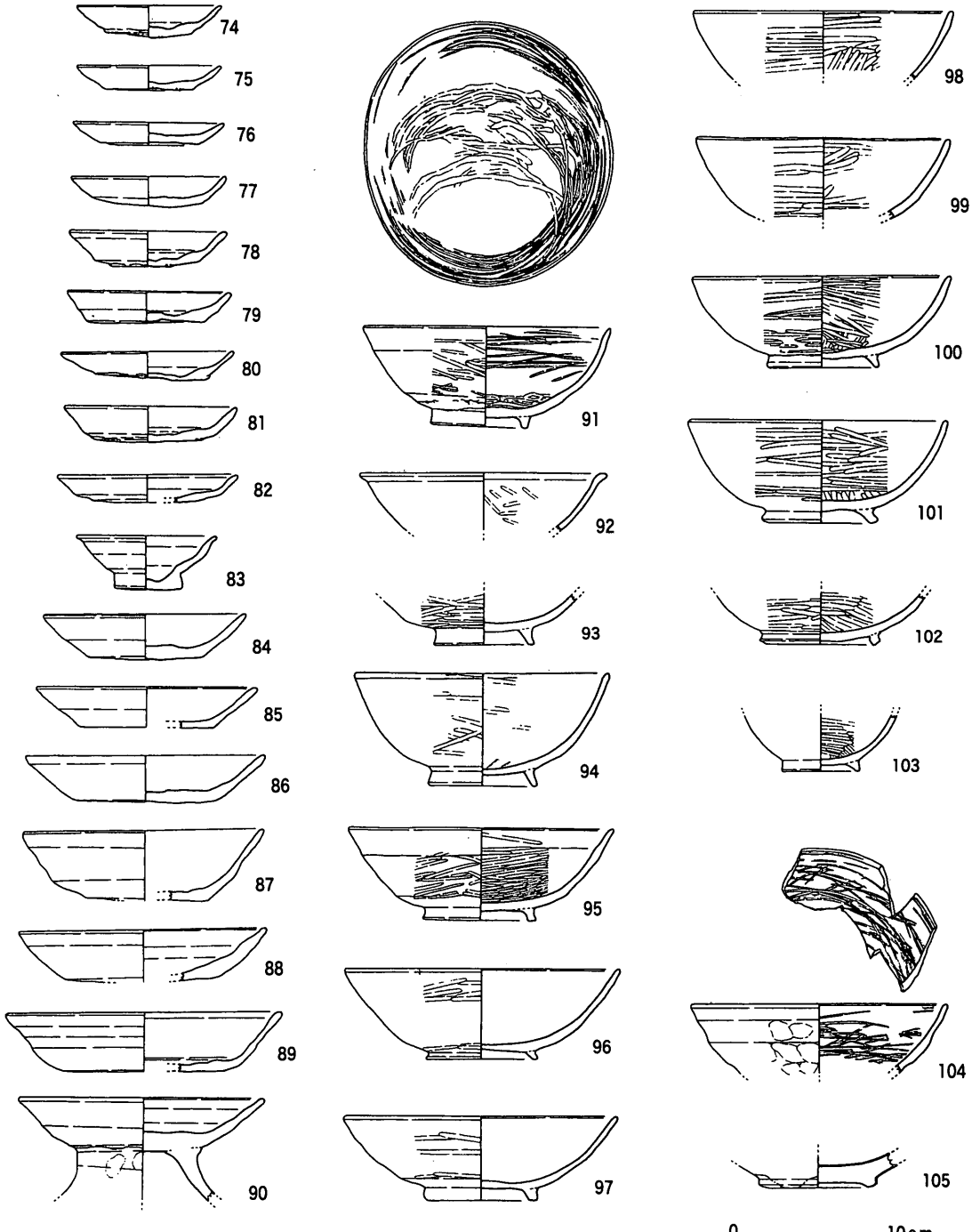
第433図　下川津遺跡SD皿03出土遺物（2）（1/4）



第434図　下川津遺跡SDⅢ05出土遺物（1/4）

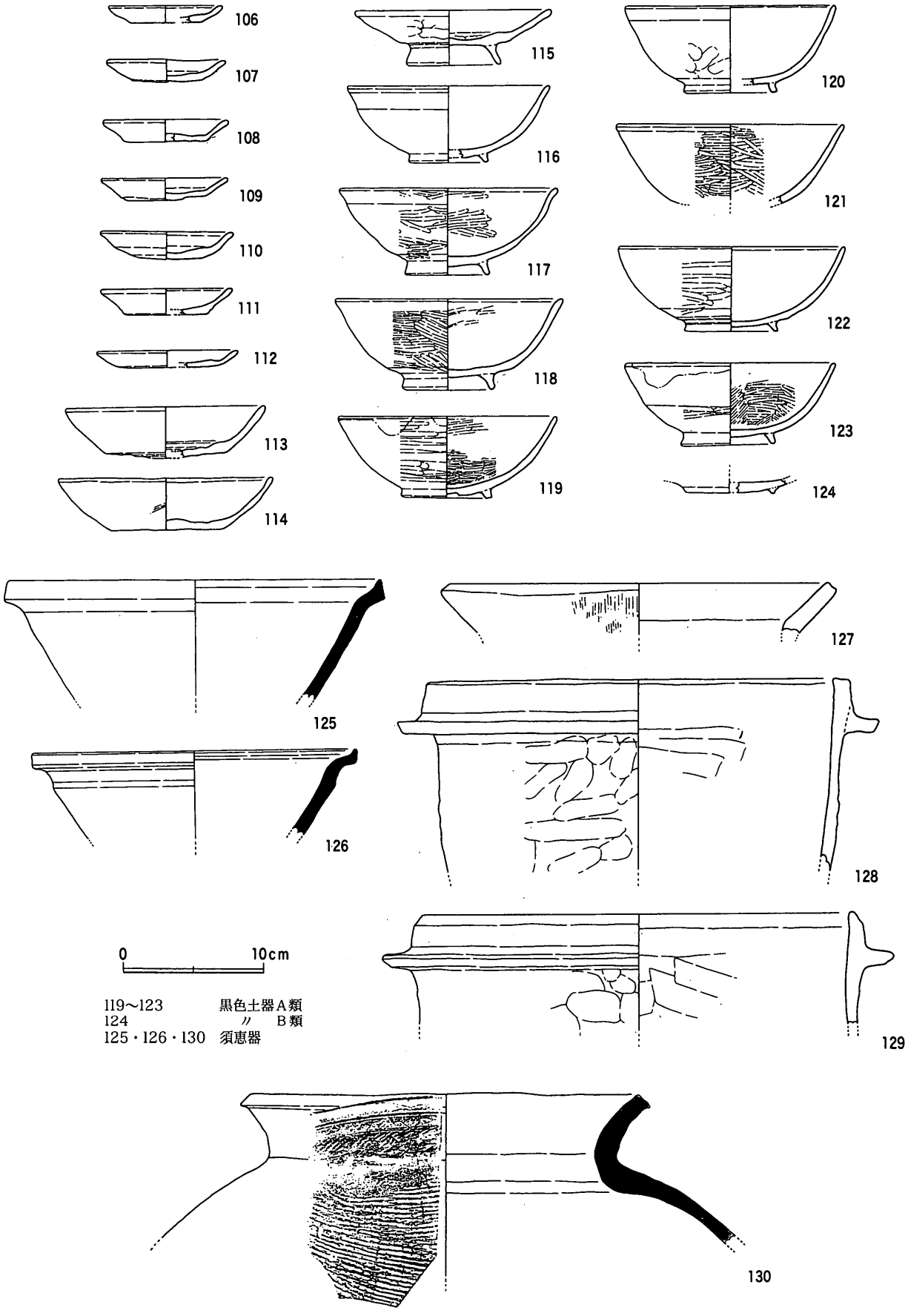


第435図　下川津遺跡SD皿75中央部上位出土遺物（1/4）

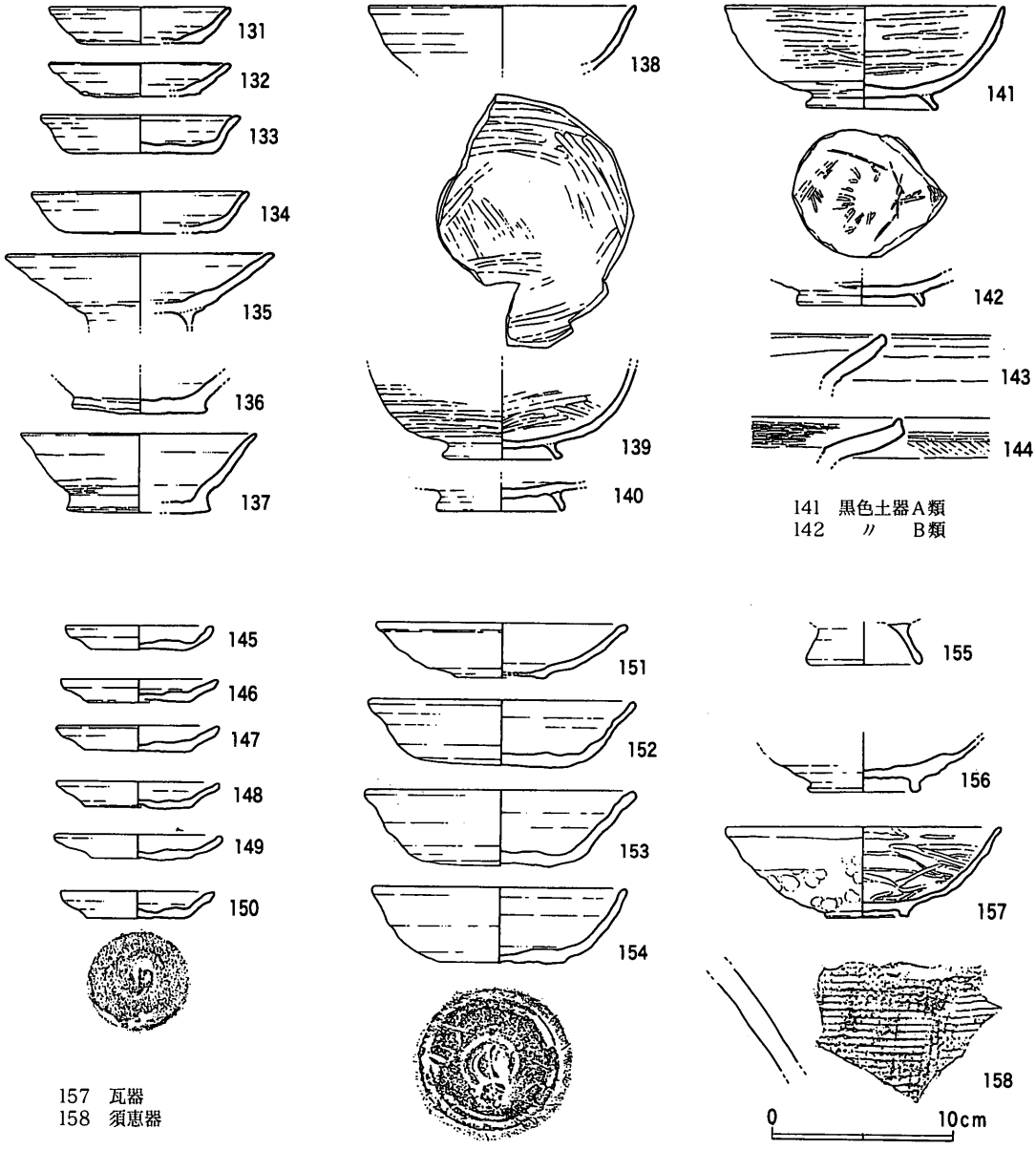


98～102　黒色土器A類　　104　瓦器
103　　〃　B類　　105　白磁

第436図　龍川四条遺跡A地区SR01出土遺物（1/4）



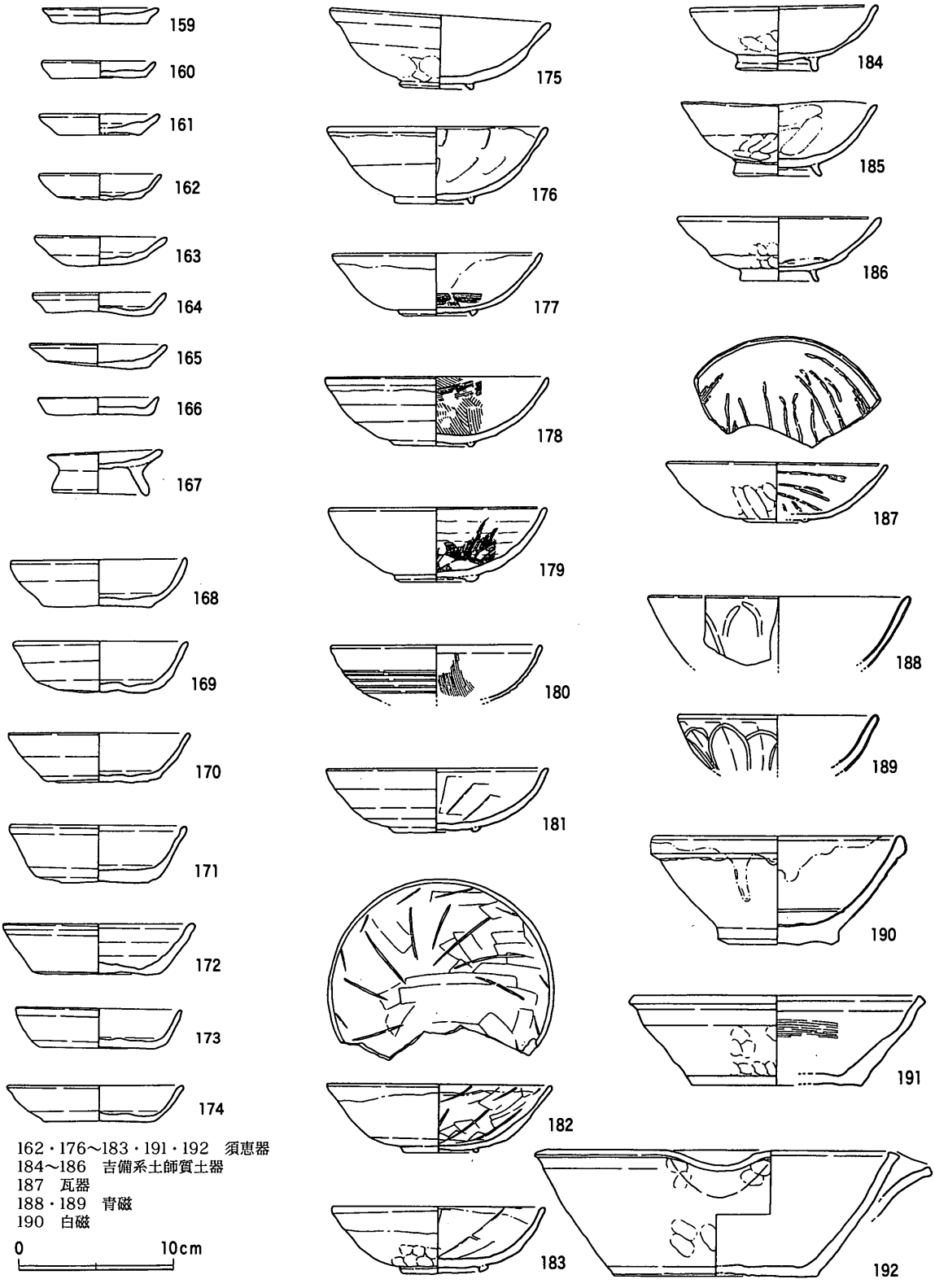
第437図　川津元結木遺跡SD10第1溝出土遺物（1/4）



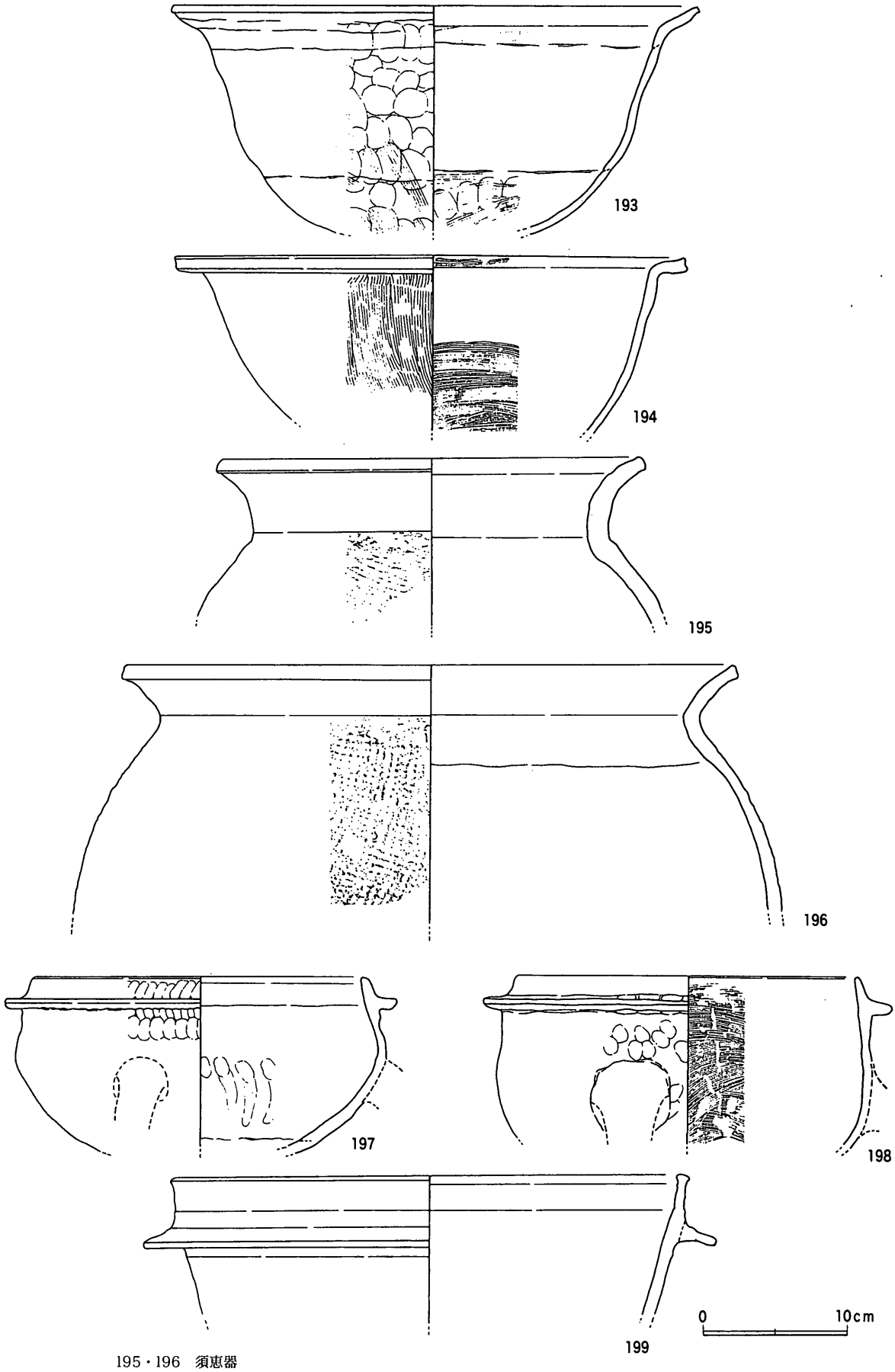
第438図　北内遺跡SD26出土遺物（上段），佐古川・窪田遺跡井戸2出土遺物（下段）（1/4）

良好な資料が少なく，形式・型式の組み合わせにも不確実な部分が残るが，パターン２での杯ＤⅡ－１と椀ＡⅡ－４の組み合わせは，高松平野・西村遺跡と同じである。しかし，パターン４は高松平野と若干食い違い，パターン５は高松平野・西村遺跡と若干食い違う。これを実態を反映した地域色とみるかどうか，判断が難しい。しかし，パターン４として取り上げたｈ)は幾度かの再掘削を示唆する土層堆積状況を示し，パターン５のｉ)も屋敷地の小規模な区画溝ではあるが，散在的で一括投棄とはいい難い遺物の出土状況を示す。このことから，パターン４・５については若干の時期幅を見込んだ方が妥当であると考える。

ここで片桐編年Ⅱ－③～⑥の基準資料とされてきた川津元結木遺跡ＳＤ10出土土器について，少し検討してみる。この資料に関する片桐編年の当否は，最下層→第２溝→上層という層位区分にもとづいた土器群が，上記してきたようなパターン区分として認識できるかどうかにかかっているといえる。最下層は出土点数が少ないが①土師質土器杯Ｃ（報告書870～872）を含んでおり，やや先行的な形式

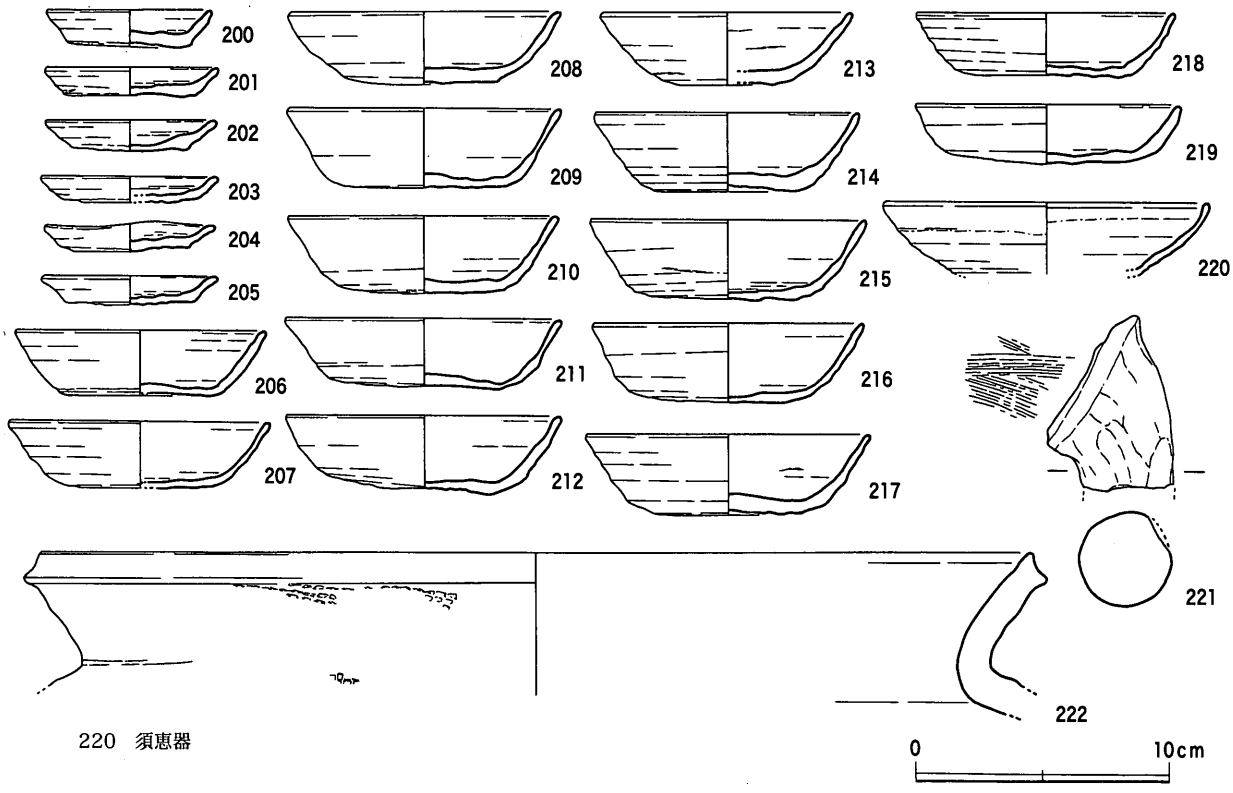


第439図　下川津遺跡SDⅢ71東部出土遺物（1）（1/4）

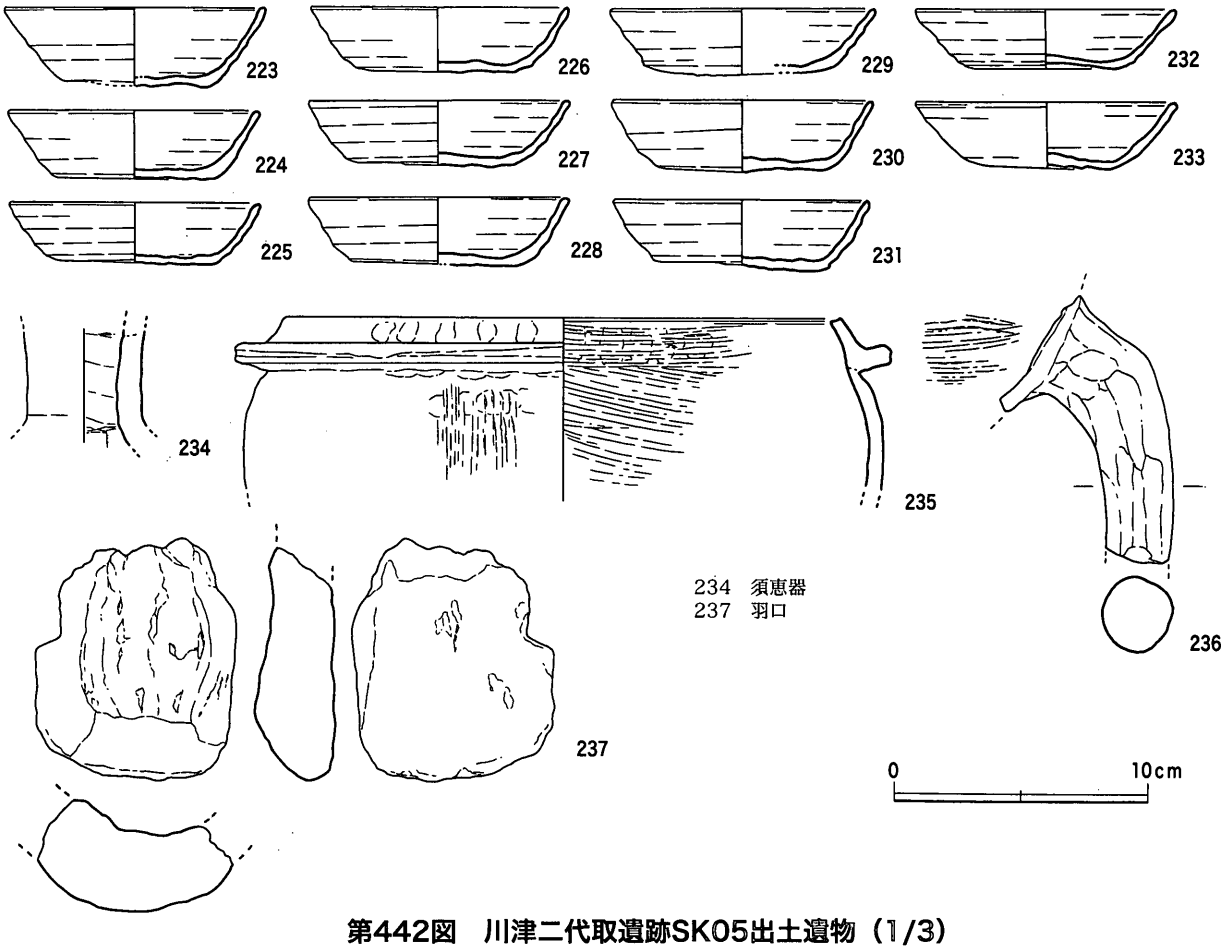


195・196　須恵器

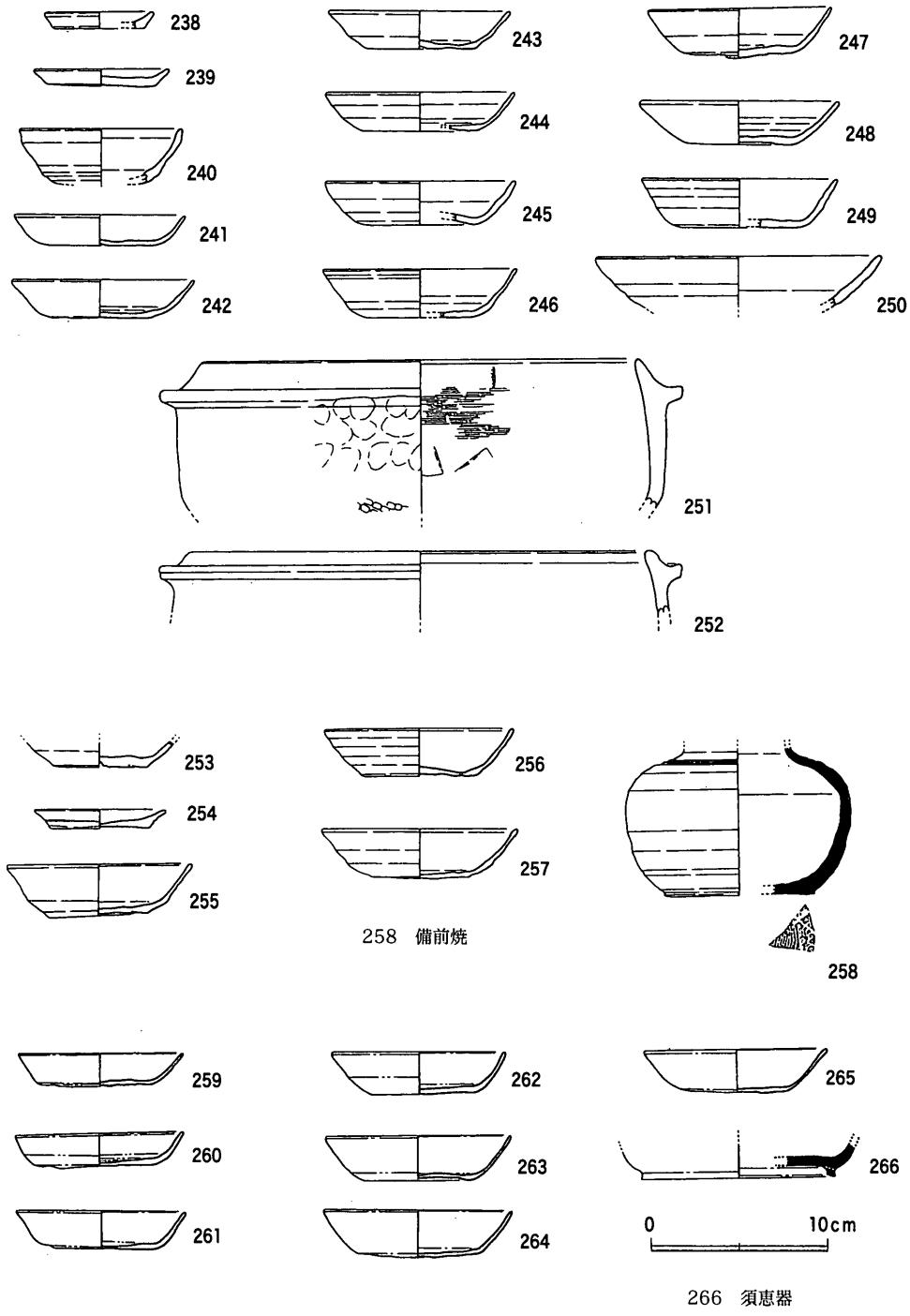
第440図　下川津遺跡SD皿71東部出土遺物（2）（1/4）



第441図　川津二代取遺跡SD28出土遺物（1/3）



第442図　川津二代取遺跡SK05出土遺物（1/3）



第443図　飯野東二・瓦礫遺跡SP459（上段）・龍川四条遺跡A地区SP01（中段）郡家原遺跡SP45（下段）出土遺物（1/4）

が存在するとも評価できる。しかし一方で，②器体の浅い黒色土器椀（報告書878）や，③平高台の退化した椀Ｂ－２（報告書883）が存在することも看過できないであろう。②・③は西村遺跡ではパターン３にみられるが，①はおそらくパターン１よりもさらに先行的な形式といえるのであり，短期間のまとまった資料というよりも長期間の混在した状態を示している土器群とするのが妥当であろう。第２溝と上層出土土器については，土師質土器皿ＢⅠ・杯ＤⅡ，黒色土器椀ＡⅡ，須恵器鉢Ｄ・甕Ｃのいずれもが極めて近似した型式から構成されており，両者を別のパターンとして区分するのは困難である。両者ともに西村遺跡のパターン３に近い内容をもつとしてよく，最下層の②・③と共通する。以上から，ＳＤ10出土土器は全体としては西村遺跡のパターン３（つまり丸亀平野のパターン２）として捉えて

よく，最下層出土の一部に先行的な形式が存在するがそれは混在した在り方を示すのに過ぎず，層位的区分＝パターン区分ではないことがわかる。

6．中世Ⅰ・Ⅱ期の設定と細分

(1) 各地域のパターンの併行関係

以上記述してきた３地域でのパターンは，各々が明確な対応関係にあるとは必ずしもいえないが，大枠では皿ＢⅢ・杯ＤⅡ・椀ＡⅡの形式・型式の組成が一致する。高松・丸亀の両平野の資料は消費地での資料であり，ことに丸亀平野では上記したようにパターン４・５に時期幅が想定されるなど，若干の問題を残す。したがってこれらの地域の併行関係は，生産地の一括資料から構成される西村遺跡を基準として検討するのが望ましい。

普遍的な西村産の器種である椀ＡⅡの型式と各地域の土師質土器皿・杯の型式との組み合わせから，第10表に示したようなパターンの併行関係が推測できる。ただし，いくつかの検討課題は残る。それは，①西村遺跡１・２については，高松・丸亀平野ともに比較資料が少ないか存在しない。このため西村遺跡でのパターン区分が妥当なものか，十分な検証が現時点では行えない。高松平野では，西村遺跡１にわずかに先行すると思われる前田東・中村遺跡Ｅ区ＳＤ19出土土器から高松平野１に至るパターン区分が検討課題となる。また丸亀平野１・２では，西村遺跡ではみられない皿ＢⅠが主体を占めるため，西村遺跡１～３との厳密な対応関係やパターン区分の検証が不十分である。②高松平野３～６の区分は皿ＢⅢ・杯ＤⅡの型式の組み合わせからは区分が可能であり，時期幅が問題となるが丸亀平野でも区分ができる見通しにある。しかし西村遺跡ではこれに対応するのは西村遺跡５・６であり，現段階ではそれ以上の細別は難しい。西村遺跡５の杯ＤⅡ形式はＤⅡ－４・５であるが，高松平野３の杯ＤⅡはＤⅡ－３・４であり，微妙な食い違いがみられる。西村遺跡６と高松平野５とは概ね一致する。このため，西村５のＳ16－ＳＫ16が高松平野３・４に細分できる可能性を考えておく。逆に西村遺

パターン	出土遺構	皿B Ⅰ 1	皿B Ⅰ 2	皿B Ⅱ 1	皿B Ⅱ 2	皿B Ⅱ 3	皿B Ⅲ 1	皿B Ⅲ 2	皿B Ⅲ 3	皿B Ⅲ 4	皿B Ⅲ 5	杯D Ⅰ 1	杯D Ⅱ 1	杯D Ⅱ 2	杯D Ⅱ 3	杯D Ⅱ 4	杯D Ⅱ 5	杯D Ⅱ 6	杯D Ⅱ 7	杯D Ⅱ 8	杯D Ⅱ 9	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 1	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 2	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 3	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 4	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 5	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 6	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 7	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 8	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 9	須恵器・黒色土器椀 AⅡ 10	須恵杯	捏鉢 D	捏鉢 E
1	下川津ＳＤⅢ03	●																																
	下川津ＳＤⅢ05	◎																					●										●	
	下川津ＳＢⅢ112	●																					◎	◎										
2	下川津SDⅢ75中央部上位		●										●	●																				
	北内ＳＤ26		●																						●									
	龍川四条Ａ地区ＳＲ01		●										●												●								◎	
	川津元結木SD10第１溝		●										●												●								●	
3	佐古川・窪田井戸2		●											●	●																			
4	下川津ＳＤⅢ71東部								●	◎							◎	●												●	●			●
5	川津二代取ＳＤ28									●								●	●													◎		
6	川津二代取ＳＫ05																		●	●														
	飯野東二・瓦礫ＳＰ459																			●	●													
	龍川四条Ａ地区ＳＰ01									◎									●															
	郡家原ＳＰ45																				●													

第9表　丸亀平野各遺跡における形式・型式の組み合わせ

高松平野	西村遺跡	丸亀平野	期	
	パターン1	パターン1	中世Ⅰ期	1
	2			2
パターン1	3	2		3
2	4	3	中世Ⅱ期	1
3	5			2
4	6	4		3
5		5		4
6	7	6		5

第10表　高松・丸亀平野，西村遺跡の各群別の対応関係

跡4は，椀AⅡの型式の組み合わせ（出現頻度）から2つのパターンに細分できる余地があるが，高松・丸亀平野では資料不足もあり十分な検証ができない。

(2)「期」設定の指標

上記したような検討課題が残るものの，各地域のパターンの併行関係について一応示すことができた。そこで併行関係を踏まえた各パターンを一括して編年区分に再編する。

編年区分は，形式上の組み合わせの大きな変化を「期」とし，型式の組み合わせの変化を「小期」と認識して行った。「様式」でなく「期」と呼称するのは，主要形式・型式以外にも多様な在地系・搬入系土器から構成される土器群が遺跡・小地域毎でかなりの変異幅を有する実態があるからであり，どのレベルで「様式」と認識してよいのか，明確でないことによる。このため，単に土器の共伴関係によって示される共時性を示す用語として「期」を用いたい。

今回検討した土器群は，中世Ⅰ期・Ⅱ期に大別できる。中世Ⅰ期の指標としたのは，①土師質土器皿B（小皿）の出現，②西村型土器椀である椀AⅡの出現，③十瓶山窯産中世須恵器としての鉢D・壺C（広口瓶）・甕C（いわゆる「十瓶山式甕」）の出現，の3点である。また④土師質土器杯Dの出現も指標となるものの，当初から存在するのではなく，この期の後半から急速に普遍化する。②の椀AⅡは，黒色土器と須恵器の両者があるが，この期には黒色土器として生産されることが多い。

中世Ⅱ期の指標としては，①椀AⅡの大多数が須恵器で占められるようになること，②十瓶山窯産須恵器捏鉢Eの普遍化，③土師質土器鍋Aの普遍化と足釜A・Bの出現，の3点が挙げられる。②の須恵器鉢Eと③の鍋Aは既に中世Ⅰ期に少量が先駆的に認められるが，この期に調理・煮炊器種の主体的な存在となったものである。また③は，古代的な器種である土師器羽釜・甕の消滅と一致する動きである。

なお本稿では資料不足のため詳しい記述ができないが，これに続く中世Ⅲ期は①杯Dが小型化・浅手化した新たな形態の皿の出現，②楠井窯産擂鉢・甕の出現，の2点を指標とする。①は土師質土器皿B・杯D，須恵器杯，須恵器椀AⅡの消滅と軌を一にする。また②と同時に，須恵器鉢E・壺C・甕Cが消滅する。

以下，小期毎に各形式・型式の変化について記述する。

(3) 中世Ⅰ－1期

西村遺跡の西村２号窯跡灰原，西村北Ｎ３－ＳＫ01を良好な一括資料とし，下川津遺跡ＳＤⅢ03・05もこの期に含めることができる。西村遺跡では須恵器とともに黒色土器椀の生産が確実であり，回転ヘラ磨き調整が汎用される。この技法は，時期的に先行する前田東・中村遺跡Ｅ区ＳＤ19出土土器群に見出せる（佐藤1999）が，この期より西村遺跡産を主体とするようになる。また土師質土器小皿の生産も西村遺跡で行われた可能性が高く，一つの窯場での多面的な土器生産が認められる。さらに須恵器においても中世を特色付ける十瓶山窯産捏鉢・広口瓶・甕の３器種が定型化し，技法的にも古代とは断絶的な側面が指摘できる。一方，煮炊具については新たな形式の出現はあるが，むしろ古代後半からの連続的な様相を呈している。高松平野の状況が不明であるが，土師質土器皿や黒色土器椀の形式の組成は西村遺跡と丸亀平野で異なっており，地域色の明確な状況が看取される。

土師質土器皿　皿ＢⅠ－１・ＢⅡ－１がある。前者は丸亀平野で系譜が追え，後者は生産地である西村遺跡で一貫した系譜が確認できるため，別系統（生産地）の小皿と判断できる。いずれも古代後半の皿Ａとは異質な形態をもつことから，この期に出現した形式といえる。ことに前者は，古代の杯Ｃ形式を浅手にしたような形態であることから，杯Ｃを祖形としていることが推測される。

須恵器椀　椀Ｂ－１・２，ＡⅡ－１がある。椀Ｂは西村２号窯跡灰原で多量に出土しているが，最近では川津川西遺跡など，集落での類例もわずかながら増加している。西村２号窯跡では，Ｂ－１が多くＢ－２は少ない。椀ＡⅡ－１は，既に述べたように回転ヘラ磨きを施さない点がＡⅡ形式の他者とは異なり，系譜関係が問題となる。量的には極めて少ない存在である。

黒色土器椀　椀ＡⅡ－２・３，椀ＡⅢがある。椀ＡⅡ形式は，外面回転ヘラ磨き＋内面６分割磨きを施す「深椀形」のもの（ＡⅡ－２）と，外面回転ヘラ磨き＋内面４分割磨きを施すやや器体の浅いもの（ＡⅡ－３）があり，前者が多くみられる。ともに底部外面には回転ヘラ削りが施される。

椀ＡⅢは，西村遺跡以外での生産が考えられるものである。椀ＡⅡよりも浅手であるが，高台が高く作られているのが特徴的である（第432図16）。また，ヘラ磨きは回転を利用していない。

土師質土器椀　良好な資料に恵まれないが，西村型土器椀ＡⅡは，土師器としては生産されていないようである。下川津遺跡ＳＤⅢ03では，黒色土器椀ＡⅢと同じ形態のものが少量みられる。

須恵器捏鉢　十瓶山窯産の鉢Ｄ－１がある。古代後半の鉢Ｃからの系譜を引くものと考えられる。

土師器甕　甕Ｄ－３，ＥⅠ・Ⅱ－１，Ｆがある。後３者は，この期もしくは直前期に出現した形式である。

土師器羽釜　羽釜Ｂ－３・４，ＣⅠ－３がある。いずれも古代後半からの連続的な系譜が辿れるものである。

土師質土器鍋　ごく少量にとどまるが，西村遺跡N3－SK01では器体の浅い鍋が認められる（第420図37）。口頸部が緩いカーブを描いて外反し，口縁部を中心としたナデ調整は回転ナデの可能性が指摘できる。中世Ⅱ期に出現する鍋とは形態的に異なっており，明確な断絶期を介した先駆的な事例として捉えられる。

須恵器広口瓶　十瓶山窯産の壺Ｃ－１がある。

須恵器甕　十瓶山窯産の甕Ｃ－１がある。口頸部には右上がりの叩き目が，体部には右下がりの叩き目が施され，吉岡康暢氏のいう「一連叩打成形」が行われている点が古代後半の十瓶山窯産甕とは異なる。なお口頸部の叩き目は回転ナデ調整で消去される。

その他　須恵器皿Ａ・杯DIが少量認められる。杯DIは，黒色土器椀同様に見込みのヘラ磨き調整を

行っており，一部には外面の分割磨きも行われている。煮炊具の加熱具としては，土師器竈がある。他地域からの搬入品としては，楠葉産黒色土器Ｂ類椀や近江産緑釉陶器椀・耳皿・皿，篠窯産鉢，東播系須恵器椀がある。多くは11世紀前葉～中葉までに編年されるものであるが，東播系須恵器椀は平高台の低いものであり，遡っても神出釜ノ口５号窯段階（11世紀後葉）でのバリエーションに類例がみられるのにとどまる。楠葉産黒色土器や緑釉陶器などの特殊品は，入手後一定期間使用されたことを示すと考えられる。

(4) 中世Ⅰ－２期

西村遺跡のＮ30・31－ＳＤ01出土土器，庄屋池３号窯跡採集土器があたる。資料数が少なく，土器群全体の様相については明確ではないが，黒色土器椀はⅠ－２期よりも後出的であり，また新たな器種としては土師質土器杯ＤⅠの存在（出現）が挙げられる。

土師質土器皿　皿ＢⅢとしては口径のやや小振りなＢⅢ－１・２がある。ＢⅢ－１は比較的長く外傾気味の口縁部をもつ。ＢⅢ－２は口縁部が直立し口径もやや小振りであり，Ⅱ－１期以降にみられるものである。Ｎ30・31－ＳＤ01付近はⅡ期にも継続して建物群がみられるため，混入と捉えた方がよいかもしれない。

土師質土器杯　杯ＤⅠがある。形態的にはⅠ－１期の須恵器杯DIに近似するが，ヘラ磨き調整は施されない。また口径が13㎝台と小振りである。

須恵器椀　椀Ｂ－２・３がある。庄屋原３号窯跡での採集資料は３点にとどまり量的な比率の分析は難しいが，Ｂ－２が１点，Ｂ－３が２点あり，後者が多いようにも判断できる。

黒色土器椀　椀ＡⅡ－３のみで占められる。一部の個体に底部ヘラ削り調整が省略される。また見込みのヘラ磨きは平行線状主体であるが一部に螺旋状を呈するものがある。これらの特徴がⅠ－１期とは異なる。

土師器甕　甕ＥⅡ－１がある。外傾する口縁部端面の直下にも強い横ナデによって面が形成される。

須恵器甕　十瓶山窯産の甕Ｃ－１・２がある。

(5) 中世Ⅰ－３期

西村遺跡西村１号窯跡・Ｎ２－ＳＫ02，空港跡地遺跡ＳＰil21，下川津遺跡ＳＤⅢ75中央部上位，川津元結木遺跡ＳＤ10第１溝，北内遺跡ＳＤ26，龍川四条遺跡Ａ地区ＳＲ01の出土土器が当該期の資料である。土師質土器皿・杯が極めて少量のため基準資料から除外していたが，高松城跡（西の丸町）下層遺構であるＳＸ８Ｃ204出土土器は，黒色土器椀・須恵器捏鉢・広口瓶の型式からこの期を主体とする，やや特殊な器種組成の事例と理解できる。

この期は，土師質土器杯ＤⅡの出現と集落遺跡における急速な普遍化を指標とする。黒色土器椀も西村型の椀ＡⅡが多く認められるようになり，非西村系統である椀ＡⅢの明確な事例はない。北内遺跡では伝統的な在地の胎土をもつ椀ＡⅡがみられ，西村型土器椀の模倣が行われている。これらのことから，黒色土器椀については，十瓶山窯（西村遺跡）産もしくはその系統の形式でほぼ独占される状況が指摘できる。その一方で，丸亀平野北半部～中央部では土師質土器皿ＢⅠや特徴的な土師質土器椀が多量に

みられ，Ⅰ－1期で看取された地域性が依然として踏襲されていることがわかる。このことは，土師質土器杯DⅡが地域を超えた形態の同一性をもちながらも，ロクロ回転の方向の違いから丸亀平野独自の生産が想定されることにも表れている。

土師質土器皿　皿BⅠ－2，BⅡ－2，BⅢ－1・2がある。前2者は口径8.5～9.5㎝とⅠ－1期よりも縮小し，また系統を超えた法量のまとまりが生じているようにみえる。BⅢ－1はこれらよりも大振りな口径をもつものであり，出土遺構の性格を考慮すると西村遺跡で生産されたものと考えられ，西村遺跡では2系統（BⅡ形式とBⅢ形式）の土師質土器皿の生産が行われるようになった可能性がある。

須恵器皿　西村1号窯跡で皿AⅠ・AⅣの2者がみられる。古代以来続いてきたAⅠ形式が認められるのはこの期までであり，以後は須恵器としての独自の形式はみられなくなる。AⅣ形式は土師質土器皿BⅡ形式の口径を大型化させたものであり，以後の土師質土器主導の皿形態の在り方をよく示すといえよう。

土師質土器杯　杯DⅡ－1がある。高松・丸亀両平野の集落遺跡で一定量確認できる。ただし，西村遺跡の杯DⅡ－1のヘラ切りの進行方向が右（R）なのに対して，丸亀平野の杯DⅡ－1は川津元結木遺跡では左（L），龍川四条遺跡ではRである。このため，丸亀平野には西村産の杯DⅡと他生産地（おそらく皿BⅠの生産地と同じ在地窯）からの供給が想定できる。

須恵器椀　椀B－4，AⅡ－4がある。椀B－4は，極めて低い形骸的な平高台をもつものであり，以後は全く認められなくなる。西村遺跡N2－SK02出土の椀AⅡ－4は，廣瀬編年で「瓦質土器椀」の初現例とされたものである。口縁部から体部にかけて，やや直線的に伸びることと，見込みのヘラ磨きが幅広いことが，黒色土器椀の同型式とは異なるイレギュラーな特徴といえる。西村1号窯跡でも椀AⅡ－4は焼成されているが，これは黒色土器椀と同一の形態・技法をもつ。

黒色土器椀　椀AⅡ－3・4があるが，量的に多いのは椀AⅡ－4である。Ⅰ－2期よりもさらに器体は浅手となるが，直立気味に内弯する口縁部に「深椀」形態への意識の残存を看取することができる。また底部外縁をヘラ削り調整するものが依然多く，ヘラ磨き調整（外面回転磨き＋内面4分割磨き）も比較的密な間隔で施されるなど，丁寧な調整方法の枠組みが踏襲されている。

須恵器捏鉢　十瓶山窯産のD－2・3，E－1がある。西村1号窯跡ならびに川津元結木遺跡での状況をみると，鉢D－2が多く生産・消費されていることがわかる。鉢E－1はこの期では少ないとみてよかろう。この他，西村遺跡では内外面にヘラ磨き調整を密に施す鉢があり，高松城跡（西の丸町）下層遺構からも出土している。

土師器甕　甕EⅠ，EⅡ－1・2がある。古代後半からの甕Dはなく，Ⅰ－1・2期のいずれかをもって消滅しているものと思われる。器面調整は木目の浮き出ない板ナデが主体であり，ハケ目調整への依存度が極めて低下する。形式・技法ともに古代的な要素が払拭されたといえる。

土師器羽釜　羽釜B－4，CⅡ－1・2がある。羽釜B－4はごく少量であり，畿内的な形態（摂津C2型）の変容した在地色の強い羽釜CⅡが多くみられる。羽釜CⅡの器面調整は板ナデであり，甕と同様，器種組成と技法の新たな動きが指摘できる。

須恵器広口瓶　十瓶山窯産の壺C－2がある。国府周辺の火葬骨蔵器としての使用例があるが，高松城跡（西の丸町）下層遺構からも出土しており，集落での貯蔵具としても使用されたと考えられる。

須恵器甕　十瓶山窯産の甕C－2・3があるが，前者が多い。

その他　十瓶山窯産の須恵器杯がごく少量みられるが，土師質土器杯ＤⅡ－１と同じ形態であり，皿と同様，土師質土器に主導される形式の互換性が認められる。土師質土器の平高台椀は小型品を中心に一定量認められる。他地域からの搬入品としては，和泉型瓦器椀（Ⅱ－１・２期），楠葉型瓦器椀（Ⅰ－３期），京都系土師器皿（平安京Ⅳ期新～Ⅴ期古），東播系須恵器小皿・椀・捏鉢・甕（Ⅰ－２期），吉備系土師質土器椀（Ⅰ－２期）などがある。輸入磁器は量的な検討が難しいが，白磁Ⅳ・Ⅷ類碗がみられ，明確にこの期に比定できる青磁の出土例はない。搬入品が土器群全体に占める割合はかなり低いのが一般的であるが，高松城跡（西の丸町）下層の土器群は土師質土器杯ＤⅡがごく少量であり，椀形態も和泉型瓦器椀が圧倒的に多い状況である。明らかに地域内からは遊離した土器組成を備えているといえ，海浜部における交易の拠点としての性格を示すものと思われる。

(6) 中世Ⅱ－１期

西村遺跡Ｎ35－ＳＫ25・Ｓ20－ＳＤ01，空港跡地遺跡ＳＤf32，佐古川・窪田遺跡井戸２の出土土器が該当する。また須恵器捏鉢・広口瓶・甕の型式から，赤瀬山２号窯跡・奥下池南窯跡も当該期の資料としてよかろう。西村遺跡の基準資料では，土師質土器杯ＤⅡと椀ＡⅡの細別型式の組成に微妙な差異が指摘できる。すなわち，①Ｎ35－ＳＫ25では杯ＤⅡ－２が多いが，Ｓ20－ＳＤ01では杯ＤⅡ－３が多い，②Ｎ35－ＳＫ25では椀ＡⅡ－５が多いが，Ｓ20－ＳＤ01では椀ＡⅡ－６が多い，という違いである。こうした差異を同じ期の中での違い（古相・新相とでも区分できるもの）とみるのか，あるいは別個の期として設定できるのかは判断が難しい。しかし，基本的には型式の組み合わせを同じくし，その量比だけが異なるという点で，他の「期」の設定基準よりもより細かなレベルの差異であることは明らかなため，ここでは同じ「期」として捉え，その中での古相・新相という認識に立ちたい。

Ⅱ－１期は，椀ＡⅡにおける黒色土器の消滅と須恵器の増加に特徴付けられる。このことは同時に，９世紀後半以来続いた供膳具組成の終焉を意味しており，供膳具ではほとんど椀形態のみに特化した中世須恵器生産の新たな動きを示すとも評価できる。また西村遺跡の当該期に位置付けられる遺構（Ｎ６－ＳＫ01・Ｓ17－ＳＤ02・Ｎ20－ＳＤ03など）出土土器から，煮炊具では土師質土器鍋Ａが普遍的な存在であることが窺える。土師器甕・羽釜は，当該期の明確な事例はなくⅠ－３期をもって消滅したと考えられる。土師質土器足釜は，Ⅱ－２期からは明確な事例があるが，この期での有無は今のところ明確にできない。また前代の供膳具にみられた地域色がどのように変化したかは，川津地域における良好な事例がないため不明であり，今後の検討課題とせざるを得ない。

土師質土器皿　皿ＢⅠ－２，ＢⅡ－３，ＢⅢ－２・３がある。丸亀平野での系統である皿ＢⅠ形式は，高松平野の空港跡地遺跡でも確認できるが，ここではヘラ切りがＲであり丸亀平野とは異なる。皿ＢⅡ－３とＢⅢ－２・３は，西村遺跡で併存する型式であり，法量的には両者ともに同じである。口径の縮小に伴い口縁部長も短くなり，ＢⅡ形式に特有の口縁部内面下端の窪みが古相では依然明確だが，新相では曖昧な作りとなることが観察できる。したがって，ＢⅡ・Ⅲ形式の境界が次第に不明瞭な，統合化の方向を示しているともいえる。

土師質土器杯　杯ＤⅡ－２・３がある。杯ＤⅡ－１よりも体部の外傾度が弱くなり，器体も相対的に深くなる。その中でも浅手のもの（ＤⅡ－２）と深手のもの（ＤⅡ－３）に細分でき，古相ではＤⅡ－

２が多く，新相ではＤⅡ－３が多いという傾向がある。法量的にはこの期の型式が最も大きく，Ⅱ－２期以降は縮小化傾向を明確にする。

須恵器椀　椀ＡⅡ－５・６・７がある。体部内面と見込みのヘラ磨き調整が省略化の方向を明確にする時期といえ，このため急速な型式変化を辿る。古相では体部内面と見込みのヘラ磨きが別に施されるＡⅡ－５が多いが，新相では一体化した円弧状の磨きを施すＡⅡ－６が多い。また古相・新相ともに内面には磨き調整を行わないＡⅡ－７が少量ある。外面調整の大きな変化は，底部外縁の回転ヘラ削りがみられなくなるという点にあり，回転ヘラ磨きも１本の幅が太く間隔の空いたものになる。焼け締まらない軟質な須恵質焼成が多く，口縁部に炭素の吸着がみられる。短時間の焼成の最終段階で燻しに近い状態の還元雰囲気にあったことが窺え，西村遺跡で多数確認された地上式の小型窯（煙管状窯ｂ類）で焼成されたことが想定できる。

須恵器捏鉢　鉢Ｄ－４，Ｅ－２がある。奥下池南窯跡窯体床面・ＳＸ01出土土器から，依然として鉢Ｄ形式が存在することがわかるが，西村遺跡の当該期の遺構出土土器では鉢Ｅ形式も一定量認められ，Ⅰ－３期の圧倒的な鉢Ｄ優位とは異なる状況が看取できる。焼成は，焼け締まらない軟質な須恵質ないし瓦質焼成がみられることから，窖窯の他に西村遺跡の小型窯での生産が想定される。

土師質土器鍋　鍋Ａがある。西村遺跡での事例は個体差が大きいが，いずれも口頸部が緩やかに外反し，口頸部と体部の大半に叩き目がみられるものである。器体の深いものと浅いものがある。須恵器甕と同様に口頸部を叩いて外反させ，また体部と底部も叩き作業で丸く膨らませたと推測される。口頸部は叩き後に回転ナデ調整と思われるナデが施される。また焼成も還元気味のものがある（Ｎ20－ＳＤ03出土例)。明らかに須恵器系の技法を採用しており，中世Ⅰ期以前の土師器甕・羽釜とは異なる系譜が想定できるため，「土師質土器」鍋と呼称する（足釜も同じ)。

須恵器広口瓶　十瓶山窯産の壺Ｃ－３がある。

須恵器甕　十瓶山窯産の甕Ｃ－３がある。

その他　佐古川・窪田遺跡では，西村型土器椀とは異なる形態をもった土師質土器椀がみられる。資料不足ではあるが，Ⅰ期にみられた地域色は完全に解消されるには至っていないことが予測される。搬入品としては，和泉型瓦器椀（Ⅱ－３～Ⅲ－２期)，白磁Ⅷ類皿がある。

(7) 中世Ⅱ－２期

西村遺跡Ｓ16－ＳＫ16・Ｓ17－ＳＫ201出土土器，東山崎・水田遺跡Ｅ区ＳＤ03，空港跡地遺跡ＳＤf16下層・ＳＴf01の出土土器が当該期の資料である。ただし，先述したように西村遺跡Ｓ16－ＳＫ16出土土器の杯ＤⅡの組成が高松平野とは微妙に異なるため，西村Ｓ16－ＳＫ16は次のⅡ－３期も含む土器群であると捉えておく。また若干の時期幅を含む可能性があるが，西村遺跡Ｎ14－ＳＫ03出土土器も大半がⅡ－２期にあたるものと考えるため，同様の須恵器甕を焼成した，かめ焼谷２号窯跡出土須恵器も当該期に操業期の一点があると判断できる。ただし，同窯出土資料には皿・杯・椀など，直接的に基準資料と比較できる形式がないため，下限については確定的でない。また鍋Ａの特徴から，国分寺楠井遺跡土器溜まり１第Ⅲ層出土土器の上限をこの期に置くことができる。

Ⅱ－２期は，土師質土器皿・杯における底部糸切り技法の出現と，須恵器椀ＡⅡにおけるヘラ磨き調整の消失，また土師質土器鍋Ａの形態・技法の定型化に特徴付けられる。底部糸切りは，西村遺跡を含

む十瓶山窯ではついに採用されなかった技法であり，地域的には高松平野南東部と三豊平野に集中する(三豊平野の事例については本節7.を参照)。非十瓶山窯系の生産地の新たな動きを示す事例である。鍋Aにおいても同様な動きを指摘できる。西村系鍋Aの定型化とともに楠井系鍋Aが出現・定型化しており，断片的な事例ではあるが集落遺跡では楠井系鍋Aが主体をなしている。しかしその反面，須恵器捏鉢・壺・甕といった器種については十瓶山窯（西村遺跡）がほとんど唯一の在地生産地である。

土師質土器皿　皿ＢⅡ－3，ＢⅢ－2・3，ＣⅠがある。生産地の西村遺跡では，皿ＢⅡ形式はみられずＢⅢ形式のみで構成されている。空港跡地ＳＤf16下層での皿ＢⅡ－3（**259**）は非西村産であろうか。皿ＣⅠは空港跡地，東山崎・水田では主体をなす形式である。

土師質土器杯　杯ＤⅡ－3・4・5，ＥⅠ－1・2がある。西村遺跡ではＤⅡ－4・5が，空港跡地遺跡ではＤⅡ－4が多い。いずれもⅡ－1期よりも口径が縮小し，浅い器体となっている。両遺跡での型式の微妙な違いは，わずかな時期差に起因するのか，遺跡の性格（生産地・消費地）の違いによるのか，良好な資料の蓄積を待って改めて検討する必要があろう。東山崎・水田遺跡では，杯ＥⅠ形式の底部糸切りが静止のものと回転利用の2者がある。

須恵器椀　椀ＡⅡ－7・8・9がある。ＡⅡ－7は集落遺跡で例外的にごく少量みられるだけで，流通・使用の時間差もしくは混入とみられる。大半を占めるのはＡⅡ－8であり，内外面ともにヘラ磨き調整は施されなくなり，さらに浅手な器体となる。内面の板ナデ調整は，工具原体が木目が浮き出て，ハケ目状になったものを多用するようになる。

須恵器捏鉢　十瓶山窯産の鉢Ｄ－4，Ｅ－3がある。西村遺跡では当該期の資料に鉢Ｄ形式がなく，既に生産されていない可能性があり，やはり混入と思われる。

土師質土器鍋　西村系鍋Ａ・Ｂと楠井産鍋ＡⅠがある。西村系鍋Ａは，外反する頸部の屈曲が明瞭になる。口頸部と底体部は叩き成形され，内面には板ナデ調整が施される。須恵質焼成品が少量あり（第429図**206**），依然として須恵器系技術との強い関わりが認められる。楠井系鍋ＡⅠは，西村系よりも強く屈曲する口頸部をもち，口縁端部や体部外面に粗いハケ目調整が多用されるのが特徴である。底部は叩き成形であるが，口頸部は叩き成形かどうか明確でない。

土師質土器足釜　足釜ＢⅠがある。楠井系足釜ＡⅠは，鍔部端面がハケ目調整によって明確な面をなすものであり，体部中位から底部にかけて叩き成形される。空港跡地ＳＤf16下層出土の足釜（**286**）は，口縁端部の形態や脚基部の接合角度が楠井系とは異なり，畿内（山城）にみられる瓦質足釜に近い形態をもつ。

須恵器広口瓶　壺Ｃ－4がある。また西村遺跡Ｎ14－ＳＫ03では，体部外面に縦方向のヘラ磨きを施した仏花瓶形の壺が出土しているが，これは空港跡地遺跡ＳＤf16（**484**），三豊郡豊中町延命遺跡で確認できる。

須恵器甕　甕Ｃ－4・5がある。空港跡地ＳＤf16下層では甕Ｃ－1が出土している（**292**）が，これは細片で摩滅が著しいことから，この型式の長期間の使用もしくは混入の可能性を考慮すべきであろう。

その他　他地域からの搬入品がかなり多い。和泉型瓦器椀（Ⅲ－2・3期）・皿，吉備系土師質土器椀・鍋（Ⅲ－1期），東播系須恵器甕，白磁Ⅴ－1・3類碗，青白磁合子，青磁Ⅰ－7類碗があり，特に瓦器椀は東山崎・水田遺跡では椀形態の主体を占めるようにみえる。ただし，Ⅱ－1期の土器群に伴出する瓦器と年代的に重複するため，長期の使用もしくは混入の可能性も考えられ，直ちに使用の実態

を示すのかは資料の増加を待って検討を重ねる必要がある。

(8) 中世Ⅱ－3期

西村遺跡S16－SK16出土土器の一部，空港跡地遺跡SDf16中層・SDf19，六条・上所遺跡SB03，下川津遺跡SDⅢ71東部の出土土器が当該期にあたる。また空港跡地遺跡SDf25出土土器も当該期の所産を主体としていると考える。この期は，Ⅱ－2期での形式の組成が踏襲されており，大きな変化に乏しい。ⅢBⅢ・杯DⅡ・椀AⅡ形式の口径の縮小化と，椀AⅡ形式の浅手化と調整の粗雑化傾向が指摘できる。

土師質土器皿　ⅢBⅢ－3・4，CⅡがある。ⅢBⅢ形式は大半がBⅢ－4である。口縁部はかなり短く立ち上がるようになり，底部切り離しの際に半周～1周程度口縁部F端にヘラを当てている個体がしばしばみられる。下川津遺跡SDⅢ71東部出土のⅢBⅢ形式5点のうち，ヘラ切りの方向はR4点，L1点であり，丸亀平野でみられた地域色が解消されつつあることを窺わせる。ⅢCⅡは，空港跡地遺跡でのみ出土しており，極めて限定された単位（集落）での地域色を示す形式である。粘土円盤の外縁を強い回転ナデで窪ませ，その外側の粘土を挽き出して口縁部とする。このため，見込みと口縁端部との高さが極めて近くなっている。また，見込みには糸切り痕のみられるものがあり，ロクロ上の粘土円柱から連続して製作していたものと推測される。口径は漸移的で，ヘラ切りのBⅡよりも法量の幅が大きく，まとまりに欠ける。これはCⅡの粗い作巧とも関連しよう。

土師質土器杯　杯DⅡ－5・6，EⅢ－1・2・3・4がある。杯DⅡは，高松平野ではDⅡ－5のみであり，丸亀平野ではDⅡ－5・6がほぼ同量存在し，後者の方が若干小振りなものを含むようである。しかし資料的制約のため，これが微妙な時期差を示すのか，地域差を示すのかはわからない。杯EⅢは，土師質土器ⅢCⅡ形式と同じ胎土・焼成であり，空港跡地遺跡のみで集中的に出土する形式である。口縁部の回転ナデの後に，底部外縁から体部上半にかけて回転ナデ調整を施しており，体部形態にかかわらず同じナデの手法を用いている。

須恵器椀　椀AⅡ－8・9がある。AⅡ－9は高台が極めて矮小化しており，また粗雑に張付けられている。体部下半にはヘラ切り時の底部外縁の屈曲が残されており，杯に高台を貼付けしたようなプロポーションになる。

須恵器捏鉢　十瓶山窯産の鉢E－3・6がある。

土師質土器鍋　鍋AⅠがある。空港跡地では楠井系統の鍋AⅠが多いが，体部と口頸部に叩きを施したやや硬質な焼成の西村系統の鍋AⅠも極めて少量出土している。また，楠井系統であるが楠井窯ではみられなかった肉厚の口頸部をもつものや，吉備系土師質土器鍋に近い形態をもつものの底部には叩き成形がみられ在地的特徴が看取できるものなどがある。下川津遺跡でも楠井系鍋AⅠとともに，口縁端部をツマミ上げるか端部を丸く収め，ハケ目調整をほとんど行わず叩き成形によらない在地色の強い鍋Aがみられる（第440図**193**）。Ⅱ－2期に続く生産地の拡散状況を示すかの如くである。

土師質土器足釜　空港跡地遺跡では楠井系足釜BⅠがある。また下川津遺跡では楠井系とは異なる足釜Bがみられ（第440図**197・198**），やはり地域色が看取できる。

須恵器甕　十瓶山窯産の甕C－5がある。

その他　搬入品には，国産土器・陶器として和泉型瓦器椀（Ⅲ－3～Ⅳ－1期），吉備系土師質土器

椀（Ⅲ－２期），東播系須恵器捏鉢，常滑窯産陶器捏鉢・甕，亀山窯産須恵器甕がある。また輸入磁器として，白磁Ⅳ類碗・Ⅴ類碗・Ⅸ類皿，龍泉窯系青磁Ⅰ－5a碗・Ⅰ－5b碗があり，青磁碗の増加と口禿の白磁Ⅸ類の出現が認められる。

(9) 中世Ⅱ－４期

西村遺跡Ｓ33－ＳＫ01，空港跡地遺跡ＳＤf16上層・ＳＴf02，前田東・中村遺跡ＳＸ04，川津二代取遺跡ＳＤ28の出土土器が当該期の資料である。Ⅱ－２期以来の形式の組成が踏襲され，大きな変化は読み取れないが，土師質土器皿ＢⅢ・杯ＤⅡ形式の口径縮小化がさらに進み，須恵器椀ＡⅡが最終型式になるとともに須恵器杯Ｄが新たに出現することが明確な変化として指摘できる。

土師質土器皿　皿ＢⅢ－３・４・５，ＣⅡがある。皿ＢⅢ形式で主体をなすのは，ＢⅢ－４である。またＢⅢ－５は，空港跡地遺跡Ⅲ－１区ＳＤf16の最終埋没層である上層から１点のみ出土していることから，次のⅡ－５期の混入の可能性を否定できない。ＣⅡ形式は前代同様，空港跡地遺跡のみに集中して認められ，周辺遺跡では確認できない。

土師質土器杯　杯ＤⅡ－５・６・７，ＥⅢ－２・３・４がある。ＤⅡ形式で量的に多いのはＤⅡ－６である。口径がさらに縮小し，器壁も薄手になっている。西村Ｓ33－ＳＫ0lでのＤⅡ－７は，底部が丸く若干深手の形態をもっており，次のⅡ－５期の西村遺跡の基準資料のＤⅡ－７とも異質な特徴をもっているため，別の型式として認識した方がよいかもしれない。ＥⅢ形式は空港跡地遺跡のみに集中する。また，上記以外に前田東・中村遺跡では体部が直立気味の杯ＤⅢがみられるが，これは寒川・大内平野で普遍的な形式であり，当遺跡の地理的な位置関係に規制されてもたらされたと思われる。

須恵器椀　椀ＡⅡ－９・10がある。

須恵器杯　杯ＤⅡ－1が新たに出現する。

須恵器捏鉢　鉢Ｅ－３・６がある。Ｅ－３には，体部内面に粗いハケ目調整を施すものがみられる。

土師質土器鍋　鍋ＡⅠがある。西村系統と楠井系統の２者が依然として認められるが，西村系鍋Ａは内面と口縁部端面にハケ目調整を施しており，口頸部の外反がより強くなって楠井系への近似傾向を強める。ただし口頸部の叩き成形は依然として保持している。楠井系鍋ＡⅠは，Ⅱ－３期から大きな変化はない。

土師質土器足釜　足釜ＢⅡがある。鍔端部に平坦面を作らなくなるもので，これは器面調整が専ら横ナデないし板ナデになり，器表を掻き取るようなハケ目調整が行われなくなったことと関連しよう。

その他　国産の搬入品には，吉備系土師質土器椀（Ⅲ－２期），東播系須恵器捏鉢・甕，亀山窯産須恵器甕，備前窯産陶器甕がある。また輸入磁器としては，白磁Ⅳ類碗，龍泉窯系青磁Ⅰ－5b碗がある。瓦器椀の搬入は，この期には終わっているようである。

(10)中世Ⅱ－５期

西村遺跡Ｓ５－ＳＫ01・Ｎ６－ＳＢ03，空港跡地遺跡ＳＤf48下層・ＳＫc77，百相坂遺跡ＳＸ08，薬王寺遺跡ＳＥ03，川津二代取遺跡ＳＫ05，飯野東二瓦礫遺跡ＳＰ459,龍川四条遺跡Ａ地区ＳＰ01，郡家原遺跡ＳＰ45出土土器が当該期の資料である。須恵器椀ＡⅡ形式の消滅と須恵器杯Ｄ形式

の盛行がこの期の特徴である。

土師質土器皿　皿ＢⅢ－４・５がある。ＢⅢ－５は口縁部の立ち上がりが極めて短い，コースター状の形態を呈するものである。

土師質土器杯　杯ＤⅡ－７・８がある。口径はさらに縮小化し器壁も薄く，やや深手のもの（ＤⅡ－７）と浅手で体部の外傾が著しいもの（ＤⅡ－８）の２者がある。ことに後者は皿との形態的区分が難しいが，杯ＤⅡの最終型式として捉えておく。技法上の特徴として，口縁端部の回転ナデ調整が体部の回転ナデ調整に先行することがある。このため，口縁部外面直下に体部ナデによる弱い段がつくことがある。このナデの手順はⅡ－４期の杯ＤⅡ形式の一部にも認められるが，当該期から明瞭に認められるようになり，中世Ⅲ期の土師質土器皿のナデ手法に継承されていく。

須恵器杯　杯ＤⅡ－２がある。土師質土器杯よりも大振りな法量をもつ。

須恵器捏鉢　鉢Ｅ－４・５がある。焼成はかなり軟質になり，器表が弱い還元状態にあるのにとどまる。また，体部の叩き成形は行われなくなり，器面調整として粗いハケ目ないし板ナデが施される。口縁部のナデの状況をみても，明らかに本来伴っていた回転調整への依存度が低下しており，十瓶山窯産須恵器としては最末期の様相を示しているといえよう。

土師質土器鍋　鍋ＡⅠ・ＡⅡ－１・２がある。生産地系統の識別が難しいが，楠井系鍋Ａでは意図的な粗いハケ目調整を施さないＡⅡが出現する。

土師質土器足釜　足釜ＡⅡ，ＢⅡがある。足釜ＡⅡは依然としてハケ目調整を多用するが，ＢⅡでは鍋同様にハケ目調整が次第にみられなくなる。なお，この期でのＡⅡの存在から，型式学的に先行するとみられるＡⅠはⅡ－４期以前に出現していたことになる。

須恵器甕　西村遺跡Ｎ５－ＳＫ01で十瓶山産甕Ｃ－５が１点のみ確認できる。しかし，既にⅡ－４期から貯蔵具は搬入品（亀山・備前）に移行しつつあると捉えるのが妥当であり，この期まで生産が継続していたのかは，資料の蓄積を待って改めて検討していくことが肝要である。

その他　搬入品として，白磁Ⅸ類皿，龍泉窯系青磁Ⅰ２類碗，東播系須恵器捏鉢，備前窯産陶器擂鉢（Ⅲ期）がある。資料不足であるが，おそらく調理・貯蔵具については在地産とともに搬入品がかなりの比率を占めているものと考えられ，中世Ⅲ期には搬入品と在地製品が相互補完にある流通構造が明確化するようである。

(11)想定される暦年代

搬入品の組成と年代観　以上述べてきた在地土器の編年に立脚して各期の暦年代を考察するが，在地土器のみで年代を想定することは極めて困難である。従来の方法と同じく搬入品に頼らざるを得ないことは，いうまでもない。しかし問題になるのは，搬入品がどのような出土状況にあるのか，ということである。つまり，「混入」として捉えるべきなのか，長期間の使用の後の廃棄とみるべきなのか，あるいは入手から廃棄が在地土器と同じく短期間のうちに行われたとみるべきなのか，認識の違いがそのまま想定年代の微妙なずれとなって表れてくるのである。ただ，この点では全ての資料の検討にまで至っていないので，出土状況からの峻別は現段階では困難である。

当然のことながら搬入品の年代観＝在地土器群の暦年代ではあり得ず，在地土器に立脚した各「期」に伴出した搬入品が，前後の「期」との対比でどのように整合するのか整理することが議論の前提とな

る。

こうした前提に立ち，各期に伴出する搬入品で年代観がある程度特定できるものを改めて示す。

Ⅰ－1期　楠葉産黒色土器B類椀（Ⅸ期），近江産緑釉陶器椀，篠窯産須恵器捏鉢，**東播系須恵器椀(Ⅰ－1期)**

Ⅰ－3期　和泉型瓦器椀（Ⅱ－1・2期），楠葉型瓦器椀（Ⅰ－3期），京都系土師器皿（平安京Ⅳ期新～Ⅴ期古），東播系須恵器皿・椀・捏鉢・甕（Ⅰ－2期），吉備系土師質土器椀（Ⅰ－3期），白磁Ⅳ・Ⅷ類碗

Ⅱ－1期　**和泉型瓦器椀（Ⅱ－3～Ⅲ－2期)**

Ⅱ－2期　**和泉型瓦器椀・皿（Ⅲ－2・3期)，吉備系土師質土器椀・鍋（Ⅲ－1期)**，白磁Ⅴ－1・3類碗，青白磁合子，青磁Ⅰ－7類碗

Ⅱ－3期　和泉型瓦器椀（Ⅲ－3～Ⅳ－1期)，**吉備系土師質土器椀（Ⅲ－2期)**，白磁Ⅳ・Ⅴ類碗・Ⅸ類皿，龍泉窯系青磁椀Ⅰ5a・b類碗

Ⅱ－4期　吉備系土師質土器椀（Ⅲ－2期)，東播系須恵器捏鉢（Ⅲ－1期)，**備前窯産陶器甕(Ⅲ期前半)**

Ⅱ－5期　**東播系須恵器捏鉢（Ⅱ－1～Ⅲ－2期)，備前窯産擂鉢（Ⅲ期)**，白磁Ⅸ類皿，龍泉窯系青磁Ⅰ－2類碗

太字で示したのが最も新しい年代観を示す土器・陶磁器である。最新の年代観を示すものと他者との年代観の開きが大きいのは，Ⅰ－1期であるので，この点をいま少しみてみる。Ⅰ－1期の近江産緑釉陶器と篠窯産須恵器は，想定年代が10世紀後葉～11世紀初頭であり，東播系須恵器椀の11世紀第3四半期との隔たりは著しい。同様の緑釉陶器・篠窯産須恵器は，Ⅰ－1期よりも先行する前田東・中村遺跡E区SD19，讃岐国分寺跡SK25・26（古代Ⅲ期）でみられるため，これについては先行期の遺物の混入と捉えたい。楠葉型黒色土器椀は11世紀中葉頃に位置付けられるもので，東播系須恵器椀よりもわずかに先行する年代観を示している。大宰府条坊跡第88次SE040では，山本信夫氏編年ⅩⅠ期の土器群の中に十瓶山窯産須恵器鉢D－1型式がみられるため，Ⅰ－1期は11世紀中葉を含む幅で捉えるのが妥当であろう。その他の期についても若干の時期幅をもっているが，時期幅の上限＝「期」の上限とみるかどうかは，直前の「期」の伴出資料との比較の中で考えなければならないであろう。

各期の想定年代　一応以上のような認識で各期を捉えた上で，あえて暦年代を示す。なお暦年代付与の問題点については，中島恒次郎氏が指摘しており（中島1998），今後の資料の増加による各「期」の一層の実態化と，搬入品との対応関係の整理が進んだ時点で改めて検討すべき課題といえる。

Ⅰ－1期　11世紀中葉～第3四半期

Ⅰ－2期　11世紀第4四半期

Ⅰ－3期　12世紀第1四半期～第2四半期

Ⅱ－1期古相　12世紀第3四半期

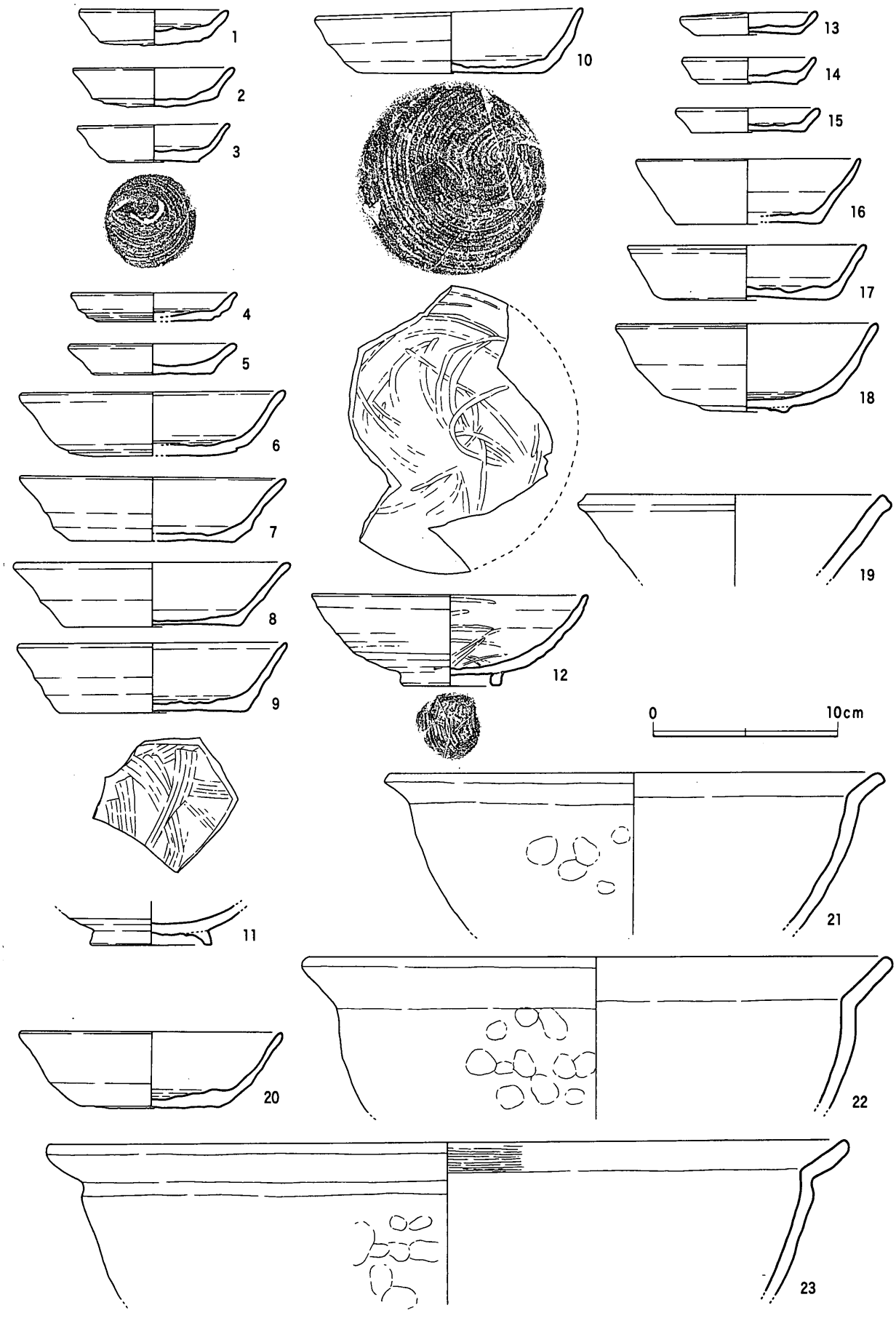
　　新相　12世紀第4四半期

Ⅱ－2期　13世紀第1四半期

Ⅱ－3期　13世紀第2四半期～第3四半期

Ⅱ－4期　13世紀第3四半期～第4四半期

Ⅱ－5期　13世紀末葉～14世紀前葉



第444図　三豊平野における特徴的な中世土器（1/3）

片桐編年との相違は，須恵器椀ＡⅡ形式の消滅時期に最もよく表れている。椀ＡⅡは片桐編年では13世紀第１四半期まで続くとされており，以後は在地産土器椀ではなく木椀と輸入磁器碗で椀形態が賄われるとしている。その根拠は，下川津遺跡ＳＤⅢ71や延命遺跡ＳＫ18の出土土器における搬入品と椀ＡⅡ形式との「共伴」にあるが，在地土器での検証が十分でなく搬入品の示す暦年代に専ら依拠した併行関係の設定にやや問題があるように見受けられる。また，従来から議論のあった西村１号窯の操業年代であるが，杯ＤⅡ形式や椀ＡⅡ形式の組列からみる限り，鳥羽南殿の造営期である応徳３年(1086）まで引き上げることは難しい。このことは型式認識こそ異なるものの，大山真充氏の指摘した年代観と一致する。また松井忠春氏が軒瓦の文様系譜から想定した，12世紀初頭という年代観を含むこととなる。

７．三豊平野における様相

高松平野と丸亀平野，また生産地の西村遺跡（十瓶山窯）の中世土器を，細かな地域色や遺跡間偏差をあえて捨象して編年案を提示してきた。この地域でのパターンの併行関係の想定が可能であったのは，土師質土器皿・杯の様相が形態・法量・技法ともに概ね近似した属性をもっていたからであり，十瓶山窯産須恵器椀ＡⅡ形式での検証ともうまく整合した。しかし，以下に検討する三豊平野での土器様相は，高松・丸亀平野とはかなり異なる内容をもっており，土師質土器皿・杯でのパターンの併行関係の想定がかなり困難である。その意味でまず，それぞれの地域でのパターン認識をまず行う必要があり，その上で十瓶山窯産須恵器の検証作業を行い他地域との併行関係を議論すべきである。三豊平野では，野中寛文氏による先駆的な編年案の提示（野中1987）以降は延命遺跡出土土器がまとまった内容を示すにとどまり，現段階では編年案の提示は難しい。このため以下では，ある程度地域内での在地土器の変遷を念頭に置きつつ，高松・丸亀平野での様相の違いに重点を置いた土器様相の素描を行うのにとどめたい。ただし，ごくわずかな高松・丸亀平野産もしくはその系統の皿・杯と在地土器との共伴事例で併行関係を想定したため，若干の時期差を内包する可能性があることを付言しておく。

延命遺跡八反地地区ＳＫ18，ＳＤ47・51出土土器を検討の対象とする。これらの資料の中でＳＫ18とＳＤ51出土土器は，土師質土器皿・杯に口径の差異が明確に読み取れる。皿はＳＫ18では８cm台が主体（ヘラ切り・糸切りあり）であり，ＳＤ51では７cm台が主体（糸切りのみ）で５～６cmの極小型品もある。また杯はＳＫ18では13.5～15.0cmの幅に概ね収まり（ヘラ切り・糸切りあり），ＳＤ51では12cm台である（糸切りのみ）。高松・丸亀平野での事例から，経験的にはＳＫ18→ＳＤ51が推測できるが，これは後述する西村系須恵器椀の変遷観とも一致する。この想定が一応妥当なものであれば，ＳＤ47出土土器は，両パターンの混在した内容をもっているといえる。

高松・丸亀平野との併行関係を考える材料は決して多くないが，土師質土器杯ＤⅡ形式と十瓶山窯産鉢Ｅ形式の存在が注目できる。①ＳＫ18で杯ＤⅡ－２型式が伴出（第444図**6**），②ＳＤ51で鉢Ｅ－３型式が伴出（第444図**19**），③ＳＤ47で杯ＤⅡ－３型式が伴出（第444図**20**），の３資料である。①・③は中世Ⅱ－１期，②は中世Ⅱ－２～４期に各々該当する。さらに在地（三豊平野）系統とみられる土師質土器皿はヘラ切り・糸切りともにほぼ同一形態をとるが，この口径を高松・丸亀平野と対応させると，ＳＫ18出土例は中世Ⅱ－１期に，ＳＤ51出土例は中世Ⅱ－２・３期に近似する。和泉型瓦器椀や東播系須恵器捏鉢・甕，常滑産陶器甕の型式も，この対応関係と矛盾しない。現段階では以上のよ

うな認識で併行関係を捉えておくこととし，以下に高松・丸亀平野との相違点を指摘して地域色を考える。

皿・杯の底部切り離し手法　延命遺跡では，既に中世Ⅱ－1期（ＳＫ18）から土師質土器皿・杯の多くに回転糸切りが認められる。皿ではヘラ切りがむしろ多いが，杯では西村系の搬入品とみられるもの以外，ほとんど糸切りのみで占められる。中世Ⅱ－2・3期（ＳＤ51）には皿も糸切りのみで構成されるようになる。今日までの知見では，糸切り手法の普遍化が高松平野よりも徹底しており，しかもその時期が若干早いことになる（高松平野ではⅡ－2期以降で，あくまでヘラ切り主体）。

在地産土師質土器椀の存在　片桐氏が指摘するように（片桐1990・1994），体部外面下半に指頭圧痕が顕著な在地産土師質土器椀が存在する（片桐氏のいう「西讃型」）。Ⅱ－1期に多くみられ，Ⅱ－2・3期には存在しないことから，より先行する系譜の追求が課題である。

在地産須恵器椀の存在　延命遺跡で「西村産瓦質土器椀」として報告されているものは，実見したところ全てが西村遺跡産とは考えられない特徴をもっていることが判明した。Ⅱ－1期では，見込みの斜放射状の板ナデ原体が粗く器面を引っ掻くように施されるもの（第444図11）や，一見すると須恵器椀ＡⅡ－6型式に近似するが，体部外面に回転ヘラ磨きがないこと，体部下半から底部にかけての広い範囲をヘラ削り調整することなど，椀ＡⅡ－6とは明らかに異質な属性をもつもの（第444図12）がある。またⅡ－2・3期には，一見椀ＡⅡ－9型式に近いが，底部外面に斜放射状の板ナデ（西村産では通常内面に施すもの）を施す点で異なるもの（第444図18）がある。そしてこれらに共通するのが，回転ナデ調整1周分が幅広で粗いために器面の滑らかさに欠ける点であり，さらに第444図12底部外面には糸切り痕があることから，詳細に観察すれば西村遺跡産とは明確に識別できるものである。

しかし反面，形態的には第444図12・18のように西村遺跡産にむしろ近似するものが多く，また技法の組み合わせや施し方（製作集団のくせ）に違いがあるものの，個々の技法のバリエーションは西村遺跡産須恵器椀に通有のものであることに注意する必要があろう。つまり延命遺跡の須恵器椀は，非西村産であるにもかかわらず，形態的特徴や技法の種類には西村産須恵器椀との一定度の関わりが想定できるのである。少なくとも先述した土師質土器椀や周辺地域の他の土器椀からは，この須恵器椀の系譜の説明が困難であることは確かであり，十瓶山窯（西村遺跡）と技術基盤を同じくする在地窯（換言すれば十瓶山系窯）の存在が確実視される(1)。中世Ⅱ－1期の前後は，吉野川中・下流域において十瓶山窯系の甕窯が成立する時期であり（佐藤1996・1998），同地域で煙管状窯による須恵器椀ＡⅡ形式近似の椀の生産も近年確認されるに至った（徳島県埋文センター1998）。また，岡山県亀山窯が成立するのもこの時期であり，その成立にあたっては間接的ながら十瓶山窯との密接な関わりが想定できる。以上のような，十瓶山窯の技術拡散の一環として，延命遺跡の須恵器椀が位置付けられる。

特徴的な土師質土器鍋の存在　Ⅱ－1期とⅡ－2・3期の混在資料とみられるＳＤ47出土土器には，体部外面がほとんど無調整で指頭圧痕が顕著な土師質土器鍋がみられる（第444図21～23）。これはＳＫ18出土土器にもみられることから，Ⅱ－1期には出現していたことになる。技法的には西村系とも楠井系とも異なり，在地系統の鍋とみて間違いなかろう。また，Ⅱ－2・3期には瓦質焼成の鉄鍋模倣品（鍋Ｂ型式）がみられるのも特徴的である。

8．中世後半への見通し

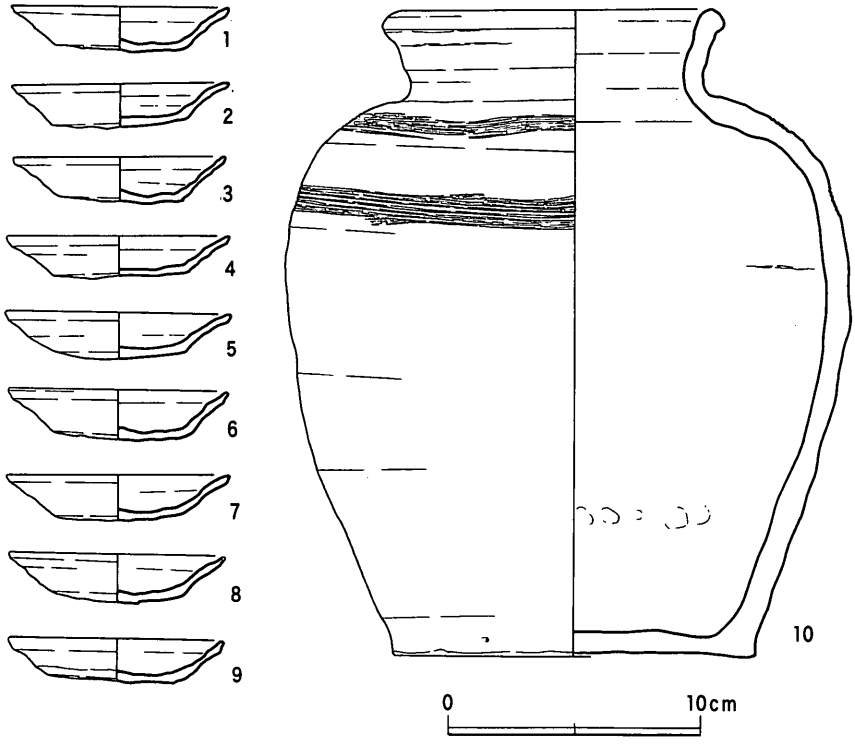
(1)「口縁部→体部ナデ手法」の土師質土器皿

中世後半の土師質土器皿口縁部には，端部外面よりやや下った位置に段状のロクロ目を施す一群が顕在化している。今回報告した空港跡地Ｆ地区においても，かなりの割合でこのタイプの皿が認められた。この段付近の調整痕を観察すると，口縁端部の回転ナデが先行し，体部上端の回転ナデがこれを下側から覆うように施されており，この調整の境が段状にみえることがわかる（第445図）。これを「口縁部→体部ナデ手法」と仮称する。これは，Ⅱ－４期の前田東・中村遺跡ＳＸ04出土の杯ＤⅡ形式に既にみられ，以後，中世後半の高松平野では比較的普遍的な杯・皿類の調整手法として認められる。

この手法は，胎土・色調を踏まえれば，峻別困難な中世後半の土師質土器皿の系統把握の指標として用いることができると考える。その意味で空港跡地Ｃ地区ＳＫc74出土土器は，「口縁部→体部ナデ手法」の土師質土器皿の一括埋納資料として注目される（西岡1996）。土師質土器皿は口径8.5㎝前後であり，口縁部中位で外側に大きく屈曲・外反し，口縁端部に直立ないし外傾する面をもつ。胎土は砂粒をさほど含まない精良なもので，黄白色に発色する。回転ナデ調整→回転ヘラ切り（Ｒ）後に，見込みにロクロ回転を利用しない強いナデが施されており，これによって底部は若干突出して丸底気味になる。以上の特徴を共通してもつ。埋納された備前焼壺は，間壁編年Ⅳ期前半の所産とみられる。

これに先行するとみられる個体としては，ＳＤf48下層出土の土師質土器杯（**1238～1243**）がある。口径９㎝台であり，体部の外傾度が弱いため杯ＤⅡ－８型式として分類したが，胎土の共通性から直接的な系譜関係があるものとみられる。伴出した足釜は楠井ＢⅡ・ＢⅣ類であり，14世紀前半～中葉を主体として15世紀前半を下限とすることが考えられる。

また後出する個体としては，ＳＤf57南辺部出土の土師質土器皿（**1531・1532**）がある。内弯する短い口縁部をもつ。時期の特定は難しいが，16世紀中葉には埋没している。



第445図　空港跡地遺跡SKc74出土遺物（1/3）

以上から，大雑把にはＳＤf48下層（杯）→ＳＫc74→ＳＤf57という前後関係が想定され，器体の浅手化（口縁部の縮小化）という方向での変化が考えられる。しかし一括資料に乏しいため，今後の事例の増加を待って改めて検討する必要があろう。

(2) 楠井産土器群の年代観

今回報告した資料中には，国分寺楠井遺跡で生産されたと考えられる土器がかなり認められる。個々の資料については第３章を参照されたいが，指摘できるのが楠井で提示した編年案との齟齬である。例えばＳＥf02上層出土擂鉢では，細別型式で楠井ＡⅡ－１類（**1647**）・ＡⅢ－１類（**1644**・**1645**）・ＢＩ類（**1646**）が出土しており，足釜では楠井ＢⅣ類（**1653**）・Ｃ類（**1654**・**1655**）が認められる。これは，楠井編年（佐藤1995）の第Ⅱ期第２段階・第３段階，第Ⅲ期に該当する形式が混在していることになる。ＳＥf02と繋がるＳＤf57南辺部・東辺部出土土器も，これと同様な組成である。このような状況を，生産地での形式組成の認識に問題があったとみるのか，あるいは複数時期の混在資料とみるのかが問題となる。

詳細は機会を改めて検討したいが，これは見かけ上の「共伴」であり，実態としては複数時期の混在した資料とみるのが妥当と考える。ＳＥf02上層では白磁碗・皿（森田Ｅ群），青磁碗（上田Ｂ・Ｄ類）染付皿（小野Ｃ群），備前焼擂鉢（間壁編年Ⅲ期・Ⅳ期後半）・壺（Ⅴ期），亀山焼甕（草戸Ⅳ期）など，14世紀から16世紀に及ぶ時期幅の搬入品が認められ，人為的な埋め戻し層であることから廃棄の一括性はあるとみられるものの，使用の共時性という点ではかなり不安定な土器群と評価せざるを得ない。

また，擂鉢の使用痕（摩滅状況）を観察すると，ＳＤf57東辺部出土の楠井産擂鉢は器面が剥落して卸し目が不明瞭になっているものがみられる（**1574**・**1575**・**1577**）が，備前焼擂鉢にも摩滅が著しい事例がある（**1579**）。両者の焼き上がりの堅さを考慮すると，楠井産擂鉢は短期間で摩滅が進行したとみられるのに対し，備前焼はこれを大きく上回る長期間の使用を経なければ，著しい摩滅には至らないと考えられる。つまり，備前焼擂鉢の伝世すら考えられる長い使用期間の間に，楠井産擂鉢は頻繁に使用・廃棄が繰り返されたという可能性を示唆する。勿論，これはより厳密に検証される必要があるが，搬入品の時期幅と，楠井産擂鉢の短期使用を併せると，生産地での共伴関係を優先させるべきと考える。

9．おわりに

1990年代に得られた中世考古学の多くの成果をより着実に深化させていくためには，やはり一度「原点」に立ち返り，土器編年の再検討を行う必要性があるとの認識から，長々記述してきた。しかし，基準資料の取り扱いや，土器群における系統の峻別が不徹底に終わったことは否めず，地域性を考慮したより厳密な作業の継続が必要であろう。

註 (1) 中・西部瀬戸内や土佐では，回転糸切りによる椀が主体であり，讃岐（西村遺跡）での在り方がむしろ特異性をもって把えられるべきかもしれない。ただ，調整手法の属性には西村型土器椀との関連性が強く窺える。

第２節　中世区画遺構の変遷

１．はじめに

ここでは第１節の在地土器編年にもとづき，空港跡地遺跡Ｆ地区とその周辺における中世区画遺構の変遷を，可能な限り細分化して検討する。より限定された時期幅での区画遺構の在り方を明確化させることで，遺跡の所在する林郷もしくは林庄という一地域の村落形態を復元する前提となる資料を提示することを目的とするからである。このため，各区画単位の個別的な変化とともに，区画相互の関連についても留意しながら記述を進めていく。各遺構の時期判定の根拠については第３章第３・４節において報告・記述しているので，ここでは一部を除いて繰り返さない。

なお，讃岐地方における中世集落の建物群構成は，既に森格也氏による類型化作業がある（森1993)。以下の検討は建物群の類型化を目的とするものではなく，時期別の動態の中で個別の区画ないし建物群の特性や格差を明確化することが目的であるが，他者との相対的な比較の際の基準の一つとして森氏の類型設定を適宜参考にしていきたい。

２．時期別の遺構変遷

(l) 中世Ⅰ－３期～Ⅱ－１期（12世紀第１四半期～第４四半期)

Ｆ地区では区画２が出現し，隣接するＪ地区でも当該期の建物群（区画７とする）が検出されている。ともに溝や柵列などの構造的な区画施設をもたず，「区画」と呼称することに躊躇を覚えるが，中世Ⅱ－２期以降に区画を伴う区画１と隣接し，排他的で継続的な土地占有が明確になるとみられることから，便宜上「区画」と呼称しておく。

区画２ではＳＢfl7を最大として，ややこれよりも規模の小さなＳＢfl3や１×２間の極小規模のＳＢfl8・21から構成される。分布範囲は東西35ｍ程度である。建物はいずれも側柱建物であり，建物床面は土間とみられる。ＳＢfl7が主屋と考えられるものの他者との違いは専ら規模であり，構造的な差異を伴っていないのが重要である。柱穴出土遺物は中世Ⅰ－３期と考えられ，森格也氏の類型ではⅡ－ｅ型にあたる。

区画７では，建物群は２つの小群に細別できる。区画７－ａは，四面庇中型建物ＳＢj09を主屋として，その北側に小規模な側柱建物（ＳＢj07）と庇付の総柱建物（ＳＢj04）がみられる。分布範囲は南北25ｍ程度である。規模・構造の属性から中心建物が明確であり，機能分化した建物構成がみられる。ＳＢj04は床面積が20㎡以下であり，倉庫と推測される。森氏のⅡ－ｅ型にあたるが，既述したように多様な建物構成が区画２とは異なる。区画７－ｂは，小規模な建物１棟のみ（ＳＢj03）で構成される。遺物から当該期と判断したが，あるいは中世Ⅱ－２～４期の区画１－ｂに含めた方がよいかもしれない。出土遺物から，ＳＢj03・07についてはⅠ－３期に比定でき，ＳＢj09についてはⅠ－３～Ⅱ－１期と幅をもたせて理解しておく。

(2) 中世Ⅱ－２～４期（13世紀第１四半期～第４四半期前半)

区画１が出現し，前代からの小規模な建物群が周囲に展開する形態となる。区画１は東西125ｍ，南北108ｍの範囲が幅３ｍ前後の大溝（ＳＤf16・17）で囲繞されており，北・東・南の３辺が坪界線と一致する。南辺部の中央に幅２ｍ前後の陸橋部，また南西隅の屈曲部には陸橋状の底面の盛り上がりがある。区画溝西辺部は，先行する坪界線上の溝（ＳＤf37）を西側に20ｍ程度付け替えて開削されている。おそらくその際にＳＤf31～33・36などのⅡ－１期以前の小溝も人為的に埋め戻しているようである。区画内には中央部に建物群が展開し，その周囲を大溝や小溝でさらに区画している。したがって区画溝は，内郭と外郭に分化したかのような形態を呈する。区画１－ａ～ｃの外側には建物の存在しない空閑地が広がり，外側の区画溝に至る。建物は中心の区画１－ａに集中し，東側の区画１－ｂ，西側の区画１－ｃには小規模な建物と，復元不可能なピット群が少数存在するのみである。つまり，３つの小区画は等質的なものではなく，区画１－ａを中心とした補完的な機能が区画１－ｂ・ｃに付与できるのではないかと考えられる。区画１－ａの規模は，東西36ｍ，南北35ｍを測る。

次に具体的な遺構の変遷を検討する。ほぼ１町の外側区画溝は，再掘削を示すような土層堆積状況ではなく，滞水状態（下層）→若干の流水状態（中層）→周囲からの流入土による埋没（上層）という過程が想定できる。出土遺物から，下層は中世Ⅱ－２期，中層はⅡ－３期，上層はⅡ－４期にあたり，緩やかに埋積していったことがわかる。区画１－ａ周辺の溝は，中世Ⅱ－２期がＳＤf18・22・24，中世Ⅱ－３期がＳＤf18・19・24，中世Ⅱ－４期がＳＤf18・25・24という変遷を辿ったと考えられる。

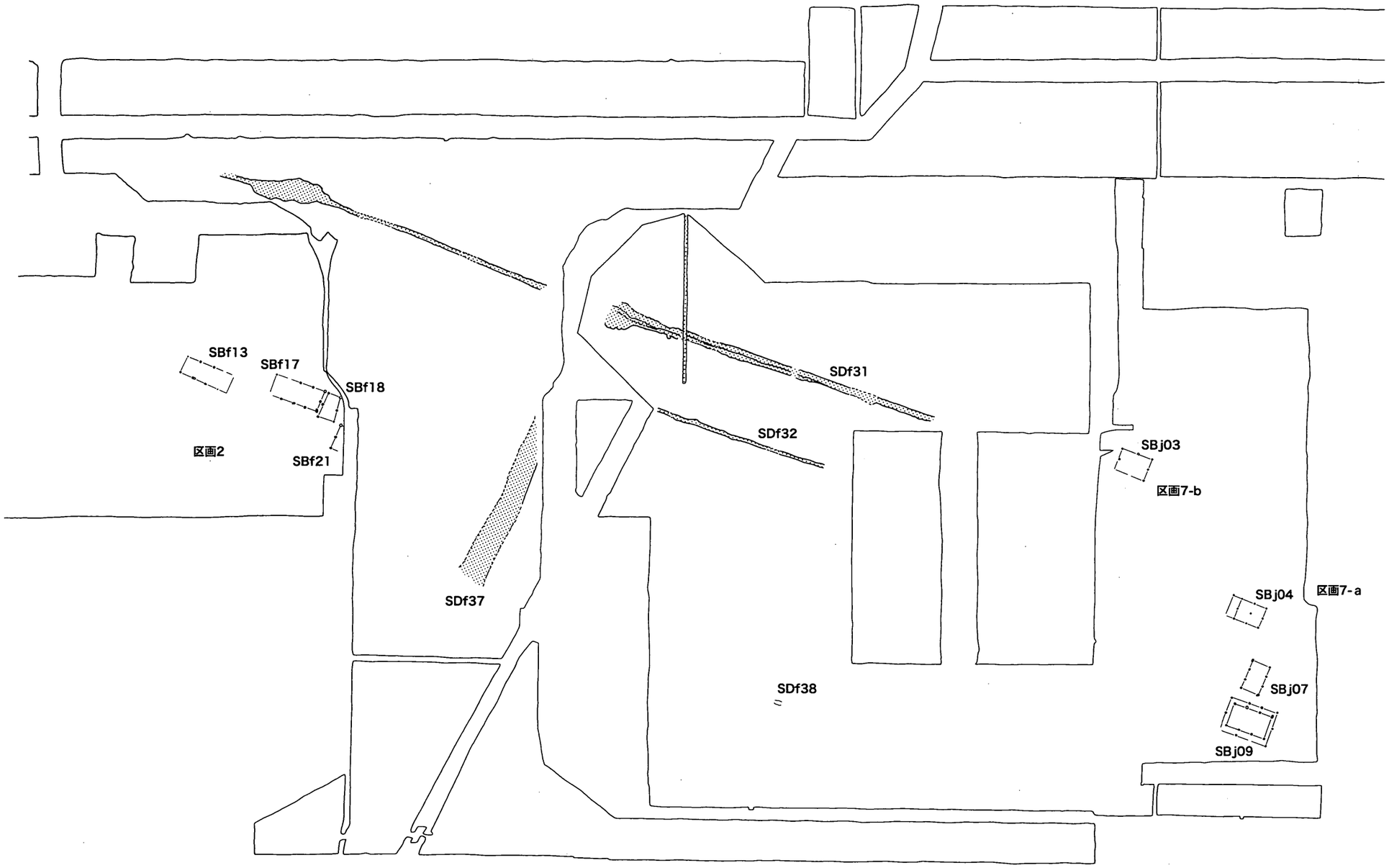
建物は，二面庇（西・南）と束柱をもち床面積61.8㎡（庇と付属屋を含めると74.51㎡）を測るＳＢf06を主屋としており，部分的な柱穴の重複と出土遺物からこの建物はⅡ－２～４期に継続的に営まれたものと考えられる。また３－(1)で検討するように，区画内の中心にＳＢf06が位置するような企画性があり，規模・構造・位置関係のあらゆる属性で区画１の中心的機能をなす建物としての評価が与えられる。建物の変遷は，中世Ⅱ－２期がＳＢf06・11・12・(05)，中世Ⅱ－３期がＳＢf06・09・07・(05)・11→10，中世Ⅱ－４期がＳＢf06・07・09・11・08となる。小区画の正面に面した主屋（ＳＢf06）と厩（ＳＢf10・11）の固定的な存在形態が確認できる。

この他の遺構として，区画１では建物群に近接して墳墓が存在する。建物群と時期を同じくしており，またＳＢf12のように墳墓に近接する建物があることから，屋敷地の消長と密接に関わる遺構とみてよい。いわゆる「屋敷墓」の範疇で捉えられる。ＳＴf01は礫敷きの火葬施設を墳墓にしており，中世Ⅱ－２期の副葬品が検出された。ＳＴf02は長方形プランの墓壙内に短刀や小皿などを副葬しており，中世Ⅱ－４期の埋葬であることがわかる。屋敷墓が区画２・７では存在しないことを考慮すると，屋敷地としての土地の占有意識が区画１と区画２・７とでは異なっていた可能性が指摘できよう。

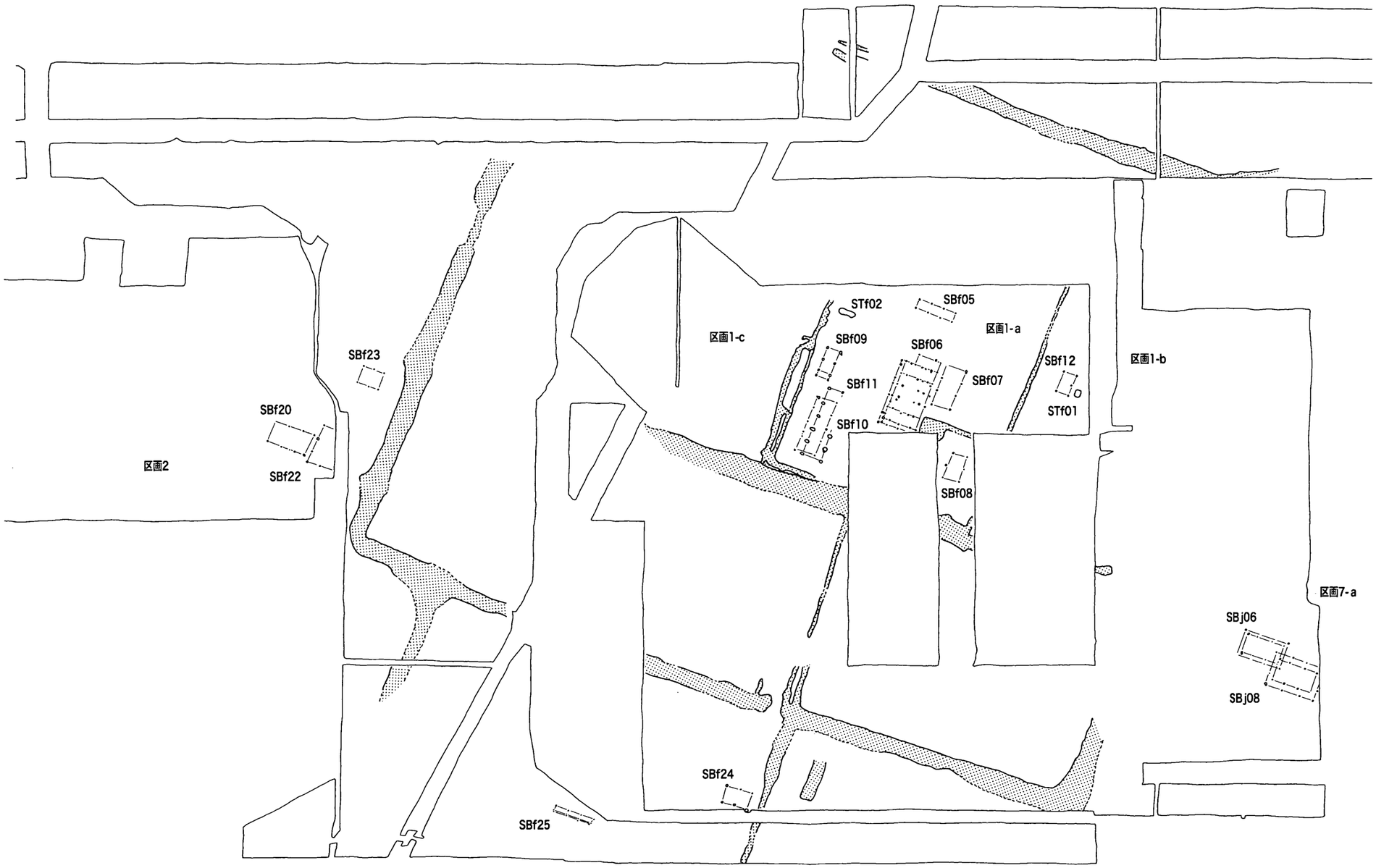
区画２では，おそらくＳＢf22を主屋として，これにＳＢf20・23が付随する。いずれも側柱建物であり，わずかな床面積の格差が指摘できるのに過ぎない。この点で前代と変わらない構成といえる。

区画７－ａでは，主屋と目される四面庇の側柱建物が２棟（ＳＢj06・08）重複しており，当該期の中で建て替えを経ていることがわかる。主屋の形態・規模は前代と大差なく，ここでも継続する建物群の構成を窺える。

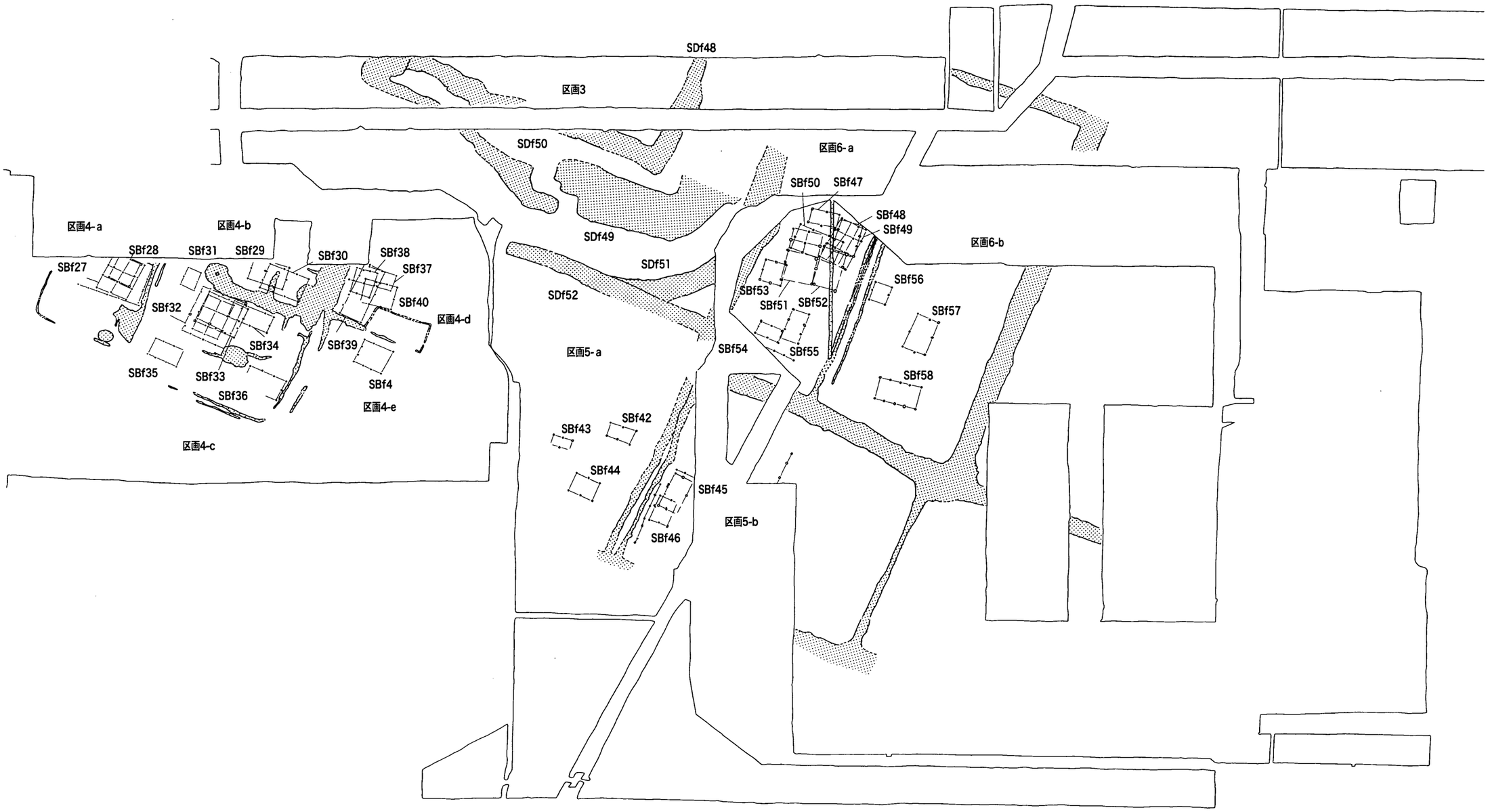
区画２・７－ａが中世Ⅰ－３期からⅡ－４期に至るまで，小規模ながらある種の「安定的」な群構成を維持していることは，区画１の出現背景を考える上でも重要である。なぜなら，既存の灌漑用水網の



第446図　中世 Ⅰ−3期〜Ⅱ−1期の遺構配置図（1/800）



第447図　中世Ⅱ－2～4期の遺構配置図（1/800）



第448図　中世Ⅲ期後半の遺構配置図（Ⅱ－5期～Ⅲ期前半含む：1/800）

変更を伴って成立した区画１の居住者が，周囲の先行する小集落を直接の母胎としていないことが想定できるからであり，林郷ないしその周辺を含めたマクロな観点からの検討が必要と考える。

以上の建物群の他に，区画１陸橋部の南側には小規模な建物（ＳＢf24・25）が散在する。細かな時期を特定するまでには至らないが，比較的短期のうちに消滅したものと思われる。

(3) 中世Ⅱ－５期～Ⅲ期前半（13世紀末葉～15世紀前葉）

区画１・２・７が消滅し，区画施設の大幅な変更や移動を伴った新たな区画群が成立する。

まず従来は区画・建物群の形成に至らなかったⅡ－１・Ⅲ－２区で，大規模な区画溝を伴った区画３が出現する。攪乱や削平が顕著なために建物等は検出されなかったが，三重の区画溝に囲繞された東西46ｍ，南北40ｍ（推定）の方形プランの形態をもつ。区画溝ＳＤf49・50には喰い違う鍵形の陸橋部がみられ，またいずれの区画溝も周辺の灌漑網を直接の水源としないことから，前代よりもさらに区画に重点を置いた施設ということができる。この三重の区画溝は，中世Ⅱ－５期か遅くともⅢ期の早いうちには構築されており，区画１に直続する成立過程を示している。ただ，区画１と区画３の経営主体が同一かどうかは，慎重に検討する必要がある。

区画３の南側の区画４・６では，当該期の在地土器がかなり出土している。これらの遺物を使用・廃棄した場所を想定しなければならないが，周辺では当該期の建物群は確認されておらず，他所からの二次的な移動は想像し難い。また区画４・６では非常に多数のピットを確認しており，これが長期にわたる建物群の継続を示唆しているとみられるため，当該期の在地土器は両区画で使用・廃棄されたとみるのが最も妥当である。ＳＤf51の遺物が区画６側から投棄されたような状態で出土したことも，このことを端的に示している。以上から建物遺構の復元には至らないものの，区画４・６では当該期から建物群の形成が始まったとみて大過ないと考える。ただしこの時期まで明らかに遡る区画施設がないため，一定範囲に建物群が緩やかに集合するといった形態が想定される。

(4) 中世Ⅲ期後半（15世紀中葉～16世紀中葉）

区画３は継続するが，最も外側の区画溝であったＳＤf51が前代のうちに埋没し，新たにＳＤf52が開削される。内側２つの区画溝（ＳＤf48，49・50）も，土層堆積状況から緩やかに埋没していったことが窺えるが，16世紀代の遺物が出土していることから，一応，最終的な廃絶段階まで区画溝としての機能を果たしていたものと考える。

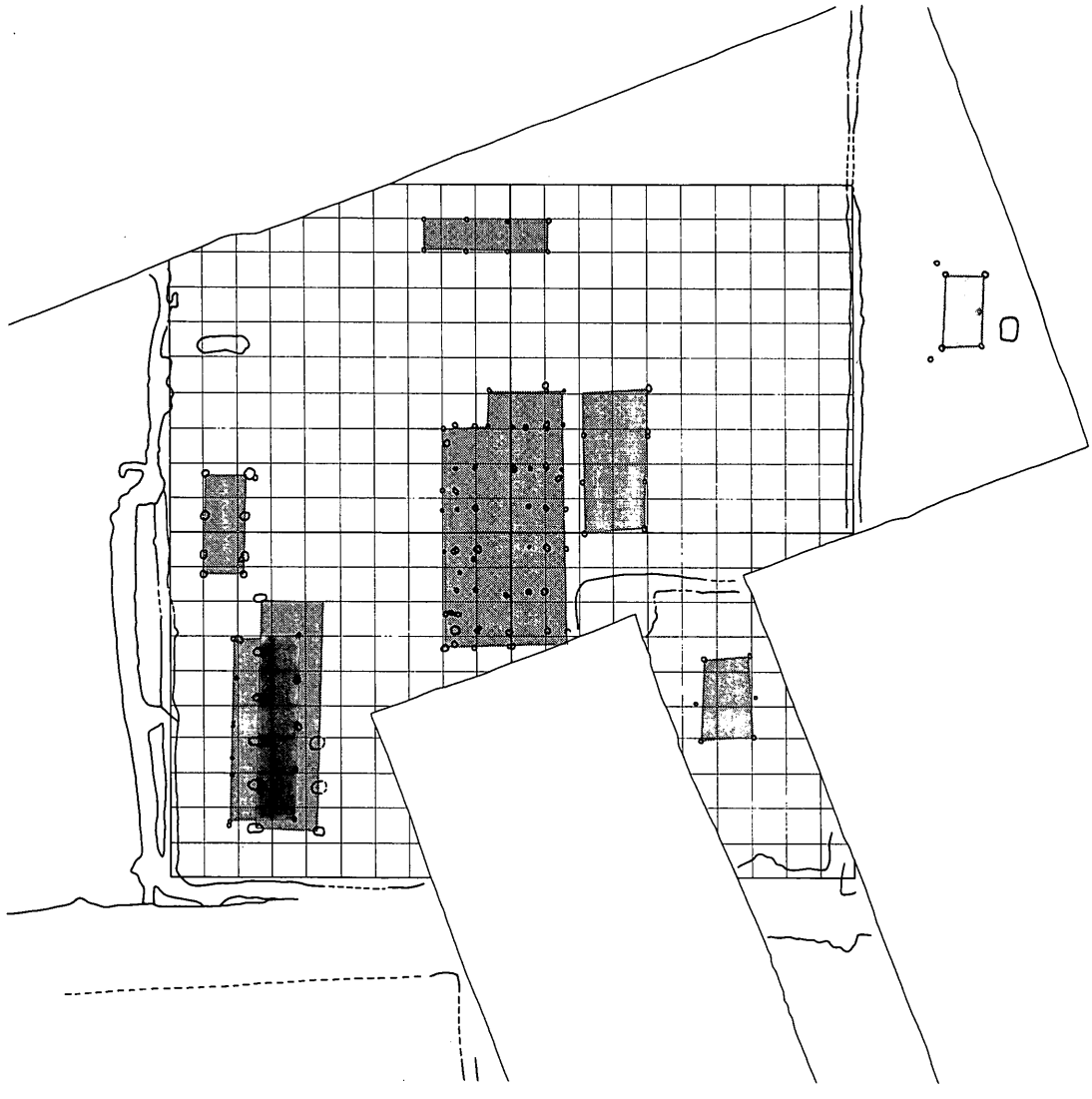
区画３の南～東側には，区画４～６が明確な区画溝を伴ってブロック状に形成される。まず区画４では，16×16ｍ～18×28ｍの小区画がこの期の前半頃には４箇所，後半頃には６箇所集合する状況が看取される（区画４－ａ～ｅ，４－ａ北側の調査区外）。各小区画での建物構成からすると，若干の格差をもちつつも各々独立した単位が一つの小区画（屋敷地）であったと考えてよいようである。なお区画３内には出水状遺構（ＳＥf02）があり，区画の一角が灌漑水源となっていることは注目される（第４章第３節参照）。

若干の空閑地を挟んで区画４の西側に区画５が形成される。区画内は18×28ｍ程度の長方形区画（区画５－ａ・ｂ）に細分され，東西辺は小溝・柵列によって，南北辺は幅２～3.5ｍのやや大型の溝

によって区画されている。ピットの検出数が非常に少なく，出土遺物も当該期の後半期にほぼ限定されることから，後出的な区画であるといえる。

区画３の東側には区画６がみられる。四周を幅3.5ｍ程度の大型の溝で区画し，その内側を小溝で東西に分割する。細分された小区画（区画６－ａ・ｂ）は，18～25×28ｍの規模をもつ。区画６－ａでは建物が重複しており，出土遺物からも当該期全般にわたって存続したことが考えられる。また羽口や鉄滓が出土しており，鋳造が行われた可能性がある。これに対して区画６－ｂでは建物の重複がなく，ピットも散在しており短期間で廃絶したようである。時期的には前半期とみられる。

これらの遺構群の下限であるが，16世紀後葉以降の中国産染付や肥前系陶器・瀬戸美濃系陶器・備前焼などがほとんど出土していないことを重視する必要がある。わずかに区画４の出水状遺構ＳＥf02の最終的な埋め戻し土中に16世紀後葉～17世紀前葉の遺物をみるのみであり，大勢としては在地土器などが示す16世紀中葉にその下限を求めることができよう。すなわち戦国期の最末期には全ての区画が廃絶していたことが考えられるのである。



第449図　区画1-a割付図（1/400）

3．居館としての区画１・３の機能

以上の整理から，区画溝の規模や土地占有範囲などの点において，全ての区画を同列に扱うことができないのは明らかである。もちろん区画４のように，小区画相互の差異も存在する。しかし，外郭線を含めると１町近い土地占有が行われている区画１・３と他者の差異は，「格差」と評価し得るほどに明確である。つまり，通常の建物群とは異なった形態の「居館」である蓋然性はかなり高いといえる。そこで上記した部分と重複する箇所もあるが，遺構の機能的な位置付けを通じて「格差」の要素をより具体化しておく。

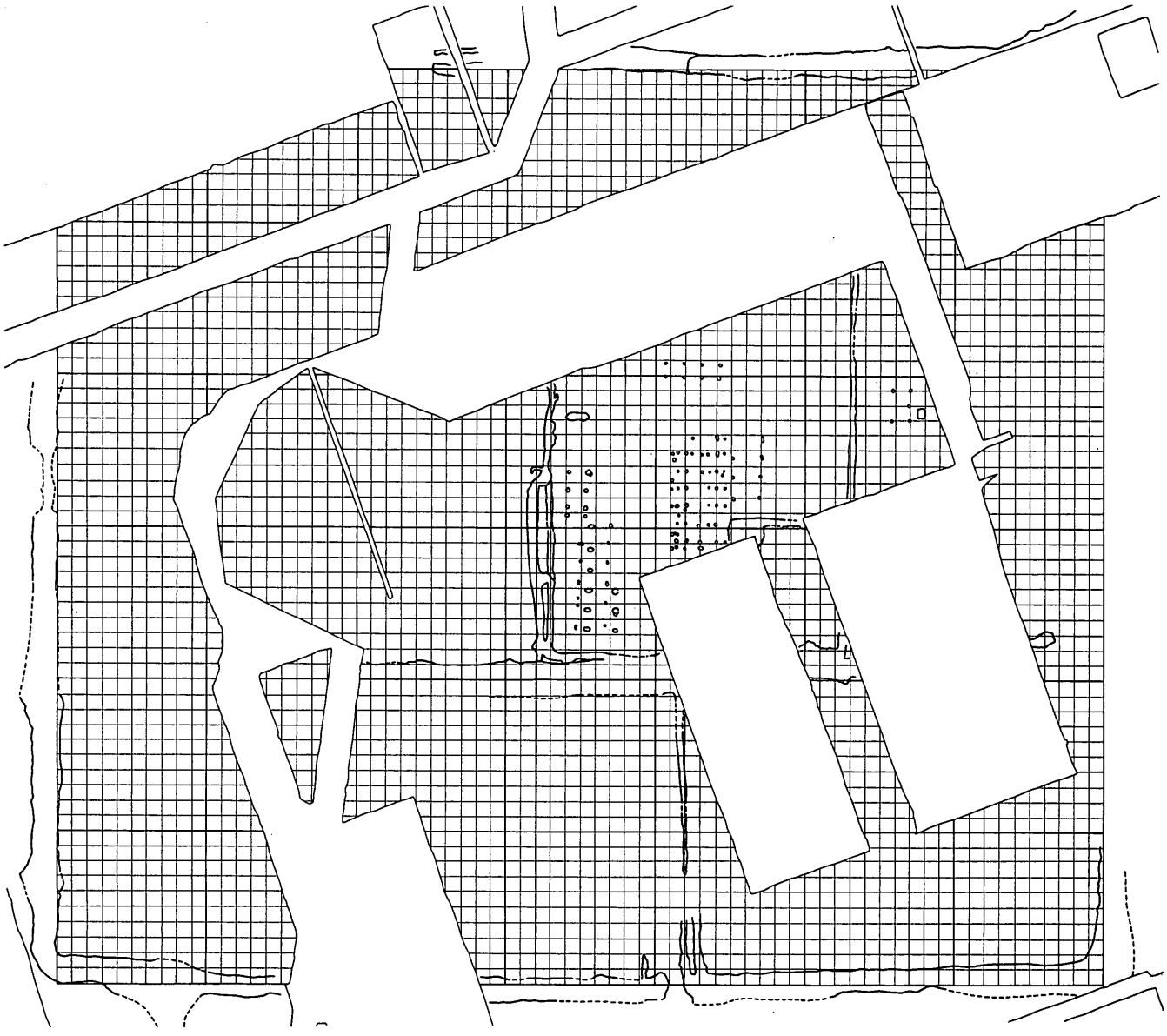
(1) 建物配置の企画と機能分化

13世紀の区画１の状況を検討する。まず，中心区画にあたる区画１－ａでの割り付け状況をみてみる。区画１－ａは東西20間を測り，北限は明確でないもののピットの分布状況から，やはり20間とみてよかろう（第449図)。建物の位置関係をみると，主屋ＳＢf06の身舎部分（母屋）の中軸（桁行・梁間方向）は，区画１－ａ全体の中軸線と一致する。つまり，主屋が中心区画の中央に位置していることになる。ＳＢf05・07～11も，いずれかの辺が方格線（１間単位）にほぼ一致しており，各建物の位置も中心区画を細分する割り付けに沿って決められていることがわかる。

次に条里型地割の１坪内での割り付けの状況をみてみる（第450図)。区画１－ａの小区画溝と坪界線との距離は，東辺・北辺が18間，南辺・西辺が22間である。その結果，東西・南北20間の規模をもった小区画が形成されるが，小区画の中軸は東西・南北ともに1/2町（30間）の位置になく，全体として北東に偏るかたちで区画１－ａが存在しているのである。１坪内部の土地利用としては，若干変則的なかたちで小区画の設定が行われていることがわかる。

企画性とともに区画１の特徴として挙げられるのが，建物の形態・規模に明瞭な違いがみられ，機能分化しているとみられる点である。主屋ＳＢf06は身舎の面積が61.8㎡を測り，香川県内で検出された中世前半の掘立柱建物としては最大規模である。県内の掘立柱建物（10～16世紀）の規模については集計途上であるが，三豊平野・丸亀平野・滝宮台地・高松平野西部405例のうち，40㎡未満が384例（94.81％）であり，ＳＢf06と同等の60㎡以上は僅かに４例（0.98％）にとどまる。100㎡を超える建物が存在しないなど，畿内地方や北陸地方での当該期の建物規模よりも全体に小型のものが多い点が気がかりではあるが，讃岐地方においては最大級の建物規模とみて大過ない。

この建物は規模にとどまらず，東西方向の中軸線の北・南側の柱穴配置が左右対称であることなど，建物そのものの企画性も注目される。桁行の柱間は７尺を１間とすることで共通しているが，梁間はやや変則的な配置を示す。すなわち，ほぼ南北方向の中軸線上の柱穴から東西両側に６尺～７尺の距離を置いて柱穴があるが，さらにその外側３尺のところに柱穴が認められるのである。つまり，梁間２間の両側にさらに半間分ずつ延びることになり，さらに西側と南側の外側２尺のところに縁が延びることになる。ただし，建物の外周部で柱が半間分の距離を置いて立てられる事例としては，現存する兵庫県箱木家住宅（15世紀）や古井家住宅（16世紀)，あるいは備中国新見庄地頭政所指図（寛正５年：1464）にも認められ，中世後半には地侍的な領主屋敷の主屋としてはよくみられる柱配置といい得るかもしれない。また桁方向（南北）の中軸柱が中抜けであり，柱並びが揃っていないことを考慮すると，間取り



第450図　区画1割付図（1/800）

が第125図のように３つの室から構成されることが推測される。仮にこの間取りを前提とすると，中央の19尺×21尺（概ね３間四方）の大きな空間が主室（座敷）とみることができる。南側の19尺×７尺の空間（前室）は，上記した現存民家や史料上の指図には認められないが，『一遍上人絵伝』（13世紀末葉）巻５の大井太郎の館には，屋敷地正面の「庭」に面して下屋構造の室が描かれており（山本1994・玉井1996），同様な間仕切りの事例といえる。後室は前室と同じ規模の空間であり，北側に付属屋と目隠し塀状のＳＡf01が存在する。こうした間仕切りは，区画２・７はもちろん，同時期の県内の事例でも見出すことは困難である。絵巻物の表現や現存民家の間取りが示すように，公・私の両側面（ハレとケ）を反映した建築構造といい得るのではなかろうか。

主屋ＳＢf06の西側に相対するＳＢf09とＳＢf10・11も注目される。ＳＢf09は，小規模であるが１×２間（１間＝７尺）と南に半間延びる庇からなり，身舎は柱穴内に根石を詰め，その上に礎板を２・３枚重ねており，他の建物とは異なる入念な基礎作業を行っている。他者よりも荷重が過度に加わ

ることを前提とした構造とみることができ，倉である可能性が考えられる。

ＳＢf10・11は，細長いプランをもつことが特徴的であり，ほぼ同じ位置に重複していることから，同じ機能の建物が継続的に営まれたことを示していよう。特定は難しいが，中世では細長いプランの建物は多くなく，１間分の大きさ（７～９尺×11尺）が福井県朝倉館跡厩の立場１升の大きさ（山本1994）とほぼ一致することを考慮すると，厩である可能性があろう。区画１－ａで馬が飼われていたかどうかは直接明確にはできないが，区画１全体を取り巻くＳＤf16や陸橋部のＳＫf56で馬歯が出土していることは，馬の存在に肯定的である。

まとめると，区画１－ａは中央に間仕切りを伴う大型の主屋があり，「庭」を挟んだ西側の向かいには倉と厩が配置されていたことが想定できる。ことに主屋と厩は継続的に同じ地点で営まれ，建物配置に何らかの制約（規範）が働いた可能性がある。これは，山本直人氏が絵巻物と神奈川県宮久保遺跡で検討した建物配置の一類型（山本1994）と合致するものであり，近い事例として主屋と厩が左右逆であるが，岡山県笠岡市園井土井遺跡（15世紀後半～16世紀前半）に類例を見出せる。

建物の機能を以上のように想定した上で，改めて先述した１坪内部の変則的な割付状況をみてみよう。南北の基準線（中軸線）は，主屋の中軸線とは一致せずに主屋と厩・倉に挟まれた「庭」（空閑地）を通るように設定されている。陸橋部から中心区画に至る側溝を伴う通路も，若干歪んでいるがこの中軸線に沿って設定されているとみてよい。つまり，出入り口を伴う区画の正面は「庭」部分であり，これを１坪の中軸線と一致させたために，中心区画（区画１－ａ）の１坪内での位置がずれたと考えられるのである。このように「庭」すなわち公的な空間を正面とした屋敷地の割り付けは，15～16世紀の大名や有力国人領主の居館で認められ，中世後半期の典型的な空間利用形態といえる（小野1997）。中世前半の典型的な事例はないが，絵画史料としては『法然上人絵伝』（14世紀初頭成立）の漆間時国館がある。今後の発掘資料の蓄積が必要であるが，区画１が公的空間を正面とする建物構成をとる可能性があることを指摘しておきたい。

(2) 区画溝の形態と機能

２－(2)で既述したように，区画１全体を囲繞する溝は条里型地割の坪界線上に位置するが，これを単なる用水路ではなく「区画溝」と考えたのは，以下の点で通常の用水路とするには躊躇を覚えたからである。①南辺中央部に陸橋部，南西隅部に陸橋状に盛り上がる溝底を伴うこと，②西辺部・南辺部は先行する坪界溝を付け替えて開削し，南側からの流水を迂回させるように溝底にレベル差を付けること，③ただし，西辺部の底面は南半部が深く北半部が浅いため，南→北という流水方向に逆行した傾斜をもっており，スムーズな通水の支障となること，④西辺部の一部に断面Ｖ字形を呈する部分があること，⑤同時期の坪界溝に比べて幅・深さが特に大きいこと（遺構一覧表参照），⑥開削時期と埋没時期が区画１－ａの建物群の出現・廃絶と完全に一致すること，である。

これらの特徴を整合的に説明できるのは，やはり区画１－ａとの関わりを前提とすることである。つまり，畿内でしばしば認められる事例と同様に，条里型地割を利用して区画溝（ないしは堀）を設定する居館として捉えることが可能である。その場合，区画溝は大区画（１町×１町９間）と小区画（20間四方）の２重構造になるが，これは大阪府和家遺跡第４期（13世紀中葉）・津堂遺跡（12世紀後半～13世紀前半），埼玉県檜下遺跡（阿保境館跡：14世紀）でも指摘でき，ことに区画１と津堂・檜下

両遺跡とでは小区画と大区画の間に建物の存在しない空閑地が広がる点まで共通している。

ただし，区画１に伴う大区画溝を中世後半の城館のような「堀」として捉え得るかどうかは，慎重な検討を必要とするであろう。なぜなら，この時期の居館については防御機能が未だ前面に出ていないとする見解（橋口1991・千田1996）と，西日本で土塁・堀を伴った城館の存在を積極的に認める見解(中井19　）があり，同一遺跡・遺構に対する捉え方が異なるからである。区画１では，溝が上記した④・⑤のような特徴をもってはいるが，深さは最深部でも１m，浅いところでは0.35mにしかならない。後世の削平を考慮に入れても，「堀」とするには規模がやや小さいようにも思われる。西辺部南半では溝は断面Ｖ字形を呈し，深さも１m前後と最も深く相対的には最も防御機能が優れたところといえる。しかしこれは，居館での攻防戦を念頭に置いた備えとみるよりは，西側に隣接する区画２から明確に屋敷地を区分するための措置とみた方が実態的であると考える。また溝の内側での土塁の有無は，土層堆積状況から否定的に考えている。こうしたことから，区画１を在地領主級の居館とみること自体は妥当であると考えるが，堀と土塁を伴った城館とみることは難しいといわざるを得ない。では橋口氏が檜下遺跡で指摘するような，居住域から隔たった長く散漫な防御線であることを理由として，区画溝ならびに中心区画との間の空閑地に防御機能以外の「何らかの異なる意味」を考えるべきであろうか。

かかる意味で注目されるのは，藤木久志氏が明らかにした庄園政所の在地における機能である。すなわち庄園政所は，名主・百姓により「自検断の場」として主体的に運営されており，非常時の「要害」として機能していたという（藤木1997)。庄園・公領の支配形態に実質的な差異がないことを考慮すると，これは領主による在地支配の実態として普遍化できる現象ともいえる。ところでこのような位置付けを敷衍すれば，領主館（政所）が非常時に村落構成員の籠もる場でもあった可能性は十分に考え得るところであり，そのような機能を果たす場として中心区画周辺の空閑地を位置付けることができるのではなかろうか。なお中心区画との間に何らの構築物の存在が想定できないので，日常的には居住者の直営耕地が存在したのかもしれない。

一方，区画１の廃絶を承けて成立した区画３は，三重の区画溝によって囲繞されており，特に陸橋部を伴う区画溝は幅が広く「堀」とでも評価できそうな形態をもつ。また内側の区画溝ＳＤf48は，基盤層ブロックを含んだ土層によって完全に埋没していることから，内側に掘削土を盛り上げた土塁が伴っていた可能性がある。区画溝の深度と断面形態という点では，16世紀の城館に伴う堀よりも防御性に乏しいが，有力な守護大名である大内氏館跡でも14～15世紀中葉の堀は貧弱である（古賀1993)。したがってむしろ，区画溝が三重になったこと，溝幅が拡大したこと，陸橋部に喰い違い状の折れがあること，土塁を伴うとみられること，などの要素に区画１からの飛躍的な防御機能の充実を積極的に認めておきたい。16世紀中葉の廃絶に至るまで成立当初の防御施設を本格的に改修することがなかったのは，居住者の地域内での階層的位置付けとも関わる問題であると思う（第４節)。

(3)「屋敷墓」の存在

建物群に伴う，いわゆる「屋敷墓」の存在形態は特徴的である。既述したように，区画１では年代の隔たった「屋敷墓」が２基検出された（ＳＴf01・02)。これに対して，より継続的な建物群の維持が行われていた区画２・７では，墳墓遺構は認められなかった。区画２・７ともに建物群のほぼ全域を発掘しているため，「屋敷墓」は存在しなかったと考えてよく，その存在形態の違いが明確に指摘できる

のである。

橘田正徳氏によれば，「中世前期屋敷墓」は「世襲的土地所有の成立において，「屋敷」の所有強化・自立の象徴の機能を担うものと推定」し，この墓制の積極的な採用階層としては百姓層（広瀬和雄氏分類のA・B型建物群の居住階層）であり，国・郡規模の在地領主の墓所は専ら氏寺であり「屋敷墓」という形態を採らないと考えた（橘田1991）。

一見，安定した建物群の継続状況が看取できる区画2・7に「屋敷墓」が存在しないのは，「屋敷墓」に表徴される居住者の自立性を否定する要素であるようにも見受けられる。成立経緯からみて，区画2・7は区画1に付随するものではなく，むしろ先行して存在していたものである。また区画1の成立によって，建物規模・構成が変化しているわけでもない。したがって区画2・7の成立・展開過程は，区画1とは一応無関係とみた方が妥当であり，さらに六条・上所遺跡や太田下・須川遺跡のような継続性に乏しい小規模散在集落が多くみられる高松平野の動向（第3表参照）を踏まえると，かなり安定的な経営単位が居住した建物群と捉えることができる。しかし，橘田氏の見解を前提とするならば，ここでの安定的な建物群の継続という現象は，居住者の自立性に起因しないことを示すか，逆に「屋敷墓」という墓制が必ずしも在来的な要素でないことを示唆するか，いずれかの可能性を考慮できることになる。後者については，9～10世紀の建物群に伴う墳墓（下川津遺跡）の問題と関わるため，機会を改めて検討していきたいが，現在までの香川県内での「屋敷墓」の事例をみる限りでは，「屋敷墓」の存在形態は必ずしも普遍的ではなく，いくつかの偏在性を指摘することができる。例えば，最も事例の多い西村遺跡（12世紀中葉～14世紀前葉）は，製陶や製炭などの非農業生産を経営基盤とする集落である。また，集石による塚墓を伴う延命遺跡（12世紀後葉～13世紀）は，10～11世紀に出現し皇朝銭（？）を保有する中型建物群（在地の富豪層の居宅か）が踏襲されていること，また和泉型瓦器椀や吉備系土師質土器椀の占める割合が高い食器組成をもつことから，地域内と外部との流通に直接的に介在する階層の居住が想定される。いずれの遺跡でも30㎡前後の主屋を最大とするため，広瀬和雄氏による建物分類ではA型ないしB型に該当するが，生産ないし流通に直接関与することで，他地域との接触を主体的に図ることの可能な集団であるという点で，一般的な村落の階層構成とは異質な側面を多分にもつ集団の居住地に「屋敷墓」が積極的に採用されたとみることもできるのではなかろうか。

かかる想定から，区画1・2・7における「屋敷墓」の存否の問題を説明するには，なお事例の蓄積を待つ必要がある。ここで確認しておきたいのは，讃岐地方においては「屋敷墓」の有無が村落内の階層構成（考古学的には建物群の規模の序列）を前提とした自立性の問題と直結するのではないことである。それとは別の側面（生産・流通関係からみた経営単位の社会的位置）も考慮すべきであると考える。区画1と区画2・7での違いは，村落内の相対的な階層差とは異なった次元での「格差」を表徴しているのではなかろうか。

4．区画群の存在形態

(1) 居館＋小規模建物群の分布状況の変遷

居館とその周辺に分布する建物群との関係は，13世紀代と15世紀中葉～16世紀中葉ではかなり異なる形態として把握できる。13世紀代には，居館（区画1）の周辺に建物群（区画2・7）が散在する

のみである。しかも区画２・７は，居館の出現以前から継続している建物群であり，居館の出現とは連動していない。つまり，居館の方がかえって既存の建物群の分布に規制されたかのようであり，少なくとも成立経緯という部分では，居館を核とした集落とはいえない。

これに対して15世紀中葉～16世紀中葉には，居館（区画３）の南側と東側に明瞭な区画施設（溝・柵列）を伴った小区画（区画４－ａ～ｅ，区画５－ａ・ｂ，区画６－ａ・ｂ）がブロック状に連続するようになる。出現経緯からみても，居館と小区画群とは密接な関係にあるとみてよい。小区画では，建物の建て替えを示唆するピットの集中的な分布が区画施設の直近にまでは及ばず，これを超えることはない。つまり，区画施設が内部の建物群の範囲を規定していることになり，継続的な土地占有の単位（≒「屋敷」）として明確に意識されていたことを推測させる。また各小区画には，規模の格差が認められる。９箇所の小区画の規模（第12表）は，①280～380㎡前後（区画４－ａ・ｄ・ｅ），②530～860㎡前後（区画４－ｂ・ｃ，５－ａ・ｂ，６－ａ・ｂ）に大別され，さらにその上位に③1840㎡の区画３が存在する，という区分が指摘できる。「屋敷」の規模においても，区画３を上位とした序列が読み取れる。同時に最小規模の①が区画４のみに認められることも注目できる点である。これは，区画毎の階層分化の進捗状況の差異を示すのか，あるいは「屋敷」の相伝を重ねた「家」の分立の進捗状況を示すのか，明確ではない。ただし，区画４にやや特異な遺物が目立つ（西讃系統の土師質土器大皿，鋳造関係遺物）ように，区画４に他地域との流通関係（モノ・技術を含めた）を前提とした要素を看取することが可能であり，居住者が手工業ないし商業関係にも関与していた可能性を示すことができる。このような居住者の性格が「屋敷」の規模・形態と関わるのかもしれない。

(2) 居館＋集落の消長・画期

上記した集落群形態の変化は，かなり急激である。以下にまとめておく。

13世紀前葉	居館＋散在集落（区画１＋区画２・７）の併存
13世紀末葉	居館＋散在集落の廃絶
13世紀末葉～15世紀前葉	新たな居館＋集落（区画３＋区画４・６）の成立
15世紀中葉～16世紀中葉	居館に伴う集落（区画４・５・６）のブロック化
16世紀中葉	居館＋ブロック形集落の廃絶

13世紀末葉～15世紀前葉（おそらく14世紀代）が集落形態変化の大きな画期であることを指摘できる。また，これを承けて成立した新たな集落群の形態が区画施設を伴ったブロック状の配置になる15世紀中葉も小画期といえる。さらに集落群の廃絶する16世紀中葉が大画期として指摘できよう。加えて重要なのは，中世後半の集落群形態が居館を求心力として形成されているとみられる点である。

このような集落群形態の変化は，空港跡地遺跡にとどまらず高松平野では普遍的に認められる可能性がある（第２章第２節）。居館の有無は措くとしても，ブロック状の集落群形態は，東山崎・水田遺跡や西ハゼ土居遺跡，西打遺跡Ⅳ区で確認されている。他地域でもこのような集落がみられ，「集村」化の動きを示す具体的な事例として理解されている。ただ高松平野での諸例は，空港跡地遺跡の東西160ｍ，南北80ｍを最大として，他は１町未満の規模をもつのにとどまり，近畿地方での諸例程の範囲と区画数を伴わないのが特徴であり，地域差を示す可能性が指摘できる。

16世紀中葉前後に集落群が廃絶する点は，高松平野各所の遺跡で認められる現象であり，中世集落

と近世集落の断絶は明確である（第２章第２節）。16世紀後葉の讃岐地方は未曾有の社会変動を経ているが，個別の集落群の廃絶については居住者の階層的位置付けを考慮した具体的な過程を追求することが望まれる。

５．おわりに

Ｆ地区に限定した中世区画遺構（集落）の性格と変遷は，以上のように整理できる。ただ，「居館」が林郷（林庄）という１単位地域のどのような脈絡の中で捉えられるかは，限定された調査区の遺構のみからでは検討することが難しい。灌漑単位の復元や，遺物から想定される流通構造などの作業が次に必要になってこよう。

第３節　土師質土器の生産・流通形態　－糸切り底の小皿・杯からみた－

１．はじめに

機能分化した建物群と大規模な区画溝で構成される区画１が，13世紀前葉～後葉（末葉を含まない）に存続したことは，第１節を踏まえた第２節の検討で明確にできた。県内で確認された中世前期の居館遺構としては，最も良好でまとまった内容の資料提示が遺構・遺物ともに行えたと考えている。

区画１出土の在地土器の中で，ひときわ注目しておく必要があると認識しているのが，中世Ⅱ－２～３期に盛行する特徴的な糸切り底の小皿と杯である。既に片桐孝浩氏によって，県内の12～13世紀の供膳具の底部切り離し技法として，ヘラ切りと糸切りの２者があり，前者は普遍的存在であり，後者は三豊平野と高松平野東部でヘラ切りと共存することが指摘されている（片桐1992）。ところが本遺跡を含めた高松平野南部～東部では，近年の資料の蓄積にもかかわらず糸切り底の供膳具は，むしろ稀な存在であることを指摘できるようになってきた。ことに区画１での特徴的な小皿・杯（皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式）は，遺跡内においてもかなり偏在的な在り方を示すようである。

ところで，狭域を対象としたかにみえる皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式の偏在的な在り方は，どのような需給関係を示唆するものであろうか。このことを以下，検討することとしたい。

２．糸切り底の小皿・杯の生産技術

(1) 胎土

皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式は，明褐色～橙色に発色して砂粒を多く含む特徴的な胎土をもつ。土器の色調は焼成技術とも関わるが，ヘラ切り底の杯ＤⅡ形式にしばしば認められる灰白色ないし黄白色に発色する個体は極めて少ない。したがって，単に焼成雰囲気との関連のみで捉えることもできず，胎土中に含まれる化学的成分（例えば鉄の含有量）を主要因とするとみた方がよいかもしれない。

特徴的な砂粒としては，砂岩粒がある。５mm大ないしそれ以上のかなり大きな小石状の砂粒が含まれるものもあり，角礫の状態ではなく摩滅の進行した円礫に近い状態での混入が認められる。したがって山手の一次粘土ではなく，河川の下流域の平野部の二次粘土とみられる。また石英・長石の混入が顕著であり，ヘラ切り底の小皿・杯よりも夾雑物の多い，粗質な粘土によって製作されていることがわかる。

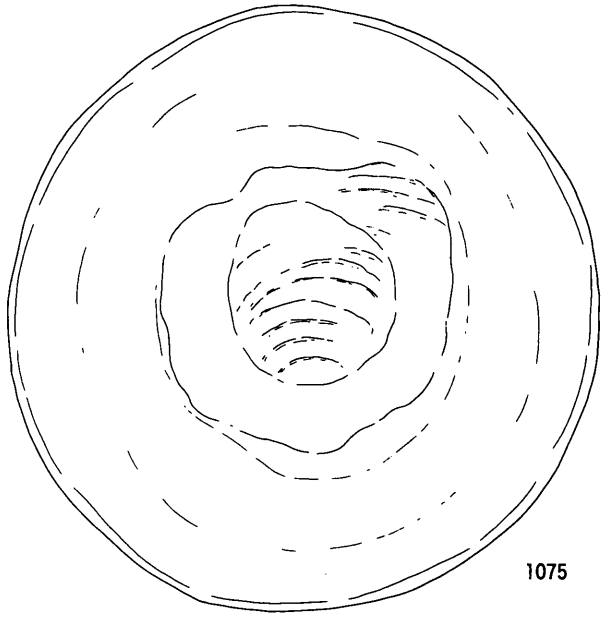
今回，皿ＣⅡ形式と杯ＥⅢ形式も胎土分析の対象とした（第４章第２節参照）。K_2O－CaO散布図（第396図）とSr－Rb散布図（第397図）からは，一応明瞭なまとまりを指摘できたが，西村遺跡の散布範囲とかなり重複するという問題点が残る。しかし肉眼観察によれば，砂岩粒の混入状況や胎土の発色状況など，かなり異質な要素があり，両者の識別は可能である。発色の要因の可能性がある鉄分（F_2O_3）の分析が今後必要となろう。

同様な胎土の小皿・杯は，六条・上所遺跡ＳＢ03柱穴，東山崎・水田遺跡Ｅ区第１面ＳＤ03，前田東・中村遺跡ＳＸ04など，高松平野南部から東部にかけての地域の基準資料中には見出すことができない。また，中世Ⅱ－１期に位置付けられるＳＤf16下層出土遺物には，同時期のヘラ切り底と同形

態の糸切り小皿（**260～265**）があるが，これらは胎土がヘラ切り底と共通しており，皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式の胎土とは明確に異なる。したがって管見の限りでは，中世Ⅱ－２・３期の空港跡地遺跡に特有な胎土ということができる。採掘地については不明だが，周辺遺跡では出土がほぼ皆無であることを踏まえると，空港跡地直近の可能性がある。胎土中に含まれる砂岩粒の混入状況も，香東川扇状地の末端である当該地域であれば矛盾しない。

(2) 小皿の製作技法

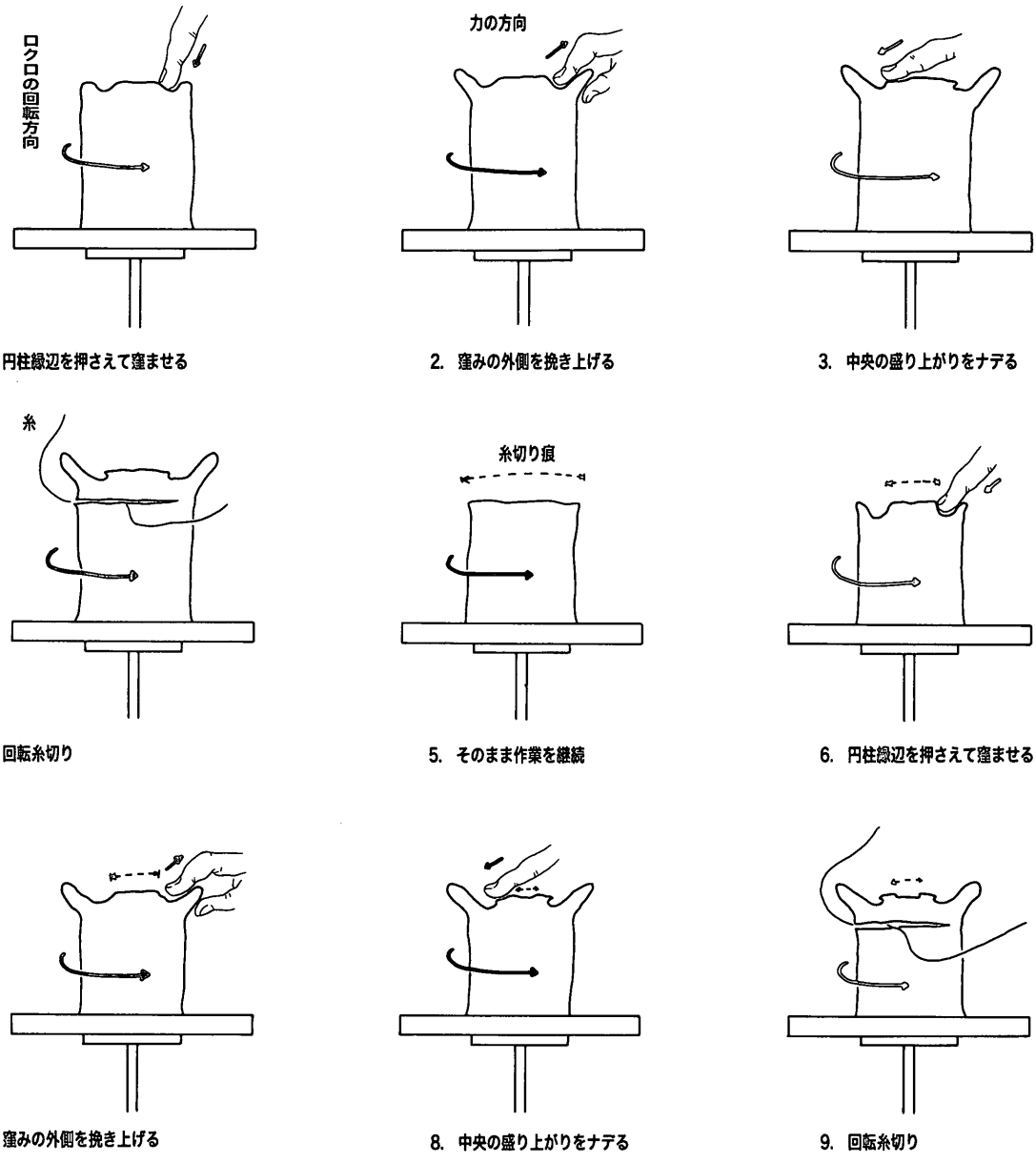
成形・調整痕の特徴　器面の遺存状態が良好で調整痕が明瞭なＳＴf02出土資料（**1068～1075**）を検討対象とする。形態的な特徴として指摘できるのは，次の３点である。①口縁部は端部が細身で基部（下半部）が厚味のある形態であり，断面三角形を呈する。②見込みが平坦に窪むものが一定量存在するが，見込みが断面台形状を呈し，口縁端部付近まで盛り上がるものも多い。③ 見込みが盛り上がる場合は，例外なく口縁部内面下半から底部内面外縁が相対的に窪む。



第451図　土師質土器皿CⅡ形式の技法的特徴

器面の技法痕跡は，この形態的な特徴と密接な対応関係にある。既述したように，**1075**では口縁部外面から内面にわたって認められる回転ナデが，口縁部内面→見込み周縁部という先後関係を伴っていることを確認できる。見込み周縁部のナデによって生じた粘土のはみ出しが，口縁部内面のナデを覆っているため，両者は断絶的に施されたナデ調整であるといえる。なお，回転ナデ調整によって生じたロクロ目の状態を観察すると，口縁部ナデの方が直線的で強く施されているようにみえ，見込みのナデは低速で弱く付されたようにみえる。また見込み中央部には糸切り痕が認められるが，見込み周縁部はナデによって消去されている（第451図）。見込みの糸切り痕と口縁部内面の回転ナデの先後関係は直接的には明確にできないが，小皿の器面調整（回転ナデ）に先行する工程としては内面の糸切りという作業は想定し難い。したがって，**1075**の製作に先行する別の工程に伴う痕跡と捉えるのが，最も妥当であろう。つまり見込みの糸切り痕は，別個体の小皿の底部切り離しに伴う糸切りである可能性が高く，粘土円柱から連続的に小皿を製作していく「円柱作り」を示していると考えられるのである。見込みの糸切り痕が先行して切り離された小皿底部であるとすれば，形態的特徴の①～③は説明可能である。

想定される製作工程　上記した成形・調整痕跡の重複状況を踏まえ，製作工程を想定する（第452図）。まず，ロクロ上の粘土円柱上面の外縁に近い部位を回転を利用しながら押圧して輪状に窪ませる（工程１）。次いで窪みの外側を挽き上げて口縁部を成形する。口縁部内外面の回転ナデは，この際の器面調



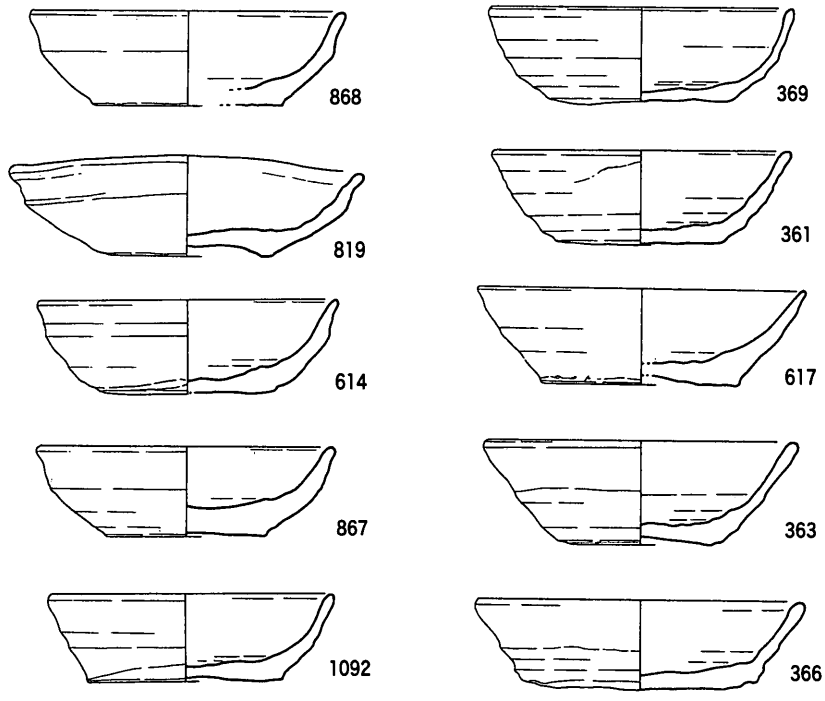
第452図　土師質土器皿CⅡ形式の制作工程の復元

整として生じる（工程２）。窪みの内側を外側に向かって回転ナデ調整して，盛り上がった部分を潰す。見込みの回転ナデは，この工程の器面調整と考えられる（工程３）。底部に回転糸切りを施して粘土円柱から切り離す（工程４）。

上記した工程１～４を連続的に繰り返して，小皿を量産していく。見込みの糸切り痕は，工程３のナデの範囲が狭く，かつ弱く施される（作業の省力化）ことによって遺存する場合が生じると考えられる。逆に工程３を見込み全面に強く行うと，相対的な盛り上がりが完全に潰され，平坦に窪んだ見込みが形成されるのであろう。因みに陶芸用の回転台を使用して工程１～４を繰り返してみたが，１個体の製作に要したのは平均しても30秒以内であった。

(3) 杯の製作技法

成形・調整痕の特徴　杯ＥⅢ形式の形態的なバリエーションは，中間的な形態のものも含めると，かなり豊富である（第453図）。このような形態差を超えて，技法的には共通した在り方を示すようである。これを踏まえ，器面の遺存状態が比較的良好な**361**・**987**を検討対象とする。



第453図　土師質土器杯Ｅ皿形式のバリエーション

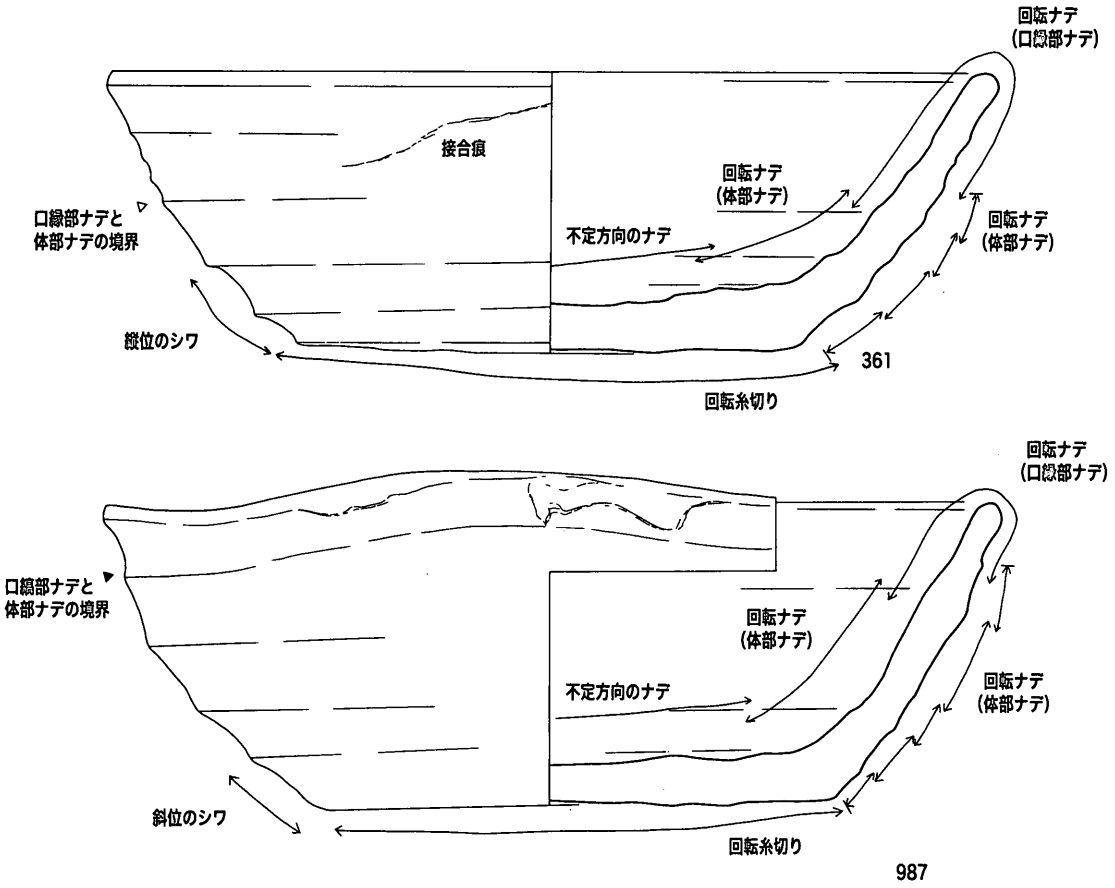
第454図に示したように，器面調整である口縁部の回転ナデと体部の回転ナデには，明瞭な断絶を見出すことができる。口縁部ナデの下端部は，体部ナデによる粘土のはみ出しによって覆われており，口縁部ナデ→体部ナデという先後関係が認められるのである。形態差を超えて，このナデの順序は共通している。つまり，先行して口縁部付近の調整を行い，その後に体部調整を行っているのである。体部ナデは３～４段施されるが，下半２段分は特に顕著な凹凸のロクロ目が認められる。また，**361**・**987**の２個体では，体部ナデは上側が後出しており，底部側から口縁部側に（つまり下から上へ）ナデが進行したものと考えられる。口縁部ナデの下端は確定的ではなく，本来は体部下端から口縁部まで施されていた可能性も否定できない。この可能性に立てば，体部ナデは仕上げの２次調整ということになる。

なお，回転ナデによる仕上がりの質感は，杯ＤⅡ形式（ヘラ切り底）よりも著しく粗雑であり，器面の平滑さに乏しいのが特徴である。また器壁も杯ＤⅡ形式よりも厚手の傾向にある。つまり，厚手で雑な仕上がりという印象を受ける。

成形段階は，粘土紐巻き上げによるのか，小皿のように粘土円柱の水挽きによるのか，にわかに判定することは難しい。水挽きと仮定して試みたが，製作は不可能ではなかった。ただし**361**には，接合痕とみられる横位（右上がり）の痕跡が認められることから，前者の可能性を考慮しておきたい。

また**361**・**987**の体部下端には，回転ナデの擦痕を歪ませる斜位の細かな皺が観察できる。回転ナデが先行することは明確であり，おそらく底部糸切りに伴い生じた痕跡と考えられる。**987**は口縁部・体部ナデの後にナデを潰すように口縁部が歪んでいる。糸切り後に器体をロクロから外す際に歪んだ可能性があり，成形・調整・切り離しが粘土の乾燥が進まない短時間のうちに行われたことを示唆する。

想定される製作工程　以上の観察から，製作工程を想定する。粘土紐を巻き上げて概形を作る（工程１）。口縁部（～体部？）を回転ナデ調整し端部を整える（工程２）。底部から口縁部に向かって器面を



第454図　土師質土器杯Ｅ皿形式の技法的特徴

強く押さえ付けて回転ナデを行う（工程３）。ロクロから切り離す（工程４）。見込みを不定方向にナデ調整する（工程５）。

３．分布と編年的位置付け

(1) 分布

13世紀代の土器群の中に，皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式がどの程度存在するだろうか。形態の峻別が容易な杯Ｅ形式の有無でみると，周辺遺跡（六条・上所遺跡，東山崎・水田遺跡，前田東・中村遺跡，多肥・宮尻遺跡，太田下・須川遺跡）では見出すことができない。

空港跡地遺跡においても，糸切り底の皿・杯が普遍的に認められるわけではない。Ｆ地区周辺のＥ・Ｊ地区では，報告資料による限り皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式を見出すことができない。また，Ｃ・Ｉ地区では皿ＣⅡ形式と杯ＥⅢ形式が認められるが，極めて少量にとどまる。Ｆ地区において最もこの２器種が多量に認められるのは区画１であり，各部での量的比率は第13表（第５章第４節参照）に示したように中心区画（区画１－ａ）ないしその正面の出入り口（陸橋部）付近ほど比率が高く，周辺ほど低い傾向が読み取れるようである。杯ＥⅢ形式では特にその傾向が著しく，土師質土器供膳器種に占める比率は，区画１の中心部のＳＤf18・19と区画１正面（南面）のＳＤf16南辺部で50％台，区画１の西

外縁で区画２に接したＳＤf16西辺部で31.31％と大きな開きが認められる。破片数をみてもわかることであるが，区画１の中心部（区画１－ａ）に近いほど供膳器種が増加する主な原因は，糸切り製品の多量化にあり，中心区画と糸切り底の小皿・杯との結び付きが明確に指摘できるのである。

以上のように，皿ＣⅡ形式と杯ＥⅢ形式を土師質土器の供膳器種として主体的に用いる地域は，高松平野中央～南部全体としてみてもほぼ１町単位の範囲（区画１）に限られており，その周辺部（空港跡地遺跡Ｉ地区）で少量認められ，さらにその外側の周辺遺跡では杯ＥⅢ形式に関しては皆無という分布状況にある。

(2) 編年的位置付け

共伴遺物からは，皿ＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式は中世Ⅱ－３・４期に位置付けられる。中世Ⅱ－２期や中世Ⅱ－５期の土器群中には，これらの存在を認めることができず，13世紀第２四半期～第４四半期(末葉を含まない）に盛行した土器であることがわかる。

第453図で示したような漸移的な形態のため，時期別の形態変化については必ずしも明確ではないが，ＳＤf19（中世Ⅱ－３期）とＳＴf02（中世Ⅱ－４期）の出土土器群で比較すると，口径は前者で10.5～13.8㎝，後者で10.6～13.8㎝であり，法量分布の幅は変わらない。ただし，前者の多くが11㎝台以上であること，後者の大半が10.6～10.8㎝に集中することから，縮小化傾向は認めてよいと考える。また形態的には，口縁部と体部の境が強く屈曲する一群が前者では存在するが，後者では存在しないという違いが指摘できる。つまり，形態・法量の著しい個体差は中世Ⅱ－３期での現象であり，中世Ⅱ－４期には比較的まとまるようになるといえよう。

４．系譜

(1) 糸切り技法の採用

かつて片桐孝浩氏は13世紀代の讃岐地方を，ヘラ切り地域（丸亀・坂出・国分寺平野，高松平野西部）とヘラ切り・糸切り共存地域（三豊平野・丸亀平野西部，高松平野東部以東）に大別した（片桐1992)。その根拠の一端に空港跡地遺跡での状況があったのだが，少なくとも高松平野においては，片桐氏の地域区分はより限定された局所的な現象とみた方がよい。

ただ，小皿・杯底部の糸切り技法そのものは，先行して高松平野南部においても中世Ⅱ－２期（13世紀第１四半期）には採用されている。東山崎・水田遺跡Ｅ区ＳＤ03出土土器では，既に第５章第１節で記述したようにヘラ切り底と共通した形態をもつ糸切り底の小皿・杯がみられる（第413図**4・5・14～16・18～20**)。また，空港跡地ＳＤf16出土土器（Ⅲ－２区部分：第92図）でも，糸切り底の小皿（**303・304**）と杯（**314**）が存在し，小皿はヘラ切りの皿ＢⅢ形式と同一形態である。これらの土器群では，ヘラ切りと糸切りでは形態的な近縁関係のみならず，肉眼観察では胎土も共通しており識別が難しい。つまり糸切り技法は，新たな形態と結び付いて採用されるのではなく，既存のヘラ切り製品の底部切り離し技法の一部として出現するとみた方がよいようである。その点で特定の胎土・形態・成形技法と結び付く杯ＥⅢ形式とは異なるし，杯ＥⅢ形式の祖形と捉えることはできない。

(2) 周辺地域との比較

では周辺地域において，特徴的な杯ＥⅢ形式に近似した事例を見出すことは可能であろうか。既報告資料による限り，三豊平野，阿波（吉野川下流域），伊予（松山平野），土佐，備前・備中・備後南部，安芸，播磨，摂津（西摂）などの地域では，杯ＥⅢ形式に近い形態をもつ糸切り杯は存在しない。

ただし地域を問わなければ，近似事例は存在する。相模の土師質土器皿（服部実喜氏分類Ⅰ群１類）は，外傾する体部から屈曲ないし内弯して直立・外反する口縁部をもち，第453図**868・819・614・867**に似た形態・法量である。特に鎌倉では，服部氏編年（服部1992）Ⅰｂ期～Ⅱｃ期（12世紀第４四半期～13世紀第２四半期）にⅠ群１類が盛行するようであり，屈曲する口縁部を伴う杯ＥⅢ形式がみられる中世Ⅱ－３期（13世紀第２四半期～第３四半期）と一部重複する。

資料を実見していないために，鎌倉地域の土師質土器皿との細かな異同についてはまだ整理できていない。しかし，杯ＥⅢ形式と共通した胎土をもつ手捏ねの杯（杯Ｆ形式）が，やはり周辺地域や京都などの皿形製品との系譜関係を見出し得ず，服部氏分類のⅡ群４に近いことと併せ，今後検討すべき課題といえよう。

５．想定される生産・流通形態

現状での資料による限り，杯ＥⅢ形式・皿ＣⅡ形式は先行する土師質土器との系譜関係をもたずに出現し，空港跡地遺跡ことに居館の区画１との限定された需給関係を前提に量産されたようにみえる。中世手工業生産の一般的な在り方としては，少量の貢納品生産と民需のための大量生産が想定されており，杯ＥⅢ・皿ＣⅡ形式にみられる極端な偏在傾向は明らかに異質である。また技術的には，杯の「口縁部→体部ナデ手法」や，皿の円柱作りといった特徴的な技法は共有するものの，器面の最終的な平滑化を図らない粗雑な仕上げ状況や，出現当初（中世Ⅱ－３期）の著しい形態・法量差は，ヘラ切り底の杯ＤⅡ形式の均質的な状況とは異なり，技法的まとまりの欠如と評価できる。少なくとも西村遺跡のような，技術的に熟達・安定した専業集団による製作ではない可能性が出てくる。また逆に専業集団であれば，上記のような限定された供給対象のみに拠って立つことは困難であろう。

これに関連して注目されるのが，この器種にしばしば認められる籾圧痕である。出現率を算出していないが，同等量程度存在する杯ＤⅡ・皿ＢⅢ形式では時期の下るⅡ－５期の事例（**1286**）を例外として期籾圧痕が皆無であるのに対して，杯ＥⅢ形式で２点，皿ＣⅡ形式で３点確認できた。籾圧痕を観察すると，脱穀以前の状態で胎土中に混入し，そのまま焼成されたとみられるもののみであり，籾殻としての圧痕はない。したがって想定される混入の場としては，①粘土の採掘場か②土器製作の場の何れかが考えられる。①であれば，採掘場が水田で落ち穂が発芽する以前に混入したかたちで粘土採掘が行われたことになる。また②であれば，籾の混入し易い場所で土器製作が行われていたことを示す。混入し易い場所としては，ａ．直近に籾の状態での米の貯蔵施設が存在する場所か，あるいはｂ．収穫後の作業場と土器製作の場が兼用されていた場所が考えられる。いずれのケースが妥当かはわからないが，胎土と形式との強い結び付きが指摘できるので，①も土器生産集団の問題として捉えられる。また①・②ｂは農閑期の作業を想定してよかろう。

不確定な憶測ではあるが，杯ＥⅢ・ⅢＣⅡ形式の製作者に，農閑期の操業を主体とした非専業的な集団を擬することができる可能性を提示しておきたい。それでは，居館（区画１）をほとんど唯一の対象とした需給関係の成立基盤は何であろうか。第３節で検討したように，区画１での建物配置は一定度の「公」を体現するものであり，そこでの土師質土器供膳具の使用・廃棄は村落構成員の紐帯と支配関係を確認する居館での年中行事において行われた可能性はあろう。そのような「公の場」において消費される物品の調達を，土器製造には不慣れな村落構成員の労働力の提供によって賄っていたとみることはできないだろうか。

６．おわりに

土師質土器杯ＥⅢ・ⅢＣⅡ形式の極端な偏在傾向を議論の出発点として，やや特異な限定的な生産・流通形態として捉え，検討した。当然のことながら，この器種の類例の蓄積を待って厳しく検証されるべき内容を多々含んでいるため，いまここで結論の提示にまでは至らない。またそのような特異性を際立たせる一般的（とイメージされている）な土器の流通形態についても，十瓶山・西村産製品と他者では異なった状況が考えられる。今後，具体的な土器の系統認識に基づいた，様々な流通レベルの一環として位置付ける作業を行っていきたい。

第４節　中世林地域の村落景観

１．灌漑網の遡及的検討と開発単位

ここでは集落群を取り巻いていた灌漑網の状況を，遺跡内での溝と灌漑施設の検出状況，ならびに関連史料を踏まえつつ考えてみたい。この作業を通して明確化したいことは，「村落」としての地域的結合と不可分の関係にあったとみられる灌漑網の経時的な変遷過程である。

この地域での灌漑網は，昭和19年（1945）の軍用空港の造成により埋没・廃絶しているが，検出された溝は幅・深さともに規模が大きく，空港跡地内では坪界線上でほぼ例外なく検出された。したがって，より先行する時期の溝が坪界線上に存在したとしても，痕跡を残さない事例があることも想像される。このため，より新しい時期の状況をまず明確した上で遡及的に検討を進める手続きが必要と考える。なお空港跡地全体を対象としたが，西側のＩ区（A・B，平成８～10年度調査区）を中心に未報告の調査区が存在する。このため，未報告部分については概報での時期比定に拠り，将来的には部分的な訂正の可能性もあることを付記しておく。

(1) 近世～近代

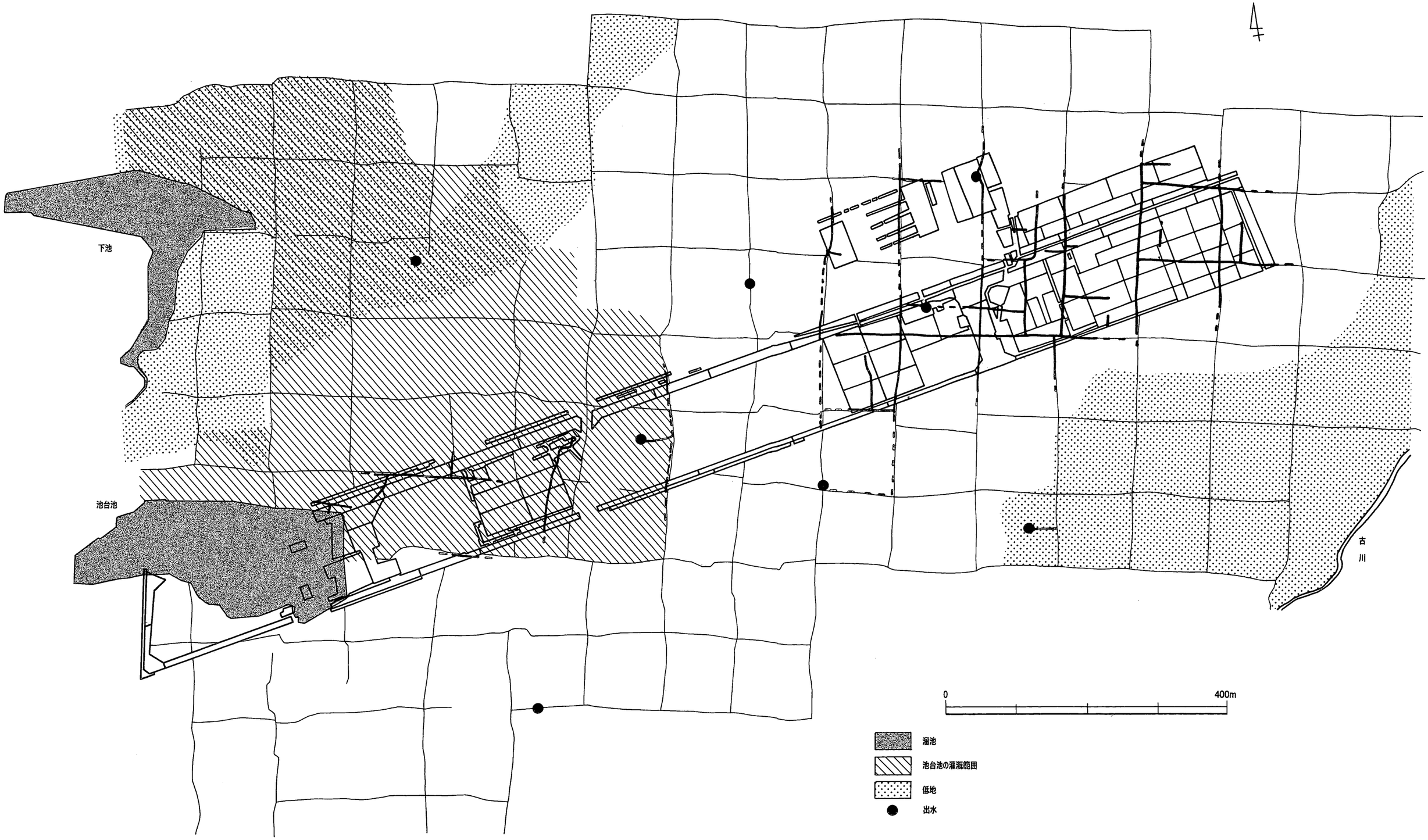
検出遺構（第455図）　Ⅲ区からⅡ区東半部にかけて条里型地割の坪界を主体として多数の溝が検出された。坪界線上では，幅２m前後，深さ0.5m前後の溝がほぼ例外なく検出された。南北方向の坪界溝は，杭列ないし石組みの護岸を伴っており，幹線的な水路として維持・管理されていたことが窺える。これに対して東西方向の坪界では，やや規模が小さい溝であったり，溝が検出されない場合もあった。したがって南北方向の溝を主体とし，東西方向の溝は配水時の補助的な役割をもっていたことが想定される。溝の多くは昭和19年に埋没したものと考えられるが，かなりの割合で18世紀以降の土器・陶磁器が認められることから，上限を18世紀代まで遡らせることが可能であろう。坪界溝から分岐する溝も多く認められ，１町ないしそれ以下の規模を単位として灌漑網が形成されているようである。

Ｉ区ではやや検出数が少なく，１町ないし１町半四方を単位として用水路とみられる溝が検出されている。池台池北側の東西方向の坪界溝は，池の樋管に連結する溝と合流しており，池台池の用水を東側に配水する機能が考えられる。

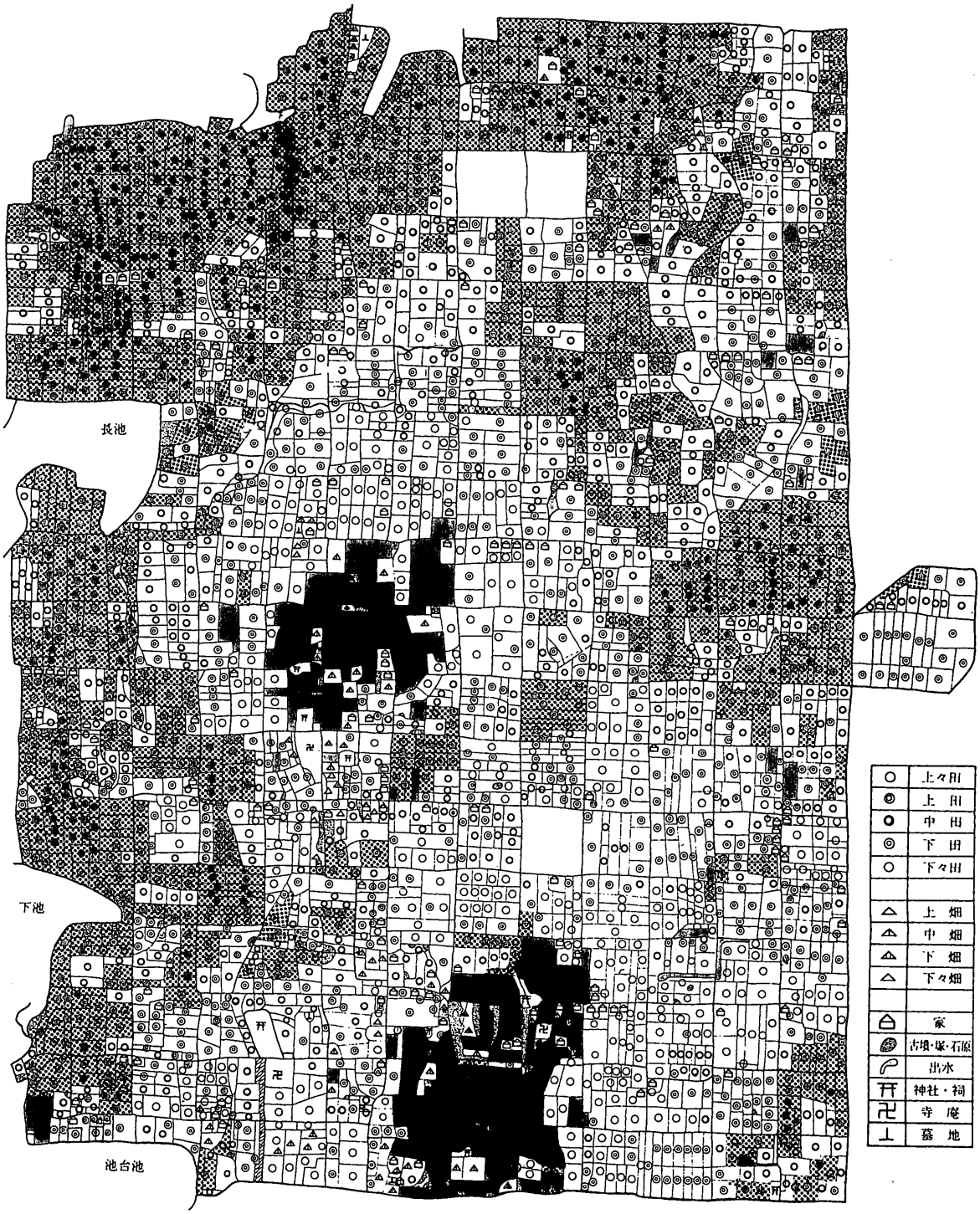
Ⅱ区西半部では，南北方向の坪界溝が１条（ＳＤc72・83）検出されたのにとどまり，溝の分布が最も希薄である。

用水源　寛政９年（1797）成立の『池泉合符録』によると，上林・下林両村ともに石高の半分以上を賄う用水源は，南方2.5㎞にある三谷三郎池であった。三郎池は寛永５年（1628）に増築されて大規模な溜池となり，その後も改修を繰り返したとされている。『山田郡下林村順道図絵』（文化15年：1819，高松市教育委員会1992）に表現された耕地の状況は，三郎池の大規模な増築と古川を跨ぐ樋管の安定的な維持を前提とするものであることに注意する必要がある。

両村の残り４割弱の石高の水源が，周辺の溜池・出水であった。下林村では長池・下池・池台池，上林村では仁池が溜池として『池泉合符録』にみえるが，いずれも西隣の上多肥村内の出水を水源とするものであった。下池・長池は，旧河道（高橋1992の旧河道Ｂ）を堰き止めた「谷池」であるが，空港



第455図　近世～近代の溝・溜池



第456図　『順道図絵』記載の「上畑」「下々田」の分布

跡地周辺は用益範囲に含まれない（石上1992）。池台池は空港跡地の西端に存在した溜池であり，立地的には「谷池」であるが，谷向かいの平井出水を水源としており，谷を跨いで配水させるために湛水することから「皿池」としての機能を有していたとみられる（金田1999）。Ⅰ－25区では池の北東隅が確認されており，池底で樋管（ユル）が検出された。池台池には3箇所にユルがあるとされており（竹ユル・上ユル・底ユル），検出されたのは底ユルと考えられる。なお，この検出部分で中世Ⅱ－5期

(13世紀末葉～14世紀前葉）の土坑が検出されていることから，池の築造は中世後半以降（おそらく近世）ということになる。

溜池を除く唯一の自己水源が出水（溜井）である。両村内には池台池や仁池の灌漑石高に匹敵する出水（下林村大井出水・上林村城ノ井出水）もあるが，他は極めて小規模なものにとどまった。空港跡地内では，Ⅲ－1・43区で出水状遺構が検出された。これらは『順道図会』に記載があるものである。Ⅲ－1区の出水状遺構は全掘しなかったので詳細は不明である。ただし，調査直前まで空港敷地内に暗渠状に湧水部が遺存していた。Ⅲ－43区の出水状遺構は，長方形プランの掘り方内に杭列護岸を施し，湧水部（井坪）には土製井筒を組み周辺に石組み護岸を施す形態である。これらは灌漑網の中に取り込まれており，複数の出水が連結して灌漑網の形成に至っているとも見受けられる。こうした形態は，Ⅲ－19・20区での出水状遺構と溝群のセットから，弥生時代後期にまで遡ることが確認でき，林・多肥・太田など，香東川扇状地末端地域での普遍的な灌漑システムといえる。

なお上林・下林村の東側縁辺には春日川の支流古川があるが，河床の下刻が著しく揚水が困難な状況であったと推測される。こうした状況は，古代末～中世初頭に生じたとみられる（高橋1992)。

灌漑網の単位　灌漑網内部における土地利用の在り方を『順道図絵』から検討する（第456図)。『順道図絵』では，田は5等級に，畑は4等級に細分されている。田では「上々田」が水捌けのよい生産性の高い水田とみられ，「下々田」が水捌けの悪い生産性の低い水田であると考えられる。また畑では「上畑」が生産性が高く「下々畑」が生産性が低いとみられることから，前者がより高燥な土地条件にあることが予想される。地形との関わりで捉えると，「上畑」→「中畑」「上々田」→「中田」→「下田」「下々田」の順に土地が低く湿潤になるものと思われる。これは，谷池である長池・下池付近の土地の起伏と上記の地目順が一致することからも首肯できる。

こうした前提でみると，遺跡西半部のうちⅡ区西半部は「上畑」が卓越しており，「家」も集中することから，微高地上にあることが予測される。発掘調査で判明した近世の削平面の標高分布（第13・14図）でも，Ⅱ区西半部から東半部に向かって急激に標高が下がる地点があり，Ⅱ区西半部が微高地であることを明確に示している。Ⅰ区では「上々田」「上田」が多いが，その中に「中畑」「家」が混在する。第13・14図では示さなかったが，Ⅰ区の近世削平面の標高はⅡ区西半部と同等か，それよりも高い。したがって，微高地上にありながら水田が多いことをむしろ問題にすべきであって，その前提として池台池の存在が不可欠であると考えられる。またⅢ区～Ⅱ区東半部では，「上々田」と「上田」が卓越している。この地域は，Ⅱ区西半部の微高地から古川に向かって傾斜するところであり，湧水が比較的容易に得られることから出水も多い。このため，上記のような耕地の等級となっているのであろう。

以上を総合すると，『順道図会』の成立した19世紀前半においてもなお，Ⅱ区西半部の水田化を行うだけの用水源の確保が困難であったとみることができる。また，Ⅰ区は池台池の構築によって，灌漑可能な地域に転化したものと思われる。しかしその水源は上多肥村の平井出水であり，水利慣行からみても（権藤1992）用益権としては相対的に弱い立場にあったようである。これに対してⅢ区～Ⅱ区東半部では，地形環境に起因する自己水源の一定度の確保（出水）によって，前2者よりも比較的容易に耕地化が達成されたと考えられる。近世・近代を通じて行われた三郎池の改修によって，3者の差異は次第に解消・統合されていったとみられるが，本来的にはⅡ区西半部を介して東側と西側では，全く異なった水利系統にあり，異なった小地域の結合単位を内在させつつ，下林「村」を形成していたと捉えられよう。

第457図　中世後半の溝と集落

(2) 中世後半

検出遺構（第457図）　溝の検出例は少なく，中世後半に限定できるものは区画３～６周辺のみに分布している。ただし区画５・６に伴う溝との連続状況から，その存在を想定せざるを得ない坪界溝（近世～近代のＳＤf94）や，中世後半の遺物が多量であることから開削が当該期にまで遡る可能性が高い坪界溝（ＳＤc72・83）がある。しかし，これらを中世後半と仮定しても溝の数は少なく，検出数の多い中世前半と近世との間を繋ぐにはあまりにもギャップが大きい。また，これらが周囲とは無関係に独立的に存在したとすると，用水源の問題も含めて灌漑網の形成には至らなかったという結論になってしまう。これを実態と認識することは困難であろう。したがって，中世前半と近世～近代の２時期に存在した坪界溝については，中世後半にも存在した可能性を考慮して破線で表示した。

以上を前提とすると，Ⅲ区～Ⅱ区東半部の坪界線では，南北方向で６条中４条，東西方向で４条中２条で溝が存在した可能性がある。近世～近代程ではないが，坪界沿いに灌漑網が整備されていた状況を窺うことができる。これに対してⅠ区の坪界線上では，南北６条中０条，東西３条中１条の溝が認められたのに過ぎないが，中世前半には南北方向の坪界溝が確認されているため，存否については正報告を待ちたい。Ⅱ区西半部では幅4.1ｍ，深さ0.74ｍを測る大規模な溝（ＳＤc83）が検出されており，近世遺物とともに15～16世紀の遺物もかなり出土しており，当該期にまで遡る可能性がある。なお，この溝は『順道図会』での地割・地目の在り方から居館の堀（区画溝）の可能性がある（２－(2)参照）が，南側でも中世後半にまで遡る可能性をもつＳＤc72があり，堀が灌漑網の一部に取り込まれている状況が指摘できる。他には当該期の溝はなく，近世同様，面的な灌漑網の形成には至っていないようである。

用水源　既述したように，池台池は中世後半には存在しなかった可能性が高く，Ⅰ区の用水源としては別の施設を考えなければならない。Ⅲ区～Ⅱ区東半部では，区画４の内部で検出された出水状遺構（ＳＥf02＋ＳＤf57:15世紀前葉～16世紀中葉）が当該期の用水源として確認できる。ＳＥf02は近世～近代の出水（ＳＤf96の水源）に近接しており，中世後半から近代に至る継続的な水源の確保が行われたことを示している。またＥ地区でも出水状遺構（ＳＸe01）があるが，中世Ⅱ－５期（13世紀末葉～14世紀前葉）を下限としており，直近に存在するＳＸe02（近世～近代）との時期的な間隙が存在することになる。ただＳＸe02出土遺物には，15世紀代の青磁碗・備前焼甕が出土しているため，ＳＸe02の開削時期が中世後半にまで引き上げられる可能性も残されている(1)。またⅢ区～Ⅱ区東半部では坪界溝の存在が想定されることは既述したが，近世同様に河床の低下が進行していたはずであるため，古川を水源としていたとは考え難い。想定坪界溝の南側には『順道図会』で存在が確認できる出水が２箇所あるため，出水を水源としていた可能性を考慮しておく必要がある。

Ⅱ区西半部では，用水源に関わる遺構は検出されていない。ただ，先述した城館状の地割（Ⅱ－４・５・12区付近）の北東隅には，19世紀に出水の存在が確認できる（『順道図会』）。発掘調査が行われていないため上限は不明であるが，城館の堀を湧水点とする出水である可能性があろう。同様な事例としては，Ⅱ区西半部南西側の上林城跡伝承地の南辺に開削された城ノ井出水がある。

灌漑網の単位　不確定な要素が多く，中世後半の灌漑単位はⅢ区～Ⅱ区東半部とⅡ区西半部に分けら

れる可能性を指摘できるのにとどまる。両者は別の用水源（出水）をもつようであるが，相互の灌漑網が全く別個に完結していたかどうかは，遺構の検出状況から推測することは困難である。

(3) 中世前半

検出遺構（第458図）　坪界溝の連続状況から，Ⅲ区～Ⅱ区東半部とⅠ区～Ⅱ区西半部に分けることが可能である。両者の間には1町半～4町の坪界溝の空白地域（Ⅱ－4・8～10・14～16区，Ⅰ－5区）が存在する。Ⅲ区～Ⅱ区東半部では，南北方向の坪界線6条中4条，東西方向の坪界線4条中3条で溝が検出されている。したがって，ほぼ1町を単位とした面的な灌漑網が形成されていたとみてよく，近世～近代の状況に近い。この灌漑網中には，13世紀第2四半期～第4四半期の居館（区画1）があり，一部既存の坪界溝を付け替えて（ＳＤf37→ＳＤf16西辺部），区画溝を設定している。またⅠ地区（Ⅲ－13・21～23区）では条里型地割とは異質で等高線に沿って延びる溝（ＳＤi35・36）がある。年代的には10～13世紀の幅でしか捉えることができないが，その方向から古川から引水してきた溝の可能性がある。古川河床の低下は，この溝の時期幅の間に進行したことが予想されるが，少なくともそれまでは古川も用水源として機能していたことを示していよう(2)。

Ⅰ区～Ⅱ区西半部では，未整理のため細かな時期の特定には至らないが，南北坪界線6条中4条，東西坪界線4条中2条で当該期ないしその可能性をもつ溝が検出された。

用水源　Ⅲ区～Ⅱ区東半部では，Ⅰ地区での溝の状況から10～13世紀のいずれかの時点までは古川が用水源の一つであったことが推測できるが，中世後半にはこのような異方位の溝は認められない。これに対して，Ｅ地区の出水状遺構ＳＸe01は中世前半には機能していたことが明確であり，坪界溝の水源としても古川の占める位置が著しく低下していたとみられることからも，出水を考えざるを得ない。したがって，Ⅲ区～Ⅱ区東半部における中世前半の灌漑網整備の方向性は，既存の「古川＋出水群」という複合した用水源を前提とした形態から，古川河床の低下を承けて専ら出水群に依存する形態へと変化しつつあったとみることができる。

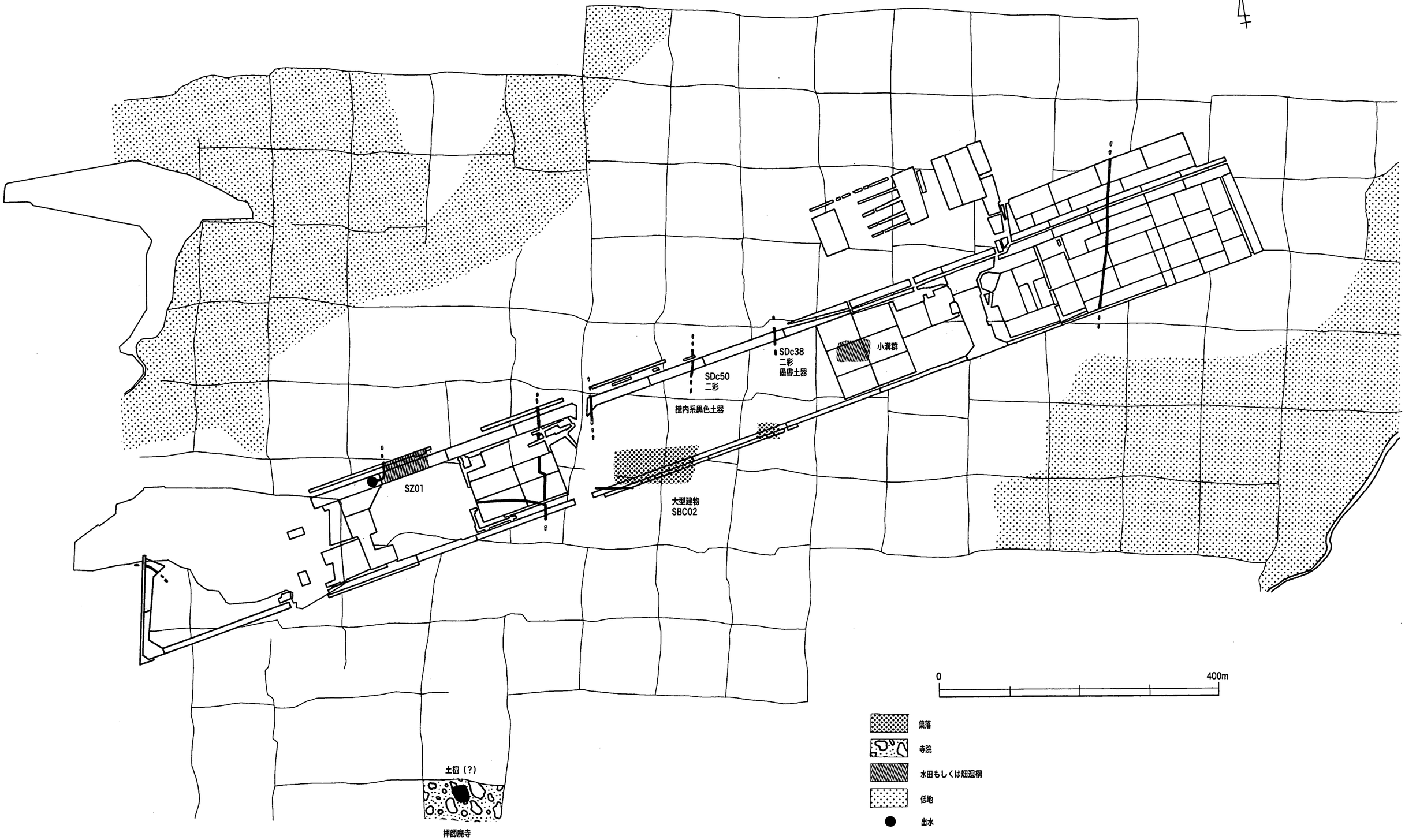
Ⅰ区～Ⅱ区西半部の用水源には，溜池（池台池・仁池）を想定できない。Ⅰ区西側には平井出水→下池→大池と連なる旧河道Ａが存在するが，近世～近代の平井出水が旧河道Ａ沿いの低地のみを灌漑するのにとどまることから，池台池が当該期まで遡らない以上，旧河道Ａ（平井出水）による灌漑は期待できないことになる。したがって，Ⅰ区の南側に別の水源を想定する必要があり，状況的には出水である可能性が考えられる。

灌漑網の単位　以上から，Ⅲ区～Ⅱ区東半部とⅠ区～Ⅱ区西半部に分けられる溝群は，少なくとも空港跡地内では相互に繋がっておらず，用水源も異にすることから，別個の灌漑網を形成していることが指摘できる。

2．建物群の結合形態と領域

1.で検討した灌漑網の状況を踏まえつつ，空港跡地全体の中世集落の分布状況を整理し，その結合形態と領域について検討する。なお，ここでいう「集落」は建物群（第3章の「区画」）の集合体を指す。「村落」は集落群と耕地などを包括し，結合させる上位概念として用いたい(3)。したがって，建物

第458図　中世前半の溝と集落



第459図　古代の溝と集落

群（区画）－集落－村落（集落群＋灌漑網・耕地＋周辺地形）という区分を取り敢えず用いることとする。

(l) 中世前半（第458図）

12～13世紀の集落分布は，Ⅲ区～Ⅱ区東半部とⅠ区に分かれる。Ⅲ区～Ⅱ区東半部では，建物群（区画）が12群分布している。建物群のうち区画１・２・７については，第２節で整理した。これらは土器編年上，複数「期」に及ぶ継続期間をもつが，他の建物群は継続期間が短い（１つの「期」の中にとどまる)。また，建物群の構成という点では，大型建物と機能分化した建物配置をもつ居館（区画１）－やや大きな小型建物とより小規模な小型建物数棟で構成されるもの（区画２・７）－小型建物１～数棟で構成されるもの（その他の建物群）という区分が可能である。これらが半ば独立的に40～50ｍの間隔をもちながら，東西６町，南北３町の範囲に緩やかに集合し，集落を形成している状況が看取できる。第２節でも述べたように，この集落は居館（区画１）の出現を契機として形成されたものではなく，むしろ居館は後出する。また先行建物群から居館への転化を指摘することも難しいので，13世紀第２四半期に集落域の中央部に突如，居館が出現したと捉えておきたい。

この集落の範囲と灌漑網の範囲は，第458図に示したように一致している。つまり，建物群相互の結合関係は，灌漑網という個別経営では維持し得ないシステムと不可分な関係にあることをよく示していると考えられる。ただし，12世紀代に中小規模の建物群が散在することを重視するならば，耕地経営の基盤はあくまで個々の建物群であるとみられ，不安定な個別経営の集積が上記のような集落形態と灌漑網に表出していると捉えられる。居館（区画１）は，こうした個別経営を踏まえつつ，灌漑網の一部を付け替え，灌漑網の一端に連なるかたちで区画溝（ＳＤf16・17）を設定しており，その居住者は用水の用益権に介在し，統合する機能を担っていたのではなかろうか。

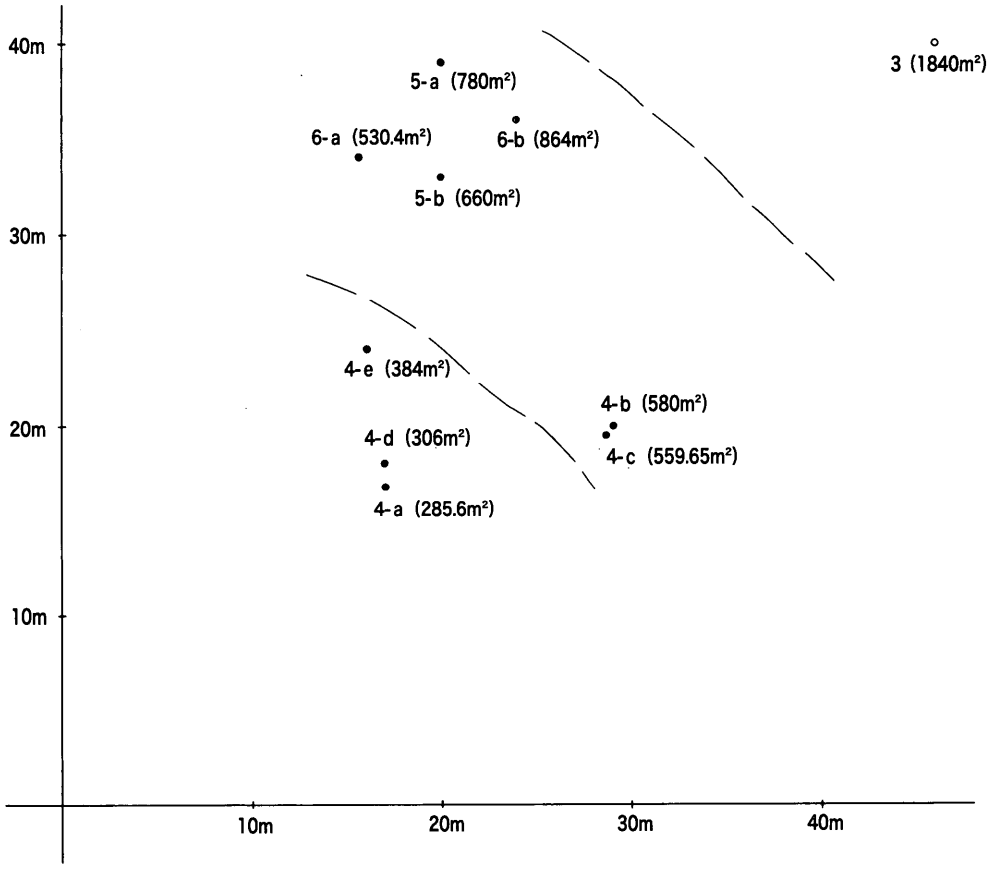
一方Ⅰ区では，Ⅰ－３・４区とⅠ－１区で建物群が検出されている。また高松市教育委員会調査のＢ地区では，中世Ⅱ－３～４期の石組井戸が検出されており，付近に建物群の存在が予測される。これらから，東西３町，南北２町の範囲に３群の建物群が緩やかに集合し，集落を形成していると捉えられる。個々の建物の年代的位置付けは本報告を待ちたいが，おそらく区画２・７と同等ないしそれ以下の規模の建物構成をとるものと思われる。集落の範囲と灌漑網の範囲は必ずしも一致せず，前者の範囲がより狭小である。ただしこれは，検出された建物群が集落の一部であることによるのではなかろうか。おそらく集落の中心は，調査区南側の拝師神社付近にあるものと考えられる。

上記のような中世前半の集落群の在り方は，古代（７～10世紀）から踏襲されてきたものではない。古代の建物群分布をみると，Ⅰ区東端部からⅡ区西半部にかけて３群前後認められ，一部重複するものの，中世前半とは異なった地域を集落域としている。この集落には，床面積40㎡以上に及ぶ可能性のある側柱建物（ＳＢc03）や30㎡を超える総柱建物（ＳＢc05）からなる８世紀代の建物群があり，また二彩（９世紀）や墨書土器（10世紀前葉），畿内からの搬入の可能性をもつ黒色土器椀（10世紀）も出土していることから，古代林地域の中心地機能の一端を担う集落と考えられる。溝群は集落域とほぼ一致した範囲で検出され，その周辺で出水状遺構を伴う水田域（Ⅰ－８・９・13区ＳＸ05・ＳＺ01）や，小溝群による小長方形区画を伴う水田域（Ⅱ－19区ＳＤ71～76）が検出されている。これら集落の東西両側の耕地は，溝群との関係で捉えるならば同一系統の灌漑網にあるとみることができる。

つまり，微高地頂部付近に巡らされた灌漑網から，その縁辺に展開する耕地への配水が行われた単線的な水利形態を指摘できるのであり，東西に分離した複線的な灌漑網と集落をもつ中世前半とは明らかに異質な在り方である。古代と中世前半の村落景観の違いは，Ⅱ区西半部を中心とした微高地頂部の土地利用形態に起因するということができる。換言するならば，微高地頂部（Ⅱ区西半部）を灌漑網に取り込める状況にあったのが古代であり，それが困難な状況下に置かれたのが中世前半ではなかったか。その原因は決して単純ではなかろうが，やはり多くは古川河床の低下による流路の固定や旧河道Ａの埋没など，水利環境を規定する用水源の変化に求められるように思う。中世前半以降の地域開発は，古代以来の灌漑システムでは超克し得なくなった微高地頂部が分断する，東西両側の微高地縁辺部の積極的な耕地化（満作化）を基軸に展開したと評価できる。集落はこのような灌漑網の変化に対応して，その領域を変えたのであろう。こうした動向を念頭に置くと，Ⅲ区～Ⅱ区東半部でみられた13世紀第１四半期の集落景観の変化（居館の出現）は，12世紀代を通じて行われた中世的な再開発の一つの到達点であるとみることができよう。

(2) 中世後半（第457図）

当該期の建物群の分布は，Ⅲ区～Ⅱ区東半部とⅡ区西半部～Ⅰ区東半部に分けられる。Ⅲ区～Ⅱ区東半部では，13世紀末葉～14世紀前葉に新たな集落が成立する。13世紀後葉（第４四半期）まで続いた居館と小規模建物群は廃絶し，隣接する地点に居館（区画３）が出現したのである。第２節で検討した



第11表　区画4の屋敷地（小区画）の規模

ように，居館の南西側の建物群（区画４）と東側の建物群（区画６）は，区画３が成立して間もない14世紀代のうちに形成されており，15世紀後葉以降には区画５の出現と区画施設（小溝ないし柵列）により明瞭に区画された屋敷地が，居館に近接して東西１町半，南北１町の範囲内にブロック状に凝集する形態となる。周辺では，Ⅲ－29・36区で中世Ⅱ－５期（13世紀末葉～14世紀前半）の建物群が検出されているが，短期間で廃絶するようである。つまり，区画３を中心とした区画４～６の他に，Ⅲ区～Ⅱ区東半部では建物群の展開をみることはできず，中世前半の散在的な建物群の集合形態から顕著な変化（建物群の凝集化）を経て中世後半の集落が成立していることがわかる。

ところで中世前半と後半の建物群の数は，12～13世紀が12群，15～16世紀が10群（区画４～６の９群と区画４－ａの北側に想定できる１区画の合計数）であり，ほぼ同数の建物群から集落が形成されていることになる。中世前半の建物群継続の不安定さを考慮する必要はあるが，中世後半の建物群の凝集は，中世前半の集落域全体を巻き込んで引き起こされたとみてよかろう。そして新たな集落の出現経緯からみて，居館（区画３）がこのような動きを主導したことは十分に想像されるところである。また３.で述べるように特定の小区画（屋敷地）にのみ西讃系統の土師質土器皿が搬入されたり，鋳造工人の「出吹き」が行われたりしており，屋敷地の構成員の一部に他地域との「流通」に関わるものも存在したことが想定できることから，千田嘉博氏のいう城郭集落化（インカステラメント）という概念と整合する部分もあるといえよう。

灌漑網との関わりをみると，溝群の及ぶ範囲は集落域をはるかに超えており，中世前半段階での開発範囲が維持されているようにみえる。したがって集落の凝集化は，耕地の縮小に起因するものではない。それよりも当該期の建物群の継続性から，個別経営が中世前半よりも安定的であったとみられることに注意する必要がある。同時に建物群の安定化が集落の「凝集」と軌を一にしているので，これを個別経営の自立化を前提とした集落内の結合強化（相互規制）というかたちで説明することは不可能ではないだろう。用水源たる出水（ＳＥf02・ＳＤf57）が建物群の中に開削され，あたかも「共有」されているかのような存在形態を示すのも，こうした見方とは矛盾しない。集落凝集化の背景には，居館の居住者からの一方的な働きかけとともに，集落構成員の主体的な動きも評価する必要があろう。

一方Ⅱ区西半部～Ⅰ区東半部では，調査区の設定上，建物群の全容が明確にできたわけではないが，東西２町，南北２町半程度の範囲に建物群が４群程度分布しているようである。中世前半に比して建物群の単位数は増加しており，これらが集合して集落を形成しているものと考えられる。しかし各建物群では，建物やピットの重複は顕著ではなく，また区画施設を伴った小範囲への凝集という傾向も認められないため，Ⅲ区～Ⅱ区東半部の状況とは異なる，やや散在的な集落形態をとるようである。Ⅰ区での細かな変遷過程は本報告を待ちたいが，Ⅱ区西半部（Ｃ地区）では14世紀代に建物群が出現し，遅くとも16世紀代には居館とみられる堀割を伴った施設が出現するとみられる。居館状の施設については，本報告（空港跡地Ⅰ）での検討が行われていないため，ここで若干記述しておく。

居館状遺構が検出されたのは，Ⅱ－５・12区である。この付近は『順道図会』では，「塚・石原」という地目が細長く，一部Ｌ字形に屈曲して延びており，１町四方の範囲を「塚・石原」が２重に巡っているようにみえる。また，一部であるが「塚・石原」の外側には，これに平行して「下田」がやはり帯状に認められる。この地割の周辺は，既述したように「上畑」が卓越する地域であり，そこに水田が認められることはやや異質である。これらをまとめると，微高地上に周囲よりも高く耕作不能な地形が帯状に連続しており，その外側には逆に周囲よりも低い湿潤な部分が平行して延びる，という景観が想定

でき，1町程度の範囲を区画する土塁と堀の存在が予測されるのである。また北東部（鬼門）に神社の存在が表記されている。さらに付近の通称地名には「居屋敷町」「上土井之町」などがあり，存在した地表面からの情報ではあらゆる点で城館の可能性を示唆しているといえる(4)。したがって考古学的には，こうした遺構が検出できているか否かが問題となる。

そこでⅡ－5・12区の検出遺構をみると，付近は，空港跡地内でも特に攪乱・削平の顕著な箇所であり，土塁の痕跡等は一切認められなかった。溝としては，坪界線上のＳＤc82・83（同一遺構と考えられる）が最大幅4.1m，深さ0.74mを測り，通常の用水路よりもやや規模が大きいことが注意される。遺物は15～16世紀の土器・陶磁器，少量の近世陶磁器を出土している。遺物の出土状況は不明だが，遺物量は中世後半が主体であり，近世遺物は最終的な埋没時期を示すものと考えられる。ところでこの溝の位置は，『順道図会』記載の「塚・石原」の西隣（すなわち想定される外側土塁の外側）にあたる。またＳＲc03は最大幅18.1m，深さ0.64mを測り，周辺地割と同じ方向をもつＬ字プランを呈しており，15～16世紀の土器・陶磁器が出土している。旧河道として報告されているが，微高地頂部に位置することから自然の河道とは考えられず，形態的に人為的な開削を示している。位置的には『順道図会』の「塚・石原」の西・南隣接地（想定される内側土塁の外側）にあたる。上記したＳＤc82・83とＳＲc03はともに想定される土塁状地割の外側に位置しており，時期的にも15～16世紀の開削とみられること，また同時期の用水路としては規模が大きいことから，城館の堀である可能性はかなり高いものと思われる。

以上の検討から，Ⅱ区西半部～Ⅰ区東半部においても居館の周辺（西側）に集落が展開する状況を想定することができる。ただし，Ⅲ区～Ⅱ区東半部のような凝集といえるような状態では集合していないことを，再度指摘しておきたい。なお『順道図会』によれば，居館の北東部にあたる位置に出水のあることが記載されている。この出水が中世後半まで遡る確証はないが，仮に遡るとすれば居館の堀が用水源を兼ねつつ灌漑網に取り込まれていたことになる。なお付け加えれば，Ⅰ区東半部の南側に所在したとされる上林城跡も南側の堀が城ノ井出水として用水源の機能を果たしており，Ⅱ－5・12区の居館とは坪界溝で繋がる灌漑網を形成しているようである。

3．流通形態

ここでは主な遺物（土器・陶磁器，鋳造関係遺物）の出土傾向の整理を通じて，上記してきたような村落内での消費活動，ならびに周辺地域との交易活動の形態について，検討してみたい。

(1) 土器・陶磁器

中世前半　第12表に，空港跡地Ｆ地区ならびに周辺遺跡における13世紀代前後の土器・陶磁器組成を示した（破片数）。既に第3節でも述べたが，居館（区画1）の中心部ほど全器種に占める土師質土器供膳具の割合が周辺地域や他遺跡よりも著しく高く，それが限定的な需給関係に立脚する糸切り製品の多量化によって実現されているのである。居館での土師質土器供膳具の高比率（全器種の70％以上）は，六条・上所遺跡や下川津遺跡にみられるような標準的な供膳具の消費量（全器種の35～40％前後）とは明らかに異質であり，しばしば指摘される頻繁な「使い捨て」が行われた可能性がある。ここ

種別			SDf19	SDf18	SDf16南辺	SDf16西辺	六条SR02	高松城SX1100	下川津
時期			Ⅱ－3	Ⅱ－2～4	Ⅱ－2～4	Ⅱ－2～4	Ⅱ－2～4	Ⅱ－1～4	Ⅱ－3
遺跡・遺構の性格			居館西面溝	居館南面溝	居館外周溝	外周・小集落	小規模集落	港湾施設	中規模集落
供膳具	土師質土器	杯（ヘラ切り）	117(29.25)	119(19.89)	111(17.39)	105(18.78)	25(29.41)	134(16.36)	67.27(22.0)
		杯（糸切り）	115(28.75)	177(29.59)	129(20.21)	37(6.61)	0(0)	0(0)	2.17(0.5)
		杯（押圧）	1(0.25)	10(1.67)	7(1.09)	0(0)	0(0)	0(0)	0 (0)
		小皿（ヘラ切り）	34(8.5)	64(10.7)	27(4.23)	28(5.0)	5(5.8)	37(4.51)	41.23(12.0)
		小皿（糸切り）	50(12.5)	51(8.52)	28(4.38)	25(4.47)	0(0)	2(0.24)	0 (0)
		椀	2(0.5)	8(1.33)	1(0.15)	2(0.35)	0(0)	2(0.24)	21.70(6.0)
		高台杯	0(0)	1(0.16)	3(0.47)	1(0.17)	0(0)	0(0)	0 (0)
	十瓶山	椀	19(4.75)	62(10.36)	88(13.79)	86(15.38)	11(12.94)	11(1.34)	52.08(15.0)
		杯	0(0)	2(0.33)	9(1.41)	0(0)	1(1.17)	0(0)	1.08(0.3)
		小皿	0(0)	0(0)	0(0)	2(0.35)	1(1.17)	2(0.24)	2.17(0.6)
	その他	吉備系椀	20(5.0)	19(3.17)	41(6.42)	23(4.11)	8(9.41)	15(1.83)	6.51(2.0)
		瓦器椀	7(1.75)	3(0.5)	12(1.88)	0(0)	3(3.52)	287(35.04)	13.02(4.0)
		瓦器皿	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	10(1.22)	1.08(0.6)
		輸入磁器	2(0.5)	9(1.5)	18(2.82)	6(0.1)	0(0)	14(1.70)	(7.0)
		黒色土器椀	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	10(1.22)	(0)
		非十瓶山系椀	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	10(1.22)	(0)
煮炊具	土師質	鍋	23(5.75)	18(3.1)	81(12.69)	144(25.76)	17(20.00)	110(13.43)	(7.0)
		甕	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	78(9.52)	(0)
		足釜	1(0.25)	18(3.1)	12(1.88)	19(3.39)	6(7.05)	1(0.12)	(8.0)
		吉備系鍋	0(0)	1(0.16)	0(0)	1(0.17)	0(0)	27(3.29)	(0)
その他		十瓶山系捏鉢	4(1.0)	13(2.17)	31(4.85)	29(5.18)	3(3.52)	8(0.97)	(5.0)
		十瓶山系甕	2(0.5)	2(0.33)	10(1.56)	14(2.5)	2(2.35)	18(2.19)	(3.0)
		その他	3(0.75)	21(3.51)	27(4.23)	37(6.61)	3(3.52)	43(5.25)	(6.9)
合計			400(100%)	598(100%)	638(100%)	559(100%)	85(100%)	819(100%)	(100%)
供膳具／全器種×100			(91.75)	(87.79)	(74.29)	(56.35)	(63.52)	(65.20)	(63.0)
土師質土器／供膳具×100			(86.92)	(81.90)	(64.55)	(62.85)	(55.55)	(32.39)	(61.0)
十瓶山系／供膳具×100			(5.17)	(12.19)	(20.46)	(27.93)	(24.07)	(2.43)	(25.5)
吉備系椀／供膳具×100			(5.44)	(3.61)	(7.00)	(7.30)	(14.81)	(2.80)	(3.00)
瓦器椀／供膳具×100			(1.90)	(0.57)	(2.05)	(0)	(5.55)	(53.74)	(6.00)
糸切り／土師質土器×100			(51.72)	(53.02)	(51.30)	(31.31)	(0)	(0.24)	(1.63)

空港跡地遺跡，六条・上所遺跡，高松城跡（西の丸町）は器種不明分を除いた破片数。
下川津遺跡は口縁部計測法（片桐 1992。各供膳具の個体数は，全供膳具 217 個体より算出）。

第12表　区画1と周辺遺跡での中世土器組成

に区画１の特異性がよく表れていよう。

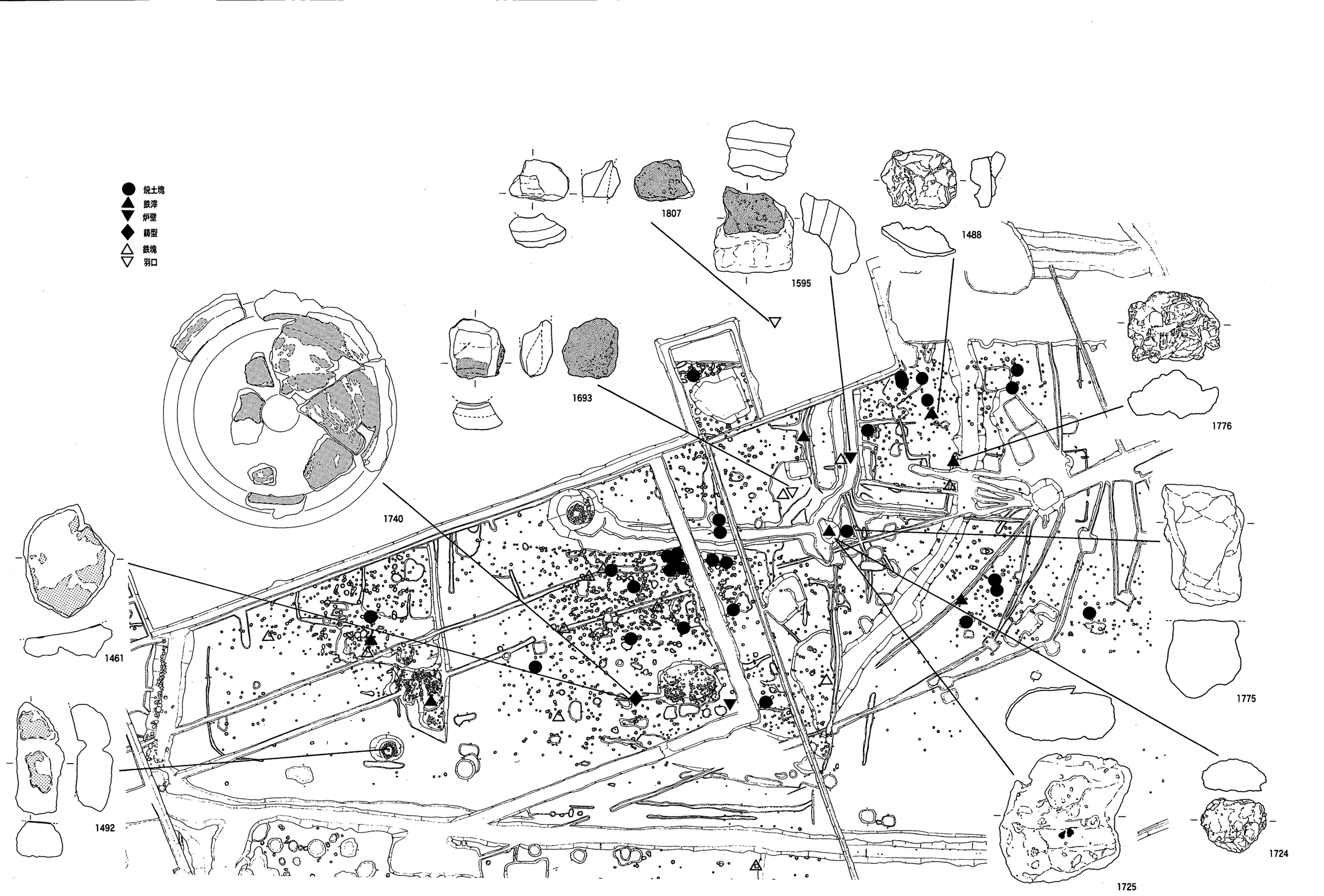
一方，他地域からの搬入品については，居館にさほどの特異性を読み取ることはできない。当該期の代表的な搬入品である和泉型瓦器椀を他遺跡と比較すると，海浜部に近く漁業を生業の一部としていたであろう小規模集落の六条・上所遺跡よりも低率であることが指摘でき，海浜部の交易拠点とみられる高松城跡（西の丸町）下層の35.04％（全器種に占める割合）にははるかに及ばない。また輸入磁器も，海浜部と内陸部の交易の接点となる下川津遺跡よりも少なく，破片点数では土器生産地の西村遺跡よりも少ない(5)。したがって，瓦器椀と輸入磁器の保有量については，建物群の階層序列とは異なった要因が規定していると考えられる。おそらく，遠隔地間流通網とどのような繋がりを保持しているかが，上記搬入品の量の格差として表れるのではなかろうか。西村遺跡で輸入磁器が多量に保有されているの

は，須恵器甕や瓦などの遠隔地流通品の生産にこの遺跡が一定度関与しており，その流通に介在する集団と直結していたためとみられる。吉備系土師質土器椀は，空港跡地では比較的高率に存在しており，橋本久和氏によって在地領主主導の経済活動によって入手したとされている（橋本1998）。しかし，他遺跡との差も数%にとどまっており，高松城跡（西の丸町）下層での瓦器椀のような大量流入ではないため，現状ではそのような観点で立論することは難しいと考える。

なお点数は少ないものの，その存否が問題となるような搬入品がある。区画１では古瀬戸灰釉四耳壺（704），常滑捏鉢（780）といった東海地方の製品である。特に前者は讃岐地方でも出土例がなく，上記搬入品とは異なる入手経路を考えるべきであろう。

この他，在地産を主体とする煮炊具（特に土師質土器鍋）の状況が注目される。県内で鍋の生産地が特定できているのは，十瓶山窯の一角に存在する西村遺跡と国分寺楠井遺跡の２箇所であるが，形態・技法から西村遺跡産とみられるもの（781・837）はごく少量であり，楠井窯産かその系統とみられるもの（第３章第３節での類別①・②に該当：173～177・179・181～183・242～250・287・288・290・457～473・691～694・887・1019・1138・1148）が多い。ただし，その中にも楠井窯ではみられない口頸部叩きを施すものがあり（462・471・473），明らかに楠井窯とは異なる生産地のものが含まれるようである。この他，楠井窯産と技法的には共通するが，口縁部の肥厚する形態が異なる一群（180・184～189・251・252）がある。これはＳＤf16西辺部上層・中層に存在し，下層では認められないことから，楠井窯の技術的影響を受けて成立した別の生産地製品の可能性がある。さらに，吉備系土師質土器鍋そのものもしくは類品が若干量出土している（291・888・920・976）が，吉備系鍋の模倣形態とみられる底部叩き目を伴う在地製品もある（254）。以上から，在地産鍋の生産地は少なくとも４群（楠井窯系の細分を含めると５群）に分けられることが指摘でき，かなり錯綜とした流通形態を反映していると思われる。丸亀平野の下川津遺跡では，楠井窯系統ないしその類品が存在する以外は，空港跡地とは全く異なった鍋が複数系統存在しており，三豊平野でも第１節で述べたように特徴的な一群が存在している。こうした現象から想定されるのは，１地域（平野単位）における生産地の分立である。ただし，複数の生産地製品の分布圏が一定度重複しながら連鎖している，という状況を看取できることが重要であり，イメージされがちな完結した「村落内の自給的生産」ではないことに注意する必要がある。今回は系統の細別作業が不十分に終わった土師質土器の杯・小皿についても同様な状況が予測でき，こうした相互に入り組んだ「モザイク的」な流通形態が在地製品の普遍的な在り方であると考える。したがって，既述した区画１周辺に限定される糸切り底の小皿・杯の存在形態は，在地製品としては異例で特殊な需給関係を示しているとみた方がよく，そこにこそ区画１の居住者の性格が顕現しているといっても過言ではない。

中世後半　14～16世紀の土器組成については集計しなかったが，煮炊具・調理具・貯蔵具の相対的な増加傾向がみられる。供膳具は，中世前半の区画１でみられるような高比率を占めなくなり，15世紀後葉～16世紀には輸入磁器や瀬戸・美濃窯製品がかなり認められるようになる。こうした傾向は，県内の各遺跡においても共通して指摘でき，空港跡地での際立った特徴はない。ただし，16世紀前葉～中葉における西讃系統の土師質土器大皿の存在（1451～1456・1460・1503・1519・1520）は，少量ながら注目される遺物である。その出土地点は区画４－ａの遺構に限定でき，特定の屋敷地（小区画）との結び付きを見出すことが可能である。その搬入背景には政治的な動向を念頭に置く意見もある（蔵本1995）が，区画４－ａの屋敷地の規模は，区画４～６の中でも最小の部類に入る



第460図　区画4における鋳造関係遺物出土地点

(第12表) こと，また出土量が少なく饗宴的な場での頻繁な使用が想定できないことから，領主間の政治的な結び付きの反映とみることは困難である。それよりも，この屋敷地の居住者と西讃地方との個別的な関係（人の往来もしくは物の移動）の中で，副次的にもたらされた可能性を考えておきたい。

ところで土師質土器鍋の流通形態は，13世紀代からどのように変化するのであろうか。15世紀後葉～16世紀中葉とみられる土器群で検討しておく。この時期の鍋の生産地は楠井窯のみが知られるが，15世紀後葉以降の状況については実態不明であり，楠井窯製品の特定は難しい。取り敢えず，次のような群別が可能であろう。①口頸部の屈曲が内面では明瞭だが，外面では不明瞭で体部と連続的にみえるもの（**1658～1660**など），②口頸部の屈曲が不明瞭であり，口縁端部を内側に折り込むもの（**1656・1657**），③足釜同様の矮小化した口鍔部をもち2個1対の把手を伴うもの（**1583・1584**など），の3群である。②は口縁部が内弯する鉄鍋模倣形態の系譜を引くものとみられ，楠井窯産の可能性があるが，量的には極めて少量である。したがって，主に①・③の2者から構成されるとみてよく，両者は形態・法量の差異から異なった機能を分担していたと考えられることから，中世前半よりも生産地（もしくは技術的な系列）の統合と生産品目の分化が進展した生産形態と，これに連動した流通形態の再編・広域化が生じたと考えられる。在地産擂鉢や輸入磁器・国産陶器の流通形態も，遺跡間の格差は中世前半ほどではなく，やはり上記したような地域内での生産・流通形態の変化を前提にした均質的な流通がもたらされたとみられる。まだ個別の事例を峻別しきれていないが，中世前半から後半への変化は模式的には流通圏の拡大と相互の重複部分の増大として理解できると考えている。

(2) 鋳造

鋳造ないし鍛冶の存在を示唆する鉄滓や羽口は，中世後半の東側集落・西側集落ともにかなり普遍的に認められる。しかし，生産に関わった場所を特定することは困難である。ここでは，特に関連遺物が集中し，その内容も比較的豊富な区画4での在り方を整理する。

区画4では，鋳型・羽口・炉壁・鉄滓といった生産用具・廃棄物と，焼土塊・鉄塊など間接的に生産に関わる可能性のある遺物が認められる（第460図）。これらの遺物は区画4－a～eの全ての地点で出土しているが，生産用具・廃棄物がセットで認められるのは区画4－c（鋳型・炉壁・鉄滓）である。また区画4－aにおいても鋳型状土製品（**1492**）や鉄滓が出土している。これらから，区画4－a・cでは鋳造作業が行われた可能性を想定してもよいと考える[(6)]。鋳型は鉄鍋（**1461・1740**）があり，炉壁片や鉄滓に付着した炉壁から小型の溶解炉が想定できるため，小型の日常品が生産されていたことが窺える。ただし，生産用具や鉄滓の出土量は少ないことから，長期間の継続的な操業と捉えることはできず，短期間の「出吹き」的な生産形態を考えるのが妥当であろう。

讃岐地方における鍛冶・鋳造の生産集団の動向については，近世の志度鋳物師が14世紀までは遡ることが判明している（小山1989）。綾歌郡飯山町の城山南麓の低丘陵部には，鋳物師原という地名があり，金宮神社が鎮座している。また綾歌郡綾南町陶の北条池にある中島では，大型の鉄滓が散布しており14世紀後半～15世紀の土器が共伴している。つまり中世後半には，鋳物ないし鍛冶集団の拠点的な生産地が形成されるようになったと思われる。しかし区画4での在り方をみると，16世紀前葉～中葉段階にも鋳造工人が村落部に出向く生産形態が継続していたことがわかり，鍛冶も含めた工人の移動は中世後半でも比較的頻繁に行われたと考えられる。

(3) 流通形態

空港跡地Ｆ地区を取り巻く流通形態には，２者の在り方が指摘できた。在地産土器と搬入土器・陶磁器の大半は，周辺遺跡との連鎖的な流通網を前提として遺跡内に持ち込まれているようである。特定器種（特に搬入土器・陶磁器）保有量の遺跡間格差は，居住階層ではなく交通関係に規定されている。また，やや特異な「流通」ではあるが，「出吹き」的な鋳造工人の生産活動も，基本的には同様な「流通」形態といえよう。

これに対し，居館（区画１）における土師質土器ⅢＣⅡ形式・杯ＥⅢ形式のみが，特殊な需給関係に立脚していることが想定でき，そこに居住者の性格がよく表れている。つまり居館の経営主体が積極的に地域内の流通活動に介在することはなく，地域内との関係を強化する機能をもつ「饗宴」に使用されたであろう土師質土器皿・杯のみ主体的に確保を図っていることが指摘できるのである。

４．村落景観の変化と中世林庄・林郷

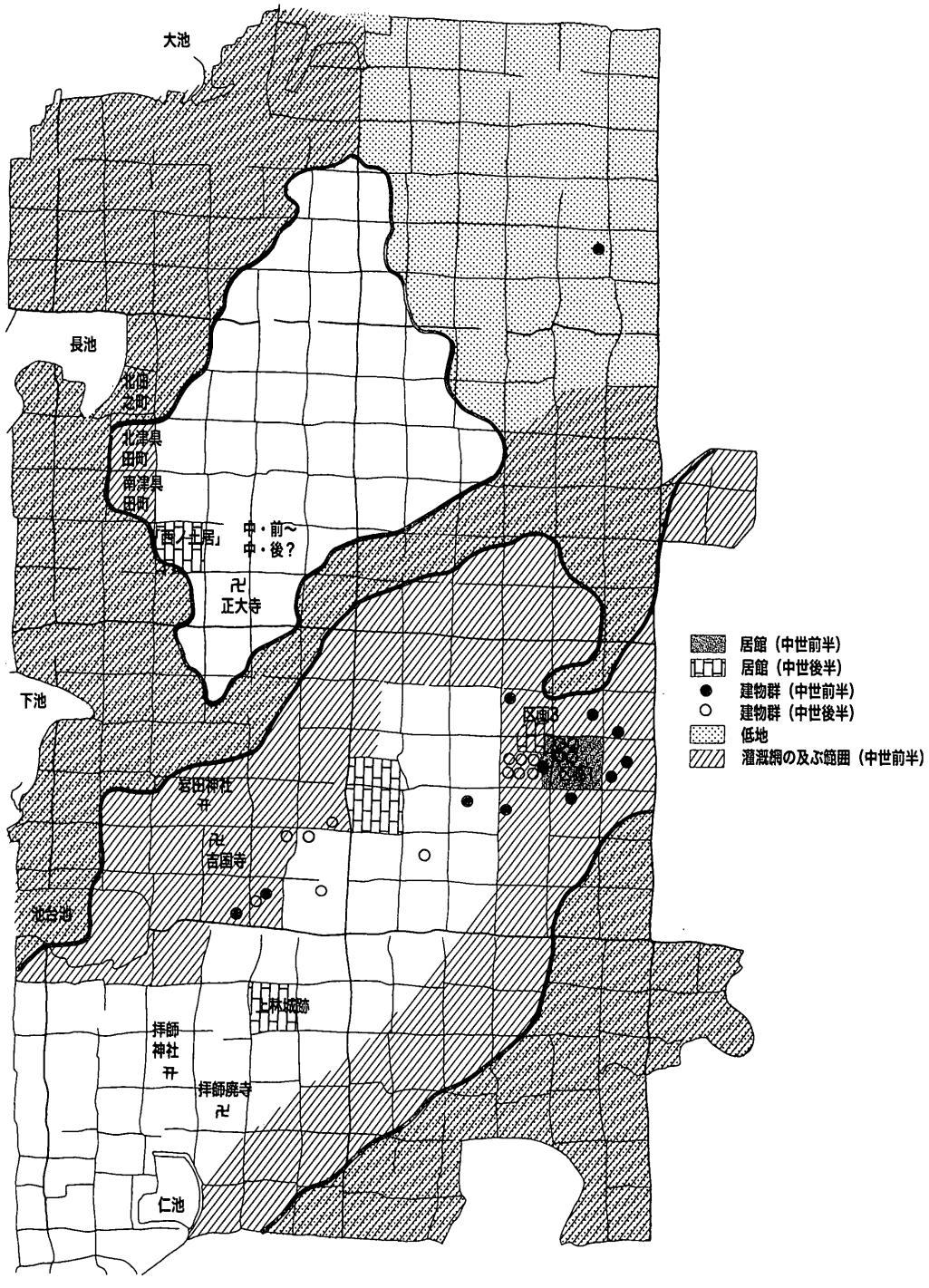
(1) 村落景観

中世林地域の地形単位　『順道図会』の土地利用形態から近世後半の微地形について，一定の見通しを読み取ることができた。すなわち「上畑」が高燥な土地を，「下田」「下々田」が湿潤な土地を示しており，前者が微高地の頂部付近，後者が埋没河道などの低地を間接的に示すようである。空港跡地周辺では陸軍飛行場造成時の土地改変が著しいが，その北側（旧下林村の北半部）では，現況の土地の起伏と一致することが確認できた。したがって『順道図会』を前提として林地域の微地形を示すと，下池東端から北東方向に低地（「下田」と「下々田」の地目の連続）が延び，これを境にして南北両側に微高地（「上畑」の集中箇所とその周辺）が存在することになる。下池から北東に延びる低地を「中央部低地」，２つの微高地を「北側微高地」「南側微高地」と呼称する。また，林地域西縁の下池・長池・大池と溜池が連続する部分（高橋1992にいう旧河道Ａ）を「西側低地」，北側微高地の東側の「下田」「下々田」の部分を「東側低地」と呼称する。１.ならびに２.で検討対象とした空港跡地遺跡の所在する微高地は，南側微高地にあたる。また，高松東道路建設に伴う発掘調査対象地である林・坊城遺跡は，「北側微高地」にあたる。

南側微高地での村落景観　空港跡地Ｆ地区を含めた南側微高地での集落形態の詳細は，既に２.－(1)・(2)で検討したので，ここでは繰り返さない。以下で問題にしたいのは，既述したような南側微高地頂部の両側に展開する中世集落群を同一村落とみてよいのか，あるいは別個の村落とみた方がよいのか，ということである。これを検出した遺構のみで検証することは難しい。

そこでまず，南側微高地における寺社の在り方を整理しておきたい。一般に寺社は中世村落構成員の精神的紐帯として重要な位置を占めていたと考えられるからである。近世以前におけるこの地域の寺院には，拝師廃寺・吉国寺・東岡寺・区画４西側の寺院（名称不明）などがある。このうち拝師廃寺は，出土瓦から平安時代の創建が考えられており，軒丸瓦ＨＹ102型式は府中山内瓦窯跡で生産されており，国分寺での軒瓦の組み合わせから10世紀の年代が付与できる（川畑1996）。近年のいくつかの調査事例から，10～11世紀に地方寺院の建立・再興という小画期を見出すことは可能であり(7)，西側低地を

挟んだ多肥地域の多肥廃寺も同様な成立事情が想定される。10世紀代の林・多肥地域は，墨書土器の存在（空港跡地ＳＤc50・Ⅱ－1区中世包含層，多肥・松林遺跡）や大型建物群の出現（汲仏遺跡）などが注目でき，これは官衙関連遺跡の変質という新たな動向（佐藤1998）に対応する要素である。このような状況が，古代前半に寺院の存在しなかった当該地域に，新たな寺院創建をもたらした背景と考えられる。吉国寺（蓮華三昧院）は，16世紀末葉以前には岩田神社の別当寺であり，神社の由緒書では15世紀に修造されたとされる。東岡寺は吉国寺の子院である（石上1992）。区画４西側の寺院は，空港跡地Ⅱ－４区にあたるが，中世に遡る寺院の存在は想定できない。拝師神社は15世紀の創建と伝えられ，岩田神社は10世紀の成立と伝えられる。同時代の史料的な裏付けがないため，これらの寺社についてはなお検討する必要があるが，明確に中世には遡らない区画４西側の寺院を除けば，いずれも南側微高地頂部から西側にかけて存在している。つまり，微高地東側に古代・中世寺社がみられないことに注目したい。



第461図　中世林地域の景観概念図

寺社の分布を踏まえて再び古代・中世の集落域をみてみよう。中世の西側集落は古代の集落域に近接しており，Ⅰ区東端部では重複している。このことから，古代集落と中世西側集落との間には，連続的な側面を認めてもよいと思う。一方，中世東側集落は古代の集落とは全く異なった位置にあるため，古代集落を直接の母胎としない新たな集落とみることができよう。中世寺社の西側集落周辺への偏在は，そのような東西２集落の関係を前提にすると理解し易く，灌漑単位を異にするものの両集落は寺社を共有した同一村落と捉えてよいと考える。

北側微高地での村落景観　北側微高地とその周辺の景観は，林・坊城遺跡や六条・上所遺跡，浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡，林浴遺跡の発掘データと『順道図会』から検討する。発掘地点は北側微高地の北半部であり，微高地頂部に及んでいないという憾みはあるが，南側微高地（空港跡地周辺）と大きく異なる現象を指摘できる。それは，微高地上（林・坊城遺跡，林・浴遺跡）では検出された溝群が10～11世紀に埋没しており，中世に開削・機能していた溝が存在しないという点である。反面，西側低地（浴・松ノ木遺跡，浴・長池Ⅱ遺跡）や東側低地（六条・上所遺跡）では，中世の水田遺構や溝が検出されている。つまり，微高地上に存在した灌漑網が古代末～中世初頭に埋没・廃絶し，中世を通じて大規模に復旧されることなく微高地縁辺ないし低地部での開発が主体であったとみることができ，南側微高地と同様な灌漑条件の変化を指摘できるのである。

北側微高地は，中央部低地によって南側微高地と一応区分されるため，全面的な灌漑網の共有は考えられない。したがって，用水源としてはおそらく少数にとどまっていたであろう出水と，多肥地域の平井出水を水源とする下池・長池，河口近くで下刻もさほど進んでいなかったとみられる古川などが考えられる。下池・長池が中世前半にまで遡る可能性があることは，第２章第１節で述べた。これらの水源で微高地縁辺～低地部の灌漑は可能であっただろうが，微高地頂部の灌漑はすぐ南側に中央部低地が迫ることから，容易ではなかったのだろう。

微高地頂部付近については実態不明であるが，頂部の南側縁辺には正大寺がある。正大寺は仁治３年(1242）に守護代長尾次郎左衛門が現在地に移転させたという（田中1989)。また正大寺の北西側には「西ノ土居町」という通称地名がある。現在の地形では正大寺に隣接する地点が周囲よりも一段高くなっており，ここに居館の存在を想定することが可能である(8)。「西ノ土居町」に対応する地名としては，南側微高地の「東戸井之町」があるが，この地名の北側に隣接して区画３が検出されている。したがって「西ノ土居町」という地名は，区画３と同時期に存在したか，あるいは近世段階に居館としての痕跡ないし伝承が存在したことを示唆しており，中世後半までは遡るといえる。上限に関しては明確ではないが，「西ノ土居町」に隣接した長池南東側に「北佃之町」「北津具田町」「南津具田町」という地名が３町分南北に連なっていることが注意される。佃は領主の直営田のことを指し，条件のよい田が宛てられたという。『順道図会』の地目では付近は「中田」「上田」が多く，「下田」「下々田」が卓越する西側低地部の地目としては確かによい条件の田である。佃は鎌倉時代末頃には直営田としての機能を失っていたとされるので，中世前半にまで遡る地名の可能性がある。とすれば，佃の経営主体とみられる「西ノ土居」も中世前半にまで遡る可能性を想定してよかろう。

以上，かなり不確定な憶測を交えたが，北側微高地での開発状況は以下のような見通しを提示できる。すなわち，中世前半には用水源の変化により微高地頂部付近の灌漑網の維持が困難になり，微高地縁辺から低地部が主な開発（満作化）の対象となった。この開発を主導したのが「西ノ土居」であり，自らの直営田を直近で経営しつつ，相前後して精神的紐帯の拠り所となる寺院（正大寺）が建立された，と。

正大寺成立の所伝の信憑性については未検証であるため，これを過大評価することは現段階では危険かもしれないが，南側微高地でも地域開発の一定度の達成を13世紀とみることができるため，ほぼ同じ開発過程を踏んでいる可能性がある。今後の発掘データの蓄積と積極的な解釈が望まれる。

(2) 林庄との関わり

まとめに代えて，述べてきたような林地域の中世村落景観を，林庄と関わらせて検討してみたい。殊更に土地制度である庄園の問題とからめるのは，庄園が単なる制度上の枠組みにとどまらず，一旦成立すれば景観や構成員の結合形態など，村落を構成する主要な要素を規定する役割を果たすとみられるからである。

林庄に関する史料　林庄は「妙法院文書」にみえる庄園である。寛元３年（1245）の公性譲状(10)によれば，妙法院門跡尊性親王が天王寺別当に任ぜられた時（嘉禄元年：1225），天王寺念仏三昧院に寄進されたという。その結果，妙法院を本家，念仏三昧院を領家とすることとなった。しかしこの時に立券されていたとはみられないことから，13世紀初頭ないしそれ以前に林庄が成立していたことが窺われる。なお寛元３年の譲状には，性寛阿闍梨が預所を努めていたことが記されている。文和３年(1353) 妙法院当知行目録案にも，念仏三昧院領としてみえる(11)。その後の状況については史料からは確認できず，得られる情報は断片的である。

庄域の想定　４.－(1)での検討を踏まえて，林庄の庄域を想定してみたい。史料からは林郷が一円化されて立庄されたのか，林郷の一部が立庄されたのかがわからない。しかし，地形単位と村落の在り方から，次の４通りの見通しが提示できる。すなわち，①北側微高地・南側微高地を包括した林郷のほぼ全域を庄域とする形態，②南側微高地とその周辺を庄域とする形態，③南側微高地にある２集落のうち，いずれかの集落とそれに伴う灌漑網の範囲を庄域とする形態，④北側微高地とその周辺を庄域とする形態，である。このうち，④では検出遺構や正大寺の建立時期からみて，北側微高地での村落結合の進捗が林庄立庄以後になるものと推測されるため，その可能性は低いものと思われる。また，③についても寺社の分布から東西２集落の村落結合が想定できるため，それを分断するような庄域の設定が継承するとは考え難く，一応可能性からは除外できる。したがって，庄域については取り敢えず①・②の可能性を考慮の内に入れて検討を進める。庄域の規模は①の場合で300町前後，②の場合で150町前後になる。

支配構造　林庄の在地支配構造について唯一手掛かりとなるのが，預所の存在である。預所は，領主から派遣されて直接現地支配にあたる庄官である。公性譲状では，妙法院各所領のそれぞれに預所職の人名が表記されている。このうち，複数の庄園の預所を努める人名は３名あり，必ずしも現地に赴いていなかった場合もあると思われるが，林庄預所の性寛は他所にはみえないため，現地支配にあたっていたとみてよいようである。預所が拠る政所の所在地(12)は，拝師廃寺・岩田神社など古代からの寺社が存在する南側微高地頂部付近であったと考えられる。ただし，空港跡地内や岩田神社付近の発掘調査（高松市教育委員会1999）では，該当するような遺構は検出されていないため，拝師廃寺周辺（中世後半には上林城跡が存在する）に政所が置かれた可能性が高い。あるいは中世前半の政所が上林城跡に踏襲されているかもしれない。

ところで，空港跡地Ｆ地区で検出された中世前半の居館（区画１）は，東西125ｍ，南北108ｍの範

囲を囲繞しており，中心区画（区画１－ａ）では主屋・厩・倉それに「庭」などから構成されており，そこで通常の消費量をはるかに超える土師質土器供膳具の使用が認められる。こうした内容は，区画１が機能分化された公的な空間をもち，「饗宴」などで主要な集落構成員との紐帯が絶えず確認されていた場所であることを示唆している。これは，庄園政所の機能（藤木1997）に通じるところがあるが，必ずしも政所のみの限定された機能とみる必要もないのではなかろうか。というのは一般的には，庄園内の階層構成を預所を頂点とした単純な縦系列であったとみる方が難しく，開発領主や領主への成長の可能性をもつ上層名主などが併存しつつ村落を構成していたとみる方が実態的であるからである。区画１の居住者は，自らの区画施設に灌漑網の一部を取り込んで，南側微高地東半部の開発を主導したと考えられ，周辺の小規模建物群居住者との間に直接的な結合関係を保っていたものと思われる。しかもまだ確定的ではないが，区画１で多量に使用された糸切り底の小皿・杯は，相模地方（ことに鎌倉）との系譜的関係の可能性が指摘でき，仮にこれが認められれば領家・本家とは異なる地域的繋がりを個別に保持していたことになる。いずれにしても，微高地頂部を介した東西両側での複線的な灌漑網による再開発は，「勧農」の実質的な体現者の分立を促した可能性があろう。預所として派遣された性寛は，以上のような集落毎に結合関係を強めていた在地の情勢を踏まえつつ，集落相互の調整を図り，より強力な支配を行使することを企図して庄務にあたったのであろう。

郡	郷	巻之六　1508	巻之八　天文年間	巻之十　1571
香西	成相	（成相）		
	坂田	坂田庄官		*坂田庄官*
香東	井原	国広右衛門佐，岩府某，漆原，油佐，河東		漆原，国広，岩部
	百相			
	多配			（乃生孫兵衛）
	太田	太田犬養，宮脇，佐藤孫七郎，（佐藤遠江）	宮脇	宮脇兵庫，宮脇弾正，太田犬養，*居石五郎兵衛*，（佐藤内蔵助）
	大野	一宮大宮司，大野名主		*一宮大宮司*
	野原	真部，楠川，雑賀，唐人弾正，片山玄蕃，仲備中岡本（岡田?），藤井	藤井，真部	藤井，雑賀，岡田丹後，真部，*楠川太郎左衛門*，唐人弾正，片山志摩，藤井太郎左衛門尉，仲飛騨守
山田	木太	真部	真部	真部
	高松		高松	
	前田			
	田井		植田氏族	
	本山	真部，三谷伊豆守	大熊備前	
	林			
	三谷		植田氏族	
	坂本			
	十川		植田氏族	
	池田	三谷兵庫頭景久	植田氏族	
	植田			
	庵治			
凡例		真部　「土居構ノ小城持」 岡本　「塹ヲ構ヘタル者」 三谷　植田衆	宮脇　香西配下 植田　植田衆	漆原　「城持ノ旗下」 *坂田*　「其村持タル者」 唐人　「香西城下名アル村主」

第13表　『南海通記』記載の領主一覧

註 (1)出水の湧水部（井坪）は，渇水などの機会に浚渫が行われ，安定的な水量の確保が図られることがある（近世の平井出水では浚渫をめぐる相論が生じている）。出水が用水源として機能する限り，このような継続的な維持・管理が行われるのはむしろ当然であると考えるが，これが結果として開削年代の検討を困難にしていることになる。ＳＸe02の場合，直近では中世後半の集落は検出されておらず，開削年代を示す可能性は考慮の内に入れてよいと考える。ただし当該期の遺物を「混入」とみるのであれば，南側100ｍの区画３～６からの二次的な移動を想定することも不可能ではない。

(2)弥生時代の溝群も位置関係から古川の旧河道（ＳＲi01・02）を水源としていたことが明確であり，古川と出水による複合した灌漑網の形成が認められる。

(3)村落と集落の関係については，①集落を村落・都市の上位概念とする見方，②集落と村落を同義とみなす見方，③集落を村落を構成する下位概念とする見方に大別できる（木村1992・桑原1985）。考古学では明確な概念規定はないが，建物の集合する居住域を慣例的に集落と呼称する場合が多い。したがって，③の見方に立って検討していきたい。

(4)『全讃史』には，上林城に林三河守実氏，中林城に岡野光資が拠り，王佐山城の三谷氏の麾下であったとされている。もとよりこの記載自体は慎重に検討する必要があるが，中林に城館が存在したという伝承が地元に存在したとみることはできよう。「中林」の範囲を限定することは難しいが，少なくともⅡ－５・12区付近の居館状の地割は確実に「中林」に含まれる。

(5)西村遺跡山原地区は，煙管状窯を伴う小規模建物数棟で構成される工人集落であるが，青磁78点（同安窯系54点，龍泉窯系21点，不明３点），白磁74点の出土が報告されている。接合作業を経た上での破片数であり，空港跡地区画１の全破片点数35点よりもはるかに超えている。

(6)２つの小区画に共通しているのは，屋敷地の南東部に礫を多量に含む浅い大型土坑が認められることであり，区画４－ａのＳＫf65では人為的な礫敷きと石列による施設が構築されていた。これらの大型土坑が鋳造に関わる遺構であるとの確証は得られなかったが，鋳造関係遺物の出土量が僅少な区画４－ｂ・ｄ・ｅでは，このタイプの遺構は検出されていない。

(7)国衙に隣接する開法寺跡では，10世紀代に僧坊が建てられた（再建か）ことが判明した。また，田村廃寺では，11世紀頃の梵鐘鋳造土坑や多数の溶解炉が検出され，この頃に寺院の本格的な再興が行われたことを推測させる。さらに始覚寺跡では，寺域に隣接して10～11世紀頃とみられる瓦窯群が検出されており，この頃に本格的な伽藍の維持活動が行われたと思われる。

(8)「西ノ土居町」は２町隔てて下池東側にもあるが，この地点は中央部低地にあたるため，居館の立地としては正大寺に隣接した地点の方が適しているといえる。下池側の「西ノ土居町」は，移動した地名の可能性があろう。

(9)千田嘉博氏はヨーロッパでの事例を参考にしつつ，城郭を中心とした城郭集落の形成（インカステラメント）という観点が日本でもあてはまるとする。そして13～15世紀の村落部での凝集化（村落型インカステラメント）と15～16世紀の都市部での凝集（都市型インカステラメント）の２つの大きな波があるとした（千田1999）。

(10)謹譲進

坊舎聖教等寺

（中略）

一　天王寺念仏三昧院

寺領

讃岐国野原庄預所朝舜律師

同　　林　庄預所性寛阿闍梨

当寺者以我皇子王孫可為此者之由，鳥羽院御手印縁起分明也，依之故二品親王御時，為此因縁奉寄進畢，於院主職者公性相伝畢，雖寄附御門跡非者違御遺誡歟，仍今度所奉附属院主職也，当時修造超過□□上人之昔建立，是則朝舜律師別忠也，且任阿弥陀仏照覧，云奉行，云寺領，努力〻〻不可違日来矣，

（中略）

右坊舎聖教田園等子細如此，雖之子細任先約，所譲進太政法印御房如件，

寛元参年四月十七日　　沙門公性（花押）

(11)註進校正了

妙法院御門跡進止寺院庄園当知行地目録

（中略）

一　天王寺念仏三昧院〻主職附当職進止相承庄〻

讃岐国野原庄　　林庄

（中略）

右門跡進止寺社諸院家領内除院直納知行庄〻飛行牢籠貽訴訟之地等，任現在等知行之実，大概註進如件，

文和二年十月　日

(12)播磨国矢野庄では，開発領主寺田氏の本拠近くに東寺政所（重藤政所）が置かれていた。政所は地域内の伝統的な中心地に置かれることが多かったものと思われる。

第５節　近代遺物からみた林村

１．はじめに

Ⅱ－17・18区の発掘調査（平成５年度）の際，多量の近世～近代遺物が出土したが，その中で特に注目したのは在地産土器と刻印瓦であった。在地土器については，平成５年度の調査概報で焙烙の大まかな変遷を検討し（佐藤1994），また関連文書や現存窯（御厩窯）の調査も進めてその成果の一部を公表した（佐藤・濱野1995）。森下友子氏も在地土器と陶磁器の共伴事例を検討しており（森下1998），編年の枠組みについては共通した認識が形成されつつある。

一方，刻印瓦については，出土量が少ないこともあり，高松城下においても系統的な整理は行われていない。刻印がごく少量にとどまるという点自体，生産・流通構造の地域的特徴として抽出できる可能性はあるが，出土した刻印瓦について年代と生産地（生産者）について整理しておく。

また，整理作業を通じてその存在が確認された近代遺物として，見込みに世界地図を印刷した磁器皿（以下「地図皿」と呼称）がある。ここではこれらの遺物の検討を通じて，農村部における「近代化」の一側面を考えてみたい。

２．刻印瓦の検討

(1) 表記内容

刻印の内容には「林善」「岡」「山（カ）田郡林村/瓦製造人/岡崎佐太郎」という３種がある。

「林善」刻印はＦ地区西端部のＳＤf92（**1973**），ＳＤf96（**2046**）から出土している。この刻印のみでは表記内容の理解が難しいが，隣接するＤ地区のⅡ－20区ＳＫ48・Ⅱ－22区ＳＫ44からは「林善右衛門」刻印瓦が出土している（佐藤1994）ことから，「林善」はその略称とみられる。ＳＤf92・96は昭和19年に廃絶しており，Ⅱ－22区ＳＫ44は共伴土器・陶磁器，また他の土坑との切り合い関係から，昭和19年以前で明治期以降と考えられる。これらの出土状況は，家屋の解体ないし葺き替えに伴い廃棄されたことによるものと思われ，当然ながら生産年代はより遡ることになる。書体をみると，「林善」刻印は楷書であるが，「林善右衛門」刻印では「林」が楷書，「善右衛門」が草書となっている。殊更に書体を変えた意図は図りかねるが，「善右衛門」という製作者の名前と峻別する必要性，つまり「林」は姓ではなく地名であった可能性を指摘できる。泉州堺や谷川での刻印瓦でも，19世紀までは「地名＋名前」が一般的であり，「地名＋姓＋名前」となるのは明治でも後半期以降のことである。これらを踏まえると，「林善」「林善右衛門」刻印瓦は明治期前半ないしそれ以前の生産年代を想定することができよう。ただし，Ⅱ－20区ＳＫ48出土の刻印瓦（軒丸瓦）の巴文をみると，18世紀代にまで引き上げるのは無理であろう。なお，「林善」刻印の２者（**1973・2046**）は，文字の大きさと細かな書体が異なることから，別々の刻印と考えられ，「林善」が２種，「林善右衛門」が１種存在することになる。これらが全くの同時期の所産か，多少の時期差を伴うものかは明確にし得ない。

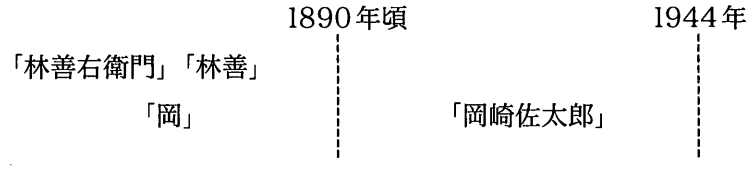
「岡」刻印は，ＳＤf92から出土した（**1975**）。出土遺構としては「林善」刻印瓦と同じである。表記内容については，この資料のみでは明確にし得ないが，生産地・製作者名（屋号・人名）のいずれ

かの可能性がある。また生産年代についても，複数の遺構から出土していないため特定することは難しく，昭和19年以前とする他はない。

「山（カ）田郡林村/瓦製造人/岡崎佐太郎」刻印（以下，「岡崎佐太郎」刻印と略称）は，ＳＤf98から出土した（2048）。出土遺構は，陸軍飛行場造成後に用地内を通る用水路として構築され，戦後に空港エプロンの整備に伴い廃絶したと考えられる。出土遺物は少量で細片が多く，用地外（上林方面）から二次的に移動してきたものであろう。したがって，出土状況からみた「岡崎佐太郎」刻印瓦の生産年代の下限は，20世紀中葉としかいえない。しかし旧林村住民からの聞き取りによれば，飛行場造成以前に上林村に瓦屋が数軒あり，そのうちの１軒が岡崎姓であったという。これより，生産年代の下限は昭和19年としてよいであろう。上限については，刻印の表記そのものが参考になる。刻印には「山（カ）田郡林村」とみえるが，近世の上林村・下林村が「林村」に統合されたのは，明治23年（1890）の市町村制施行からであり，それ以降の地名ということになる。以上から「岡崎佐太郎」刻印瓦の生産年代は，1890年～1944年の幅で捉えられる。なお先述の「岡」刻印は，「岡崎」姓の略称ではなかろうか。

(2) 刻印の系列と変遷

上記の検討から，空港跡地遺跡出土瓦の刻印には「林善右衛門」系列と「岡崎佐太郎」系列の存在が指摘できる。「林善右衛門」系列は，19世紀代（明治期後半以前）と考えられ，３種の刻印が認められるが，相互の前後関係については明確でない。「岡崎佐太郎」系列は，「岡」刻印と「山（カ）田郡林村/瓦製造人/岡崎佐太郎」刻印があり，後者は1890年～1944年の幅で捉えられることが推測できた。「岡」刻印の年代は明確でないが，「岡崎佐太郎」刻印との併用とみるよりも，それ以前の可能性を考える方が妥当であろう。したがってここでは，「岡」→「岡崎佐太郎」という変遷を想定しておきたい。とすると，次のような位置付けが提示できる。



(3) 小規模瓦生産地の出現

林村内における２系列の瓦屋の存在は，上記の聞き取りとも一致する。周辺地域での事例の検索を行っていないため，どの程度の販路を有していたかは，今後の検討課題である。

ところで香川県内では，牟礼町大町・高松市御厩町・綾南町陶・丸亀市吉岡（宇多津町鍋谷）・豊中町岡本・詫間町粟島などが近代における比較的規模の大きな瓦生産地として知られている。これら個別での検討が進んでいないため，上限を近世にまで及ぼすことが可能かどうか，必ずしも明確ではない。しかし，御厩・吉岡・岡本については近世からの土器生産地であり，瓦も併せて生産されていた可能性は十分にある。また高松・丸亀城下には「瓦町」がある。これに対して，粟島は明治期に菊間（愛媛県越智郡菊間町）からの技術伝播によって成立し，瀬戸内海の海運を生かして販路を拡大した生産地である。また高松城下の新瓦町は，近代になっても瓦屋の集住する地域であったという（木原ほか1989）。また，大町の瓦も近代には，高松市街地に搬入されていることが，高松城東ノ丸跡の調査で確認できる。そのような中にあって，19世紀段階に瓦葺き建物が急増する（森下1998）とはいえ，林村（上林・下

林村）で小規模生産地の成立を可能にした要因は，どこに求めることができるのだろうか。

まず，林村周辺で瓦粘土の採掘が活発に行われていたことが挙げられよう。粘土の搬出先については聞き取りを行っていないが，新瓦町などでは良好な粘土が採掘できないことを考慮すると，市街地の大規模生産地を対象としていた可能性がある。

また，自動車の普及以前は農村部の里道は幅が狭く，例えば御厩焼は積み出し港の香西まで手押しの「ネコ車」などで搬出されていた。したがって，市街地（城下）を中心とした求心的な交通体系の下では，一度に大量の枚数が必要となる瓦を農村部へ搬出するという「逆コース」は，かなり手間のかかることではなかったかと考えられる。

以上のように，原材料が手近に入手可能なことと，交通体系上の搬出の困難さという条件によって，農村部において周辺の需要を賄う小規模生産地が成立する余地が生じたものと考えられる。これらを踏まえ，近代の瓦生産地を以下のように整理することが可能である。つまり，交通（海運）の要衝に位置して当初より不特定多数の需要に対応する大規模生産地（生産地そのものが港に近接するⅠ－ａ類：粟島，やや内陸部に入り陸上交通での連結を必要とするⅠ－ｂ類：御厩），大消費地に近接もしくはその中にあってその地域内での大量需要に応じる大規模生産地（Ⅱ類：新瓦町，吉岡・鍋谷，大町），さらに農村部に立地して周辺での比較的限られた需要に応じる小規模生産地（Ⅲ類：林）である。

このような小規模生産地ではあるが，「岡」刻印から「山（カ）田郡林村/瓦製造人/岡崎佐太郎」への表記の変化は，注目できる現象である。つまり，姓ないし名のみ示す「屋号」的な刻印から，生産者個人を明記する刻印への変化とみることができるからである。数軒単位の小規模生産地では，仲間組織も組合組織も存在しなかったと思われる。しかしそうした状況においても，生産物に対する品質の保証という意味合いをももつ刻印が生産者名で行われているという点に，近代御厩でみられる組合（会社）組織による生産の近代化（技術改良・品質向上）に通じる意識を読み取ることはできないだろうか。

3．地図皿の検討

(1) 形態・図柄と製作・廃棄年代

地図皿（第394図**2259**，図版104）は鋳込み成形の皿であり，体部内面に英国旗と旭日旗，見込みに日本と英国の領土を誇張した世界地図（北極に旭日旗，南極に英国旗）がプリントされている。

陶磁器における鋳込み成形は，明治期に新たに採用され，明治後半期以降に普及した技法である。このため，明治期以降の製作であることは遺物自体から推測できる。また出土状態から，昭和19年を下限とすることがわかる。

図柄から，より細かな限定が可能である。プリントされた文様の意匠からまず推測できるのは，日本と英国の関係が良好な状態であったということである。明治期（特に後半）～昭和19年でこのような国際情勢が存在したのは，大正期ないし昭和初期までである。中でも日英同盟の締結期間（明治35年：1902～大正10年：1921）が両国の国際情勢に対する思惑が一致しており，このような地図皿が生産される条件が最も整った時期といえよう。見込みの「世界」地図に描かれたのは，英国と日本本土，それに朝鮮半島・台湾である。描写の状況から，朝鮮半島と台湾が日本と無関係であったとは考え難く，むしろ日本が自己の領土（植民地）と認識していた状況を示すものと思われる。そのような国際情勢が

存在したのは，台湾は日清戦争後の下関条約（1895年）以後，朝鮮半島は日露戦争後の第二次日韓協約締結（1905）以後のことである。日英との関係でみると，1905年締結の第２回日英同盟で韓国に対する日本の保護権が承認されるが，アメリカの圧力によって韓国に対する条項が削除されている（第３回日英同盟：1911年)。したがって日英関係を前提にすると，1905～1911年が最も地図皿の図柄として相応しい国際情勢が存在したことになる。地図皿の製作年代としては，この時期に高い蓋然性を認めることができよう。

地図皿は２点出土しているが，１枚はⅢ－４区（出土遺構・層位不明）から，もう１枚はⅢ－２区ＳＤf99内のバラス層（昭和19年埋没）から出土しており，出土地点としては近接する。つまり廃棄されたのは，陸軍飛行場造成時に用水路を埋め戻した際であることがわかる。

(2) 製作・保有の背景

製作の直接的な契機を示すことは難しい。だが状況的にみて，第２回日英同盟締結ないし日露戦争の戦勝と何らかの関わりがあることは間違いなかろう。出土状況からみて，複数セットで保有されていたものが，飛行場造成に伴い廃棄された可能性が高い。

ところで，この皿の生産・流通形態については全く不明だが，陸軍飛行場が造成されるまでは地方の農村部に過ぎなかった林村に複数セットでもたらされていることをどのように理解すればよいだろうか。日露開戦前の世論については，ロシア南下の圧力に対して「台湾から韓国へと植民地支配を当然のこととして期待する，帝国主義的心性の持ち主になっていたというべきであろう」と指摘されている(石井1997)。わずか数点の考古資料ではあるが，今世紀初頭の恫喝的な外交への国民の広範な支持が，このような地図皿の製作と一定期間の保有を促したとみることは許されるであろう。

４．おわりに

近代遺物については，戦跡考古学や産業考古学の一分野とされ，いくつかの貴重な成果が挙げられている。本稿はそれに及ぶべくもない粗い素描ではあるが，地方での「近代化」と民衆の意識について，発掘資料からの追求は今後も深化可能な課題であると認識している。その際注意しなければならないのは，近・現代史を検証する資料としての位置付けであり，それらの後追い的で恣意的な扱いを極力排除することである。かかる意味では，地図皿の検討は皮相的な把握に終始してしまったことは否めない。今後も検討を重ねたい。

参考文献（各章・節毎に五十音順，報告書関係は編集機関名のみ示した）

第２章

大久保徹也1995「地理的環境」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　上天神遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

川野正雄・武田　明 監修1989『日本歴史地名体系38　香川県の地名』平凡社

金田章裕1989「条里と村落生活」『香川県史１　原始・古代』香川県

高松市教育委員会1999『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　川南・西遺跡』

高橋　学1992「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

田中健二1997「熊野神社所蔵大般若経背紙文書の多配郷関係文書について」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

森　格也1993「瀬戸内地方の中世村落の展開－讃岐を中心として－」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅰ』

森下友子1992「地理的環境」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　東山崎・水田遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

第３章第２節

大久保徹也1995「上天神遺跡における弥生後期土器の構成」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　上天神遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

第３章第３節

赤羽一郎・中野晴久1994「生産地における編年について」『「中世常滑焼をおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所

尾上　実1983「南河内の瓦器椀」『藤澤一夫先生古稀記念論集古文化論叢』

木戸雅寿1995「石鍋」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

小森俊寛・上村憲章1996「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要第３号』(財)京都市埋蔵文化財研究所

佐藤竜馬1995「楠井産土器の生産技術」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第18冊　国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

藤澤良祐1995「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『(財)瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要第３輯』

山本悦代1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第６冊　鹿田遺跡３』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

1997「岡山南部における土師器鍋の変遷」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第11冊　鹿田遺跡４』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

山仲　進1989「東播系中世須恵器の分類と編年試案」『神出1986』妙見山麓遺跡調査会

横田賢次朗・森田　勉1978「大宰府出土の貿易陶磁」『九州歴史資料館研究論集４』

第３章第４節

五十川伸矢1992「古代・中世の鋳鉄鋳物」『国立歴史民俗博物館研究報告　第46集』

上田秀夫1982「14～16世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究№２』日本貿易陶磁研究会

小野正敏1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究№２』日本貿易陶磁研究会

佐藤竜馬1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第18冊　国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

篠原芳秀1987「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会

鈴木康之1996「土師質土器の編年」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ　中世瀬戸内の集落遺跡』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

藤澤良祐1991「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究報告Ⅹ』

1993「瀬戸大窯の変遷」『瀬戸市史陶磁篇四』

間壁忠彦1991『考古学ライブラリー60　備前焼』ニューサイエンス社

森田　勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究№２』日本貿易陶磁研究会

森田　稔1995「中世須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』真陽社

横田賢次朗・森本朝子・山本信夫1989「新安沈船と大宰府・博多の貿易陶磁器－森田勉氏の研究成果によせて」『貿易陶磁研究№９』日本貿易陶磁研究会

第３章第５節

大橋康二1993『考古学ライブラリー55　肥前陶磁』ニューサイエンス社

佐賀県立九州陶磁文化館1988『国内出土の肥前陶磁』

佐藤竜馬1994「18～19世紀の土器・瓦について」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成５年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

白神典之1992「堺擂鉢考」『東洋陶磁第19号』

第５章第１節

香川県教育委員会1980『一般国道32号綾南バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査　西村遺跡』

1981『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査　西村遺跡Ⅱ』

1982『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査　西村遺跡Ⅲ』

片桐孝浩1990「古代から中世にかけての土器様相－香川県における予察－」『中近世土器の基礎研究Ⅵ』日本中世土器研究会

1992ａ「讃岐国十瓶山窯製品の流通について」『中近世土器の基礎研究Ⅷ』日本中世土器研究会

1992ｂ「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大束川改修工事（津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

(財)香川県埋蔵文化財調査ｾﾝﾀｰ1990『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ　下川津遺跡』

1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第８冊　延命遺跡』
1992『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　東山崎・水田遺跡』
1992『中小河川大束川改修工事（津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』
1993『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第13冊　郡家原遺跡』
1994『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』
1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　前田東・中村遺跡』
1995『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　六条・上所遺跡』
1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第15冊 龍川四条遺跡』
1995『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第16冊 川津二代取遺跡』
1996『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第20冊 飯野東二・瓦礫遺跡』
1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　空港跡地遺跡Ⅰ』
1997『県道三谷香川線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　百相坂遺跡』
1997「高松城跡（西の丸町）の発掘調査」『高松港頭土地区画整理事業平成８年度埋蔵文化財発掘調査概報』
1998『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』
1998「佐古川・窪田遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成９年度』
1999「北内遺跡」『国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』
(財)徳島県埋蔵文化財センター1998「土井遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報 Vol.9 1997年度』
佐藤竜馬1993「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』
1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第18冊　国分寺楠井遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか
1998「十瓶山窯と亀山窯」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅵ』
1999「平安時代の土器・陶磁器研究－讃岐地方での回顧と展望－」『第18回中世土器研究会報告資料　平安時代の土器・陶磁器研究－90年代の回顧と今後の展望－』
中島恒次郎1998「西北九州からみた豊前国の食器相」『中近世土器の基礎研究ⅩⅢ』日本中世土器研究会
野中寛文1987「皿・杯・椀の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第２冊　大門遺跡・矢ノ岡遺跡・利生寺遺跡・利生寺古墳・北条遺跡・道免窯跡』香川県教育委員会
廣瀬常雄1982「西村遺跡出土の土器について（試稿）」『国道32号綾南バイパス建設工事にともなう埋蔵文化財発掘調査　西村遺跡Ⅲ』香川県教育委員会
田村久雄・渡部明夫1986「綾南町陶窯跡群採集の須恵器（二）」『香川史学第15号』香川歴史学会

第５章第２節

伊藤鄭爾1958『中世住居史』東京大学出版会

小野正敏1997『戦国城下町の考古学』講談社

橘田正徳1991「屋敷墓試論」『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会

小泉和子1996「絵巻物にみる中世住宅の寝場所」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会

古賀信幸1993「山口県山口市大内氏館跡」『日本考古学年報44（1991年度版）』日本考古学協会

千田嘉博1996「描かれた城を読む」『別冊歴史読本　城郭研究最前線』新人物往来社

玉井哲雄1996「武家住宅」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会

中井　均1991「中世の居館・寺そして村落－西国を中心として－」
『中世の城と考古学』新人物往来社

橋口定志1991「方形館はいかに成立するのか」『争点　日本の歴史４　中世編』新人物往来社

藤木久志1997「村人たちの戦場」『戦国の村を行く』朝日新聞社

宮澤智士1996「庶民住宅」『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会

山本直人1994「絵巻物による建物の一考察」『名古屋大学文学部研究論集119　史学40』

第５章第３節

片桐孝浩1992ｂ「古代から中世にかけての土器様相」『中小河川大束川改修工事（津の郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

服部実喜1992「南武蔵・相模における中世の食器様相(1)－中世初頭の様相－」『神奈川考古　第28号』
神奈川考古同人会

第５章第４節

石井　進 編1991『中世の村落と現代』吉川弘文館

石上英一1992「弘福寺領山田郡田図の史料学的分析」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会

石母田正1985『中世的世界の形成』岩波書店（文庫版，初版は1946）

稲垣泰彦 編1973『荘園の世界』東京大学出版会

香川県1986『香川県史　第８巻　資料編古代・中世史料』

川畑　聡1996『第11回特別展　讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館

木村　礎1992「日本村落史を考える」『日本村落史講座１　総論』雄山閣

金田章裕1993『微地形と中世村落』吉川弘文館

1999「高松平野における条里地割の形成」『讃岐国弘福寺領の調査Ⅱ』高松市教育委員会

蔵本晋司1995「まとめ」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成６年度』(財)香川県埋蔵文化財調査センターほか

桑原公徳1985「総論」『講座考古地理学４　村落と開発』学生社

(財)香川県埋蔵文化財調査ｾﾝﾀｰ1992『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成３年度』

1993『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成４年度』
1994『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成５年度』
1995『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成６年度』
1996『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　空港跡地遺跡Ⅰ』
1996『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成７年度』
1997『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　空港跡地遺跡Ⅱ』
1997『四国工業技術研究所増築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　空港跡地遺跡（Ｊ地区)』
1997『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成８年度』
1998『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』
1998『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成９年度』
佐藤竜馬1998「讃岐における官衙関連遺跡と集落動向」『律令国家における地方官衙遺構研究の現状と課題－南海道を中心に－』古代学協会四国支部・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
清水三男1996『日本中世の村落』岩波書店（文庫版，初版は1942）
高橋　学1992「高松平野の地形環境」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
権藤典明1992「高松平野の水利慣行」『讃岐国弘福寺領の調査』高松市教育委員会
千田嘉博1999「中世城郭都市の形成」『国立歴史民俗博物館研究報告　第77集』
高松市教育委員会1992『讃岐国弘福寺領の調査』
1999『讃岐国弘福寺領の調査・Ⅱ』
橋本久和1997「吉備系土師器椀の分布」『立命館大学考古学論集Ⅰ』

第５章第５節

石井寛治1997『日本の産業革命』朝日新聞社
佐藤竜馬1994「18～19世紀の土器・瓦」『空港跡地遺跡発掘調査概報　平成５年度』
佐藤竜馬・濱野圭司1995「近世讃岐の土器生産」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅲ』
中山治一1990「日英同盟」『國史大辞典11』吉川弘文館
森下友子1998「江戸時代以降の土器・陶磁器の特徴と年代について」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊　空港跡地遺跡Ⅲ』

空港跡地整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊

空港跡地遺跡 Ⅳ

第１分冊
平成12年３月31日　発行

編集　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
〒762－0024 香川県坂出市府中町字南谷5001番の４
電話（0877）48－2191（代表）

発行　香川県埋蔵文化財研究会

印刷　富士印刷株式会社

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊

空港跡地遺跡 Ⅳ

第２分冊

２０００．３

香川県埋蔵文化財研究会

空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊

空港跡地遺跡 Ⅳ

第２分冊

2000.3

香川県埋蔵文化財研究会

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	梁間（間）	桁行（間）	面積（㎡）	主軸方向	出土遺物	挿図番号
SHf01	Ⅱ－18	SH01	弥生後期	S-54	－	－	24.84	－	○	15～20
SBf01	Ⅱ－18	SB06	弥生後期	S-54･55	2	3	13.81	W-5° -S	－	21
SBf02	Ⅱ－18	SB05	弥生後期	T-55	1	2	8.01	N-3° -E	○	22
SBf03	Ⅱ－18	SB03	弥生後期	T-55	1	2	9.25	W-14.5° -S	○	23
SBf04	Ⅱ－18	SB04	弥生後期	T-55･56, U-55･56	1	2	14.09	W-0.5° -N	－	24
SBf05	Ⅲ－6	SB02	中世前半	P-68･69	1	3	8.84	W-11° -N	○	123
SBf06	Ⅲ－6	SB03	中世前半	Q-68･69	3	5	61.23	N-8° -E	○	124･125
SBf07	Ⅲ－6	SB04	中世前半	Q-69	1	3	23.36	N-10.5° -E	○	126･132
SBf08	Ⅲ－6	SB05	中世前半	Q-70	1	2	11.80	N-10° -E	－	127
SBf09	Ⅲ－7	SB08	中世前半	Q-68	1	2	9.09	N- 11° -E	○	128･132
SBf10	Ⅲ－7	SB06	中世前半	R-67･68, Q-68	1	4	33.73	N-12.5° -E	○	129･132
SBf11	Ⅲ－7	SB07	中世前半	R-67･68	1	5	40.06	N-10° -E	○	130･133
SBf12	Ⅲ－6	SB01	中世前半	Q-70	1	2	8.06	N-11° -E	－	131･132
SBf13	Ⅱ－24	SB05	中世前半	Q-62･63	1	4	26.09	W-14° -N	○	152･163
SBf14	Ⅱ－24	SB03	中世前半	Q-63, R-63	2	3	22.94	W-10° -N	○	153･164
SBf15	Ⅱ－24	SB04	中世前半	Q-63･64	1	2	9.66	N-6° -E	○	154
SBf16	Ⅱ－23	SB03	中世前半	Q-63	1	2	6.15	N- 18° -E	○	155
SBf17	Ⅱ－23・24	SB13	中世前半	Q-63	2	4	31.60	W-8° -N	○	156･163
SBf18	Ⅱ－23	SB02	中世前半	Q-63･64	1	2	12.54	N- 4.5° -E	○	157･163
SBf19	Ⅱ－24	SB11	中世前半	Q-63, R-63	1	3	16.27	N-6° -E	○	158
SBf20	Ⅱ－23・24	SB12	中世前半	Q-63, R-63	1	3	25.79	W-11.5° -N	○	159
SBf21	Ⅱ－23	SB04	中世前半	Q-64, R-64	(2)	(1)	－	N-11° -E	○	160･163
SBf22	Ⅱ－23	SB05	中世前半	Q-63･64, R-63･64	(2)	(2)	－	(N-10° -E)	○	161･163
SBf23	Ⅲ－1	SB01	中世前半	Q-64	1	2	11.45	W-9° -N	－	162
SBf24	Ⅲ－9	SB11	中世前半	T-67, U-67	1	2	12.64	W-8° -N	○	167
SBf25	Ⅲ－1	SB12	中世前半	U-66	1	3	6.48	W-8.5° -N	○	168･169
SBf26	Ⅱ－17	SB02	中世前半	T-59	2	3	15.12	W- 11° -N	－	170
SBf27	Ⅱ－25	SB15	中世後半	P-60	2	3	41.04	N- 15° -E	○	214･216
SBf28	Ⅱ－25	SB16	中世後半	P-60	2	2	18.34	N- 15° -E	○	215･216
SBf29	Ⅱ－25	－	中世後半	P-61･62	2	3	28.38	W- 8° -N	○	241
SBf30	Ⅱ－25	SA05	中世後半	P-61･62	3	3	36.00	W-10° -N	○	242
SBf31	Ⅱ－25	SB19	中世後半	P-61	1	2	8.89	N-11° -E	○	257
SBf32	Ⅱ－25	SB18	中世後半	P-61, Q-61	2	3	33.46	N-14.5° -E	○	258

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	梁間（間）	桁行（間）	面積（㎡）	主軸方向	出土遺物	挿図番号
SBf33	II－25	SB21	中世後半	P-61, Q-61	3	4	44.10	W-14.5°-N	○	259
SBf34	II－25	SB20	中世後半	Q-61·62	2	3	24.32	W-12°-N	○	260
SBf35	II－25	SB17	中世後半	Q-60·61	1	3	19.05	W-13°-N	○	261
SBf36	II－25	SA02	中世後半	Q-61·62	2	3	27.90	W-13°-N	○	262
SBf37	II－24	SB09	中世後半	P-62·63	2	3	24.30	W-16.5°-N	○	283
SBf38	II－24	SB06	中世後半	P-62	3	2	17.27	N-8°-E	○	284
SBf39	II－24	SB08	中世後半	P-62, Q-62	1	4	35.54	N-14°-E	－	286
SBf40	II－24	SB07	中世後半	P-62·63	2	3	25.01	W-45°-N	○	285
SBf41	II－24	SB02	中世後半	Q-62·63	3	3	24.22	W-15°-N	○	290
SBf42	III－1	SB02	中世後半	R-65	1	2	11.57	W-9°-N	○	300·301
SBf43	III－1	－	中世後半	R-64	1	2	6.72	W-8°-N	－	302
SBf44	III－1	SB06	中世後半	R-64	1	2	16.10	W-13°-N	○	303
SBf45	III－1	SB05	中世後半	S-65	2	3	27.19	N-16°-E	○	305
SBf46	III－1	SB04	中世後半	R-65, S-65	2	2	16.97	N-13°-E	－	306
SBf47	III－37	－	中世後半	P-66·67	1	2	12.75	W-2°-N	○	316
SBf48	III－37	－	中世後半	P-67	2	3	23.48	N-7.5°-E	○	317·325
SBf49	III－37	－	中世後半	P-66·67	3	3	43.28	N-17.5°-E	○	318·325
SBf50	III－37	－	中世後半	P-66·67	2	3	39.00	W-11°-N	○	319·325
SBf51	III－37	－	中世後半	P-66	2	4	52.51	N-2°-E	○	320·325
SBf52	III－37	－	中世後半	P-66·67	1	3	33.12	N-6°-E	○	321
SBf53	III－37	－	中世後半	P-66	2	2	15.68	W-5.5°-N	○	322
SBf54	III－37	－	中世後半	Q-66	2	2	10.16	W-12.5°-E	○	323·325
SBf55	III－37	－	中世後半	Q-66	1	3	17.93	N-11°-E	○	324
SBf56	III－37	－	中世後半	P-67	1	4	19.95	N-9°-E	○	327
SBf57	III－7	SB09	中世後半	Q-67	2	2	27.33	N-9.5°-E	○	329
SBf58	III－7	SB10	中世後半	Q-67	1	5	38.54	W-3.5°-E	○	328
SBf59	II－17	SB01	近世	T-58	1	2	12.15	W-11.5°-E	－	366
SBf60	II－25	SB23	近世	R-61	1	3	10.84	W-14°-N	○	367
SBf61	II－25	SB22	近世	R-61	1	2	5.71	W-15°-N	○	368
SBf62	II－25	SB01	近世？	R-63	1	4	17.68	W-11°-N	○	369

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf01	Ⅱ－18	SK140	弥生後期	S-54	楕円形	0.51	0.36	0.21	○	25～27，34～42
SKf02	Ⅱ－18	SK38	弥生後期	T-55	楕円形	2.92	2.42	0.96	○	43～45
SKf03	Ⅱ－18	SK47	弥生後期	S-55	楕円形	2.10	1.57	0.23	○	46～48
SKf04	Ⅱ－18	SH01上面土坑	弥生後期	S-54	楕円形	2.09	1.57	0.53	○	49，50
SKf05	Ⅱ－18	－	弥生後期	T-56	隅丸長方形	1.90	0.93	0.11	－	－
SKf06	Ⅱ－18	SK37	弥生後期	T-56	楕円形	1.90	0.95	0.15	－	－
SKf07	Ⅱ－17	SK26	弥生後期	T-57	隅丸長方形	1.15	0.60	0.09	－	51
SKf08	Ⅱ－17	SK27	弥生後期	T-57	隅丸長方形	1.13	0.54	0.13	－	51
SKf09	Ⅲ－1	SK07	弥生	R-65	不整楕円形	2.93	1.20	0.50	－	－
SKf10	Ⅲ－14	SK01	弥生後期	L-69	楕円形	(0.65)	(0.56)	0.09	－	－
SKf11	Ⅲ－14	SP18	弥生後期	L-69	楕円形	0.40	0.22	0.04	－	－
SKf12	Ⅲ－14	SP19	弥生後期	L-69	楕円形	0.49	0.30	0.07	－	－
SKf13	Ⅲ－14	SK02	弥生後期	L-69	楕円形	1.27	0.92	0.21	○	53
SKf14	Ⅲ－14	SK03	弥生後期	L-69	楕円形	0.65	0.53	0.10	－	－
SKf15	Ⅲ－14	SP23	弥生後期	L-69	（楕円形）	0.57	－	0.05	－	－
SKf16	Ⅲ－14	SP25	弥生後期	L-69	（楕円形）	0.61	－	0.16	○	－
SKf17	Ⅲ－14	SP24	弥生後期	L-69	楕円形	0.53	0.34	0.04	－	－
SKf18	Ⅲ－14	SK05	弥生後期	L-69	楕円形	0.93	0.44	0.19	○	－
SKf19	Ⅲ－14	SK04	弥生後期	L-69	楕円形	0.74	0.61	0.18	○	－
SKf20	Ⅲ－14	SP26	弥生後期	L-69	楕円形	0.47	0.44	0.11	－	－
SKf21	Ⅲ－14	SK06	弥生後期	L-69	楕円形	0.84	0.50	0.30	○	54
SKf22	Ⅲ－14	SX01	弥生後期	L-69	不定形	1.03	－	0.38	－	53
SKf23	Ⅲ－14	SX02	弥生後期	L-69	不定形	1.60	0.50	0.26	－	53
SKf24	Ⅲ－14	SK07	弥生後期	L-69	楕円形	0.56	0.39	0.09	－	－
SKf25	Ⅲ－14	SK08	弥生後期	L-69	楕円形	0.81	0.59	0.29	－	－
SKf26	Ⅲ－14	SK09	弥生後期	M-69	楕円形	0.67	0.43	0.06	－	－
SKf27	Ⅲ－14	SK10	弥生後期	M-69	楕円形	1.12	1.08	0.47	○	55，56
SKf28	Ⅲ－14	SK11	弥生後期	M-69	方形	0.55	0.50	0.24	○	57
SKf29	Ⅲ－14	SK14	弥生後期	M-69	不定形（溝状）	3.97	0.86	0.16	－	－
SKf30	Ⅲ－14	SK12	弥生後期	M-69，O-69	隅丸長方形	1.42	1.27	0.61	－	－
SKf31	Ⅲ－4	SK01	弥生後期	N-71	円形	1.43	－	0.20	○	59
SKf32	Ⅲ－4	SK14	弥生後期	N-71	楕円形	(0.70)	(0.51)	0.16	－	－
SKf33	Ⅲ－4	SK13	弥生後期	N-71	楕円形	0.71	0.63	0.22	－	－

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf34	Ⅲ－4	SK15	弥生後期	N-71	円形	0.49	－	0.30	－	59
SKf35	Ⅲ－4	SK16	弥生後期	N-72	円形	0.45	－	0.20	○	－
SKf36	Ⅲ－4	SK17	弥生後期	N-72	楕円形	0.47	0.37	0.35	－	－
SKf37	Ⅲ－4	SK12	弥生後期	N-71	楕円形	0.73	0.58	0.16	○	－
SKf38	Ⅲ－4	SK18	弥生後期	N-71	楕円形	7.20	5.80	0.16	－	59
SKf39	Ⅲ－4	SK19	弥生後期	N-71	楕円形	1.05	0.85	0.16	－	59
SKf40	Ⅲ－4	SK11	弥生後期	N-71	楕円形	0.89	0.70	0.33	－	－
SKf41	Ⅲ－4	SK22	弥生後期	N-71	楕円形	0.53	0.46	0.14	－	－
SKf42	Ⅲ－4	SK20	弥生後期	N-71	（楕円形）	(0.25)	0.44	0.20	－	－
SKf43	Ⅲ－4	SK23	弥生後期	N-71	楕円形	0.84	0.75	0.17	－	－
SKf44	Ⅲ－4	SK24	弥生後期	N-71	楕円形	0.70	0.57	0.17	－	－
SKf45	Ⅲ－4	SK25	弥生後期	N-71	楕円形	(0.39)	0.30	0.08	－	－
SKf46	Ⅲ－4	SK26	弥生後期	N-71	隅丸方形	0.80	－	0.19	○	－
SKf47	Ⅲ－4	SK27	弥生後期	N-71	隅丸長方形	0.79	0.65	0.13	－	－
SKf48	Ⅲ－4	SK02	弥生後期	N-71	（円形）	(0.91)	－	0.14	－	－
SKf49	Ⅲ－4	SK28	弥生後期	N-71	円形	0.70	－	0.28	－	－
SKf50	Ⅲ－4	SK29	弥生後期	N-71	楕円形	(0.53)	0.55	0.42	－	－
SKf51	Ⅲ－4	SK30	弥生後期	N-71	楕円形	(0.47)	0.56	0.39	－	－
SKf52	Ⅲ－4	SK31	弥生後期	N-71	楕円形	(0.34)	(0.39)	0.33	－	－
SKf53	Ⅲ－6	SK02	中世前半	Q-68	隅丸長方形	1.02	0.84	0.18	○	135
SKf54	Ⅲ－6	SK03	中世前半	R-69	楕円形	(1.00)	0.90	0.05	○	136
SKf55	Ⅲ－7	SK14	中世前半	R-68	隅丸方形	0.95	－	0.46	○	137
SKf56	Ⅲ－8	SK27	中世前半	T-67	不定形	(0.58)	0.58	0.08	○	138
SKf57	Ⅱ－23	SX01	中世前半	R-63	不定形	2.76	1.28	0.16	○	165
SKf58	Ⅲ－1	SK05	中世前半	Q-64，R-64	隅丸方形	1.35	1.10	0.20	○	166
SKf59	Ⅲ－14	SK13	中世前半	Q-62	隅丸方形	1.48	1.26	0.58	○	172
SKf60	Ⅱ－25	SK40	中世後半	P-60	楕円形	0.80	0.74	0.35	○	219，220
SKf61	Ⅱ－25	SK41	中世後半	P-60	不整隅丸方形	1.78	1.50	0.08	○	219
SKf62	Ⅱ－25	SX10	中世後半	Q-60	楕円形	1.06	0.38	0.08	○	219
SKf63	Ⅱ－25	SK78	中世後半	Q-60	楕円形	(1.10)	0.75	0.14	－	－
SKf64	Ⅱ－25	SK35	中世後半	Q-60	不整長方形	2.00	1.35	0.21	○	219
SKf65－a	Ⅱ－25	SX08	中世後半	Q-60	長方形	3.15	1.60	0.20	○	221～224
SKf65－b	Ⅱ－25	SX08	中世後半	Q-60	長方形	2.85	1.60	0.18	○	221～224

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf66	Ⅱ－25	SX09	中世後半	P-60	長方形	7.70	3.78	0.11	○	225，226
SKf67	Ⅱ－25	SK61	中世後半	P-61	（円形）	(0.86)	－	0.09	○	－
SKf68	Ⅱ－24	SK23	中世後半	P-62	隅丸長方形	1.10	0.74	0.07	－	－
SKf69	Ⅱ－24	SX03	中世後半	P-62，Q-62	不定形	3.43	3.24	0.14	○	250～252
SKf70	Ⅱ－25	SK45	中世後半	P-61	不整楕円形	2.56	1.96	0.12	○	220，263
SKf71	Ⅱ－25	SX12	中世後半	Q-60	楕円形	1.72	0.74	0.08	○	263
SKf72	Ⅱ－25	SK42	中世後半	Q-60	隅丸長方形	1.54	0.92	0.12	○	263
SKf73	Ⅱ－25	SK43	中世後半	Q-60	楕円形	1.53	0.97	0.13	○	263
SKf74	Ⅱ－25	SK44	中世後半	Q-60	円形	1.55	－	0.33	○	263
SKf75	Ⅱ－25	SK46	中世後半	Q-61	長方形	1.47	0.87	0.17	○	220，264
SKf76	Ⅱ－25	SK56	中世後半	Q-61	瓢箪形	1.20	0.83	0.47	○	264
SKf77	Ⅱ－25	SK49	中世後半	Q-61	不定形	1.70	0.80	0.11	－	264
SKf78	Ⅱ－25	SK55	中世後半	Q-61	楕円形	0.85	0.58	0.32	○	264
SKf79	Ⅱ－25	SK58	中世後半	Q-61	（楕円形）	(0.60)	0.57	0.28	○	220，265
SKf80	Ⅱ－25	SK60	中世後半	Q-61	楕円形	(1.07)	0.81	0.27	○	265
SKf81	Ⅱ－25	SK57	中世後半	Q-61	隅丸長方形	2.09	(0.90)	0.08	－	265
SKf82	Ⅱ－24	SK63	中世後半	Q-61・62	不定形	1.67	1.22	0.05	○	265
SKf83	Ⅱ－25	SK54	中世後半	Q-61	楕円形	0.95	0.43	0.19	○	264
SKf84	Ⅱ－25	SK47	中世後半	Q-61	隅丸長方形	0.90	0.64	0.08	○	263
SKf85	Ⅱ－25	SK53	中世後半	Q-61	楕円形	1.58	0.92	0.35	○	220，263
SKf86	Ⅱ－25	SK52	中世後半	Q-61	不定形	0.85	0.40	0.09	○	－
SKf87	Ⅱ－25	SK59	中世後半	Q-61	隅丸方形	0.55	－	0.09	－	－
SKf88	Ⅱ－25	SK48	中世後半	Q-61	楕円形	1.42	0.77	0.43	○	264
SKf89	Ⅱ－25	SX22	中世後半	Q-61	隅丸長方形	2.02	0.85	0.07	－	264
SKf90	Ⅱ－25	SX16	中世後半	Q-61	（溝状）	5.00	1.05	0.17	○	276
SKf91	Ⅱ－25	SK80	中世後半	Q-61	隅丸方形	1.00	－	0.08	－	－
SKf92	Ⅱ－25	SK79	中世後半	Q-61	隅丸長方形	1.62	0.95	0.09	－	265
SKf93	Ⅱ－25	SK50	中世後半	Q-61	楕円形	0.75	0.58	0.17	○	265
SKf94	Ⅱ－25	SK51	中世後半	Q-61	不整円形	0.88	0.72	0.03	○	265
SKf95	Ⅱ－24	SX21	中世後半	Q-61・62	不定形	2.53	1.55	0.06	－	265
SKf96	Ⅱ－24	SK62	中世後半	Q-62	不定形（溝付）	0.82	0.75	0.07	－	266
SKf97	Ⅱ－24	SK20	中世後半	Q-62	（円形）	0.85	－	0.06	－	266
SKf98	Ⅱ－24	SK19	中世後半	Q-61・62，R-62	不定形	2.33	1.63	0.21	○	266

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf99	Ⅱ－24	SK22	中世後半	R-62	不整円形	1.10	(1.08)	0.11	○	266，293
SKf100	Ⅱ－24	SX04	中世後半	Q-62	不定形	1.85	0.87	0.45	○	291，293
SKf101	Ⅱ－24	SX02	中世後半	Q-62	五角形状	2.84	2.74	0.15	○	267～269
SKf102	Ⅱ－24	SK71	中世後半	Q-62	楕円形（無花果形）	1.50	2.12	0.52	○	267，270
SKf103	Ⅱ－25	SX14	中世後半	Q-61	長方形	4.90	3.24	0.26	○	271～273
SKf104	Ⅱ－25	SX13	中世後半	Q-61·62，R-61·62	長方形	11.40	4.37	0.13	○	275，276
SKf105	Ⅱ－24	SX07	中世後半	Q-62	楕円形	8.30	3.30	0.04	○	277，278
SKf106	Ⅱ－24	SK02	中世後半	P-62	楕円形	1.08	0.90	0.04	－	287
SKf107	Ⅱ－24	SK03	中世後半	P-62	楕円形	1.04	0.78	0.07	○	287
SKf108	Ⅱ－24	SK01	中世後半	Q-62	楕円形	0.89	0.71	0.07	○	287
SKf109	Ⅱ－24	SK04	中世後半	P-62·63	楕円形	0.65	0.54	0.05	－	287
SKf110	Ⅱ－24	SK06	中世後半	P-63	隅丸方形	2.00	－	0.13	○	287，293
SKf111	Ⅱ－24	SK07	中世後半	Q-63	隅丸方形	1.43	－	0.13	○	287
SKf112	Ⅱ－24	SX06	中世後半	Q-62	円形	1.50	－	0.15	○	291
SKf113	Ⅱ－24	SK13	中世後半	Q-62	隅丸長方形	1.88	0.90	0.30	○	291
SKf114	Ⅱ－24	SK14	中世後半	Q-62	隅丸方形	1.20	－	0.30	○	291
SKf115	Ⅱ－24	SK09	中世後半	Q-62	隅丸長方形	1.40	1.12	0.17	○	291，293
SKf116	Ⅱ－24	SK12	中世後半	Q-62	楕円形	1.47	1.02	0.38	○	292，293
SKf117	Ⅱ－24	SK11	中世後半	Q-62	隅丸長方形	1.53	0.98	0.38	○	292
SKf118	Ⅱ－24	SK10	中世後半	Q-62	楕円形	(1.17)	0.99	0.10	○	291，293
SKf119	Ⅱ－24	SK08	中世後半	Q-62	楕円形	1.00	0.50	0.11	－	－
SKf120	Ⅱ－24	SK05	中世後半	Q-62	楕円形	0.78	0.65	0.06	○	292
SKf121	Ⅱ－24	SK15	中世後半	Q-62	隅丸方形	0.68	－	0.06	－	292
SKf122	Ⅱ－24	SK16	中世後半	Q-63	不定形	0.62	0.85	0.07	○	292
SKf123	Ⅱ－24	SK18	中世後半	R-62	隅丸長方形	1.30	1.05	0.28	○	384
SKf124	Ⅱ－24	SK17	中世後半	R-62	隅丸長方形	1.60	0.90	0.16	○	384
SKf125	Ⅱ－24	SK21	中世後半	R-62	隅丸方形	1.05	－	0.30	－	384
SKf126	Ⅱ－1	SK06	中世後半	O-62	長方形	2.58	1.42	0.28	○	294
SKf127	Ⅱ－1	SK07	中世後半	O-62	隅丸方形	2.10	1.86	0.20	○	294
SKf128	Ⅲ－37	SX01	中世後半	P-67	不定形	2.59	2.50	0.13	○	326
SKf129	Ⅲ－7	SK12	中世後半	Q-67	円形	0.77	－	0.30	○	330
SKf130	Ⅱ－18	SK48	近世	S-56	隅丸長方形	1.24	1.07	1.20	○	－
SKf131	Ⅱ－18	SK43	近世	T-54	不整円形	1.50	1.30	0.16	○	－

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf132	Ⅱ－18	SK44	近世	T-54	隅丸方形	1.30	－	0.54	○	－
SKf133	Ⅱ－18	SK45	近世	T-54	方形	1.90	1.80	0.33	○	370
SKf134	Ⅱ－18	SK40・41	近世	T-55，U-55	隅丸長方形	1.60	1.86	0.28	－	－
SKf135	Ⅱ－18	SK46	近世	U-55	隅丸方形	1.00	－	0.24	○	－
SKf136	Ⅱ－18	SK47	近世	U-55	長方形	1.95	1.30	0.43	○	371～373
SKf137	Ⅱ－18	－	近世	U-55	長方形	1.25	1.10	0.45	－	－
SKf138	Ⅱ－18	－	近世	U-55	長方形	(1.30)	1.20	0.15	－	－
SKf139	Ⅱ－18	－	近世	U-55	隅丸方形	2.20	－	0.31	－	－
SKf140	Ⅱ－18	SK39	近世	U-56	隅丸長方形	2.10	1.20	0.51	－	－
SKf141	Ⅱ－17	SK32	近世	S-58	円形	1.80	－	1.10	○	374
SKf142	Ⅱ－17	SK33	近世	S-58	隅丸方形	1.55	－	0.22	－	－
SKf143	Ⅱ－17	SK34	近世	S-58	隅丸方形	1.35	－	0.25	－	－
SKf144	Ⅱ－17	SK35	近世	S-58	隅丸長方形	1.90	1.45	0.53	－	－
SKf145	Ⅱ－17	SK23	近世	T-58	隅丸長方形	1.73	1.29	0.42	－	－
SKf146	Ⅱ－17	SK24	近世	T-58	楕円形	1.45	1.17	0.44	○	－
SKf147	Ⅱ－17	SK30	近世	U-58	円形	2.08	1.90	1.41	○	－
SKf148	Ⅱ－17	SK31	近世	T-59	楕円形	1.40	1.00	0.15	○	－
SKf149	Ⅱ－17	SK25	近世	T-58	楕円形	1.40	1.23	0.46	－	－
SKf150	Ⅱ－17	SK09	近世	T-58	不整円形	1.06	－	0.54	○	375
SKf151	Ⅱ－17	SK10	近世	T-58	長方形	2.95	1.45	0.09	－	－
SKf152	Ⅱ－17	SK09－2	近世	T-58	隅丸方形	0.90	0.80	0.02	○	－
SKf153	Ⅱ－17	SK07	近世	T-58	長方形	1.90	1.20	0.21	－	－
SKf154	Ⅱ－17	SK14	近世	T-58	楕円形	0.75	0.55	0.05	－	－
SKf155	Ⅱ－17	SK11	近世	T-58	楕円形	0.80	0.70	0.14	○	－
SKf156	Ⅱ－17	SK19	近世	T-58	瓢箪形	1.80	1.24	0.39	○	377
SKf157	Ⅱ－17	SK18	近世	T-58，U-58	楕円形	1.05	(0.75)	0.23	－	－
SKf158	Ⅱ－17	SK20	近世	T-58，U-58	瓢箪形	1.28	0.77	0.16	○	377
SKf159	Ⅱ－17	SK21	近世	U-58	瓢箪形	1.45	1.30	0.10	○	－
SKf160	Ⅱ－17	SK22	近世	T-58，U-58	楕円形	1.12	0.60	0.07	○	378
SKf161	Ⅱ－17	SK04	近世	T-59	楕円形	0.60	0.50	0.14	○	－
SKf162	Ⅱ－17	SK03	近世	T-59	円形	0.95	－	0.25	○	－
SKf163	Ⅱ－17	SK05	近世	T-59	楕円形	(1.00)	0.83	0.30	－	－
SKf164	Ⅱ－17	SK06	近世	T-59	円形	0.95	－	0.24	○	－

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf165	Ⅱ－17	SK01	近世	T-59	円形	1.00	－	0.30	○	376
SKf166	Ⅱ－17	SK02	近世	T-59	円形	1.42	－	1.20	－	376
SKf167	Ⅱ－17	SK12	近世	U-59	長方形	1.73	1.07	0.14	○	379
SKf168	Ⅱ－17	SK15	近世	U-59	円形	0.75	－	0.18	○	－
SKf169	Ⅱ－17	SK28	近世	U-59	円形	1.25	－	0.40	○	－
SKf170	Ⅱ－25	SK31	近世	Q-60	不整円形	1.20	－	0.31	○	381
SKf171	Ⅱ－25	SK30	近世	Q-60	楕円形	0.90	0.70	0.14	－	381
SKf172	Ⅱ－25	SX20	近世	Q-59･60	不定形	2.50	2.50	0.29	○	380，385
SKf173	Ⅱ－25	SK33	近世	Q-59	不定形	2.85	2.35	0.29	○	380
SKf174	Ⅱ－25	SK29	近世	Q-60	楕円形	1.40	1.30	0.28	○	382
SKf175	Ⅱ－25	SK34	近世	Q-60	不定形	0.83	0.50	0.30	－	382
SKf176	Ⅱ－25	SK24	近世	Q-60	隅丸長方形	1.50	1.23	0.44	○	383
SKf177	Ⅱ－25	SK28	近世	Q-60	隅丸方形	1.57	1.50	0.44	○	382，385
SKf178	Ⅱ－25	SK27	近世	Q-60	円形	1.79	－	0.52	○	383，385
SKf179	Ⅱ－25	SK26	近世	Q-60	不整楕円形	1.95	1.70	0.30	○	382
SKf180	Ⅱ－25	SK25	近世	Q-60	楕円形	1.55	1.30	0.15	○	383
SKf181	Ⅱ－25	SK66	近世	Q-60	方形	1.90	1.74	0.77	○	383
SKf182	Ⅱ－25	SK37	近世	Q-59	楕円形	2.10	1.50	0.60	○	381，385
SKf183	Ⅱ－25	SK75	近世	Q-59	楕円形	1.15	0.95	0.49	－	381
SKf184	Ⅱ－25	SK36	近世	Q-59	隅丸方形	0.83	0.80	0.39	－	381
SKf185	Ⅱ－25	SK76	近世	Q-59，R-59	隅丸方形	1.40	－	0.32	－	381
SKf186	Ⅱ－25	SK77	近世	R-59	不定形	3.80	(1.40)	0.50	－	－
SKf187	Ⅱ－25	SK70	近世	R-59	隅丸方形	1.60	1.48	0.39	○	381
SKf188	Ⅱ－25	SK69	近世	R-59	隅丸方形	0.80	－	0.10	○	382
SKf189	Ⅱ－25	SK68	近世	R-59	隅丸方形	1.50	－	0.39	－	382
SKf190	Ⅱ－25	SK67	近世	R-59･60	楕円形	1.30	0.95	0.15	－	382
SKf191	Ⅱ－25	SK81	近世	Q-60	隅丸方形	1.00	－	0.02	－	－
SKf192	Ⅱ－25	SK65	近世	Q-61，R-61	隅丸長方形	1.20	1.05	0.28	○	384
SKf193	Ⅱ－25	SK64	近世	R-61	不定形	2.25	1.45	0.25	○	－
SKf194	Ⅱ－25	SK72	近世	R-61	瓢箪形	0.85	0.75	0.03	－	－
SKf195	Ⅲ－1	SK28	近世	U-63	円形	0.80	－	0.46	－	－
SKf196	Ⅲ－1	SK29	近世	U-63	楕円形	0.60	0.50	0.40	－	－
SKf197	Ⅲ－1	SK27	近世	U-63	（楕円形）	0.60	0.70	0.13	－	－

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf198	Ⅲ－1	SK26	近世	U-63	円形	0.70	－	0.18	－	－
SKf199	Ⅲ－1	SK30	近世	U-63	隅丸長方形	(1.50)	1.30	1.06	－	－
SKf200	Ⅲ－1	SK24	近世	U-64	隅丸方形	0.85	－	0.34	－	－
SKf201	Ⅲ－1	SK25	近世	U-64	隅丸方形	1.15	－	0.56	－	－
SKf202	Ⅲ－1	SK18	近世	U-64	円形	1.30	－	0.37	－	－
SKf203	Ⅲ－1	SK19	近世	T-64	楕円形	1.05	0.90	0.10	－	－
SKf204	Ⅲ－1	SK14	近世	T-64	方形	0.70	－	0.09	－	－
SKf205	Ⅲ－1	SK13	近世	T-64	円形	0.65	－	0.28	－	－
SKf206	Ⅲ－1	SK15	近世	T-64	隅丸長方形	1.60	1.25	0.41	－	－
SKf207	Ⅲ－1	SK16	近世	T-64	楕円形	1.30	0.95	0.38	－	－
SKf208	Ⅲ－1	SK17	近世	T-64	楕円形	1.75	1.30	0.20	－	－
SKf209	Ⅲ－1	SK11	近世	T-65	楕円形	2.60	1.50	0.27	○	－
SKf210	Ⅲ－1	SK10	近世	T-65	円形	1.25	－	0.44	－	－
SKf211	Ⅲ－1	－	近世	S-65	隅丸長方形	2.25	(1.45)	0.50	－	－
SKf212	Ⅲ－1	－	近世	T-65	円形	0.95	－	0.31	－	－
SKf213	Ⅲ－1	－	近世	T-65	楕円形	0.90	0.75	0.28	－	－
SKf214	Ⅲ－1	－	近世	T-65	楕円形	0.95	0.85	0.08	－	－
SKf215	Ⅲ－1	－	近世	T-65	隅丸長方形	2.65	(1.50)	0.42	－	－
SKf216	Ⅲ－1	－	近世	T-65	楕円形	1.15	1.00	0.29	－	－
SKf217	Ⅲ－1	SK12	近世	U-65	隅丸長方形	2.70	2.25	0.77	－	－
SKf218	Ⅲ－4	SK05	近世～近代	O-71	隅丸長方形	1.20	0.75	0.41	○	－
SKf219	Ⅲ－4	SK04	近世～近代	O-71	長方形	1.00	0.85	0.11	－	－
SKf220	Ⅲ－4	SK03	近世～近代	O-71	楕円形	1.00	0.75	0.18	○	－
SKf221	Ⅲ－4	SK07	近世～近代	O-71	楕円形	1.10	0.95	0.14	－	－
SKf222	Ⅲ－4	SK06	近世～近代	O-71	隅丸方形	1.00	－	0.17	－	－
SKf223	Ⅲ－4	SK09	近世～近代	O-71	楕円形	0.80	0.65	0.25	－	－
SKf224	Ⅲ－4	SK08	近世～近代	O-71	楕円形	0.90	0.70	0.05	－	－
SKf225	Ⅲ－7	－	近世	R-67	楕円形	1.35	1.15	0.08	－	－
SKf226	Ⅲ－7	SK16	近世	R-66	（楕円形）	(1.00)	(1.00)	0.30	○	386
SKf227	Ⅲ－7	－	近世	R-67	隅丸方形	1.55	－	0.40	－	－
SKf228	Ⅲ－7	SK05	近世	R-67	楕円形	1.40	1.16	0.30	○	387
SKf229	Ⅲ－7	SK06	近世	R-67	楕円形	1.10	0.90	0.22	－	387
SKf230	Ⅲ－7	－	近世	R-67	隅丸方形	1.10	－	0.09	－	－

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	平面形態	長（m）	幅（m）	深（m）	出土遺物	挿図番号
SKf231	Ⅲ－7	SK15	近世	R-67	隅丸長方形	1.20	0.90	0.30	－	－
SKf232	Ⅲ－7	SK08	近世	R-67･68	円形	0.94	－	0.20	○	388
SKf233	Ⅲ－7	－	近世	R-68	隅丸長方形	2.00	0.80	0.28	－	－
SKf234	Ⅲ－7	SK11	近世	Q-67	長方形	2.30	1.65	0.06	－	－
SKf235	Ⅲ－8	SK37	近世	T-67	長方形	1.65	1.20	0.30	－	－
SKf236	Ⅲ－8	SK36	近世	T-67	不整円形	1.45	－	0.27	－	－
SKf237	Ⅲ－8	SK35	近世	T-67	隅丸方形	1.10	－	0.31	○	－
SKf238	Ⅲ－8	－	近世	T-67	不整円形	0.85	0.75	0.16	－	－
SKf239	Ⅲ－8	SK34	近世	T-66	隅丸方形	1.20	－	0.30	－	390
SKf240	Ⅲ－8	SK33	近世	T-66	隅丸長方形	2.60	2.30	0.25	○	390
SKf241	Ⅲ－8	SK38	近世	T-66･67	（長方形）	(1.55)	(0.80)	0.19	○	－
SKf242	Ⅲ－8	SK32	近世	T-67	長方形	1.50	1.20	0.36	○	390
SKf243	Ⅲ－8	SK31	近世	T-67	隅丸長方形	1.50	1.10	0.31	○	390
SKf244	Ⅲ－8	SK30	近世	T-67	隅丸長方形	1.50	0.76	0.08	○	331
SKf245	Ⅲ－8	SK29	近世	T-68	隅丸長方形	1.90	1.65	0.72	○	390
SKf246	Ⅲ－8	SK28	近世	U-68･69	楕円形	3.00	1.19	0.15	○	389
SKf247	Ⅲ－9	SK17	近世	U-67	隅丸方形	0.95	－	0.14	－	－
SKf248	Ⅲ－9	SK18	近世	U-67･68	楕円形	1.50	1.30	0.56	○	－
SKf249	Ⅲ－9	SK19	近世	U-68	長楕円形	(4.00)	1.50	0.77	○	－
SKf250	Ⅲ－9	SK21	近世	U-69	隅丸長方形	2.65	2.10	0.28	－	－
SKf251	Ⅲ－9	SK26	近世	U-69	隅丸長方形	(2.15)	1.10	0.28	－	－
SKf252	Ⅲ－9	SK25	近世	U-70	楕円形	1.05	0.90	0.34	－	－
SKf253	Ⅲ－9	SK22	近世	U-70	楕円形	1.05	0.40	0.07	－	－
SKf254	Ⅲ－9	SK23	近世	U-70	楕円形	0.65	0.50	0.07	－	－
SKf255	Ⅲ－38	SK03	近世	P-70	円形	0.50	－	0.09	－	－
SKf256	Ⅲ－38	SK01	近世	P-70	楕円形	1.00	0.75	0.14	－	－
SKf257	Ⅲ－38	SK02	近世	P-70	（円形）	1.55	－	0.34	○	－
SKf258	Ⅲ－38	SK05	近世	U-70	（円形）	1.60	－	0.51	○	－
SKf259	Ⅲ－38	SK06	近世	U-70	（円形）	(1.60)	－	0.38	○	－

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	幅（m）	深さ（m）	地割との関係	出土遺物	挿図番号
SDf01	Ⅱ－18	SD20	弥生後期	S-54	0.40	0.07	－	○	60
SDf02	Ⅱ－18	SD21	弥生後期	S-54	0.26	0.08	－	－	60
SDf03	Ⅱ－18	SD22	弥生後期	S-54	0.28	0.07	－	－	60
SDf04	Ⅱ－18	SD40	弥生後期	S-55	0.40	0.06	－	○	－
SDf05	Ⅱ－18	SD49	弥生後期	S-56	0.68	0.11	－	－	－
SDf06	Ⅱ－18	SD11	弥生後期	T-54·55	0.62	0.13	－	○	61
SDf07	Ⅱ－18	SD10	弥生後期	T-54·55	0.52～0.84	0.10～0.22	－	－	61
SDf08	Ⅱ－18	SD16・18	弥生後期	T-55	0.70	0.11	－	－	－
SDf09	Ⅱ－18	SD15	弥生後期	U-54	0.60	0.14	－	○	61
SDf10	Ⅱ－17	SD07	弥生後期	T-58	0.35	0.09	－	○	62
SDf11	Ⅱ－17	SD05	弥生後期	T-58	0.28	0.16	－	○	63
SDf12	Ⅱ－24・25	SD24	弥生後期	S-59·60·61·62	1.38～1.46	0.28～0.34	－	○	64
SDf13	Ⅲ－1	SD03・08	弥生後期	Q-64，R-64，T-64，U-64	0.20～1.20	0.04～0.24	－	○	－
SDf14	Ⅲ－4	SD04・17	弥生後期	N-70·71·72	0.85	0.07	－	－	－
SDf15	Ⅲ－6	SD14	弥生(?)	P-70	0.65	0.05	－	－	－
SDf16	Ⅲ－1·2·8	SD01・37	中世前半	P-65，R-64，S-64·65，T-67·68·69	2.60～3.20	0.36～0.95	南辺は坪界(東西)，東辺は坪界(南北)，西辺は平行(南北)	○	76～101
SDf17	Ⅲ－4	SD21	中世前半	N-68·69，O-69·70·71	3.45	0.41	坪界(東西)	○	102·103
SDf18	Ⅲ－6·7	SD18	中世前半	R-67	2.88	0.52	平行(東西)	○	104～111
SDf19	Ⅲ－7	SD20	中世前半	P-68，Q-67·68，R-67	0.50～1.40	0.06～0.25	平行(南北)	○	112～114·116
SDf20	Ⅲ－7	SD21	中世前半	P-68	0.10～0.26	0.01～0.05	平行(南北)	○	115
SDf21	Ⅲ－7	SD22	中世前半	P-68	0.10～0.26	0.01～0.05	平行(南北)	－	115
SDf22	Ⅲ－7	SD23	中世前半	Q-67·68	0.64～0.68	0.14～0.18	平行(南北)	○	116
SDf23	Ⅲ－7	SD30	中世前半	Q-67，R-67	0.63	0.13	平行(東西·南北)	○	116～118
SDf24	Ⅲ－6	SD05	中世前半	P-70，Q-69·70	0.52～0.68	0.04～0.12	平行(南北)	○	119
SDf25	Ⅲ－6	SD15	中世前半	P-69	1.10～3.75	0.15～0.30	平行(東西·南北)	○	120·121
SDf26	Ⅲ－8	SD39	中世前半	S-67，T-67	0.58	0.08	平行(南北)	○	122
SDf27	Ⅲ－8	SD40	中世前半	S-68，T-67·68	0.84	0.08	平行(南北)	○	122
SDf28	Ⅲ－8	SD41	中世前半	T-67	0.57	0.06	平行(南北)	○	122
SDf29	Ⅲ－8	SD43	中世前半	T-69	0.42	0.06	平行(南北)	○	122
SDf30	Ⅲ－8	SD38	中世前半	T-67，U-67	1.00～1.30	0.26～0.28	平行(南北)	○	122
SDf31	Ⅲ－2·6·7·37	SD03・04	中世前半	P-64·65·66，Q-66·67·68	0.65～1.00	0.22～0.32	平行(東西)	○	146·174
SDf32	Ⅲ－6·7	SD17	中世前半	Q-66·67，R-67·68·69	0.80	0.31	平行(東西)	○	147·148
SDf33	Ⅲ－6	SD09	中世前半	P-69，Q-69	0.67	0.12	平行(南北)	－	149

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	幅（m）	深さ（m）	地割との関係	出土遺物	挿図番号
SDf34	Ⅲ－6	SD10	中世前半	P-69，Q-69	0.50	0.16	平行(南北)	－	－
SDf35	Ⅲ－6	SD11	中世前半	P-69，Q-69	0.35	0.09	平行(南北)	－	－
SDf36	Ⅲ－6	SD07	中世前半	Q-69	0.85	0.12	平行(南北)	○	150
SDf37	Ⅲ－1	SD11	中世前半	Q-65，R-65，S-65	3.00以上	0.64	坪界(南北)	○	151
SDf38	Ⅲ－8	SD42	中世前半	T-67	0.65	0.09	坪界(東西)	○	－
SDf39	Ⅱ－17	SD02	中世前半	S-58，T-58	0.48	0.10	坪界(南北)	○	173
SDf40	Ⅲ－2	SD07	中世前半	N-67，O-66·67	0.65	0.15	－	○	174
SDf41	Ⅲ－2	SD08	中世前半	O-67	0.48	0.01	－	－	174
SDf42	Ⅲ－2	SD09	中世前半	N-67，O-67	0.60	0.05	－	－	174
SDf43	Ⅲ－2	SD10	中世前半	O-66·67	0.55	0.06	－	○	－
SDf44	Ⅲ－2	SD05	中世前半	P-65	0.45	0.20	平行(南北)	－	174
SDf45	Ⅲ－38	SD10	(中世後半)	S-70	2.30	0.38	－	○	175
SDf46	Ⅲ－37	SD06	中世前半	Q-70	0.45	0.13	－	○	176
SDf47	Ⅲ－38	SD07	中世前半	Q-70	0.35	0.10	－	－	－
SDf48	Ⅲ－2	SD25	中世後半	O-65	3.77	0.67～0.74	平行(東西·南北)	○	182～188
SDf49	Ⅲ－2	SX01	中世後半	O-64·65·66，P-64·65·66	9.00	0.35～0.55	平行(東西·南北)	○	189～199
SDf50	Ⅲ－2	SD26	中世後半	O-64，P-64	3.06	0.50	平行(東西)	○	200·201
SDf51	Ⅲ－2	SD04	中世後半	P-64·65	3.75	0.63	－	○	202·203
SDf52	Ⅲ－2	SD06	中世後半	P-64	3.85	0.25	平行(東西)	○	203
SDf53	Ⅱ－24·25	SD34，SX11	中世後半	P-60，Q-59·60·61	0.15～0.20	0.06	坪界(東西·南北)	○	209·254
SDf54	Ⅱ－25	SD32	中世後半	P-60·61，Q-60	0.60	0.11	平行(南北)	○	209·210
SDf55	Ⅱ－25	SD30	中世後半	P-60	0.24～0.43	0.02～0.04	平行(東西·南北)	○	209·210
SDf56	Ⅱ－25	SD31	中世後半	P-60	0.24～0.43	0.02～0.04	平行(南北)	○	209
SDf57	Ⅱ－24·25	SD01·03	中世後半	P-61·62，Q-61·62	1.55～2.20	0.15～0.31	平行(東西·南北)	○	229～238
SDf58	Ⅱ－24	SD13	中世後半	P-62，Q-62	0.84	0.16	平行(南北)	○	238·239
SDf59	Ⅱ－24	SD12	中世後半	P-62	0.50	0.04	平行(東西)	○	－
SDf60	Ⅱ－24	SD39	中世後半	P-61·62	0.92	0.09	平行(南北)	○	－
SDf61	Ⅱ－25	SD33	中世後半	P-61	0.30～0.40	0.02	平行(南北)	○	254
SDf62	Ⅱ－24·25	SD34－b	中世後半	Q-61·62，R-61	0.30～0.50	0.03～0.13	坪界(東西)·平行(南北)	○	254
SDf63	Ⅱ－25	SD35	中世後半	Q-61，R-61	0.25	0.03	坪界(東西)	○	254
SDf64	Ⅱ－24	SD02·10	中世後半	Q-62	0.14～0.55	0.05	平行(東西·南北)	○	254·282
SDf65	Ⅱ－25	SD40	中世後半	P-61，Q-61	0.50	0.09	平行(東西)	○	254
SDf66	Ⅱ－24	SD23·26	中世後半	Q-62	0.28	0.05	平行(東西·南北)	○	254

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	幅（m）	深さ（m）	地割との関係	出土遺物	挿図番号
SDf67	Ⅱ－25	SD36	中世後半	Q-61	0.50	0.03	－	○	210
SDf68	Ⅱ－24・25	SD38	中世後半	Q-61･62	0.55	0.08	－	○	－
SDf69	Ⅱ－24	SD07	中世後半	Q-62･63	0.76	0.31	平行(東西)	○	281･282
SDf70	Ⅱ－24	SD05	中世後半	P-62	0.40	0.10	平行(東西)	○	281
SDf71	Ⅱ－24	SD04	中世後半	P-62，Q-62	0.36	0.03	－	○	281
SDf72	Ⅱ－24	SD06	中世後半	P-62，Q-62	0.38	0.08	平行(東西･南北)	○	281
SDf73	Ⅱ－24	SD15・17・19	中世後半	Q-62･63	0.14	0.02～0.05	平行(東西･南北)	○	281･282
SDf74	Ⅱ－24	SD18	中世後半	P-63	0.19	0.04	平行(南北)	○	281
SDf75	Ⅱ－24	SD08・11	中世後半	Q-62，R-62	0.45～1.08	0.05～0.16	平行(南北)	○	282･289
SDf76	Ⅲ－1	SD06	中世後半	R-65，S-65	1.03	0.22	坪界(南北)	○	298
SDf77	Ⅲ－1	SD07	中世後半	R-65，S-65	0.30～0.55	0.09	坪界(南北)	○	298
SDf78	Ⅲ－1	－	中世後半	R-65	0.35	0.04	平行(東西)	－	－
SDf79	Ⅲ－1	－	中世後半	R-65，S-65	0.20	0.06	平行(南北)	－	－
SDf80	Ⅲ－4	SD16	中世後半	N-68，O-68･69	1.95	0.56	坪界(東西)	○	－
SDf81	Ⅲ－37	SD02・03・04	中世後半	P-67，Q-67	0.90	0.07	平行(南北)	○	314
SDf82	Ⅲ－37	SD05	中世後半	P-67，Q-67	0.35～0.75	0.08	平行(南北)	○	－
SDf83	Ⅲ－6・7	SD01－b	中世後半	P-68，Q-68	3.40～4.72	0.74～0.80	平行(南北)	○	312･313
SDf84	Ⅲ－6・7	SD19	中世後半	Q-66，R-66･67･68･69，S-69	3.00～3.70	0.40	平行(東西)	○	309･310
SDf85	Ⅲ－7	SD26	中世後半	R-67，S-67，T-67	1.10	0.27	平行(南北)	○	－
SDf86	Ⅲ－8	SD44	中世後半	T-68，U-68	2.12	0.29	平行(南北)	○	332
SDf87	Ⅱ－18	－	近世	T-55	0.55	0.05	平行(南北)	－	－
SDf88	Ⅱ－18	SD12	近世	S-56，T-56，U-55･56	0.55	0.12	平行(南北)	○	－
SDf89	Ⅱ－18	SD13	近世～近代	T-54･55，U-55･56	1.30	0.28	坪界(東西)	○	333
SDf90	Ⅱ－18	SD14	近世	U-54･55･56	0.65	0.13	坪界(東西)	○	－
SDf91	Ⅱ－17	SD04	近世	S-57，T-57	2.25	0.09	平行(東西･南北)	－	－
SDf92	Ⅱ－11・17・25	SD01	近世～近代	S-58，T-58，U-58	1.90	0.42～0.68	坪界(南北)	○	334～340
SDf93	Ⅱ－17	SD08	近世～近代	S-58，T-58	0.35	0.16	坪界(南北)	－	－
SDf94	Ⅱ－24・25	SD14	近世	S-58，T-58，U-58	1.50～2.05	0.50	坪界(東西)	○	348･349
SDf95	Ⅱ－25	SD28	近世	P-59･60，Q-59	2.10	0.51	坪界(南北)	○	341～347
SDf96	Ⅱ－24	SD20	近世	P-63	2.70	0.69	平行(東西)	○	350
SDf97	Ⅲ－1･2	SD02	近世	S-64･65，T-64，U-64，V-64，R-65，N-66，O-66，P-66	2.10～2.50	0.57～0.80	坪界(南北)	○	352～354
SDf98	Ⅲ－44	SD01	近世	M-68	2.24	1.00	平行(南北)	○	－
SDf99	Ⅲ－4	SD12	近世	N-70，O-69･70	2.24	0.50	坪界(東西)･平行(南北)	○	355

報告遺構名	調査区	調査時遺構名	時代	グリッド	幅（m）	深さ（m）	地割との関係	出土遺物	挿図番号
SDf100	Ⅲ－6・7・8	SD01－a	近世	P-68, Q-68, R-68, S-67, T-67	1.00～1.82	0.35～0.48	平行(南北)	○	360・361
SDf101	Ⅲ－6	SD02	近世	P-69・70, Q-70	2.00	0.09	平行(東西)	○	－
SDf102	Ⅲ－6	SD03	近世	Q-68・69	2.00	0.02	平行(東西)	○	－
SDf103	Ⅲ－6	SD06	近世	Q-69	1.20	0.05	平行(南北)	○	－
SDf104	Ⅲ－6	SD12	近世	P-69・70	0.80	0.04	平行(東西)	－	－
SDf105	Ⅲ－6	SD13	近世	P-70	0.95	0.03	平行(東西)	－	－
SDf106	Ⅲ－7	SD29	近世	Q-66, R-66・67・68	1.64	0.46	平行(東西)	○	356～359・360
SDf107	Ⅲ－1・8	SD02・36	近世	S-65, T-66・67・68・69	1.76～2.20	0.42～0.73	坪界(東西)	○	77・362～365
SDf108	Ⅲ－8	SD35	近世	T-66・67・68・69, U-68・69	1.72～1.85	0.18～0.74	坪界(東西)	○	362～364
SDf109	Ⅲ－38	SD01	近世	R-70, S-70, T-70, U-70	3.60～5.00	0.80～1.08	坪界(南北)	○	－

観察表凡例

土器観察表

・器種名には，以下の略称を用いた。

土師器→**土師**　土師質土器→**土質**　須恵器→**須恵**　十瓶山窯産須恵器→**十瓶**
吉備系土師質土器→**吉備**　黒色土器→**黒色**　楠井窯産土器→**楠井**
京焼系陶器→**京陶**　瀬戸・美濃系陶器→**瀬美陶**　瀬戸・美濃系磁器→**瀬美磁**
肥前系陶器→**肥陶**　肥前系磁器→**肥磁**

・法量の表示には，以下の略称を用いた。

口径→(口)　器高→(高)　底径→(底)　高台径→(高台)

・法量の単位は，法量・長さ・幅・厚さがcm，重量がgである。

・色調には，農林水産省農林水産技術会議事務局監修1992『新版 標準土色帖』を用いた。

・手法で用いた記号のうち，「→」は手法の前後関係を，「・」は手法の併存ないし前後の判定が困難な関係を，「,」は手法の前後関係が全く判断できないものを示す。なお，成形時の指オサエ（指頭圧痕）については，煩雑なため記述していない。ヘラ切りのR・Lの区分は，底部側からみたヘラ切りの進行方向であり，ロクロ回転の方向と一致する。

・手法で表記した部位の略称は，以下のとおりである。

口縁部→(**口**)　口縁部外面→(**口・外**)　口縁部内面→(**口・内**)　体部外面→(**体・外**)
体部内面→(**体・内**)　底部外面→(**底・外**)　底部内面・見込み→(**底・内**)

・手法で「調整不明」としたのは，器面の摩滅・剥離などにより調整が観察できないものをいう。

・残存度は，遺存状態の良好な箇所で計測した。

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
1	SHf01	弥生・高杯	(口)28.0	密。径2mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)明褐7.5YR5/6　(内)明褐7.5YR5/6・黒褐10YR3/2	(口・端)凹線文，(底・内)ヘラ磨き	口径1/7	胎土1類，内面黒斑
2	SHf01	弥生・高杯	(脚端)17.6	密。径2mm以下の石英・長石・角閃石・金雲母を少量	良好	(外)橙7.5YR6/6　(内)明褐7.5YR5/6	(脚端)凹線文・(脚・外)沈線・穿孔，(脚・内)ヘラ削り	脚端径5/6	胎土1類
3	SHf01	弥生・高杯		密。径1.5mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)橙7.5YR6/6　(内)にぶい黄橙10YR6/4　(断)黄灰2.5Y4/1	調整不明，円盤充填	脚部径1/3	胎土1類
4	SHf01	弥生・広口壺	(口)16.2	密。径2mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)にぶい黄2.5Y6/3・にぶい黄橙10YR6/3　(内)黒2.5Y2/1	(頸・外)凹線文	口径1/8	胎土1類，外面黒斑
5	SHf01	弥生・器台		密。径3mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3・にぶい黄褐10YR4/3　(内)にぶい黄褐10YR5/4	(外)凹線文・長方形透かし，(内)ヘラ削り	体部径1/8	胎土1類
6	SHf01	弥生・甕	(口)13.0	密。径3mm以下の石英・長石・角閃石・金雲母を少量	良好	(外)褐7.5YR4/4　(内)橙7.5YR6/6・にぶい黄橙10YR6/4	(体・外)縦ハケ→横ナデ・(口)凹線文，(体・内)ヘラ削り	口径1/4	胎土1類，口縁部被熱変色
7	SHf01	弥生・甕	(口)13.4	密。径3mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)橙7.5YR6/6・にぶい黄橙10YR6/3　(内)にぶい褐7.5YR5/4	(体・外)縦ハケ→(口・外)横ナデ・凹線文，(体・内)ヘラ削り	口径1/7	胎土1類
8	SHf01	弥生・甕	(口)14.8	密。径4mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	赤褐5YR4/8	(体・内)ヘラ削り→指オサエ→(体・外)縦ハケ→ヘラ描き斜線文・(口・端)凹線文・横ナデ→(体・外)ヘラ磨き	口径1/4	胎土1類，外面に煤付着
9	SHf01	弥生・甕	(口)15.6	やや粗。径5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4・黒褐10YR3/1　(内)にぶい黄橙10YR7/2・黒褐10YR3/1	(口・端)凹線文・横ナデ	口径1/2	外面に黒斑
10	SHf01	弥生・甕	(口)15.6	密。径2mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)黒褐10YR3/2・にぶい褐7.5YR5/4　(内)にぶい黄橙10YR6/3　(断)黄灰2.5Y4/1	(体・内)ヘラ削り→(口)凹線文・横ナデ	口径1/8	胎土1類
11	SHf01	弥生・甕	(口)15.7	やや粗。径3mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)明赤褐5YR5/6・褐7.5YR4/3　(内)橙5YR6/6・褐灰10YR4/1	(口・外)横ナデ・凹線文	口径1/8	胎土1類
12	SHf01	弥生・甕	(口)14.8	密。径3mm以下の石英・長石・角閃石を多量	良好	(外)明赤褐5YR5/6　(内)明赤褐5YR5/6・にぶい褐7.5YR5/4	(体・内)ヘラ削り→(体・外)縦ハケ→(口)横ナデ	口縁部完存	胎土1類，外面に煤付着
13	SHf01	弥生・甕	(口)14.4	やや粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	明赤褐5YR5/6	調整不明	口径1/6	
14	SHf01	弥生・甕	(口)15.4	密。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4・褐灰10YR4/1　(内)橙5YR7/6・にぶい黄橙10YR6/3・灰黄褐10YR4/2	(体・内)ヘラ削り→(体・外)縦ハケ→(口)横ナデ	口径1/3	外面に煤付着
15	SHf01	弥生・甕	(口)15.0	密。径2.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙5YR6/6・灰黄褐10YR5/2・褐灰10YR4/1　(内)橙5YR7/6・にぶい黄橙10YR7/4・黄灰2.5Y5/1	調整不明	口径1/7	
16	SHf01	弥生・甕		密。径5mm以下の石英・長石・角閃石・金雲母を少量	良好	(外)褐7.5YR4/4・黒2.5Y　(内)にぶい黄橙10YR6/4・黒褐10YR3/2	(体・外)平行叩き目→(頸・外)横ナデ・(体・外)ヘラ描き斜線文→ヘラ磨き		胎土1類
17	SHf01	弥生・壺		密。径2mm以下の石英・長石・角閃石・金雲母を少量	良好	(外)明赤褐5YR5/6・にぶい黄橙10YR6/4・黒褐2.5Y3/1　(内)明赤褐5YR5/6・灰黄2.5Y6/2・黒褐2.5Y3/1	(体・内)ヘラ削り→指オサエ，(外)突起貼付(2方向?)	頸部径1/5	胎土1類，外面に黒斑
18	SHf01	弥生・甕	(底)5.8	密。径2mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)明赤褐5YR5/6・黒2.5Y2/1　(内)灰黄褐10YR4/2・黒10YR1.7/1	(体・外)ヘラ磨き，(内)ヘラ削り	底径1/2	胎土1類，外面に黒斑
19	SHf01	弥生・甕	(底)4.0	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)明赤褐2.5YR5/8・黒10YR2/1　(内)にぶい橙7.5YR6/4・黒褐10YR2/2	調整不明	底径1/4	
20	SHf01	弥生・壺		密。径2mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3・黒褐2.5Y3/1　(内)にぶい黄褐10YR5/4	(体・内)指オサエ	細片	胎土1類，外面に黒斑
29	SBf03	弥生・甕		密。径4mm以下の石英・長石・角閃石を多量	良好	(外)赤褐2.5YR4/6　(内)黒7.5YR2/1・にぶい褐7.5YR5/4	(内)ヘラ削り→(外)ヘラ磨き	細片	胎土1類
72	SKf02上層	弥生・鉢	(口)10.4	密。径2mmの長石・角閃石・径2.5mmの石英を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/3　(内)橙7.5YR6/6・褐灰10YR4/1	(口)横ナデ	口径1/4	
73	SKf02上層	弥生・鉢	(口)14.4	密。径1mm以下の石英・長石・茶色砂粒・角閃石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/4・灰黄褐10YR5/2　(内)にぶい黄褐10YR5/3・灰黄2.5Y6/2	(口)横ナデ→(体・外)(内)ヘラ磨き	口径1/6	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
74	SKf02上層	弥生・高杯	(口)24.2	密。径1mmの石英・長石・角閃石を多量	良好	(外)にぶい赤褐5YR5/4・褐灰5YR4/1 (内)にぶい赤褐5YR4/3・褐灰5YR4/1 (断)褐灰5YR4/1	(体・外)ヘラ削り，(口)横ナデ	口径1/8	胎土1類
75	SKf02上層	弥生・壺	(口)10.0	密。径0.5mm以下の角閃石，径1.5mm以下の長石・褐色粒	良好	明褐7.5YR5/6	(頸・外)凹線文	口径1/11	
76	SKf02上層	弥生・直口壺	(口)12.8	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい赤褐5YR5/4 (内)にぶい赤褐5YR5/3 (断)灰黄褐10YR6/2	(頸・外)凹線文	口径1/5	外面に黒斑
77	SKf02上層	弥生・甕	(口)14.0	密。径1mm以下の石英・長石・角閃石を多量	良好	暗灰黄2.5Y4/2・にぶい黄褐10YR5/3	(口)横ナデ	口径1/8	胎土1類
78	SKf02上層	弥生・甕	(口)16.1	密。径1mm以下の石英・長石・角閃石	良好	(外)明赤褐5YR5/6 (内)明赤褐5YR5/6・黄灰2.5Y6/2	(口)凹線文	口径1/8	胎土1類
79	SKf02上層	弥生・甕	(口)16.6	密。径1mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)褐7.5YR4/3 (内)にぶい褐7.5YR5/4	(口)凹線文	口径1/8	胎土1類?
80	SKf02上層	弥生・甕	(口)16.6	密。径1mm以下の石英・長石・角閃石を多量，径2mmの角閃石，径3mmの石英	良好	(外)にぶい黄2.5Y6/3・黒2.5Y2/1 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(体・外)縦ハケ・(体・内)ヘラ削り→(口)横ナデ・凹線文	口径1/6	胎土1類
81	SKf02上層	弥生・甕	(口)13.2	密。径0.5mm以下の角閃石，径3mm以下の石英	良好	(外)黒褐10YR3/1 (内)にぶい黄橙10YR6/4	(口)横ナデ	口径1/9	
82	SKf02上層	弥生・甕	(口)16.0	密。径1mm以下の長石・褐色粒，径2mm以下の石英	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)黄灰2.5Y5/1	(体・外)縦ハケ→(口)横ナデ	口径1/8	
83	SKf02上層	弥生・甕	(口)19.0	密。径1mm以下の角閃石・径1.5mmの長石・径3mm以下の石英を多量	良好	(外)にぶい赤褐5YR5/4・にぶい橙5YR7/4 (内)灰黄褐10YR6/2・にぶい橙5YR7/4・黄灰2.5Y6/1	(体・内)ヘラ削り，(口)横ナデ	頸部径1/8	
84	SKf02上層	弥生・甕	(底)4.0	密。径1mm以下の石英・長石・角閃石を多量	良好	(外)黄灰2.5Y5/1・灰黄2.5Y6/2 (内)灰5Y4/1	(体・外)ヘラ磨き，(内)板ナデ	底径1/2	胎土1類
85	SKf02上層	弥生・甕	(底)6.6	密。径0.5mm以下の石英・長石・角閃石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR4/2 (内)にぶい黄橙10YR6/4・黒2.5Y2/1	(体・外)ヘラ磨き，(内)ヘラ削り	底径1/8	胎土1類
86	SKf02上層	弥生・甕	(底)5.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黒2.5Y2/1・浅黄橙10YR8/4 (内)黒2.5Y2/1	(体・外)ヘラ磨き	底径1/3	外面に黒斑
87	SKf02下層	弥生・甕	(口)15.6	密。径2mm以下の長石・角閃石を少量	良好	(外)にぶい黄褐10YR5/3 (内)にぶい黄褐10YR5/3	(口)横ナデ	口径1/6	胎土1類?
88	SKf02下層	弥生・甕	(口)14.7	密。径1.5mm以下の黒色砂粒・角閃石・雲母を少量	良好	(外)灰黄褐10YR4/2 (内)にぶい黄褐10YR5/3・黒褐10YR3/1	(口)横ナデ	口径1/5	胎土1類
89	SKf02下層	弥生・甕	(口)18.1	密。径1mm以下の石英・長石・角閃石・茶色砂粒	良好	(外)にぶい褐7.5YR5/3・灰褐7.5YR4/2 (内)にぶい褐7.5YR5/3	(口・外)凹線文	口径1/11	胎土1類
90	SKf02下層	弥生・甕		密。径1mm以下の石英・長石，径1.5mm以下の角閃石	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4 (内)(断)にぶい橙5YR6/4	(体・外)平行叩き目→縦ハケ	体部径1/10	胎土1類，外面に煤付着
91	SKf02下層	弥生・甕	(底)5.9	密。径1mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)黒2.5Y2/1・黒褐10YR3/2 (内)オリーブ黒5Y3/1		底部完存	
92	SKf02下層	弥生・甕	(口)27.0	密。径3mm以下の石英・径3.5mm以下の長石を多量	良好	(外)明褐灰5YR7/1・褐灰5YR5/1・灰白10YR8/2 (内)褐灰7.5YR4/1・灰白7.5YR8/2 (断)褐灰7.5YR6/1	(頸・外)ヘラ描き斜線文，(口・外)凹線文→刻み目	口径1/6	
94	SKf02下層	弥生・鉢	(口)17.0	密。径4mm以下の長石・角閃石を少量	良好	(外)黄灰2.5Y4/1・灰白2.5Y7/1・明褐7.5YR5/6 (内)灰黄2.5Y6/2	(口)片口	口径1/8	胎土1類?
95	SKf02下層	弥生・甕	(口)12.4	密。径2mm以下の石英・長石，径3mmの長石	良好	(外)橙5YR6/6・褐灰5YR4/1 (内)橙5YR6/6・灰白10YR7/4・黒褐10YR3/1 (断)黒褐10YR3/1	(体・内)ヘラ削り→指オサエ→(口)横ナデ・凹線文→(体・外)ヘラ磨き	口径1/3	外面に煤付着
96	SKf02下層	弥生・壺	(底)9.4	密。径2mm以下の石英・長石	良好	にぶい橙7.5YR6/4	(体・外)ヘラ磨き，(内)ヘラ削り	底径1/4	外面に黒斑
97	SKf02下層	弥生・甕	(底)7.0	密。径2.5mm以下の長石・黒色砂粒・角閃石を少量	良好	(外)黒褐10YR3/1・黄褐2.5Y5/3 (内)黒褐2.5Y3/1		底部完存	
98	SKf03	弥生・甕	(口)16.0	密。径4mm以下の石英・長石・角閃石を少量	良好	(外)灰褐7.5YR4/2・にぶい橙7.5YR6/4 (内)黒褐10YR3/1・褐7.5YR4/3	(体・内)縦ハケ(板ナデ)→(口)横ナデ	口径1/6	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
99	SKf03	弥生・甕	(底)4.8	密。径1.5mm以下の長石・褐色粒	良好	灰黄褐10YR4/2	(体・外)ヘラ磨き	底部完存	外面に煤付着
102	SKf04	弥生・高杯		やや粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい褐7.5YR5/4・灰黄褐10YR6/2 (内)橙5YR6/6 (断)黄灰2.5Y4/1	(脚・内)ヘラ削り→(脚・外)ヘラ磨き	脚基部完存	
103	SKf04	弥生・高杯	(脚端)12.5	密。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR7/6・浅黄橙7.5YR8/4	(脚・内)ヘラ削り	脚部径1/5	
104	SKf04	弥生・高杯	(脚・端)14.4	密。径4.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)浅黄橙10YR8/3・橙5YR7/6	(脚・内)シボリ目→ヘラ削り	脚基部完存	
105	SKf21	弥生・甕	(底)5.4	密。径1mm以下の長石・径3.5mm以下の石英を少量	良好	(外)明褐灰7.5YR7/1 (内)灰白7.5YR8/2 (断)灰5Y5/1・浅黄橙7.5YR8/3	(外)(内)ナデ，(底・外)植物繊維の圧痕	底部完存	外面に黒斑
106	SKf21	弥生・壺	(底)4.3	密。径3mm以下の長石・褐色粒を多量	良好	(外)黒2.5Y2/1・灰黄2.5Y7/2 (内)灰白10YR8/2 (断)灰N4/	(外)平行叩き目，(底・内)縦方向の接合痕	底径1/2	外面に黒斑
107	SKf27	弥生・壺	(底)4.7	密。径5mm以下の石英・長石・灰色粒を多量	良好	(外)橙5YR6/6・暗灰黄2.5Y5/2 (内)黒褐2.5Y3/1・橙5YR6/6	(頸・外)板ナデ・(体・外)板ナデ→ヘラ磨き，(底・内)指オサエ	頸部径2/3	外面に黒斑
108	SKf27	弥生・甕	(口)15.6	密。径1mm以下の金雲母・径2mm以下の石英・径3.5mm以下の長石を少量	良好	(外)にぶい黄褐10YR4/3 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(体・内)ヘラ削り→指オサエ(当て具痕?)→(体・外)ヘラ磨き→(口)横ナデ	口径1/3	外面に煤付着
109	SKf27	弥生・甕	(底)5.5	密。径3mm以下の長石を少量	良好	にぶい黄橙10YR6/3	(底・外)ヘラ磨き	底部完存	
110	SKf27	弥生・甕	(底)5.0	密。径1.5mm以下の長石	良好	灰白10YR8/	(外)縦ハケ，(内)ヘラ削り	底部完存	外面に黒斑
111	SKf27	弥生・甕	(底)3.6	密。径2mm以下の長石・褐色粒，径3mm以下の石英・花崗岩	良好	灰白10YR8/2	(体・外)ヘラ削り，(体・内)(底・内)板ナデ	底径1/2	外面に黒斑
112	SKf27	弥生・壺	(底)6.2	密。径4.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)黒2.5Y2/1・にぶい黄橙10YR7/3 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(体・内)ヘラ削り，(底・内)指オサエ，(体・外)ヘラ磨き	底部完存	外面に黒斑
113	SKf28	弥生・甕		やや粗。径0.5mm以下の角閃石，径2mm以下の長石・褐色粒を多量	良好	(外)にぶい黄褐10YR5/3 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(体・内)ヘラ削り→指オサエ，(外)ヘラ磨き	体部径1/5	
114	SDf01	弥生・壺		密。径5mm以下の長石・褐色粒・角閃石を少量	良好	(外)にぶい褐7.5YR5/4 (内)にぶい黄褐10YR5/3・灰5Y6/1 (断)黒褐2.5Y3/1	(外)縦ハケ	径部1/6	胎土1類
116	SDf11	弥生・甕	(口)23.6	密。径1.5mm以下の石英・長石・金雲母・褐色粒，径2mmの石英	良好	(外)(内)にぶい橙7.5YR6/4 (断)褐灰7.5YR4/1	横ナデ	口径1/16	胎土1類
118	SDf16上層	土質・小皿	(口)5.9 (高)0.8 (底)5.4	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白5Y8/2 (内)浅黄2.5Y7/3	回転ナデ→ヘラ切り(R)	口径1/4	
119	SDf16上層	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.5 (底)5.65	密。径1mm以下の石英・黒色砂粒	良好	淡黄2.5Y8/3	回転ナデ→ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ	口径2/3	
120	SDf16上層	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.1 (底)5.6	密。径1mm以下の褐色粒	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/8	
121	SDf16上層	土質・小皿	(口)9.6	密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	灰黄2.5Y6/2	回転ナデ	口径1/8	
122	SDf16上層	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.3 (底)5.2	密。径0.5mm以下の長石	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4 (内)灰黄2.5Y7/2	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
123	SDf16上層	土質・杯	(口)10.8 (高)3.0 (底)5.0	密。径1mm以下の石英・長石	良好	黄灰2.5Y4/1・灰白10YR8/2	回転ナデ→ヘラ切り	口径1/6	焼けムラあり
124	SDf16上層	土質・杯	(口)10.8	密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	灰白5Y8/1	回転ナデ→ヘラ切り	口径1/8	口縁～体部に縦方向の亀裂・補修痕
125	SDf16上層	土質・杯	(口)11.2 (高)2.8 (底)6.6	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→ヘラ切り(R?)→(底・外)板目状圧痕	底径1/2	
126	SDf16上層	土質・杯	(口)11.8	密。径0.5mm以下の石英・長石	良好	(外)黄灰2.5Y5/1 (内)灰白2.5Y7/1	回転ナデ→ヘラ切り	口径1/8	
127	SDf16上層	土質・杯	(口)12.4	密。径1mm以下の石英を少量	良好	灰白2.5Y8/1	調整不明	口径1/5	吉備系椀か

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
128	SDfl6上層	土質・杯	(口)10.6 (高)2.95 (底)6.4	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)浅黄2.5Y7/3 (内)にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ→ヘラ切り	口径1/4	
129	SDfl6上層	土質・杯	(口)10.4	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ	口径1/8	
130	SDfl6上層	土質・杯	(口)10.8	密。径3mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/3・灰褐7.5YR5/2 (内)にぶい橙7.5YR7/3	回転ナデ	口径1/6	
131	SDfl6上層	土質・杯	(底)6.4	密。径1mm以下の長石	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)にぶい橙5YR7/4	回転ナデ→ヘラ切り	底径1/3	
132	SDfl6上層	土質・杯	(口)11.4 (高)3.65 (底)7.6	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)橙5YR7/6・灰白10YR8/1 (内)灰白10YR8/1・褐灰10YR5/1	回転ナデ→ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・板目状圧痕	口径2/3	焼けムラあり
133	SDfl6上層	土質・杯	(底)7.0	やや粗。径3mm以下の石英・長石	やや軟	淡黄2.5Y8/3	回転ナデ→回転糸切り	底径5/8	
134	SDfl6上層	土質・杯	(底)6.2	密。径1mm以下の石英・長石	良好	暗灰黄2.5Y5/2	回転ナデ→ヘラ切り	底径1/3	
135	SDfl6上層	土質・杯	(底)6.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量・径5mmの砂岩	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)灰黄2.5Y7/2	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ	底径1/2	回転糸切り
136	SDfl6上層	土質・杯	(口)12.8 (高)3.4 (底)6.8	やや粗。径1mm以下の長石・褐色粒・灰色砂粒を少量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2・褐灰10YR4/1 (内)橙2.5YR6/6・灰黄褐10YR6/2 (断)橙5YR6/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径1/6	焼けムラあり
137	SDfl6上層	十瓶・椀	(口)13.8 (高)4.0 (高台)4.8	密。径1mm以下の長石・灰色砂粒を多量	不良	灰白N8/	回転ナデ→ヘラ切り→(底・内)板ナデ	口径1/4	口縁部炭素吸着
138	SDfl6上層	十瓶・椀	(口)14.2 (高)4.1 (高台)4.0	密。径0.5mm以下の石英を少量	良好	(外)暗灰N3/・灰白N7/ (内)暗灰N3/・灰白5Y8/1	回転ナデ→ヘラ切り→(内)板ナデ	高台径1/3	口縁部炭素吸着
139	SDfl6上層	十瓶・椀	(口)14.6	密。径1mm以下の長石を少量	やや軟	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→(体・内)板ナデ	口径1/10	
140	SDfl6上層	十瓶・椀	(口)14.6	密。径1mm以下の長石・灰色砂粒を多量	良好	灰N7/	回転ナデ→ヘラ切り→(底・内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
141	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白N7/	(底・内)板ナデ	高台径1/4	
142	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径1mm以下の石英を少量	やや軟	灰白5Y8/1	調整不明	高台径1/4	
143	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径1.5mm以下の長石	土師質・不良	(外)灰褐5YR6/2 (内)橙5YR7/6	調整不明	高台径5/6	
144	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)4.7	密。径3mm以下の石英・長石を少量	不良	(外)灰白2.5Y8/1 (内)灰白8/	(内)板ナデ，(底・外)ヘラ切り→板目状圧痕→高台貼付	高台径3/4	高台潰れて歪む
145	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)4.8	密。径1mm以下の石英を少量	不良	灰白5Y8/1	(底・内)板ナデ(ハケ目状)	高台径1/8	
146	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径3mm以下の石英・長石を多量	不良	(外)灰白2.5Y8/1・灰白5YR8/2 (内)灰白5Y8/	調整不明	高台径3/4	
147	SDfl6上層	十瓶・椀	(高台)4.5	密。径2mm以下の石英を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ→ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	底部完存	高台内側に亀裂
148	SDfl6上層	吉備・椀	(高台)5.0	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/1 (内)にぶい黄橙10YR7/3	調整不明	高台径2/3	
149	SDfl6上層	吉備・椀	(高台)4.8	密。径2mm以下の石英	不良	(外)灰白2.5Y8/1 (内)灰白2.5Y8/2 (断)黒10Y2/1	調整不明	高台径1/8	
150	SDfl6上層	吉備・椀	(高台)4.6	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)浅黄橙10YR8/3	調整不明，(底・内)目跡状の重ね痕	高台径1/4	
151	SDfl6上層	吉備・椀	(高台)4.6	密。径1.5mm以下の長石を多量	良好	(外)(内)浅黄橙10YR8/4 (断)黒N2/1		高台径1/4	
152	SDfl6上層	黒色・椀	(高台)5.8	密。径0.5mm以下の長石・茶色砂粒を少量	良好	(外)灰白2.5Y8/2・黒褐2.5Y3/1 (内)黒褐2.5Y3/1		高台径1/4	A類
153	SDfl6上層	土質・台付杯		密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR7/1 (断)橙5YR7/6	回転ナデ	底径1/3	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
154	SDf16上層	白磁・碗	(高台)4.6	密	良好	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)灰白7.5Y8/1	高台部露胎	高台径1/3	横田・森田Ⅳ類
155	SDf16上層	青磁・碗	(口)16.4 (高)7.0 (高台)4.8	密	良好	(胎)灰N7/ (釉)灰オリーブ7.5Y5/3	(外)鎬蓮弁文，(底・内)花文	高台部完存	横田・森田Ⅰ-5b類
156	SDf16上層	須恵・杯蓋		密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	灰6/	回転ナデ	細片	
157	SDf16上層	須恵・杯	(口)13.8	密。径0.5mm以下の長石	良好	(外)灰N6/ (内)灰白N7/	回転ナデ	口径1/10	
158	SDf16上層	須恵・杯	(底)7.8	密。径1mm以下の金雲母・長石を少量	良好	灰白N7/	回転ナデ→ヘラ切り	底径1/5	外面に火襷
159	SDf16上層	十瓶・捏鉢	(口)30.8	密。径1mm以下の長石・径2.5mm以下の石英を多量	良好	灰白N7/	(外)格子叩き目→回転ナデ	口径1/10	
160	SDf16上層	十瓶・捏鉢	(口)33.6	密。径0.5mm以下の長石を多量	不良	灰N5/	回転ナデ	口径1/12	
161	SDf16上層	十瓶・捏鉢	(口)27.0	密。径0.5mm以下の石英・白色砂粒を少量	不良	(外)灰白10YR8/1 (内)にぶい橙5YR7/4・灰白10YR8/2	回転ナデ	口径1/8	
162	SDf16上層	十瓶・捏鉢		密。径1mm以下の石英・長石	不良	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白N8/1	(外)格子叩き目→回転ナデ	細片	
163	SDf16上層	十瓶・捏鉢	(底)8.4	密。径0.5mm以下の長石 を少量	不良	(外)灰白2.5Y7/1 (内)灰白5Y8/1・灰5Y6/1	回転ナデ→(底・外)ヘラ削り	底径1/4	内面使用による摩滅
164	SDf16上層	十瓶・捏鉢	(底)9.4	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	不良	灰5Y6/1	(底・外縁)ヘラ削り，(底・外)下駄印	底径1/4	
165	SDf16上層	十瓶・捏鉢	(底)11.0	密。径2mm以下の石英を多量	不良	(外)灰N5/ (内)灰白N8/ (断)灰N6/	(体・外)回転ナデ→(底・外縁)ヘラ削り	底径1/3	
166	SDf16上層	土質・足釜	(口)22.8	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4 (内)明黄褐10YR7/4	(内)板ナデ→(口)(鍔) 横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
167	SDf16上層	土師・足釜	(口)29.8	粗。径0.5mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4・灰黄褐10YR5/2 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(内)板ナデ→(口)(鍔)横ナデ	口径1/16	外面に煤付着
168	SDf16上層	土質・足釜	(口)27.0	密。径1mm以下の長石・灰色砂粒を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)灰黄褐10YR6/2 (断)灰5Y5/1	(体・外)縦ハケ	細片	体部外面に煤付着
169	SDf16上層	土質・足釜	(口)20.0	粗。径5mm以下の石英・黒色砂粒	良好	にぶい橙5YR6/4	(鍔)指オサエ→(口)(鍔)横ナデ・(体・内)板ナデ→(底・外)格子叩き目	口径1/10	体部～底部外面に煤付着
170	SDf16上層	土質・足釜		密。径3mm以下の長石を少量	良好	灰白7.5YR8/2	脚部成形時の接合痕	脚部3/4	煤付着
171	SDf16上層	土質・足釜		密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)明褐灰7.5YR7/2 (断)褐灰7.5YR6/1		脚部3/4	煤付着
172	SDf16上層	土質・鍋	(口)23.4	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)にぶい橙7.5YR6/4 (断)褐灰7.5YR6/1	(頸・外)指オサエ→(口)横ナデ，(口・内)板ナデ→(体・内)板ナデ	口径1/10	外面に煤付着
173	SDf16上層	土質・鍋	(口)46.0	やや粗。径1.5mm以下の金雲母を少量，径3mm以下の長石・径4mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)浅黄橙10YR8/3 (断)淡赤橙2.5YR7/4	(体・外)縦ハケ，(口・端)横ハケ，(体・内)横ハケ	口径1/10	
174	SDf16上層	土質・鍋	(口)49.0	粗。径1mm以下の長石・金雲母を少量	良好	灰白2.5Y7/1	(口・端)(口・内)横ハケ→(体・内)板ナデ	口径1/20	外面に煤付着，内面被熱変色
175	SDf16上層	土質・鍋	(口)38.4	粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黄灰2.5Y6/1 (内)にぶい黄橙10YR7/2	(口・外)(体・外)縦ハケ→(口・内)横ハケ→(頸・外)指オサエ→(口)横ナデ	口径1/14	
176	SDf16上層	土質・鍋	(口)38.2	密。径2mm以下の長石・径3mm以下のシャーモット・石英を多量	良好	灰白2.5Y7/1 (断)灰N5/	(口)横ナデ	口径1/13	外面に煤付着
177	SDf16上層	土質・鍋	(口)39.6	粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)暗灰黄2.5Y4/2 (内)灰黄2.5Y6/2・灰白2.5Y8/2 (断)浅黄2.5Y7/3	(口・内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
178	SDf16上層	土質・鍋	(口)40.6	密。径2mm以下の長石を少量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(口・外)(体)縦ハケ→(頸・外)指オサエ→(口)横ナデ	口径1/8	外面に煤付着
179	SDf16上層	土質・鍋	(口)38.0	密。径1mm以下の長石を少量	良好	灰白5Y8/1	(頸・外)(体・外)縦ハケ→(頸・外)指オサエ，(口・内)横ハケ→(体・内)板ナデ，(口・端)横ハケ	口径1/20	内外面に煤付着

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
180	SDfl6上層	土質・鍋	(口)42.4	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黄灰2.5Y4/1　(内)にぶい橙7.5YR7/4	(口・内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/16	外面に煤付着
181	SDfl6上層	土質・鍋	(口)33.6	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR5/2　(内)にぶい橙7.5YR6/4	(口・外)(体・外)縦ハケ→横ハケ→(頸)指オサエ→(内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/16	外面に煤付着
182	SDfl6上層	土質・鍋		粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2　(内)灰黄2.5Y6/2	(口・内)板ナデ，(口・端)板ナデ→(口・外)横ナデ	細片	
183	SDfl6上層	土質・鍋		粗。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黄灰2.5Y5/1　(内)浅黄橙10YR8/3	(口・内)横ハケ→(口・端)横ハケ	細片	外面に煤付着
184	SDfl6上層	土質・鍋		粗。径 l mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)黒褐2.5Y3/1　(内)浅黄2.5Y7/3	(口・端)(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
185	SDfl6上層	土質・鍋		密。径1.5mm以下の石英，径2mm以下の長石を多量	良好	(外)(内)にぶい褐7.5YR6/3 (断)明赤褐2.5YR7/2	(口・端)(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
186	SDfl6上層	土質・鍋		密。径2mm以下の長石を多量，径2mm以下の金雲母を少量	良好	(外)灰白10YR8/2　(内)にぶい黄橙10YR7/2　(断)灰白10YR8/1	(頸・外)(体・外)縦ハケ→(頸・外)指オサエ，(口・端)(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
187	SDfl6上層	土質・鍋		密。径2mm以下の石英・長石・角閃石を多量，径3mm以下のシャーモットを少量	良好	(外)橙5YR7/6　(内)(断)灰白7.5Y8/1	(口・端)(口・内)横ハケ→(口)横ナデ	細片	外面に煤付着
188	SDfl6上層	土質・鍋		やや粗。径0.5mm以下の角閃石，径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰褐7.5YR6/2　(内)にぶい橙7.5YR7/3	(口・内)横ハケ→(口・端)横ナデ	細片	外面に煤付着
189	SDfl6上層	土質・鍋		やや粗。径1mm以下の長石・金雲母を微量	良好	(外)灰黄褐10YR4/2　(内)灰白2.5Y8/1	(頸・外)(体・外)縦ハケ→(口)横ハケ→横ナデ，(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
190	SDfl6上層	土質・鍋		やや粗。径1.5mm以下の白色砂粒・褐色粒・灰色砂粒を少量	良好	(外)灰黄褐10YR4/2　(内)にぶい黄褐10YR7/2	(外)縦ハケ→格子叩き目，(内)横ハケ	細片	外面に煤付着
191	SDfl6上層	亀山・甕		密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰7.5Y5/1　(内)灰7.5Y6/1	(外)格子叩き目・(内)当て具痕	細片	
192	SDfl6上層	亀山・甕		やや粗。径2mm以下の長石を少量	須恵質・不良	(外)灰N5/　(内)灰N6/	(外)格子叩き目　(内)当て具痕	細片	
193	SDfl6上層	亀山・甕		密。径7mm以下の長石	瓦質・良好	(外)黒2.5Y2/1　(内)黄灰2.5Y5/1　(断)灰黄2.5Y7/2	(外)格子叩き目，(内)当て具痕	細片	
194	SDfl6上層	東播・甕		粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰7.5Y6/1	(外)平行叩き目→(内)横ハケ	細片	
195	SDfl6上層	備前・甕		密。径3mm以下の石英・径3.5mm以下の長石を多量	不良	(外)明赤灰2.5YR7/1　(内)にぶい橙7.5YR7/3・にぶい橙5YR7/4	(外)(内)板ナデ(ハケ目状)	頸部径1/12	
196	SDfl6上層	須恵・壺	(高台)10.8	密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	(外)灰N5/　(内)灰白N7/	回転ナデ，(底・外)離れ砂	高台径1/10	
197	SDfl6上層	須恵・壺	(高台)15.8	密。径1mm以下の長石を少量	良好	(外)暗青灰5PB4/1　(内)灰白N7/　(断)赤灰5R6/1	回転ナデ	高台径1/12	
200	SDfl6中層	土質・小皿	(口)7.3　(高)1.45 (底)4.85	密。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)灰黄2.5Y7/2　(内)淡黄2.5Y8/3　(断)にぶい黄褐10YR5/4	回転ナデ→ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ→(底・外)板目状圧痕	口径3/4	
201	SDfl6中層	土質・小皿	(口)7.6　(高)1.25 (底)6.1	密。径1mm以下の石英を多量，径1mm以下の長石を少量	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→ヘラ切り(R?)	口径1/4	
202	SDfl6中層	土質・小皿	(口)8.1　(高)1.7 (底)6.3	やや粗。径3mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白2.5Y8/2　(内)灰白5Y8/1　(断)浅黄橙7.5Y8/4	回転ナデ→ヘラ切り(R)→(底・内)板目状圧痕	ほぼ完存	
203	SDfl6中層	土質・小皿	(口)8.4　(高)1.65 (底)5.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/3	回転ナデ→ヘラ切り	底径1/6	
204	SDfl6中層	土質・小皿	(口)9.8	密。径1.5mm以下の長石・茶色砂粒を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3　(内)灰白10YR8/2	回転ナデ→ヘラ切り(L)	口径1/8	
205	SDfl6中層	土質・小皿	(口)8.4　(高)1.45 (底)5.8	粗。径2mm以下の石英・長石・茶色砂粒を多量	良好	灰白2.5Y8/2・橙5YR6/6	(底・内)糸切り痕→(口)回転ナデ→(底・内)回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
206	SDfl6中層	土質・小皿	(口)7.0　(高)1.2 (底)5.8	密。径1mm以下の長石を少量	良好	(外)橙2.5YR7/6・浅黄橙10YR8/3　(内)灰白2.5Y8/2 断にぶい赤褐5YR4/4	回転ナデ→回転糸切り	底径1/6	
207	SDfl6中層	土質・小皿	(口)8.0　(高)1.25 (底)7.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石・砂岩	良好	(外)橙5YR6/6　(内)橙5YR6/6	(底・内)糸切り痕→(外)(口・内)回転ナデ→回転糸切り	完存	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
208	SDf16中層	土瓶・小皿	(口)7.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白N8/ (内)灰N4/ (断)にぶい黄橙10YR6/4	回転ナデ→ヘラ切り(R)	口径1/6	口縁部炭素吸着
209	SDf16中層	土質・杯	(口)11.6 (高)3.5 (底)7.6	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ→ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底部完存	
210	SDf16中層	土質・杯	(口)11.3 (高)2.7 (底)6.0	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→ヘラ切り	口径1/6	
211	SDf16中層	土質・杯	(口)11.4	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰黄2.5Y7/2	回転ナデ	口径1/8	
212	SDf16中層	土質・杯	(口)11.4 (高)3.0 (底)6.4	密。径1mm以下の長石	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→ヘラ切り(R?)	底径1/2	
213	SDf16中層	土質・杯	(口)11.6 (底)7.2	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2・浅黄橙7.5YR8/4 (内)灰白10YR8/2	「口縁部→体部」ナデ→ヘラ切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径1/6	
214	SDf16中層	土質・杯	(底)6.6	密	良好	灰白2.5Y7/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R?)→(底・外)板目状圧痕	底径3/8	
215	SDf16中層	土質・杯	(底)7.4	密。径1.5mm以下の長石・径2mm以下の石英を多量	良好	(外)(断)にぶい黄橙10YR7/3 (内)明黄褐10YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(L)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/4	
216	SDf16中層	土質・杯	(口)10.6 (高)3.8 (底)6.1	密。径1mm以下の赤色粒子を少量，径3mm以下の長石	良好	灰白10YR8/1	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径1/3	
217	SDf16中層	土質・杯	(口)14.0 (高)3.6 (底)8.4	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい赤橙10YR6/3 (内)灰黄2.5Y7/2 (断)にぶい赤橙10R6/3	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径1/4	
218	SDf16中層	土質・杯	(口)12.2 (高)3.1 (底)7.0	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2・にぶい橙5YR6/4 (内)灰黄2.5Y6/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り・(底・内)ナデ	口径1/4	
219	SDf16中層	土質・杯	(口)11.8	やや粗。径4mm以下の石英・長石・チャートを多量	良好	灰黄2.5Y7/2・橙5YR7/6	回転ナデ	口径1/10	
220	SDf16中層	土質・杯	(底)5.9	粗。径2mm以下の長石を多量	良好	(外)(内)灰5Y6/1 (断)にぶい赤橙10R6/4	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
221	SDf16中層	十瓶・椀	(口)13.0	密	良好	(外)(内)黒灰N4/・灰白N8/ (断)灰白N8/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/10	口縁部炭素吸着
222	SDf16中層	十瓶・椀	(口)13.6	密。径0.5mm以下の灰色砂粒を少量	不良	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→ヘラ切り→(内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
223	SDf16中層	十瓶・椀	(口)14.4	密。径0.5mm以下の石英を少量	良好	(外)灰N5/ (内)灰5Y5/1・背灰5PB5/1	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/12	炭素吸着
224	SDf16中層	十瓶・椀	(口)15.8	密。径1mm以下の長石を多量，径2.5mm以下の石英	良好	(口外)灰白7/ (外)(内)灰N7/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/12	口縁部炭素吸着
225	SDf16中層	十瓶・椀	(口)13.6 (高)4.2 (高台)6.0	密。径0.5mm以下の石英を少量	不良	灰白N8/	回転ナデ→ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/5	口縁部炭素吸着
226	SDf16中層	十瓶・椀	(口)14.6 (高)4.3 (高台)5.4	密。径1mm以下の長石を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ→ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付→回転ナデ	口径1/3	口縁部炭素吸着
227	SDf16中層	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径2mm以下の石英・長石を多量	やや軟	(外)浅黄橙7.5YR8/3 (内)灰白10YR8/1	(底・外)回転ヘラ切り→(底・内)板ナデ→高台貼付	高台径5/8	一部酸化
228	SDf16中層	十瓶・椀	(高台)5.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	不良	灰白5Y8/1	(底・内)板ナデ	高台径1/2	
229	SDf16中層	吉備・椀	(口)10.7	密。径1mm以下の石英を少量	良好	(外)灰白2.5Y8/1 (内)灰白2.5Y8/1 (断)暗灰N3/	(口・外)横ナデ→(内)板ナデ・(外)指オサエ	口径 1 /3	
230	SDf16中層	吉備・椀	(口)11.5 (高)3.6 (高台)4.8	粗。径2mm以下の長石を多量	良好	黄灰2.5Y6/1	調整不明	高台部完存	
231	SDf16中層	黒色・椀	(高台)5.8	密。径1mm以下の長石・角閃石・石英を多量，径1.5mm以下のシャーモットを少量	良好	(外)(断)灰白10YR8/1 (内)黒褐2.5Y3/1	(内)平行線状のヘラ磨き	底径1/4	A類
232	SDf16中層	土質・椀	(底)7.2	密。径2.5mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)淡黄2.5Y8/3	回転ナデ→ヘラ切り	底径1/4	
233	SDf16中層	土質・椀	(高台)7.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→ヘラ切り→(底・外)板目状圧痕	高台径1/2	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
234	SDfl6中層	青磁・碗		精良	良好	(胎)灰白7.5Y8/1 (釉)緑灰10GY6/1	(外)鎬蓮弁文	細片	横田・森田Ⅰ-5b類
235	SDfl6中層	十瓶・捏鉢	(口)21.0	密。径1mm以下の長石・灰色砂粒を少量	良好	(外)暗灰N3/ (内)灰N6/・暗灰N3/ (断)灰白5Y8/1	回転ナデ→(内)横ハケ	口径1/8	
236	SDfl6中層	十瓶・捏鉢	(口)30.4	密。径1mm以下の石英，径2mm以下の長石を多量	不良	(外)(内)灰N7/ (断)灰白5Y7/1	板ナデ(回転利用)	口径1/16	
237	SDfl6中層	十瓶・捏鉢	(底)14.2	密。径1mm以下の長石	不良	灰白N8/	(体・外)回転ナデ→(底・外縁)ヘラ削り	底径1/5	内面使用による摩滅
238	SDfl6中層	東播・捏鉢	(底)18.7	密。径1mm以下の長石を多量	良好	灰N5/	回転ナデ→回転糸切り	底径1/9	内面下半使用による摩滅
239	SDfl6中層	土質・足釜		密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/3	板ナデ	脚部3/4	煤付着
240	SDfl6中層	土質・足釜	(口)14.2	粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)浅黄橙10YR8/3	(体・外)縦ハケ→(口・外)(鍔)横ナデ(回転ナデ状)，(内)横ハケ	口径1/4	鍔部～体部外面に煤付着
241	SDfl6中層	土質・足釜	(口)16.4	やや粗。径2.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰白10Y8/2	(鍔)横ナデ，鍔部屈折か	口径1/8	鍔部に煤付着
242	SDfl6中層	土質・足鍋	(口)25.4	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄褐10YR5/3 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(頸・外)(体・外)縦ハケ→(頸・外)指オサエ・(内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/8	外面に煤付着
243	SDfl6中層	土質・鍋		密。径2mm以下の石英，径3mm以下の長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰白10Y8/2 (断)灰白10YR8/2	(口・端)横ハケ・(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
244	SDfl6中層	土質・鍋	(口)31.8	粗。径2mm以下の石英・長石・茶色砂粒を多量	良好	(外)黄灰2.5Y4/1 (内)灰黄2.5Y7/2 (断)黒7.5YR2/1	(外)縦ハケ・(口・内)横ハケ→(口)横ナデ・(頸・外)回転ナデ状の横ナデ	口径1/6	外面に煤付着
245	SDfl6中層	土質・鍋	(口)38.4	粗。径0.5mm以下の長石を多量	良好	暗灰黄2.5Y5/2	(体・外)縦ハケ・(体・内)板ナデ→(頸・外)指オサエ→(口・端)(口・内)横ハケ	口径1/12	外面に煤付着
246	SDfl6中層	土質・鍋	(口)48.6	粗。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	にぶい黄橙10YR7/3	(口・外)(体・外)縦ハケ→ (頸・外)指オサエ→(口・端) (口・内) 横ハケ→(口・外)横ナデ	口径1/19	外面に煤付着
247	SDfl6中層	土質・鍋	(口)30.6	やや粗。径1mm以下の長石を少量，径0.5mm以下の雲母・赤色粒子	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(体・外)縦ハケ→(頸)指オサエ→(口)(内)横ハケ	口径1/12	外面に煤付着
248	SDfl6中層	土質・鍋	(口)35.4	粗。径1mm以下の石英・長石を多量，径4mmの石英	良好	(外)黒褐10YR3/1 (内)にぶい黄橙10YR7/2	(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
249	SDfl6中層	土質・鍋	(口)37.6	密。径3mm以下の長石・金雲母を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/2 (断)淡橙5YR8/4	(口・内)横ハケ→(口・外)横ナデ	口径1/13	
250	SDfl6中層	土質・鍋	(口)40.8	粗。径1.5mm以下の石英・長石・黒色粒を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2 (内)灰白2.5Y8/2	(頸・外)指オサエ→(口)横ナデ	口径1/8	外面に煤付着
251	SDfl6中層	土質・鍋	(口)46.4	密。径1.5mm以下の長石・褐色粒	良好	(外)黒5Y2/1 (内)浅黄2.5Y7/4	(外)縦ハケ→(口・端)(口・内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/14	外面に煤付着
252	SDfl6中層	土質・鍋		粗。径2.5mm以下の石英・長石・金雲母を少量	良好	灰黄2.5Y7/2	(口・外)(体・外)縦ハケ→ (頸・外)指オサエ→(口・端) (口・内) 横ハケ	細片	外面に煤付着
253	SDfl6中層	土質・鍋	(口)25.4	密。径3mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/1 (内)灰白2.5Y8/2	(口・外)横ナデ→(口・内)板ナデ(?)	口径1/10	外面に煤付着
254	SDfl6中層	土質・鍋	(口)43.2	やや粗。径1mm以下の長石を少量	良好	(外)褐灰10YR5/1 (内)にぶい黄橙10YR7/2	(口・外)(体・外)縦ハケ→(口・内)横ハケ→(口)横ナデ→(底・外)格子叩き目・(底・内)横ハケ	口径1/2	吉備系鍋に近似した形態
255	SDfl6中層	十瓶・甕		密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	不良	灰白2.5Y8/1	(体・外)平行叩き目→(頸・外)回転ナデ，(内)調整不明	細片	
256	SDfl6中層	十瓶・甕		密。径2mm以下の石英・長石を多量	不良	(外)灰N4/ (内)灰白7.5Y8/1	(外)格子叩き目，(内)当て具痕→板ナデ	底径1/8	
257	SDfl6中層	常滑・甕		密。径1mm以下の長石を少量	良好	(外)灰褐5YR6/2 (内)灰白N7/	(外)格子状の押印	細片	
258	SDfl6中層	常滑・甕		粗。径1mm以下の長石・灰色砂粒を多量	良好	灰褐7.5YR5/2	(外)格子状の押印 (内)板ナデ	細片	
259	SDfl6下層	土質・小皿	(口)8.0 (高)1.7 (底)6.8	密。径2.5mm以下の石英・長石	良好	浅黄2.5Y7/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R?)	底径1/2	西村追跡系統か

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
260	SDf16下層	土質・小皿	(口)7.7 (高)1.3 (底)5.6.	密。径3mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転糸切り	底部ほぼ完存	
261	SDf16下層	土質・小皿	(口)8.0 (高)1.6 (底)5.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転糸切り	口径3/5	
262	SDf16下層	土質・小皿	(口)8.8 (高)1.5 (底)6.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)灰白7.5YR8/1 (断)橙2.5YR6/8	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
263	SDf16下層	土質・小皿	(口)8.3 (高)1.6 (底)6.15	密。径1mm以下の石英	良好	灰白2.5Y8/2・橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	口径2/3	
264	SDf16下層	土質・小皿	(口)9.3 (高)1.35 (底)5.4	やや粗。径1.5mm以下の石英・褐色粒を少量	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ→回転糸切り	底部完存	
265	SDf16下層	土質・小皿	(口)9.1 (高)1.4 (底)6.4	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/2 (断)明赤褐2.5YR5/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
266	SDf16下層	土質・杯	(口)12.8 (高)2.8 (底)6.2	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)(内)灰白5Y8/1 (断)にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	
267	SDf16下層	土質・杯	(口)12.6 (高)3.1 (底)7.2	密。径1mm以下の長石・径2mm以下の石英・褐色粒を多量	良好	(外)灰白2.5Y7/1 (内)黒褐10YR3/1 (断)橙2.5YR6/8	回転ナデ→回転ヘラ切り(?)	口径1/8	
268	SDf16下層	土質・杯	(口)13.25 (高)3.25 (底)7.0	密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/1 (断)橙5YR6/8	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	底部完存	
269	SDf16下層	土質・杯	(口)13.3 (高)3.9 (底)8.4	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黒10YR2/1 (内)浅黄橙10YR8/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径3/4	外面煤付着
270	SDf16下層	土質・杯	(口)13.8 (高)3.3 (底)8.8	粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR8/2・浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/7	
271	SDf16下層	土質・杯	(口)13.0 (高)3.6 (底)6.2	密。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径1/5	
272	SDf16下層	土質・杯	(口)10.9 (高)3.7 (底)6.4	密。径2mm以下の赤色粒子を少量	良好	浅黄橙10YR8/3	回転糸切り，他は調整不明	底部完存	
273	SDf16下層	十瓶・椀	(口)13.5	密。径0.5mm以下の長石	良好	灰白N5/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
274	SDf16下層	十瓶・椀	(口)15.5 (高)4.3 (高台)6.0	密	良好		回転ナデ→(内)板ナデ		口縁部炭素吸着
275	SDf16下層	十瓶・椀	(高台)4.5	密。径1mm以下の石英・長石	土師質・不良	灰白2.5Y8/1・浅黄橙7.5YR8/3	回転ナデ	高台径1/2	
276	SDf16下層	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径0.5mm以下の黒色砂粒を少量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ヘラ切り→(内)板ナデ	高台径1/2	
277	SDf16下層	十瓶・椀	(高台)4.9	密。径0.5mm以下の黒色砂粒を少量	やや軟	(外)灰白N8/ (内)褐灰10YR1/6	(底・内)板ナデ	高台径3/5	
278	SDf16下層	吉備・椀	(高台)5.4	密。径2mm以下の石英・径5mm以下の花崗岩	良好	灰白2.5Y8/2	(底・外)指オサエ→高台貼付，(底・内)目跡状の重ね痕	高台径1/7	
279	SDf16下層	吉備・椀	(高台)4.4	密。径3mm以下の石英を少量	良好	(外)(内)灰白10YR8/1 (断)灰N4/	(外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付	高台部完存	
280	SDf16下層	黒色・椀	(高台)4.6	密。径0.5mm以下の長石	良好	(外)灰白5Y8/1 (内)灰N5/	調整不明	底部完存	A類
281	SDf16下層	白磁・碗		密	良好	(胎)灰白N8/ (釉)灰白5GY8/1		細片	横田・森田Ⅶ類?
282	SDf16下層	青白磁・合子	(口)6.0	密	良好	(胎)明オリーブ灰5GY7/1 (釉)灰白N8/	(外)型押しの蓮弁文	口径1/7	
283	SDf16下層	青磁・碗	(高台)5.6	密	良好	(胎)灰白N7/・灰白7.5Y8/1 (釉)灰オリーブ7.5Y5/3		底径1/4	横田・森田Ⅰ-2類，貫入
284	SDf16下層	十瓶・捏鉢	(口)28.6	密。径0.5mm以下の灰色砂粒を少量	やや軟	(外)灰白5Y8/1 (内)灰N4/	(外)格子叩き目→回転ナデ	口径1/10	
285	SDf16下層	土質・羽釜		粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黄橙10YR8/6 (内)浅黄2.5Y7/4	調整不明	細片	破断面の摩滅顕著，竈か

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
286	SDf16下層	土質・足釜	(口)31.2	密。径4mm以下の石英・長石	良好	(外)(内)灰白10YR7/1 (断)橙2.5YR7/6	(口)横ナデ，(底・内)板ナデ，(脚)ナデ	鍔部径1/6	外面に煤付着，搬入品か
287	SDf16下層	土質・鍋	(口)33.4	粗。径4mm以下の石英・長石・砂岩を多量	良好	褐灰10YR4/1・灰黄2.5Y6/2	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口・端)(口・内)横ハケ→(口・外)横ナデ	口径1/10	外面に煤付着
288	SDf16下層	土質・鍋	(口)34.8	密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	明褐灰7.5YR7/1	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口・端)(口・内)横ハケ・(体・内)板ナデ→(口・外)横ナデ	口径1/8	
289	SDf16下層	土質・鍋	(口)37.6	粗。径3mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)黒褐10YR3/1 (内)黒褐10YR3/1・灰黄褐10YR4/2	(外)縦ハケ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/10	
290	SDf16下層	土質・鍋	(口)41.3	粗。径4mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄褐10YR7/3 (内)にぶい黄褐10YR6/3	(口・外)(体・外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口・外)横ナデ・(口・内)横ハケ・(体・内)板ナデ	口径1/10	外面に煤付着
291	SDf16下層	吉備・鍋	(口)32.6	密。径2mm以下の石英・長石を多量，径0.5mm以下の角閃石を少量	良好	浅黄橙10YR8/3・褐灰10YR4/1	(口・外)(体・外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ・(体・内)横ハケ→(口)横ナデ→(底)横ハケ	口径9/10	外面に煤付着，底部外面の器表被熱により剥落
292	SDf16下層	十瓶・甕	(口)27.8	密	良好	(外)灰N4/ (内)灰N5/ (断)褐灰5YR6/1	回転ナデ	口径1/14	口縁端部・破断面に二次的な小剥離
293	SDf16下層	東播・甕		密。径0.5mm以下の長石・黒色砂粒	やや軟	(外)灰N4/ (内)灰白5Y7/1	(顎・外)平行叩き目(右上がり)→(体・外)平行叩き目(横位)	細片	
294	SDf16下層	十瓶・甕	(底)25.4	密。径3mm以下の石英・長石	良好	(外)明青灰5PB7/1 (内)(断)灰白N7/	(外)平行叩き目→(底・外縁)ヘラ削り，(内)板ナデ，(底・外)離れ砂(径3mm前後の石英・長石の角礫を使用)	底径1/8	
295	SDf16下層	十瓶・椀	(口)15.4 (高)5.3 (高台)4.6	密。径2mm以下の石英・長石を少量	不良	(外)灰白N8/ (内)灰白2.5Y8/1・灰黄褐10YR4/2	調整不明	3/4	外面半分黒斑状の焼けムラ
296	SDf16層位不明	十瓶・椀	(口)13.8	密。径1mm以下の石英を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ→(体・内)板ナデ	口径1/11	
297	SDf16層位不明	十瓶・椀	(高台)4.2	密。径1mm以下の石英を少量	やや軟	灰白5Y8/1	(内)板ナデ	高台径3/8	
299	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・小皿	(口)8.2 (高)1.1 (底)5.6	粗。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ	口径1/6	
300	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・小皿	(口)8.4 (高)1.5 (底)5.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/2 (断)橙5YR6/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/5	
301	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・小皿	(口)9.4 (高)1.4 (底)6.0	密。径2mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/2 (断)灰5Y4/1	回転ヘラ切り	底径1/2	
302	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・小皿	(口)9.4 (高)1.0 (底)6.4	密。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	
303	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・小皿	(口)8.1 (高)1.4 (底)5.6	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	完存	
304	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・小皿	(口)8.2 (高)1.55 (底)5.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転糸切り	口径1/2	
305	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)11.3 (高)3.2 (底)6.8	密。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	灰白10YR8/1	回転糸切り	底径1/4	
306	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)13.2 (高)3.4 (底)7.4	密。径1mm以下の石英・長石，径2.5mm以下の砂岩	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)浅黄橙10YR8/3・褐灰10YR5/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	底部完存	焼けムラあり
307	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)13.3 (高)3.2 (底)7.9	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y8/2・橙5YR6/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	完存	焼けムラあり
308	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)13.4	密。径2mm以下の石英，径3mm以下の赤色粒子を少量	良好	灰白10YR8/2	調整不明	口径1/8	
309	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)13.8 (高)3.5 (底)7.0	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰黄2.5Y7/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	ほぼ完存	
310	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)13.9 (高)3.5 (底)7.8	密。径2mm以下の長石・径3mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/2 (断)橙5YR7/8	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)(底・外)ナデ	ほぼ完存	
311	SDf16(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)13.8 (高)3.9 (底)6.6	密。径2.5mm以下の石英・長石を多量	良好	黄灰2.5Y6/1・橙2.5Y7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕→(底・外)板目状圧痕(直交)	完存	焼けムラあり

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
312	SDfl6(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)14.8 (高)3.7 (底)7.6	密。径1mm以下の石英・長石，径4mmの長石	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径1/8	
313	SDfl6(Ⅲ－2区)	土質・杯	(底)7.8	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/2 (断)黄灰2.5Y6/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/2	
314	SDfl6(Ⅲ－2区)	土質・杯	(口)14.6 (高)3.1 (底)9.6	密。径1.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰黄2.5Y7/2	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
315	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・椀	(口)14.8	粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ→(内)板ナデ→(外)回転ヘラ磨き	口径1/7	口縁部炭素吸着
316	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・椀	(口)14.8 (高)4.5 (高台)4.0	密。径1.5mm以下の長石を少量	不良	灰白2.5Y8/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	底部完存	口縁部炭素吸着，一部酸化
317	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径1mm以下の長石を少量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/2	
318	SDfl6(Ⅲ－2区)	瓦器・椀		密。径1mm以下の長石を少量	良好	(外)暗灰N3/ (内)灰N4/ (断)灰白N8/	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(体・内)ナデ→(内)暗文	細片	和泉型
319	SDfl6(Ⅲ－2区)	青磁・碗		密	良好	にぶい褐7.5YR5/3		細片	
320	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・捏鉢	(底)10.9	密。径3.5mm以下の石英・長石，径6mmの長石	不良	(外)灰N4/ (内)灰白N8/	(体・外)縦ハケ→(底・外縁)ヘラ削り，(内)ナデ	底部3/8	
321	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・捏鉢	(口)21.0 (高)8.1 (底)12.0	密。径0.5mm以下の長石	良好	(外)灰白2.5Y8/1・黒N1.5/ (内)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→(底・外)ヘラ削り	口径1/6	内面下半に使用痕
322	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・甕	(口)23.8	密。径1.5mm以下の石英・長石を少量	良好	灰N5/	(頸・外)格子叩き目(右上がり)→(口)回転ナデ→(体・外)格子叩き目(右下がり)→(体・内)板ナデ	口径1/6	
323	SDfl6(Ⅲ－2区)	十瓶・甕		密。径1.5mm以下の長石を少量	良好	(外)灰5Y4/1 (内)灰N4/ (断)灰赤2.5YR5/2・灰N4/	(外)平行叩き目・(内)当て具痕	細片	外面に胡麻状の降灰
325	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)6.9 (高)1.5 (底)4.9	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)(断)灰白7.5YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/4	
326	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.7 (底)6.5	密。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を少量	良好	(外)橙2.5YR6/6 (内)灰黄褐10YR5/2	回転ヘラ切り(R)	ほぼ完存	
327	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)7.5 (高)1.2 (底)6.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石・褐色粒を多量，径3mmの石英・長石	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ	ほぼ完存	
328	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.6 (底)5.2	密。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4・灰白10YR8/2 (内)浅黄橙10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)板目状圧痕	底部完存	
329	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)8.3 (高)1.7 (底)6.0	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙5YR6/6 (内)淡黄2.5Y8/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	ほぼ完存	
330	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.3 (底)5.7	粗。径4mm以下の石英・長石・褐色粒，径5mmの砂岩	良好	橙5YR7/8	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/2	
331	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)7.2 (高)0.9 (底)6.0	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黄灰2.5Y6/1 (内)灰白2.5Y7/1 (断)橙5YR6/6	回転糸切り	口径1/6	
332	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.2 (底)6.7	粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙5YR7/6・灰黄褐10YR5/2 (内)灰黄褐10YR5/2	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り	底部ほぼ完存	
333	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)8.0 (高)1.2 (底)6.7	密。径2mm以下の長石・褐色粒を少量	良好	(外)(内)橙5YR7/6 (断)暗灰N3/	回転ナデ→回転糸切り(?)	口径1/6	
334	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)8.6 (高)1.2 (底)6.6	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい赤褐5YR5/4 (内)にぶい橙5YR6/4 (断)にぶい橙5YR6/8	回転糸切り	口径1/4	
335	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)8.8 (高)1.1 (底)7.4	密。径1mm以下の長石を多量，径6mmの砂岩	良好	(外)(内)褐灰5YR5/1 (断)橙2.5YR6/8	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
336	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.7 (底)5.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
337	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)10.8 (底)6.4	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白10YR8/2・黄灰2.5Y5/1 (内)灰白2.5Y8/2・黄灰2.5Y4/1	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/10	黒斑状の焼けムラあり
338	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)10.8 (高)2.9 (底)7.6	密。径2.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/3	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
339	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.0 (高)2.8 (底)6.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)暗灰黄2.5Y5/2 (内)黄灰2.5Y5/1	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/5	
340	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.0 (高)3.7 (底)7.8	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径1/3	
341	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.0	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(?)	口径1/16	
342	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.6 (高)2.5 (底)6.8	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	
343	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.6 (高)3.3 (底)7.0	やや粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄2.5Y7/2 (内)にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R?)	口径1/8	
344	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.6 (高)4.0 (底)7.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ	底部ほぼ完存	
345	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.2 (高)3.2 (底)7.4	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・外)板目状圧痕	口径1/8	
346	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.6 (底)7.6	密。径2.5mm以下の石英・長石・茶色砂粒を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4・にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰白7.5YR8/2	調整不明	口径1/8	
347	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.8	粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰5Y6/1 (内)黄灰2.5Y4/1	調整不明	口径1/7	
348	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)13.2 (高)3.1 (底)8.0	密。径1mm以下の長石・褐色粒	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/12	
349	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.8 (高)2.9 (底)6.8	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙2.5YR6/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	底径5/8	
350	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.4 (高)2.8 (底)7.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量，径12mmの砂岩	良好	(外)橙7.5YR7/6 (内)にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ→静止糸切り	口径1/4	
351	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.2 (高)3.2 (底)8.6	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい褐7.5YR5/3 (内)灰5Y4/1	回転ナデ→回転糸切り	底径1/3	
352	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.0 (高)3.4 (底)8.8	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/1・にぶい橙5YR7/4・(内)灰白10YR8/1	回転ナデ→回転糸切り(?)	口径1/10	
353	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.9 (高)3.2 (底)8.9	やや粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	灰黄褐10YR5/2・浅黄橙10YR8/3	回転ナデ→回転糸切り	底部完存	
354	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.0	密。径1mm以下の黒色砂粒・径2mm以下の石英・径3mm以下のシャーモット・径4mm以下の長石を多量	良好	(外)褐灰5YR5/1・にぶい橙5YR6/3 (内)褐灰5YR4/1 (断)橙5YR6/3	調整不明	口径1/5	
355	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.8 (高)3.5 (底)7.0	密。径2mm以下の石英・径3mm以下の長石を多量	良好	(外)(内)浅黄橙10YR8/3 (断)橙2.5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
356	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.0 (高)3.0 (底)5.8	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)灰白2.5Y8/1 (断)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り→(底・外)板目状圧痕	口径1/4	
357	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.2 (高)3.5 (底)6.2	粗。径3mm以下の石英・長石	良好	橙2.5YR6/6	回転糸切り，他は調整不明	底部完存	
358	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.6	密。径1mm以下の長石	良好	(外)橙5YR6/6 (内)灰黄2.5Y7/2・橙7.5YR6/6	回転ナデ	口径1/11	
359	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.8	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐灰10YR5/1 (内)灰白10YR7/1	回転ナデ	口径1/8	
360	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.0	粗。径3mm以下の石英・長石，径7mmの砂岩	良好	(外)灰黄褐10YR5/2 (内)黄灰2.5Y5/1	回転ナデ	口径1/6	
361	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.6 (高)3.6 (底)6.7	やや粗。径2mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)橙5YR7/6・にぶい褐7.5YR6/3・灰白2.5Y7/1 (内)にぶい黄橙10YR7/2・橙5YR6/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	完存	
362	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.8 (高)3.4 (底)7.3	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白5Y8/1・オリーブ黒5Y3/1 (内)褐灰7.5YR6/1 (断)灰N6/	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ	ほぼ完存	外面全体に焼けムラあり
363	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.0 (高)4.1 (底)5.6	粗。径3mm以下の石英・長石・を多量	良好	(外)橙5YR6/6 (内)オリーブ黒5Y3/1 (断)赤褐5YR4/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ	底径1/2	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
364	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.8 (高)3.6 (底)6.3	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)(内)浅黄5YR8/4 (断)橙5Y6/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底部完存	
365	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.6 (高)3.5 (底)6.3	やや粗。径1mm以下の長石・褐色粒	良好	(外)灰白2.5Y7/1 (内)橙2.5Y6/6		口径1/8	
366	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.6 (高)3.5 (底)6.8	密。径2.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰黄2.5Y7/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/6	
367	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.0 (高)3.9 (底)6.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白2.5Y8/1 (内)灰白2.5Y8/2 (断)明赤褐5YR5/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/2	
368	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.0	密。径3mm以下の長石・径7mmの石英	良好	(外)灰白10YR8/2・橙5YR6/6 (内)灰白10YR8/2 (断)明赤褐5YR5/6	調整不明	口径1/5	
369	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.8 (高)3.7 (底)7.1	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙2.5YR6/6 (内)にぶい橙2.5YR6/3・赤灰2.5YR4/1	「口縁部→体部」ナデ(?)→回転糸切り	底径2/3	
370	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.6 (高)3.4 (底)7.3	粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	灰黄褐10YR5/2	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/3	
371	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(底)7.2	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白10YR8/2	回転糸切り	底径1/4	
372	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(底)6.4	やや粗。径2.5mm以下の石英・長石を多量，径2.5mm以下のシャーモットを少量	良好	(外)灰白5YR8/1 (内)灰白7.5YR8/1 (断)灰N6/	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径3/4	
373	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(底)7.4	やや粗。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)橙5YR7/6・灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
374	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)11.7 (高)4.3 (底)6.1	粗。径2mm以下の長石・褐色粒	良好	(外)黄灰2.5Y5/1 (内)褐灰10YR5/1	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ	底部完存	
375	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.2 (高)3.4 (底)7.6	粗。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)にぶい橙7.5YR6/3 (断)橙5YR6/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径1/4	
376	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.4 (高)3.3 (底)6.4	粗。径3mm以下の長石を少量，径1.5mmの砂岩	良好	(外)(内)褐灰10YR5/1 (断)にぶい橙5YR6/4・褐灰10YR5/1	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/2	
377	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)14.4 (高)3.6 (底)10.2	密。径2mm以下の長石，径3.5mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/2 (断)橙2.5YR7/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/10	
378	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)14.4	密。径0.5mm以下の長石・褐色粒	良好	(外)灰白10YR7/1 (内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ	口径1/7	
379	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(底)6.5	粗。径3mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	回転糸切り，他は調整不明	底部完存	
380	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・杯	(口)13.6 (高)4.1 (底)9.3	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白5Y7/1・灰N4/	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・外)指オサエ・(底・内)板ナデ(ハケ目状)	口径1/2	口縁部炭素吸着
381	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・杯	(口)12.6 (高)3.4 (底)5.6	密。径2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	灰白N8/・灰N5/	回転ナデ(外面はカキ目状)→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ	口径2/3	口縁部炭素吸着
382	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・杯	(口)13.6	密。径2mm以下の長石を多量	不良	(外)灰白N7/ (内)灰白10YR7/1 (断)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/5	
383	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)13.6 (高)3.5 (底)5.6	密。径1mm以下のシャーモットを少量，径1mmの長石・径1.5mmの石英を多量	土師質・不良	灰白5YR8/2・褐灰5YR6/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・外)板目状圧痕→指オサエ・(内)板ナデ(ハケ目状)	口径2/5	口縁部に焼けムラあり
384	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)13.4 (高)4.3 (高台)4.2	密。径3mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白5Y8/1・灰N6/ (内)灰白5Y8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	高台部ほぼ完存	
385	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)14.8 (高)4.3 (高台)3.3	密。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白5Y7/1・灰N5/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	口径1/6	口縁部炭素吸着
386	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)14.8 (高)4.8 (高台)4.4	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白5Y8/1・灰N5/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付	底部完存	口縁部炭素吸着
387	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)13.0	密。径1mm以下の長石	やや軟	(外)灰N4/ (内)灰白2.5Y8/1	調整不明	口径1/6	口縁部炭素吸着
388	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)14.2	密。径0.5mm以下の長石を少量	やや軟	灰白N8/	調整不明	口径1/8	口縁部炭素吸着
389	SDf16(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)13.8	密。径3mm以下の石英・長石	良好	灰白N8/・灰N4/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ	口径2/5	口縁部炭素吸着

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
390	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)14.6	密。径1mm以下の長石・径2mm以下の石英を少量	良好	灰白N8/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
391	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)14.9	密。径1.5mm以下の石英・長石	やや軟	灰白N8/	調整不明	口径1/10	口縁部炭素吸着
392	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)15.1	密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ	口径1/16	口縁部炭素吸着
393	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(口)15.8	密。径0.5mm以下の灰色砂粒を少量	良好	(外)灰N4/ (内)灰N5/ (断)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/12	口縁部炭素吸着
394	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)4.8	やや粗。径2mm以下の長石・黒色砂粒・赤色粒を少量	不良	(外)(内)灰白2.5Y8/ (断)にぶい黄橙10YR6/3	調整不明	高台径3/4	
395	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)4.8	密。径2.5mm以下の石英・長石を多量	やや軟	灰白N8/	回転ナデ→回転ヘラ切り(R?)→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/4	
396	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)4.4	密。径1mm以下の長石を少量	不良	(外)灰黄褐10YR6/2 (内)褐灰10YR4/1・灰白2.5Y8/1	(内)板ナデ(ハケ目状)	高台径1/3	
397	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)4.8	密。径1.5mm以下の石英を少量	やや軟	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→(回転ヘラ切り)→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ(ハケ目状)→高台貼付	高台径1/2	
398	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)5.4	密。径1mm以下の長石・黒色粒を多量	良好	灰白N8/	回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ(ハケ目状)→高台貼付	高台径2/5	
399	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	やや軟	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白N8/	回転ナデ→(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/8	
400	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)5.6	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白5Y7/1	(内)板ナデ(ハケ目状)	高台径1/3	
401	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)4.7	密。径1mm以下の長石	良好	灰白N8/	(内)板ナデ(ハケ目状)	高台径1/2	
402	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)5.3	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白5Y8/1	(内)板ナデ，(外)回転ヘラ切り→高台貼付	高台径1/2	
403	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)3.9	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/2	
404	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・椀	(高台)5.1	密。径2.5mm以下の長石	不良	(外)灰N5/ (内)灰白2.5Y7/1	回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ	底部完存	
405	SDfl6(Ⅲ－8区)	東播・椀	(高台)7.0	密。径1.5mm以下の長石を多量	良好	灰白5Y7/1	回転糸切り	高台径5/8	
406	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(口)12.4 (高)3.8 (高台)5.4	粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量，径3mmの石英	良好	灰白2.5Y8/1	(口)横ナデ→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付，(底・内)目跡状の重ね痕	口径1/5	
407	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(口)12.0 (高)3.8 (高台)5.4	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)灰白10YR8/2 (断)暗灰N3/	(口・外)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/6	
408	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(口)11.8	密。径0.5mm以下の石英を少量	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)灰白10YR8/2	横ナデ	口径1/8	
409	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(口)12.0	密。径1mm以下の長石・径3mm以下の石英を多量	良好	浅黄橙10YR8/3	(口・外)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)板ナデ	口径1/5	
410	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.3	密。径1.5mm以下の石英・長石，径3mm～径5mmの石英	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	調整不明	底部ほぼ完存	
411	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.2	密。径0.5mm以下の石英・径4mmの石英	良好	灰白2.5Y8/1	調整不明	高台径1/3	
412	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)7.0	密。径1mm以下の長石	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/1 (断)黒2.5Y2/1	調整不明	細片	
413	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.0	密。径1mm以下の長石・径3mm以下の石英を多量	良好	(外)(断)浅黄橙7.5YR8/3 (内)褐灰10YR4/1	調整不明	高台径3/4	
414	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.2	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)(内)灰白10YR8/2 (断)灰白10YR8/1	(底・外)指オサエ・(底・内)板ナデ→高台貼付	高台径1/3	
415	SDfl6(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.3	密。径1mm以下の石英・長石，径2.5mm以下の石英	良好	灰白N8/	(底・外)指オサエ・(底・内)板ナデ→高台貼付	高台径2/7	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
416	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)4.6	密。径3mm以下の石英	良好	灰白2.5Y8/2	調整不明	高台径1/3	
417	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.0	密。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白5Y8/1・灰白N7/ (断)灰N4/	調整不明	高台部完存	内面に焼けムラあり
418	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)4.8	密。径2mm以下の石英・径2.5mm以下の褐色粒	良好	灰白10YR8/1	調整不明	高台径1/3	
419	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)4.5	密。径1.3mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰白2.5Y7/1	(底・外)指オサエ・(底・内)板ナデ→高台貼付	高台径7/10	
420	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)4.8	密。径1mm以下の長石，径1.5mm以下の石英を多量	良好	灰白2.5Y8/1	調整不明，(底・内)目跡状の重ね痕	高台径2/3	
421	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.5	密。径1.5mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/1 (断)浅黄橙10YR8/4	(底・外)指オサエ→高台貼付，(底・内)目跡状の重ね痕	高台径3/5	
422	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.0	密。径3mm以下の石英・長石を多量，径4mm・径4.5mmの石英	良好	灰白2.5Y8/1	(底・外)指オサエ・(底・内)板ナデ→高台貼付，(底・内)目跡状の重ね痕	高台径5/8	
423	SDf16(Ⅲ－8区)	吉備・椀	(高台)5.2	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/2・褐灰10YR6/1 (内)褐灰10YR6/1	(底・外)指オサエ→高台貼付，(底・内)目跡状の重ね痕	高台径3/8	
424	SDf16(Ⅲ－8区)	瓦器・椀	(口)15.6 (高)4.5 (高台)4.8	密。径1mm以下の石英・長石，径2mmの石英	良好	(外)灰N4/・灰白N8/ (内)暗灰N3/	(口)横ナデ→(体・外)(口・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付→(内)暗文，(外)接合痕	口径1/4	
425	SDf16(Ⅲ－8区)	瓦器・椀	(口)13.8	密。径0.5mm以下の長石・灰色砂粒を少量	良好	(外)暗灰N3/・灰白5Y8/1 (内)暗灰N3/・灰白N8/	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)ナデ(板ナデ?)→(内)暗文	口径1/8	和泉型
426	SDf16(Ⅲ－8区)	瓦器・椀	(口)15.0	密。径3mm以下の長石	良好	(外)暗灰N3/ (内)灰N4/ (断)灰白N8/	(内)板ナデ→(口・外)(内)暗文	口径1/12	和泉型
427	SDf16(Ⅲ－8区)	瓦器・椀		密。径1mm以下の灰色砂粒	良好	(外)灰白N8/・灰N4/ (内)暗灰N3/	調整不明	体部1/8	和泉型
428	SDf16(Ⅲ－8区)	瓦器・椀	(高台)3.6	密。径1.5mm以下の長石	やや軟	(外)灰N6/ (内)灰N5/	調整不明	高台径1/4	和泉型
429	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・椀	(高台)7.8	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	高台径1/2	平高台椀
430	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・台付皿	(脚台)8.2	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/1 (断)橙5YR7/6	回転ナデ	底径1/4	
431	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・高台付杯		密。径2mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)灰白2.5Y8/1・黄灰2.5Y6/1 (内)褐灰10YR5/1 (断)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り→高台貼付	底部1/2	
432	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・高台付杯		密。径1.5mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)灰白10YR8/1・橙5YR7/6 (内)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転糸切り→高台貼付	1/2	
433	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・皿	(底)4.8	密	良好	(胎)灰白5Y7/1 (釉)オリーブ黄5Y6/3	(底・内)櫛描き文，底部外面露胎	底径1/3	横田・森田Ⅰ-1b類
434	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗	(高台)5.4	密。	良好	(胎)灰白N7/ (釉)灰オリーブ7.5Y5/3	(体・外)鎬蓮弁文，高台畳付・高台内側露胎	底部完存	横田・森田Ⅰ-5b類
435	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗		密	良好	(胎)灰白2.5Y7/1 (釉)オリーブ黄5Y6/3	(体・外)蓮弁文	細片	横田・森田Ⅰ-5a類
436	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗		密	良好	(胎)灰白5Y7/1 (釉)灰オリーブ5Y6/2	(体・外)蓮弁文	細片	横田・森田Ⅰ-5a類
437	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗	(高台)5.2	密	良好	(胎)灰白5Y8/1 (釉)灰オリーブ5Y6/2	(体・外)蓮弁文，高台畳付・高台内側露胎	高台径3/5	横田・森田Ⅰ-5a類
438	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗	(高台)6.3	密。径0.5mm以下の長石(?)を少量	良好	(胎)灰白N8/ (釉)灰7.5Y6/1	(底・内)草花文，高台露胎	高台径3/8	横田・森田Ⅰ-4a類
439	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗	(高台)6.2	密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	(胎)灰白N8/ (釉)オリーブ灰10Y5/2	(底・内)型押し花文，高台畳付・高台内側露胎	底部ほぼ完存	横田・森田Ⅰ-4a類?
440	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗	(口)16.4 (高)7.0 (高台)6.2	密	良好	(胎)灰白N7/ (釉)明オリーブ灰2.5GY7/1	(内)画花文，高台内側露胎	高台径1/2	横田・森田Ⅰ-4a類
441	SDf16(Ⅲ－8区)	青磁・碗	(口)10.6	密	良好	(胎)にぶい黄橙10YR7/2 (釉)黄褐2.5Y5/3		口径1/7	横田・森田Ⅲ-3類

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
442	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢		密。径1mm以下の長石を少量	瓦質・良好	灰N5/	回転ナデ	細片	
443	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(口)30.2	密。径3mm以下の石英，径5mmの石英	やや軟	(外)灰白N8/ (内)灰白5Y8/1	(外)格子叩き目→(外)(内)回転ナデ	細片	
444	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(口)29.6	密。径2mm以下の長石	瓦質・良好	灰N5/	回転ナデ	口径1/8	
445	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(口)26.2	粗。径2.5mm以下の石英・長石・灰色粒を多量	不良	(外)灰白5Y7/1 (内)灰白5Y8/1	(外)(内)板ナデ，(口)回転ナデ	口径1/10	
446	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(口)32.0	密。径1mm以下の長石・径1.5mm以下の石英を多量	良好	灰N6/	回転ナデ	口径1/18	
447	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(口)30.6	密。径1mm以下の長石	不良	灰白7.5YR8/1	(体・外)格子叩き目→回転ナデ(?)	口径1/28	
448	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(底)12.7	密。径1.5mm以下の長石を少量	やや軟	灰白N8/	回転ナデ→(底・外縁)ヘラ削り・(底・外)亀板痕	底径1/5	内面使用による摩滅
449	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(底)10.2	密。径2.5mm以下の石英・長石を少量	不良	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→(底・外縁)ヘラ削り，(底・外)離れ砂	底径1/6	内面下半使用による摩滅
450	SDfl6(Ⅲ－8区)	十瓶・捏鉢	(底)14.6	粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y7/1	回転ナデ→(底・外縁)ヘラ削り，(底・外)離れ砂	底径1/6	内面使用による摩滅
451	SDfl6(Ⅲ－8区)	東播・捏鉢		密。径2mm以下の石英・長石	不良	灰白5Y8/1	回転ナデ	細片	
452	SDfl6(Ⅲ－8区)	東播・捏鉢	(口)28.8	密。径2mm以下の石英・長石・灰色粒を多量，径4.5mmの長石	良好	(外)灰N5/・灰白N7/ (内)灰白N7/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/12	口縁部炭素吸着
453	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・足釜	(口)24.0	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)浅黄2.5Y7/3 (断)灰白10YR8/2	(口・外)板ナデ，他は調整不明	口径1/8	外面に煤付着
454	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・足釜	(口)26.2	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白2.5Y8/2・暗灰黄2.5Y5/2 (内)灰黄2.5Y7/2	(鍔)指オサエ→(内)板ナデ→(口)(鍔)横ナデ，(内)接合痕(鍔部屈折後の口縁部の接合痕)	口径1/10	外面に煤付着
455	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・足釜		やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/4	(脚基部)ナデ	脚部完存	外面に煤付着
456	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・足釜		密。径3mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい橙5YR7/4・褐灰10YR5/1 (内)黄灰2.5Y4/1 (断)黄灰2.5Y4/1	脚基部ハケ目・ナデ	脚部1/2	外面に煤付着
457	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)23.6	やや粗。径3mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	(外)縦ハケ→(口・外)横ナデ(回転ナデ状)	口径1/8	外面に煤付着
458	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)27.2	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黒褐2.5Y3/1 (内)灰黄2.5Y6/2	(外)縦ハケ→(内)横ハケ・板ナデ→(口)横ナデ	口径1/4	外面に煤付着
459	SDfl6(Ⅲ－8区)	土師・鍋	(口)27.2	粗。径1.5mmの石英・長石を多量，径0.5mmの角閃石，径1mmの金雲母	良好	(外)灰黄褐10YR6/2・浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/5	外面に煤付着
460	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)32.4	粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2 (内)灰白10YR8/2	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口・端)横ハケ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/10	外面に煤付着
461	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)37.6	粗。径2.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)浅黄橙10YR8/3	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/16	
462	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)39.6	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)にぶい黄2.5Y6/3	(体・外)縦ハケ→(口・外)格子叩き目→(内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/14	外面被熱変色
463	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)26.4	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙2.5YR6/6 (内)にぶい黄橙10YR7/2・黄灰2.5Y4/1	(体・外)縦ハケ→(顎・外)屈折によるシワ→(口・端)横ハケ→(口・内)横ハケ	口径1/10	
464	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋		やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)浅黄橙10YR8/3 (断)橙7.5YR6/6	(口・外)横ナデ→(口・端)横ナデ→(内)板ナデ	細片	外面に煤付着
465	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)35.6	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黒褐10YR3/2・灰黄褐10YR6/2 (内)浅黄橙10YR8/3	(体・外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口・端)横ハケ→(口・内)板ナデ(ハケ目状)・(口・外)横ナデ	口径1/16	外面に煤付着
466	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋		密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐7.5YR4/3 (内)にぶい褐7.5YR5/4 (断)褐7.5YR4/6	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ，(口・端)横ハケ→(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
467	SDfl6(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)38.6	密。径2.5mm以下の石英・長石を多量，径6mmの花崗岩	良好	(外)(内)にぶい褐7.5YR6/3 (断)黒7.5YR2/1	(外)縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口)横ナデ	口径1/18	外面に煤付着

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
468	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)33.5	粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)黒褐7.5YR3/1 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(外)縦ハケ→(内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/10	外面に煤付着
469	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)39.0	粗。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)浅黄橙10YR8/4 (内)灰白10YR8/2	(体・外)縦ハケ→(内)横ハケ・板ナデ→(口)横ナデ	口径1/4	外面に煤付着
470	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)39.2	粗。径4mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/1	(外)縦ハケ→(頸・外)指オサエ→(口・端)横ハケ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/6	外面に煤付着，内面に帯状の変色(内容物か)
471	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)41.6	やや粗。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)灰黄褐10YR5/2 (断)にぶい黄橙10YR7/2	(口・外)格子叩き目→(口・端)横ハケ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/5	外面に煤付着
472	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)42.8	密。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白7.5YR8/2	(外)縦ハケ→(頸・外)指オサエ→(口・端)横ハケ→(口・内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
473	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)43.8	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐灰10YR4/1 (内)にぶい橙7.5YR7/4	(口・端)格子叩き目→(口)横ナデ	口径1/10	外面に煤付着
474	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)29.4	密。径4mm以下の石英・長石	良好	にぶい黄橙10YR7/2	(体・外)縦ハケ→(口・外)横ナデ	口径1/6	外面に煤付着
475	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)28.2	粗。径1.5mm以下の長石・褐色粒を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(体・外)縦ハケ→(頸・外)指オサエ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
476	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)31.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量，径3mm・径4mmの石英	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4 (内)淡黄2.5Y8/3・にぶい黄褐10YR4/3	(体・外)縦ハケ→(口・外)格子叩き目→横ナデ	細片	外面に煤付着
477	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)22.6	粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐灰10YR6/1 (内)灰黄褐10YR6/2	(体・外)縦ハケ→(内)板ナデ→(口)横ナデ	口径1/7	外面に煤付着
478	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)23.4	密。径2mm以下の石英・長石・シャーモットを多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/2 (断)褐灰10YR6/1	(体・外)縦ハケ・(体・内)板ナデ→(口・端)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/9	口縁部外面に煤付着
479	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)40.8	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y8/2	(口)横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
480	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋		粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい赤褐5YR5/3 (内)にぶい褐7.5YR5/3	調整不明	細片	外面に煤付着
481	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・鍋	(口)48.4	やや粗。径1mm以下の長石・金雲母を少量	良好	(外)(断)浅黄橙10YR8/3 (内)にぶい橙7.5YR6/4	(内)横ハケ→(口)横ナデ	口径1/16	外面被熱変色
482	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・甕		粗。径2mm以下の金雲母・径5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)橙5YR6/6 (断)橙2.5YR6/6	ハケ目	細片	内面上端・底部に煤付着
483	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・甕		粗。径5.5mm以下の石英・長石・金雲母を多量	良好	(外)橙7.5YR6/6 (内)黒褐10YR3/1	(内)横ハケ	細片	内面に煤付着
484	SDf16(Ⅲ－8区)	土師・壺		密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰5Y6/1 (内)灰白5Y7/1	(内)板ナデ→(底・外縁)ヘラ削り→(外)ヘラ磨き	体部径1/8	
485	SDf16(Ⅲ－8区)	土師・甕	(口)22.6	やや粗。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白N7/ (内)灰N5/	(口)回転ナデ→(体・外)平行叩き目→(体・内)板ナデ・(頸・外)回転ナデ	口径1/12	
486	SDf16(Ⅲ－8区)	土師・甕		密。径2mm以下の長石・黒色粒を少量	良好	灰N6/	(外)格子叩き目→(内)ナデ	細片	
487	SDf16(Ⅲ－8区)	備前・壺		密。径1.5mm以下の長石	良好	(外)褐灰10YR6/1 (内)黄灰2.5Y6/1	(内)板ナデ→(外)(頸・内)回転ナデ	体部径1/4	三耳壺もしくは四耳壺
488	SDf16(Ⅲ－8区)	備前・壺		密。径1.5mm以下の石英・長石	やや軟	(外)灰白2.5Y7/1 (内)灰白10YR7/1 (断)灰白10YR7/1・にぶい黄橙10YR7/2	(体・外)平行叩き目→(外)(内)回転ナデ	体部径1/4	
489	SDf16(Ⅲ－8区)	東播・甕		密。径1mm以下の石英・長石・灰色粒を多量	瓦質・やや軟	(外)黒2.5Y2/1 (内)黄灰2.5Y4/1	(外)平行叩き目綾杉状・(内)当て具痕	細片	
490	SDf16(Ⅲ－8区)	常滑・甕	(底)16.0	粗。径5mm以下の石英・長石	良好	(外)赤褐10YR5/3・灰N5/(内)灰褐7.5YR5/2	(外)板ナデ・(内)横ナデ，(底・外)離れ砂	底径1/6	捏鉢の可能性もあり
496	SDf16(Ⅲ－8区)	石鍋	(口)16.0	滑石製		灰N5/	(外)ノミ痕→(口)(内)研磨	細片	外面に煤付着
497	SDf16(Ⅲ－8区)	土質・杯	(口)12.4	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)黄灰2.5Y4/1 (断)橙5YR7/8	回転ナデ	口径1/16	須恵器の生焼けの可能性あり
498	SDf16(Ⅲ－8区)	須恵・杯	(底)9.6	密。径0.5mm以下の長石	良好	灰N6/	回転ナデ→回転ヘラ切り	底径1/5	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
499	SDfl6(Ⅲ－8区)	須恵・甕		密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	灰N6/	(外)平行叩き目→(外)(内)回転ナデ	細片	
500	SDfl6(Ⅲ－8区)	須恵・杯身	(受部)11.6	密。径2mm以下の長石	良好	(外)(内)灰N6/ (断)褐灰7.5YR6/1	回転ナデ→回転ヘラ削り	受部径1/8	TK47
501	SDfl6(Ⅲ－8区)	須恵・高杯		密。径1mm以下の石英・黒色砂粒・径2.5mm以下の長石を多量	良好	灰白N7/	(脚・内)シボリ目→回転ナデ	脚部ほぼ完存	
502	SDfl7	土質・小皿	(口)9.0 (高)0.9 (底)7.9	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	調整不明(回転ヘラ切り)	口径1/6	
503	SDfl7	土質・杯	(底)6.9	密。径1mm以下の石英・長石，径2.5mmの褐色粒	良好	灰白2.5Y8/	調整不明(回転ヘラ切り)	底部完存	
504	SDfl7	土質・高杯		密。径2mm以下の石英を少量	良好	灰白5Y8/1	調整不明	細片	8c後半の回転台土師器か
505	SDfl7	黒色・椀	(高台)6.6	密。径2mm以下の長石	良好	(外)灰白10YR8/ (内)灰白N5/	回転ヘラ切り→高台貼付	高台径1/8	A類
506	SDfl7	黒色・椀	(高台)5.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)褐灰10YR5/1・灰白10YR8/2 (内)暗灰N3/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)ヘラ磨き	高台径2/3	A類
507	SDfl7	十瓶・椀	(高台)7.2	密。径1.5mm以下の石英・長石・黒色粒を多量	やや軟	(外)灰白N7/ (内)(断)灰白N8/	回転ナデ→回転ヘラ切り→高台貼付	高台径1/4	
508	SDfl7	東播・椀	(口)15.6 (高)5.8 (高台)5.3	密。径4mm以下の長石・黒色粒	良好	灰N6/	回転ナデ→回転糸切り	口径2/9	口縁部炭素吸着
509	SDfl7	十瓶・甕		密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	(外)灰N5/ (内)灰N4/	回転ナデ	細片	
510	SDfl7	十瓶・甕		密。径0.5mm以下の長石，径2mmの黒色粒	良好	灰N6/	(外)格子叩き目・(内)当て具痕→(内)板ナデ	細片	
511	SDfl7	土質・竈		粗。径5mm以下の石英・長石を多量	良好	灰黄2.5Y6/2・にぶい黄橙10YR7/2	ハケ目	細片	
512	SDfl7	土質・竈		粗。径7mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)橙5YR6/6	ナデ		
513	SDfl7	土質・杯	(口)13.4 (高)3.7 (底)7.0	やや粗。径2.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白7.5YR8/2・黄灰2.5Y4/1 (内)灰白10YR8/2 (断)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/2	
514	SDfl7	須恵・杯	(高台)11.0	密。径1mm以下の長石	良好	(外)灰N6/ (内)灰N7/	回転ナデ→回転ヘラ切り→高台貼付	高台径1/4	
515	SDfl8	土質・小皿	(口)6.4 (高)0.9 (底)5.0	密。径1mm以下の石英を多量	良好	(外)(断)浅黄橙10YR8/4 (内)浅黄橙10YR8/4・橙7.5YR7/6	回転ヘラ切り(?)	口径1/4	
516	SDfl8	土質・小皿	(口)6.7 (高)1.3 (底)5.2	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙7.5YR7/6 (内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/6	
517	SDfl8	土質・小皿	(口)6.6 (高)1.2 (底)5.2	密。径1mm以下の石英・長石・金雲母を多量	良好	浅黄橙10YR8/3	回転ヘラ切り	口径1/6	
518	SDfl8	土質・小皿	(口)6.8 (高)0.9 (底)5.2	密。径0.5mm以下の石英・茶色粒を多量	良好	(外)灰白10YR8/2・橙5YR6/6 (内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ヘラ切り(R)	口径1/8	
519	SDfl8	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.3 (底)4.6	やや粗。径1mm以下の石英・長石・茶色粒を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/6	
520	SDfl8	土質・小皿	(口)6.9 (高)1.2 (底)5.0	密。径1mm以下の石英を少量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/8	
521	SDfl8	土質・小皿	(口)7.0 (高)1.2 (底)7.3	密。径0.5mm以下の長石	良好	(外)(内)橙5YR6/6 (断)にぶい赤褐5YR4/4・橙7.6YR6/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/4	
522	SDfl8	土質・小皿	(口)7.0 (高)1.2 (底)5.6	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	橙5YR7/6・浅黄橙10YR8/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/3	
523	SDfl8	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.3 (底)5.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径2/3	
524	SDfl8	土質・小皿	(口)6.9 (高)1.1 (底)5.4	密。径1mm以下の長石，径4mm以下の石英	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径7/8	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
525	SDf18	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.1 (底)4.8	密。径0.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)橙5YR6/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/5	
526	SDf18	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.1 (底)6.0	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	
527	SDf18	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.1 (底)5.7	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)にぶい橙5YR6/4 (断)灰白7.5YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/5	
528	SDf18	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.2 (底)5.8	密。径1mm以下の長石・茶色砂粒を少量	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4・橙5YR7/6 (内)橙7.5YR7/6 (断)灰白10YR8/2・橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	底径1/5	
529	SDf18	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.1 (底)4.6	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/6	
530	SDf18	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.6 (底)5.2	密。径2.5mm以下の石英・長石	良好	(外)明黄橙10YR7/6 (内)橙5YR6/8	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/3	
531	SDf18	土質・小皿	(口)7.1 (高)1.5 (底)5.5	密。径1mm以下の長石	良好	(外)橙5YR6/6 (内)にぶい黄橙7/4・明黄褐10YR6/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径2/9	
532	SDf18	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.2 (底)6.0	密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ	口径1/4	
533	SDf18	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.1 (底)6.6	密。径0.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)浅黄橙10YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/9	
534	SDf18	土質・小皿	(口)7.7 (高)1.2 (底)5.6	密。径0.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/12	
535	SDf18	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.3 (底)5.8	密。径2.5mm以下の石英・長石を少量	良好	橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径2/8	
536	SDf18	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.2 (底)6.0	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	浅黄橙10YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/3	
537	SDf18	土質・小皿	(口)7.7 (高)1.2 (底)6.6	密。径0.5mm以下の石英・長石・金雲母を少量	良好	(外)橙7.5YR7/6・にぶい黄橙10YR7/3 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/4	
538	SDf18	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.2 (底)5.6	密。径1.5mm以下の石英・長石・茶色粒を多量	良好	浅黄橙7.5YR8/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	底部完存	
539	SDf18	土質・小皿	(口)7.9 (高)1.3 (底)6.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/4 (内)浅黄橙10YR8/4・橙7.5YR7/6 (断)橙7.5YR7/6	回転ヘラ切り(?)	口径1/8	
540	SDf18	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.0 (底)6.0	密。径1mm以下の石英を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/3	
541	SDf18	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.3 (底)6.1	密。径0.5mm以下の赤色粒・角閃石，径3mm以下の石英	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(L?)	口径3/8	
542	SDf18	土質・小皿	(口)8.0 (高)1.2 (底)6.8	密。径1mm以下の石英・金雲母を少量	良好	にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/6	
543	SDf18	土質・小皿	(口)8.2 (高)1.2 (底)6.8	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/3	
544	SDf18	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.2 (底)6.6	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4・浅黄橙10YR8/3 (内)浅黄橙10YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/4	
545	SDf18	土質・小皿	(口)8.0 (高)1.2 (底)5.9	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/4	
546	SDf18	土質・小皿	(口)8.6 (高)1.6 (底)7.2	密。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)灰黄2.5Y7/2 (内)にぶい黄橙10YR7/3 (断)灰N4/	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ・(底・外)板ナデ	口径1/5	
547	SDf18	土質・小皿	(口)9.0 (高)1.5 (底)7.2	密。径1.5mm以下の金雲母を少量，径1.5mm以下の石英・シャーモット，径3mm以下の長石を少量	良好	(外)灰白7.5YR8/2 (内)にぶい橙5YR7/4 (断)灰白10YR8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径1/5	
548	SDf18	土質・小皿	(口)7.7 (高)1.5 (底)5.7	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ・(底・内)ナデ	口径1/2	「底部押し出し」，吉備系か
549	SDf18	土質・小皿	(口)6.4 (高)1.4 (底)5.6	やや粗。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ→回転糸切り	底径1/6	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
550	SDfl8	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.0 (底)4.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
551	SDfl8	土質・小皿	(口)7.0 (高)1.4 (底)5.6	やや粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)橙5YR6/6・にぶい黄橙10YR6/3 (内)橙6YR4/6・にぶい黄橙10YR7/2	回転糸切り，製作時に小粘土塊が多数付着	ほぼ完存	
552	SDfl8	土質・小皿	(口)7.0 (高)1.0 (底)6.6	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)橙5YR6/6・浅黄橙10YR8/3 (内)にぶい黄橙10YR6/4・浅黄橙10YR8/3	回転糸切り	口径1/4	
553	SDfl8	土質・小皿	(口)7.3 (高)1.1 (底)6.4	密。径2mm以下の石英を少量，径3mm以下の長石を多量	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/6 (内)浅黄橙7.5YR8/6 (断)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
554	SDfl8	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.2 (底)6.3	やや粗。径1.5mm以下の長石	良好	橙5YR7/8	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り	口径1/5	
555	SDfl8	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.3 (底)6.2	密。径1mm以下の長石，径3mmの石英	良好	(外)橙5YR7/8 (内)(断)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/4	
556	SDfl8	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.4 (底)7.0	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	橙5YR6/6・にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転糸切り(?)	口径1/8	
557	SDfl8	土質・小皿	(口)7.6 (高)0.7 (底)7.4	密。径1mm以下の長石	良好	(外)橙5YR6/6 (内)灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転糸切り(ヘラ切りか)	底径1/10	
558	SDfl8	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.2 (底)7.0	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙5YR6/6 (内)灰黄2.5Y7/2	回転糸切り	口径1/5	
559	SDfl8	土質・小皿	(口)8.2 (高)1.2 (底)7.6	粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄2.5Y6/3 (内)灰白10YR7/1	回転ナデ→回転糸切り	底径1/6	
560	SDfl8	土質・小皿	(口)8.4 (高)1.2 (底)7.2	密。径4mm以下の石英・長石を少量	良好	橙5YR6/6・にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転糸切り	口径1/8	
561	SDfl8	土質・小皿	(口)6.2 (高)0.9 (底)5.5	やや粗。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙5YR6/6 (内)(断)浅黄橙10YR8/3	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
562	SDfl8	土質・小皿	(口)7.0 (高)1.6 (底)6.0	やや粗。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙7.5YR7/6 (内)浅黄2.5Y7/4 (断)橙5YR6/6	回転糸切り	底径1/2	
563	SDfl8	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.1 (底)7.0	やや粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り	底径1/2	
564	SDfl8	土質・小皿	(口)7.5 (高)1.3 (底)6.3	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい橙5YR7/4 (内)灰黄2.5Y7/2	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り	口径3/4	
565	SDfl8	土質・杯	(口)11.2 (高)3.5 (底)6.7	密。径3mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	浅黄橙10YR8/3・橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	底部完存	
566	SDfl8	土質・杯	(口)11.6 (底)7.8	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白2.5Y8/1	調整不明	口径1/6	
567	SDfl8	土質・杯	(口)12.4	密。径1mm以下の石英・褐色粒	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	
568	SDfl8	土質・杯	(口)12.2	密。径1mm以下の石英を少量	良好	橙5YR7/6・浅黄橙10YR8/3	回転ナデ	口径1/8	
569	SDfl8	土質・杯	(口)12.2 (高)3.4 (底)7.1	密。径1mm以下の長石・茶色砂粒を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)橙7.5YR7/6・浅黄橙10YR8/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	底径3/4	
570	SDfl8	土質・杯	(口)12.8 (高)3.8 (底)7.2	密。径1mm以下の石英・茶色粒を多量	良好	浅黄橙7.5YR8/3	回転ヘラ切り	口径1/6	
571	SDfl8	土質・杯	(口)12.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)橙5YR7/6	回転ナデ	口径1/9	
572	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)3.7 (底)6.7	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)にぶい黄橙10YR7/3	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	ほぼ完存	
573	SDfl8	土質・杯	(口)12.4 (高)3.5 (底)8.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR8/2	「口縁部→体部」ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	
574	SDfl8	土質・杯	(口)13.0	密。径1mm以下の長石・褐色粒	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(?)	口径1/10	
575	SDfl8	土質・杯	(口)13.0	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ	口径1/7	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
576	SDfl8	土質・杯	(口)12.2 (高)3.3 (底)8.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙5YR7/4 (内)浅黄橙10YR8/4	「口縁部→体部」ナデ→回転ヘラ切り，(口)補修痕(内面に粘土充填)	底径1/4	形態的には糸切りの系統
577	SDfl8	土質・杯	(口)13.8	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)橙7.5YR7/6	回転ナデ，外面に接合痕	口径1/6	
578	SDfl8	土質・杯	(口)14.6	密。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を少量	良好	(外)橙5YR7/6・浅黄橙7.5YR8/3 (内)橙5YR7/8・浅黄橙7.5YR8/3	調整不明	口径1/8	
579	SDfl8	土質・杯	(底)7.6	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)橙5YR7/6・灰白2.5Y8/2 (内)橙5YR7/8	回転ヘラ切り(R)	底径1/2	
580	SDfl8	土質・杯	(底)8.6	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)黄灰2.5Y5/1・にぶい黄7.5Y7/4	回転ヘラ切り	底径1/5	
581	SDfl8	土質・杯	(底)6.5	密。径1mm以下の長石，径3mm石英を多量	良好	(外)橙7.5YR7/6・橙5YR7/6 (内)橙5YR7/6 (断)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)板目状圧痕	底径3/4	
582	SDfl8	土質・杯	(底)7.2	やや粗。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白10YR8/2・にぶい橙7.5YR7/4 (内)橙7.5YR7/6	回転ヘラ切り(R)	底径3/8	
583	SDfl8	土質・杯	(口)10.8	やや粗。径1.5mm以下の長石，径4mmの茶色粒	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデ	口径1/5	
584	SDfl8	土質・杯	(口)11.2	密。径2mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)浅黄橙7.5YR8/3・橙5YR7/6 (断)橙2.5YR7/6	「口縁部→体部」ナデ	口径1/5	
585	SDfl8	土質・杯	(口)11.0	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石・褐色粒を少量	良好	(外)橙5YR7/6 (内)浅黄橙10YR8/3	調整不明	口径1/6	
586	SDfl8	土質・杯	(口)11.2 (高)3.4 (底)6.4	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/3	
587	SDfl8	土質・杯	(口)11.4	密。径1mm以下の長石・褐色粒を多量	良好	(外)灰黄2.5Y7/2 (内)橙7.5YR7/6	調整不明	口径1/7	
588	SDfl8	土質・杯	(口)11.8	粗。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3 (内)にぶい黄2.5Y6/3 (断)浅黄橙10YR8/3	回転ナデ	口径1/6	
589	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)4.1 (底)5.8	やや粗。径3mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	橙5YR7/6・灰白10YR8/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	ほぼ完存	重ね焼き痕状の焼けムラあり
590	SDfl8	土質・杯	(口)12.1 (高)4.0 (底)8.0	やや粗。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙7.5YR7/6 (内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	ほぼ完存	
591	SDfl8	土質・杯	(口)12.8 (高)3.3 (底)6.2	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4 (内)黄灰2.5Y5/1	回転糸切り	口径1/4	
592	SDfl8	土質・杯	(口)12.6	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/3 (内)にぶい橙7.5YR7/3 (断)淡赤橙2.5YR7/4	回転ナデ	口径1/10	
593	SDfl8	土質・杯	(口)12.4	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR6/2 (内)にぶい褐7.5YR6/3 (断)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ	口径1/10	
594	SDfl8	土質・杯	(口)14.4	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)(内)暗灰黄2.5Y5/2 (断)にぶい橙7.5YR6/4	回転ナデ	口径1/7	
595	SDfl8	土質・杯	(口)14.8	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石・赤色粒を少量	良好	淡橙5YR8/4・浅黄橙10YR8/3	調整不明	口径1/8	
596	SDfl8	土質・杯	(口)9.8 (高)3.5 (底)5.6	やや粗。径1mm以下の石英・長石・茶色粒	良好	橙7.5YR7/6	回転糸切り	底径1/4	
597	SDfl8	土質・杯	(口)10.4 (高)2.9 (底)4.6	密。径1mm以下の長石，径2mm以下のシャーモットを多量	良好	(外)灰白2.5Y8/1 (内)橙2.5YR7/6	回転糸切り	口径1/6	
598	SDfl8	土質・杯	(口)10.6 (高)3.5 (底)6.8	やや粗。径1mmの石英・長石を少量	良好	橙5YR7/6・浅黄橙10YR8/3	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径1/4	
599	SDfl8	土質・杯	(口)11.2	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)橙7.5YR7/6 (断)橙5YR7/6	回転ナデ	口径1/7	
600	SDfl8	土質・杯	(口)11.3 (高)3.3 (底)6.8	やや粗。径1mm以下の石英・長石を少量，径2.5mm以下の赤色粒を少量	良好	(外)橙5YR7/6・浅黄橙10YR8/3 (内)橙5YR6/6 (断)明赤褐5YR5/6	回転糸切り	口径1/8	
601	SDfl8	土質・杯	(口)11.5 (高)3.7 (底)6.5	粗。径2.5mm以下の石英・長石，径3mm以下の赤色粒を少量	良好	橙5YR7/6	回転糸切り	底径3/8	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
602	SDfl8	土質・杯	(口)11.4	粗。径1mm以下の石英・長石	良好	にぶい黄橙10YR7/4	「口縁部→体部」ナデ	口径1/10	
603	SDfl8	土質・杯	(口)11.6 (高)3.3 (底)6.0	粗。径1.5mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)明黄褐10YR7/6 (内)橙7.5YR6/6	回転糸切り(?)	底径1/2	
604	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)3.3 (底)7.0	やや粗。径1.5mm以下の長石，径4mmの褐色粒	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)にぶい黄橙10YR7/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/6	
605	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)3.4 (底)7.3	やや粗。径1mm以下の長石	良好	(外)灰黄2.5Y6/2 (内)にぶい黄橙10YR7/2	「口縁部→体部」ナデ(?)→回転糸切り	口径1/6	焼けムラあり
606	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)3.9 (底)5.8	やや粗。径3mm以下の石英・長石・褐色粒，径6mmのシャーモット	良好	灰白10YR8/2 橙5YR7/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	ほぼ完存	重ね焼き痕状の焼けムラあり
607	SDfl8	土質・杯	(口)12.2 (高)3.1 (底)7.6	やや粗。径5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3・にぶい橙7.5YR7/4 (内)浅黄2.5Y7/3	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/8	
608	SDfl8	土質・杯	(口)12.6 (高)4.3 (底)8.2	密。径3mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)(内)にぶい黄橙10YR7/3 (断)にぶい橙5YR6/4	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/8	
609	SDfl8	土質・杯	(口)13.4 (高)3.7 (底)7.8	やや粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)灰黄2.5Y7/2	回転糸切り	口径1/10	
610	SDfl8	土質・杯	(口)13.4	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	明褐7.5YR5/6・浅黄橙10YR8/4	「口縁部→体部」ナデ	口径1/10	
611	SDfl8	土質・杯	(口)11.6 (高)3.5 (底)5.9	粗。径2.5mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	完存	焼けムラあり
612	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)3.7 (底)7.0	粗。径3mm以下の石英・長石・褐色粒を少量	良好	(外)(断)にぶい黄橙10YR7/4 (内)明赤褐5YR5/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/2	
613	SDfl8	土質・杯	(口)11.8 (高)3.4 (底)7.0	密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐灰10YR6/1・淡橙5YR8/4 (内)褐灰10YR6/1・にぶい黄橙10YR7/3	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	底径3/5	
614	SDfl8	土質・杯	(口)11.8 (高)3.7 (底)5.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	暗灰黄2.5Y5/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/6	
615	SDfl8	土質・杯	(口)12.0 (高)3.9 (底)6.5	粗。径5mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)橙5YR7/6・灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6・灰白10YR8/2・褐灰10YR5/1	「口縁部→体部」ナデ(?)→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	ほぼ完存	
616	SDfl8	土質・杯	(口)12.3 (高)3.3 (底)5.9	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR7/1・灰白10YR8/2・にぶい橙7.5YR7/4	回転糸切り	底径7/8	
617	SDfl8	土質・杯	(口)12.8 (高)3.7 (底)7.6	やや粗。径2.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)にぶい黄橙10YR7/3	回転糸切り	底径1/2	
618	SDfl8	土質・杯	(口)12.8 (高)3.6 (底)6.5	密。径3mm以下の石英・長石	良好	(外)灰黄2.5Y7/2 (内)橙5YR6/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	完存	
619	SDfl8	土質・杯	(底)6.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)橙5YR6/6 (内)浅黄2.5Y7/4	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
620	SDfl8	土質・杯	(底)8.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	(外)橙5YR7/6 (内)浅黄2.5Y7/4	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/3	
621	SDfl8	土質・杯	(底)6.7	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白2.5Y7/1・橙2.5YR6/6 (内)灰白2.5Y8/2	回転糸切り	底径1/4	
622	SDfl8	土質・杯	(底)5.8	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石，径3mmの長石	良好	(外)橙7.5YR6/6 (内)にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転糸切り	底径1/2	
623	SDfl8	土質・杯	(底)5.2	密。径4mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)淡黄2.5Y8/3 (内)浅黄2.5Y7/3	回転ナデ→回転糸切り	底径1/2	
624	SDfl8	土質・杯	(底)5.4	密。径2mm以下の石英・長石，径5mmの長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/4 (内)灰黄褐10YR4/2	回転ナデ→回転糸切り	底径1/2	
625	SDfl8	土質・杯	(底)7.6	やや粗。径2mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/3 (内)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/6	
626	SDfl8	土質・杯	(底)7.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/4 (内)橙5YR6/6	回転糸切り	口径1/7	
627	SDfl8	土質・杯	(口)8.8 (高)3.2	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4 (内)にぶい黄橙10YR7/4	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ，内面調整不明	口径1/7	「底部押し出し」か

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
628	SDf18	土質・杯	(口)9.8 (高)2.9 (底)3.8	密。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	暗灰黄2.5Y5/2	(体・外)指オサエ，他は調整不明	口径1/3	「底部押し出し」か(ヘラ切り痕なし)
629	SDf18	土質・杯	(口)11.4 (高)4.1 (底)5.0	密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい黄2.5Y6/3	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(体・内)(底・内)ナデ	口径1/4	「底部押し出し」か(ヘラ切り痕なし)
630	SDf18	土質・杯	(口)11.4	粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい橙7.5YR6/4・褐灰10YR4/1 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(体・外)指オサエ，他は調整不明	口径1/6	
631	SDf18	土質・杯	(口)12.0 (高)3.9 (底)5.6	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石，径4mmの石英	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(口)横ナデ→(体・外)(底・外)指オサエ・(内)ナデ	口径1/2	
632	SDf18	土質・杯	(口)12.0 (高)3.2 (底)7.4	やや粗。径4mm以下の長石・褐色粒を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰黄褐10YR6/2	(体・外)(底・外)指オサエ→(口)横ナデ	口径1/7	
633	SDf18	土質・杯	(口)13.2	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4・にぶい橙5YR7/4 (内)橙5YR6/6 (断)褐灰7.5YR5/1	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(体・内)ナデ	口径1/13	「底部押し出し」か
634	SDf18	土質・杯	(口)13.6	密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙2.5Y6/6・灰白2.5Y8/1・黄灰2.5Y5/1 (内)にぶい橙7.5YR6/4 (断)灰白2.5Y8/1・にぶい橙7.5YR6/4	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)ナデ	口径1/10	「底部押し出し」か，焼けムラあり
635	SDf18	十瓶・椀	(口)12.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白5Y8/1・灰N5/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
636	SDf18	十瓶・椀	(口)12.9	密。径1mm以下の長石・灰色砂粒を多量	良好	灰白2.5Y8/1・灰N4/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/7	口縁部炭素吸着
637	SDf18	十瓶・椀	(口)13.4	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	やや軟	(外)灰白N8/ (内)(断)灰白5Y8/1	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/6	口縁部炭素吸着
638	SDf18	十瓶・椀	(口)13.8	密。径0.5mm以下の長石を多量	良好	灰白N7/・灰N5/	回転ナデ→(内)板ナデ，外面に接合痕	口径1/8	口縁部炭素吸着
639	SDf18	十瓶・椀	(口)14.2	密。径1mm以下の長石	瓦質・良好	(外)灰N4/ (内)灰白N4/	回転ナデ→(内)板ナデ	細片	口縁部炭素吸着
640	SDf18	十瓶・椀	(口)14.6	密。径1mm以下の石英・長石を少量	やや軟	暗灰N3/・灰白5Y8/1	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
641	SDf18	十瓶・椀	(口)14.8	密。径1mm以下の長石を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ	口径1/12	口縁部炭素吸着
642	SDf18	十瓶・椀	(口)16.0	密。径1mm以下の長石	良好	灰N4/・灰白N8/	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/10	口縁部炭素吸着
643	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.0	密。径1mm以下の石英	やや軟	灰白2.5Y8/1		高台径1/6	
644	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径0.5mm以下の石英・長石	良好	(外)灰6/ (内)灰7/	(内)板ナデ，(底・外)板目状圧痕→高台貼付	高台径1/4	
645	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径1mm以下の石英・長石・褐色粒	不良	灰白7.5Y8/1	調整不明	高台径3/8	
646	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.8	密。径1mm以下の長石・径2mm以下の石英を多量	やや軟	(外)(断)灰白N8/ (内)灰白2.5Y7/1	調整不明	高台径1/4	
647	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白N8/	回転ナデ→(内)板ナデ・(底・外)指オサエ→高台貼付	高台径1/4	
648	SDf18	十瓶・椀	(高台)5.3	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	土師質・不良	(外)黄灰2.5Y6/1・灰白2.5Y8/2 (内)灰白2.5Y8/2	調整不明	高台径1/7	
649	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	灰白5Y8/1	(内)板ナデ(ハケ目状)	高台径3/8	
650	SDf18	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	やや軟	灰白N8/	(内)板ナデ	高台径1/4	
651	SDf18	十瓶・椀	(高台)5.6	密。径1mm以下の石英・長石を少量	不良	(外)灰白5Y7/1 (内)灰白5Y8/1	回転ヘラ切り→高台貼付	高台径1/3	
652	SDf18	十瓶・椀	(高台)5.6	密。径2mm以下の石英	良好	灰白10YR8/1	(底・内)板ナデ	高台径1/4	
653	SDf18	十瓶・椀	(高台)4.4	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白N7/ (内)灰白5Y7/1	回転ヘラ切り→高台貼付	高台径1/4	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
654	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)4.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白5Y8/1	回転ヘラ切り(R)→高台貼付	高台径7/8	
655	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)4.8	密。径1mm以下の石英を少量	やや軟	灰白5Y8/1	(底・外)指オサエ・(底・内)板ナデ→高台貼付	高台径1/4	
656	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)4.0	密。径1mm以下の石英を少量	やや軟	灰白N8/	(底・内)板ナデ(ハケ目状)・(底・外)指オサエ→高台貼付	高台径1/4	
657	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)4.3	密。径1mm以下の石英・長石を多量，径2mm以下の黒色粒を少量	良好	灰白N7/	回転ナデ→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ(ハケ目状)→高台貼付	高台径1/2	
658	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)6.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	不良	灰白2.5Y7/1	調整不明	高台径1/6	
659	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径1mm以下の石英・長石	やや軟	灰白N8/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/3	
660	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径0.5mm以下の黒色粒	良好	灰白2.5Y8/1	(内)板ナデ	高台径1/6	
661	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)5.0	密。径1mm以下の長石・黒色粒	良好	灰白N7/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付	高台径3/4	
662	SDﾊ18	十瓶・椀	(高台)4.6	密。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白N7/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・外)指オサエ・(内)板ナデ(ハケ目状)→高台貼付	高台径1/4	
663	SDﾊ18	吉備・椀	(口)11.2 (高)3.7 (高台)5.2	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/1 (断)黒褐5YR3/1	調整不明	底部ほぼ完存	
664	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)4.7	密。径2.5mmの長石	やや軟	灰白2.5Y8/1	調整不明	高台部完存	
665	SDﾊ18	吉備・椀	(口)12.0	密。径0.5mm以下の長石，径2.5mm以下の褐色粒	良好	灰白2.5Y8/1	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)板ナデ	口径1/8	
666	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)4.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白10YR8/2	調整不明	高台径1/2	
667	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)5.2	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)明黄褐10YR7/6・淡黄2.5Y8/3 (内)灰黄2.5Y7/2・暗灰N3/	(底・外)指オサエ→高台貼付	高台径9/10	(底・内)焼けムラあり
668	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)4.8	密。径2mm以下の石英，径4mmの石英	良好	灰白2.5Y8/2	(底・外)指オサエ→板目状圧痕→高台貼付	高台径3/4	
669	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)5.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)灰白7.5YR8/1 (断)灰N4/	調整不明	高台径1/4	
670	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)5.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白N7/	(底・外)指オサエ→高台貼付	高台径1/5	
671	SDﾊ18	土質・椀	(高台)5.4	密。径2mm以下の石英・長石，径4mmの灰色粒	不良	(外)(断)灰白5Y8/1・灰N5/(内)灰白Y8/1	調整不明	高台径1/4	
672	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)4.8	密。径1mm以下の石英・角閃石を少量	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/6・灰白10YR8/2 (内)灰白2.5Y8/2	(底・外)指オサエ→高台貼付	高台径1/2	
673	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)4.6	密。径1.5mm以下の石英・褐色粒	良好	(外)灰白10YR8/1 (内)灰白2.5Y8/1	調整不明	高台径1/2	
674	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)5.0	密。径3mm以下の石英	良好	灰白10YR8/2	調整不明	底部1/3	
675	SDﾊ18	吉備・椀	(高台)5.2	密。径4mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/2・橙5YR7/6 (断)灰白10YR8/2	高台畳付に板目状圧痕	底部ほぼ完存	
676	SDﾊ18	土質・高台杯	(高台)7.0	やや粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	淡黄2.5Y8/3	回転ヘラ切り(?)→高台貼付	高台径1/2	
677	SDﾊ18	瓦器・椀	(口)14.1	密。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)灰白2.5YR7/1 (内)(断)灰白10YR8/2	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ	口径1/10	和泉型
678	SDﾊ18	白磁・碗	(口)12.6	密	良好	(胎)灰白N8/ (釉)灰白2.5GY8/1	(口)釉掻き取り	口径1/12	横田・森田Ⅸ類，(口)油煙
679	SDﾊ18	青磁・碗	(高台)5.2	密	良好	(胎)灰白N8/ (釉)褐灰7.5Y6/1	高台畳付露胎	高台径1/10	横田・森田Ⅰ-4a類

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
680	SDf18	青磁・碗		密	良好	(胎)灰白N7/ (釉)灰オリーブ7.5Y5/2	(内)櫛描き文	体部径1/12	横田・森田Ⅰ-3類
681	SDf18	青磁・碗		密	良好	(胎)灰白2.5Y8/1 (釉)灰オリーブ7.5Y5/2	(内)草花文	細片	横田・森田Ⅰ-4a類
682	SDf18	青磁・碗		密	良好	(胎)灰白2.5Y8/2 (釉)にぶい黄2.5Y6/3	(外)蓮弁文	細片	横田・森田Ⅰ-5b類
683	SDf18	十瓶・捏鉢	(口)21.0 (高)6.9 (底)12.9	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	瓦質・良好	(外)(内)灰N5/ (断)灰白N8/	(外)格子叩き目→回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/6	
684	SDf18	十瓶・捏鉢	(底)13.0	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)黄灰2.5Y4/1・灰白2.5Y8/1 (内)灰N4/・灰白2.5Y8/1	(体・外)格子叩き目→(底・外縁)ヘラ削り	底径1/3	
685	SDf18	十瓶・捏鉢	(底)13.6	密。径1.5mm以下の長石・黒色粒	瓦質・不良	(外)灰白5YR7/1 (内)灰N4/	回転ナデ	底径1/4	内面に使用による摩滅
686	SDf18	亀山・捏鉢	(口)29.8	密。径1mm以下の長石を少量	瓦質・良好	(外)(内)暗灰N3/ (断)灰白5Y8/1	(口)回転ナデ→(内)板ナデ	細片	
687	SDf18	東播・捏鉢	(口)29.8	密。径0.5mm以下の長石	良好	灰N6/	回転ナデ	口径1/16	
688	SDf18	土質・足釜		粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	黄灰2.5Y4/1・橙5YR6/6		脚部1/2	
689	SDf18	土質・足釜		密。径0.5mm以下の赤色粒,径3mmの石英を少量	瓦質・良好	(外)灰5Y4/1・明赤灰2.5YR7/2 (内)(断)灰白7.5YR8/2	ナデ	脚部1/2	搬入品か
690	SDf18	土質・足釜		密。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2・橙7.5YR7/6 (断)暗灰N3/	ナデ	脚部3/4	煤付着
691	SDf18	土質・鍋	(口)33.8	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐灰10YR5/1 (内)にぶい黄橙10YR7/2	(口・外)縦ハケ,(口・端)横ハケ,(口・内)横ハケ	細片	外面に煤付着
692	SDf18	土質・鍋		粗。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)灰白2.5Y8/2	(顎・外)縦ハケ→(口・端)(口・内)横ハケ→(口)横ナデ	細片	外面に煤付着
693	SDf18	土質・鍋	(口)33.4	粗。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄2.5Y6/2 (内)黒2.5Y2/1・暗灰黄2.5Y5/2	(口・外)格子叩き目・縦ハケ→(顎・外)指オサエ→(口)横ナデ	口径1/14	
694	SDf18	土質・鍋		粗。径3.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)黒褐2.5Y3/1 (内)黄灰2.5Y5/1	(口・端)(口・内)横ハケ→(口)横ナデ	細片	外面に煤付着
695	SDf18	土質・鍋		粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	黄灰2.5Y5/1	横ナデ	細片	
696	SDf18	土質・鍋	(口)29.3	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)(断)にぶい黄橙10YR7/4 (内)浅黄橙10YR8/4	(内)横ハケ	細片	外面に煤付着
697	SDf18	土質・鍋	(口)41.4	粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR4/2 (内)橙5YR6/6・灰白10YR8/2・灰黄褐10YR4/2	(内)板ナデ,(口)横ナデ	口径1/12	外面に煤付着
698	SDf18	土質・鍋	(口)33.8	やや粗。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰黄褐10YR4/2 (内)灰褐7.5YR4/2・にぶい黄橙10YR6/3	(口)横ナデ	口径1/16	外面に煤付着
699	SDf18	亀山・甕		密。径1mm以下の長石・黒色粒を少量	瓦質・良好	(外)灰白N7/ (内)灰N4/	(外)格子叩き目	細片	
700	SDf18	亀山・甕		密。径1.5mm以下の石英・長石	瓦質・良好	(外)灰N4/ (内)灰白N7/	(外)格子叩き目	細片	
701	SDf18	亀山・甕		密。径3mm以下の長石	土師質・不良	(外)にぶい黄橙10YR7/2・橙7.5YR6/6 (内)にぶい黄橙10YR7/3・にぶい橙7.5YR7/4 (断)にぶい黄橙10YR7/3	(外)格子叩き目・(内)当て具痕→(内)板ナデ	細片	
702	SDf18	備前・甕		密。径1.5mm以下の石英を多量	やや軟	灰白2.5Y7/1	板ナデ		
703	SDf18	常滑・甕		やや粗。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)(内)灰褐7.5YR6/2 (断)灰N6/	(外)(内)板ナデ→(外)格子状の押印	細片	
704	SDf18	瀬戸・壺		密	良好	(胎)灰白5Y7/1 (釉)灰オリーブ5Y5/3	回転ナデ,灰釉	細片	藤澤古瀬戸前Ⅲ期
705	SDf18	土質・竈		粗。径4mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい黄橙10YR6/3	ナデ		煤付着

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
708	SDfl8	土質・土錘	(長)6.8 (幅)3.4 (厚)2.6	粗。径3.5mm以下の石英・長石を多量，径5mmの花崗岩	良好	浅黄2.5Y7/3			重量62.05g，黒斑
710	SDfl8	須恵・高杯蓋	(口)15.5	密。径1mm以下の石英・長石・黒色粒	良好	灰色N5/	回転ナデ	口径1/14	
711	SDfl8	須恵・皿	(口)18.4 (高)2.2 (底)15.8	密。径1mm以下の長石を少量	良好	灰白N7/	回転ナデ→回転ヘラ切り	細片	(底・内)火襷
712	SDfl8	土質・小皿	(口)8.8	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR6/6	「口縁部→体部」ナデ	口径1/6	
713	SDfl8	楠井・擂鉢	(口)32.4	密。径4.5mm以下の石英・長石	良好	(外)(断)橙5YR6/6 (内)灰白2.5Y8/2	(内)板ナデ→(口)回転ナデ，卸し目3本以上	口径1/12	楠井AⅡ類
714	SDfl8	土質・擂鉢	(口)26.4	粗。径5mm以下の石英と長石を多量 径1mmの金雲母	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/3 (内)灰5Y4/1	(内)板ナデ，卸し目6本/2.4㎝	口径1/10	
715	SDfl8	土質・擂鉢	(底)9.6	密。径3mm以下の石英を多量，径3mm以下のシャーモットを少量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)浅黄橙10YR8/3 (断)淡橙5YR8/4	(底・外縁)ナデ，(内)板ナデ，卸し目7本/1.5㎝	底径1/3	
716	SDfl8	土質・把手付鍋	(口)26.4	粗。径5mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/4	(内)板ナデ，(口)横なで	口径1/8	外面に煤付着
717	SDfl8	瓦質・甕	(口)29.0	密。径2mm以下の長石を多量，径5mm以下の石英を少量	良好	(外)灰N5/ (内)(断)灰白N8/	(口)回転ナデ→(体・外)平行叩き目，(内)調整不明	口径1/12	堺近郊産
718	SDfl9	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.4 (底)6.3	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)橙2.5YR6/6 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径3/5	
719	SDfl9	土質・小皿	(口)7.5 (高)1.4 (底)5.6	密。径1mm以下の褐色粒を少量	良好	浅黄橙10YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/2	
720	SDfl9	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.1 (底)6.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/5	
721	SDfl9	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.1 (底)6.2	密。径0.5mm以下の石英・長石	良好	(外)橙5YR7/8 (内)橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/12	
722	SDfl9	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.4 (底)5.8	密。径2mm以下の長石・褐色粒を多量	良好	橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	底径1/4	
723	SDfl9	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.4 (底)6.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙5YR7/6・灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	完存	焼けムラあり
724	SDfl9	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.6 (底)5.8	密。径1.5mm以下の長石	良好	灰白10YR8/2・橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径3/4	焼けムラあり
725	SDfl9	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.2 (底)5.5	密。径1mm以下の石英・長石・雲母(?)を多量	良好	(外)橙5YR7/6 (内)橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)→(底・内)ナデ	完存	焼けムラあり
726	SDfl9	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.6 (底)5.8	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白7.5YR8/2・橙5YR7/8	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	完存	焼けムラあり
727	SDfl9	土質・小皿	(口)6.2 (高)1.4 (底)8.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)褐灰7.5YR5/1 (断)明褐7.5YR5/6	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
728	SDfl9	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.1 (底)6.2	やや粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
729	SDfl9	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.2 (底)5.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)褐灰7.5YR5/1 (内)黄灰2.5Y6/1	回転ナデ→回転糸切り	口径1/6	
730	SDfl9	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.1 (底)6.6	粗。径3mm以下の石英・長石を多量，径6mmの砂岩	良好	(外)にぶい橙5YR7/4 (内)灰白7.5YR8/2 (断)橙5YR7/6	回転ナデ→回転糸切り	口径1/4	
731	SDfl9	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.2 (底)4.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転糸切り	口径1/6	
732	SDfl9	土質・小皿	(口)8.1 (高)1.3 (底)7.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰黄褐10YR5/2・にぶい橙5YR6/4 (内)灰黄褐10YR6/2	回転ナデ→回転糸切り	口径1/2	
733	SDfl9	土質・小皿	(口)7.9 (高)1.1 (底)6.6	粗。径2mm以下の石英・長石・茶色砂粒を多量	良好	(外)灰白10YR8/2・淡橙5YR8/3 (内)灰白10YR8/1	回転ナデ→回転糸切り	口径1/2	
734	SDfl9	土質・小皿	(口)7.0 (高)1.1 (底)5.8	粗。径2.5mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	口径1/6	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
735	SDf19	土質・小皿	(口)7.6 (高)1.3 (底)6.4	密。径1mm以下の石英・長石	良好	黒褐7.5YR3/1	回転ナデ→回転糸切り	口径1/6	
736	SDf19	土質・小皿	(口)6.8 (高)2.1 (底)6.1	粗。径2mm以下の石英・長石を多量，径17mmの砂岩	良好	(外)橙5YR6/6 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ→回転糸切り	口径1/10	胎土中の砂岩周辺に亀裂
737	SDf19	土質・小皿	(口)8.0 (高)2.0 (底)7.5	粗。径2.5mm以下の石英・長石を多量，径5mmの花崗岩	良好	(外)橙5YR6/6 (内)灰白10YR7/1	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り	口径1/5	
738	SDf19	土質・杯	(口)11.4 (高)3.5 (底)7.4	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2・浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径3/5	
739	SDf19	土質・杯	(口)11.6 (高)3.2 (底)7.6	やや粗。径3mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(L)	底部完存	
740	SDf19	土質・杯	(口)11.8 (高)3.6 (底)7.0	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白5Y8/1 (内)灰白5Y8/1・灰N5/	回転ナデ→回転ヘラ切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底径1/2	
741	SDf19	土質・杯	(口)11.8 (高)3.5 (底)7.3	密。径1mm以下の金雲母を少量，径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙5YR7/6 (内)浅黄橙7.5YR8/3 (断)明赤褐5YR5/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(L?)	ほぼ完存	
742	SDf19	土質・杯	(口)12.0 (高)3.3 (底)7.7	密。径1mm以下の石英・長石	良好	浅黄橙10YR8/3・橙5YR7/8	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	ほぼ完存	内面に焼けムラあり(重ね焼き痕か)
743	SDf19	土質・杯	(口)12.3 (高)3.7 (底)7.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量，径3mmの長石	良好	(外)浅黄橙10YR8/4 (内)灰白10YR8/2・褐灰10YR6/1	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径3/4	内面に焼けムラあり(重ね焼き痕か)
744	SDf19	土質・杯	(口)12.2	密。径0.5mm以下の石英・褐色粒を少量	良好	(外)橙7.5YR7/6・にぶい黄橙10YR7/4 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/6	
745	SDf19	土質・杯	(口)12.4	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ	口径1/7	(口)油煙(?)
746	SDf19	土質・椀	(口)12.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ	口径1/8	
747	SDf19	土質・椀	(口)12.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	浅黄橙10YR8/3	回転ナデ	口径1/3	
748	SDf19	土質・杯	(口)12.8	密。径1mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ	口径1/8	
749	SDf19	土質・杯	(口)14.0 (底)6.2	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)灰白2.5Y8/1・橙5YR7/6 (断)橙5YR7/6	回転ナデ，体部に補修痕あり	口径1/5	
750	SDf19	土質・杯	(口)10.5 (高)3.7 (底)6.2	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石・褐色粒，径6mmの砂岩	良好	にぶい橙7.5YR7/4	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/4	
751	SDf19	土質・杯	(口)11.6	密。径2mm以下の石英・褐色粒	良好	(外)橙5YR6/8 (内)橙7.5YR7/6	回転ナデ	口径1/8	
752	SDf19	土質・杯	(口)12.2	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白2.5Y8/1・にぶい橙7.5YR7/4 (内)(断)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ，外面に接合痕	口径1/5	
753	SDf19	土質・杯	(口)12.0	密。径1mm以下の石英・長石	良好	にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ	口径1/11	
754	SDf19	土質・杯	(口)11.8 (高)4.0 (底)6.6	やや粗。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2・橙5YR6/6	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/10	
755	SDf19	土質・杯	(口)12.4	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)褐灰10YR6/1 (内)灰黄褐10YR6/2	「口縁部→体部」ナデ	口径1/8	
756	SDf19	土質・杯	(口)12.4	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR7/6	回転ナデ	口径1/10	
757	SDf19	土質・杯	(口)12.4	密。径2mm以下の長石	良好	(外)橙5YR7/6 (内)にぶい黄橙10YR7/2	「口縁部→体部」ナデ	口径1/6	
758	SDf19	土質・杯	(口)13.2	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石	良好	橙5YR7/6	「口縁部→体部」ナデ→(回転糸切り)	口径1/8	
759	SDf19	土質・杯	(口)13.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/3 (内)灰黄褐10YR6/2	回転ナデ	口径1/6	
760	SDf19	土質・杯	(口)13.8	密。径2mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)にぶい黄橙7.5YR7/4	調整不明	口径1/8	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
761	SDfl9	土質・杯	(底)6.8	粗。径2mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)にぶい黄橙10YR7/2 (内)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ	底径1/4	
762	SDfl9	土質・杯	(底)6.4	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)にぶい黄橙10YR6/4 (内)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	底径4/5	
763	SDfl9	土質・杯	(底)6.4	密。径2mm以下の長石・径4mm以下の石英を多量	良好	(外)にぶい橙5YR7/4 (内)にぶい橙5YR6/4 (断)灰白N7/	静止糸切り	底径1/6	
764	SDfl9	土質・杯	(口)11.4 (高)3.3 (底)6.9	やや粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙5YR6/6 (内)灰白10YR8/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/6	
765	SDfl9	土質・杯	(口)12.1 (高)3.7 (底)7.0	粗。径3mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白10YR8/1・浅黄橙10YR8/3 (内)灰白7.5YR8/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	底部完存	
766	SDfl9	土質・杯	(口)12.1 (高)3.4 (底)6.3	粗。径5mm以下の石英・長石・雲母，径7mmの砂岩	良好	(外)橙2.5Y7/6・灰白7.5YR8/2 (内)灰白7.5YR8/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	ほぼ完存	
767	SDfl9	土質・杯	(口)12.7 (高)3.1 (底)7.4	やや粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙5YR6/6 (内)にぶい黄橙10YR7/2	「口縁部→体部」ナデ→回転糸切り	口径1/6	
768	SDfl9	土質・杯	(口)12.7 (高)3.3 (底)7.4	粗。径3mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕，外面に接合痕	底径7/8	
769	SDfl9	十瓶・椀	(口)14.8	密。径0.5mm以下の石英・長石を多量	やや軟	灰白5Y8/1	回転ナデ→(内)板ナデ	口径1/8	口縁部炭素吸着
770	SDfl9	十瓶・椀	(高台)4.2	密。径1mm以下の石英・長石を多量	やや軟	灰白5Y8/1	(底・外)指オサエ・(内)板ナデ→高台貼付	高台径1/4	
771	SDfl9	吉備・椀	(口)12.0	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/2	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)板ナデ	口径1/9	
772	SDfl9	吉備・椀	(高台)4.3	密。径0.5mm以下の石英を多量	良好	(外)(内)灰白10YR8/1 (断)淡赤橙2.5YR7/4	調整不明	高台径1/5	
773	SDfl9	吉備・椀	(高台)5.0	密。径3mm以下の石英	良好	灰白10YR8/1	(底・外)指オサエ→高台貼付	高台径1/7	
774	SDfl9	瓦器・椀	(口)16.6	密。径0.5mm以下の長石を少量	良好	灰N5/	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ・(内)板ナデ→(内)暗文	口径1/11	和泉型
775	SDfl9	瓦器・椀		密。径1mm以下の長石	良好	暗灰N3/	(口)横ナデ→(体・外)指オサエ	細片	和泉型
776	SDfl9	青磁・碗	(口)13.8	密	良好	(胎)灰白N8/ (釉)明緑灰7.5GY7/1	(体・外)鏑蓮弁文	口径1/8	横田・森田Ⅰ-5b類
777	SDfl9	十瓶・捏鉢	(口)18.4 (高)5.4 (底)10.8	密。径1mm以下の石英・長石を多量	瓦質・良好	(外)灰N5/ (内)灰N4/ (断)灰白N8/	回転ナデ，(底・外)下駄印	底部1/3	
778	SDfl9	十瓶・捏鉢	(口)24.8	密。径0.5mm以下の長石を少量	瓦質・良好	(外)灰N5/・灰白5Y7/1 (内)灰N5/・灰白5Y8/1	回転ナデ→(内)板ナデ(削り状)	口径1/6	
779	SDfl9	十瓶・捏鉢	(口)33.4	密。径1.5mm以下の石英・長石	瓦質・良好	(外)灰N5/・灰白N7/ (内)(断)灰白N7/	回転ナデ→(内)板ナデ(ハケ目状)	口径1/15	
780	SDfl9	常滑・捏鉢	(口)29.0 (高)10.1 (底)15.0	粗。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰N6/ (内)黄灰2.5Y4/1・灰N6/	(体・外)板ナデ→(口・外)(内)回転ナデ，(底・外)離れ砂	口径1/6	
781	SDfl9	土質・鍋		密。径4mm以下の石英を多量，径5mmの花崗岩	土師質・良好	(外)(内)灰白10YR8/2 (断)灰白N7/	(外)平行叩き目→(外)(内)回転ナデ	顎部径1/20	西村産
784	SDf20	土質・小皿	(口)9.2 (高)1.6 (底)7.2	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒	良好	(外)橙7.5YR6/6 (内)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	口径1/6	
785	SDf20	土質・杯	(口)12.4	密。径1mm以下の石英・長石	良好	灰白2.5Y8/	回転ナデ	口径1/12	
786	SDf22	土質・小皿	(口)7.4 (高)1.4 (底)5.2	密。径1mm以下の石英・長石	良好	(外)浅黄橙10YR8/3 (内)にぶい橙5YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/8	
787	SDf22	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.5 (底)6.2	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/6	
788	SDf22	土質・小皿	(口)8.6 (高)1.4 (底)5.8	やや粗。径1mm以下の石英・長石，径3.5mmの長石	良好	(外)浅黄橙7.5YR8/4 (内)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/8	

報文番号	出土位置	器種	法量	胎土	焼成	色調	手法	残存度	備考
789	SDf22	土質・小皿	(口)8.5 (高)1.4 (底)6.1	粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR6/8	回転ナデ→回転糸切り	底径1/2	
790	SDf22	土質・杯	(口)13.0	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)(内)浅黄橙10YR8/3 (断)灰5Y4/1	調整不明	口径1/12	
791	SDf22	土質・杯	(口)13.2	密。径3mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	浅黄橙10YR8/4	回転ナデ	口径1/8	
792	SDf22	土質・杯	(口)14.0	密。径2mm以下の石英・長石を多量	良好	橙5YR7/6	回転ナデ	口径1/10	
794	SDf23	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.3 (底)5.4	やや粗。径1mm以下の石英・褐色粒を少量	良好	(外)橙5YR7/6・灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/6	
795	SDf23	土質・小皿	口径7.8 (高)1.3 (底)6.5	密。径0.5mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)橙7.5YR7/6 (内)にぶい橙7.5YR7/4	回転ナデ→回転糸切り	口径1/6	
796	SDf23	土質・小皿	(口)8.0 (高)1.2 (底)6.0	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石，径2.5mmの褐色粒	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/2	
797	SDf23	土質・小皿	(口)8.6 (高)1.6 (底)6.4	やや粗。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白2.5Y8/2 (内)橙5YR6/6	回転ナデ→回転糸切り	口径2/3	
798	SDf23	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.3 (底)5.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)灰白2.5Y8/1・にぶい橙5YR7/4 (内)灰白2.5Y8/1	回転ナデ→回転糸切り	底径1/4	
799	SDf23	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.3 (底)6.2	粗。径2mm以下の石英・長石，径9.5mmの砂岩	良好	(外)橙5Y6/6 (内)浅黄2.5Y7/3	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り	ほぼ完存	
800	SDf23	土質・小皿	(口)7.8 (高)1.1 (底)6.9	やや粗。径1mm以下の石英・長石・金雲母・褐色粒を多量	良好	にぶい橙5YR6/4	回転ナデ→回転糸切り	口径1/5	
801	SDf23	土質・小皿	(口)6.8 (高)1.2 (底)6.0	粗。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)にぶい橙5YR6/6 (内)にぶい黄橙10YR7/3	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径2/3	(底・内)(口・外)籾圧痕
802	SDf23	土質・小皿	(口)7.2 (高)1.2 (底)6.9	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量，径3mmの長石	良好	(外)灰白10YR8/2・淡橙5YR8/4 (内)にぶい黄橙10YR6/3	(底・内)糸切り痕→回転ナデ→回転糸切り→(底・内)ナデ・(底・外)板目状圧痕	口径3/5	
803	SDf23	土質・杯	(口)10.5 (高)2.8 (底)6.4	密。径1.5mm以下の石英・長石を多量	良好	灰白2.5Y8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/3	(底・内)ナラ科の木葉圧痕
804	SDf23	土質・杯	(底)7.0	密。径3.5mm以下の長石・褐色粒を少量	良好	(外)にぶい橙7.5YR7/4 (内)橙7.5YR7/6	回転ナデ→回転糸切り	底径1/3	
805	SDf23	土質・杯	(口)11.4 (高)3.4 (底)7.2	密。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)浅黄橙10YR8/3	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/2	
806	SDf23	土質・杯	(口)11.6 (高)3.0 (底)6.8	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/6	
807	SDf23	土質・杯	(口)11.2	密。径1mm以下の石英・長石	良好	にぶい黄橙10YR7/4	回転ナデ	口径3/7	
808	SDf23	土質・杯	(口)11.5	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	(外)(断)橙5YR7/6 (内)にぶい黄橙10YR7/2	回転ナデ	口径1/8	
809	SDf23	土質・杯	(口)11.8 (高)3.1 (底)7.4	密。径1.5mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径1/6	
810	SDf23	土質・杯	(口)11.8 (高)3.4 (底)8.0	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)(内)浅黄橙7.5YR8/4・にぶい橙7.5YR7/4 (断)浅黄橙7.5YR8/4	回転ナデ→回転ヘラ切り	口径1/3	
811	SDf23	土質・杯	(口)12.0 (高)3.8 (底)6.8	やや粗。径1mm以下の石英・長石・褐色粒を少量，径3mmの石英	良好	(外)橙5YR6/6・灰白10YR8/2 (内)にぶい橙5YR7/4・灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り	底径1/2	
812	SDf23	土質・杯	(口)12.6 (高)3.7 (底)7.1	やや粗。径2mm以下の石英・長石を少量	良好	(外)にぶい赤褐5YR5/4・灰白2.5Y8/2 (内)にぶい橙5YR6/4・灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	ほぼ完存	
813	SDf23	土質・杯	(口)13.8 (高)3.8 (底)7.9	やや粗。径2mm以下の石英・長石	良好	灰白10YR8/1・橙5YR7/6	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	ほぼ完存	
814	SDf23	土質・杯	(口)14.6	密。径1mm以下の石英・長石を多量	良好	(外)橙5YR7/6 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ	口径1/8	
815	SDf23	土質・杯	(口)13.7 (高)3.9 (底)8.6	密。径1.5mm以下の石英・長石・褐色粒を多量	良好	(外)にぶい橙5YR7/4・浅黄橙10YR8/3 (内)灰白10YR8/2	回転ナデ→回転ヘラ切り(R)	口径4/5	